愛すべき預言者
ムハンマド様

サッラッラーフ・アライヒ・ワサッラム

著　Prof. Dr. Ramazan Ayvallı
ラマザン・アイワッル
トルコ共和国・マルマラ大学 神学部教授

訳　Ito Masayoshi　伊藤真恵
Telat Aydın　テラット・アイディン

編集　Selim Yücel Güleç　セリム・ユジェル・ギュレチ

2014

愛すべき預言者ムハンマド様

サッラッラーフ・アライヒ・ワサッラム

◎——目次

序

　アッラーに感謝を捧げ、アッラーが下さった恩恵や善に対して永遠の感謝をします…。アッラーの愛する預言者であり、人々の中であらゆる面で最も美しく、最も善であり、そして最も優れていたムハンマド（アライヒッサラーム）や、彼の美しい顔を見て、意義深い言葉を聴く名誉に与り、そしてすべての人々の中で最も価値のある教友たちすべてに、そして彼らの道を辿る人々にも祈りと挨拶を送ります。

　歴史上には『ジャーヒリーヤ時代（無明時代）』と名付けられている、ある時代があります。この時代、アラビア半島では、人々が像を崇め、絶えず酒を飲んだり賭博にふけったりしていました。権力のある者こそが正当であるとされ、女性は商品のように売買されて女児は生き埋めにされていました。アラビア半島だけではなく、世界のすべてが暗黒に落ちていました。アジアやアフリカ、そしてヨーロッパでも状況に大差はありませんでした。もちろん、このような行動に対して不満を持ち、よしとはしない常識ある人々も、数少ないとはいえ存在していました。そして彼らはアッラーに願い、この暗い時代が終わることを懇願していました。

　人々を憐れむアッラーは、あらゆる時代、あらゆる場所に大勢の預言者を送ったように、最後の預言者であるムハンマド（アライヒッサラーム）を、この暗闇を光へと導くため、最後の預言者として任務を与えました。

　アッラーは憐れみを下し、私たちを預言者様の共同体とすることによって、恩恵の中でも最大の恩恵へと導いています。そしてアッラーは、預言者様に従うことが必要であるということも明確に知らせています。アッラーに対し、この偉大なる恩恵のことを、いくら感謝しても足りることはないでしょう。

　預言者様の生き方に従った学者たちはこのように述べています。「すべての預言者は、その時代、その場所、その民族の中で、あらゆる面で他の人々よりも優れた人物でした。

　ムハンマド（アライヒッサラーム）は、すべての時、すべての国、つまり、地球が創造された日から終末の日に至る

まで、やって来た者やこれから来る者すべての存在の中において、あらゆる面で最も優れているのです。誰一人として、どの面においても預言者様より優れるということはありません…」

　アッラーは他のものを創造する前に、ムハンマド（アライヒッサラーム）の神聖な御光を創造しました。クルアーンでは、預言者様に対して『われは只万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである。』と啓示しています。預言者様のハディースでは「あなたがいなかったら、あなたがいなかったら、被造物を創造することはありませんでした」とも伝えられています。

　信仰の基本となる条件は「フブ・イ・フィッラーとブード・イ・フィッラー」つまり、アッラーの親友を愛すること、そして、アッラーの敵を愛さないことです。これができていない限り、どのような礼拝であっても認められることはなく、その人の顔は拒まれることになるのです。したがって「万物の王」を愛することは義務とされ、彼の神聖な愛情を私たちの心に置いて、その美徳が持つようにと命じられています。

　この愛情を持ち続けていくため、預言者様の神聖な人生について語る本が何世紀も前から途切れることなく書かれ、そしてこれは現在でも続いています。預言者様の愛情が私たちの心に満たされ、そしてあふれるよう、イスラーム学者たちの書物をもとに長く研究を行い、万物の王である預言者様の神聖な人生を書くことに努めました。

　アッラーが私たち皆の心に預言者様の愛情が満たし、預言者様の生き方に従うイスラーム学者たちの伝えた道に私たちがありますように。アーミーン。

Ｄｒ．ラマザン・アイワッル

第一章　マッカ時代

預言者様の神聖な「御光」

ムハンマド（アライヒッサラーム）は、アッラーの最愛の者であり、創造されたすべての人間や他の被造物と比べ、最も優れ、最も美しく、最も名誉ある者である。そして、アッラーが褒め称え、すべての人間やジン（幽精）のため、預言者として選ばれ送られた、最後にして最高位の預言者である。全世界に対してアッラーの慈悲として送られた者であり、すべては彼の存在があってこそ創られたのである。その神聖な名前は繰り返し称えられ、ムハンマド（アライヒッサラーム）という名前自体も、数多く褒め称えられるという意味である。彼には他にもアハマド、マハムード、ムスタファなどの称賛されている名前がある。彼の父の名はアブドゥッラーであり、そして、ヒジュラの五十三年前、ラビーウ・ル・アウワル月の十二日、月曜日の夜明け、聖マッカにて誕生した。歴史学者たちによれば、この日は太陽暦でいうところの五七一年四月二十日であるとされている。

　彼の生まれる数ヶ月前には父親のアブドゥッラーが、そして六歳の時には母親のアーミナが亡くなった。このため、預言者様に『ドゥル・イェティム（世界中で唯一で最も価値ある真珠）』というあだ名が付けられた。八歳までは、祖父のアブドゥルムッタリブが、さらに彼が亡くなった後は叔父のアブー・ターリブのもとで育った。二十五歳のとき、ハディージャトゥル・クブラー様と結婚した。この妻から生まれた長男の名はカースィムである。アラブ世界では、父親が長男の名前をもとにして呼ばれる習慣があったため、預言者様は『アブー・カースィム』つまり、カースィムの父と呼ばれることとなった。

　四十歳のとき、人間やジンなどあらゆるものの預言者であることをアッラーから知らされ、その三年後には人々を

信仰へと呼びかけ始めた。五十二歳の時には、ミウラージュ（昇天）が起こった。太陽暦六二二年、五十三歳のとき、マッカからマディーナへとヒジュラをした。一生のうちに二十七回の戦いを行った。ヒジュラ暦十一年（西暦六三二年）のラビーウ・ル・アウワル月十二日の月曜日、正午前、六十三歳のとき、聖マディーナにて亡くなられた。

　アッラーは他のすべての預言者に名前で呼びかけていることに対し、彼へは『最愛の者』と呼びかけて敬意を表していた。クルアーンの中のある節では、アッラーが『われは只万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである』（預言者章（アル・アンビヤーゥ）第一〇七節）と言及しており、また、あるハディースでは「あなたがいなかったら、あなたがいなかったら、被造物を創造することはありませんでした」と伝えられている。

　あらゆる他の預言者は、その時代、その場所、その民族の中において最高の人間であった。しかし、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）は、世界が創られた最初の日から終末の日までを通じ、あらゆる時代、あらゆる場所、今までに存在しこれから生まれる創造物の中にあって、いかなる面でも最も高い徳を有し、最高位に位置する。どんな面でも彼より優れることはない。アッラーが彼をそのように創造したからである。

神聖な「御光」の創造

　アッラーが最初に、つまり、まだ何も創造されていないときに、愛する預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の神聖な御光を創った。タフスィール（クルアーン解釈学）やハディースの学者たちの多くは「アッラーが、アッラー自身の御光から優美なある大きな実体を創造し、そこから万物を順に創った。この実体のことを『ヌール・ムハンマディー（ムハンマド（アライヒッサラーム）の光）』といい、すべての魂や物質の根源はこの実体である」としている。

　教友の一人、ジャービル・ビン・アブドゥッラーがある日「預言者様よ。アッラーが最初に創造したものは何ですか?」と質問したところ「（アッラーは）すべての前に、あなたの預言者、つまり私の光を自身の御光から創られま

した。そのとき、書かれたもの、書くもの、天国、地獄、天使、天空、地球、太陽、月、人間、ジンはまだ存在しませんでした」とおっしゃった。

預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の御光は、預言者アーデムの心臓や身体が創られたとき、彼の眉の間に置かれた。そして、預言者アーデムが自身の魂を授かると、額に金星のように光る御光があることに気が付いた。

預言者アーデムが（天国で）創造されたとき、アッラーがアーデムのことを「アブー・ムハンマド」つまりムハンマド（アライヒッサラーム）の父と呼んだことが、霊感によって知らされていた。つまり、自分のことをアブー・ムハンマドと言われたことに気付いたのであった。「アッラーよ、なぜ私にアブー・ムハンマドと名付けたのでしょうか？」と尋ねると、アッラーは「アーデムよ！頭を上げよ！」とおっしゃった。預言者アーデムが頭を上げて見つめると、天国の最上段に、愛すべき預言者の御光で描かれた、アハマドという名前が見えた。そして「アッラーよ！これは誰ですか？」と質問した。するとアッラーは「彼はあなたの子孫の預言者である。彼の名は天空ではアハマド、地上ではムハンマド（アライヒッサラーム）である。もし、彼がいなければ、あなたを創らなかった。地も天も創らなかった」と答えたのだった。

「御光」が清らかな額から額へと移る

アーデム様が創られたとき、額に愛すべき預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の名誉ある御光が置かれた。その御光が額で輝き始めた。クルアーンでも伝えられているとおり、御光はアーデム様以来途切れることなく、清い父、清い母から順に移りつつ、預言者様まで巡って来た。これをクルアーンではアッラーがこのように言及している。

『またサジダする者たちの間での、あなたの諸動作を（も見ておられる方に）。』（詩人たち章（アッ・シュアラーゥ）第二一九節）。

あるハディースによれば、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）は「アッラーは人々を創りました。私を最も良

い人々の中から創造しました。そして、最も良い部分（アラビア半島）を選びました。私をこれらの中から創造しました。その後、家系や家族の最も良い者を選び、私をその中から創りました。ですから、私の魂や身体は、被造物の中で最も良いものとなりました。私の祖先が人々の中でも最も良い人々です」とおっしゃっている。

別のハディースによれば「アッラーがすべてを無から創りました。すべての中で人間のことを最も愛し、尊いものとしました。人間の中から選んだ人々をアラビア半島に住まわせました。アラビア半島にいる選ばれた人々の中から私を選びました。私をあらゆる時代の選ばれた人々の中から、最も良い者の中に存在させました。ですから、アラビア半島で私と絆のある人々を愛する者は、私のために愛するのです。彼らを敵とする者は、私を敵とすることになるのです」とおっしゃっている。

創造された最初の人間であるアーデム様は、ムハンマド（アライヒッサラーム）の分子を預かっていたことから、額には彼の御光が輝いていた。この分子は次にハウワー様に、続いて彼女からシート様へと移り、こうして清い男性から清い女性へ、清い女性から清い男性へと移っていった。ムハンマド（アライヒッサラーム）の御光が分子とともに額から額へと移っていったのである。天使たちがアーデム様の顔を見るたびに、彼の額にムハンマド（アライヒッサラーム）の御光を見出し、彼（アーデム様）の赦しを願うのであった。

アーデム様は、亡くなるとき息子のシート様に「息子よ、あなたの額に輝く光は、最後の預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の光である。これを信者であり、貞淑で清いあなたの妻たちに預け、さらにあなたの息子たちにも今と同じように遺言を残すのです」と言った。ムハンマド（アライヒッサラーム）に至るまですべて、善き父が息子へと遺言を伝えてきた。そして、すべての息子たちはこの遺言に従って、最も高貴で清廉な女性たちと結婚した。御光は、女性へ、男性へと、そして清い額から額へと移りながら、本来の持ち主まで巡ってきた。もし預言者様の祖先に、二人の息子がいた場合、もしくは、ある一族が二つに分かれたときには、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の御光は、最も誉れ高く最も良い側にあった。あらゆる時代において、彼の祖先にあたる人は、顔にある御光によってそ

のことが明白であり、彼の御光を持つ選ばれし者のいる一族の人々は、美しい顔立ちをして大変に輝いていたのである。この御光のため、兄弟の間でも優劣があったり、ある一族が他の一族より上位であるとされたり、名誉があるとされたりもした。

　実際に、あるハディースでは、預言者様がこうおっしゃったと伝えている。「私の祖先には、一切不貞がありませんでした。アッラーは私を善良で好ましい父親や、清い母親から移されてきたのです。もし祖先に二人の息子がいた場合、私はその中の最も良い、最も好ましい側に存在しました」

　アーデム様以来、子から子へと移ってきたこの御光は、やがてタルハ様に、そして彼から息子のイブラーヒーム様に、さらに息子のイスマーイール様へと移っていった。その額に太陽のように輝く御光は、息子のアドナーンに、そして彼からメアードに、さらにニザールへと移っていった。ニザールが生まれると、その父親のメアードは、息子の額にある光を見て喜び、非常に大きな祝宴を行った。「これほどの息子のためとあっては、この程度の祝宴では物足りないくらいです」と言ったため、息子の名前がニザール、つまり、とても少ないという意味を持つ名前になった。この後も、御光は順に移りながら、本来の持ち主である愛すべき預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）のところまでやって来た。

　預言者様の尊敬すべき祖先、アドナーンまでは次のとおりである。

　預言者様が、あるハディースでこのように述べている。

「私はアブドゥッラー、アブドゥルムッタリブ、ハーシム（アムル）、アブディマナーフ（ムギーラ）、クサイユ（ザイド）、キラーブ、ムッレ、カアブ、ルベイユ、ガーリブ、フィフル、マーリク、ナーディル、キナーナ、フゼイメ、ムドゥリケ（アーミル）、イリヤース、ムダル、ニザール、メアード、アドナーンの息子ムハンマド（アライヒッサラーム）である。私の親族が二つの家系に分かれたときには、アッラーは私を必ず良い側に存在させました」

　別のハディースでは、このように述べられている。「アッラーはイブラーヒームの息子たちの中から、イスマーイールを選びました。イスマーイールの息子たちの中から、キナーナ族（の息子たち）を選びました。キナーナ族の中から、

クライシュ族を選びました。クライシュ族の中からハーシムの息子たちを選びました。ハーシムの息子たちの中から、アブドゥルムッタリブを選びました。アブドゥルムッタリブの息子から私を選びました」

ムハンマド（アライヒッサラーム）
アブドゥッラー
アブドゥルムッタリブ（シャイバ）
ハーシム（アムル）
アブディマナーフ（ムギーラ）
クサイユ（ザイド）
キラーブ
ムッレ
カアブ
ルベイユ
ガーリブ

その御光はアーデム様の額に
何日間もとどまった

その後この御光はハウワー様の額に移り
何年間も何ヶ月も輝いた

この御光はシート様が生まれると
その額で輝き始めた

やがてイブラーヒーム、イスマーイールのもとへと届いたが
それまでのすべてを言おうをしたら言葉は長くなる

こうして次から次へと間も空けずに受け継がれ
預言者ムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）のもとへやって来て留まった
なぜなら世界に慈悲として創造され遣わされた
本来の御光の主なのだから

祖父のアブドゥルムッタリブ様

預言者様は、クライシュ族のハーシム家の人だった。父親はアブドゥッラーであり、さらにその父親はシャイバであった。預言者様の祖父であるシャイバはマディーナで生まれた。シャイバは、その父親のハーシムが亡くなったときは、まだ子供であった。シャイバはある日、マディーナの叔父の家の前で友達と弓矢の練習をしていた。彼らを見ていた大人たちは、シャイバの額に輝く御光から、彼が名誉ある誰かの息子であろうと思い、感心して眺めていた。矢を放つ順番がシャイバに巡り、彼は矢を的に放った。矢が中央に当たると、彼は喜んで「私はハーシムの息子です、当然矢は定めたところに向かうのです！」と言った。この言葉から、彼がマッカ出身のハーシムの息子であることが分かった。当時、ハーシムは既に亡くなっていた。アブディマナーフ家の一人がマッカに戻ると、ハーシムの兄弟のムッタリブに対して「マディーナにいる甥のシャイバは、とても優れた子供です。額にはあらゆる人々の感心を集める御光が輝いています。このような価値ある子どもを手元から離しているのは正しいことでしょうか？」と伝えてきた。このため、ムッタリブはすぐにマディーナへと向かい、甥のシャイバを連れてマッカに戻ってきた。マッカ町中で「この子は誰ですか？」と聞かれると「私の奴隷です」と答えることにしていた。そのため、シャイバの名前がムッタリブの奴隷という意味の、アブドゥルムッタリブとして伝えられることとなった。

アブドゥルムッタリブは、叔父のムッタリブが亡くなるまで彼のところで過ごした。アブドゥルムッタリブの神聖な身体からはムスクの香りがしていた。額には、アッラーの愛するムハンマド（アライヒッサラーム）の御光が輝き、その周囲は善や恩恵に満ちていた。マッカに雨が降らなかったり、飢饉が起こったりしたときには、マッカの人々はアブドゥルムッタリブの手を引いてセビール山へと連れて行き、祈念をしてもらうように願うのだった。彼は誰に対しても傷つけない人だった。アッラーに雨を恵んでもらえるよう祈念をした。すると、アッラーはアブドゥルムッタリブの額に輝く、愛すべき預言者様の御光の恵みに免じて、彼の祈念を受け入れ、たくさんの雨を降らせた。このようにして、アブドゥルムッタリブへの評価や尊敬は日ごとに高まっていった。マッカの人たちは彼を長に選んだ。彼に反対する者はおらず、彼の命令に従う人は安心と安らぎを見出した。当時の治世者も、アブドゥルムッタリブの美徳や偉大さを認めていた。しかし、イランの皇帝は彼のことを妬み、ときには明白に、ときには隠しながら彼を敵とみなしていた。

アブドゥルムッタリブはハニーフ教〔訳注…イスラーム以前における真正で純粋な一神教〕に従っており、つまりムスリムであった。この宗教は祖先となるイブラーヒームの宗教である。このため、一切偶像を崇むことはなく、近づくことさえしなかった。カアバでアッラーに祈念し、礼拝を行っていた。

ある日、夢の中である人物が「アブドゥルムッタリブよ！　起きてタイイバを掘るのです！」と言って消えた。翌日は「起きよ！　バッラを掘るのです！」と言った。三日目には同じ人が「起きよ！　メドゥヌーネを掘るのです！」と命令した。夢は止まらず、四日目にはまた同じ人が「アブドゥルムッタリブよ！　起きてザムザムの井戸を掘るのです！」と言ったため、アブドゥルムッタリブは「ザムザムとは何ですか？　その井戸はどこにあるのですか？」と尋ねた。すると、その人は「ザムザムとはある水のことで、決して少なくなることはなく、枯れてしまうこともありません。世界中からやって来る巡礼者にも十分に行きわたります。大天使ジブリールの羽で叩いたところから湧き出てくるもので、アッラーがイスマーイール様のために創った水なのです。喉が渇く者を潤し、空腹な者を満たし、そして病人には癒しを与えます。その場所を教えましょう。犠牲の動物を屠り、残った部分はある場所に捨てることになります。あなたがそこへ行くと、くちばしの赤いカラスがやって来ます。そのカラスが、くちばしで土を掘るところがあります。カラスの掘ったところには蟻の巣が見られます。そこがザムザムの場所です」と言った。

アブドゥルムッタリブは、朝、息子のハーリスを伴ってカアバへと向かった。緊張しながら待ち始めた。やがて夢で言われていたとおり、赤いくちばしのカラスが近くの小さな窪みにやって来て、くちばしでつつき始めた。その場所には蟻の巣も見られた。アブドゥルムッタリブと息子のハーリスは、直ちにそこを掘り始めた。しばらく掘ると井

戸の口が見えてきた。アブドゥルムッタリブはこれを見ると「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）、アッラーフ・アクバル！」とタクビールを唱え始めた。

この井戸掘りを最初から注目して見ていたクライシュ族は、彼に向って「アブドゥルムッタリブよ！これは私たちの祖先であるイスマーイールの井戸なのです。ですから私たちにも権利があります。この井戸の権利に私たちも入れるべきです」と言った。アブドゥルムッタリブは、即座に否定して「いいえ！この行為は私だけに課された任務だったのです」と返事をした。これに対してクライシュ族は「あなたは一人きりです。一人の息子以外、他に誰もいません。そのように私たちに反対することなどできはしないのです！」と言った。このことに彼は傷ついた。なぜなら、自分に頼りがないことを責められたからである。両手を上に挙げ「アッラーよ！私に十人の子供を恵んでください。もし、私のこの祈りを受け入れてくださるなら、その中の一人をカアバで犠牲に差し出しましょう」と懇願した。

アブドゥルムッタリブは、この井戸掘りが危険なものとなり、激しい争いに発展してしまうであろうと考えた。結局、掘ることを中断し、話し合うこととした。この件については、仲裁者を介して解決されることを望んだのである。その結果、シャームにいるある占い師が何らかの解決をするだろうと彼らは考えた。アブドゥルムッタリブは、クライシュ族の名士たちから成る一団とともに旅を始めた。途中、のどの渇きや暑さによって苦痛にあえいだキャラバンは動くことができなくなってしまった。もはや、一滴の水のために命を捧げるほどだった。そして、唯一の望みであるとはいえ、灼熱の砂漠の真ん中で水を見つけるということは不可能なことだった。

皆が希望を失っていたとき、アブドゥルムッタリブが彼らに「来なさい、来なさい！集まるのです！あなた方にも、動物たちにも十分な水を見つけました！」と叫んだ。ムハンマド（アライヒッサラーム）の神聖な御光を額に持つアブドゥルムッタリブが水を探していると、大きい石がラクダの足に引っ掛かって動き、下から水が湧いてきたのだった。全員が走ってやって来て、喉を鳴らして水を飲み生気を取り戻したのだった。

このアブドゥルムッタリブの寛大さを前にして、恥入ったクライシュ族たちは「アブドゥルムッタリブよ、もはやあなたに言うことはありません。ザムザムの井戸を掘るのに最も適しているのはあなたです。この件で、あなたと二度と争いはしないでしょう。もう仲裁者のところまで行く必要はありません。帰りましょう」と言って、マッカへの道をとった。アブドゥルムッタリブの額に輝く御光のおかげで、ザムザムの井戸を掘って水が湧き出すという栄誉が与えられることとなったのである。

> アッラーの最愛の者、人々の最良の者、あなたのことが想い焦がれる。
> 唇は乾き、水を望む心で、あなたに会いたい気持ちで私は焼かれる。

アブドゥッラーを犠牲にとの求め

アブドゥルムッタリブがザムザムの井戸を掘った後、その名誉や名声はさらに増していった。それから何年間かが経った。アッラーは、アブドゥルムッタリブが心から願った祈念を受け入れ、彼にハーリス以外にも十人の息子や六人の娘を恵んでいだ。息子たちの名前は、クサム、アブー・ラハブ、ハジュル、ムカーウィム、ディラール、ズバイル、アブー・ターリブ、アブドゥッラー、ハムザ、そしてアッバースであった。娘たちの名は、サフィーヤ、アーティケ、ウンム・ハーキム・ベイダー、バッラ、ウメイメそして、アルバーであった。アブドゥルムッタリブは、子供たちの中でアブドゥッラーを最も愛していた。なぜならば、額の御光が彼の額で輝き始めたからである。

アブドゥルムッタリブは、ある日夢の中で「アブドゥルムッタリブよ。誓いを守るのだ！」と言われた。朝になると、アブドゥルムッタリブは、雄の羊を犠牲に捧げた。夜、夢の中で「それよりもっと大きなものを犠牲にせよ！」と命じられた。朝になると、一頭の牛を犠牲に捧げたが、再び夢の中で「それよりもっと大きなものを犠牲にせよ！」と

命令されたため「それよりもっと大きいものとは何でしょう？」と聞いた。すると「息子たちのうちの一人を犠牲にすると約束したであろう。その約束を守るのだ！」と言われた。

次の日、アブドゥルムッタリブは子供たちを集め、何年か前に行っていた祈念について話をした。そして、息子たちの中から一人を犠牲にしなければならない時期に来たのだと説明した。息子たちは誰一人、このことに反対はしなかった。そして、子供たちは「父よ、約束をお守りください！お望みのとおりにしてください！」と同意した。アブドゥルムッタリブはくじで犠牲となる息子を決めることにした。くじは最愛の息子で、額にアッラーの愛するムハンマド（アライヒッサラーム）の光を持つアブドゥッラーに当たった。アブドゥッラーは一瞬とまどい、目は涙に潤った。だが、アッラーに誓った約束は守る必要があった。一方の手にナイフを持ち、もう一方の手に愛するアブドゥッラーを連れ、アッラーに誓った約束を守るためにカアバへとやって来た。とめどなく涙を流す父親は、アブドゥッラーを犠牲にするための準備を整えた。

そのとき、クライシュ族の名士たちは、驚きながらこの出来事を見つめていた。そのうちの一人のアブドゥッラーの叔父が「アブドゥルムッタリブよ！やめるのです！私たちは、あなたがこの息子を犠牲にすることについては賛成しません。もし、このようなことをしたならば、今後、同じことがクライシュ族の中での習慣になってしまいます。皆が息子を犠牲にして切ることになってしまいます。このような習慣を始めないでください！あなたの神を他の方法で納得させるのです！」と言った。そして「占い師に相談したら、あなたにその方法を教えてくれるだろう」と提案をした。

アブドゥルムッタリブはこの言葉を受けて、ハイバルにいるクトゥバ（あるいはセジャク）という名前の占い師のところへ行き、状況を説明した。占い師は「あなた方の習慣では、一人の人間に対して支払われる補償金はいくらですか？」と尋ねた。「ラクダ十頭です」と返事を受けると「では、十頭のラクダと息子とでくじをしてください。くじが息子に当たったら、さらに十頭のラクダを増やしてくじをしてください。くじがラクダに当たるまで、このようにしてラク

ダの数を増やしながら続けなさい」と言った。

アブドゥルムッタリブはすぐにマッカに戻り、占い師の言った通りにした。ラクダを十頭ずつ増やしながら、何回もくじを引いた。だが、すべてアブドゥッラーに当たった。やがて、ラクダの数が百に達したところ、くじはラクダの側に当たった。念のため、二回同じことをやってみた。二回目でもくじはラクダの側に当たった。アブドゥルムッタリブは「アッラーフ・アクバル！アッラーフ・アクバル！」とタクビールを唱えながら、ラクダを犠牲とした。この犠牲となったラクダの肉は、自分や子供たちが口にすることは一切しなかった。すべては貧乏人に分け与えられた。

預言者アーデム様まで遡れば、この他にもイスマーイール様が犠牲に求められたこともあった。預言者様の祖先はイスマーイール様につながるため「私は二人の犠牲の息子です」とおっしゃっていた。

父のアブドゥッラー様

現世と来世の主である預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の御光を額に運ぶアブドゥッラーが生まれると、聖典宗教の人々は「最後の預言者の父親がマッカで生まれた」ということを互いに知らせ合っていた。

イスラエルの人々は、羊毛で編んだある法衣を持っていた。この法衣は預言者ヤフヤー様のものであり、彼が殉教したときにこの法衣を身につけていたため、その神聖な血がこの法衣に染みていた。彼らの聖典では「この血が新鮮なものとなって滴り始めたら、最後の預言者の父親がこの世に来たときを示している」と書かれていた。したがって、一神教の人々はこの印が現れたのを見て、アブドゥッラーが生まれたことを知ったのだった。嫉妬から何度も殺そうと試みたものの、アッラーはアブドゥッラーを額にある御光により護っていた。

アブドゥッラーが思春期を迎える頃には、品性の面でも外見の面でも、人々の間で際立った人物となっていた。遠かれ近かれ、皆が自分の娘と結婚させようとしていた。どれほどの統治者でもアブドゥルムッタリブのところまでやっ

て来て、自分の娘を彼の息子に受け取ってもらうよう提案をし、そのためなら何でもしようと言っていた。しかし、アブドゥルムッタリブは、全員を適切な言い方をして断っていた。

アブドゥッラーが十八歳になったときには、その美しさは相当な評判になっていた。額にある御光は太陽のように輝き、娘たちはそれを見ては思わず心を惹きつけられた。その美しさと名声はエジプトにまで広がり、二百人の女性が彼と結婚するためマッカまでやって来て、結婚を申し込んだ。だが、アブドゥルムッタリブは息子のため、その時代の中で最も上品で、高貴で、美しく、そして祖先がイブラーヒーム様以来従ってきたハニーフ教に結ばれた信者の女性を探していた。

聖典で伝えられている最後の預言者が、自分の民族から出ないことを悟ったイスラエルの人々は妬み、アブドゥッラーを殺す誓いを立て、武装した七十人をマッカへと向かわせた。暗殺の機会をとらえようと待ち始めた。やがて、アブドゥッラーが遠出したある日、誰も見ていないと思って刀を抜き、彼に攻撃をしようとした。その日、アッラーの思し召しにより、アブドゥッラーの親戚であるワハブ・ビン・アブディマナーフが、何人かの友人たちとともに狩りに出かけていた。彼らはアブドゥッラーに攻撃しようとしているイスラエルの人々を見つけ、親戚であるアブドゥッラーを守り、助けようとした。しかし、相手はあまりにも人数が多かった。この争いで負けるのは明らかだった。そこで、調停という手段を取ろうと考えた。彼らの方に近づいていくと、黒い馬に乗ったこの世の誰とも似ていない、刀を携えたたくさんの人々がどこからともなく現れた。雷のようにすばやくやって来て、タクビールを唱えながらイスラエルの人々に反撃し、全員を刀で切りつけてから消えてしまうのを見た。ワハブはこれに驚き、アブドゥッラーがいかに護られているのか、アッラーから大切にされているのかを知ったのだった。家に戻ると、このことを妻に話した。二人とも、自分たちの娘に適った相手は勇敢なアブドゥッラーであると確信し、アーミナを彼と結婚させることを決心した。

アブドゥルムッタリブも、ズフレ族の名士であるワハブの娘のアーミナが持つ美しさと貞淑さ、謙虚さ、そして宗

教に対する従順さを耳にしていた。彼らは同じ一族の親戚でもあり、祖先を遡れば同じ家族にあたっていた。息子のアブドゥッラーのために彼女を与えてくれるよう、ワハブの家へと向かった。アブドゥルムッタリブが、ワハブの娘を息子のアブドゥッラーにもらいたいと言うと、ワハブは「私のいとこよ！　私たちはこの提案を、あなたが言う前から受け入れていたのです」と言って、以前に目撃した例の出来事を語った。そしてさらに付け加えた。「アーミナの母親がある夢を見たのです。夢によると、私たちの家にある光が入ってきました。その光の輝きは、大地と空を包み込んでいました。私も昨晩、夢で祖先にあたるイブラーヒーム様を見ました。そして、私に『アブドゥルムッタリブの息子のアブドゥッラーと、あなたの娘のアーミナを私が結婚させました。あなたもそれを認めるのです』と言ったのです。今朝からずっと、この夢の感覚が残っています。あなたが一体いつお出でになるのか気になっていたところでした」と言った。この言葉を聞いたアブドゥルムッタリブの口からは「アッラーフ・アクバル！　アッラーフ・アクバル！」という言葉が流れた。やがて、息子のアブドゥッラーをワハブの娘、アーミナと結婚させた。アーミナとアブドゥッラーの結婚については、これ以外にもいくつかの伝承が残されている。

神聖な「御光」が母に移る

預言者様の神聖な御光が母へと移ったとき、命あるものは互いに「全世界の主がこの世に来るのが近づいている。彼は世界の頼りであり、時の太陽である」と祝福した。その日の夜には、カアバにあるすべての像がうつ伏せに倒れるということもあった。また、その当時、マッカでは飢饉が起こっていた。何年間も雨が降っていなかった。木々に緑の葉はなく、収穫という言葉さえ失っていた。人々は苦しみの中に落ち、どうすればよいのか分からなくなっていた。しかし、愛すべき預言者様の神聖な御光がアブドゥッラー様からアーミナ様へと移って以降、どれほどの雨が降り、どれほどの収穫が得られたかということを表し、その年は恵みの年と名付けられたほどだった。

母なるアーミナ様が身ごもっていたとき、夫のアブドゥッラーは交易のためシャームへと出かけた。その帰途病にかかった。マディーナまで戻ってきたとき、叔父のナッジャール家のところで、十八歳、一説では二十五歳のときに亡くなられた。この知らせがマッカにもたらされると、町のすべては悲しみに沈んだ。教友のアブドゥッラー・イブニ・アッバース様はこう語っている。「預言者様の父上のアブドゥッラーが、息子が生まれる前に亡くなると、天使たちは『アッラーよ、預言者様が孤児になってしまいました』と言いました。すると、アッラーは『彼の守護者であり、手助けするものは私である』とおっしゃられた」

象の出来事

預言者様が生まれるまで、あと二ヶ月ほどのことだった。この頃、象の出来事といわれる事件が起こった。イエメンの統治者のアブラハがビザンチン帝国の助けを借りてサアナという場所に大きな神殿を作り、人々が各地からカアバを訪ねる代わりに、この神殿へ来させようとしていた。しかし、アラブ人は昔からカアバを訪ねていたため、アブラハの作った神殿には興味を持たず、軽蔑していた。中には、神殿を汚す者もいた。

この状況に怒ったアブラハはカアバを破壊することに決め、そのための非常に大きな軍を編成してマッカへと進んでいった。アブラハの軍はマッカに近づくと、クライシュ族の資産を略奪し始めた。アブドゥルムッタリブの持っていた、二百頭のラクダも取られてしまった。アブドゥルムッタリブはアブラハのところに行ってラクダを取り戻そうとした。すると、アブラハは「私はあなた方の聖なるカアバを壊すために来たのです。しかしあなたはそれを守ろうともせず、ラクダを取り戻そうとしているのですか?」と言った。アブドゥルムッタリブは「私はラクダの持ち主です。同じように、カアバにも持ち主があるでしょう。その持ち主がカアバを守りましょう」と答えた。アブラハは「私に抵抗できる者などいないのだ!」と言い放ってからアブドゥルムッタリブにラクダを返し、彼を帰させた。その後、

カアバに進軍するよう命令した。アブラハの軍の先頭には、そのために勝利が決定的であろうと信じられた「マームード」という名の象が歩いていた。しかし、アブラハがカアバの方に向かうと、この象は座り込んで歩かなくなってしまった。逆にイエメンに向きを変えると走っていってしまったのだった。

その後、マッカに近づいたが、まだ攻撃をかけるには至っていなかったアブラハの軍の上に、アッラーがアバービール、つまり山ツバメといわれる鳥の大群を行かせた。この鳥たちは一羽一羽、ひよこ豆もしくはレンズ豆程の大きさの三つの石を持っていた。石の一つは口に、二つは脚に抱えていた。これらをアブラハの軍の上に落とした。石は兵士たちの頭へと垂直に落ちて貫通したのだった。石が当たった兵士たちは即死した。クルアーンの章でも伝えられているとおり、まさに軍は『食い荒らされた藁屑のようになされた』のだった。これを見ていたアブラハは混乱に陥って逃げようと試みた。しかし、逃げることはできなかった。石の真の目的は彼だったのである。そして彼にも石が当たった。逃げようとするたびに、体が砕けながら死んでいった。この出来事はクルアーンの『象章(アル・フィール)』で次のように伝えられている。

『あなたの主が、象の仲間に、どう対処なされたか、知らなかったのか。かれは、かれらの計略を壊滅させられたではないか。かれらの上に群れなす数多の鳥を遣わされ、焼き土の礫を投げ付けさせて、食い荒らされた藁屑のようになされた。』

吉報

愛すべき預言者ムハンマド(アライヒッサラーム)の来訪については、アーデム様以来のすべての預言者やその共同体では知られていたことであり、また、その吉報として、誕生が近づくと多くの出来事が起こるであろうということも伝えられていた。

預言者ムーサー様に下り、後には歪められた旧約聖書ではこのようなことが書かれている。

「彼はそれほどまでに神聖なる人物であって、努力を惜しまず、人並み以上の手助けを行う。貧乏人に愛され、金持ちにとっては医者である。彼は美しい者の中にあって美しい者であり、清い者の中にあって清い者である。話すときには柔らかく、与えるときは平等で、すべての行動が誠実である。不信仰者に対しては厳しく激しい。年上を尊重し、年下に情け深く同情する。物が少なくとも感謝を捧げる。捕虜に対しては憐みを持つ。いつも笑顔であるが、それは微笑みで大笑いはしない。文盲である。読むことも書くこともないままに、すべては彼に知らされている。彼はアッラーの預言者である。悪癖を持たず、心も柔軟である。市場や街中にあって大声では話さない。彼の共同体は高い道徳心を持つ。高い場所でアッラーの名前を口にする。ムアッズィン〔訳注…礼拝の呼びかけを行う者〕がミナレットに上がり、人々を礼拝へと呼びかける。清めを行ってから礼拝を行う。礼拝のときは列をそろえ、横に並んで祈る。夜には彼らの念唱の声がミツバチの音のように聞こえてくる。マッカにて生まれる。マディーナからシャームまで、すべての場所が彼の統治下に置かれる。名前はムハンマド（アライヒッサラーム）で、彼には『ムタワッキル』という呼び名が与えられた。堕落した宗教をなくし、正しい真実の宗教を広げるまでは、地上から立ち去ることはない。彼は人々をアッラーのもとへと呼びかける。彼の恵みによって、見えない目は見えるようになり、聞こえない耳は聞こえるようになる。心から怠惰が消滅する…」

預言者ダーウード様に下り、後に歪められた『ザブール（詩篇）』では

「彼はそれほどまでの人物であり、両手は開いている、つまり気前がよい。決して怒らない。大変穏やかである。顔は美しく、言葉は優しく、輝く顔をしている。人々の典医である。多く涙を流し、少なく笑う。少なく寝て、多く熟考する。好ましく、また美しく創造される。その言葉は人の心を動かし、魂を惹きつける…。ああ、愛される者よ！この努力の刀を抜き、英雄の場所で不信仰者たちに全力で復讐するのだ。適った言葉で私への感謝と称賛をあらゆるところに広げるのだ。すべての不信仰者の頭が、あなたの奇跡の手の前に垂れるであろう…」と書かれている。

また、預言者イーサー様に下り、後に歪められた新約聖書にも

「彼は、多くを食べないが、けちではない。罠にかけたりはせず、人々のことを悪く言わず、決して焦らない。自身のためには復讐を行わない。怠け者ではない。誰の悪口も言わない…」と伝えられている。

さらに、新約聖書では次のようなことも書かれている。

「アッラーから送らるムンハーメンナーについて、アッラーのところから来るジブリールが来ていたとしたら私に同意したことだろう。あなた方も私に同意するのです。なぜならば、あなた方は私と一緒にいたのですから。私がこれらをあなた方に言っているのは、疑いに落ちることなく、道からは外れないようにするためです」ここで書かれていたムンハーメンナーという言葉は、アッシリア語でムハンマド（アライヒッサラーム）という意味である。

ジャーヒリーヤ時代（無明時代）

世界の誇りである預言者様が生まれる前、世界のすべては、特に精神の面において、恐るべき弾圧に満ちた暗黒の時代であった。人々は思いもよらないほど凶暴になっていた。アッラーから送られた宗教は忘れられ、アッラーの法に代わって人間が作り出した思想や考えが幅を利かせていた。すべての創造物は、人間による虐待に脅かされていた。

世界中のあらゆる民族の間では、アッラーのことが忘れられ、心の安らぎや幸福と喜びの源であるタウヒード（神の唯一性）の信仰がなくなっていた。不信仰が広がって心からの信仰は崩壊し、心にあるべきアッラーの信仰から像を崇めることにとって代わられていた。

預言者ムーサー様が携えてきた宗教は忘れられ、旧約聖書は歪曲された。イスラエルの人々は互いに喧嘩をするようになっていた。預言者イーサー様の持ってきたキリスト教も完全に歪められ、もはや宗教とはいえない状態になっていった。三位一体、つまり三つの神の考えが認められたのである。本来の新約聖書は消失し、教皇たちは勝手に自

分たちの思い通りに変えていった。両聖書は、アッラーから送られた啓典から外れてしまったのである。
エジプトはその歪められた旧約聖書に基づいて統治され、ビザンチン帝国もまた、歪められたキリスト教が支配していた。イランでは火が崇められ、ゾロアスターの火が千年もの間燃え続けていた。中国は画一主義によって、インドは仏教のような作られた宗教によって統治されていた。
アラビア半島の人々は、さらに混迷した状況だった。彼らは、アッラーが大事にするカアバに、三六十個の像を置いていたのである。カアバというのは、天使たちが訪ねる『バイティ・マームル』という天にあるところと同じ大きさで、地上に創られた場所である。カアバを侮辱した者は誰でも、アッラーがすぐさま滅ぼしたと言われている。
かつて、ジュルフム族では、不貞や売春を広がっていた。一族が不道徳で大変酷い行動をとっているのを見たその族長は彼らに「ジュルフムの人々よ！　アッラーのカアバとその周りの安全を護り、目を醒ましなさい。あなた方以前の、預言者フードや預言者サーリフ、そして預言者シュアイブ様の共同体に降りかかったことや、彼らがどのように滅亡したのかをあなた方はよく知っているはずです。互いに善を行うように注意し合い、悪を避けるよう気をつけなさい。一時的な力を過信してはいけません。マッカでは、顔をアッラーから別の方に背けたり、虐待したりしてはなりません。なぜなら、虐待は人々の滅亡の原因だからです。アッラーに誓って、この地方に住んでいる者が虐待を行い、アッラーから顔を背けたら、誰であれアッラーは彼らの子孫を滅ぼして根こそぎに絶やし、別の一族に代えてしまうのです。傍若無人な状況を続け、アッラーから顔を背けるマッカの住民が永遠にこの場所に留まることはできません。あなた方以前にこの地に住み、あなた方よりも長生きで、さらに力があり、繁栄し、豊かさを誇ったタスムやジェディス、アマーリカの民の上に降りかかったことを知っているはずです。カアバを軽んじ、アッラーから顔を背け、虐待に熱中していたため、この神聖な場所から追い出されることとなったのです。アッラーは、ある部族には小さい蟻を付きまとわせて、またある部族には飢饉で、ある部族には刀で追い払ったのを見たり聞いたりしたことがあることでしょう」と言って、忠告をした。

しかし、彼らは耳を貸さなかった。結局、アッラーは彼らの凶暴さに対し、散り散りにする結果となったのである。
このように、この時代、地球の中心である聖なるマッカは、不信仰に満ちていた。カアバの中には、ラート、ウッザー、マナートなどの数百の像で一杯だった。虐待はこれ以上ないほどに蔓延し、不道徳が自慢の種になっていた。アラビア半島は、宗教、精神、社会、政治といったさまざまな面に広がっていた暗黒の中、完全に無知で、異常で、混乱し、狂った状況にあったのである。ジャーヒリーヤ時代（無明時代）と言われるこの時期、アラビア半島のほとんどの人々は遊牧生活を送っていて、たくさんの部族に分かれていた。互いに争い合っていたこれらの部族は奇襲攻撃を得意とし、集団による強奪が自分たちの生活手段であるとさえみなしていた。虐待や集団強奪が横行する部族によって成り立っていたアラビア半島に、政治的なまとまりや社会的な秩序は存在しなかった。さらに、酒、賭博、不貞、盗み、拷問、嘘、不道徳など、ありとあらゆる害悪も広まっていた。力のあるものから無いものに対し、非情で容赦のない鳥肌の立つような虐待が行われていたのである。女性は物のように売買されていた。また、女の子が生まれてくると、それを災難と考え、恥であるとみなす人々もいた。この恐ろしい認識は考えられないほどに達しており、砂に開けた穴に女児を生きたまま入れ「お父さん！　お父さん！」と泣き叫びながら抱きつこうとするのを振り払い、苦痛を感じながらもその声には耳を貸さず、上から砂をかけて死に至らしめるということまで行っていたのである。このような行為を実行しても良心の呵責を覚えることはなく、それどころか、これが栄誉の一つとさえなっていた。つまり、この時代の人々の間には、同情や憐み、善、正義といった善なるものが消滅しかけていたのである。
しかし、この時代のアラブ人の中には、注目されるべき点もあった。それは文学、書道、明晰な話術などに価値が置かれ、そして、これらが高い人気を保っていたことである。詩人や詩を大変重要視し、また、これらを誇りとしていた。才能ある詩人は自らが尊敬されるだけでなく、自分の部族も尊敬されることにつながっていた。定期市も開かれ、また、詩や話術の大会も行われていた。優勝した詩や話術はカアバの壁に掲げられるほどで、ジャーヒリーヤ時代にカアバの壁に掲げられていた当時最も有名となった七つの詩は『アル・ムアッラカートゥッサバア』つまり『七つの掲示』

と呼ばれていた。

この時代のアラビア半島では、人々は信仰においても混乱を極めていた。ある者は完全な無信仰者で、現世以外の考えを認めなかった。またある者はアッラーや来世を信じても、人間として現れる預言者のことは認めなかった。そして、ある者はアッラーを信じていたが、来世のことは信じていなかった。ほとんどの人々がアッラーと同等のものを置き、像を崇めていた。不信仰者それぞれの家には像が置かれていたのだった。

これら以外には、預言者イブラーヒーム様が伝えた宗教である『ハニーフ』と呼ばれる人々もいた。彼らはアッラーを信じ、像を崇めるようなことからは離れていた。預言者様の父のアブドゥッラー様、祖父のアブドゥルムッタリブ様、さらに、母やその他の人たちはこの宗教に従っていた。

ハニーフ以外のすべての集団は、迷信的であり、そして、大変な虐待と暗黒の中に身を置いていたのである。

この世への来訪（誕生）

世界はあまりにも暗黒と化し、あらゆるところが虐待に満ちていたため、人々はすべてを創造したアッラーに信仰や礼拝を行わなくなっていた。混乱していたために、自然現象や、アッラーの被造物、特に自分たちの手で作り上げた石製や木製の像を神であるとして崇めていた。

世界が嘆き、生命が嘆き、そして、心ある者も嘆いてその顔からは笑みが消えていた。アッラーが創造したものの中でも最上位の人間が、地獄から解放してくれる英雄が必要とされていた。つまり、預言者様の誕生が近づいていたのだった。預言者アーデム様以来彼の誕生の日に至るまで、清い額から額へと移ってきた御光の持ち主を迎えるため、世界は準備を整えていた。人間やジンに永遠の幸せを示す唯一の人物が、まさに来訪する時期が来ていたのだ！… 情けと憐れみの源であるアッラーの特質を有した高貴な人物が現れるところだった！…

天国の栄光ある最上位の主であり、仲裁する王冠を戴く人物が現れようとしていた！… 万物の指導者で、創造物の核、人々の主がやって来る！ 最後の審判の日に人々を助ける預言者たちの王がやって来る！… そのおかげで私たちが創造されたアッラーの最愛の者が、全世界の慈悲となる愛すべき預言者様が、今や現れようとしていたのである！…。

> この来たる子こそ、アッラーの許しのもとでその秘宝を人々に伝える王
> この来たる子こそ、アッラーの唯一性に導く知識の源
> 全世界や全宇宙、万物はこの来たる子のために周っている
> 人々や天使は彼の顔を見たいと願う

七段の地と七段の天空、つまり、世界のすべてが敬意と喜びの中で、最後の預言者であり、アッラーに愛される者を待ちわびていた。すべての創造物がその喜びを表して「ようこそ、預言者様！」と言う準備を整えていたのである。ヒジュラの五三年前に起きた象の出来事から二ヶ月後、ラビーウ・ル・アウワル月十二日の月曜日の夜の明け方に、マッカのハーシム家がある地区の、サファーの丘の近くにある家で、その来訪が待ち望まれていた、アッラーの御光であるムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）がお生まれになった。彼の来訪によって、世界は新しく息を吹き返し、暗黒は光で明るさを取り戻したのである。

今夜、何と名誉な夜であるか　全世界に慈悲として遣わされたムスタファ
彼の御光で万物はより優雅になる　罪あるムスリムの取り成しもする
今夜、アッラーがあらゆるところを慈しみ　宗教の王がそのとき誕生した
世界を天国のようにする　天と地はみいつと光にあふれて明るくなった
今夜、心善き者は喜び　すべての創造物は嬉々として歓ぶ
今夜、心ある者は祝福して無為に過ごしはしない　悲しみから救い、全世界を生き返らせた

『メダーリジュンヌブッウェ』という本ではこのように記されている。
「これ以上ない程の名誉に与った母親の中でも、最も幸福な母親であるアーミナ様が妊娠中のときのことをこう語っています。『彼を身ごもっていた日々は、全く痛みや苦しみがありませんでした。妊娠中であることすら感じませんで

した。しかし、六ヶ月になったある日、まどろんでいたところ、ある人物が私に『あなたが身ごもったのは誰なのかご存知ですか？』と尋ねました。『知りません』と返事をすると『お知りになってください。最後の預言者様を身ごもっておられるのです！』と知らせたのでした。誕生のときが近づくと、その人がもう一度現れ、こう言いました。『アーミナよ！子供が生まれたら、名前はムハンマド（アライヒッサラーム）と名付けるのです』（別の伝承によると『アーミナよ！子供が生まれたら、名前はアハマドと名付けるのです』となっている）」
また、母親のアーミナ様は誕生の瞬間を次のように語っている。
「生まれるときが来たら、荘厳な声が聞こえました。怖れを感じ始めました。その後、白い一羽の鳥を見かけ、それがやって来て私を撫ぜました。不安や恐れは全く消え去りました。そのときはのどが渇いていて、まるで灼熱に焼かれているようでした。脇にミルクのような白い器に、シャーベットがあるのを見つけました。そのシャーベットを口にできるよう、私に与えてもらいました。そして食べました。はちみつより甘く、冷たいものでした。もはや、のどの渇きはなくなりました。その後、非常に大きな光を見、家中がその大変な光で一杯になってからは、その光以外何も見えなくなりました。
　このとき、私の周りに並び、手伝いをしてくれているたくさんの女性たちが見えました。背は高く、顔は太陽のように輝いていました。彼女たちは、アブディマナーフ族の娘たちに似ているように思いました。しかし、彼女たちがいきなり現れたことに大変驚いていました。すると、その中の一人は『私はフォラオの妻のアスィエです！』、そして別の一人は『私はイムラーンの娘のマルヤムです。他の女性たちは天女なのです』と言うのでした。
　また、そのとき、白くて長く、空から地面まで伸びる絹の幕を見ました。『それを使って人々の目から覆ってください』と言われました。それから、鳥の一群が現れました。くちばしはエメラルド、羽根はルビーでできていました。私は不安から汗をかいていましたが、落ちた汗の滴りからはムスクの香りが広がっていました。このとき、目の前の幕が開き、地球すべてを東から西まで見ました。私の周りを天使たちが囲んでいました」

ムハンマド（アライヒッサラーム）は生まれるとすぐ、神聖な頭をつけて跪拝した。人差し指は上げていた。その後、彼を包む白い雲が空から降りてきて、ある声が聞こえてきた。「東から西まで、すべての場所を彼に見て回らせるのです。見て回らせなさい。世界のすべてに彼の名やその身体、そしてその品性を見せるのです。彼の名前はマーヒ、つまりアッラーが彼の手により、多神教を終わらせるということを、知ってもらいたのです」と言っていた。やがてその雲も消えた。そしてムハンマド（アライヒッサラーム）が、白い羊毛の布で覆われるのが見られた。このとき、顔が太陽のように輝く三人の人々がやって来た。一人の手には銀の水差し、一人の手にはエメラルドの金だらい、もう一人の手には絹があった。水差しからはムスクが滴っているようだった。神聖な赤子は金だらいの中に置かれた。こうして神聖な頭や足が洗われた後、絹に包まれた。さらに、神聖な頭に美しい香りがつけられ、神聖な目にはアイラインが引かれ、そして彼らもいなくなった。

空から降りた天使たちは列をなし
カアバのように我が家を周回する

やって来た天女たちは団をなし
その顔の御光で我が家を光に満たす

天使は空中に敷いた
スンドゥースというベッドを

明らかに見たこのことに
私は驚愕した

部屋の壁が突然に割れ
中に三人の天女が入るのを見た

話すには、三人のうちの一人が
月のように輝く顔のアスィエであると

一人は明らかにマルヤム様で
もう一人は天女たちの中にあってなお美しく

月のような顔の賓客が親切にも訪れて
私に挨拶をした

私の周りに座り
ムスタファを互いに祝福した

話すには、地上が創造されて以来
このような子供は決して現れたことがなかったと

このあなたの息子のような美しく尊い子供を
あの偉大なアッラーが他の母には与えなかった

愛すべき母よ、あなたは大いなる幸運に恵まれた
全ての美や徳を地上にもたらす子が
　あなたから生まれるのだ

あらゆる分子が話し始め
ようこそいらっしゃいましたと呼びかけた

ようこそ、偉大なる王よ、ようこそ
ようこそ、学理と知識の源よ、ようこそ

ようこそ、隠された英知を知る者、
　真理と虚実を分ける者よ、ようこそ
ようこそ、悲しみの薬よ、ようこそ

ようこそ、美しい庭のナイチンゲールよ、
　ようこそ
ようこそ、偉大で高貴なアッラーを知る者よ、
　ようこそ

ようこそ、正しい道と行いの月であり太陽よ、
　ようこそ
ようこそ、常にアッラーに結ばれ離れない者よ、
　ようこそ

ようこそ、反逆者の共同体が避難するところ
ようこそ、救いようのない者をとりなすところ
ようこそ、人々の心に永遠にある者、
　常に力や権威を抱く者、ようこそ
ようこそ、それらを愛する人々の
　渇きをなくす者、ようこそ
ようこそ、イブラーヒームの瞳の光よ、ようこそ
ようこそ、栄光者アッラーが特別に愛する者よ
ようこそ、全世界の慈悲である者よ
ようこそ、罪を犯した人々を仲裁する者
ようこそ、現世と来世の王
空間はあなたのために創造された

ムハンマド（アライヒッサラーム）が生まれたとき、アーミナ様の脇には、アブドゥルラハマーン・ビン・アウフの母であるシファー様や、ウスマーン・ビン・アブル・アスの母であるファーティマ様、そして預言者様の叔母であるサフィーヤ様がいた。彼女たちもまた光を見、そのほかの出来事を伝えている。

シファー様はこのように述べている。「私は、その夜アーミナ様の手伝いをしていました。ムハンマド（アライヒッサラーム）が生まれるやいなや、祈念や懇願を行っているのを聞きました。どこからともなく「イェルハームカ・ラッブカ」と聞こえてきました。その後、ある光が現れましたが、あまりにも輝いていたため、東から西までのすべてが見えました…」

これ以外にも、このとき起こった出来事を目撃していたシファー様は「後に、彼が預言者であることが知らされたとき、迷わず最初にそのことを信じた者の一人が私でした」と言っている。

サフィーヤ様は、こう語っている。

「ムハンマド（アライヒッサラーム）が生まれたときに、あらゆるところが光に包まれました。生まれると、すぐに跪拝をし、それから神聖な頭を上げ、はっきりと『ラー・イラーハ・イッラッラー、インニー・ラスールッラー』とおっしゃいました。彼を洗おうとすると、どこからともなく『私たちが彼を洗った上で送りました』という声が聞こえてきました。へその緒はすでに切られていて、割礼もされていました。生まれるやいなや跪拝をしました。そのとき、優しい声で何かを言っていたので、耳を神聖な口に近づけると『ウンマティ！ウンマティ！（我が共同体よ！）』とおっしゃっていました」

愛すべき預言者様が生まれたとき、祖父のアブドゥルムッタリブは、カアバでアッラーに祈念を行い、礼拝をしていた。そのとき、吉報がもたらされた。ムハンマド（アライヒッサラーム）の生まれた日に、多くの出来事を目撃したアブドゥルムッタリブは、この吉報に大変喜び「我が息子の栄光、名誉は偉大なものとなることでしょう」と語った。

息子がカアバに向かって
跪拝したのを見た
跪拝すると感謝して、人差し指を立て
ラー・イラーハ・イッラッラー、と言った
語るには、アッラーよ、顔をあなたに向け
共同体を私に委ねてください、と
心から全力でアッラーに願った
そして言った、我が共同体、我が共同体よ、と

アブドゥルムッタリブはこのような大きな幸福を祝うため、生まれて七日目から三日間、マッカの住民に祝いの食事を出した。さらに、町のすべての地区で、ラクダを切って人間や動物たちのために供した。祝いの食事の際、子供にどのような名前をつけたのかと聞いた人々に対して「ムハンマド（アライヒッサラーム）と名付けました」と答えた。すると、なぜ祖先のうちの一人の名前を名付けなかったのかと聞く人がいたので「アッラーや人々が彼を褒め讃えるようにと願ったからです」と返事をした。一説では「ムハンマド（アライヒッサラーム）」と名付けたのは、アーミナ様であるとも伝えられている。

その顔の美しさは昼の光を放ち、月の輝きを持つ
つまずいた人々には手を差し伸べる者

心の痛みを治すのはあなた
すべての創造物の王はあなた

すべての預言者の王はあなた
すべての聖者の瞳の光はあなた

あなたは預言者の最後の王
預言者の印を持つ最後はあなた

あなたの光で世界中が明るくなり
バラのように美しい顔が世界中をバラの庭に変えた

異常や無知や暗闇はあなたの存在で消滅し
あなたのために知の果樹園には川が流れ込んだ

アッラーの愛する者よ、我らを助けたまえ
あなたの顔を見ながら域を引き取る幸せを
　我らに与えたまえ

（スレイマン・チェレビ）

誕生の夜の出来事

預言者様が生まれる直前や誕生の際には、彼がこの世にいらっしゃる印として、多くの出来事が起こっていた。また、当時の高名な人々は、まだ預言者様が生まれる前にその夢を見ていた。これらの夢を占い師や当時の有名な学者に夢判断してもらったところ、これらはムハンマド（アライヒッサラーム）の来訪の印であるとの答えだった。愛する預言者様の祖父であるアブドゥルムッタリブはこう語っている。

「あるとき、私は眠っていました。そのとき見た夢に大変おののいて目を覚ましました。すぐにある占い師のところへ行って話し、夢判断をしてもらおうとしました。占い師のところへ行くと私の顔を見て『クライシュの名士よ！あなたに何が起きたのです？顔の表情がすっかり変わっています。もしかしたら、あなたをこれほどまでにさせた、何か大事なことでも起こったのですか？』と尋ねました。『そうです、まだ誰にも言っていない、驚くべき夢を見たのです』と言った後、隣に座って話し始めた。

『昨晩、夢で大変に大きな木を見つけました。木の先端は天に伸びていて、枝は東から西まで広がっていました。その木からはあふれんばかりに光がこぼれていて、太陽の光さえ軽く見えるほどでした。木は見えたり見えなかったりしていました。人々がその木に向かっていました。時間がたつにつれて、光はどんどん増していきました。

クライシュ族の一部の人々はその木の枝につかまっていましたが、木を切ろうとしている人々もいました。一人の若者が木を切ろうとしている人々を止めさせようとしていました。とても、美しい顔の人でした。私は今まであのような顔を見たことはありません。さらに、その身体からは周りに美しい香りが広がっていました。私は木の一つの枝をつかもうとしていましたが、つかまえられませんでした』と言いました。この夢の話が終わると占い師の顔は一変し、青白くなっていました。そして『あなたには、その木からの取り分はないのです！』と言うので『では、誰に取り分があるのでしょうか？』と尋ねました。すると占い師は『その木の枝を捕まえていた人たちです』と答えてから

続けました。『あなたの子孫から一人の預言者が出るでしょう。あらゆるところを治めることになり、そして、人々は彼の宗教に導かれるでしょう！』と言いました。それから、隣にいた息子のアブー・ターリブに向って『この人が恐らく、預言者様の叔父になります』とも言いました」アブー・ターリブも、預言者様が預言者であることを知らされた際、彼にこのときの出来事について語っている。その木こそが、アブー・カースィム・アル・アミーン・ムハンマド（アライヒッサラーム）のことなのだった。

愛すべき預言者様が生まれた夜、ある星が誕生した。これを見たユダヤ教の学者たちは、ムハンマド（アライヒッサラーム）の誕生を確信した。教友のハサン・ビン・サービトが次のように伝えている。

「私は八歳でした。ある朝、ある一人のユダヤ教徒が『ユダヤ教の者たちよ！』と叫びながら走っていました。ユダヤ人たちが『どうしたのだ、なぜ叫んでいるのだ？』とその人の周りに集まると、彼は『知るがいい、アハマドの星が今日誕生した！。アハマドが今日誕生したのだ！…』と答えていました」

預言者様が生まれた夜、カアバに置かれていたすべての像がうつ伏せに倒れた。『ウルウェトゥブヌズ・ズバイル』ではこのように伝えている。「クライシュ族のある一団は、ある像を崇めていた。年に一度、その像のまわりを周回し、ラクダを犠牲にしてはワインを飲んでいた。その日、像のところへ行くと、像がうつ伏せに倒れているのを見つけた。起こしてもまたうつぶせに倒れてしまうのだった。これが三度も繰り返された。そこで、像を周りから支えて引き起こしたところ、ある声が聞こえてきた。『ある方が生まれた。地上のすべての場所が動き始めた。どんな像でもすべては倒れた。王たちは恐怖に心を震わせた！』」この出来事はまさにムハンマド（アライヒッサラーム）の誕生の日のことだった。

この日、メダインという街にあったイランの王宮では十四の塔が倒れた。その夜、大変な騒音と恐怖で目を覚ました王や住民、また、何人かの名士たちは、見ていた恐ろしい夢について夢判断をしたところ、大きなあることの印があるということを知らされた。

また、その夜、ゾロアスター教徒、つまり火を崇める人々の間で、千年以来燃えていた炎が突然に消えた。その火が消えた日は、記録によればキスラーの宮殿の塔が倒れた夜と同じ日だった。

さらに、当時、神聖なものとされていたサーウェの池も、その夜突然に水がなくなり干上がった。シャームにおいては、千年もの間水が流れず、干からびていたセマーウェ川に水が満ちあふれ、流れ始めた。ムハンマド（アライヒッサラーム）が誕生した夜から、悪魔やジンはクライシュの占い師に情報を渡すことができなくなった。宣託というものが終焉したのである…

アッラーの愛する預言者様が生まれた夜には、それまで見られなかったさまざまな出来事が起こった。これらはすべて、最後の預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）が生まれたことの印なのであった。

マウリドの夜

預言者様が生まれた夜のことをマウリドの夜、という。マウリドというのは、誕生の時という意味である。ライラトゥル・カドル（訳注…預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に初めて啓示が下された夜）に次いで、最も大切な夜である。この夜、愛すべき預言者様が生まれるのを喜んでいる人々は赦される。この夜、預言者様が生まれたときに起こった出来事や奇跡について、読んだり聞いたり、あるいは学んだりすることは大変な善行となる。愛すべき預言者様もこのような話を自ら話したものであった。

教友たちもこの日になると、その夜を記念して集まり、その夜のことを語り合い、読んだり、話したりした。世界中のムスリムたちは、毎年のこの夜をマウリド・アン・ナビー（預言者生誕祭）として祝う。あらゆるところで、マウリドの詩を読み、世界の王である預言者様のことを偲ぶのである。

すべての預言者が形成した共同体では、その預言者の誕生日を祝っていた。この夜は、ムスリムたちの祝日であり、

喜びと幸せの日なのである。

乳母へ預けられる

母親のアーミナ様は御光の乳児を抱くことで、彼の父親であるアブドゥッラー様が亡くなった悲しみを忘れようとしていた。九日間母乳をあげた後、アブー・ラハブの女奴隷のスウェイベ様が数日間、乳母として世話をした。スウェイベ様は以前にもハムザ様や、アブー・サラマにも母乳を与えていた。ハーフィズ・イブン・ザスリはこのように語っている。「アブー・ラハブが夢に出てきたので、今、どういう状態かと聞いたところ、墓の中で罰を受けていると答えました。そして『ただ、毎年、ラビーウ・ル・アウワル月の十二日（預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の生まれた日）だけは、受ける罰が軽くなります。二本の指の間から出てくる水を吸って楽になれるのです。あの夜、預言者様が生まれると、スウェイベと名付けた女奴隷がその吉報を私にもたらしました。私は大いに喜び、その女奴隷を解放してやり、彼の乳母として世話をするよう命じたのでした。このことのおかげで、この日私の罰は軽くなっているのです』と言っていました」

当時、マッカの住民は、子供を乳母に預ける習慣だった。空気がよく、水の清浄な郊外の高原に行かせ、そこで子供たちはしばらくの間乳母のもとに預けられていた。これはマッカの暑い気候が理由である。このため、毎年、マッカには乳母となる多くの女性がやって来ていた。彼女たちは母乳をあげるため、それぞれ一人ずつ子供を預かって戻っていった。子供を返したときに、その給金と手土産をもらうことになっていた。預言者様が生まれた年も、高原に住んでいたサアド族からたくさんの女性が乳母としてマッカにやって来ていた。そして、それぞれが母乳を与えるための子供を一人ずつ預かっていた。サアド族は、マッカ郊外の部族の中でも威厳があり、寛大さや勇敢さ、謙虚さ、そして美しいアラビア語の発音をすることで大変有名であった。クライシュ族の名士たちは、自分の子供たちをこの一

族に預けることにしていた。その年、サアド族の地区では、厳しい飢饉や日照りが続いていた。この一族の出身である、ハリーマ様がこのときの状況について次のように語っている。「私はその年、野原を歩き、草を集めていましたが、草が見つかったときには感謝したものでした。ときには、三日間何も口にできませんでした。この状況の中で一人の子供が生まれました。一方では空腹、もう一方では出産の苦痛もありました。あまりにも空腹で、地と空、夜と昼の違いすら分からなくなってしまったこともありました。ある夜、荒野で眠ってしまったようでした。すると、夢の中で、ある人が私のことをミルクよりも白い水の中に浸して『この水を飲むのです』と言いました。いっぱいになるまで飲みました。それでも、もっと飲むように促されました。飲みに飲みました。はちみつよりも甘いものでした。そして『ハリーマよ、あなたの母乳がたくさん出ますように。私のことが分かりますか?』と聞かれたので、私は分かりません、と答えたところ『私はあなたが苦しんでいるとき、あなたがしていた感謝の心なのです。ハリーマよ、マッカに行きなさい。そこである御光があなたの友となるでしょう。そして恵みに巡り合うでしょう。この夢のことは誰にも言わないように』と言いました。起きると、胸は母乳でいっぱいになっていて、苦痛や空腹も消えていました」

飢饉のため、子供に母乳を与えて稼ぎを得ようと、その年は前年よりも多くの人々がマッカにやって来ていた。皆が金持ちの子供を預かろうと必死だった。急いでやってきた女性たちは、一人ずつ子どもを預かっていった。しかし、預言者様は孤児であったため、たくさんの給金は期待できないだろうと、彼を預かりたいとは思われていなかった。このような女性たちの中に、貞節で清廉で、優しく、恥じらいを持ち合わせ、そして道徳的なことで有名なハリーマ様もいた。乗っていた動物がやせていたため、マッカに来るのが遅くなっていた。しかし、遅くなったことで、他の人たちが探したよりも、さらに偉大な方と出会えることになったのである。彼女は夫とマッカを見て周ったものの、金持ちの子供は既に決まってしまっていた。しかし、手ぶらで帰るわけにもいかなかった。一人の子供を預かりたいと考えていた。

やがて、尊敬を集め、また、好感を持てるある人物と出会った。彼こそマッカの名士であるアブドゥルムッタリブだっ

た。あなたに孫を預けよう、そうすると、思いがけない幸運や繁栄をもたらすことだろう、と言った。アブドゥルムッタリブの情愛や親しみは彼らを引き寄せ、話はすぐにまとまった。その後、年長の叔父が、ハリーマ様をアーミナ様の家に連れて行った。ハリーマ様はこう語っている。

「子供のところに行くと、くるまれて緑の絹の上にすやすやと寝ていました。周りにはムスクの香りが広がっていました。大変に驚き、すぐに彼のことを好ましく感じました。そのため、起こすことすらできませんでした。手を胸に当てると起き、私を見ながらほほ笑みを見せました。私は彼のほほ笑みに魅了され、すっかり夢中になっていました。そして、きっとお母様は、こんなにも美しく、神聖な子供を私に預けてなどくれないだろうと思い、お顔を服で隠して子供を抱きました。右の胸を与えると吸い始めました。左の胸を与えると吸いませんでした。アブドゥルムッタリブ様は私に向かって『おめでとう。女性たちの中で、あなたほどの恵みが得られた者はいませんでした』とおっしゃいました。

　アーミナ様は、私に愛する赤ちゃんを預けた後『ハリーマよ、私は三日前に『あなたの息子にお乳を与える女性は、サアド族のアブー・ズアイブの子孫の者です』という声を聞いたのです』とおっしゃいました。これを聞いて『私は、サアド族の者です。そして私の父の名がアブー・ズアイブです』と返事をしました」

　ハリーマ様はまた、こうも語っている。

「アーミナ様は私に、他にもいろいろな出来事を語り、注意を与えました。私もマッカに来る前に見ていた夢や、マッカに来るときに右や左から『おめでとう、ハリーマ！　その目をまぶしくさせ、世界を明るくする御光にお乳を与える仕事はあなたに恵まれたのです』という声を聞いたことをお話しました」

　ハリーマ様は言った。

「ムハンマド（アライヒッサラーム）を連れて、アーミナ様の家を出ました。夫が待っていたところへ戻りました。夫も抱いていた子供の顔を見ると有頂天になり『ハリーマよ！　今まで、こんなに美しい顔は見たことがありません』

と言い、そして子供をそばにすると、その恵みの豊かさを見てとり『ハリーマよ、分かっておくがよい。あなたは神聖でまたとない子供をお預かりしているのだよ』と言いました。私も『アッラーに誓って、やはり私もそう願っていました。願いは叶ったのです』と答えました」

　ハリーマ様が夫と一緒に、ムハンマド（アライヒッサラーム）を連れ、マッカから出発すると、すぐに彼の恵みを感じ始めた。虚弱で、あまり早く歩けないロバが、まるで純血種のアラブ馬のように動いたのだった。一緒に来ていたキャラバンは、彼らより先に出発していて遠ざかっていたにもかかわらず、キャラバンを追いかけ、そして、追い抜かしたのだった。サアド族の村に着いた後には、今までに見たこともない豊かさや稔りに恵まれていた。乳の少ない動物たちは胸がたわわになって溢れていた。このようなことを見た人々は大変に驚き、これは乳を与えるために連れてきた、あの子供のおかげであるということをはっきり理解したのだった。

　あるとき、日照りのせいで辛苦に陥ったため、雨が降るよう祈念をしに出かけた。ムハンマド（アライヒッサラーム）も一緒に連れて祈ったところ、彼のおかげで雨や恵みが得られることとなった。

　預言者様は乳母のハリーマ様の右の胸から吸い、左の胸からは吸わなかった。それを乳母兄弟に譲っていたのである。二ヶ月のときに這い始め、三ヶ月のときに立ち上がった。四ヶ月のときには壁を支えに歩き始めた。五ヶ月になると歩き始め、六ヶ月になると早く歩くようになった。七ヶ月のときにはあらゆるところに行くようになった。八ヶ月のとき分かるほどに言葉を話すようになり、九ヶ月のときには明確に話し始めた。十ヶ月になると弓矢を使い始めた。ハリーマ様はこう語っている。「初めて彼が話したとき『ラー・イラーハ・イッラッラー、フワッラーフ・アクバル。ワルハムドリッラーッヒ・ラッビリ・アーラミーン〔訳注…アッラーの他に神はなし、アッラーは偉大なり。万有の主、アッラーにこそ凡ての称賛あれ〕』とおっしゃいました。その日から、アッラーの名前を唱えずに手を伸ばしたりはしませんでした。左手で食べることはありませんでした。歩き始めた頃、子供たちが遊んでいたところからは離れ、彼らに『私たちは遊ぶために創られたのではありません』とおっしゃいました。毎日、彼を太陽の光のような御光がま

とい、そしてその光を放っていました。月と対話をし、月に指図をすると月が動きました」

また、ハリーマ様はこのようにも語っている。

「ムハンマド（アライヒッサラーム）が二歳になると、お乳を与えるのをやめました。その後、お母様に返すため、夫と一緒にマッカに出発しました。しかし、彼のあれほどまでの恩恵に巡り合っていたため、彼と別れ、神聖なお顔を見られなくなってしまうことが、私たちには大変困難に感じました。彼の身に起こったことをお母様に話しました。アーミナ様は、私の息子には大変な栄光があるのです、とおっしゃいました。私も『アッラーに誓ってお話しします。彼よりも神聖な方は見たことがありません』と言いました。そして、アーミナ様へたくさんの弁解をして、もう少し自分たちと一緒にいさせてもらえるようお願いしました。アーミナ様は私たちの願いに反対をせず、それを認めてくださいました。そして彼と一緒に部族のもとに戻りました。そのおかげで、家は恵みで満たされました。持ち物や資産は増え、名声は上がっていきました。数えきれないほどの恩恵に恵まれました」

神聖な胸が開かれる

ハリーマ様は語った。

「預言者様がある日『昼間は乳母兄弟が見あたりません、なぜでしょうか？』と聞かれたので『羊の番に出ているのです。家には、夜になると戻ります』と返事をしました。すると『私も彼らと一緒に行きましょう。私も羊の番をします』とおっしゃいました。いろいろ言い訳をしてみましたが、結局、彼を喜ばせるため、分かりました、と言いました。翌日、神聖な髪をとかしました。服を着替えさせ、乳母兄弟と一緒に行かせました。数日間、行ったり来たりしました。ある日、乳母兄弟のシャイマが野原から来たとき『大事な息子のムハンマド（アライヒッサラーム）はどこですか？』と聞きました。彼は『荒野にいます』と答えました。『かわいい我が子がこの暑さに一体どう耐えられるというのでしょう』と言ったところ、シャイマは『お母様、彼には決して悪いことが起こらないのです。なぜならば、神聖な頭の上には、雲があっていつも彼と同時に動いているのです。こうやって、太陽の光から守られているのです』と返事をしました。『あなたは何を言っているのですか？ 今言っていたのは本当ですか？』と尋ねたところ、彼は誓って本当だと答えました。私は『それを聞いてやっと安心しました』と言いました。また、ある日の昼間、乳母兄弟のアブドゥッラーが来て私に言いました。『お母様、急いで。クライシュ族の兄弟と一緒に羊の牧草を追っていたところでした。いきなり、緑の服を着た三人がやって来て、兄弟を丘の頂上に連れていってしまいました。仰向けに寝かせて、ナイフで腹を開いたのです。これを知らせようと私が来るときには、彼らはまだそこにいました。兄弟が生きているかどうかわかりません』私は血の気が引いて、すぐさまそこへ駆けつけました。彼を見つけました。神聖な頭にキスをして『かわいい我が子よ、世界の恵みの息子よ、どうしたのですか？ あなたに何が起きたのです？ あなたに誰が迷惑をかけたのですか？』と聞きました。彼は『家から出た後、緑の服を着ていた二人を見ました。一人は手に銀の水差しを、もう一人は手に緑のエメラルドでできた金だらいを持っていました。たらいには雪よりも白いものが一杯入っていました。彼らは私を丘の頂に連れていきました。一人が私を仰向けに寝かせました。私が見ていると、胸をへそまで切りました。決して、痛みや苦しみは感じませんでした。手を中に入れ、あるものを全部取り出しました。それから先ほどの白いもので洗って、もう一度元に戻しました。その後、一人がもう一人に、立ちなさい、私も務めを終わらせよう、と言って手を入れ、心臓を取り出しました。二つの肉片がありました。そして中から何か黒いものを取り出して捨てました。そして『あなたの体の中にあった悪魔の取り分はこれだったのです。それを取り出して捨てました。アッラーの最愛の者よ、これであなたは心配事や懸念から、そして悪魔の計略から安全になりました』と言いました。そして、心臓には彼らが持ってきた優美なものを詰めて光の印を押しました。いまだにその印の冷たさが体全体に残っています。一人が体の開いたところに手を置くと傷が治りました。そして、私を共同体の十人と重さを量りました。私の方が重かったのです。それから、千人と重さを量りました。また私が重かったのです。すると、一人がもう一人に『もう量るのはやめましょう。

アッラーに誓って、彼を共同体すべてと量ったとしても彼の方が重いでしょう』と言いました。そして、二人とも私の手や顔にキスをしてここに置き、去っていきました』とおっしゃいました」開かれた場所が神聖な胸であることは明らかだった。愛すべき預言者様の身に起きたこの出来事は、クルアーンの『胸を広げる章（アッ・シャルフ）』の第一節で知らされており、このことは『シャク・ウサーディル』つまり開胸といわれている。

ムハンマド（アライヒッサラーム）に、自身が預言者であることが知らされた後、何人かの教友たちが「預言者様！私たちにあなたについて語っていただけませんか？」と聞いたところ「私は祖先のイブラーヒームの祈りであります。また、兄弟のイーサーの吉報であります。そして母親の夢であります。彼女が私を身ごもったとき、シャームの宮殿を照らす光が自分から出ていたのを見ました…。そして、私はサアド・ビン・バクル家のもとで乳を与えられて育ちました」とおっしゃった。

ハリーマ様は、預言者様が四歳になるとマッカに連れていき、母親のもとへと返した。祖父のアブドゥルムッタリブはハリーマ様に、たくさんの物や恵みを与えた。ハリーマ様は彼をマッカに置いてくるという別れの辛さに「まるで、命や心が彼とともにそこで残っているようでした」と述べている。

尊敬すべき母上の逝去

愛すべき預言者様は六歳まではお母様のもとで育てられた。六歳のとき、お母様とウンム・アイマンという名の女奴隷とともに、親戚やお父様のアブドゥッラーの墓を訪れるためマディーナへ行った。ここで、一ヶ月間を過ごした。預言者様はマディーナのナッジャール家のプールで水泳を学んだ。そのとき、ユダヤ人の学者が、彼に預言者の持つべき特徴があることを見つけた。近づいて、名前を聞いた。「アハマドです」という答えが返ってくると、その学者は「この子供こそが、最後の預言者になるでしょう！」と叫んだ。他にもその場にいたユダヤの学者たちは、彼に見られ

る預言者の印を見て、彼が預言者になるだろうと互いに話していた。彼らのこのような話を聞いていたウンム・アイマンが状況をアーミナ様に知らせると、神聖なお母様は、何らかの危害が及ぶことを恐れ、彼を連れてマッカへと出発した。エブワーという場所まで来ると、アーミナ様は病気になってしまった。病は重くなり、しばしば気を失うほどだった。そばに立っている愛する息子ムハンマド（アライヒッサラーム）を見ながら「死の矢を引き当てながらも、アッラーの慈悲により、百頭のラクダの代わりに解放された人の息子よ。アッラーがあなたを神聖な人となさいますように。もし、夢で見たことが真実ならば、あなたは偉大で恩恵を豊かに与えるアッラーによって、人々には許されたものと禁じられたものを知らせるために遣わされるでしょう。アッラーはあなたを、あらゆる民族が行ってきた偶像崇拝や不信仰の人々から保護し守るでしょう」と言って、次の二行連句を詠んだ。

新しいものは古くなり、生きるものは死ぬ
多いものは少なくなり、若いままであり続けるものはあるのか

私も死にいく、一つ違いはこのこと
あなたを私は産んだ、私の名誉はそれ

後に残す善なる子
目を閉じて気を楽にして

我が名声は後世語られる
あなたへの愛情はいつも心の中で生き続ける

その後、アーミナ様は亡くなられた。そして、埋葬はこの場所で行われた。亡くなられたとき、アーミナ様は二十歳だった。
　そこで、ウンム・アイマンが世界の王を連れて数日間の旅をしてマッカへと連れて帰り、アブドゥルムッタリブに送り届けたのだった。

祖父のもとで

　預言者様のお父様やお母様は、預言者イブラーヒームの宗教を信じていた。つまり信者であった。イスラーム学者によれば、彼らは預言者イブラーヒーム様の宗教を信じていたが、ムハンマド（アライヒッサラーム）が預言者であることを伝えられた後、彼らもこの共同体の一員となるため、再び生き返って信仰告白の言葉を聞いたとおりに述べ、こうして共同体の一員にもなったといわれている。
　ムハンマド（アライヒッサラーム）は八歳まで祖父のもとで育てられた。祖父のアブドゥルムッタリブはマッカの人々から愛され、いろいろな仕事の管理を任されていた人物で、威厳があり、忍耐強く、高貴で、正直で勇敢、寛大であった。貧乏人を満腹にさせ、腹が空いていたりのどが渇いていたりする動物にも食べ物を与えていた。そして、アッラーや来世を信じていた。悪いことを避け、ジャーヒリーヤ時代のすべての汚れた習慣からは距離を置いていた。暴力や不正を行わず、マッカを訪れた客をもてなしていた。ラマダーン月にはヒラー山で瞑想する習慣だった。子供を愛し、同情心に富むアブドゥルムッタリブは、愛する孫をいとおしんで、昼も夜も隣から離さなかった。彼に大変な愛情と同情を示していた。カアバの日影で自分のためにしつらえてあったクッションにも彼とともに座り、これをやめさせようとする者に対しては「息子をそのままにしておくのです。彼の栄光は偉大なのです」と言っていた。預言者様の保母だったウンム・アイマンには、彼の面倒をよく見るよう注意深く言い聞かせ「息子の面倒をよく見るのです。聖

典宗教が私の息子について、その共同体の預言者になるだろうと述べているのです」と語っていた。ウンム・アイマンはこう語っている。「彼が子供のとき、空腹やのどが渇くことについて、不平を洩らしたことはありませんでした。朝はザムザムの水をひと口飲んでいました。彼に食事を食べさせようとすると『いりません、お腹がいっぱいです』とおっしゃっていました」
　アブドゥルムッタリブは、寝ているときや部屋に一人でいるときに、その側へ彼以外の者が入って来ることは許していなかった。彼に同情し、慈しんでなぜ、彼の言動を大いに気に入っていた。食卓では彼を隣にして膝に乗せ、食事の一番上等な、一番おいしいところを食べさせ、彼が来ない限りは食卓に着かなかった。彼に関するたくさんの夢を見、また、たくさんの出来事を目の当たりにしていた。
　あるとき、マッカでは渇水と飢饉が生じていた。アブドゥルムッタリブは、見た夢に基づいてムハンマド（アライヒッサラーム）の手をつないでアブー・クベイス山に登り「アッラーよ。この子に免じて、私たちを豊かな雨で喜ばせてください」と祈った。祈りは受け入れられ、たくさんの雨が降った。当時の詩人がこの出来事について、詩を書いて残している。

ナジュラーンの修道士

　アブドゥルムッタリブ様が、ある日カアバの近くに座っていたとき、あるナジュラーンの修道士がやって来て話を始めた。「私たちイスマーイール家から出るという最後の預言者の特性について、書物で書いてあるのを読みました。ここ、つまりマッカが、彼の生まれる場所だそうです。彼の特性はこれこれなのだそうです」と言いながら、一つずつ数え上げていった。そのとき、愛すべき預言者様が隣にやって来た。ナジュラーンの修道士は彼を興味深く眺め始め、そして近づき、目や背中、足を見て、それから興奮して「ほら、この子こそ彼なのです。この子はあなたの子孫

なのですか？」と言った。アブドゥルムッタリブ様が「息子です！」と答えたところ、ナジュラーンの修道士は「書物で読んでいた限りでは、彼の父親は生きてはいないはずです！」と言った。そこで、アブドゥルムッタリブ様は「彼は息子の息子です。父親はまだ彼が生まれる前、母親が身ごもっているときに亡くなりました」と言ったところ、修道士は「今、言われたことが真実です」と言った。このようなことから、アブドゥルムッタリブ様は自分の子供たちに対し「兄弟の息子について語られることをよく聞き、彼の面倒をよく見て、保護するように」と言っていた。

祖父の逝去

アブドゥルムッタリブ様は死期を悟ると子供たちを集め「私はもうこの世からあの世へと旅に出る時が来ました。唯一の気がかりは、この孤児のことです。もし寿命がもっと長かったならば、彼への奉仕を喜んで続けていたところでした。しかし、仕方がありません。命がそれを許してはくれないのです。この想いのため、今、私の心や言葉は焼かれているようです。あの真珠のような子を、あなた方のうちの一人に預けたいと考えています。一体、誰であれば彼の権利を適切に見守り、務めについての過ちを犯さないでしょうか？」と言った。アブー・ラハブは、顔を膝に伏せて「ああ、アラブの長よ。もしあなたが、この預かりものを託すにあたって、頭の中で誰か考えている者がいるのであれば、それで構いません。しかし、もしそうでなければ、私がこの務めを行いましょう」と言った。アブドゥルムッタリブ様は、彼に「あなたにはたくさんの財産があります。しかしあなたは心が固く、憐みの心に欠けているのです。孤児の心というのは傷つきやすく繊細なのです。すぐに傷ついてしまうでしょう」と言った。他の子供たちも、同様の申し出を繰り返した。しかし、アブドゥルムッタリブ様はそれぞれの性格について言及しては断った。順番がアブー・ターリブに巡ってくると彼は「私は誰よりもこの役目を希望しています。しかし、年長の者がいるのであれば、彼らの前に出るのは好ましくはないでしょう。けれども、私は財産が少ないとはいえ、誠実さに関しては兄弟よりも勝っ

ています」と言った。アブドゥルムッタリブ様も「その通りです。この役目にふさわしいのはあなたでしょう。しかし、私はすべてのことに関して彼に相談し、彼の願いに基づいて行動します。毎回、正しい結果に導かれるからです。この件でも、彼と相談したいと考えています。あなた方の中で彼が選んだ者を私も認めましょう」と言った。

その後、愛すべき預言者様に向って「かわいい我が子よ！　あなたのことを心に留め、私はあの世へと向かいます。後見として、この叔父たちの中から誰を選びますか？」と尋ねた。預言者様は立ち上がり、アブー・ターリブの首に抱きついた。そして、その膝に座った。アブドゥルムッタリブ様は大変に安心し「アッラーに感謝します。私もこう願っていました」と言ったのだった。それから、アブー・ターリブ様に向って「アブー・ターリブよ。この真珠は母や父の愛情を受けていません。だから、彼の面倒をよく見るのです。あなたのことは他の子供たちより優れていると考えています。この偉大で大変に大事な預かりものを、あなたに任せましょう。というのも、あなたの母は、彼の父の母と同じなのですから。彼を自分自身のように護るのです。私のこの遺言を認めますか？」と言った。彼が「認めます」と言うと、アブドゥルムッタリブは愛すべき預言者様を抱いて神聖な頭や顔にキスをし、そのにおいをかいだ。それから全員が証人として見守る中「私はこれより美しい香りをかいだことも、これより美しい顔を見たこともない」と言った。

アブー・ターリブの保護のもとで

祖父が亡くなった後、万物の王である預言者様は、八歳のときから叔父のアブー・ターリブのもとに留まることとなり、その保護の下で育てられた。当時、アブー・ターリブ様も、その父のアブドゥルムッタリブ様と同様、マッカのクライシュ族の名士の一人であり、人々から愛され、尊敬され、そして、発言に影響力のある人物であった。彼も預言者様に大変な愛情や同情を示した。ムハンマド（アライヒッサラーム）を自分の子供よりも愛し、そばにいないま

まで寝たり出かけたりはしなかった。そして「あなたは大変に幸のある、大変神聖な子供なのです」と言っていた。彼が手を伸ばす前に食事を始めることはなく、始めのひと口は彼に食べてもらうようにしていた。ときには、彼のために特別な食事を作っていた。朝起きたときには、月のように輝く顔や、髪の毛がとかされるのを見つめていた。アブー・ターリブの財産は多くはなく、大所帯だった。だが、預言者様を自分の下で保護するようになってからというもの、幸福や豊かさが得られるようになっていた。マッカで起きた日照りのため、人々が苦難に陥ったときには、アブー・ターリブが彼をカアバに連れて行って祈念をした。すると、そのおかげでたくさんの雨が降り、日照りや飢饉から解放されたのだった。

修道士バヒラ

　愛すべき預言者様が十二歳となったある日、アブー・ターリブ様が交易のため、準備を整えているのを見た。自分が連れていってもらえないことが分かると、アブー・ターリブに「この町で私を誰に預けていくのですか？父親もおらず、私のことを憐れむ人もいません！…」とおっしゃった。この言葉はアブー・ターリブの心に大変響いた。彼も一緒に連れていくことに決めた。交易のキャラバンは長い旅の後、ブスラでキリスト教徒の修道院の近くで野営をした。この修道院には、バヒラという名前の修道士がいた。以前はユダヤ教の学者であったが、後にキリスト教に改宗したこの知識ある修道士のもとには、手から手へと渡されて守られてきたある書物があった。そして、聞かれたことに対しては、この書物をもとにして答えを導いていた。前年にもクライシュ族のキャラバンがここを何回も通っていたにもかかわらず、そのときは全く興味を示さなかった。だが今回は、毎朝、修道院の屋根に上ってキャラバンの来る方向を見ては、興味深くあることを探し求めていた。やがて、修道士のバヒラは何か変わった様子で、興奮しながら跳びのいて立ち上がった。クライシュ族のキャラバンを遠いところから眺めてみると、その上からは一つの雲が一緒に

ついてくることに気付いたからだった。この雲が預言者様を日陰にしていた。キャラバンが休憩したときには、預言者様が座っていた木の枝が、彼の上を覆うようになるのを見て、バヒラはますます興奮した。そして、すぐに食事を作らせた。使いを送り、クライシュ族のキャラバンの全員を食事に招待した。キャラバンの人々は預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）を積荷とともに残し、修道士のところへと向かった。だが、バヒラはやって来た人たちをしげしげと眺めてから「クライシュ族の皆さん。あなたたちの中で、食事に来なかった方はいますか？」と尋ねた。「はい、一人います」と答えが返ってきた。というのも、クライシュ族の人々が来たのに、雲はまだ元の場所に留まっていたからだった。このことから、キャラバンに誰かが残っていたことが分かったのだった。修道士のバヒラは、彼にも来てもらうよう何度も頼んだ。彼が来ると興味深く眺め、確認し始めた。まず、アブー・ターリブに「この子供はあなたの子孫でしょうか？」と尋ねた。アブー・ターリブが「息子です」と答えると、バヒラは「書物によると、この子供の父親は生きていないと書かれてあります。彼はあなたの息子ではありません」と言った。するとアブー・ターリブが「彼は私の兄弟の息子です」と言い直した。そして、バヒラが「彼の父親には何が起きたのでしょうか？」と聞くと「父親は生まれる直前に亡くなりました」と答えた。続いて、バヒラが「真実をおっしゃっています。では母親には何が起こったのでしょうか？」と尋ねたことに対しては「彼女も亡くなりました」と答えた。これらの返事を受けて、バヒラは「真実を話してくださいました」と言った。それから預言者様に向って、像の名前を出して誓いの言葉を言ってみた。すると、愛すべき預言者様は「像の名前をもって誓わないでください。この世では、それらより大きい私の敵はありません。私はそれらが大嫌いです」とバヒラにおっしゃった。

　バヒラは今度、アッラーの名前を出して誓ってから「お休みになりますか？」と尋ねてみた。すると「目は寝ようとも、心が寝ることはありません」という返事が返ってきた。バヒラは他にも質問をし、それぞれに返事をもらった。それから、愛すべき預言者様の神聖な目を見て、アブー・ターリブに「この神聖な目はいつも充血しているのですか？」と尋ねた。彼は「はい、なくなったのを見たことがありません」と答えた。バヒラは「この印も当てはまっている」と考え、

心から納得するため背中にある預言者の印も見たいと頼んだ。預言者様は恥ずかしがり、神聖な背中を見せようとはしなかった。アブー・ターリブが「かわいい我が子よ、彼のこの願いに応えてあげてください」と言ったところ、神聖な背中を見せた。バヒラはその美しい印をしっかりと目に焼き付けた。感激して口づけをし、彼の目からは洪水のように涙があふれ出た。そして「私は認めます。あなたはアッラーの預言者であります」と言った。さらに、声を一層大きくして「ああ、万物の王よ… アッラーの預言者様よ… アッラーが世界に恵みとして送った偉大なる預言者様…」と続けた。その場にいたクライシュ族の人々は「ムハンマド（アライヒッサラーム）は、この修道士の目からすると、それほどにも価値があるものなのか」と驚いた。

バヒラはアブー・ターリブに向って「彼は預言者たちの中でも、最後にして、最も栄誉ある方なのです。彼の宗教は全世界に広がり、それ以前の宗教を刷新します。この子供をシャームに連れていってはなりません。なぜなら、イスラエルの民は彼の敵だからです。神聖な身体に危害が加えられることが心配です。彼に関して、多くの誓いや約束が伝えられてきているのですから」と言った。アブー・ターリブが「その誓いや約束とは何ですか？」と聞くと、バヒラは「アッラーはすべての預言者たちに対し、そして今までで最後には預言者イーサーに対し、最後の預言者が現れることについて、それぞれの共同体に知らせ、またそのことを約束しているのです」と答えた。

アブー・ターリブは、バヒラのこの話を聞き、シャームへ行くことを中止した。持って来た物品はブスラで売り、マッカへと戻った。このバヒラから聞いた話はアブー・ターリブの耳に亡くなるまでずっと残り続け、預言者様をより深く愛するようになった。そして亡くなるまで彼を庇護し続け、あらゆることに力を貸したのだった。

あらゆる面で美徳と長所を備え、例外的な人物である愛すべき預言者様は十七歳となった。このとき、叔父のズバイルは、交易のためにイエメンに行く際、実りある交易になるようにと彼も一緒に連れていった。果たして、この旅でもいろいろな奇跡的な出来事が起こった。マッカに戻ったときには、彼に関するこれらのことが語られるようになっていて、クライシュ族の間では「彼の名誉は大変に大きなものになるだろう」と言われ始めたのだった。

あなたの愛情はあらゆる悩みの妙薬です、預言者様よ、
あなたのところで必要なものが得られます、預言者様よ、

あなたの御光を見る目には、月も星も要りはしない
あなたの御光で夜も昼も光に導かれます、預言者様よ

あなたの汗は開いた薔薇の花、あなたの言葉は蜂蜜のように甘い
あなたとともに病の心は癒されます、預言者様よ

あなたは王たちが愛する者、呻く人々の典医
あなたのとりなしは罪ある人の心を楽にします、預言者様よ

青年時代と結婚

人々の中にあって、あらゆる面で秀でていたムハンマド（アライヒッサラーム）はまだ若い時分から、マッカの住民たちの間で、同年代の若者たちよりも気に入られていた。美しい品格や、類を見ない丁寧な人々への接し方、穏やかさや優しさなど、さまざまな優れた態度によって愛されていた。人々はこのような品格のため彼に惹きつけられ、感心していた。マッカの住民は、彼に見られる驚くほどの正直さや信頼感から「アル・アミーン」つまり、常に信頼される、という意味の尊称をつけた。このようにして、青年のときにはこの名前で有名となっていた。

預言者様が青年の頃、アラブ人はまったくの暗黒時代を過ごしていた。像を崇め、酒、賭博、不貞、利子、さらにこれ以上の醜悪な事柄が人々の間に広まっていた。ムハンマド（アライヒッサラーム）は、彼らのこのような崩れた行為を忌み嫌い、すべての悪事からいつも離れていた。マッカの住民は皆、彼のこのような態度を知っていて、それに驚かされていた。像を嫌悪し、決して近づくことはしなかった。像のために捧げられた犠牲の肉も、決して食べることはなかった。子供の頃や青年の頃は、自分たちの羊をジヤド山やその周辺で放牧して生計を立て、こうして非常に崩れた社会からは距離をとっていた。後に、預言者様は教友たちに「羊飼いをしたことのない預言者はいません」とおっしゃっている。「預言者様！あなたも羊飼いをしていたのですか？」と聞かれると「はい、私も羊飼いをしていました」と答えられた。

愛すべき預言者様が二十歳になった頃、マッカの治安は完全に崩壊していた。暴力がはびこり、資産や命、名誉の保障は消滅していた。マッカの住民は、交易のため、あるいはカアバへ巡礼のためにやって来た国外の人々に対し、不当な暴力をふるっていた。被害にあった人々が権利を主張するために申し出るところもなかった。あるとき、交易のためマッカを訪れていたイエメンの商人が、アス・ビン・ワーイルという名のマッカの人に商品を強奪された。このため、イエメンの商人はアブー・クバイス山に登って叫び、物品を戻すためさまざまな部族に協力を呼び掛けるという事件も起こっていた。暴力はこれ以上ないほどの域にまで達しており、同様の事件も起こっていたため、ハーシム家やズフラ家などマッカの部族の有力者たちはアブドゥッラー・ビン・ジュドゥアンの家に集まった。内外の人々に暴力や不正が行われることを防ぎ、被害にあった人の権利を守ることを決めた。そして、この目的を達成するため、正義の組合を立ち上げることとなった。愛すべき預言者様は、青年時代この組合に参加し、また、設立にあたっても積極的に協力していた。この組合は『フルヒュル・フドゥール』と名付けられた。以前にも、一説ではファドゥルという人物が二人で、別の説ではフダイルという名の人物が一人で、同様の組合を設立したこともあり、彼らが以前作っていた組合にちなんでこの名前がつけられた。このような組合が虐待を止めさせ、マッカの崩壊した治安を改めていった。その影響は長く続いた。後に、預言者様は自分が預言者であることを知らされた後、教友たちにこのときの話をして「アブドゥッラー・ビン・ジュドゥアンの家で行われた誓いの場に私もいました。私にとって、あの誓いは緋色のラクダ（資産）を持つより好ましいことでした。今でもあのような組合に誘われたら参加することでしょう」とおっしゃった。

交易の仕事にいそしむ

マッカの住民は古くから交易で生計を立てていた。預言者様の叔父、アブー・ターリブも交易を行っていた。愛すべき預言者様が二十五歳の頃、マッカの生活は困窮にあえいでいた。マッカの生活苦は酷いものとなっていたのである。このような状況のもと、マッカの住民はシャームに向かう大きな交易キャラバンの準備をしていた。このとき、アブー・ターリブ様は預言者様にこう言った。「親愛なる我が甥よ。貧困は極みに達しています。飢饉との戦いのうちに過ごしたこの数年間で、全財産を失ってしまいました。さて今や、クライシュのキャラバンは準備を終えて、シャームに出発しようとしています。このキャラバンではハディージャ様も物品を送る予定です。そして、その仕事を任せ

られる信頼できる人を探しているそうです。あなたのように確実で信用があり、清廉で誠実な人を必要としているのです。彼女のところへ行って相談し、あなたが彼女の代理として行くようにしたらよいのではないでしょうか。間違いなく、他の人ではなくあなたを選ぶことになりましょう。本当は、あなたがシャームに行くことを私は望んではいません。なぜなら、そこのユダヤ人たちがあなたに危害を加えるのではないかと心配しているからです。しかし、他に手だてがないのです」これに対して預言者様は「あなたの思う通りにしてください」と彼におっしゃった。

ハディージャ様は、その美しさや資産、知性、高潔さ、貞淑さ、謙遜と礼儀正しさといった特性から、アラビア半島では広く知られた女性であった。したがって、あらゆるところから大勢の人が申し出をしていた。しかし、ある夢を見ていたことから誰のことも関心を持たなかった。その夢というのは、天空から月が降りてきて自分の胸に入り、月の光が身体の脇からほとばしって全世界を照らすというものであった。朝になると、その夢のことを親戚のワラカ・ビン・ナウファルに語った。ワラカは「最後の預言者が現れています。彼はあなたと結婚し、あなたとともにいる時期に彼に預言が降りてくるでしょう。彼の宗教の光で全世界が満ちあふれます。ですが、最初に信じるのはあなたです。その預言者はクライシュ族のハーシム家から出るでしょう」と解いてみせた。ハディージャ様はこの返事に大変喜び、そして、その預言者が来るのを待ち始めたのであった。

ハディージャ様は、事前に同意した人と共同で交易を実施していた。そして、アブー・ターリブ様がハディージャ様に預言者様のことを伝えた。こうして、ハディージャ様は預言者様と会い、話をするため家に招待することとなった。彼女は預言者様が訪れると、尊敬し敬意を表した。預言者様の上品さや清らかさ、美しい顔を見ると心惹かれ、預言者様にこう言った。「あなたが正直で、信頼され信用があり、高い品格をお持ちであることは存じています。この仕事のため、誰にも差し上げたことのないような金額の、その何倍をも差し上げましょう…」それから、この仕事で必要となる衣服などを渡し、安らいだ心で見送った。

ハディージャ様は、博識なキリスト教徒の叔父の息子、ワラカ・ビン・ナウファルに、預言者が持つ印について教

えてもらっていた。預言者様のこの訪問で、彼が預言者の印を持っていることも気付いていた。このため、メイセラという名の奴隷を預言者様の手伝いとしてキャラバンとともに送ることとし「キャラバンがマッカから出発する際には、マッカの住民からいかなる噂も立てられないようにするのです。そのため、ラクダの手綱をムハンマド（アライヒッサラーム）の手に持ってもらうようにしなさい。町から遠ざかって見えなくなったら、この高価な服を彼に着てもらうのです」と命じた。それから、最も美しいラクダを、まるで王に献上するかのように飾り付けた。そして、メイセラに「彼をこのラクダに失礼のないように乗せ、手綱はあなたが持ちなさい。あなたは、彼の手伝いであることを忘れてはなりません。彼の許しがない限り、何かをしてはいけません。彼を守り、危険を防ぐために、あなたの命を捧げるのです。立ち寄ったところではあまり時間をかけず、できるだけ早く戻るのです。そうしたら、ハーシム家の人たちに対して恥をかかなくて済みましょう。もし、今の言葉をあなたが一つ一つ守ってくれたなら、あなたを解放し、欲しいだけの資産をあげましょう」と言った。

キャラバンの準備が整い、マッカの人々は友人たちに別れを告げようと大勢が集まってきた。愛すべき預言者様の親族である、叔父やハーシム家の名士たちもその場に来た。預言者様の叔母様は、アッラーの預言者が手伝いの者の服を着てラクダの手綱を手にしているのを見るとぼう然とした。そして泣き崩れ、叫んだ。ああ、と悲嘆のため息をつき、目からは涙を流しながら「アブドゥルムッタリブよ、ザムザムの井戸を掘った偉大なる人よ！アブドゥッラーよ！墓から出て頭をこちらに向け、この神聖な方の落ちぶれた状況を見てください！」と言って、苦しみを口にした。アブー・ターリブも同じ気持ち、同じ状況だった。預言者様も、あのアッラーをご覧になったという神聖な目から真珠のような涙を流し「私のことを忘れないでください。異国で嘆き、苦しむことを想ってください」とおっしゃった。この言葉を聞くと皆が泣き崩れた。空にいる天使たちもこの状況に同情して「アッラーよ。この方こそはご自身が愛し、最も高貴な立場となさったムハンマド（アライヒッサラーム）ではないでしょうか。この状況が意図することとは一体何なのでしょうか？」と聞いた。アッラーは彼らに「そうです。彼は私の最愛の者です。しかし、あなたたちには愛

情の神秘は分からないのです。愛する者と愛される者の間の神秘を知ることはできません。この状況の意図は誰にも分かるものではありません。この神秘は誰にも、何も分からないのです」とおっしゃった。

やっと、キャラバンは出発した。マッカが見えなくなると、メイセラはあらかじめ受けていた命令にしたがって、愛すべき預言者様に高価な服を着てもらった。そして、さまざまな布で覆われ、美しく飾られたラクダに乗せて、手綱を自分の手に取った。

この旅でキャラバンにいた人々は、恵みとして世界に遣わされた愛すべき預言者様の上に日陰を作る雲の姿になったものと、鳥の姿になったものという二人の天使が、旅が終わるまで彼と同時についてくるのを目にしていた。また、途中では、歩けなくなるほど疲れてしまい、キャラバンから遅れをとった二頭のラクダの脚を彼が手でさすったところ、ラクダは急に早く歩けるようになった。他にもいくつかの出来事があり、彼のことを非常に好ましく感じるとともに、栄光に満ちた偉大な人物になるだろうということも分かったのであった。ブスラまで到着したとき、再び、以前にも来たことのある修道院の近くで野営をした。彼が最後の預言者であることに気付き、多くの預言者の印を見て、話しをしたバヒラは既に亡くなっており、代わりの指導者としてナストラという名の別の修道士が来ていた。修道院の近くで野営をしていたクライシュ族のキャラバンを見たナストラは、そばにあった枯木の下に誰かが座っているのを見つけた。すると、その枯木が茂り始めたのに気付き、メイセラに「あの木の下に座っている人物は誰ですか？」と尋ねた。メイセラは「彼はクライシュ族のカアバの住民の一人です」と答えた。指導者は「今までこの木の下には、預言者以外に誰も座ったことはありませんでした」と言った。そして「彼の眼には少し充血がありますか？」と尋ねた。メイセラは「はい、あります。そして目からそれが消えたことはありません」と答えた。ナストラは「イーサー様に新約聖書を授けたアッラーに誓って、この人物が最後の預言者となるでしょう。願わくは、彼が預言者になる時代に、私も生きていたいものです」と言った…。

ムハンマド（アライヒッサラーム）は、ブスラの市場でハディージャ様の物品を売買していたとき、あるユダヤ人が

取引上で信用しなかったため「ラートとウッザーの像に誓って約束してくれたら、あなたのことを信じましょう」と言ったところ、ムハンマド（アライヒッサラーム）は「私は決してそのような像の名のもとに誓うことはありません。彼らの隣を通り過ぎる時には顔を反対に背けます」とおっしゃった。彼に見られたその他の印にも気付いたこのユダヤ人は「あなたの言葉は真実です。アッラーに誓って、この人物が預言者となる方でしょう」と述べ「私たちの学者が、書物で彼の特徴を見出しています」と言って大変感嘆したのだった。

メイセラは、預言者様の上に見られたり、彼について語られたりしたことが積み重なるにつれ、彼に対する感心はますます増えていった。メイセラの心には世界の王に対する大きな愛情が芽生え、彼のためとあれば喜んで敬意を示して奉仕し、ほんの小さな指図でも喜んで実行していた。持って行った物品は売られ、預言者様の恩恵もあって、いつもより何倍もの利益を得ることができた。キャラバンは帰途についた。メルラーズ・ザハラーンという場所まで来たとき、メイセラは愛すべき預言者様にマッカへ吉報を先に伝えることを提案した。預言者様はこれを認め、キャラバンから離れてラクダの速度を速め、マッカへと向かった。

ナフィサ・ビンティ・ムニイェ様はこう語っている。「キャラバンが戻ってくる時期が近づいてきました。ハディージャ様は毎日、手伝いの者と一緒に家の屋根に上がり、キャラバンが到着するのを待っていました。そのようにしていたある日、私はハディージャ様の隣にいました。突然に、遠くの方でラクダに乗っている人が見えました。その人の上には、雲や鳥の形になった二人の天使がいて、彼に日陰を作ったりしていました。そして、預言者様の神聖な額にある御光が月のように光っていました。ハディージャ様は、やって来るのが誰なのかを察知してほっと安堵しました。けれども、分からなかったふりをして『この暑い日にやって来るのは一体誰なのでしょうか？』と尋ねました。すると、手伝いの者たちが『来ているのは、どうやらムハンマド（アライヒッサラーム）に似ているようです』と答え、目の当たりにした出来事に驚いていました。しばらくすると預言者様が、ハディージャ様の邸宅にやって来て経緯を説明し、彼女は述べられた吉報に大変喜びました。

その後、キャラバンがマッカに入ってきました。メイセラはハディージャ様に、旅の途中、預言者様には日陰が作られていたことや、修道士ナストラが話した言葉、弱っていたラクダがいかにして動き出したかなど、たくさんの特別なことを一つずつ説明しました。預言者様について、自分の言葉が思いつく限り、最大限に褒め称えていました。実は、ハディージャ様はこのようなことはもう十分に分かっていたのでした。しかし、その言葉は彼女の信頼をより一層大きくすることになりました。そして、メイセラに『見てきたことは誰にも言わないように！』と念を押しました」

ハディージャ様は聞いたことを知らせるため、ワラカ・ビン・ナウファルのところへ向かった。それらを大変に感嘆して聞いていたワラカは「ハディージャよ。今話したことが事実であれば、ムハンマド（アライヒッサラーム）は、この共同体の預言者となるでしょう」と言った。

預言者様は、十二歳の頃に交易のため叔父のアブー・ターリブ様とブスラへ、十七歳のときには叔父のズバイルとイエメンへ、二十歳のときにはシャームへ、そして二十五歳のときにはハディージャ様の物品を売るために再びシャームへ行き、合計四回の長旅に出られた。これら以外に旅をしたことはなかった。

ハディージャ様との結婚

ハディージャ様はワラカ・ビン・ナウファルによる吉報を聞き、預言者様の美しい品格を目の当たりにしたことで、彼の妻となって仕える名誉に与りたいという気持ちが湧き上がっていた。ナフィサ・ビンティ・ムニイェはこのことに気付き、彼らの間を取り持とうと高貴なる預言者様の前に上がった。「ムハンマド（アライヒッサラーム）！。あなたを結婚から引きとめるものとは何でしょうか？」と聞いた。すると預言者様は「結婚のための十分な資産を持っていないのです」とおっしゃった。ナフィサ様は「ムハンマド（アライヒッサラーム）！。もし、貞節で名誉があり、財産もある美しい女性と結婚したいのであれば、私にはお手伝いする用意が整っています」と言った。愛すべき預言

者様が「その女性とは誰ですか？」と尋ねると「ハディージャ・ビンティ・フワイリド様です」と答えた。そして、預言者様が「このことを誰が取り持つというのですか？」と聞かれると「それを私が行いましょう」と答えて、預言者様の前から下がっていった。その後、ハディージャ様のもとへと行き、よい知らせを伝えた。ハディージャ様は親戚のアムル・ビン・アサドとワラカ・ビン・ナウファルを呼び、事情を説明した。そして、預言者様に知らせを送り、指定の時間にいらっしゃるよう招待をした。一方で預言者様の側も、アブー・ターリブ様やその兄弟が準備を整え、預言者様とともに向かった。

ハディージャ様は家を飾り付け、この日を迎えた感謝の気持ちとして、手持ちの宝飾品をすべて手伝いの者たちに与え、彼らを自由にさせた。やがて、預言者様が叔父とともにハディージャ様の家にいらっしゃった。アブー・ターリブ様は「私たちを創造したものに感謝をします。私たちをイブラーヒーム様の息子たち、そしてイスマーイール様の子孫とさせました。私たちをカアバの守護者となさいました。人々がそれに向って礼拝をするところのカアバ、世界が回るかのように人々がその周りを回る神聖なる家、あらゆる悪から守られたカアバとその周辺は、私たちに任されたのです。そして、兄弟のアブドゥッラーの息子、ムハンマド（アライヒッサラーム）は偉大なる人物です。クライシュ族の誰よりも優れた人物なのです。財産はさほどありませんが、そのことは重要ではありません。なぜならば、物とは影のような存在であり、手から離れていくものだからです。この甥の名誉や優秀さは誰もが知っています。さて、今、ハディージャ様を妻として求めています。どれほどの婚資をお求めでしょうか？ 誓って言いますが、ムハンマド（アライヒッサラーム）の地位は高貴なところにあるのです」と話した。ワラカ・ビン・ナウファルは、これらの話に同意した。そして、ハディージャ様の叔父のアムル・ビン・アサドが「あなたたちも証人として、ハディージャ・ビンティ・フワイリドをムハンマド（アライヒッサラーム）に妻として与えます」と言った。こうして婚約が完了した。一説では、婚資は四百ミスカルの金だったとされるが、五百ディルハムの金であった、あるいは、ラクダ二十頭であったとする説もある。

アブー・ターリブ様は、婚礼のために一頭のラクダを犠牲にし、その日まで誰も見たことのなかったような見事な食事を用意した。このようにして結婚が成立した。そして、ハディージャ様は全財産を預言者様にお渡しし「この財産すべてが偉大なるあなたのものとなりました。私もあなたを必要としています。そして、あなたの恩義のもとにいるのです」と言った。

ハディージャ様は結婚している間ずっと預言者様に尽くし、手助けを続けた。預言者様のこの結婚は、ハディージャ様が亡くなるまで二十五年間続くこととなった。そのうち十五年間が預言者となる以前であり、十年間が預言者となって以降である。初めての妻であるハディージャ様の存命中は、預言者様は他の女性と結婚されなかった。男二人、女四人の、合わせて六人の子供がいた。彼らの名前は、カースィム、ザイナブ、ルカイヤ、ウンム・クルスーム、ファーティマ、そして、アブドゥッラー（タイイブもしくはターヒルとする説もある）であった。また、預言者となってから結婚したマーリーヤ様との間で、イブラーヒームという男の子が生まれたが、他の妻たちとの間に子供はいなかった。ザイナブが長女で、最も愛された末子のファーティマは、ヒジュラの十三年前に生まれた。男の子たちは幼い頃に亡くなっており、ファーティマ様以外のすべての娘たちも預言者様より前に亡くなっている。ファーティマ様も預言者様が亡くなって六ヶ月後に亡くなった。彼女はアリー様と結婚し、愛すべき預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の子孫は、このファーティマ様の息子たちによって続くこととなる。

預言者様は、ハディージャ様との結婚後も交易の仕事を行った。そして、得た利益で客をもてなし、孤児や貧しい人たちの手助けをされていた。

ザイド・ビン・ハーリサ

ザイド・ビン・ハーリサは子供の頃、母親のスウダー様と一緒に親戚を訪ねに行った。そのとき、別の部族の襲撃

を受け、ザイド様は捕虜となってしまった。そして、マッカにあるスーク・ウ・ウカーズという市場に連れていかれ、売られることとなった。そこで、ハディージャ様の甥のハーキム・ビン・ヒザムがザイドを四百ディルハムで買い取った。彼はザイド・ビン・ハーリサをハディージャ様に、そしてハディージャ様は預言者様にお贈りした。当時預言者様はハディージャ様と既に結婚していた。預言者様は彼を直ちに解放し、自分のところで預かることにした。というのも、解放されたザイド・ビン・ハーリサは行くあてがなかった上、預言者様以上に彼の面倒を見てくれる人はいなかったからである。彼も喜んで預言者様のもとに残った。

預言者様は預言者であることを知らされる以前から、正義心や良心、慈悲、人間愛、笑顔、名誉、慈善そして寛大さにあふれていること、約束や預かったものを守ること、進んで手助けをし自己犠牲を払うこと、信頼がおけること、抑圧された人や弱い者、貧乏な人を守り、子供たちに愛情や親愛の情を示すこと、誠実であり真実を話すこと、丁寧で謙虚で穏やかであること、人々に最適な形で指示すること、勇気があり正義から決して離れないことというような、目に見えるもの見えないもの、あるいは人に知られているもの知られていないものを含め、すべての美徳が完成されるように創られており、あらゆる面において過去でも将来でも創造物の中で最も優れていたのである。そのため、誰からも信頼を受け「アル・アミーン」という尊称がついていた。ザイド・ビン・ハーリサはそのような預言者様から良く接してもらい、父や母よりも愛するようになって、そのそばから離れようとしなかったのである。

一方、ザイドの父や母は、息子がどこに連れて行かれ、どうなっているのかを知らなかった。父親のハーリサは子供を失ったことの傷みの中、あちこち息子を捜し周った。親戚や知り合いがイエメンからあらゆる場所に行くときには、息子のザイドの消息のことをよくよく頼み、詩を詠んでは涙を流していた。そのような息子への懐かしさを表す詩の一つでは、このように述べられている。

ザイドのために泣いた、一体どうしたのか
生きているのか、もしかしたら死んでいるのか

心よ、彼のことを聞くのは無為なこと
知りはしない、墓が平原にあるのか岩山にあるのか

息子ザイドよ、死んだ者が帰ってくるのなら
誓ってお前以外の者が帰ってくることなど望まない

彼を思い出す、風が吹くにつけ、子供を見かけるにつけ
あなたを思い出す、毎朝太陽が昇るにつけ

悲鳴を上げる、私を愛する者のため、何千回も悲鳴を上げる
動物に乗っては探し回る、身体に力がなくなろうとも

私も動物も知りはしない、諦めるとはどういうことなのか
子が見つかり、その前へと出る可能性があるのだから

希望が人を騙しても、人は死にゆくもの
我が息子たち、カイス、アムル、イェズィード、ジェベルよ、ザイドのことはお前たちに任せよう

やがて、イスラームがもたらされる以前のある日、カアバを訪ねたケルブ族の何人かがついにザイド様を見かけ、その姿を認めた。ザイド様は彼らに「家族が私のことで悲嘆に暮れているのは分かっています。この二行連句を家族に伝えてください」と言って、次の詩を詠んだ。

家族から遠くにあって私は心痛める
両親に遠くともカアバは近い

決して悲しみに心痛めないように
私のための叫び声を空に上げないように

アッラーに感謝を、私はある家に
ここでいつも名誉や善や祈念を受けている

ハーリサはこの知らせに大変喜んだ。すぐに兄弟のカアブとともにそれなりのお金を持ってマッカに向かった。マッカに着いて預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の家を見つけ、その前へと上がった。そして「クライシュ族の主よ。

アブドゥルムッタリブの孫よ。ハーシム家の子孫の息子よ。あなた方はカアバを近くとする者たちです。訪問者をよく歓待して奴隷にも恵みを与え、そして彼らを解放します。さて、あなたの奴隷である私の息子を解放してもらうため、望む限りのお金を差し上げましょう。息子を解放してください。お願いです。私たちのこの願いを断らないでください」と言った。預言者様は「ザイドを呼んで、本人から状況をお知らせします。彼を自由にしましょう。もし、あなた方と一緒にいることを選んだら、あなた方からいかなる金銭を受けることなく連れて帰っていただいて構いません。もし、私とともにいることを選んだならば、アッラーに誓って、私のことを選んでくれた人を追い出すことはありません。私とともにいることになりましょう」とおっしゃった。

ハーリサと兄弟は、預言者様のこの返事に大変喜び「あなたは私たちに大変誠意と良心のある態度を示されました」と言った。

そこで預言者様はザイドを呼び、彼に「彼らを知っていますか?」と尋ねた。ザイドは「はい。一人は父、もう一人は叔父です」と答えた。それから預言者様は「ザイドよ。あなたは、私がどのような人であるか分かっています。あなたに対する憐みや同情の態度を見てきたことでしょう。さて、彼らはあなたを引き取りに来たようです。ですから、私を選んで私と一緒に留まるか、彼らを選んで帰るかということになっています」とおっしゃった。

父や叔父はザイドが自分たちを選び、一緒に帰るという返事を待っていた。しかし、ザイドは預言者様に「私にとって、あなたの代わりになるような方はおりません。あなたは私の叔父であり、父でもあります。私はあなたの元に残りたいのです」と言った。

父や叔父は驚いた。怒った父親はザイドに「情けないことだ。お前は自由や、母親や父親、叔父の代わりに、奴隷でいる方を選ぶというのか!」と言った。ザイドは父親に「父よ。私はこの方からあれほどまでの慈しみや扱いを受けたのです。あの方の代わりを選ぶことはできません」と返事をした。

預言者様はザイドを大変愛されていた。彼の自分に対する絆や愛情を見るとカアバにあるヒジュルへと連れて行き、

そこにいる人々に向って「あなた方を証人として、ザイドは私の息子であると言いましょう。彼は私の、そして私は彼の相続人であります」とおっしゃった。父親や叔父はこれほどのことを見ると、もはや怒りは収まり、喜んで故郷へと帰っていった。これ以降、教友たちはザイドのことを『ザイド・ビン・ムハンマド(ムハンマド(アライヒッサラーム)の息子のザイド)』と呼ぶようになった。しかし、後にアッラーが『部族連合章(アル・アハザーブ)』の第五節と第四十節にて『かれら(養子)の父(の姓)をもってかれらを呼べ。それがアッラーの御目に最も正しいのである。…』『ムハンマドは、あなたがた男たちの誰の父親でもない。…』と啓示されたため、養子の関係は解消され、ザイド様は父親の名前で、つまり『ザイド・ビン・ハーリサ(ハーリサの息子ザイド)』と呼ばれることとなった。

カアバの仲裁者

預言者様は、三十五歳の頃にカアバの仲裁者となる出来事があった。当時、雨や洪水によりカアバの壁はかなり傷んでいた。加えて一度火災があったために破損もしていた。建物は初めから作り直す必要にせまられていた。このため、クライシュ族はカアバを預言者イブラーヒーム様が建てた基礎部分も解体し、新たに建て直すこととした。部族ごとにそれぞれ一つの部分が割り当てられ、壁が積み上げられていった。この仕事が大変な栄誉であることを理解していた各部族は、ハジャル・アル・アスワド〔訳注…天国から降りた黒石〕を誰が元の場所に置くのかということについて互いに譲らなかった。すべての部族がこの栄誉を手に入れようとして、部族間でいざこざが起こっていた。アブドゥドゥダル家は「この仕事を我々以外の者が行うなら血を見ることになる」と誓いを立てていた。このもめ事は数日間続き、今にも血が流れようとしているところだった。

このとき、アブドゥルムッタリブの叔父で年長者であるフゼイフェ・ビン・ムギーラが「クライシュ族の者たちよ! この件は合意にいたらないので、あの門から最初に入って来た者をカアバの仲裁者として、その人に決めてもらうこ

とにしよう」と提案し、カアバに開かれたベニー・シャイバ門を指差した。その場にいる者はこの提案を受け入れ、そして、ベニー・シャイバ門を見ながら、誰が最初に入って来て、この件をどう解決するのか待ち始めた。やがて、門から、正直さや優れた品格で名高いアル・アミーン、つまり、信頼される者と名付けられたムハンマド（アライヒッサラーム）が入ってくるのを見て「やあ、アル・アミーンだ。彼の決定に従おう」と言った。

愛すべき預言者様に状況が説明されると、彼は一枚の布を持ってくるように求めた。布を地面に開くとハジャル・アル・アスワドをその上に置き「すべての部族から一人が布の一端を持ってください」とおっしゃった。そのようにして、石を元の場所まで持ち上げさせた。それから、自ら石を持って元の場所に置いた。こうして、彼が危うく起りかけた争いを防ぐのを見た部族たちは、このやり方に大変満足した。壁を積み上げていくことが再開され、新しい建物が完成することとなった。

すべてのことでアッラーの名前を念唱した、その寛大さの源
称賛や感謝の預言者であった、その寛大さの源

善なる行いや学識、優しさの源であった
美徳の美で満たされていた、その寛大さの源

アッラーの創造物に対しては優しく、アッラーのため謙虚であった
誰に対しても良く接していた、その寛大さの源

預言者に、そして宣教

世界の主が三十七歳のとき「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！」と自分を呼ぶ声が見えない世界から聞こえてきた。三十八歳になると、いくつかの光が見え始めた。このような出来事はハディージャ様だけに語っていた。ムハンマド（アライヒッサラーム）が預言者であることを知らせる時期が近づいていたとき、当時の有名な文学者であるクス・ビン・サーイデは、ウカーズ市場でラクダの上から、間もなく預言者が来るであろうという吉報を人々に語りかけていた。このとき、預言者様もその演説を聴いていた人々の間にいた。クス・ビン・サーイデが語っていたこの有名な演説の一部は次のようなものであった。

「人々よ！来て、聞き、待ち、そして教えとするのです！生きる者は死に、死ぬ者はこの世との関係が終わります！行われるべきことが行われます！…耳を開いてよく聞くのです！空は知らせ、地は教えています！…アッラーからのある宗教！…アッラーが送る預言者がいます。その人がもうすぐやって来ます。彼の影が頭の上まで伸びてきているのです。彼に従い、彼を信じる者は神聖なものとなりましょう。彼に反抗し反対する者は不幸な者となりましょう！何と残念なことか、人生を無為に過ごしている人々は！…」

当時、アラビア半島では神が定めた枠を外れ、金持ちと貧乏人、力を持つ者と持たない者、主人と奴隷といったような階層に分かれていた。前者は後者を見下し抑圧し、彼らを人間として認めていなかった。弱い者の資産は無理矢理手からはぎ取られ、それを止めさせる任にある者もいなかった。アッラーを信仰することで得られる恥や畏れの気持ちを、もはや持たなくなってしまった人々は、美徳というものからはすっかり遠ざかっていた。あらゆる不道徳や、誰しもが持つ尊厳や名誉を無視する卑劣な行為が自由に行われ、賭博、飲酒、享楽の世界が彼らにとっての日常となっていた。終わることのない殺人や、不貞、襲撃が嵐のように起こっていて、無実の人々の悲嘆の声や憐れみの視線が空を轟かせていた。道徳は堕落し、人々は無知の海に溺れていた。女性は単なる物品として売買され、女児は憐みを

受けることなく土に生き埋めにされていた。そして、最も悪いことは、心が頑なになり、強情で同情心を失ってしまったこれらの人々が、自分の手で作り出した利益も不利益もない像を崇めることを、非常な名誉としてみなしていたことであった。

預言者アーデム様以来、世界でこれほどまでの野蛮さ、異常さ、不道徳、無信仰、堕落が見られたことはなかった。人々はまるで一つの怪物になっていた。お互いを敵視し、社会は今にも爆発しようという状態だった。人々を安らぎに導くには、この暗い世界に幸福の太陽が昇る必要があった。それが昇れば不信仰は信仰に、暴力は正義に、無知は知に代わり、人々は永遠に幸福に導かれるのである。

ついに、愛すべき預言者様は、まず正夢を見るようになった。ハディースによれば、最初に預言は正夢から始まったとされている。夢の中で見ていたことがそのまま現実となった。この状態が六ヶ月間続いた。預言が下りる時が近づくと「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ」という声が聞こえることが多くなっていった。そして、一人でいることを好むようになり、人々から離れ、ヒラー山にある洞窟で瞑想にふけるようになっていた。ときどきはマッカに降りてカアバを周り、自分の家に戻っていた。しばらく家に行って簡単な食事を持ち、再びヒラー山にある洞窟に戻るのだった。そこで瞑想や礼拝を続けていた。ときには、数日間留まることもあった。そのようなときは、ハディージャ様が食事を持って行ったり、自分で持って行った食料で過ごしたりしていた。

初めての啓示

預言者様は四十歳となった。ラマダーン月にもやはりヒラー山に昇り、洞窟で瞑想にふけっていた。ラマダーン月十七日の月曜日の真夜中、預言者様は自分の名前を呼ぶ声を聞いた。頭を上げ、周りを見回すと、二回同じ声が聞こえ、突然辺りが光に満ちた。ついに、大天使ジブリールが前に現れたのだった。そして「読め！」と言った。預言者様は「私は読むことができません」と返事をした。すると天使は身体をつかんで力が抜けるほどに締め付け「読め！」と言った。「私は読むことができません」と返事をした。もう一度締め付け「読め！」と言った。預言者様が「私は読むことができません」とおっしゃると、三たび締め付けた。そして、それを止め「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！『読め「創造なされる御方、あなたの主の御名において。一凝血から、人間を創られた。」読め「あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって（書くことを）教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である。」』」と『凝血章（アル・アラク）』の最初の五節を啓示した。ムハンマド（アライヒッサラーム）も一緒になって読んだ。最初の啓示はこのようにして下り、全世界を光に導くイスラームの太陽はこのようにして昇ったのである。

預言者様は、大変おののき、驚いてヒラー山の洞窟を出て山を下り始めた。山の中腹あたりに来ると、ある声を聞いた。「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！あなたはアッラーの預言者、私はジブリールです」と言い、靴のかかとを地面に叩いた。叩いたところからは水が湧き出て、そこで清めを行ってみせた。預言者様は注意深くそれを見ていた。ジブリールは清めを終えると、預言者様にも見たとおりに清めを行うよう言った。愛すべき預言者様が清めを終えると、ジブリールがイマーム（訳注…礼拝時の先導）となって、二回の礼拝を行った。そしてジブリールは「ムハンマド（アライヒッサラーム）。アッラーからあなたに挨拶があります」と言い、アッラーが「あなたはジンや人間のために私が送った預言者です。つまり、彼らを信仰へと呼びかけるのです」とおっしゃったことを伝えると、その場を離れて天空へと上がっていった。愛すべき預言者様は、このようにして大天使ジブリールを見て話をしたのだった。

預言者様は家に戻るまでの間、通り過ぎるすべての石やすべての木から「アッサラーム・アレイケ。預言者様！」と言われるのを聞いた。家に着くと「私を覆ってください！私を覆ってください！」と言って、驚きが治まるまで休んでいた。それから見たことをハディージャ様に話し「大天使ジブリールは目の前からいなくなりました。けれどもその威厳や激しさ、恐怖が私に残っています。気が狂ったと悪く言われるのではないかと恐れています。中傷され、

変に思われるのではないかと恐れています」とおっしゃった。このような状況やこのような日を待ち、そして心の準備が整っていたハディージャ様は「アッラーがお守りくださいますように。アッラーがあなたに善なること以外は願わず、あなたがアッラーのためにこの共同体の預言者となることを私は信じています。なぜなら、あなたはよく歓待し、正しいことを言い、信頼ができるからです。無力な人を助け、孤児を守り、孤独な人を助けているからです。善なる性格であり、このような善い特徴を持った人に恐れは不要です」と言った。

その後、この状況について聞くため、ワラカ・ビン・ナウファルのところへ行った。ワラカは預言者様に話しを聞くと「ムハンマド（アライヒッサラーム）、吉報です！　アッラーに誓って、あなたは預言者イーサーが知らせていた、最後の預言者です。あなたが見た天使は、あなた以前には預言者ムーサーのところへ降りた大天使ジブリールなのです。ああ、私が若ければよかったものを。マッカからあなたが追い出されようとするときには、あなたを助けるために走り回れたことだろうに。近いうちに、宣教や聖戦を命じられるでしょう」と言い、預言者様の神聖な手に口づけをした。彼はしばらく後に亡くなった。

宣教の命令が下る

愛すべき預言者様に、預言者であることが知らされた最初の啓示はこのようにして下ったものだった。しかし、その後啓示は途切れ、三年間は下ることがなかった。この間、イスラーフィールという名の天使が来て、いくつかのことを教えてはいたが、これらは啓示ではなかった。この期間、ときどき預言者様は大変な悲しみに沈んでいた。預言者様が悲しくなると、大天使ジブリールが現れ「アッラーの最愛の者よ！　あなたはアッラーの預言者である」と言って、悲しみを癒していた。預言者様はこうおっしゃっている。「啓示が途切れていたときのことでした。ヒラー山から下りるとき、突然空から声が聞こえました。上を眺めてみました。大天使ジブリールが見えました。大地と空の間にある

壇に座っていました。恐れを感じました。家に行き、私を覆うようにと言いました。アッラーが啓示を下されました。『（大衣に）包る者よ。立ち上がって警告しなさい。あなたの主を讃えなさい。またあなたの衣を清潔に保ちなさい』という『包る者章（アル・ムッダッスィル）』のはじめの節を下されました。この後から啓示が途切れることがなくなりました」

万物の王は人々にイスラームを知らせ、アッラーが命じることや禁じることを伝え始めた。大天使ジブリールが啓示を預かってくるときは人の形となって来ることもあり、教友のドゥフヤー・イ・カルビの姿になって現れるのだった。ときには、預言者様の心に直接置いて伝えることもあった。そのときは預言者様がそれを見ることはなかった。ときには夢で、ときには恐ろしいうなり声として下ることもあった。預言者様にとって、啓示が最も重く、最も困難であったのはこのような形のときだった。そのようなときには、最も寒い日でも預言者様の神聖な額からは汗が流れ、もし、ラクダに乗っていたのであれば、啓示の重みにラクダが座り込んでしまうほどだった。そばにいる教友たちもその重みを感じていた。

アッラーは天使や幕、つまり媒介なしに預言者様に啓示を下したこともある。これは、ミウラージュの夜（みいつの夜）に実際に起こっている。

初めての啓示が下され、預言者としての責務を果たすようになったムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）は、イスラームの宣教を二十三年間続けることとなる。この期間のうち十三年間をマッカで、十年間をマディーナで過ごした。聖典クルアーンの啓示は二十二年二ヶ月と二十二日の期間にわたって完結される。

ムハンマド（アライヒッサラーム）は文盲であった。つまり本を読んだり書いたり、誰かから授業を受けたりしたことはなかった。マッカで生まれ、限られた数人の下で育てられた。それにもかかわらず、旧約聖書や新約聖書、古代ギリシア・ローマ時代に書かれた本にある情報や、その当時のできごとについても語っている。ヒジュラの六年目には、イスラームを伝えるため、ルーム（ビザンチン帝国）、イラン、エチオピアの王、その他のアラブの君主たちに書簡を送った。また、預言者様のもとには六十以上の外国の使節が訪れた。このことについて、クルアーンでは『蜘蛛章（アル・

アンカブート』の第四八節にて『あなたはそれ（が下る）以前は、どんな啓典も読まなかった。またあなたの右手でそれを書き写しもしなかった。そうであったから、虚偽に従う者は疑いを抱いたであろう。』と言及している。

さらに、ハディースでも「私は文盲の預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）である… 私から後に預言者は現れない」とおっしゃっている。また、クルアーンではこのようにも啓示されている。『また（自分の）望むことを言っているのでもない。それはかれらに啓示された、御告げに他ならない』（星章（アン・ナジュム）第三、四節）

初めてのムスリムたち

預言者様に最初の啓示が下された後、初めて信じたのはハディージャ様であった。みじんの躊躇もせずにイスラームを認め、初めてのムスリムという名誉を受けた。預言者様はハディージャ様に、大天使ジブリールが教えたとおりに清めを行うことを教えた。そして、預言者様がイマームとなって、一緒に二回の礼拝を行った。ハディージャ様は預言者様の述べたすべての言葉や、すべての命令に完全に従っていた。そのため、アッラーの前にあっては非常に高い地位が与えられることとなる。預言者様が悲しんでいたり、認めない者たちの嫌がらせによって苦難を受けたりしているときには「預言者様よ。悲しまないでください。心配なさらないように。最後には、私たちの宗教が力をつけ、不信仰者たちは滅びていくのです。人々はあなたに従うでしょう…」と言って、預言者様を慰め、その悲しみを和らげていた。ハディージャ様のこのような手助けに対して、ある日、大天使ジブリールが現れ、預言者様に「預言者様よ！ハディージャにアッラーからの挨拶を伝えるのです」と言った。これを受けて預言者様は「ハディージャよ。ほら、大天使ジブリールがアッラーからの挨拶をあなたに知らせています」とおっしゃった。

また、預言者様はあるとき「天国に真珠でできた家のことをハディージャに知らせるよう、アッラーが私に命じました。そこでは病や悲しみ、頭痛はないのです」とおっしゃっている。

ハディージャ様に次いで、大人で初めてムスリムとなったのは、預言者様の親友のアブー・バクル様であった。アブー・バクル様はその二十年ほど前にある夢を見ていた。「空から満月がカアバに降りてきました。すると、そこでばらばらになって、破片はマッカの家々の上へと降り注ぎました。それから破片はまた集まって空へと上っていきました。しかし、アブー・バクル家に落ちた破片は空には上っていきませんでした。これを見るとすぐに部屋の扉を閉め、まるでこの月の破片が昇っていくのを防ごうとするようにしていました」

アブー・バクル様は驚いて夢から目を覚まし、朝になるとすぐ、あるユダヤ人の学者のところへ行って夢の話をした。その学者は「これは混乱した夢です。ですから、夢判断ができません」と答えた。しかし、アブー・バクル様はこの夢が気にかかっていた。ユダヤ人の返事は彼を満足させなかった。あるとき、交易の途中で、修道士バヒラのいる場所に立ち寄った。以前に見た夢の判断をバヒラに求めると、バヒラは「あなたの出身はどこですか？」と聞いた。アブー・バクル様が「クライシュ族の出身です」と答えると、バヒラは「その地で、ある預言者が出るでしょう。そして正しい道の光がマッカの至るところに現れるのです。あなたは、人生を預言者の側近として過ごし、彼が亡くなった後は代理人となるでしょう」と言った。アブー・バクル様はこの話に大変驚いた。この夢や夢判断のことは、預言者様が預言者であることを明かすまで、誰にも言わないようにすることにした。

ムハンマド（アライヒッサラーム）が預言者であるとの話を聞くと、アブー・バクル様はすぐに預言者様のところへ行き「預言者には、預言者であることを示す印があるはずです。あなたの証明は何でしょうか？」と尋ねた。すると、預言者様は「私が預言者であることの証明はその夢です。あなたは、その夢の夢判断をあるユダヤ人の学者に求めました。その学者は、これは混乱している夢である、夢判断できない、と言いました。その後、修道士のバヒラが正しい夢判断をしてくれました」とおっしゃった。続けて、アブー・バクル様に「アブー・バクルよ。あなたをアッラーや預言者のもとに招きます」とおっしゃった。

こうして、アブー・バクル様は「認めます、あなたはアッラーの預言者様であります。あなたが預言者であること

は事実です。世界を明るくする光です」と言い、ムスリムとなったのだった。

別に伝わるところでは、アブー・バクル様は、預言者様が預言者であることを知らされる前、交易のためにイエメンへ行った。この旅では、イエメンにいたエズド族の読書家の老人に出会った。その老人はアブー・バクル様を見て「恐らくあなたはマッカの方でしょう」と言った。アブー・バクル様は「はい、そうです」と言い、二人の間で次のような会話が行われた。

「あなたはクライシュ族の方ですか?」

「はい!」

「テミム家の方ですか?」

「はい!」

「もう一つ印があります」

「何でしょうか?」

「お腹を見せてください」

「なぜでしょうか。言ってください」

「書物で読んだところによると、マッカにある預言者が現れるということです。彼に二人の人物が手助けをするのです。一人は若く、もう一人は年長です。若い人はあらゆる難題を簡単なものにします。そして、数多くの害悪をなくします。一方、年長者の顔色は白くて腰が細く、腹の上には一つの黒いほくろがあります。恐らく、その人こそがあなたでしょう。お腹を見せてください」

そこで、アブー・バクル様は神聖な腹を見せた。腹部に黒いほくろがあるのを見ると「アッラーに誓って、あなたがその方です」と言い、彼はアブー・バクル様にたくさんの忠告を与えた。

アブー・バクル様は仕事を終わらせると、別れの挨拶をしに老人のところへ向かった。そして、預言者様のことを

二行連句で表してもらうよう求めた。老人は十二の二行連句を読み、アブー・バクル様はそれらを暗記した。

アブー・バクル様が旅を終えてマッカへ戻ると、ウクバ・イブニ・アブー・ムアイト、シャイバ、アブー・ジャヒル、アブル・ブフテリなど、クライシュ族の名士たちが家へとやって来た。アブー・バクル様は彼らに「何か変わったことはありますか?」と尋ねたところ「これほどまでに変わったことなどないだろう。アブー・ターリブの孤児が、自分は預言者であると言っているのです。そして、あなたたちは父親や祖父の迷信的な宗教のもとにいるとも言っています。もし、あなたの気持ちを考えなかったら、今まで彼を生きたままにはしていなかったことでしょう。あなたは彼の親しい友人です。このことはあなたが解決するのです」と言うのだった。

アブー・バクル様は彼らを追い払う一方、預言者様がハディージャ様の家にいることを知った。そこへ行って、扉を叩いた。預言者様が出て、彼を迎え入れた。そして「ムハンマド(アライヒッサラーム)よ! あなたについて言われていたことは何でしょうか?」と尋ねた。預言者様は「私はアッラーの預言者なのです。あなたや、すべての人々のために送られました。信仰するのです。アッラーの慈悲を得て、命を地獄から守るのです」とおっしゃった。アブー・バクル様が「その証拠は何でしょうか?」と尋ねたところ、預言者様は「そのイエメンで出会った老人の話が証拠です」とおっしゃった。

アブー・バクル様が「私はイエメンでたくさんの老人や若者を見ました」と言うと、預言者様は「その老人は、あなたに十二の二行連句を預けて私に贈りました」と返事をして、すべての二行連句を詠み上げた。アブー・バクル様は「これを誰があなたに教えたのですか?」と聞くと「私以前の預言者たちのもとに来ていた天使が教えたのです」と返事をした。この言葉が言われるや、アブー・バクル様は「私に手を差し伸べてください」と言って神聖な手を取り「アシュハド・アン・ラー・イラーハ・イッラッラー。ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ」〔訳注…私は、アッラーの他に神はないと宣言する。そして、ムハンマド(アライヒッサラーム)はアッラーの預言者であると宣言する〕と信仰告白の言葉を述べてムスリムとなった。

人生において初めて味わう喜びの中、彼はムスリムとして家に戻っていった。後にあるハディースでは、預言者様が「信仰について紹介すると、誰もが顔をしかめ、ためらいました。しかし、アブー・バクル・スィッディークだけは信仰を受け入れるにあたって、何ら迷ったり躊躇したりはしませんでした」とおっしゃっている。

預言者様はある日、ハディージャ様とともに礼拝をしていた。そのとき、アリー様が彼らを見ていた。当時、十歳もしくは十二歳であった。礼拝の後「これは何ですか?」と尋ねた。預言者様は「これは、アッラーの宗教です。あなたもこの宗教へと招きます。アッラーは唯一です。並ぶものはありません。あなたを、唯一であり、比べるものもなく並ぶものもないアッラーへの信仰に招待します…」とおっしゃった。アリー様は「まず、父に相談します」と返事をした。預言者様は彼に「イスラームに入らないのであれば、このことは誰にも言わないように」とおっしゃった。翌朝、アリー様は預言者様の前に来て「預言者様よ! 私にイスラームを教えてください」と言い、ムスリムとなった。アリー様はムスリムとなった三人目であった。預言者様のために彼が示した献身と、預言者様のことを自分のことよりも優先して考えることが、何よりも彼が高く評価されるところとなった。

ザイド・ビン・ハーリサも、初めての信者の一人である。ハディージャ様、アブー・バクル様、アリー様に続く四番目であり、解放奴隷としては初めてのムスリムという名誉に与った。自分と同時に妻のウンム・アイマンもムスリムとなった。

アブー・バクル様がムスリムになると、すぐに親しい友人たちにも話しをして、ムスリムになるよう説得した。ウスマーン・ビン・アッファーン、タルハ・ビン・ウバイドゥッラー、ズバイル・ビン・アッワーン、アブドゥルラハマーン・ビン・アウフ、サアド・ビン・アブー・ワッカースなど部族の名士たちや優れた人物の何人かであった。ハディージャ様に次いでムスリムとなった八人は、サービ・クン・イスラーム、つまり、初のムスリムたちと言われている。

ウスマーン様はムスリムになったときのことをこう語っている。「私には占い師の叔母がいました。ある日、彼女を訪ねに行きました。私に『あなたはある女性と巡り合うでしょう。しかし、あなたは彼女以外に女性とは出会わないし、彼女もあなた以外に男性と出会うことはないでしょう。その美しい顔の現世にとらわれていない女性は、ある偉大な預言者の娘であるでしょう』と言いました。私は叔母のこの言葉に驚きました。また、私に『預言者が現れました。彼に空から預言が下されました』とも語りました。私は『叔母よ。このような噂はまだ町では聞かれません。このことを明らかに言ってください』と言いました。すると、叔母は『ムハンマド・ビン・アブドゥッラー様(アライヒッサラーム)が預言者となりました。人々を宗教に招きます。短期間のうちに、彼の宗教で世界は光にあふれます。反対する者の首は落とされます』と言ったのでした。

叔母のこういった言葉が私の心に深く残っていました。心配もしていました。アブー・バクル様と私の間は大変親しいもので、離れたことはありませんでした。ですから、このことについて話そうと、二日間アブー・バクル様のもとへと行きました。叔母の話していたことを語ると、私にこう言いました。『ウスマーンよ、あなたは賢い人です。見ることも聞くこともできず、利益も不利益も避けられない石が、果たして神にふさわしいとは思うのですか?』私は『あなたは真実を語っています。そして叔母も真実を語っているのでしょう』と言いました」

アブー・バクル様はウスマーン様にイスラームについて話した後、彼を預言者様の、つまり人間やジンに対する預言者様の前へと連れていった。愛すべき預言者様はウスマーン様に「ウスマーンよ。アッラーがあなたを天国に賓客として招いています。あなたもそれを受けるのです。私はすべての人々のため正しい道への案内者として送られたのです」とおっしゃった。ウスマーン様は預言者様の偉大な様子や、笑みとともにおっしゃった言葉に、我を忘れるほどに非常に歓喜して認め「アシュハド・アン・ラー・イラーハ・イッラッラー。ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ」と信仰告白の言葉を述べてムスリムとなった。

預言者様が預言者となって最初の三年間は、ひそかに人々をイスラームに誘っていた。一人、二人と次第にムスリムとなっていった。この期間の間に、ムスリムの数は三十人ほどとなっていた。彼らは礼拝を家で行い、クルアーンの啓示された節を秘密裏に暗記していた。

近親者への宣教

預言者様が『包まる者章』（アル・ムッダッスィル）の啓示を受けて以降、人々にイスラームの宣教を始めるようになった。しかし、この宣教は密かにに行っていた。しばらくすると『あなたの近親者に警告しなさい』（詩人たち章（アッ・シュアラーゥ）第二一四節）という節が啓示された。これに従い、ムハンマド（アライヒッサラーム）は親族に宗教を伝えるためにアリー様を行かせ、全員をアブー・ターリブの家に呼ぶことにした。彼らの前には、わずか一人分しかないであろう一皿の食事と、椀一杯分のミルクが置かれていた。まずは自分がバスマラ（訳注…『ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム』と唱えること）を唱えて食事を始め、集まった親族に「どうぞ」とおっしゃった。集まった人は四十人もいた。しかし、置かれた食事は全員を満腹にさせ、決して減ることがなかった。来ていた人々はこの奇跡を前に驚いていた。食後、預言者様は親族をイスラームに招こうと、話を始めようとしていた。しかし、叔父のアブー・ラハブは敵視して「我々は今日のような魔術を見たことがない。あの親戚がこの魔術で惑わしたのだ。兄弟の息子よ、私はお前がもたらしたような悪事や、そのような悪行を行う者を他に見たことがない」と侮辱し続けた。

預言者様はアブー・ラハブに「あなたこそ、クライシュ族やすべてのアラブ族が行わない悪事を私にしたのです」とおっしゃった。一人もムスリムにならずに散会した。この出来事から少し後に、預言者様は改めて親戚を招いた。再びアリー様が全員を呼んだ。以前のように食事を出した。預言者様は食後に立ち上がり「称賛はただアッラーのみにあります。助けをアッラーに求めます。アッラーを信じ、アッラーに頼ります。疑いのない形で知り、そして知らせます。アッラー以外に神はありません。アッラーは唯一です。アッラーは比べるものも、並ぶものもありません」とおっしゃってから、こう続けた。「あなた方に決して嘘を言ってはいないのです。真実を伝えています。唯一であるアッラー以外に神はなく、そのアッラーへの信仰にあなた方を招きます。私は、アッラーがあなた方やすべての人々のために送った預言者です。アッラーに誓って、あなた方は眠るように死に、起きるように復活します。そして、すべて

の行為について裁かれます。善行に対しては褒賞があり、悪行に対しては罰を受けるのです。これらは天国で永遠に留まるか、地獄で永遠に留まるかということです。人々の中で、来世の罰について忠告したのはあなた方が初めてです」

アブー・ターリブはこの話を聞き「親愛なる甥よ。あなたを手伝うことより価値のあることを他には知りません。あなたの忠告を認め、受け入れます。あなたの言葉を心から認めます。今、ここに集まっているのは、祖父アブドゥルムッタリブの子供たちです。全くもって私も彼らのうちの一人です。あなたの希望することに、私は誰よりも先に走っていくでしょう。あなたの周りを囲み、あなたを守るために一瞬の気も緩めないよう約束します。あなたは命じられたことを続けるのです。しかし、以前の宗教を離れることについては、その想いを抑えることはできません」と言った。

アブー・ラハブを除いて、そこにいる親戚や叔父たちは優しく話していた。しかし、アブー・ラハブは「アブドゥルムッタリブの息子たちよ。他人が彼の手をつかんでやめさせる前に、お前たちがやめさせるのだ。もし、今日、彼の言っていることを認めたら、見下され侮辱されることになるだろう。彼を守ろうとしたら、全員が殺されることになるのだ…」と言って脅して回った。アブー・ラハブに対して、預言者様の叔母様が「兄弟よ！兄弟の息子やその宗教を支持しないことは、あなたにとってふさわしいことなのですか？誓って、存命中の学者たちがアブドゥルムッタリブの子孫から、預言者が出るということを知らせているのです。その預言者がこの方なのです」と言った。

アブー・ラハブは、この言葉に対しても罵り続けた。アブー・ターリブはアブー・ラハブに怒って「この臆病者め。誓って我々が生きている間、彼を支え、守っていくのだ」と言った。そして、ムハンマド（アライヒッサラーム）に向って「兄弟の息子よ。人々をアッラーへの信仰に招きたい時になったら教えてください。武器を取り、あなたとともに立ち上がりましょう」と言った。名誉ある預言者様は再び話を続け「アブドゥルムッタリブの息子たちよ。誓って、私があなたたちにもたらすことは、現世と来世のために幸あるものであり、それよりも良く、それよりも幸運なものをアラブの民に持ってくる者はいないのです。私はあなた方に、言葉では簡単に言うことができる一方、あの世の秤では重みを持つ二つの言葉を言うよう求めます。それはアッラー以外に神はないことを認め、私がアッラーの遣わしたし

もべであり預言者であることを認める、というものです。アッラーが、あなた方にこのことを知らせるよう命じました。ここにいる中で、誰が私の宣教を認め、私の道において私を支えてくれるのでしょうか?」とおっしゃった。誰からも言葉がなかった。頭を垂れていた。預言者様はこの話を三度も繰り返した。アリー様はいずれも立ち上がっていた。三回目のとき「預言者様。私は皆より年下ではありますが、私はあなたを支えます」と言った。これを聞いて、預言者様はアリー様の手を取った。他の人々はこのことに驚きながら帰っていった。

アッラーが愛する預言者様は、親族のこの態度に大変悲しんでいた。しかし、あきらめることなく、彼らが地獄から救われるため、そして幸福に導かれるために宣教を続けた。

預言者になって四年目の年、『アル・ヒジュル章』の第九四節が啓示された。その意味は『だからあなたが命じられたことを宣揚しなさい。そして多神教徒から遠ざかれ』というものであった。このアッラーからの命令が下りると、愛すべき預言者様は、マッカの人々に隠すことなく宣教をし始めた。ある日、サファーの丘の頂上に上がり「クライシュの人々よ、ここに集まって私の話を聞くのです!」とおっしゃった。人々が集まると「我が民族よ。私から嘘を聞いたことがありますか?」と尋ねた。全員が「いいえ、聞いたことがありません」と答えた。これを受けて「アッラーは私に預言者という恵みを下されました。私をあなた方のため、預言者として送られたのです」とおっしゃり『言ってやるがいい。『人々よ、わたしはアッラーの使徒として、あなたがた凡てに遣わされた者である。天と地の大権はかれのものである。かれの外に神はなく、かれは生を授け死を与える御方である。…』』という『高壁章』(アル・アアラーフ)の第一五八節を詠まれた。これを聞いていた人々の中にいた叔父のアブー・ラハブは怒って「兄弟の息子は頭がおかしいのだ! 我々の像を崇めず、我々の宗教から離れた者の話を聞くのではない」と、不信仰に固執して叫んだ。そこにいる人々は散っていった。誰ひとり信仰を得ることはなかった。預言者様が正直で、品行方正であるのを知っていたにもかかわらず、顔を背け敵となったのだった。

またある日、アッラーの『だからあなたが命じられたことを宣揚しなさい』という命令に従って、再びサファーの丘の頂上に上がった。大きく力強い声で「人々よ! ここに来たれ。集まるのです。あなた方に大事な知らせがあります」と呼びかけた。この呼びかけに応じて人々は急いで集まってきた。驚きや当惑をもって待ち始めた。来られなかった者は人をやり、なぜ集まっているのか知ろうとした。集まってきた人々は「信頼のおける者、ムハンマド(アライヒッサラーム)よ。私たちをなぜここに集めたのです? 何を知らせようとしているのですか?」と聞き始めた。彼は「クライシュ族よ、」と言って演説を始めた。全員が興味深く聞いていた。「私とあなた方の状況は、敵を見て家族に知らせようと走り、敵の被害を心配しながら…人々よ、敵が周りを囲んでいます。朝になりました。ただちに交戦の準備をするのです…と叫んでいるようなものです。クライシュ族よ。私があなた方に、この丘の後ろに敵の軍隊がいて攻撃をしようとしていると言ったら、私を信じるでしょうか?」とおっしゃった。彼らは「はい、信じます。なぜなら、今まで正直さから外れたことをあなたから見たことがないからです。あなたが嘘をついたことは見たことがありません!…」と言った。

そこで、クライシュ族の者たちの名前を挙げて「ハーシム家よ! アブディマナーフ家よ、アブドゥルムッタリブ家よ! (と呼びかけて)私はあなた方に、確実に来たる激しい罰を知らせているのです。アッラーは、私が最も近しい親族に、来世の罰を恐れさせるようにすることを命じたのです。あなた方が『ラー・イラーハ・イッラッラー・ワハデフーラ・シェリーケレフ(アッラーは唯一で、アッラー以外に神はない、の意)』と述べ、信仰するよう宣教しているのです。私はアッラーのしもべであり、そして預言者であります。もし信仰したなら、天国へ行くでしょう。あなた方が『ラー・イラーハ・イッラッラー』と言わない限り、私はあなた方に対して、この世での利得も、あの世での利益も得させることはできないのです」とおっしゃった。すると、聞いていた人々の中にいたアブー・ラハブが「このようなことのために我々を集めたというのか?」と言って地面から石を取り、愛すべき預言者様めがけて投げつけた。他の人々からは、このような異議は出なかった。ただ、互いに話をしながら散っていった。

太陽を右手にもらったとしても!…

愛すべき預言者様は、この集会の後から、どこかで人や集まりを見るたび、彼らにイスラームの話をするようになった。真の解放とは、欲望にともなう虐待や不正、あらゆる悪事から離れることによって、そして、アッラーを信仰することによって実現するということを知らせたのであった。身体から来る欲望や性欲にのっとられた者や、弱者を圧迫する狂暴で尋常でない者は、このような言葉に反対した。自分たちが行っている悪事がすべて止んでいくのを見て、ムハンマド（アライヒッサラーム）の知らせを否定したのだった。そして、預言者様や彼を信じる者たちを敵視した。

不信仰者はまず侮辱を行った。それから、圧力を加え、拷問を増やしていくことになった。信者たちを押さえつけ、イスラームの教えを消そう考えた。そのような者の主な人物には、アブー・ジャフル、ウトゥバ、シャイバ、アブー・ラハブ、ウクバ・ビン・アブー・ムアイト、アス・ビン・ワーイル、アスアド・ビン・ムッタリブ、アスアド・ビン・アブディヤグワース、ワリード・ビン・ムギーラなどがいた。

ある日、ウトゥバ、シャイバ、そしてアブー・ジャフルが、アブー・ターリブに「あなたは私たちの中にあって年長の者です。私たちはあなたをいつも尊重し、敬意を示してきました。さて、今、あなたの兄弟の息子が新しく宗教を作りました。私たちの像を中傷し、私たちを不信仰であると説いています。彼に忠告し、このことを諦めさせるのです。もし諦めないのなら、彼をどうやって止めさせるか私たちは知っているのですよ…」と言った。アブー・ターリブは、彼らを落ち着かせて帰した。そして、預言者様が悲しむであろうと、この出来事を隠しておくことにした。しばらくすると、不信仰者たちは集まって、アブー・ターリブのもとへとやって来た。「以前、あなたを訪ね、状況を説明しました。我々の話に好意を持ってもらえなかったようです。我々の像をまだ中傷し続けています。もはや我慢なりません。あなた方二人に対し、最後の血の一滴まで闘います。マッカにて、彼か私たちがのどちらかが死ぬことになるのです」と言うのだった。アブー・ターリブは彼らをなだめようとしたが、強情に主張するばかりだった。

アブー・ターリブは、預言者様の気分を害したくはなかったが、部族内でのいかなる不和も出したくないとも考えていた。そこで、預言者様のもとに行き「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ。部族のすべてが、あなたを敵とすることで一致しています。そして私に不満を申立てに来ました。親族の間で不和が生じるのは望ましくないことです。彼らは、自分たちのことを、不信仰者と呼んだり名付けたり、誤った道にいると言って、悪く言わないでほしいとのことなのです」と言った。これに対して預言者様は「叔父よ。分かっていただきたいのです。たとえ、太陽を右手に、月を左手にもらったとしても（何をもらったとしても）私は決して、この宗教や、それを人々に伝え宣教することをやめることはありません。全世界にこのアッラーの宗教を広めて私の責務が果たされるか、あるいは、この道で命を落とすかのどちらかなのです」とおっしゃって立ち上がった。神聖な目は涙にあふれていた。

預言者様が傷ついたことを見たアブー・ターリブは、言ったことを後悔して彼を抱き締め「兄弟の息子よ！ あなたは道を歩み続け、好きなようにするのです。私は生きている間、あなたを庇護し、守ります」と言った。

不信仰者で部族の名士の十人は、アブー・ターリブが預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）を保護することが分かると、ウマーレ・ビン・ワリードとともに、アブー・ターリブのもとへと向かった。そして「アブー・ターリブよ！ あなたも知っているとおり、このウマーレはマッカの若者の中で、最も美男子で、最も力があり、最も品格の高い者です。そして、詩人でもあります。彼をあなたに差し上げましょう。自分の仕事のために使うのです。ウマーレの代わりに、私たちにムハンマド（アライヒッサラーム）を差し出すのだ。殺しましょう。あなたに、代わりの人をあげるのです！ これ以上、何を欲しいというのだ！」と言って、到底受け入れられない提案をした。アブー・ターリブは、この言葉に非常に憤慨し「あなた方が私に自分の子供を渡したら、私は彼らを殺します。その後で、甥を差し上げましょう」と言うと、不信仰者たちはやっと彼の想いを理解し「我々の子供たちは、彼の行うようなことはしないのです…」と言い返した。アブー・ターリブは「誓って、甥はあなた方の子供すべてよりも恵まれているのです。あなた方は、自分たちの子供を私に与えて彼を育てさせる代わりに、私の最愛の人を取り上げて殺すというのか!… 雌のラ

クダでさえ、自分の子供の他は慈しむことはないし、守ることもないのです。このような話は理性的でもないし、筋も通っていません。もはや、これは常軌を逸しています。誰であっても、最愛の人、ムハンマド（アライヒッサラーム）の敵であるのなら、私のことも敵に回すことになります。このことを分かった上で、できるものならやってみるがいい！」と言った。不信仰者たちは、怒ってその場を立ち去った。アブー・ターリブは、ただちにハーシム家やアブドゥルムッタリブ家の者たちを集めた。彼らに事情を説明し、愛する預言者様を助けるよう説得した。彼らは、預言者様を殺そうとする手を折り、不信仰者たちに対抗することで一致した。ただし、アブー・ラハブはこの場に加わってはいなかった。アブー・ターリブは「勇者たちよ！明日刀を身につけ、私の後ろから来るのだ」と言った。翌日、アブー・ターリブは預言者様の家に行った。皆が一緒にカアバへと向って歩き始めた。ハーシム家の勇者たちが後に付いていた。カアバに着くと不信仰者たちの前に立った。アブー・ターリブは、不信仰者たちに「クライシュ族よ！あなた方が、兄弟の息子を殺すことに決めたと聞きました。この後ろにいる若者たちは手に刀を持ち、待ち切れずに私の合図を待っているということが分かっているのですか？誓って、ムハンマド（アライヒッサラーム）を殺そうとするのなら、あなた方を誰一人生きたままにはしておかない！…」と言った後、預言者様を讃える詩を詠み始めた。アブー・ジャフルをはじめ、そこにいた不信仰者たちは散っていった。

苦難、拷問、そして虐待

クライシュ族の名士の不信仰者たちは、預言者様が一人でいるところを見ると、攻撃したり、侮辱したり、手出しをしようとしていた。そして、教友たちには、拷問を続けていた。ある日、不信仰者のクライシュ族の名士たちが、カアバのところで座っていた。そして、預言者様について「彼に我慢したほどに、他に我慢したことはありません。我々のことをだらしない人だと言ったり、我々の神を侮辱して悪く言ったり、我々の宗教を辱めたり、私たちを分裂させ

たりしたのです。それでも、我慢して何も言っていないのです」と話していた。そのとき、預言者様がカアバを訪れた。ハジャル・アル・アスワド（訳注…天国から降りた黒石）に口づけをして、カアバを周回し始めた。彼らの隣を過ぎたとき、不信仰者たちは、預言者様に侮辱に満ちた言葉を言い始めた。預言者様はこれに大変心を痛めたが、何も言わず周回を続けた。三度目に通り過ぎるときに止まって「クライシュ族の者たちよ！聞くのです！私の命を預かるアッラーに誓って言いましょう。あなた方が途方に暮れるだろうということが、私に知らされました…」とおっしゃると、そこにいる不信仰者たちはどうすべきか迷い、固まってしまっていた。たった一つの言葉でさえ発することができなかった。しかし、アブー・ジャフルが、預言者様の隣に行き「アブー・カースィムよ！あなたは他人ではない。私たちの下品な行為を気にせず、礼拝を続けてください。あなたは私たちと関わるほど、無知な人ではないのです」となだめて懇願した。そこで、ムハンマド（アライヒッサラーム）はそこから離れていった。

翌日、不信仰者たちは、同じところに集まっていた。そして、預言者様を中傷し始めた。そのとき、預言者様がそこにいらっしゃった。不信仰者たちは、すぐにアッラーの最愛の者の上に襲いかかった。その中にあって最も不幸な者である、ウクバ・ビン・ムアイトは、愛すべき預言者様の神聖な襟首をつかんだ。神聖な首を息ができないほど締めたのだった。そのとき、そこに来ていた、アブー・バクル様が「私の神はアッラーである、という人を殺すのですか？あなた方に、万物を支配するアッラーから、クルアーンをもたらすのです…」と叫びながら、預言者様を守るため、間に飛び込んでいった。不信仰者たちは、預言者様を放してアブー・バクル・スィッディークに襲いかかった。神聖な頭を殴ったり、蹴ったりした。ウトゥバ・ビン・ラビーアという不幸な者は、アブー・バクル様の神聖な顔を靴で殴って血だらけにして、一見して誰だか分からないようになるほどの怪我を負わせた。タイム家の人々がその場に来て引き離さなかったら、殺すまで殴っていたところだった。疲れ切り、困り果てたアブー・バクル様を、同じ部族のタイム家の人々がシーツでくるんで家まで連れて帰った。そして、すぐにカアバに戻り「もし、アブー・バクルが死んでしまったら、誓って我々もウトゥバを殺す！」と言って、再びアブー・バクル様のところへと戻っていった。

アブー・バクル様は長い間意識を失っていた。父親やタイム家の人々は意識を戻そうと努めた。夕方になってやっと意識が戻った。目を開けるやいなや、つぶれた声で「預言者様は何をなさっていますか？ 彼はどんな状況ですか？ 彼は中傷され、侮辱されていたのです」と何とかして言った。他の人々は母親のウンム・ル・ハイルに「聞いてみてください。何か食べたり、飲んだりはできるようになりましたか？」と言った。だが、アブー・バクル・スィッディークの力は抜けていた。食べたり飲んだりはしたくなかった。家に人がいなくなって、母親が「何か食べますか、何か飲みますか？」と尋ねても、彼は目を開け「預言者様はどんな状況ですか、何をしていますか？」と聞くのだった。母親は「誓って、私は友人について何も知らないのです！」と返事をした。アブー・バクル様は「ハッターブの娘のウンム・ジャミルのところに行って、預言者様のことを彼女から聞いてください！」と言った。

ウンム・ジャミルはウマル様の妹で、ムスリムとなっていた。ウンム・ル・ハイルは立ち上がり、ウンム・ジャミルのところへと向かった。そして「息子のアブー・バクルが、あなたにムハンマド（アライヒッサラーム）のことを聞いています。どういう状態なのですか？」と尋ねた。ウンム・ジャミルは「私は、ムハンマド（アライヒッサラーム）についても、アブー・バクル様についても何も知りません！ よろしければ、一緒に行きましょうか？」と言った。ウンム・ル・ハイルは「はい」と言ってそこを出て、アブー・バクル様のところへと戻った。ウンム・ジャミルはアブー・バクル・スィッディークがこんなにも途方に暮れた状態で傷だらけになっているのを見ると思わず叫んだ。「あなたにこんなことをした部族はどう考えても乱暴で異常です。彼らの行った悪事に罰が下るようアッラーに願います」と言った。アブー・バクル様はウンム・ジャミルに「預言者様は何をなさっていますか、どんな状態ですか？」と尋ねた。ウンム・ジャミルが彼に「ここにはあなたのお母様がいらっしゃいます。話したら聞かれてしまうかもしれません」と言うと、アブー・バクル様は「彼女からあなたに害が及ぶことはありません。秘密を広げることはありません」と答えた。そこでウンム・ジャミルは「生きています。良い状態です」と答えた。次に「今、彼はどこにいますか？」と聞いた。ウンム・ジャミルは「アルカムの家にいます」と答えた。アブー・バクル様は「誓って、預言者様を見るまでは、決して食べたり飲んだりはしません！」と言うのだったが、母親は「あなたは今、しばらく待つのです。他の人が眠りについてからです！」と諭した。人々が眠りにつき、周りに人気がなくなると、アブー・バクル様は母とウンム・ジャミルに支えてもらいながら、ゆっくりと預言者様のもとに向かった。二人は固く抱き合った。そして、ムスリムの兄弟たちと抱擁した。しかし、アブー・バクル様のこの状態は預言者様を悲しませた。アブー・バクル様は「預言者様よ。あなたのためなら両親さえ犠牲にします！ あの乱暴な者は、単に私の顔を地面に引きずって、誰だか分からなくなるほどにしたというだけのことなのです！ 私の隣にいるのは、私を生んでくれたサルマです。彼女に祈念をお願いします。アッラーがあなたに免じて彼女を地獄から守ってくださいますように」と願った。愛すべき預言者様は、サルマがムスリムになるようアッラーに願った。預言者様の願いは受け入れられた。ウンム・ル・ハイルも正しい道に恵まれてムスリムとなり、最初のムスリムの一人になるという名誉に与ったのである。

預言者様の家は、アブー・ラハブとウクバ・ビン・ムアイトという二人の狂暴な不信仰者の家の間にあった。彼らは、機会さえあれば、常に愛すべき預言者様に苦難を与えていた。また、夜になると動物の内臓を預言者様の家の前に捨てたりもしていた。叔父のアブー・ラハブはそれだけで満足せず、近所に住むアディイの家から、預言者様に石を投げて嫌がらせをしていた。また、妻のウンム・ジャミルもこれに劣らず、針葉樹の枝を集めて預言者様の神聖な足に突き刺そうと、歩く道に撒き散らしていた。アブー・ラハブがある日、持ってきた汚物を預言者様の家の前に捨てたとき、ハムザ様がそれを見た。すぐに注意して、兄弟であるアブー・ラハブをつかんで、持っていた汚物を彼の頭にかけたのだった。

アブー・ラハブとその妻のこういった嫌がらせに対し『アブー・ラハブの両手は滅び、かれも滅びてしまえ。…』と始まる『棕櫚章（アル・マサド）』が啓示されることとなった。

アブー・ラハブの妻、ウンム・ジャミルは、自分たちについて章が啓示されたことを聞き、預言者様を探し始めた。カアバにいることを知ると、手に大きな石を持ってそこへ向かった。アブー・バクル様はそのとき、敬意をもって預

言者様の話を聞いていた。ウンム・ジャミルが手に石を持っているのを見かけ「預言者様よ！ウンム・ジャミルがやって来ます。大変に悪意のある女性なので、あなたに危害を加えるのではないかと心配しています。隠れて被害にあわないようにしましょう」と言った。しかし、預言者様は「彼女が私を見ることはできません」とおっしゃった。ウンム・ジャミルはアブー・バクル様の前に立ち「アブー・バクルよ！直ちに言うのです。あなたの友はどこにいる！私や夫を皮肉り、中傷していたようです。彼が詩人だというのなら、私や夫も詩人なのです。ほら、私も彼を皮肉ります。私たちは彼に反対し、預言者であることなど認めません。そして、彼の宗教も気に入りません。誓って、もし彼を見かけたなら、この石であの頭を叩きつけたことでしょうに…」と言って罵倒した。アブー・バクル様が「私の主は詩人ではありません。あれは中傷詩ではないのです」とおっしゃると、ウンム・ジャミルは帰っていった。アブー・バクル様が預言者様に向って「預言者様よ！彼女にはあなたが見えなかったのですか？」と尋ねると「私が見えませんでした。アッラーが、彼女の眼には私が見えないようにさせたのです」とおっしゃったのだった。

預言者様の神聖な娘であるウンム・クルスーム様は、アブー・ラハブの息子のウテイベと、そして、同じくルカイヤ様はもう一人の息子のウトゥバと婚約をしていたが、いずれも結婚はしていなかった。『棕櫚章』が啓示されると、地獄に行くことが決まったアブー・ラハブやその妻、あるいはクライシュ族の名士たちが、ウトゥバとウテイベに「彼の娘たちをもらう約束をしたことで、あなた方は彼の荷を軽くさせました。娘たちの婚約を解消し、苦労をかけさせるのです。あなた方にクライシュ族から好きな娘を差し上げましょう」と提案した。低俗なウテイベはさらに行動を起こし、預言者様の前に来て「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！私はあなたやあなたの宗教を認めません。あなたの娘との婚約を解消しました。もう今後は、あなたが私のことを尊重したり、私もあなたを尊重したりしなくてすみます！あなたは私のところに来ないし、私もあなたのところに行きません！…」と罵った。そして、愛すべき預言者様に飛びかかり、襟首をつかんだ。服を破り、中傷した。これに対し預言者様は「アッラーよ。この者に野獣を付きまとわせたまえ」と願った。不幸なウテイベが父親のところに行って起こった出来事を話すと、アブー・ラハブは「ムハンマド（アライヒッサラーム）が息子に対して行った願いが心配だ」と言うのだった。

数日後、アブー・ラハブは息子のウテイベをシャームへ交易に行かせた。キャラバンはザルカという場所で野営した。すると一頭のライオンが周りをうろつき始めた。ウテイベはそれを見ると「ああ！誓って、ムハンマド（アライヒッサラーム）の願いが現実になったのだ。このライオンは私を食いちぎるだろう！彼が遠くマッカにいても、私を殺すのだ」と言った。ライオンはしばらくするといなくなった。ウテイベは少し高いところで寝るようにした。夜中、再びライオンが現れた。キャラバンの人々のにおいを一人ずつかいで回り、ウテイベのところへとやって来た。すると、跳びかかって腹を引き裂き、頭をつかんで痛ましいほどに噛み付いた。ウテイベは死に際「私はあなた方に、ムハンマド（アライヒッサラーム）が人々の中で最も正直な人だと言わなかったか？」と叫び声を上げて命を落とした。ライオンによって息子が殺されたと聞いたアブー・ラハブは「私はあなた方に、ムハンマド（アライヒッサラーム）が息子に対して行った願いを心配していると言わなかったか？」と言って泣いたのだった。

愛すべき預言者様は、人々を永遠の幸福へと呼びかけ、アッラーの存在や、アッラーが唯一であることを宣教し、人々が地獄に堕ちないように努めていた。しかし、かえって不信仰者たちは「祖先の宗教はこれである」と言って偶像崇拝を続けていた。預言者様は彼らが人間として生き、品位や名誉を持って価値のないものから逃れ、品格の高い地位へと引き上げようと宣教していた。しかし、彼らは固執していた。アブー・ラハブは侮辱や苦難を先頭きって加えていた。預言者様を常に追いかけ、人々が彼のことを聞くのをやめさせようと頭を絞り、疑いを起させようと躍起になっていた。集会の場や定期市では、預言者様が「人々よ！ラー・イラーハ・イッラッラー、と言えば解放されるのです」とおっしゃると、彼はすぐ後ろから追いかけて「人々よ！これを話しているのは私の甥です。決して彼の言葉を信じてはなりません。彼に近づいてはいけません！」と言っていた。

ムハンマド（アライヒッサラーム）はある日、カアバで礼拝を行っていた。クライシュ族の名士であるアブー・ジャフル、シャイバ・ビン・ラビーア、ウトゥバ・ビン・ラビーア、ウクバ・ビン・アブー・ムアイトのなどの七人の不

信仰者の一団が来て、預言者様の近くに座った。そのそばには、前日犠牲にされたラクダの胃袋や、その残り物があった。低俗の最たるアブー・ジャフルは、隣にいる人々に「誰かこのラクダの胃袋を持って、ムハンマド（アライヒッサラーム）が跪拝するときに肩の間に置く者はいるか？」と言ったのだった。そこにいた、最も乱暴で最も残酷で、最も無慈悲な、そして最も不幸な者であるウクバ・ビン・アブー・ムアイトが「私がしよう」と言ってすぐに立ち上がった。胃袋をその中に残っていたものごと、預言者様が跪拝するときにその神聖な肩に乗せたのだった。これを見ていた不信仰者たちは、げらげら笑い始めた。預言者様は跪拝を長く行い、頭を上げなかった。そのとき、教友のアブドゥッラー・ビン・マスードがこの状況を見た。彼はこの出来事をこのように語っている。「預言者様のその状態を見ると、血が頭に上りました。しかし、私を不信仰者たちの手から守ってくれる部族や民族はいませんでした。私は一人で、力が足りませんでした。そのときは、話すことさえできませんでした。立ちつくし、大変な悲しみをもって預言者様を見ていました。そのとき、もし不信仰者たちから自分を守る力があれば、また、守ってくれる者がいれば、乗せられたものを預言者様の神聖な肩から取り除いていました。私がそうこうしている間に、預言者様の娘のファーティマ様に知らせが届きました。当時、まだファーティマ様は幼かった頃でした。走りながらやって来て、お父様の上にあるものを取って捨てました。そして、これを行った者たちのことを呪詛しました。重い言葉を言いました。預言者様は何事もなかったように礼拝を終わらせ、三度『アッラーよ！クライシュ族のこの一団をあなたにお任せします！アッラーよ！アブー・ジャフル・アムル・ビン・ヒシャムのことをあなたにお任せします！アッラーよ！ウクバ・ビン・ラビーアのことをあなたにお任せします！アッラーよ！シャイバ・ビン・ラビーアのことをあなたにお任せします！アッラーよ！ウクバ・ビン・ムアイトのことをあなたにお任せします！アッラーよ！ウマイヤ・ビン・ハラフのことをあなたにお任せします！アッラーよ！ワリード・ビン・ウトゥバのことをあなたにお任せします！アッラーよ！ウマーレ・ビン・ワリードのことをあなたにお任せします！』とおっしゃいました。この願いを聞いた不信仰者たちは、笑うのをやめました。恐れ始めたのでした。なぜなら、カアバで行われた願いは受け入れられることが信じられていたからでした。預言者様は、アブー・ジャフルに『アッラーに誓って、あなたがこういった行いをやめるか、アッラーがあなたに災厄をもたらすかのどちらかです』とおっしゃいました。そして、アッラーに誓って言いますが、預言者様が名前をあげた者は一人残らずバドルの戦いの際に死に、地面に転がって暑さのせいで臭気を放つ野生の死骸のように、彼らの遺体がバドルの窪みに埋められるのを見たのでした」

ある日、アブー・ジャフルはカアバで、クライシュ族の不信仰者たちに「クライシュ族よ！見てのとおり、ムハンマド（アライヒッサラーム）は我々の宗教を中傷し、像やそれらを崇めていた祖先に対して口を出し、私たちのことを頭のない者であるかのように見なしているのです。あなた方の前で誓って言いますが、明日、簡単には持ち上げられない石を、彼がここに礼拝に来て跪拝したとき、頭に激しくぶつけよう。そのとき、あなた方は私のことをアブドゥルムッタリブ家から守っても守らなくても構いません。私が彼を殺したら、彼の親戚が私に何をしようと構わないのです…」と言った。そこにいた不信仰者たちは「誓って私たちはあなたを守り、そして誰にも引き渡しません。とにかく、あなたは彼を殺すのです！」と言ってけしかけた。

翌朝、アブー・ジャフルは、手に大きな石を持ってカアバに向かった。不信仰者たちのもとで待ち始めた。愛すべき預言者様はいつものとおりカアバへ来て、礼拝をし始めた。アブー・ジャフルは立ち上がり、持っていた大きな石をぶつけようと、預言者様の方に向って歩き始めた。不信仰者たち全員が、息を飲んでこの出来事を見守っていた。アブー・ジャフルは預言者様の隣に近づくと突然震え始めた。大きな石は手から落ち、顔色は真っ青になった。大変恐れた様子で、後ずさりした。不信仰者たちは驚いてアブー・ジャフルのもとに行った。「アムル・ビン・ヒシャムよ！何が起きたのです？」と聞くと、アブー・ジャフルは「ちょうど彼を殺そうと石を上げると、目の前に怒ったラクダが現れたのです。誓って、あんな高い足や鋭い歯、恰幅のいいラクダは見たことも聞いたこともありません。もし、もう少し近づいていたら、必ずや私を殺していたことだろう」と言った。

またある日、アブー・ジャフルは不信仰者たちを集め「アブドゥッラーの孤児がここで礼拝をし、顔を土につける

のですか？」と聞いた。すると彼らは「はい」と返事をした。この返事を待っていたアブー・ジャフルは「もし彼がそうしているのを見かけたら、頭を足でつぶしてやろう」と言った。ある日、預言者様はカアバで礼拝をしていた。アブー・ジャフルは友人たちとそこに座っていた。その場所から立ち上がると、預言者様の方に向って歩き出した。かなり近づいた。しかし、突然手で顔をふきながら逃げ始めた。不信仰者たちは隣に行って「どうしたのです、どういうことになったのですか？」と聞いた。アブー・ジャフルは「彼との間に一つの火の井戸が現れました。何者かが私に攻撃しようとしているのを見て下がったのです」と返事をした。

　ワリード・ビン・ムギーラ、アブー・ジャフル（アムル・ビン・ヒシャム）、アスワド・ビン・ムッタリブ、ウマイヤ・ビン・ハラフ、アスワド・ビン・アブディヤグワース、アス・ビン・ワーイル、ハーリス・ビン・カーイスといった不信仰者の名士たちは、預言者様を見るたびに「彼は自分を預言者と考え、隣にジブリールが来ると幻想している」と言ってからかっていた。このため、預言者様が大変悲しんでいたある日、大天使ジブリールが現れ、いくつかの節を啓示した。それらは次のような意味のものであった。『あなた以前の使徒たちも、確かに嘲笑されていた。だが嘲笑したものは、その嘲笑していたこと（懲罰）に取り囲まれるであろう』（家畜章（アル・アンアーム）第十節）

『本当にわれは、嘲笑する者に対し、あなたを十分に守ってやる。かれらは、アッラーに外の神を配するが、間もなく知るであろう。われはかれらの口にすることで、あなたの胸が締めつけられるのを知っている』（アル・ヒジュル章、第九五～九七節）

　万物の王である預言者様が、ある日、カアバで周回していると、大天使ジブリールが来て「私は彼らを罰するために命令を受けました」と伝えた。しばらくすると、ワリード・ビン・ムギーラが前を通りかかった。ジブリールは「今通ったのはどういう者ですか？」と尋ねた。預言者様は「彼はアッラーの最も悪い人間の一人です」とおっしゃった。するとジブリールはワリードの脚を指し示し、罰を与えた。しばらくすると、アス・ビン・ワーイルが通った。彼のことも聞き、同じ返事を受けると、足を示し「彼も身の程を知るように」と言った。アスワド・ビン・ムッタリブが通ると目を示し、アブディヤグワースを見ると頭を示した。ハーリス・ビン・カーイスが通ると腹を示し「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！　アッラーが彼らの悪からあなたを解放しました。近いうちに彼らは一人ひとり不運に見舞われるでしょう」と言った。

　やがて、アス・ビン・ワーイルの足には棘が刺さった。どんな薬を塗っても治療法が見つからなかった。結局、足がラクダの首のように膨れて「ムハンマド（アライヒッサラーム）のアッラーが私を殺すのだ！」と叫び声をあげながら命を落とした。アスワド・ビン・ムッタリブの目は見えなくなった。そして、大天使ジブリールが頭を木にぶつけさせて抹殺した。アスワド・ビン・アブディヤグワースは、バードゥ・セムーンというところにいたとき、顔や体全体が真っ黒くなった。家に戻ったときには見知らぬ人と思われ、家から追い出された。この悲しみで頭を家の扉にぶつけて死んでいった。ハーリス・ビン・カーイスは塩漬けの魚を食べた。すると熱が上がるまで上がった。どんなに水を飲んでものどの渇きが治まらなかった。結局、飲みすぎて死んだ。ワリード・ビン・ムギーラの脛には鉄のものが刺さった。傷が治らず、出血がひどく「ムハンマド（アライヒッサラーム）のアッラーが私を殺すのだ」と叫びながら死んだ。このように一人ひとり、自分たちの行ってきたことの罰を受けたのだった。しかも、不信仰者たちは永遠に地獄にいることが、クルアーンのいくつかの節で知らされているのである。

　愛すべき預言者様はある日、アブー・アスに出会った。彼のそばから離れたとき、ハケムが預言者様の後ろから口や顔や体を動かしてからかった。だが、預言者様はハケムのしていたことを、預言者が持つ特性によって分かっていたのだった。預言者様がそのままになっているようにと祈ると、ハケムの体は震え始め、一生その震えが残ることとなった。

教友たちへの拷問

不信仰者たちは、預言者様だけに苦難を与えたわけではなかった。彼の栄光ある教友たちにも拷問を行った。特に、貧乏で身寄りのない人を選び、出来るかどうか考えることすらできない虐待を、恐れもなく行っていた。そのような拷問を受けていた一人がビラール・ハベシであった。ウマイヤ・ビン・ハラフという名の不信仰者の奴隷であったビラール様は、アブー・バクル・スィッディーク様によって、ムスリムとなった。ウマイヤは、十二の奴隷の中で最もビラールを好んでいたため、像の番人をさせていた。しかし、ビラール様がムスリムとなると、部屋のすべての像をうつ伏せにして跪拝の形にさせた。この知らせがウマイヤのもとに届くと、大変な恐怖に陥った。呼び出して「お前はムスリムになって、ムハンマド（アライヒッサラーム）の神に跪拝しているそうだな。本当か?」と聞いた。ビラール様は「はい。偉大で高貴なるアッラーに跪拝します」と答えた。ウマイヤはこの好まない返事を受けると、直ちに苦難や虐待を与え始めた。昼には太陽がちょうど頭上にあるときに彼の服を剥ぎ、暑さに熱せられた石を身体に置いて火傷を負わせた。そして、火のような熱い石を背中や腹に置きながら「イスラーム教から戻るのだ!…ラートやウッザーの像を信じるのだ」と言うのだった。ビラール様はそれに対し「アッラーは唯一です! アッラーは唯一です!」と言いながら、信仰を守り通した。

ウマイヤ・ビン・ハラフは、彼の忍耐を見れば見るほど猛り狂い、棘の上を引きずって身体を傷つけるなどの拷問を行っていた。ビラール様は、身体から洪水のように流れる血を気にも留めず「アッラーよ! あなたからのものは何であれ満足です。アッラーよ! あなたからのものは何であれ満足です」と言って信仰を守っていた。

ビラール様は、このときのことについてこう語っている。「あの性悪のウマイヤは太陽が熱く照っているときに私を縛り、夜は拷問を行いました。暑い日でした。いつもの通り、また拷問を始めていました。イスラームから戻らせようと『像を拝め! ムハンマド（アライヒッサラーム）のアッラーを否定するのだ、否定するのだ、否定するのだ!』と言う度、私は『アッラーは唯一です! アッラーは唯一です!』と言い返しました。彼は恨みを晴らそうと、その日、とても大きな岩を胸の上に置きました。私はそのとき気を失いました。気が付くと、上にあった岩はどかされ、太陽は雲の後ろに隠れていたのが見えました。アッラーに感謝しました。そして自分に向かって『ビラールよ! アッラーからのものは何であれ素晴らしく、好ましいのだ』と言いました」

ウマイヤ・ビン・ハラフはまた、ある日、ビラール・ハベシを拷問しようと外に出した。服を剥いでただ下着だけにさせ、焼けるほどに熱い砂の上に寝かして身体の上に石を積み重ねていった。不信仰者たちを集めて重い拷問を行い「その宗教から戻らなければ、お前を殺す」と言っていた。ビラール・ハベシは、この耐え難い拷問の中でも「アッラーは唯一です! アッラーは唯一です!」と言っていた。そのとき、愛すべき預言者様がそこを通りかかった。ビラール・ハベシ様のこの状況を見て大変悲しみ「アッラーの名前を唱えるあなたは助かります」とおっしゃった。

預言者様が家に戻ってしばらくすると、そこへアブー・バクル様がやって来た。ビラール・ハベシの受けていた拷問のことをアブー・バクル・スッドゥークに語り「大変悲しんでいます」とおっしゃった。アブー・バクル様はすぐにその場へ行って、不信仰者たちに「ビラールにこのようなことをして、あなた方が得ることは何かあるのですか? 彼を私に売るのです」と言った。「世界中の金を貰っても売ることはしない。だが、あなたの奴隷のアーミルとなら交換しよう」と言った。アブー・バクル様の奴隷のアーミルは、彼の商売の仕事を手伝い、たくさんの利益を出していた。彼は個人財産以外に一万の金があった。アブー・バクル様の手伝いであり、すべての仕事を進めていた。しかし、不信仰者であり、不信仰であることに固執していた。アブー・バクル様は「アーミルの全財産と持っている金とともにビラールの代わりとして、彼をあなた方にあげよう」と言った。ウマイヤ・ビン・ハラフと他の不信仰者たちは大変喜び「アブー・バクルにしてやった」と言っていた。アブー・バクル様はただちに、ビラール・ハベシの上にある重い石をどけて立ち上がらせた。ビラール・ハベシは、あまりの拷問に相当衰弱していた。手を取って、まっすぐに愛すべき預言者様の前に連れて行った。そして「預言者様よ! ビラールを今日、アッラーのご満悦を得るため解放し

ます」と言った。預言者様は大変喜んだ。アブー・バクル様のために多くの祈念を行った。そのとき、大天使ジブリールが来て、アブー・バクルが地獄から離れていると吉報をもたらす『夜章（アッ・ライル）』の第十七、十八節を啓示した。その節は『（アブー・バクルのように）だが（主のために）忠誠の限りを尽した者は、それ（地獄）から救われ、その富を施し、自分を清める』という意味である。

ハッバーブ・ビン・エレット様も、信仰を戻すようにと拷問を受けた一人である。ハッバーブ様も身寄りがなく、ウンム・アンマールという名のある女の不信仰者の奴隷であった。彼を保護する親族もなかったため、不信仰者たちは集まって、彼の神聖な身体を裸にして棘を刺していた。ときどき、鉄でできた服を着させて太陽の下に置かれることもあった。彼らは太陽や火で熱くされた石を裸の身体に押しつけながら「宗教から戻るのだ！ ラートとウッザーを崇めるのだ！」と言っていた。ハッバーブは信仰を固持し「ラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマダン・ラスールッラー」と言いながら、彼らに抵抗した。

不信仰者たちはある日集まって、ある広場で火を起こした。そしてハッバーブ様を縛って連れてきた。服を脱がし、火の上に寝かせた。宗教を戻すか火で焼くかを迫った。火の中に仰向けで寝かされたハッバーブ様は「アッラーよ！ 私の状態をあなたはご存知です。心にある信仰を不動とし、大いなる忍耐をお与えください」と願った。不信仰者たちの一人が立ち上がり、ハッバーブ様の胸を足で踏んだ。しかし彼らはアッラーが信仰者を守るということを知りようがなかったのだった。

何年か後、この事件のことをハッバーブに聞くと、背中を開け、火傷の痕を見せながら「彼らは私のために火を起こしました。そして、引きずりながら私をその中に放り込みました。しかし、私の身体でその火は消えてしまいました」と言っている。

ハッバーブ様に対して、外でこのような拷問が行われていたとき、その主人のウンム・アンマールは彼を宗教から戻すため、火で鉄を熱して頭に押し付け、焼きごてをしていた。彼は宗教のためこのような痛みに耐え、彼らの意思

に従わず、信仰を曲げなかった。ある日、ハッバーブ様は愛すべき預言者様の前に上がり「預言者様よ！ 不信仰者たちは外で私を見かけると、火の中に入れるのです。家では主人のウンム・アンマールが熱した鉄で頭に焼きごてを押しつけます。あなたの祈念をお願いしたいのです！」と言った。そして、背中や頭にある火傷を見せた。預言者様はこの状態に大変心を痛めた。彼が宗教から戻らないようにと、そして、受けた苦痛や行われた拷問に対して心を痛めながら「アッラーよ、ハッバーブを助けたまえ」と願った。アッラーは預言者様の願いをすぐに受け入れ、ウンム・アンマールの頭に激しい頭痛を見舞わせた。ウンム・アンマールは頭痛で朝まで呻くこととなった。その手当には、火で熱した鉄で灸をすえるようにと言われた。ハッバーブを呼び、鉄の棒を火で熱し、自分の頭に灸をすえるよう命じた…ハッバーブ様も鉄で彼女の頭に灸をすえることになったのである…

イスラームの初期の頃、不信仰者たちはハッバーブ・ビン・エレットのことについて、あまり気には留めていなかった。しかし、日が経つにつれ、信仰者の数が増えてきた。結局、このことについて真面目に扱わなければならざるを得なくなってきた。そして、ハッバーブ様に対する拷問を増やすことにした。数多く殴り、傷をつけたりして拷問を重ねた…

このようなあらゆる出来事にもかかわらず、ハッバーブ様の信仰が揺らぐことは微塵もなかった。しかし、苦難や拷問は耐えがたいほど高まっていった。起こったことについて預言者様に申し出て「預言者様よ！ 受けている拷問から解放されるよう願っていただけますか？」と求めた。これに対して、預言者様は「あなた方より前の共同体の中でも、鉄の串で肌を剥いで削られるといった拷問を受けた人がいましたが、彼らを信仰から戻させることはできませんでした。のこぎりで頭から二つに分けられても宗教を転じることはありませんでした。もちろん、アッラーがイスラームを完全になされます。すべての宗教をこれに刷新するのです。そして、動物に乗ってサヌアからハドラマウトまで一人旅をする者でも、アッラー以外に畏れるものはいなくなり、羊にとっては狼から襲われることしか恐れがないのと同様になります。しかし、あなた方は急いでいるのです」とおっしゃり、背中をなぜて祈念をした。人の魂を安ら

かにする預言者様の快い言葉は、ハッバーブの痛みを和らげた。
　ハッバーブ様は、特に乱暴な不信仰者であるアス・ビン・ワーイルに貸しが残っていた。それを返してもらうために彼のもとへと向った。アス・ビン・ワーイルはハッバーブに「ムハンマド（アライヒッサラーム）を否定しない限り、お前の貸しは返さない」と言うので、ハッバーブ様は「アッラーに誓って、私は生きている間も、死んだ後で復活したときも、決して預言者様を拒絶したり否定したりはしません。すべてを犠牲にしたとしても、彼を拒むことはありません」と返事をした。これを聞くとアス・ビン・ワーイルは「死んだ後に再び生き返るというのか？そうであるなら、そのときも財産や子供があるだろう。お前の借りはそのときに返してやろう」と言うのだった。
　アス・ビン・ワーイルのこういった言葉に対し、アッラーがクルアーンの『マルヤム章』の第七七節から七九節までを啓示して『あなたはわが印を拒否した者を見たか。だがかれは「私は富と子孫とに、きっと恵まれるであろう」と言う。かれは幽玄界を見とどけたのか。それとも慈悲深い御方の何らかの約束を得たのか。いや決してそうではない。われはかれの言うことを記録し、かれに対する懲罰を延ばすであろう。』と伝えられた。

失神するほどの拷問…

　不信仰者たちが拷問を行うとき、女性や男性の区別はしなかった。最初のムスリムたちであり、そして頼るもののない、ズィンニレ様もこういった奴隷の一人であった。彼女がムスリムになったことを知った不信仰者たちは、彼女に拷問をすることを恐れなかった。ズィンニレ様をラートやウッザーという像を崇めるよう圧力をかけて首を絞め、息ができなくなって失神するまで拷問を行った。それにもかかわらず、彼女が信仰から戻ることはなく、彼らの言うことを聞くことはなかった。特に、アブー・ジャフルは多くの拷問を行った。これによって、ズィンニレ様の目は見えなくなってしまった。アブー・ジャフルが「見たか。ラートやウッザーがお前の目を見えなくさせたのだ！」と言

うと、ズィンニレ様は信仰を示して「アブー・ジャフルよ！アッラーに誓ってあなたの言ったとおりではありません。ラートやウッザーと言っている像は何もできません。崇められているものは、崇んでいる人のことすら分からないのです。私のアッラーは目の光を取り戻させ、私を以前のように戻すことができるのです」と言い返した。
　アブー・ジャフルはズィンニレ様のこういった揺るぎない信仰に驚嘆していた。アッラーはズィンニレ様の願いを受け入れ、目は前よりもよく見えるようになった。アブー・ジャフルやクライシュ族の不信仰者たちは、この状況を見ていたにもかかわらず、頑固にも信じることはしなかった。さらに「これも彼らの預言者の魔術だ！ムハンマド（アライヒッサラーム）の道を歩んでいる無知な人にはあきれたものではないか？もし、彼らの歩んでいる道が善であり真実であるのなら、彼に従っていたことだろう。つまり、我々より先に、奴隷の方が真実を見つけたというのか？」と言うのだった。
　これに対してアッラーは『砂丘章（アル・アハカーフ）』の第十一節を啓示し『信じない者は信仰する者に言う。「もしこの（クルアーンを信じること）が良いのであれば、かれらがわたしたちに、先んじる筈はない」またかれらはそれによって、導きなどを受けないのであるとして「これは昔の作り話しです」と言う。』と伝えられた。

ダールル・アルカム（アルカム様の家）

　預言者様は不信仰者たちが教友たちに行っていた虐待や拷問に、かなり心を痛めていた。イスラームを広げ、学んでもらうためには安全な場所が必要だった。預言者様はこの神聖な義務のためにアルカム様の家を選んだ。この家は、サファーの丘の東にあり、狭い路の中の高い場所にあった。ここからはカアバが一望できた。家への出入りは、来る人を確認するため大変適していた。また、アルカム様はマッカの名士であり、尊敬を受けている人物だった。預言者様はこの家で教友たちにイスラームを説いていた。新しくムスリムになる者はここに来て、イスラームの恵みを受け、

預言者様の心の薬になる神聖な言葉を聞くことによって、恩恵を受けていた。預言者様が話をするとき、教友たちはまるで頭の上に鳥がいるかのように、話したらその鳥が飛び立つのではないかとするように息を止め、預言者様の話を聞いていた。神聖な言葉をまるで飲み込むように、一つの言葉すら聞き洩らさず暗記をしていた。預言者様は日中アルカムの家で過ごし、朝から晩まで教友たちを育てようとしていた。ここはムスリムたちの最初の本部、ダールル・イスラームであった。最初のムスリムたちはここで集まり、このように不信仰者たちのいろいろな悪事から身を守っていた。

アンマール・ビン・ヤーセルは語っている。「ダールル・アルカムに行って、預言者様を見、ムスリムになろうと思いました。扉の前でスヘイブ様と出会いました。『ここで何をしているのですか?』と聞いたところ、逆に同じ質問をされました。私は『ムハンマド（アライヒッサラーム）のところへ伺って、言葉を聞き、ムスリムになりたいのです』と言いました。彼も『私もそのために来たのです』と言いました。一緒に名誉ある至高の場所へと上がりました。そして、私たちにイスラームを教えていただきました。そして喜んでムスリムになりました」

アンマールは、ムスリムであることを公にするのを恐れない戦士の一人だった。イスラームから戻させようとする最も重い拷問にも耐えた。不信仰者たちは彼が一人でいるのを見ると、ラムダというマッカの岩場へ連れて行って服を脱がし、鉄の上着を着せた。このようにして、焼けるような太陽の下で待たせ、拷問を行っていた。ときには、背中に焼き印を押して尽きることのない拷問を行った。毎回「イスラームを否定しろ！…　イスラームを否定しろ！…　ラートとウッザーを奉り、解放されたらどうだ！…」と言われていた。アンマール様はこのような耐えがたい拷問に勇気をもって耐え「私の神はアッラーで、私の預言者はムハンマド（アライヒッサラーム）である」と言い返した。不信仰者たちはこのことでさらに怒り、胸の上に熱さで焼けた岩を置き、時には井戸の中に落として溺れさせようともした。アンマール・ビン・ヤーセルは、ある日、愛すべき預言者様の前に上がったとき「預言者様！　不信仰者たちが私たちに行っている拷問は極みに達しています」と言うと、預言者様はアンマール様のことを可哀想に思いながら「耐

えるのです、ヤフサーンの父よ！」とおっしゃった後「アッラーよ！　アンマールと家族から誰一人として、地獄の罰を与えないようにしてください」と祈った。

初の殉教者

アンマール様は、自身とともに父親のヤーセルや母親のスメイヤ、兄弟のアブドゥッラーという家族全員がムスリムとなっていた。不信仰者たちは、アンマール様に行っていた拷問よりも、さらに酷い拷問を両親や兄弟に対して行っていた。拷問の際には不信仰の言葉を言わせようとしていた。しかし、彼らは「肌を剥がされても、肉をばらばらに切り刻まれても、あなた方には従わない」と言い返し「ラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマダン・ラスールッラー」と繰り返していた。ある日、ヤーセル一家全員がバトハーという場所で拷問されているところへ、預言者様が通りかかった。友人たちに対してこのような拷問が行われていることを見ると大変に悲しんだ。ヤーセル様が「預言者様よ！　このように時は拷問で過ぎていくのでしょうか?」と尋ねると、預言者様は「耐えるのです、ヤーセル一家よ。喜びなさい、アンマール一家よ。間違いなく、あなた方の褒賞の場所は天国なのです」とおっしゃった。

またある日、マッカの不信仰者たちはアンマールに、火で虐待し、拷問を行っていた。預言者様がそこへ通りかかった。そして「火よ、預言者イブラーヒームにしたように、アンマールにも涼しく無害となれ」と願った。その後、アンマールの背中を見てみると、火傷の痕が残ってはいたが、それは預言者様が祈る前についたものだった。

しかし、ついにヤーセル一家が拷問されていたある日、父親のヤーセル様や兄弟のアブドゥッラー様は矢で打たれて殉教した。さらに、アブー・ジャフルは、スメイヤ様の神聖な足を二頭のラクダに紐でくくりつけてから逆方向に歩かせ、身体をばらばらにして殉教させるということをした。非情で残忍なアブー・ジャフルをはじめとした不信仰者たちが、ヤーセル一家を殉教させたことを預言者様や教友たちが聞くと、大きな悲しみに包まれた。だが、この出

来事は教友たちをお互いに、一層強い絆で結びつけることとなった。

教友たちは礼拝をするとき、人のいないところへ行って密かに礼拝を行っていた。このようなある日、サアド・ビン・アブー・ワッカース、サイード・ビン・ザイド、アブドゥッラー・ビン・マスード、アンマール・ビン・ヤーセル、ハッバーブ・ビン・エレットらが、マッカの谷であるアブー・ドゥッブという場所で礼拝をしていた。そのとき、彼らを追いかけていたアフネス・ビン・シェリークや何人かの不信仰者たちがやって来て、彼らの礼拝をからかったり、暴言を吐いたりした。これに我慢できなくなったサアド・ビン・ワッカース様やその友人たちは、不信仰者たちを攻撃した。サアド様が、手にしたラクダの骨で不信仰者たちの一人の頭をたたいて割れ傷を与えると、不信仰者たちは恐れて逃げていった。これが、ムスリムたちが不信仰者に血を流させた、初めての出来事となった。

アブー・ザール・アル・グファーリーがムスリムとなる

人々は一人、二人と、信仰という解放に恵まれていき、イスラームの光はマッカの外にも広がって、世界は明るく導かれ始めていた。

イスラームの誕生やその拡大の知らせを前に、不信仰者たちは妨害の道を選んでいた。やがて、これらのことはグファール族にも伝わった。アブー・ザール・アル・グファーリーはこの知らせを聞くとすぐに、兄弟のウネイスをマッカへと向かわせ、状況を把握させることとした。ウネイスはマッカに行き、預言者様の集まりに参加した。そして、大いに関心を持って戻って来た。兄弟のアブー・ザール様が「どのような知らせを持ち帰ってきたのですか？」と尋ねると「兄よ！ アッラーに誓って言いますが、まさに、善を命じ悪を避ける、大変に偉大な人物と出会いました」と答えた。アブー・ザール・アル・グファーリーが「なるほど。では、人々は彼について何と言っているのですか？」と尋ねると、当時の有名な詩人でもあった兄弟のウネイスは「詩人、占い師、あるいは魔法使いだと言っています。

しかし、彼の言葉は占い師や魔法使いの言葉とは似ていません。彼が話していた言葉をいろいろな詩とも比べてみましたが、どれにも似ていないのです。比類ないその言葉は、誰の言葉でもはかることができません。アッラーに誓って、その人物は真実を知らせ、真理を語っています。彼を信じないものこそが嘘つきで、さ迷える者なのです」と返事をした。

これを受けて、アブー・ザール・アル・グファーリーはマッカへと赴き、預言者様にお目にかかってムスリムになろうと決めた。手には一本の杖と少しばかりの食料を持って、歓喜の中でマッカへと向かった。しかし、マッカへ到着しても、自分が何をしたいかは誰にも言わないでいた。なぜなら、不信仰者たちが預言者様や新しくムスリムになった人々のことを、激しく敵視し虐待を一層増やしていたからであった。特に、ムスリムになったのが、後ろ盾のいないよそ者であれば、より多くの虐待が行われていたのである。アブー・ザールは、マッカに誰も知り合いがいないよそ者だったのである。このため、誰にも尋ねることはできなかった。そこで、カアバの近くで預言者様に接する機会をうかがい、彼がどこにいるのかを知ろうと、その合図や印を探していた。

夕方になると、ある道の角に佇んだ。そのとき、アリー様がアブー・ザールを見かけた。見知らぬ人であるのが分かり、家へと連れていった。事情については詮索しなかったため、アブー・ザールも自分の秘密を明かすことはしなかった。彼は朝になると再びカアバへと向かった。夕方まで歩き周ったがやはり願いは叶わず、昨夕佇んでいたところに再び座った。その晩、アリー様がまたそこを通りかかった。「この憐れな人は、いまだに目当ての家を見つけられないのだろうか」とつぶやき、再び自分の家に連れていった。彼は朝になるとまたカアバへと行き、夕方には同じ場所に座った。アリー様がもう一度家に招待した。今回は、どこから、なぜ来たのかを尋ねた。アブー・ザール様は「もし私に正しい情報をくれるとはっきり約束してくれるのであれば話しましょう」と言った。アリー様が「話してください。事情は誰にも言いません」と答えると、アブー・ザール・アル・グファーリーは「ここで一人の預言者が出たと聞きました。彼と会い、彼に巡り合うために来たのです」と話した。アリー様は「あなたは正しい道を見つけ出しました。よい判断をしました。今、私はその人物のところへ行きます。私について来て、私が入る家にあなたも入るのです。もし通

りで誰かあなたに危害を加えようとする人を見つけたら、私は靴を直すふりをしましょう。そうしたら、あなたは私のことは知らないふりをして歩き続けてください」と言った。

アブー・ザール・アル・グファーリーは、アリー様の後からついて行った。ついに、預言者様の神聖なお顔を見る名誉に恵まれた。そして「アッサラーム・アライクム」と挨拶をした。この挨拶は、イスラームとして初めての挨拶で、アブー・ザール・アル・グファーリーが初めてこの挨拶をした者となった。預言者様はこの挨拶に対して「アッラーの慈悲があなたの上にもありますように」とおっしゃった。続けて預言者様が「あなたはどなたですか？」と尋ねると「私はグファール族の者です」と答えた。「いつからここにいますか？」と聞くと「三つの昼、三つの夜の前からここにいます」と答えた。「あなたの面倒を誰がみていたのですか？」と尋ねたことに対しては「ザムザムの水以外、食べ物や飲み物は見つけられませんでした。しかし、ザムザムの水を飲むと、空腹やのどの渇きは感じなくなりました」と言った。預言者様は「ザムザムの水は神聖なものであり、空腹の者を満たすのです」とおっしゃった。その後、アブー・ザール・アル・グファーリーは預言者様に「私にイスラームを教えてください」と頼んだ。預言者様は彼に信仰告白の言葉を詠んだ。彼もそれを繰り返してイスラームの名誉に恵まれ、初期のムスリムの仲間となったのであった。

アブー・ザール・アル・グファーリー様はムスリムとなると、預言者様に「預言者様よ！あなたを真の預言者としてこの世へ送ったアッラーに誓って言いますが、私はこれらの言葉を不信仰者たちの間で隠すことなく言いましょう」と言った。そして、カアバへと向かい、大声で「クライシュ族よ！『アシュハド・アン・ラー・イラーハ・イッラッラー、ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ』」と言った。これを聞いた不信仰者たちは、すぐに攻撃し始めた。彼のことを石やこん棒や骨で叩いて血だらけにした。この状況を見たアッバース様は「この人を放っておきなさい。殺すつもりか。彼はあなた方が交易キャラバンで通っている途上に住む部族の一員なのです。今後どうやってそこを通るつもりですか」と言って、アブー・ザール様を不信仰者たちの手から救った。だが、アブー・ザールは、ムスリムになったという名誉から来る喜びで、いてもたってもいられなかった。翌日、またカアバへと行き、

信仰告白の言葉を大きい声で叫んだ。不信仰者たちは今回も殴った。そして道に倒された。再びアッバース様が後からやって来て助けた。

預言者様はアブー・ザール・アル・グファーリー様に、故郷に戻ってそこでイスラームを広めるよう命じた。彼はこの命令に従って一族のもとへと戻り、彼らにアッラーが唯一であることや、ムハンマド（アライヒッサラーム）がアッラーの預言者であることを伝えた。そして、預言者様の教えが真実であり、今まで拝んでいた像は迷信であって意味はなく、価値がないことを話した。すると、これを聞いていた一部の者たちが反対し始めた。族長のハフハフは叫んでいた者たちを静め「待ちなさい。一体何を話すか聞くのです」と言った。そこで、アブー・ザール様はこのように続けた。

「私はムスリムになる前、ある日、ノヘム像の前に行き、その前にミルクを置きました。すると、一匹の犬が近づき、ミルクを飲んで像の上に小便をかけるのを見ました。像はこんなことも防ぐ力すら持っていないのを理解しました。犬でさえ侮辱していた像を私たちが崇めて、一体何の益があるというのでしょう。これは頭のおかしな人がすることではないでしょうか。そう、あなた方が崇めていたものは、この程度のものなのです」全員が頭を垂れていた。その中の一人が「分かりました。では、あなたの話していた預言者様は何を知らせているのですか。彼が真実を言っているということが、どのようにして分かったのですか？」と尋ねた。そこで、アブー・ザール様は大きい声で「彼は、アッラーが唯一であり、アッラー以外に神がないこと、アッラーが全てを創造し、全ての所有者であることを知らせています…。人々がアッラーを信仰するように呼びかけています。そして、善や道徳、互いに助け合うことを奨めています。女児を生き埋めにしたり、あらゆる悪行、不正、虐待などを行ったりしないよう伝えているのです」と言った。そしてイスラームについてよくよく説明した。一族の中にあった迷いを一つずつ指摘し、これらの害悪や醜さを明らかにした。彼のことを聞いていた人々のうち、族長のハフハフや兄弟のウネイスをはじめ、多くの人々がムスリムとなった。

カアバで公にクルアーンを詠む

教友たちがある日、人のいない場所に集まって話し合っていた。「アッラーに誓って、預言者様以外、クライシュ族の不信仰者たちに対して、公にクルアーンを聞かせた者は一人も出ていません。彼らの前でクルアーンの言葉を詠んで聞かせられる者はいるのだろうか?」と話していたのだった。その場には、アブドゥッラー・ビン・マスード様がいて「私が聞かせましょう」と言った。教友たちの何人かは「アブドゥッラーよ! 不信仰者たちがあなたに危害を加えないか心配です。私たちが探しているのは、必要とあれば自分のことを不信仰者たちから守ることができる、部族や家族の後ろ盾がある者なのです」と言ったものの、彼は「私に許可してください。アッラーが私をお護りくださるでしょう」と主張した。

翌日の午前中、彼はカアバのマカーム・イブラーヒームという場所へ行った。そこには不信仰者たちが集まっていた。イブン・マスードは、立ったままバスマラを唱えて『慈悲あまねく御方章(アッ・ラハマーン)』を詠み始めた。不信仰者たちは互いに「ウンム・アドの息子は何を言っているのだ? どうもムハンマド(アライヒッサラーム)のもたらしたものを詠んでいるらしい」と言いながら近寄り、拳で殴ったり、蹴ったり、平手で目が紫になるまで叩いたりして、一見して本人と分からなくなるほどにした。しかし、彼は平手や拳で殴られても詠み続けた。顔や目を傷だらけにして、教友たちのもとへと戻った。教友たちは大変悲しんで「やはり私たちは、あなたがこのようなことになるのではないかと心配していたのです。結局、心配したとおりの結果になってしまいました」と言った。

しかし、アブドゥッラー・イブン・マスードは決して悲しんではいなかった。「私はアッラーの敵が、今日ほどに弱っていたのを見たことがありません。何だったら明日の朝、彼らにもう一度聞かせることもできます」と言うのだった。教友たちは「いや、これだけでも十分です。狂暴な不信仰者たちが願わないものを聞かせたのですから」と答えた。

トゥファイリ・ビン・アムルがムスリムとなる

預言者様はマッカで公にイスラームを伝え始め、夜も朝も人々に忠告を行ってイスラームを紹介するようになっていた。一方、マッカの不信仰者たちは、預言者様のこの熱意を無駄にさせようと骨折っていた。預言者様の話していたことを認め、信仰を選んだ人々に対しては、あらゆる嘘や中傷、虐待を行ってよいものと考えているようだった。預言者様と会ったり話したりする人を見かければ、すぐにその場へ行き、彼のことを聞かないように、そして、話していたことを信じないように、さまざまな嘘をついたり計略を計ったりしていた。また、マッカの外から来る人を預言者様と会わせないよう、あらゆることを行っていた。ムスリムたちが大変な想いをし、不信仰者たちから虐待を受けていた頃、トゥファイリ・ビン・アムル・アル・ダウスィがマッカにやって来た。これを見た不信仰者たちの名士は彼のそばに行き「トゥファイリよ! 今あなたは私たちの国にやって来ました。私たちの間から出たアブドゥルムッタリブの孤児が、驚くべき状況を作り出しているのです。語っている言葉はまるで魔法のようです。子供を父親から、兄弟を兄弟から、夫を妻から別れさせます。彼の語っている考えが周囲を混乱させ、彼の言葉を聞いた息子は父親の言うことを聞かなくなるのです。そして、彼の方へと従っていってしまうのです。もはや誰の言うこともきかずにムスリムとなってしまいます。私たちの間で起きた、このような分断の害悪があなたの部族にも起きるのを心配しています。彼とは決して話さないよう、あなたに忠告します。彼に一言も言わず、彼から一言も聞かないように。話していた言葉には耳を傾けないことです。よく注意してください。ここにはあまり留まらないようにして、すぐ帰るのです」と言った。トゥファイリ・ビン・アムルはその後のことを次のように話している。

「アッラーに誓って言いますが、このようなことを言われていたので、私は預言者様と話さないことや、彼の話したことを聞かないように決めていました。さらに、カアバに入ったときには、誤って彼の言葉を聞いてしまうのではないかと心配し、耳に綿を詰めていました。翌朝、私はカアバに行きました。預言者様はそこで礼拝をしていました。

彼に近いところに立っていました。アッラーの神意なのか、彼が詠んでいたいくつかの言葉が耳に届きました。聞いた言葉はとても美しかったのです。私は自分に『私は善と悪を見分けられないほどの人間ではない。しかも詩人なのである。彼の言っていた言葉をなぜ聞かないのだ。言っていた言葉が良いのであれば受け入れ、気に入らなければ拒絶すればよい』と思いました。そして、辺りに身を潜め、預言者様が礼拝を終わらせて家に向かうまで待っていました。それから後をついて行って、家に入ると私も入っていきました。そして『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！私はこの地方にやって来たときに、あなたの部族は私にこう言いました。『あなたから遠ざかるように』と。心配だったので、あなたの言葉を聞かないように耳に綿を詰めていました。しかし、アッラーがあなたの詠んでいた言葉から、少しを私に聞かせたのです。それらはとても美しいものでした。さあ、私に話したいことを伝えてください。受け入れましょう』と言いました。預言者様は私にイスラームについて話し、クルアーンを少し詠みました。アッラーに誓って、人生の中でこれより美しい言葉は聞いたことがありませんでした。すぐに、信仰告白の言葉を述べてムスリムとなりました。

それから、私はこう言いました。『預言者様！私は自分の部族の中では発言力があり、尊敬もされている者です。誰もが私の言葉に従います。戻ったら彼らにイスラームを紹介します。祈ってください。アッラーが私に対しても、一つの印や一つの奇跡をお与え下さいますように。その印によって、自分の部族にイスラームを紹介するとき楽になり、手助けとなりますように』これに対して預言者様は『アッラーよ、彼のために一つの印をお創り下さい』と祈って下さいました。

その後、私は故郷に戻っていきました。真っ暗なある夜、部族が住んでいた泉から見える山頂に着いたとき、私の額からロウソクのような光が現れ、周りを明るくしました。そこで祈りを捧げ『アッラーよ！この光を額から別のところへ移してください。デウス族の無知な人々がこれを見たら、私が以前の宗教を捨てたために、アッラーが罰として額にこの光を与えたのだと勘違いしてしまわないように』と言いました。すると、その光はすぐに手に持っていた鞭の先端に移り、ランタンのようにぶら下がったのです。部族の住む場所に近づいて坂を下り始めると、そこにいた人々

は私が手にしていた鞭の先端の、ランタンのような光のことで互いに顔を見合わせていました。こうしながら坂を下り、家へと戻って来ました。最初に父親が来て私を見ました。彼は私を愛情とともに抱きしめました。父親はかなり年を取っていました。まず父親に『父よ！もし、以前のままでいるのであれば、私はあなたのことを、そして、あなたは私のことを互いに他人としてしまうことになります』と言いました。この言葉を聞いた父は驚き『理由は何だ、息子よ』と尋ねました。『私は今、ムハンマド（アライヒッサラーム）の宗教に入り、ムスリムとなったのです』と返事をしました。これに対して父は『息子よ！私もあなたが入った宗教に入ります。あなたの宗教と私の宗教が同じになるように』と言って、すぐに信仰告白の言葉を述べてムスリムとなりました。それから、イスラームについて、知っていたことを父に教えました。その後、体を洗ってきれいな服を着ました。やがて、妻が来ました。彼女にも同じ話をしました。彼女もイスラームを受け入れ、ムスリムとなりました。

朝になると、デウス族の人々の中へと行きました。デウス族の全員に対してイスラームの説明をし、彼らにも勧めました。しかし、これを受け入れることについては躊躇がありました。しばらくの間反対をし、罪や悪事から手を引こうとしませんでした。さらには、目や眉を動かして私のことを馬鹿にしたりもしていました。利子や賭け事に熱中していたので、私の言葉を聞こうとはしていませんでした。イスラームに従うことを避け、アッラーやその預言者に反抗していました。

私はしばらく後にマッカへ行き、自分の部族のことで『預言者様よ！デウス族はアッラーに反抗しています。イスラームに入るようにとの宣教を受け入れてはくれませんでした。彼らのために祈ってください』と苦言を申し上げました。誰に対しても、憐みや同情を持つ愛すべき預言者様は手を開き、キブラに向って『アッラーよ、デウス族を正しい道へと導き、彼らをイスラームへとお導きください』と願いました。それから私に『部族のもとへと戻るのです。彼らに笑顔で、そして、柔らかな言葉でイスラームを紹介し続けるのです。彼らに親切に接してください』とおっしゃいました。すぐに故郷に戻り、デウス族にイスラームを紹介し続けました」

市場での宣教

毎年マッカには、さまざまな町の人が、ある決まった日にちにカアバを訪れるためにやって来ていた。預言者様は訪れた人々を迎え、すべての一団にイスラームの説明を行って、アッラーが唯一であり自らが真の預言者であることや、これらを信じることで本当の解放が得られるということを伝えていた。ある日、ワリード・ビン・ムフレが、不信仰者たちを集めて「クライシュ族の者たちよ！カアバを訪ねる季節が再びやって来ました。今やムハンマド（アライヒッサラーム）の声が世間に広がっています。アラブの民が彼のところへやって来て、その優しい言葉に傾き、彼の宗教に入っています。これに対する措置を考えるべきです。全員の口裏を合わせ、彼についてあらかじめ決めたことを話して、互いが嘘をついていないように見せよう」と言った。これに対してクライシュ族は「アブドッシャムスの父よ！我々の間で先見の明があるのはあなたです。あなたが言うことを私たちも話しましょう」と言った。そこで、彼らは「彼のことを占い師と言いましょう」と提案した。しかし、ワリードは「いや、あなた方が言ったことを私が聞きましょう」と言った。そこで、彼らは「彼のことを占い師と言いましょう」と提案した。しかし、ワリードは「いや、あなた方が言ったことを私が聞きましょう」と言った。するとワリードはすぐに反対した。そして「いや、誓って言いますが、彼は占い師ではありません。我々はたくさんの占い師を見てきました。彼らはあることもないことも気にもせずに言うのです。しかし、ムハンマド（アライヒッサラーム）の詠んでいたものは、占い師がでっち上げたものとは全く似ていません。そして我々も今までムハンマド（アライヒッサラーム）から嘘を聞いたことがないのです。そう言ったとしても、誰も信じないでしょう」と言った。次に「気が狂っている、頭がおかしい、と言いましょう」と発言があった。ワリードは再び反対をし「いや、誓って言いますが、彼は気が狂っているわけでも、頭がおかしいわけでもありません。我々は気が狂った者や頭のおかしな者のことをよく知っています。そういう人の特徴も分かっています。しかし、彼には、そのような息がつまったり、ばたばたしたり、震えたり、幻想するといった兆候が見られないのです。そんなことを言ったとしたら、私たちが否定されてしまうでしょう」と言った。そこで、クライシュ族は「では、詩人と言いましょう」と提案した。ワリードは再び反対して「彼は詩人ではありません。我々はあらゆる種類の詩を知っています。彼の詠んでいたものは、決して詩には似ていないのです」と言った。次に「彼は魔法使いだと言いましょう」と発言があった。しかし、ワリードは「彼は魔法使いではありません。我々は魔法使いの行っている魔法を見て、彼らのことを知っています。しかし、彼の言葉の中には、魔法のマの字でさえ見ることはできません。ムハンマド（アライヒッサラーム）の言葉は全世界よりも勝っています。彼はまったく無名な人というわけでもないのです。人々を彼から離すことも、彼に話させないようにすることもできません。しかも、流暢で雄弁で、美しく意義深い話をすることにかけては、同世代の者より優れているのです。彼について何かを言ったとしても、人々は我々の言葉が嘘であると分かってしまいます」と反論した。そこで、クライシュ族は「もはや言葉が見つかりません。我々の中で最も年長で、経験のある方はあなたです。何であれあなたが言うことに私たちも同意します」と言った。

ワリード・ビン・ムフレはしばらく考えた末「やはりこれらの中で最善なのは、彼のことを魔法使いやまじない師であると言うことでしょう。これが一番納得されましょう。なぜなら、彼が話す言葉のせいで、人々が自分の部族や親戚から離れてしまうのですから。兄弟を兄弟から離し、親友の間に亀裂を入れるからです」と言って、自らが人々の間に不和を起こした。クライシュ族はすぐに解散し、マッカに集まっていた人々に「ムハンマド（アライヒッサラーム）は魔法使いだ」と言いふらして回った。カアバを訪れるため、いろいろな部族が来るようになると、預言者様と話をしないよう皆に伝えて回った。

しかし、不信仰者たちのこのような行動のため、逆にイスラームはアラブ全体に知られるところとなり、人々の頭の中には、偶像崇拝に対して大きな疑問が生ずるようになってきたのだった。アッラーは、不信仰者のワリード・ビン・ムフレに大きな罰を与えることについて、以下のようにクルアーンの節を啓示された。『われが創ったものを、われ一人に任せなさい。われは、かれに豊かな富を授け、またその回りに、息子たちを侍らせ、かれのために、（物事を）円満容易にした。それでもかれは、われが更に豊かにするよう欲した。断じて許されない。かれは、わが印に対し頑迷であっ

た。やがてわれは、ひどい痛苦でかれを悩ますであろう。かれは想を練り、策謀した。かれは滅びるであろう。何と（悪意をもって）かれらは策謀したことよ。重ねていう。かれは滅びるであろう。何とかれは策謀したことよ。その時、かれはちらっと（クルアーンを）眺め、眉をひそめ、苦い顔をして、それから、高慢に背を向けて去った。かれは言った。「これは昔からの魔術に過ぎません。どうみても人間の言葉に過ぎません」やがてわれは地獄の火で、かれを焼くであろう。地獄の火が何であるかを、あなたに理解させるものは何か。それは何ものも免れさせず、また何ものも残さない。』

（包る者章（アル・ムッダッスィル）第十一～二八節）

不信仰者たちがクルアーンを聞く

不信仰者の中の長たちは、あらゆる計略や虐待によって、人々の信仰を止めさせようとしていた。マッカの住民に対しては、ムハンマド（アライヒッサラーム）の詠んでいたクルアーンを聞くことを禁止していた。しかし、彼ら自身、夜になると密かにムハンマド（アライヒッサラーム）がいる家の隣に来ては身を隠し、クルアーンを聞いていたのだった。朝になって明るくなり始めると、互いのことに気付き、クルアーンを聞こうと夜中にやって来ていたことを知った不信仰者の名士たちは非難し合って「二度とこのようなことはしないように」などと言っていた。しかし、翌日も再びそこに行き、互いのことに気付かずに隠れてクルアーンを聞いていた。そして朝になると、また互いを見つけて驚き合っていた。「二度とこのようなことはしないように」と誓い合って別れたにもかかわらず、やはりこの行為をやめられなかった。それでも、素直になることはできず、自分が優れているふりをしたり、他の不信仰者たちから非難されることを思ったり、その他のさまざまな無意味な考えを頭の中で振りかざして、信仰するには至らないのだった。それどころか、他の人々にも影響を与えようと「ムハンマド（アライヒッサラーム）は魔法使いである」と通りで叫んだりもしていたのだった。

ある日の夕暮れ、不信仰者たちはカアバの周りに集まり「ムハンマド（アライヒッサラーム）を呼び、この問題について話し合おう。つまり、我々が非難されないよう、我々の行為が正当であると思われるようにするのです」と言って、預言者様に伝えた。これを受けて預言者様はカアバへと来て、不信仰者たちの前に座った。不信仰者たちは「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ、あなたに知らせを送ったのは、あなたと取り決めをするためです。誓って、アラブ人の間であなたほどに部族間に問題を起こした者はありません。あなたは我々の宗教を非難し、神々に口を出しました。私たちの地位も気に入りませんでした。私たちの団結をほころばせ、お互いを敵とさせました。私たちに対してあらゆる災難を与えたのです。もしあなたが、こういった言動をすることで金持ちになりたいのなら、欲しいもの以上のものを集めて差し上げましょう。名誉や栄光、名声を求めているのなら、あなたを我々の王としてあげましょう。統治者になりたいのならそうすることを公布し、あなたのところへ集まりましょう。もし、何かから影響や感化を受けているのなら、あなたをそれから救い出します。ジンからもらった病気であるなら、全財産をつぎ込んででも治療法を探します…」と言うのだった。

万物の王は忍耐強く聞いた後、この最良の返事をした。「クライシュ族よ！　あなた方の言っていたことの一つたりとも、私に当てはまるものはありません。私はあなた方が持っているものや、財産、あるいは、名誉や栄光を得ようとも、あなた方の統治者となりたいとも考えていません。アッラーは私を預言者としてあなたがたに送り、私に啓典を下したのです。そして、あなた方の中で、これを認める者には天国の吉報をもたらし、認めない者には地獄の恐怖を伝えるようにと命じました。私は、アッラーの命令に従ってこれをあなた方に伝え、あなた方に忠告をしているのです。もし私が伝えていることを認めるのなら、アッラーはあなた方にこの世でもあの世でも良運を恵んでくださいます。それらを拒否して受け入れないならば、私とあなた方との間で審判が下されるまで、あらゆる困難に対しても、アッラーの命令に従い胸を張って耐えることが私の義務なのです」

アブー・ジャフルやウマイヤ・ビン・ハラフ、あるいはその他の不信仰者たちはこう言った。「ムハンマド（アライ

ヒッサラーム）よ！　我々よりも困窮した生活を送っている人々はいないのです。もし、あなたが預言者であるというのなら、我々を締め付けている生活上の困難の山を取り除いて遠くに流し、領地を広げてシャームやイラクのように河を流してほしいと神に願ったらどうだ。それから、クサイブ・ビン・キラブをはじめとした昔の祖先たちを生き返らせてほしいのです。クサイブ・ビン・キラブは、真実を語る偉大な人物でした。あなたが言っていることが真実なのか迷信なのかを彼に聞きましょう。もし彼があなたを認めるのであれば、そして、我々の願いを叶えてくれるのであれば、あなたのことを認めましょう。これであなたの神の地位とやらも分かることになるのです。もし、我々のためにはこれらを行ってくれないというのなら、せめて自分自身のために何かをしてもらうよう神に頼むことです。あなたが話した言葉を私たちが確認できるようにしてもらったり、あなたを私たちから守ってくれる天使をつけてもらったり、あなたに庭園や家や資産を与えて苦しい生活から逃れられるようにしてもらったらどうなのですか。なぜなら、あなたも私たち同様市場で歩き回り、生活のために立ち働いているのですから」

万物の王は彼らに「私はこのようなことをするために送られたのではありません。私はただ、アッラーが私に行わせることだけを行うのです。それはあなた方にも伝えました。私は物品や財産や得るためにアッラーに願いを行うような人間ではありません。アッラーが私に伝えさせたものを受け入れれば天国があり、受け入れずに拒絶すれば地獄という恐怖があることを伝えるために遣わされたのです。もし私が伝えていることを認めるのなら、アッラーはあなた方にこの世でもあの世でも良運を恵んでくださいます。それらを拒否して受け入れないならば、私とあなた方との間で審判が下されるまで、あらゆる困難に対しても、アッラーの命令に従い胸を張って耐えることが私の義務なのです」とおっしゃった。

不信仰者たちは「あなたの神は願えば何でもできるというのなら、何か願ってみるのです。この空をばらばらにして落としてみてほしい。あなたがそうしない限り、あなたのことは信じません」と言った。預言者様は「それはアッラーの裁量によるものです。アッラーがそれをしようと思うのであれば、必ず行います」とおっしゃった。さらに、不信仰者たちは身の程も知らずに「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！あなたの神は、私たちがこうやってあなたと座って質問をすることや、私たちが欲するものを知っていたはずではないですか。あなたに事前に知らせることはなかったのですか。あなたが伝えていることを私たちが拒否した場合私たちがどうするのか、なぜ知らせなかったのですか。あなたが語った言葉が真実であるのなら、証人として天使たちを私たちのところに連れてこない限り、あなたのことなど信じません…。もはやあなたに対して、私たちの責任はありません。誓ってあなたのことを放ってはおかないでしょう。私たちがあなたを消すか、あなたが私たちを消すかのどちらかです」と言った。彼らが近づいてくれるのではなく、さらに遠ざかっていくことを理解した預言者様は、彼らのところから立ち去った。マッカの不信仰者たちが万物の王を拒絶したことに対し、アッラーはジブリール様に啓示を下させ、クルアーンの節をもって彼らに返答した。彼らの身に降りかかる、来世での厳しい罰を知らせたのである。『家畜章（アル・アンアーム）』の第四節から第十一節までの章句ではこのように伝えられている。『かれらは主から如何なる印を齎されても必ずそれから顔を背けてしまう。真理（クルアーン）がかれらの許に来ると、かれらは常にそれを虚偽であるとした。だがかれらの嘲笑する御告げが、間もなく（事実となって）かれらの許に来るであろう。われはかれら以前に、次から次に幾世代も滅ぼしたかを、あなたがたは考えないのか。われは地上でかれらを代々安住させ、あなたがたにすらしなかったものを与えた。われは、かれらの上に雲を送り（雨を）注ぎ降らせ、その足許に川を流れさせた。だが凡ての罪のためにかれらを滅ぼし、その跡に外の世代を出現させた。仮令われがあなたに紙上に（書いた）啓典を下し、かれらが自分の手でそれに触れても、不信心な者はきっと「これは明らかに魔術に過ぎない」と言う。かれらはまた言う。「何故天使が、かれに遣わされないのか」もしわれが天使を遣わしたならば、事は直ちに決定されて、かれらは猶予されなかったであろう。仮令われがかれ（使徒）を天使としても、必ず人間の姿をさせ、（今）かれらが惑うように、きっと惑わせたであろう。あなた以前の使徒たちも、確かに嘲笑されていた。だが嘲笑したものは、その嘲笑していたこと（懲罰）に取り囲まれるであろう。言ってやるがいい。（ムハンマドよ。）「地上を旅して、真理を拒否した者の最後が、どうであったかを見なさい」』

そして『識別章（アル・フルカーン）』の第七節から第十節までの章句にて『またかれらは言う。「これはどうした使徒だ。

食べ物を食べ、町を歩き回るとは。どうして天使が遣わされ、かれと一緒に警告者にならないのだろうか。かれに（どうして）財宝が授けられないのか。また（いくらでも）食べられる果樹園を持たないのだろうか」不義の徒たちはなお「あなたがたは、憑かれた者に従うだけのことである」と言う。かれらが、どんな譬を、あなたのために持ち出したかを見なさい。それで彼らは迷ってしまって、道を見出せない。かれが望まれるならば、それより優れたものを、あなたに与えることの出来る方。川が下を流れる楽園、そして宮殿をあなたに与える御方に祝福あれ。』と伝えられた。

また、同第二十一節では『われとの（審判のための）会見を望まない者は言う。「何故天使がわたしたちに下されないのか。また（何故）わたしたちの主が、目の前に見えないのであろうか」彼らは本当に自惚れて高慢であり、また非常に横柄な態度をとったのである。…』と啓示した。

さらに『サバア章』の第九節では『かれらはかれらの前後にある天と地を見ないのか。もし欲するならば、われがかれらを大地に呑ませ、または天の一画をかれらの上に落とすであろう。本当にその中には悔悟して主に返るしもべにとっての印がある。』と伝えられている。

また、『夜の旅章（アル・イスラーゥ）』の第九七節では『…われは復活の日に、かれらの顔を俯けにして召集する。見えない者、物言えない者、聞こえない者として。かれらの住まいは地獄である。そして（火勢が）衰える度にわれはかれらのために烈火を加える。』と下された。

不信仰者たちは自分たちについて下されたこれらの節に対し、敵意を一段と高めていった。特にウベイ・ビン・ハラフとその兄弟のウマイヤは預言者様を非常に悲しませていた。不幸なウベイは、腐った骨を手にして預言者様のところへ行った。そして「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたのアッラーが、この骨を腐った後に生き返らせるというのは本当なのか。つまりあなたは、これが腐った後で神によって生き返るとでも思っているのか」と言うのだった。そして骨を砕いてその粉を預言者様に向って吹きつけた。さらに「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ これはこうして腐った後で、一体誰が生き返せるというのだ？」と言っていた。預言者様は「その通りです。アッラーはあなたに対しても、その骨に対しても…。あなた方はそのようになった後、甦らせられ地獄に入れられるでしょう」と返事をした。そして、この出来事に対してアッラーは次のクルアーンの節を啓示された。『人間は考えないのか。われは一精滴からかれを創ったではないか。それなのに見よ、かれは公然と歯向かっている。またかれは、われにも準えるものを引合いに出して、自分の創造を忘れ、言う。「誰が、朽ち果てた骨を生き返らせましょうか」言ってやるがいい。「最初に御創りになった方が、かれらを生き返らせる。かれは凡ての被創造物を知り尽くしておられる。緑の木から、あなたがたのために火を造られたのもかれであり、だからこそあなたがたはそれによって燃やす」天と地を創造なされたかれが、これに類するものを創り得ないであろうか。いや、かれは最高の創造者であり、全知であられる。』

（ヤー・スィーン章第七七〜八一節）

ハーリド・ビン・サイードの入信

イスラームの宣教が始まった頃、ハーリド・ビン・サイードはある夢を見た。夢の中で地獄の淵に立っていると、父親が彼を押しやって落とそうとしていた。ちょうどそのとき、預言者様が彼の腰をつかみ、地獄へ落ちるのを防いでくれたというものだった。彼は叫びながら目を覚ました。それから「アッラーに誓って、この夢は真実だ」とつぶやいた。外に出ると、アブー・バクル様に出会い、見た夢のことを話した。アブー・バクル様は彼に「あなたの夢は真実です。あなたが見た人物はアッラーの預言者様でしょう。すぐに行って、彼に従うのです。あなたは彼に従って伝えられた宗教に入り、彼とともにいることになるでしょう。彼はあなたが夢で見ていたとおり、地獄に落ちるのを防いでくれるのです。しかし、あなたの父上は、地獄にいることになりましょう」と言った。ハーリド・ビン・サイード様はまだその夢の名残を感じていた。時間をおかずにエジヤドという場所に行き、ムハンマド（アライヒッサラーム）の前に上がった。そして「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたは人々に何を呼びかけているのですか？」

と尋ねた。預言者様は「私は人々に対して、並ぶものがなく比べるものもないアッラーを信仰し、ムハンマド（アライヒッサラーム）がアッラーのしもべであり預言者であるということを信じるようにと、そして、聞くこともできず見ることもできず、利益も不利益も与えることができず、自分自身が崇められているかどうかも分からない石を崇めるのをやめるようにと説いているのです」と返事をした。すると、ハーリド・ビン・サイードはすぐに「私は証言します。アッラー以外に神はありません。そして、証言します。あなたはアッラーの預言者であります」と言ってムスリムとなった。彼がムスリムとなったことに預言者様は大変喜んだ。

　ハーリド・ビン・サイード様は兄弟たちもムスリムになることを願い、そのために努力をした。その中でウマル・ビン・サイードもムスリムとなった。しかし、イスラームの激しい敵である父親のアブー・ウハイハは、ハーリドとウマルがムスリムとなり、マッカの人気のない所で礼拝していたことを知ると、まだムスリムになっていなかった子供たちをやって彼らを連れてこさせた。そして、新しく入った宗教から離れるようにと言うのだった。叱りつけ、殴り始めた。それから、ハーリド・ビン・サイードに「お前はムハンマド（アライヒッサラーム）に従うのか。だが、彼は自分の部族に反抗をし、我々の像や祖先を侮辱しているのをお前たちも見ているはずだ」と言った。しかし、ハーリド・ビン・サイード様は「アッラーに誓って言いますが、ムハンマド（アライヒッサラーム）は真実を語っているのです。私は彼に従います。死んでも宗教から離れることはありません」と言い返した。父親の怒りは増幅し、こん棒が折れるまで殴ってから「役立たずの息子め！　好きなところへ行け。誓ってお前にはもう糧を与えることはない」と言い放った。ハーリド様は「あなたが私に糧を与えなくなったとしても、もちろんアッラーが私に糧を恵んでくださるでしょう」と答えた。父親は他の子供たちに「お前たちが彼と話したなら、同じことをしてやるぞ」と言って脅した。ハーリド様を家の牢に閉じ込め、三日間マッカの暑さの中、食べ物も水も与えずに放置しておいた。

　ハーリド・ビン・サイード様はなんとか父親の手から解放された。父親はその後、激しい病気にかかった。アブー・ウハイハは病気で伏していても、イスラームに対する敵意をみせて「病気が治って起き上がったら、マッカにいる者は一人残らず、我々の像を崇めることになるだろう。誰もそれら以外に祈ることなどできないのだ」と言っていた。ハーリド様は、父親の宗教に対する敵意が終わり、ムスリムの兄弟に危害が及ばないようにと両手を上げて「万物を創造したアッラーよ！　父をこの病から治すことがありませんように」と祈った。アッラーは彼の願いを聞き入れ、アブー・ウハイハは病気のまま床で死んだ。

ムスアブ・ビン・ウマイルがムスリムとなる

　ムスアブは、クライシュ族の生まれの良い、裕福な家族の一員だった。預言者様の神聖な言葉を聞くと、心に大きな情愛が芽生えた。彼に会いたいという望みでいてもたってもいられなくなった。ついに、アルカム様の家へと行き、ムスリムとなった。それを聞いた両親は彼を虐待し始めた。宗教を戻そうと、家の牢に閉じ込めて何日も水や食べ物を与えなかった。アラブの焼けるような太陽の下で、非常に重く耐え難いほどの虐待を行った。しかし、ムスアブ・ビン・ウマイル様は、このような厳しく慈悲のない虐待に耐え、イスラームから離れることはなかった。

　ムスアブ様はムスリムとなる前は家族が裕福であったため、贅沢でゆとりのある中で育っていた。誰もが彼をうらやんでいた。ムスリムとなると、家族はすべてを彼から奪い、虐待を行った。宗教のためにさまざまな苦しみに耐えていたムスアブは、ある日預言者様の前に上がった。彼が来たときのことについて、アリー様はこう語っている。「預言者様と座っていました。そのとき、ムスアブ・ビン・ウマイルが来ました。継ぎ当てだらけの服を着て、哀れな様子でした。預言者様が彼のこの状態を見ると、神聖な目は涙でいっぱいになりました。ムスアブがこのような虐待や困窮に面しても、宗教から離れないことについて『アッラーが心を光で満たした人を見てください。今まで、両親が彼をよい食べ物や飲み物で育てるのを見てきました。アッラーや預言者への愛情のために、彼はこのような苦労を負っているのです』とおっしゃいました」

エチオピア（アクスム王国）への移住

預言者様が預言者となって五年目の頃、不信仰者たちの虐待があったにもかかわらず、ムスリムの数は増え続けていた。しかし、不信仰者たちは暴力を増やし、あらゆる手を尽くしていた。預言者様は、教友たちに対する耐え難い虐待、足を紐でラクダに結びつけ逆方向に歩かせて体を砕くといった暴力に大変悲しんでいた。このような虐待が毎日一層ひどくなっていて、憐みに満ちた心を持つ預言者様はこれらのことに耐えられなかった。ある日、教友たちを集め「教友たちよ！今、あなた方は世界へと散るのです。アッラーが近いうちにあなた方をまた集めるでしょう」とおっしゃった。彼らは「預言者様、どこに行ったらよいでしょうか?」と尋ねた。預言者様は手でエチオピアの国を示し「そう、あそこへ。エチオピアの国に行くのです。なぜなら、そこには誰に対しても虐待を行わない王がいるからです。しかもそこは、誠実な国です。アッラーがあなた方の背負う苦痛の出口を開いてくださるまで、あなた方はそこにいるのです」とおっしゃった。世界の王、ムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）は、このようにして教友たちを虐待から解放し、マッカの不信仰者たちに対しては一人で戦うことにしたのである。誕生の際に「ウンマティ！ウンマティ！（我が共同体よ！）」と言っていた愛すべき預言者様は、教友たちを楽にするため自分が犠牲となったのである。この許可に基づいて、教友たちの一部は祖国を離れ、移住をすることになった。しかし、愛する預言者様から離れることになるため、悲しみでいっぱいとなっていた。

この初の移住では、ウスマーン様とその夫人であるルカイヤ・ビンティ・ラスールッラー（預言者様の娘であるルカイヤ様）、アブー・フゼイフェとその妻のセフレ・ビンティ・スヘイル、ズバイル・ビン・アウワーム、ムーサー・ビン・ウマイル、アブドゥルラハマーン・ビン・アウフ、アブー・サラマ・ビン・アブドゥルアサドとその妻のウンム・サラマ、ハティブ・ビン・アムル、アムル・ビン・ラビーアとその妻のライラ・ビンティ・アブー・ハスメ、ウスマーン・ビン・マズウーン、アブー・セブレ・ビン・アビー・ルフムとその妻のウンム・ギュルスム・ビンティ・スヘイル、

スヘイル・ビン・ベイダー、アブドゥッラー・ビン・マスードらが加わっていた。

預言者様はウスマーン様について「ウスマーンは間違いなく、預言者ルート様以降で、妻とともに移住した初めての者なのです」とおっしゃっている。教友たちの一部は動物に乗り、一部は徒歩で、秘密裏にマッカから出発した。そして商人たちに費用を払い、船で紅海からエチオピアの海岸へと到着した。不信仰者たちはこのことを知って追いかけていった。しかし、徒労もむなしく、何もできずに戻ってきた。

エチオピアのアクスム王国の王・ネジャーシは、ムスリムたちに対して丁重に接してくれた。そして、自分の国にかくまった。教友たちはエチオピアについて「我々はよい近隣や庇護の中にあります。私たちの宗教がとやかく言われることも、痛めつけられることもありません。気を悪くする言葉を一つとして受けることはないのです。安らぎの中で、アッラーに祈りを捧げています」と語っている。

ハムザ様がムスリムとなる

イスラームの声は毎日耳から耳へと広がっていき、一層遠くへとあふれていった。この状況を見たクライシュ族の不信仰者たちは、怒り狂って熱心に妨げようとしていたにもかかわらず、イスラームの広がりを止めることはできなかった。

『デラーイル・ウン・ヌブッベ』と『メアーリジュ・ウン・ヌブッベ』では次のように書かれている。不信仰者のワリードという名の者が、ある像を持っていた。彼らはサファーの丘の上に集まり、この像を崇めていた。ある日、預言者様が彼らのところへ行き、不信仰者たちに信仰をするよう語りかけた。そのとき、不信仰者のあるジンがその像の中に入り込み、預言者様について不適切な言葉を発した。万物の王である預言者様は大変悲しまれた。すると、別の日、姿の見えないあるジンが、預言者様に挨拶をし「預言者様よ！不信仰者のジンがあなたについて、不適切なことを言っ

ていたそうです。私は彼を見つけて殺しました。よろしければ、明日、サファーの丘の上にいらしてください。あなたは、また彼らにイスラームを紹介するのです。今度は私がその像の中に入り、あなたを手助けする言葉を言いましょう」と話した。預言者様はアブドゥッラーという名のこのジンの提案を受け入れた。

愛すべき預言者様は翌日そこへ向かい、不信仰者たちに対して改めて信仰するように伝えた。アブー・ジャフルもそこにいた。そのときムスリムのジンが不信仰者たちの持っていた像に入り込み、愛すべき預言者様やイスラームを説明するよい言葉や詩を述べた。不信仰者たちはこの言葉を聞くと、持っていた像を粉々にし、預言者様を襲った。神聖な髪はめちゃくちゃにされ、神聖な顔は血だらけとなった。預言者様は彼らのこのような暴力や拷問に耐え「クライシュ族よ！　私を殴ったとしても、私はあなた方の預言者なのです」とおっしゃり、そこを立ち去って家に戻った。一人の召使の少女が、この出来事を最初から最後まで見ていた。

ちょうどこの頃、ハムザ様は山で狩りをしていた。あるガゼルに矢の狙いを定めたところ、ガゼルが話し始めた。「ハムザよ！　私に矢を放つより、兄弟の息子を殺そうとしている者に対して矢を放った方がよいのではないか？」と言うのだった。ハムザ様はこの言葉に驚き、急いで家に向かった。習慣として狩りから戻ったときには、カアバの周りを周回してから家に戻ることになっていた。その日、カアバを周回していると、召使の少女がやって来た。そして、アブー・ジャフルが預言者様にしていたことを知らせた。ハムザ様は、預言者様が侮辱されたことを聞くと、親戚に対する仕打ちに血が頭にのぼった。武器を持ち、不信仰者たちがいたところへとやって来た。「兄弟の息子に対し、悪いことを言って心を傷つけたのはお前たちか。ほら、私の宗教も同じ宗教だ。できるものなら、彼にしていたことを私にもやってみろ」と言って、首にかけていた弓でアブー・ジャフルの頭を叩き割った。そこにいた不信仰者たちは、ハムザ様を襲おうとした。しかし、アブー・ジャフルは「手を出すな。ハムザは正しい。甥に悪いことを言った」と言うのだった。ハムザ様がそこからいなくなると、周りの人々に「彼を刺激しない方がいい。我々に怒ってムスリムになるかもしれない。するとムハンマド（アライヒッサラーム）が一層力を持つことになるのだ」と言った。ハムザ様がムスリ

ムとなるのを防ごうと、頭が割れたことにも我慢したのだった。ハムザ様が人々から尊敬を集め、力もある人物であることをよく分かっていたのである。

ハムザ様は預言者様のもとへ行き「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！　アブー・ジャフルの仇をとりました。彼を血に染めてやったのです。悲しまずに、喜ぶのです」と言った。しかし、愛すべき預言者様は「私はそのようなことには喜びません」とおっしゃった。ハムザ様が「あなたを喜ばせ、悲しみを取り除くのであれば何でもしよう」と言うと、預言者様は「私はただ、あなたが信仰し、その尊い身体が地獄の炎から守られるようになることによって喜ぶのです」とおっしゃった。ハムザ様はすぐにムスリムとなった。このときのことについては、クルアーンの節でも言及されている。アブドゥッラー・イブン・アッバース様は「クルアーンの『家畜章（アル・アンアーム）』の一二二節で『死んでいたものに、われは生命を授け、また光明を与える。これによって人々の間を往来する者』と示されているのは、ハムザ様のことであるとされています。また、同じ節の『暗黒の中にあってそれから出られないような者』というのはアブー・ジャフルを指しています」と伝えている。

ハムザ様は不信仰者たちのところへ行き、自分がムスリムとなったことや、アッラーの最愛の者であるムハンマド（アライヒッサラーム）に命を捧げ、彼を守ることを伝えた後、ある頌詩を詠み上げた。それは「心をイスラームや真実に傾け、アッラーに感謝する。この宗教は人々が行うすべてを知り、あらゆるものに恩恵を与え、あらゆるものに勝利する力を持つ万物の神アッラーからもたらされたものである。クルアーンが詠まれれば、心ある者や頭ある者は、目から涙を流す。クルアーンは明らかな言葉で語られた章句として、ムハンマド（アライヒッサラーム）に下された。そのムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）の言葉は我々の中で信じられ、彼は頭を垂れるべき神聖な人物である。不信仰の者たちよ、頭は飛び、目は見開かれる。彼に対して、厳しい言葉や、重く不作法な言葉を発してはならない。もし、そのようなことを流布するのなら、我々ムスリムの遺体を踏み越えずして、誰も彼に手出しをすることはできないのだ」というものだった。

ハムザ様がムスリムとなったことに預言者様は大変喜んだ。ムスリムたちも、彼が仲間になったことで大いに勇気づけられた。

ハムザ様がムスリムになると、状況は変化した。なぜなら、マッカの人々は、ハムザ様が戦士であり、勇敢で頼もしく、力を持った、最大の英雄であることを知っていたからである。そのため、クライシュ族の不信仰者たちは、もはやムスリムたちに理由もなしに悪いことをしないようになった。特に、ハムザ様のサーベルの力は恐れられていたのである。

ウマル様がムスリムとなる

イスラームは日々広がっていき、クルアーンの光が人々の魂を明るくさせていた。罪深き人々は、アッラーの慈悲によって信仰し、正しい道に巡り合っていったのだった。教友という名誉を授かった人々は、手に手をとり、心と心を通わせていた。常に預言者様とともにいて、彼のほんのわずかな望みや指図を、とても大きな命令であるかのように受け入れ、それを実行するために競い合い、そのためとあらば命を捧げることも厭わなかった。一方、不信仰者たちの混乱と恐れは最高潮に達していた。なぜなら、指で示すほどの英雄であるハムザがムスリムとなり、預言者様の側についたためであった。この出来事は不信仰者たちを完全に激怒させていた。そこで、ハッターブの息子のウマル（当時はまだムスリムとなっていなかった）が、ある日、預言者様を見つけ次第殺そうと考えて家から出た。そして、愛すべき預言者様がカアバで礼拝しているのを見つけた。礼拝が終わるのを待つ間、耳を傾けていた。預言者様は、『真実章（アル・ハーッカ）』を詠んでいた。『確かな真実。確かな真実とは何か。確かな真実が何であるかを、あなたに理解させるものは何か。サムードとアード（の民）は、突然来る災厄を虚偽であるとした。それでサムードは雷雲の嵐によって滅ぼされた。またアードは、唸り狂う風によって滅ぼされた。七夜八日にわたり、かれらに対し絶え間なく（嵐が）襲い、それで朽ちたナツメヤシの木のように、（凡ての）民がそこに倒れているのを、あなたは見たであろう。

それであなたは、かれらの中、誰か残っている者を見るのか。また、フィルアウンやかれ以前の者や滅ぼされた諸都市（の民）も、罪を犯していた。かれらは主の使徒に従わないので、かれは猛烈な懲罰でかれらを処罰した。大水のとき、われが方舟であなたがたを運んだのは、それをあなたがたへの教訓とさせ、注意深い耳がそれを（聞いて）記憶に留めるためである。それでラッパが一吹き吹かれた時、大地や山々は持ち上げられ、一撃で粉々に砕かれ、その日（一大）事件が起る。また大空は千々に裂ける。天が脆く弱い日であろう。天使たちは、その（天の）端々におり、その日、八人（の天使）がかれらの上に、あなたの主の玉座を担うであろう。その日あなたがたは（審判のため）みな剥き出しにされ何一つとして隠しおおせないであろう。それで右手にその（行状）記を渡される者は言う。「ここに（来て）、あなたがたはわたしの（行状）記を読め」「いずれわたし（信者）の清算（審判）に合うことが、本当に分っていた」こうしてかれは至福な生活に浸り、高い（丘の）園の中で、様々な果実が手近にある。「あなたがたは、過ぎ去った日（現世）で行った（善行）のために、満悦して食べ、且つ飲め」（と言われよう）。だが左手にその（行状）記を渡される者は言う。「ああ、わたしの（行状）記が渡されなかったならば」「わたしは自分の清算が、どんなものであるかを知らなかった」ああ、その（死）が（わたしの）終末であったならば。富は、わたしに役立たなかった。「権威は、わたしから消え失せてしまった」（だが厳命が下ろう。）「かれを捕えて、縛れ」それから燃え盛る火で、かれを焼け。更に七〇腕尺の長さの鎖で、かれを巻け。本当にかれは、偉大なるアッラーを信じず、また貧者を養うことを勧めなかった。それでこの日かれは、そこに友は無く、また穢しい腐敗物の外に食物はない。「それを食べるのは、罪人だけである」…』

ウマル様は預言者様が詠んでいたものを感じ入って聞いていた。人生の中で、このような言葉を聞いたことはなかった。これらのことについて、後にこう語っている。「聞いていたとき、これらの言葉の雄弁さや滑らかさ、正当性に直面して、心を打たれました。そして自分自身に『誓ってこれはクライシュ族の言うとおり、彼は詩人であろう』と思いました。そのとき、預言者様はクルアーンの節を詠み続けていました。『われは、あなたがたが見得るものにおいて誓い、またあなたがたが見得ないものにおいて誓う。本当にこれは、尊貴な使徒の言葉である。これは詩人の言葉で

はない。だがあなたがたはほとんど信じない。…』」
ウマル様は再び自分自身に「彼は占い師であろう。なぜならば考えていたことを分かったのだから」と考えた。預言者様はクルアーンの節を詠み続けた。『また、占い師の言葉でもない。しかしあなたがたはほとんど気にもしない。(これは)万有の主から下された啓示である。もしかれ(使徒)が、われに関して何らかの言葉を捏造するならば、われはきっとかれの右手を捕え、かれの頸動脈を必ず切るであろう。あなたがたの中、誰一人、かれを守ってやれないのである。本当にこれは、主を畏れる者への訓戒である。われはあなたがたの中、(それを)拒否する者を知る。本当にこの(クルアーン)は、不信者にとっては悲しみ(の種)であろう。だがそれは、本当に確固たる不動の真理である。だから至大なる御方、あなたの主の御名を讃えなさい。』
ウマル様は「預言者様が詠み終わった後、心がイスラームに対して傾くようになりました」と語っている。
ハムザ様がムスリムとなった三日後、アブー・ジャフルは不信仰者たちを集め「ムハンマド(アライヒッサラーム)は像のことを悪く言っています。我々以前の祖先が地獄で罰を受けていて、我々もそこへ行くと言っているのです。彼を殺すしかありません。彼を殺した者には百頭の赤いラクダと、数えきれないほどの金を与えよう」と言った。すると、ハッダーブの息子のウマルの心からは、イスラームに対して傾いた心がかき消され、思わず飛び上った。そして「それを、ハッダーブの息子以外にできる者はありません」と言った。これを受けて「さあ、ハッダーブの息子よ！やってみるのだ」と声がかかり、彼に拍手が送られた。
彼は刀をつけて道に出た。途中、ヌアイム・ビン・アブドゥッラーと出会った。「そのような激昂と憤怒の中で一体どこに行くのですか、ウマルよ」と聞かれたので、彼は「人々の間に不和を持ち込み、兄弟を互いに敵とさせたムハンマド(アライヒッサラーム)を殺しに行くのだ」と答えた。するとヌアイムは「ウマルよ！それは大変なことです。教友たちは彼の周りをプロペラのように周って、彼に何も起こらないように気を遣っているのですから。彼らに近づくのは大変困難です。彼を殺したとしても、アブドゥルムッタリブ家があなたの命を放っておくことはないでしょう」

と言った。ウマル様は、この言葉に大変怒り「もしや、お前も彼らの仲間なのか。まずはお前から片付けよう」と刀に手をかけた。すると「ウマルよ！私のことなど放っておいて、妹のファーティマとその夫のサイード・ビン・ザイドのところへ立ち寄ったらどうだ。彼らもムスリムとなったのだ」と言った。ウマル様はこの言葉を信じなかった。しかし「もし信じないのなら、聞いてみたら分かるだろう」と言われた。
もし、ウマル様がこの引き受けた役目を成功させ、宗教を元に戻したとしても、アラブの習慣である殺害に端を発する部族間の復讐が引き起こされ、クライシュ族は二つに割れて終わりのない抗争が始まるだけのことなのだった。そして、ウマル・ビン・ハッタープのみならず、ハッタープ家の全員が殺されることになったであろう。しかし、ウマル・ビン・ハッタープは、大変な腕力を誇り、勇敢で、ひどく怒っていたため、そのようなことを考える余裕はなかったのである。妹のことを心配し、すぐに彼らの家に向かった。そのとき『ター・ハー章』が新しく下されたところだった。サイードとファーティマは、ハッバーブ・ビン・アレド様という教友の一人を自分たちの家に連れて来て、その章を書いてもらって詠んでいた。ウマル様は、外から彼らの声を聞いた。扉を激しく叩いた。刀を腰につけ、非常に怒っている様子を見ると、夫婦は書いたものやハッバーブ様を隠し、それから扉を開けた。彼は中に入ると「何を読んでいたのだ?」と聞いた。彼らは「何でもありません」と答えた。怒りは増していき「聞いた噂はどうやら本当のようだ。お前たちも彼の魔術にだまされたらしいな」と吐き捨てた。そして、サイード様の襟首をつかみ、床に叩きつけた。妹は自分の身を守ろうとしていたが、彼は怒りに任せて顔を平手打ちした。顔から血が出たのを見ると、妹への同情心が現れた。ファーティマは怪我をして血だらけとなった。しかし、信仰の力が自分を動かし、アッラーに身を寄せながら「ウマル様よ！アッラーに対して恥とは思わないのですか。クルアーンの章句や奇跡を携えた預言者様をなぜ信じないのですか。ほら、私も夫もムスリムとなる名誉に与ったのです。私の頭を切ったとしても信仰を変えることはありません」と言って、信仰告白の言葉を唱えた。
ウマル様は妹のこの言葉に心を和らげ、床に座った。穏やかな声で「まず、その読んでいたものを持ってくるのだ」

と言った。しかし、ファーティマは「あなたが清浄にならないかぎり、渡すわけにはいきません」と答えた。ウマル様は体を洗った。そしてファーティマはクルアーンの章句が書かれたものを持ってきた。ウマル様は読むのが達者だった。『ター・ハー章』を読み始めた。クルアーンの流麗さや雄弁さ、そして意味深く優れた特性が、ますます彼の心を和らげていった。

『天にあり地にあるもの、そしてその間にある凡てのもの、また、湿った土の下にあるものは、凡てかれのものである。』（ター・ハー章第六節）という箇所を読み、深く考え始めた。「ファーティマよ！この尽きることのない豊かさは、全てはお前たちが祈りを捧げていたアッラーのものなのか？」と聞いた。妹は「はい、その通りです。疑いの余地もありません」と返事をした。「ファーティマよ！我々には千五百ほどの金や銀、銅や石で飾りつけられた像があるが、それらは何一つ所有はしていないのだ」と言って驚嘆し続けていた。そしてもう少し読み続けた。

『アッラー、かれの外に神はないのである。最も美しい御名はかれに属する。』（ター・ハー章第八節）という箇所を考えた。そして「確かにそのとおりだ」と言った。ハッバーブはこのことを聞くと、飛び出してタクビールを口にして「吉報だ、ウマルよ！預言者様はアッラーにこのように願っていたのです。『アッラーよ。アブー・ジャフル、もしくは、ウマルがこの宗教を受け入れることで我々を強くさせてください』とおっしゃっていたのでした。そう、この幸運や幸福があなたに叶ったのです」と言った。

このクルアーンの章句や預言者様の願いは、ウマル様の心にあった敵対心をなくしていった。すぐ「預言者様はどこにいらっしゃるのですか？」と尋ねた。心は預言者様へと打たれていた。その日、預言者様はアルカム様の家で、教友たちに講話を行っていた。教友たちは集まって、預言者様の光にあふれた顔を見ては心やすらぎ、力のある言葉を聞いては心を磨き、永遠の味わいと喜び、愉しみの中を往来していた。

そのとき、ウマル様がやって来るのがアルカム様の家から見えた。刀も持っていた。威風堂々した大力であったため、教友たちは預言者様の周りを取り囲んだ。すると、ハムザ様が「ウマルのことを避ける必要はありません。良い意図

で来ているのであればそれでよろしい。そうでなければ、刀を引き抜く前に頭を切るまでだ」と言い、預言者様も「道を開けなさい。中に入れるのです」とおっしゃった。

大天使ジブリール様は事前に、ウマル様が信仰するためにやって来ることを知らせていたのであった。預言者様は微笑みをたたえながらウマル様を迎え、皆には「周りから離れてください」とおっしゃった。ウマル様は預言者様の前でひざまずいた。預言者様がウマル様の腕をとり「信じるのです、ウマルよ」とおっしゃると、彼は美しい心をもって信仰告白の言葉を述べた。教友たちもこのことに喜び、空高くタクビールを叫んだのであった。

ウマル様はムスリムとなった後、当時の状況をこのように語っている。「私がムスリムとなったとき、教友たちは不信仰者たちから隠れていて、礼拝も隠れながら行っていました。私はこのことに大変悲しんでいました。そして『預言者様よ！私たちは真実の道にいるのではないですか？』と尋ねました。預言者様は『はい。私の命を預かっているアッラーに誓って、死んでいようが生きていようが、間違いなく真実の道にいるのです』とおっしゃいました。これを受けて私は『預言者様よ！私たちは真実の道の上にいて、不信仰者たちが虚実の道にいるというのに、なぜ宗教を隠す必要があるのでしょうか。誓って私たちには、不信仰者に対してイスラームを明示する権利があって然るべきです。アッラーの宗教がマッカで必ず勝利するのです。私たちの民族が、私たちに対して良心的な行動をとるのであればそれでよいし、もし、異常な行動をとるのであれば、彼らと戦うまででしょう』と言いました。これに対して預言者様は『私たちは数が少ないのです』とおっしゃいました。

『預言者様よ！あなたを預言者として送ったアッラーに誓って言いますが、心配することも恐れることもせずに、イスラームを説明しましょう。すべての不信仰者たちに説明します。もう明らかにする時期なのです』と言いました。それが認められると、私たちは二列になって外へと出ました。カアバに向って歩き出したのです。そのうちの一列の先頭にはハムザ、もう一列の先頭には私がいました。力強い足取りで、土を粉じんにするかのように土埃をあげながら、カアバへと入っていきました。クライシュ族の不信仰者たちは、私とハムザを見ていました。かなりの悲嘆と苦悩に

見舞われていました。恐らく、人生において、このような苦悩に落ちたことはなかったのでした」
ウマル様がこうして現れたことに対し、アブー・ジャフルが前に出て来て「ウマルよ！　どうしたのだ。一体これはどういうことだ」と聞いた。ウマル様は気にも留めず「アシュハド・アンラー・イラーハ・イッラッラー、ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ」と言った。アブー・ジャフルは何を言っているのか分からず、その場に固まっていた。ウマル様が不信仰者たちに向って「クライシュ族よ！　私を知る者は分かっているだろう。知らないものは知るがいい。私はハッターブの息子、ウマルである。妻を寡婦にしてしまいたい者や、子供を孤児にしてしまいたい者はそのままでいるのだ。戦いの未熟者や歯向かった者は刀で切り刻み、地面に広げてみせよう」と言うと、クライシュ族の不信仰者たちは一瞬にして散り散りになり、その場から離れていった。預言者様と神聖な教友たちは、横一列になって大声でタクビールを行った。マッカの空は教友たちの「アッラーフ・アクバル、アッラーフ・アクバル！」という叫び声にこだました。初めてカアバで隠れずに礼拝が行われたのである。

ウマル様がムスリムとなると『戦利品章（アル・アンファール）』第六四節が下された。『使徒よ、あなたにはアッラーがいる。また信徒の中であなたに従う者がいれば十分である。』という内容である。ためらっていた人々は、ウマル様がムスリムとなるのを見ると、イスラームを選び、教友たちの仲間に入るという名誉を与えることになった。毎日、ムスリムとなる人の数が雪崩のように増えていった。

エチオピアへの二度目の移住

エチオピアに住んでいたムスリムたちの間で「マッカでは、不信仰者たちとムスリムとの間で協定が結ばれたようだ」という誤った知らせが広まっていた。そのため「私たちが移住し、慣れ親しんだ場所や国を離れたのは、不信仰者たちの敵意があったためなのです。協定によってその敵意が消え、親友となったのであれば、帰って預言者様の手伝い

をするという名誉に与ろう」と考えた。そして、エチオピアの王から許可をもらってマッカへと帰っていった。しかし、その情報は誤りであったことが判明した。預言者様の前に上がり、エチオピアの水や天候、果実から得られる活力について、あるいは礼拝する場所が四ヶ所あり、毎日ラクダや羊が食卓に上がって貧者や身寄りのない人にも振る舞われること、国王が自分たちを訪ね、苦しみがなくなったことについて長く話し、そこでの快適さを説明した。

教友たちがマッカに戻ると、不信仰者たちは再び苦難や拷問を与え始めた。虐待は一層大きくなっていった。恐れもなくあらゆる拷問を行っていた。そのようなある日、ウスマーン様が「預言者様よ！　エチオピアは良い貿易相手です。一ヶ月の交易で、それなりの利益を得られましょう。アッラーが移住の場所を決めるまで、ムスリムたちにとってそこより良い場所はありません。少なくとも、信者たちは不信仰者たちの拷問から逃れられるでしょう。王のネジャーシも私たちに良く接してくれています」と述べた。これに対して預言者様は「もう一度、エチオピアに戻りなさい。そして、アッラーの名の下で護られますように」とおっしゃった。

ウスマーン様は「預言者様！　もしあなたが向こうへいらっしゃるのであれば、もしかしたら、彼らもムスリムとなるかもしれません。彼らも同じ神を信じているのですからイスラームへの入信も易しく、助けとなることでしょう」と言った。しかし、愛すべき預言者様はこうおっしゃった。「私は平穏に安寧としていることを命じられているわけではないのです。私の移住については、アッラーからの命令を待ちましょう。命じられたことを実践するのです」

一説によると、二度目の移住では百人のキャラバンがエチオピアに向かったという。このキャラバンの隊長には、ジャーヒル・ビン・アブー・ターリブ様が指名された。彼らは無事に王のネジャーシの国へと到着した。エチオピアであった出来事について、愛すべき預言者様の尊い妻であるウンム・サラマ様はこう語っている。

「エチオピアに到着し、大変良い近隣に恵まれました。この近隣というのは王のネジャーシでした。彼はいつも私たちの希望をきいてくれました。私たちの宗教上の義務も自由にさせてくれました。隠れることなくアッラーに祈り、決して暴力を受けることはありませんでした。また、決して悪い言葉を聞くこともありませんでした」

マッカの不信仰者たちはこの情報を耳にすると、エチオピアの王へ二人の特使を派遣することに決めた。王のネジャーシに対して、大変高価な贈物も用意した。ネジャーシの好みにあわせたマッカのなめし革もたくさん準備した。ネジャーシの臣下や宗教家にも贈物を用意した。特使としてアブドゥッラー・ビン・アブー・ラビーアと、アムル・ビン・アスが任務にあたった。この二人の特使は、王の前に上がったときに何を話すのか事前に言い含められていた。「王と話す前に、彼の総主教たちや司令官たちに贈物をあげなさい。ネジャーシに贈物を渡すのはその後です。それから、そこにいるムスリムたちをあなた方に引き渡してもらうように申し出るのです。王のネジャーシがムスリムたちと話しをする機会を与えないようにしなさい」と言われていた。

特使の二人はエチオピアに到着した。臣下たちに贈物を渡した後、一人ひとりに「私たちの中からある一団が現れました。彼らは私たちやあなた方の知らない新しい宗教を作り上げたのです。ここに来た者たちを自分の国に連れて帰りたいと考えています。私たちが王と話しをする際には、ここに来ていた人たちと王が話す前に、私たちに引き渡してもらえるよう約束してください。彼らの面倒を最もよく見てくれるのは、実の両親や近隣の者たちなのです。彼らもそのことをよく知っているはずです」と言って回った。総主教たちはこの話を受け入れた。その後、マッカの特使は王のネジャーシへ贈物を手渡した。彼は贈物を受け取り、しばらくの間話をした。

特使はネジャーシにこう言った。「王よ、私たちの間の一部の人々が、あなたの国に移住しました。彼らは自国の宗教を放棄し、あなた方の宗教にも与することはありません。彼らに都合がよいように宗教を作り上げたからです。私たちもあなた方もあの宗教のことを知りません。彼らが属する部族の名士たちが、私たちをここへ送りました。その名士たちというのは、あなたの国に亡命した人々の父や親戚であります。彼らの望みは、移住した者たちを戻してもらいたいということなのです。なぜなら、彼らは移住した人々のことを最もよく知っているからです。移住した人々が自分たちの元の宗教のことをよく思っていないことも、名士たちは誰よりもよく知っているのです」アムル・ビン・アスも、アブドゥッラー・ビン・ラビーアも、こういった言葉を聞けば、ネジャーシも自分たちの希望通りに対応し

てくれると期待していた。ネジャーシの総主教たちも話を始めた。

「彼らは事実を話しています。同じ部族の方が、彼らの面倒をよく見ることができますし、彼らが何を気に入り、何を気に入らないのかもよく分かっています。ですから、あの移住した人々を引き渡しましょう。特使たちに自分たちの国、そして部族のもとへと連れて帰ってもらうようにしましょう」

ネジャーシはこの言葉に大いに立腹し「アッラーに誓って、そうはしません。私は彼らを引き渡しません。私のもとに移住し、私の国に来た人々を裏切ることはしないのです。彼らは、他でもなく私を選んで私の国にやって来ました。ですから、移住した人々を私の宮殿に招待し、彼らが何を話すのか、その返事を聞くことにします。もし移住者たちが、特使が言ったとおりのことを話すのであれば、引き渡して自分たちの国に帰しましょう。しかし、そうでないのであれば彼らを保護し、私の国にいる間は面倒をみることとします」と言った。これに先立って、ネジャーシは一神教について調べていた。ムハンマド（アライヒッサラーム）が来る時期が近いことや、彼の民が彼のことを嘘つきだと言って信じないこと、そして、マッカから追い出されることを知っていたのだった。

ネジャーシは、マッカから来た特使たちに「彼らが信じているのは誰ですか？」と尋ねた。特使たちは「ムハンマド（アライヒッサラーム）です」と答えた。ネジャーシはこの名を聞くと、彼が預言者であることを悟ったが、それを表には現さなかった。そして、特使に改めて聞いた。「彼の宗教や信条はどういったものでしょうか。そして何を勧めているのでしょうか？」アムルが「彼の信条はありません」と答えた。ネジャーシは「彼らの信条や宗教も知らないのに、私のもとへ移住した人々をどうやってあなたに引き渡すというのですか。会議を開き、彼らを呼ぶことにします。あなた方と面と向って話し合うのです。すべての状況が明らかになるでしょう。そして彼らの宗教のことも分かることになるでしょう」と言った。

ムスリムたちが宮殿に招かれた。

ムスリムたちは行く前に、皆で話し合った。「王が気に入るように、彼の気質に合うように何と言ったらよいのだろ

う」と相談したのだった。すると、ジャーヒル様が「アッラーに誓って、我々がこの件で知っていることは、預言者様が私たちにおっしゃったことしかありません。結果がどうあれ、それで納得しましょう」と言った。全員がこれに一致した。そして、ジャーヒル様だけが話すことに決め、ネジャーシのもとへと向かった。王も学者たちを集め、御前会議を開いた。移住者たちがやってきた。ムスリムたちは、宮殿に来たときに挨拶はしたが、お辞儀はしなかった。ネジャーシが彼らに「なぜお辞儀をしなかったのですか？」と尋ねると「私たちはアッラー以外には頭を垂れないのです。預言者様は私たちにアッラー以外にお辞儀することを禁じ『お辞儀はただアッラーだけにするものです』とおっしゃったからです」と返事をした。

ネジャーシは移住者たちに「私のもとに来た人々よ、答えるのです。なぜ私の国に来たのですか。あなた方の状況はどのようなものだったのですか。あなた方は商人でもないし、欲するものもありません。あなた方の中から出た預言者は、今どういう状態にあるのでしょうか。なぜ、あなた方の国から来た人と同じように挨拶をしないのですか」と聞いた。これを受けてジャーヒル様は

「王よ！ 私はまず三つのことを言いましょう。もし、真実を語っているのなら、私のことをお認めください。もし嘘を言っているのなら、私を拒絶してください。何よりも前に、この人々の中から一人だけが話すことをお命じください」と言った。するとアムル・ビン・アスが「私が話そう」と言い出した。ネジャーシはさえぎって「ジャーヒルよ！まずあなたが話しなさい」と言った。ジャーヒル様は「私には三つの話があります。その人に聞いてみてください。私たちは果たして、捕えられて所有者に送還される奴隷でしょうか」と言った。王のネジャーシは「アムルよ、彼らは奴隷なのですか」と尋ねた。アムルは「いいえ、彼らは奴隷ではありません。自由人です」と答えた。次にジャーヒル様は「私たちは果たして、不正に人の血を流して逃げ、そのために送り返される者たちなのでしょうか」と言った。ネジャーシがアムルに「彼らは、誰かを不正に殺したのですか」と尋ねると、アムルは「いいえ、血は一滴も流してはいません」と答えた。さらにジャーヒル様はネジャーシに「私たちは他人の物を不正に横取りしたり、返さないといけない物がまだ残っているのでしょうか」と聞いた。するとネジャーシは「アムルよ、もし彼らに払うべき金品が多く残っているのなら、その返済は私が行うと伝えるのだ」と言った。しかし、アムルは「いいえ、そのようなものは一銭もありません」と答えた。ネジャーシが「そうであれば、あなた方は彼らから一体何を求めているのですか」と尋ねると、アムルは「彼らと私たちは一つの宗教、一つの道にいたのです。しかし、彼らはそこから離れ、ムハンマド（アライヒッサラーム）やその宗教に従ってしまったのです」と答えた。そこで、ネジャーシはジャーヒルに「あなた方は、なぜかつての宗教を離れ、別の宗教に従ったのですか。自分の民族の宗教から離れ、また、私の宗教に入ることもないのであれば、あなた方が信じる宗教とはどういうものなのでしょうか。それについて答えるのです」と言った。

ジャーヒル様は「王よ、私たちは無知な民でした。像を崇めていたのです。死んだ動物の肉を食べ、いろいろな悪事を行ってきました。親戚たちとの関係も壊れ、近所とも仲違いをしていました。力のある者はない者に虐待を加え、憐みという言葉も知りませんでした。真理や信頼を備え、貞節であり清廉で、善良なる祖先を持つ預言者様を、アッラーが私たちにお送り下さるまでこのような状態だったのです。その預言者様は、アッラーの存在やその唯一性を信じてアッラーに礼拝をし、また、私たちや祖先が行ってきた偶像崇拝をやめるようにと私たちに勧めたのです。そして、真実を語り、預ったものを裏切らず、親類としての責任を果たし、近隣と良好な関係を保ち、罪や流血をやめるよう命じました。あらゆる不道徳や嘘、孤児への手出しや貞淑な女性への中傷も避けるようにしました。また、アッラーに並ぶものを置かずに礼拝することも命じられました。私たちはこれらを受け入れ、アッラーから下されたものをそのままに信じ、命じられたことを実行したのです。アッラーに礼拝をしました。アッラーが私たちに禁じられたものを禁じ、許されたものを許し、その通りに実践しました。しかし、このことで自分の民族から敵視され、虐待されてしまいました。私たちをこの宗教から引き戻し、アッラーに礼拝することをやめさせ、再び像を崇むようにと、さまざまな虐待や拷問、苦痛に陥れたのです。私たちは虐待されていました。私たちの逃げ場をなくし、苦しめまし

た。私たちと宗教との間に割って入り、私たちを宗教から離させようとしました。私たちは、祖国や家庭をそのままに、あなたの国へと避難してきたのです。他でもなくあなたを選び、あなたの保護を求めたのです。あなたの下では、虐待や不道徳にあたることはないと期待しています」と語った。さらに、ジャーヒル様は話を続けた。

「挨拶することについても、預言者様がするのと同じようにあなたに挨拶をしたのです。私たちは互いにもこのように挨拶をします。天国での挨拶もこのようであると、預言者様が私たちに知らせているのです。ですから、清廉なあなたに対しても、私たちはこのように挨拶をしました。預言者様が人に対してお辞儀をすることはないとおっしゃっていたので、アッラー以外にお辞儀することを畏れるのです」

ネジャーシが「あなたは、アッラーが教えたことについて、いくらか知っているのですか」と尋ねると、ジャーヒル様は「はい」と答えた。すると、ネジャーシは「それを私に詠みなさい」と言った。ジャーヒル様は『マルヤム章』のはじめの節を詠んだ。（一説では『蜘蛛章（アル・アンカブート）』と『ビザンチン章（アッ・ローム）』からも詠んだと言われている）王のネジャーシは涙を流した。目から滴った涙があご髭を濡らした。修道士たちも泣いていた。ネジャーシや修道士たちは「ジャーヒルよ！　やすらぎに溢れた、この美しい言葉をもう少し詠むのです」と言うのだった。ジャーヒル様は『洞窟章（アル・カハフ）』を詠み始めた。

『アッラーを讃える。かれはそのしもべに啓典を下された。それには、少しの曲ったことも含まれない。（この啓典の内容を）正しく真直になされ、かれの御許からの痛烈な処罰を警告され、また正しい行いをする信者は、善い報奨を得るとの吉報を伝えられた。かれらは永遠にその中に住むであろう。また「アッラーは一人の御子を持たれます。」と言う者へ警告なされる。かれらはこのことに就いて何の知識もなく、かれらの祖先もまたそうであった。かれらの口をついて出る言葉は、由々しきものである。かれらの言葉は、偽りに外ならない。』

『もしかれらがこの消息（クルアーン）を信じないならば、恐らくあなたはかれらの所行のために苦悩して、自分の身を滅ぼすであろう。本当に地上の凡ての有は、それ（大地）の装飾としてわれが設けたもので、かれらの中誰が最も

優れた行いをするかを、試みるためである。』

ネジャーシは、溢れる想いを抑えることもできず「アッラーに誓って、これは同じ蝋燭台からほとばしり出た一つの光です。ムーサー様やイーサー様も、このこととともに来たのです」と言った。そして、クライシュ族の特使に向かって「帰るのです。アッラーに誓って、私は彼らのことをあなた方には引き渡さないし、彼らに悪いようにはさせません」と伝えた。アブドゥッラー・ビン・ラビーアとアムル・ビン・アスは、ネジャーシ王の前から出て行った。

アムルはアブドゥッラーに「誓って、彼らの過ちをネジャーシの前で暴露して全員をやっつけてみせる」と息巻いた。しかし、アブドゥッラーは「たとえ彼らが私たちに反抗していても、親族ということに変わりはないのです。そのようなことはやめなさい」と諭した。そこでアムルは「では、彼らが預言者イーサーを人間として扱っているということをネジャーシに伝えてみることにしよう」と言った。

翌日、ネジャーシの前に上がり「王よ！　彼らはマルヤムの息子、イーサーについて、重大なことを言っています。彼らのところに人をやり、預言者イーサーのことを何と言っているのか聞いてみてください」と伝えた。ネジャーシは預言者イーサーについての見解を聞くため、ムスリムたちのところへ人を送った。彼らは再び宮殿に来た。互いに「預言者イーサー様について聞かれたら、どう返事をしましょうか」と話していた。ジャーヒル様は「アッラーに誓って、イーサー様についても、アッラーが下されたことと預言者様が私たちに教えたことを話すのです」と言った。

ネジャーシの前に上がると、彼は「あなた方はマルヤムの息子のイーサー様について何と言っているのですか？」と尋ねた。ジャーヒルは「イーサー様について、アッラーが預言者様に下し、私たちに伝えたことを言いましょう。彼はアッラーが創造したしもべであり、預言者であります。イーサー様は、マルヤム様というこの世の物事や男性から離れ、ただアッラーだけを想った方に、アッラーが受胎させた人物であると私たちは認めています。このことこそマルヤムの息子イーサー様の栄誉なのです。アーデム様を土から創られたように、イーサー様を父なしで創られたということです」と話した。すると、ネジャーシは、手を下に伸ばし、地面からわら屑を拾った。「誓って言いますが、

マルヤム様の息子イーサー様について、あなた方の話した以上のことはありません。私たちとの間にはこのわら屑ほどの差もないのです」と言った。

　ネジャーシがこう言うと、周りにいる臣下や司令官たちは、互いにひそひそと話し、ぶつぶつ言い出した。ネジャーシがこれを見ると、彼らに対して「誓って言うが、お前たちが何と言おうと、私は彼らについて良いように考えているです」と言った。そして、ムスリムの移住者たちに対して「あなた方や、現れた人物を祝福しよう。私はこれを信じます。彼はアッラーの預言者であります。私たちは彼のことを新約聖書によって既に知っていたのです。その預言者のことは、マルヤムの息子のイーサーも知らせていました。誓って、もし彼がここにいたのなら、私はそこへ降りて彼の靴を運び、彼の足を洗っていたことでしょう。もう帰ってよろしい。我が国の一等地で攻撃されることもなく、平穏とやすらぎの中で生活するのです。あなた方に悪事を働くものをなくしましょう。私は山ほどの金銀をもらったとしても、あなた方を誰一人として心配や不安に陥れることはありません」と述べたのだった。

　ネジャーシはその後、クライシュ族の特使たちが持ってきた贈物を示し「私はこれらを必要としていません。強奪された私の財産をアッラーが戻してくれたときも、人々が私に従うようにしてくれたときも、アッラーは私から賄賂をもらったりはしなかったのです」と言ってそれらを返した。クライシュ族の特使たちは、ネジャーシの前から成果なく去って行った。幸運なネジャーシ王はイスラームに入信し、教友たちを一層喜ばせた。

傷心の年月…包囲

　不信仰者たちは、イスラームが心に浸透し、広がっていくことを妨げようと休むことなく骨を折っていた。それでも毎日ムスリムの数は一段と増えていった。一方で、ムスリムたちに拷問や虐待を行っても、彼らが選んだ道から引き戻すことはできないでいた。それどころか互いに一層強い絆でしっかりと結ばれることになっていた。誰一人として宗教を離れることはなく、預言者様のために命を犠牲にすることを厭わなかった。これを聞いたマッカの外の部族たちは、イスラームのことが気になっていた。こうしてイスラームの光は、一層遠いところへと達していた。不信仰者たちはエチオピアに特使を送ったものの、その願いが叶わなかったばかりか、ネジャーシ王・アスハーメがムスリムとなり、彼らを保護してよりよい態度で接するようになったということを耳にすると、もはや狂ったようになっていた。復讐心を倍増させ、イスラームを根元から枯らそうと、集まって驚くべき決議を行った。それは「どこであろうが、どこで見かけようが、ムハンマド（アライヒッサラーム）を殺すことにする」というもので、不信仰者たちはその誓いを立てたのだった。

　不信仰者たちのこの誓いを耳にしたアブー・ターリブは大変悲しみ、愛する神聖な甥の命を心配した。部族を集め、彼らに万物の王をクライシュ族の不信仰者たちから守るように求めた。ハーシム家は親族の熱意をもって、この命令を守ることに協力した。そこで、預言者様や彼を信じた全ての教友たちを、マッカの北、カアバから三キロメートルほどのところにある丘の上のシュブウ・アブー・ターリブ、つまりアブー・ターリブの町へと集めることにした。預言者様は教友たちを集め、皆でその町へと移り始めた。ハーシム家の中では、アブー・ラハブだけが預言者様を守ることに反対をし、その町へは行かなかった。そして、彼を含めた不信仰者たちは一致して預言者様を殺そうと機会をうかがっていたのだった。

　預言者様や教友たちがアブー・ターリブの町へと集まっていくのを見て、不信仰者たちは再び集会を開いた。そして、次のように取り決めをした。「ムハンマド（アライヒッサラーム）を殺すため、クライシュ族に彼を引き渡してもらうまで、ハーシム家に女性を嫁にはやらないこととする。そして彼らからも嫁をもらわないこととする。彼らには何一つ売らず、彼らからも買わない。彼らと一緒にいたり話したり会ったりもしない。彼らの家や町にも入らない。彼らから申し込まれた和平の求めも絶対に受け入れない…。決して彼らに同情もしないこととする」それから、マンスール・ビン・イクレメという不信仰者が紙に書いたこの決めごとに判を押し、全員がそれを見て従うようにと、カアバの壁

に掲げたのだった。

この知らせが愛すべき預言者様に届くと、大変悲しみ祈念を行った。願いは直ちに受け入れられ、不幸なマンスールの手は一瞬にして枯れてしまった。不信仰者たちはこれに驚き「ああ、ハーシム家にしていた嫌がらせのせいで、マンスールの手が枯れるという災難に見舞われたのだ」と言い合った。しかし、これで心が改まるのではなく、一層荒れていくばかりだった。彼らはシュブゥへ行く道の角に番人を立てた。そこへ食糧や衣料品が入るのを妨げるためだった。マッカに来る商人がシュブゥへ入ったり、商品をそこへ持っていったりしないように、より高い値で自分たちが買い占めるとも言って回っていた。このようにして、シュブゥにいる人々が空腹のうちに死んでいくか、ハーシム家が後悔して預言者様を自分たちに引き渡すかするであろうと考えていたのであった。この状態は、毎年のカアバ訪問の時期まで続いていた。

伝統として、この時期には血を流すことが許されていなかった。このため、ハーシム家も自由にマッカに入って買い物をしながら、一年分の必需品を揃えようとしていた。しかし、彼らが商人のところへ行って、物を買おうとすると、不信仰者の有力者であるアブー・ラハブやアブー・ジャフルのような者たちがすぐに追いつき、その商人に「商人よ！ムハンマド（アライヒッサラーム）やその教友たちに対しては値段を引き上げるのだ。それで、高いということで誰も物を買えないようにするのだ。このせいで、物が売れなくて手に残ったら、すべて我々が買い求めよう」と言うのだった。商人たちも高値を言い、ムスリムたちは買えずに帰っていくことになった。

イスラームの道のため、愛すべき預言者様やハディージャ様、そしてアブー・バクル様は、子供たちが空腹で天まで届くほどの叫び声をあげないようにと、全財産を使い果たしていた。手にあるものが全て尽きると、草や木の葉を食べながら、何とか食糧を確保しようとしていた。子供たちの泣き声を止まらせるため、乾いた革の屑を湿らせ、火であぶって口に含ませていた。預言者様をはじめ、他の教友たちも空腹をまぎらわすため、腹の上に石を巻き付けていた。また、子供たちの泣き声を止まらせるため、母親たちは骨と皮だけに痩せこけてしまっていた。不信仰者が同

情し、隠れて何かを持ってくるのが知られると、その人は殴られ、大変な侮辱を受けることになったのだった。結局、人の流れは絶え、悲惨な状態になっていった。

不信仰者たちはこのような虐待を行い、ハーシム家が降参し、アブー・ターリブが預言者様を自分たちに引き渡すのを待ち続けていた。しかし、彼らの予想に反して、アブー・ターリブの町のムスリムたちは、逆に預言者様を一層守り、彼に被害が及ばないように、あらゆる用心や警戒を続けていた。アブー・ターリブは、暗殺の可能性を防ぐため、預言者様の寝ていたところには見張りや護衛を立て、そして自分の家で寝させるようにしていた。一方、預言者様は誰のことも恐れることなく、アッラーの命令を実行し、イスラームを広めるために一秒たりとも無駄にしないよう、人々を宗教に誘い、彼らを地獄から解放するために努力し忍耐し、忠告を続けていた。ある日、預言者様は、彼のことを否定するクライシュ族の不信仰者たちに対し、空腹とはどういうものかを分からせるようにと「アッラーよ！彼らに預言者ユースフの時代と同じく七年間の飢饉のような、七つの飢饉の罰を与えるよう、お手伝いください」と祈った。

するとその後、空からは一滴の雨も降らなくなった。土は乾き、焼けていた。地面に緑の草は見当たらなくなった。クライシュ族の不信仰者たちは、自分たちの身に起こったことに驚いていた。空腹で死んだ動物の死骸や、腐った犬の皮を食べながら死期を延ばそうと努めていた。彼らの子供たちは空腹で叫び声を上げ始め、たくさんの人が空腹で死んでいった。空腹の中で空を見上げれば、あらゆるところが煙で一杯だった。自業自得であることに思い至り、今まで行ってきた虐待の酷さにも気付きかけていた。彼らはそういった一人のアブー・スフヤーンを預言者様のところへ行かせた。アブー・スフヤーンがやって来て「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！あなたは自分自身のことを、世界の恵みとして遣わされたと言っています。アッラーを信じることや、親類の間で互いの権利を守るように命じています。しかし、それにもかかわらず、部族は飢饉と空腹で多くの人が亡くなっています。この災難を私たちの上からなくすよう、あなたの神に願ってください。アッラーはあなたの行った願いを受け入れてくれることでしょう。もし、そのように願いをかけてくれたなら、皆は信仰することになりましょう…」と言って、誓ってみせた。

こうして、不信仰者たちは行ってきた虐待や拷問をやめ、苦しみに落ちてはじめて預言者様に懇願し始めたのだった。預言者様は、彼らが今まで行ってきたことを面と向っては非難せず「信仰することになりましょう」という言葉を受けて神聖な両手を上げ、アッラーに願った。アッラーは最愛の者の願いを受け入れ、マッカにたくさんの雨を降らせた。土は水に潤い、草は緑を取り戻した。しかし、不信仰者たちは、飢饉や渇水から逃れるとしていた約束のことなど忘れ、再びムスリムを罵り始めた。

アッラーはこうした彼らに対する返事として、次の内容のクルアーンの章句を啓示した。『それなのにかれらは疑って、戯れている。待っていなさい。天が明瞭な煙霧を起す日まで。（それは）人々を包む。（かれらは言う）。「これは痛ましい懲罰です」「主よ、わたしたちからこの懲罰を免じて下さい。本当に信仰いたします」どうして（再び）かれらに訓示があろう。かれらには公明な使徒が確かに来たのに。かれらはかれ（使徒）から背き去って「他人に入れ智恵された者、憑かれた者です」と言ったではないか。われが暫くの間、懲罰を解除すると、あなたがたは必ず（不信心に）戻る。われが猛襲する（審判の）日、本当にわれは、（厳正に）報復する。かれらは前にも、われはフィルアウンの民を試みた。その時かれらに尊い使徒（ムーサー）が来て、（言った。）「アッラーのしもべたち（イスラエルの子孫）を、わたしに返しなさい。本当にわたしは、あなたがたの許にやって来た誠実な使徒です。アッラーに対して、高慢であってはなりません。本当にわたしは明白な権威をもって、あなたがたの所にやって来たのです。あなたがたが（わたしを）石撃ちにするなら、わたしそしてあなたがたの主でもある御方に、救いを求めます。もしあなたがたが、わたしを信じないならば、わたしには構わないでください」そこで、かれは主に祈っ（て言っ）た。「これらは罪深い人々です」（主の御答えがあった。）「あなたは夜の中に、わがしもべと共に旅立て。必ずあなたがたに追っ手がかかろう。そして海は（渡った後）分けたままにして置け。本当にかれらは、溺れてしまうことであろう』」（煙霧章第九～二四節）

不信仰者たちは「信仰します」という言葉を引っ込め、再び虐待を始めた。アッラーはある日、預言者様に『カアバに掲げてある紙に白蟻をつきまとわせ、アッラーの名前以外の部分はすべてを食べさせた』ということを知らせた。

これを受けて、預言者様はアブー・ターリブに「叔父よ！　私の神であるアッラーが、クライシュ族の掲げていた紙に白蟻をつきまとわせました。そして、アッラーの名前以外の部分、紙に書かれていた虐待、親戚関係の断絶、偽証といったことなどを一つ残らずなくしました」とおっしゃった。

アブー・ターリブが「それをあなたにアッラーが知らせたのですか」と聞くと、預言者様は「はい」と答えた。アブー・ターリブは「私が保証します。あなたは真実のみを話す方です」と言い、すぐに着替えてカアバへと向かった。不信仰者の名士たちがそこに座っていた。アブー・ターリブを見ると「恐らく、ムハンマド（アライヒッサラーム）を我々に引き渡そうとやって来たに違いない」などと言っていた。アブー・ターリブは彼らの近くまで来ると「クライシュ族よ！　アル・アミーン（信頼される者）として、決して嘘を言わない兄弟の息子が、あなた方の書いた紙について、アッラーの名前以外のすべての文字を、白蟻が食べてしまったと知らせたのです。さあ、私たちに反抗するように仕向けていたあの紙を見てみましょう。彼の言葉が真実であれば、誓ってあなた方全員が死ぬまで彼を守り通します。あなた方ももうこの虐待や悪事をやめるのです」と言った。

不信仰者たちは、興奮してカアバの壁に掲げていた紙を下ろして持ってきた。アブー・ターリブが「読みなさい」と言うと、そこにいた一人が読もうとして紙を開いた。すると「ビスミキ・アッラーフンマ」以外のすべての文字が消えているのを見つけたのだった。不信仰者たちは驚いて何を言えばよいのか、どうしたらよいのか分からなかった。包囲を解くことにした者も出てきたため、三年間続いたこの忘れ難い苦しみは終わり、心に深い傷を刻んだこの封鎖は終わることとなった。しかし、敵対心が消えたわけではなく、彼らの憎しみは一層増すばかりであった。イスラームが広がるのを妨げようと、あらゆることを試みていた。しかし、そういった全ての骨折りにもかかわらずイスラームは急速な広がりを見せ、愛すべき預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）は、無明時代の虐待から人々を解放しようと立ち働き、真の幸福に導こうとしていた。この幸福に導かれた人々は、その大いなる恵みに感謝していた。そして、不信仰者たちの侮辱や拷問に対して、決して怖気づくことはなかったのである。ムハンマド（アライヒッサラーム）の

奇跡やムスリムたちの信仰は一層力強いものとなり、イスラームの光で明るくなっていった。

月が二つに分かれる

預言者様の最大の奇跡の一つは、月を二つに分けたことだった。アブー・ジャフルや、ワリード・ビン・ムフレを含む不信仰者たちの一団が、預言者様に「もしあなたが本当に預言者であるのなら、月の半分をクアイキアン山に、もう半分をアブー・クバイス山で見られるように二つに分けてみなさい」と言った。預言者様が「もし、そうしたら信仰しますか」と尋ねたところ、彼らは「はい、信仰します」と答えた。預言者様は月が二つに分かれるよう、アッラーに願った。すると、大天使ジブリール様が直ちに預言者様のところへ来て「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！マッカの住民に今夜奇跡を見るように知らせるのです」と伝えた。預言者様はその月の十四日、バディールつまり満月の夜に月が二つに分かれること、そして、それを確認したい者は見るようにと人々に伝えた。その日の夜、愛すべき預言者様が神聖な指で合図をすると、月は二つに分かれたのだった。一つはアブー・クバイス山に、もう一つはクアイキアン山の上で見られた。その後、再び天空で一つに戻った。

預言者様は教友たちに「アブー・サラマ・ビン・アブドゥルアサドよ、アルカム・ビン・アブル・アルカムよ、証人になりなさい」とおっしゃった。そばにいた他の教友たちにも証人になるようおっしゃった。不信仰者たちは、また一つ明らかな奇跡を目の当たりにしたのだった。しかし、約束を守ろうとせず、信仰しようともしなかった。それどころか、他の人々も信仰しないよう妨害していた。「これはただ、ムハンマド（アライヒッサラーム）が私たちに対して行った魔術にすぎません。しかし、すべての人々を魔法にかけることはできないはずです。この町以外のところから来た人々に聞いてみましょう。彼らがこの出来事を見ていたかどうかを聞くのです。もし、見ていたのであれば、ムハンマド（アライヒッサラーム）が預言者であるという主張は事実でしょう。逆であれば、これは魔法なのです」と

言った。そして、来ていた人々に尋ねたり、別のところに人を行かせて尋ねたりした。すると誰もが「はい。その夜、月が二つに分かれたのを見ました」と同じことを答えるのだった。それでも彼らは否定した。否定する者の中には名士のアブー・ジャフルもいた。人々が信仰の道に導かれないようにと「アブー・ターリブの孤児の魔法が天まで影響を与えたのだ」と言って、人々の心に波風を立てさせようとしていた。彼のこの否定に対して、アッラーは次のクルアーンの章句を下された。

『時は近づき、月は微塵に裂けた。かれらは仮令印を見ても、背き去って「これは相変わらずの魔術だ」と言うであろう。かれらは（訓戒を）虚偽であるとし、自分の欲望に従ってきた。だが一切の事には、定められた結末がある。これまで、様々な消息は、既に齎され、それで充分自制出来たはず。それはめざましい英知であった。だが警告は役立たなかった。だからあなたは、かれらから遠ざかれ。召集者が嫌われるところへ呼び戻す日。かれらは目を伏せて、丁度バッタが散らばるように墓場から出て来て、召集者の方に急ぐ。不信心者たちは言う。「これは大難の日です」』（月章第一～八節）

アッラーがあなた方にも信仰の道を開いてくださいますように…

不信仰者たちがムスリムに行っていた三年間の封鎖を解いた後、ナジュラーンという場所からある一団が預言者様のところへとやって来た。彼らは二十人ほどで、エチオピアに移住していた教友たちからイスラームを学んで預言者様を見る幸せに与ろうとマッカにやって来たのだった。彼らはカアバで預言者様と話をした。多くの質問をし、期待した以上の、素晴らしく完璧な返事をもらった。クライシュ族の不信仰者たちも近くで彼らを見ていた。万物の恵みとして送られた預言者様は、ナジュラーンからの一団にクルアーンのいくつかの章を詠んだ。彼らは涙が止まらずにいた。その後、預言者様の入信への呼びかけに応じ、心の底から喜んで信仰告白の言葉を述べ、ムスリムとなる名誉に与った。帰国の許しを得るとき、アブー・ジャフルが彼らのところへとやって来て「あなたたち

ほど愚かな者は見たことがありません。彼の隣にたった一度座っただけで、自分たちの宗教から離れ、彼が言うことを認めたのだから」と言って侮辱し始めた。教友となる栄誉を受けたばかりのこの人々は「アッラーがあなた方にも信仰の道を開いてくださいますように。あなた方が行ったこの侮辱や無知に対して、私たちは言い返したりはしないのです。そもそも、私たちはあなた方の権利を奪ったこともありません。しかし、このことを知っておいていただきましょう。数人の無知な人間の言葉のせいで、巡り合ったばかりのこの大きな恵みを決して台無しにしたくはないのです。私たちがこの誠実な宗教から戻ることはありません」と返事をした。

アッラーはこの出来事に対してクルアーンの章句でこのように伝えている。

『われがこれは前に啓典を授けた者たちはよく信仰している。それがかれらに読誦されると、かれらは言う。「本当にこれは主から下された真理です。わたしたちはこれを信じます。わたしたちはこの（下る）以前からムスリムであったのです」これらの者は二倍の報奨を与えられよう。かれらは（よく）耐え忍び、善をもって悪を避け、われが与えたものを施すために。また、つまらない談話を耳にする時かれらは身を引いて言う。「わたしたちには、わたしたちの行いがあり、あなたがたにはあなたがたの行いがある。あなたがたの上に平安あれ。わたしたちは無知蒙昧な者を相手にしない。」』（物語章（アル・カサス）第五二～五五節）

悲しみの年

預言者様の長男のカースィムは、十七ヵ月のときに亡くなった。この悲しい出来事から何年かして、もう一人の息子のアブドゥッラーも亡くなった。預言者様は神聖な目から涙を流しながら、山に向って「山よ！　私に起きたことがあなたに起きたなら、我慢できずに崩れてしまったことだろう」とおっしゃって悲しみを口にした。妻のハディージャ様が「預言者様よ！　彼らは今どこにいるのでしょうか」と尋ねると、預言者様は「彼らは天国にいるのです」と答えられた。

万物の王である愛すべき預言者様の二人の息子が亡くなったことを、不信仰者たちは喜んでいた。アブー・ジャフルのような不信仰者は、これを機会に「もはやムハンマド（アライヒッサラーム）の子孫は断絶します。家系が続かないのです。家を継ぐ男の子はもういません。彼自身が亡くなれば、その名声や名誉もいずれ忘れられていくのです」と言って周っていた。このようなことに対して、アッラーは『潤沢章（アル・カウサル）』を下し、預言者様を慰めたのだった。『本当にわれは、あなた（ムハンマド）に潤沢を授けた。さあ、あなたの主に礼拝し、犠牲を捧げなさい。本当にあなたを憎悪する者こそ、（将来の希望を）断たれるであろう。』という内容である。

預言者様の息子が亡くなって数日後、今度はアブー・ターリブが病に倒れ、病状は毎日悪化していた。それを聞いたクライシュ族の不信仰者たちは「アブー・ターリブは、生きている間ムハンマド（アライヒッサラーム）を熱心に庇護していました。しかし、今や死期が近づいています。最期の時に訪ねてみたらどうだろう。というのも、またとないアラブの威厳であり勇者であるハムザや、恐れを持たないことが太陽のように明らかなウマルまで、もはやムスリムとなってしまったのです。毎日、アラブの部族たちがやって来ては、どんどんムハンマド（アライヒッサラーム）に従っています。こうしてムスリムが毎日増え続け、彼らの声が世間に広がり始めました。この状況からすると、我々も彼らに従うか、もしくは彼らと戦いの準備をするかという選択にせまられることでしょう。アブー・ターリブのところへ行って事情を説明し、我々は彼らの宗教に攻撃をせず、彼らも我々の宗教に攻撃しないということで、間を取り持ってもらうことにするのです」と言って、アブー・ターリブのところへと向かった。

ウトゥバ、シャイバ、アブー・ジャフル、ウマイヤ・ビン・ハラフといった名士たちがアブー・ターリブの枕元に座った。そして、こう言った。「あなたが重要な人物であるということを、我々は理解しています。高い地位にあると認めているのです。ですから、決してあなたに反対をしてきませんでした。心配なのは、あなたが亡くなった後、ムハンマド（アライヒッサラーム）が私たちを攻撃し、互いの間の敵対関係が続いていくことです。私たちを和解させて、互

いの宗教に攻撃をしないようにしてもらえませんか」
　アブー・ターリブは預言者様を呼び「クライシュ族の全ての名士たちが、あなたが彼らの宗教に関わらないように頼んでいます。もし、あなたがそれを受け入れるのであれば、あなたの命令に従い、手助けをしてくれると言っています」と伝えた。万物の王はこうおっしゃった。「叔父よ！　私は彼らに対して、たった一つの言葉だけを呼びかけているのです。その言葉でアラブ全てが彼らに従います。アラブ以外の民族であれば、ジズエ〔訳注…庇護民に課される人頭税〕を払うことになるのです」とおっしゃった。そして、クライシュ族の名士たちに向かって「そう、あなた方が私にたった一つの言葉を言いさえすれば、その言葉で全アラブを支配し、アラブ以外もあなた方に従うことになるのです」とおっしゃった。すると、アブー・ジャフルが「分かりました。その言葉を十回でも言いましょう。その言葉とは何ですか」と尋ねた。預言者様が「ラー・イラーハ・イッラッラー、と言ってアッラー以外に崇んできた像を破棄するのです」とおっしゃると、不信仰者たちはすぐに「あなたは私たちに他のことを頼んでください」と不平を口にした。預言者様は「あなた方が、たとえ太陽を私の手に持ってきたとしても、私はあなた方から他の願いはいりません」とおっしゃった。
　不信仰者たちは「カースィムの父よ！　あなたは非常に驚くべき提案をしたものです。私たちはあなたの気持ちを尊重したいと思っているのです。けれども、あなたは私たちの気持ちを快くはさせません」と言って去っていった。彼らが帰った後、アブー・ターリブは預言者様に「あなたがクライシュ族に求めたものは、極めて正しいものでした。真実を述べたのです」と言った。叔父のこの言葉に預言者様は望みをかけ、アブー・ターリブが信仰に入ることを願い「叔父よ！　一度でよいから『ラー・イラーハ・イッラッラー』と言えば、審判の日に取り成しを受けることができるのです」とおっしゃった。しかし、アブー・ターリブは「私が死を恐れてムスリムとなった、と人々が侮辱するのではないかと心配しています。そうでなければ、あなたの気持ちを尊重していました」と言うのだった。このことを求めるのは、自分にとっては難しいことだったと言いながら、次第に病気が悪化し、そして亡くなった。

地上の王よ、海や大地の皇帝よ
天使よりも上にあり、最後にして比類なき預言者よ
「ニーメ・アッラーヒ・ワクトゥン」を知らせる
あなたは身体には命を、言葉には味わいを、心には王を宿す

アハマド、ムハンマド（アライヒッサラーム）、マハムードと言ってアッラーが常にあなたを称う
あなたの名前で終わるラー・イラーハ・イッラッラー
道を外れた者にはここでの微妙な関係は分からない
アッラーは自身の名前とともにあなたの名前を記す

王よ、あなたを愛する奴隷は皇帝となる
王よ、私の心の玉座におかけください
私は罪深くとも、あなたのことを心底愛する
私は信じる、あなたを愛する者には分け前がある

なぜ愛さないというのか、あなたは私の身体の生命
私はあなたのおかげで創造された、私はあなたの人生の理由
あなたは私の血管に流れる血、私よりも私に近い
あなたは愛する者が愛する者で、命が愛する者

あらゆる苦痛にとってあなたは薬、あらゆる魂にとってあなたは癒し
目にはアイライン、頭に王冠、心には磨き
アッラーの最愛の者であり、天使よりも上にあるのはあなた
あなたを少しでも知る者は、他の扉をたたかない

聖者たちには正しい道を示し、学者たちの指南となるのはあなた
あなたがいらっしゃることに七段の天と地が喜んだ
人間やジンへ遣わされたアッラーからの最後の預言者
あなたの扉の前で奴隷とならない者は土の下にあれ

ハディージャ様の逝去

預言者様が悩みを打ち明ける相手は、その人生のうち二十四年間の伴侶であった神聖なハディージャ様だった。しかし彼女は、病気や苦難、心労が続いた三年間の封鎖の後、そしてヒジュラの三年前のラマダーン月の上旬に六十五歳で息を引き取った。万物の王である預言者様は、ハディージャ様を自らの神聖な手で埋葬した。彼女との別れに非常に悲しんでいた。妻のハディージャ様だけでなく、叔父のアブー・ターリブも同じ年に亡くなっていたため、預言者様は悲しみに圧倒されていた。そのため、この年のことは『セネトゥル・フズウン』つまり、悲しみの年、と言われるようになった。

預言者様はハディージャ様が亡くなったことに大変な衝撃を受け、相当な悲しみに沈んでいた。なぜなら、最初に信仰を選び、預言者様を認めたのは彼女であったからである。さらに、最大の支えであり、また、慰めでもあったのが彼女だった。周り全てが敵であったときも、心のすべてを開き、預言者様への愛情で一杯にあふれていた。全財産や所持品など、あるものはすべてイスラームのために使い、愛する預言者様の手助けをするため、昼も夜も立ち働いていた。どんなときでも預言者様を悲しませることはなく、決して気配りを怠ることはなかった。預言者様もときどきこのことについて語り、神聖な妻の美徳を称えていた。

ある日ハディージャ様は、外に出かけた預言者様を捜そうと家を出た。そのとき、人間の形となって現れていた大天使ジブリールの姿を見かけた。ハディージャ様はその人に、預言者様のことを尋ねようとしたが、敵かもしれないと考えて、何も聞かずに家へ戻っていった。預言者様が家に戻ると、その出来事について話をした。世界の王はこうおっしゃった。「あなたが見て、私について聞こうとしたその人物が誰か知っていますか？　彼は大天使ジブリールでした。あなたに挨拶を伝えるよう、私に言っていました。さらに、ジブリールはこうも言ったのです。『天国では彼女のために真珠でできた建物が造られました。もちろん、天国ではここでのような悲しみや苦しみ、苦労や面倒は一切ないのです』」

手が固まる

愛すべき預言者様は、人々の中で最も幸せな者である教友たちに対して、比類のない会話で彼らの心を光に満たしていった。下されたクルアーンの章句を解説し、話さないことや説明しないことは一つとして残さなかった。その一方、不信仰者たちが信仰の道に入るよう、彼らの集まっているところへと出向き、あきらめることなく信仰へと呼びかけていた。このようなことに、アブー・ジャフルやワリード・ビン・ムフレは大変怒っていて「このまま放っておくと、

ムハンマド（アライヒッサラーム）が全員を自分の宗教に引き入れ、我々の像を崇める者は一人も残らなくなってしまう」と言っていた。そしてある日、決着をつける唯一の手だては、世界の王である愛すべき預言者様を殺すしかないと決心したのだった。アブー・ジャフルが、ワリード・ビン・ムフレやマフスム家の何人かの若者を伴ってカアバへとやって来た。そのとき愛すべき預言者様は礼拝中だった。アブー・ジャフルは、石を手に持って前に進み出た。アッラーが愛する、尊敬すべき預言者様に向かって石を投げつけようと手を挙げたそのとき、手は空中で動かなくなってしまった。何も出来ず、ただ驚くばかりだった。その状態で元いたところへと戻っていった。不信仰者たちのところに来ると、手は元に戻り、石は地面に転がった。

同じ石をマフスム家の一人が手に取り「見てみろ。私が殺そう」と言って、預言者様の方へ歩き出した。近づくと突然彼の眼が見えなくなり、周りを判別することができなくなった。その後、マフスム家の全員で預言者様の方に向かった。しかし、預言者様の方に近づくと、彼が見えなくなってしまった。それでも神聖な言葉は聞こえていた。声が来る方に歩いていくと、今度はその声が後ろから来て、後ろへ向かって歩いていけば、今度は前から聞こえてくるのだった。同じことが何度も起こった。結局、ただ驚くだけで、預言者様に何もすることができないままその場を去っていった。このことについては、アッラーが次のようなクルアーンの章句を啓示されている。

『またわれは、かれらの前面に障壁を置き、また背面にも障壁を置き、そのうえかれらに覆いをした。それでかれらは見ることも出来ない。』（ヤー・スィーン章第九節）

ターイフの人々を信仰に招く

不信仰者たちは、愛すべき預言者様の数多くの奇跡を見ていても、頑固にも信仰を拒んだ上、ムスリムとなった子供や兄弟、親戚そして友人に苦痛や虐待を与えていた。彼らの虐待や拷問は前にも増して多くなり、このことで愛す

べき預言者様は大変悲しんでいた。その頃、預言者様はマッカ近郊のターイフという町へ行き、人々をイスラームに招こうと考えていた。そして、ザイド・ビン・ハーリスを伴い、ターイフへとやって来た。ターイフの名士・アムルの息子たちである、アブド・イ・ヤリルやハビブ、マスードらと話しをした。彼らにイスラームについて説明し、アッラーを信仰するように説いた。しかし、彼らは信仰しなかったばかりか、侮辱して「アッラーが預言者を送るにあたっては、あなた以外の人間は見つからなかったのか。アッラーというのは、あなた以外の人物を預言者として送れないほど無能なのか。我々の町から出ていくのです。好きなところに行きなさい。あなたの部族が、あなたの言っている言葉を受け入れなかったから、ここまで来たのでしょう。誓って我々はあなたには近づきません。あなたの希望は一つとして受け入れません」と言い放った。

預言者様は、悲しみの中で彼らのところから離れていった。次にセキフ族のもとへ行き、十日間、あるいは一ヶ月ほどイスラームに招いた。しかし、彼らも一人として信仰しなかった上、嘲笑するのだった。暴力をふるい、野次を飛ばした。子供や若者を道の両側に並べさせて石を投げ、襲いかかるのだった。預言者様に危害が及ばないよう、ザイド様が身体を盾にしてターイフの若者の投げた石を防ごうとしていた。ザイド様は愛すべき預言者様の周りを飛び回りながら、石が当たらないように動いていた。預言者様の神聖な身体に危害を加えるまいと、自分に当たる石には気にも留めなかったのだった。このようなことのために命を捧げる用意はできていた。一方、彼らは万物の王に石を投げては苦痛や拷問を与え、祖国から追い出そうとしていた。

預言者様を守ろうと、ザイド様が右に左に走るほど、石は頭や身体、足へと次々に当たっていた。ザイド様は身体全体が血だらけとなっていた。愛すべき預言者様を守るためには出来ること全て行い、石を投げる乱暴な者たちに対しては、大声で「やめなさい。投げてはいけません。彼は万物の王なのです。彼は預言者様なのです。私の身体をばらばらにしても構いませんが、預言者様には触らないでください」と叫んでいた。しかし、ザイド・ビン・ハーリサを超えて預言者様に当たった石は、預言者様の神聖な足を血にまみれさせた。

愛すべき預言者様は悲しみに沈み、疲れ切り、心を傷つけられて、ウトゥバとシャイバという二人の兄弟が所有するブドウ園の方へとやって来た。ムスリムなら誰もが命を捧げる預言者様は、そこで神聖な足から流れる血を拭いていた。浄めを行い、二回の礼拝を行った。そして神聖な手を上げて願ったのだった。

この状況をブドウ園の主たちが見ていた。預言者様の様子を目にし、その哀れな状況の証人となった。同情の気持ちが動き、アッダースという名の奴隷にブドウを持っていかせた。愛すべき預言者様はブドウを食べるとき、バスマラを唱えた。ブドウを持ってきた奴隷はキリスト教徒だった。バスマラを聞くと驚いて「長年ここに住んでいますが、このような言葉は誰からも聞いたことがありません。それはどのような言葉なのですか」と尋ねた。

預言者様は「あなたの出身地はどこですか?」と尋ねた。アッダースは「ニネベです」と答えた。預言者様は「ユヌス（預言者）の出身地ですね」とおっしゃった。アッダースは驚いて「あなたはユヌス様をなぜ知っているのですか。彼のことをこの辺りで知っている者はいないのです」と言った。預言者様は「彼は私の兄弟です。彼も私のように預言者でした」とおっしゃった。

アッダースは「この美しい顔や、このやすらいだ言葉の持ち主が嘘を言うはずはない。私は信じます。あなたはアッラーの預言者です」と言ってムスリムとなった。そして「預言者様よ！私は長年、乱暴で不誠実な人々のもとで、奴隷として働かされてきました。彼らは人々の権利を奪い、人々を騙してきたのです。少しも良いところはありませんでした。この世の物品を集め、性欲を満たすため、あらゆる酷いことを行ってきたのです。彼らのことが嫌いです。あなた方と共に行き、あなたを手助けする名誉に与りたいのです。もし、無知で愚かな者たちが、あなたに礼儀知らずの行動を起こしたら、私がその標的となり、神聖な身体を守るためにの犠牲となりたいのです」と言った。

預言者様は微笑み「今はあなたの主人の所にいるのです。しばらくしたら、私の名をあらゆるところから聞くことになるでしょう。その時、私のもとに来るのです」とおっしゃった。しばらく休んだ後、マッカに向かって歩き出した。マッカから野営地二ヶ所程度手前の場所で、一つの雲が自分たちを影にしているのに気が付いた。よく見ると、大天

使ジブリールであることが分かった。この出来事について愛すべき預言者様は、後にアーイシャ様に語っている。

『サヒーフ・ブハーリー』によれば、アフマド・ビン・ハンバルの『ムスネド』という書物にてこのように伝えられている。「ある日、アーイシャ様が『預言者様、あなたにとってウフドの戦いのときよりも、もっと悲しい日々はありましたか?』と尋ねたところ、預言者様はこう答えた。『アッラーに誓って、あの部族から受けた苦難に比べれば、ウフドの戦いのときに不信仰者から受けたものはまだましでした』」

また、イブニ・アブディヤリル・ビン・アブディ・クラルエは、次のように伝えている。「私が預言者であることを知らせ、宗教を紹介しても、彼らは受け入れてはくれませんでした。彼らのところからは、非常に辛い状況で立ち去りました。カルムセアーリブという場所にやって来るまでは、あまりの悲しさに気を落としていました。そこで頭を上げたとき、一つの雲が自分を影にしていたのに気付きました。よく見ると、雲の中に大天使ジブリールがいました。私に叫んでこう言いました。『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！アッラーは部族たちがあなたに対して言ったことを聞いています。彼らがあなたを守ろうとしないことも分かっています。あなたのところに、山をつかさどるあの天使を行かせ、願うものすべてを叶えましょう』その天使も私に叫んで挨拶をしてから『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！大天使ジブリールが伝えたように、アッラーが山々の天使である私を送りました。あなたの願いを叶えるため、あなたの命令をお待ちします。もし、この二つの切り立った山（クアイキアン山とアブー・クバイス山）を人々の上に被せるようにして互いに近づけ、押しつぶしたいと思うのであれば、命令があり次第すぐに実行しましょう』と言いました。私はこれに同意しませんでした。そして『いいえ、私は世界に恵みとして遣わされたのです』と言ってから、こう続けました。『あの不信仰者たちの子孫から、ただアッラーに礼拝をし、アッラーを何物とも並べることのない世代を、アッラーがお出しするよう願います』」

預言者様がターイフからマッカへと戻る際、ナハレ地方でしばらく休息を取った。礼拝をしているときだった。ムサイビンというところから来ていたジンのある一団がそこを通りかかり、愛すべき預言者様の詠むクルアーンの章句

を耳にすると、立ち止まって聞いた。その後、預言者様と話をし、彼らはムスリムとなった。預言者様は彼らに「自分たちの部族のところに戻ったら、信仰への道を伝え、彼らを信仰に導きなさい」とおっしゃった。そのジンたちが、部族のもとに帰って信仰を伝えると、その部族は信仰をするようになった。このことはクルアーンの『アル・ジン（幽精）章』や『ブハーリー』『ムスリム』という有名なハディースにも記されている。この出来事の後、預言者様はマッカに向かって歩いていった。

『ラー・イラーハ・イッラッラー』と言って救われる

アッラーに愛された預言者様は、ムトゥイム・ビン・アディィの保護の下でマッカへと戻って来た。そして人々に正しい道を紹介し続けていた。このことに対して不信仰者たちは乱暴をはたらき、以前よりもさらに激しく拷問や虐待を行うようになっていた。そのため、アッラーは預言者様にカアバへの巡礼期にアラブの部族たちと話し、彼らにイスラームを紹介するように命じられた。

預言者様はこの命令に基づき、マッカ郊外のズル・メジャーズ、ウカーズ、そしてメジェンネの定期市へと出向き、部族たちにアッラーが唯一であることを伝え、アッラーに礼拝をし、自らが預言者であることを認めるよう訴えた。これを認めれば、アッラーが彼らに天国を授けるとも話をした。しかし、愛すべき預言者様の丁寧なこの願いにも、残念ながら一人として耳を貸す者はおらず、逆にその中のある者は酷い扱いをして侮辱をし、またある者は顔をしかめて悪口をたたきつけた。クライシュ族の不信仰者たちも預言者様を追いかけ、彼が会った部族に後から預言者様の陰口を言うのだった。

イマーム・アフマド・ベイヘキ・タベラーニ、そしてイブニ・イサクの伝えるところによると、ラビーア・ビン・アフマドはこのように語っている。「私がまだ若い頃でした。父とともにミナーへ行きました。そこで預言者様がアラ

ブ人の野営地に立ち寄っていて『誰某の息子たちよ！ 崇めていたその像を捨て、アッラーに並ぶものなく礼拝をするのです。私を信じ、私を認めてください。私は、アッラーから下された任務や義務を説明し、それを果たすまで守られることが命じられたアッラーの預言者であります』とおっしゃっていました。

すると、預言者様の後を追って、目つきが悪く、髪の毛を編んでいた人物がやって来て『誰某の息子たちよ！ 彼はあなたたちに、像のラートやウッザーを崇めるのを禁止し、自分の作り上げた宗教を紹介しているのです。気を付けなさい。彼に耳を貸してはなりません。彼に従ってはいけません…』と言っていました。私は父に『この追いかけてきた人物は誰ですか?』と尋ねました。父は『彼の叔父のアブー・ラハブです』と答えました」

また、タベラーニ・タルブ・ビン・アブドゥッラーは次のように伝えている。「預言者様をズル・メジャーズ市場で見かけました。人々が聞こえるように大きい声で『人々よ！ ラー・イラーハ・イッラッラー（アッラー以外に神はなし）と言って、解放されるのです』とおっしゃりながら呼びかけていました。すると、彼を追ってきたある人物が、手にした石を彼の足に向けて投げ『皆の者よ！ 信じてはなりません。彼のことを避けるのです。なぜなら彼は嘘つきだからです』と言っていました。当たった石が神聖な足から血を流させても、預言者様はひるむことも疲れることもなく宣教を続けていました。私は『この若者は誰ですか?』と尋ねました。すると、ある人が『アブドゥルムッタリブ家の一人の若者です』と返事をしました。続けて『石を投げたのは誰ですか?』と聞くと『彼の叔父のアブー・ラハブです』との答えがありました」

イマーム・ブハーリーの『ターヒル・ウルケビル』や、タベラーニの『ムジェムル・ケビル』ではこのように伝えられている。「ムドゥリク・ビン・ムニーブは父から、またその父は叔父から、このように伝え聞いた。『私は父とともにミナーに来て泊まりました。そこで群集を見かけました。ある人物が彼らに『人々よ！『ラー・イラーハ・イッラッラー』と言って解放されるのです』とおっしゃっていました。しかし、周りにいた何人かは、彼の美しい顔に唾を吐きかけたり、頭に土をばらまいたり、罵って侮辱をしていました。この状況が昼まで続いていました。そのとき一人

の女の子が手に水の入れ物を持ってそこに来ました。彼のこの状態を見て泣き始めました。彼は水を飲んだ後で少女に向かって『父が罠にはめられて殺されたり、軽蔑されたりすることを恐れる必要はありません』とおっしゃっていました。私は『この方やあの女の子は誰ですか?』と聞きました。すると『彼はアブドゥルムッタリブ家のムハンマド（アライヒッサラーム）です。隣にいたのはその娘のザイナブです』との答えがありました」

サイード・ビン・ヤフヤー・ビン・サイード・アル・エメビーの『メガーズィ』によると、この頃の話を次のように伝えている。彼もアブー・ナイームやアブドゥルラハマーン・アーミリ、その他の数人から伝え聞いたものである。

「このように言っていました。愛すべき預言者様は、ある日、ウカーズの定期市に出向きました。アーミル族のところへ行き、彼らに『アーミル族よ！　あなた方のところへ避難してくる人がいたら、どのように守るのですか?』と尋ねました。彼らは『私たちのことに、誰一人として手出しをすることはできません。私たちの許可なく、私たちの火で温まることすらできないのです』と言っていました。そこで預言者様は『私はアッラーの預言者です。あなた方のところへ行ったら、アッラーが私に与えた預言者としての義務を人々に伝えるまで、私のことを保護してもらえますか』と尋ねました。彼らは『あなたはクライシュ族のどの家の方ですか』と聞きました。預言者様が『アブドゥルムッタリブ家です』と答えると、彼らは『アブドゥルムッタリブ家であれば、なぜ彼らがあなたを守らないのですか』と尋ねました。預言者様は『最も私のことを否定しているのが彼らだからです』とおっしゃいました。そこでアーミル族の人々はこう言いました。『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！　あなたのことを拒むことはしませんが、あなたの持ってきたものを信仰することもありません。けれども、あなたが預言者としての義務を人々に伝えるまで、あなたのことを守りましょう』」

この話を聞いて、預言者様は彼らの間に座りました。そのとき、アーミル族の名士の一人であるベイユハーラー・ビン・ファーリスが市場で取引を終わらせ、彼らのところへ戻って来ました。そして、預言者様のことを指さして『彼は誰ですか?』と尋ねました。彼らは『ムハンマド・ビン・アブドゥッラー（アライヒッサラーム）です』と答えました。

ベイユハーラーが『あなた方は彼と何の関係があって一緒に座っているのですか』と聞くと『私たちのところに避難し『私はアッラーの預言者である』と言って預言者としての義務を人々に伝えるまで、自分を守ってほしいと願い出たのです』と答えました。これを聞いたベイユハーラーは預言者様に向って『あなたを守ろうとすることは、全アラブの矢の的になることなのです』と言い、自分の部族に対しては『お前たちほど、故国に悪いことを持ち帰ろうとする部族はいない。アラブすべてと戦い、彼らの矢に胸を差し出すつもりなのですか。もし、彼の部族が彼に良い部分を見出していたのなら、自分たちで守っていたはずです。あなた方は、自分の部族が否定し追い出した者を保護し、そのような人を助けようとしているのです。大変な過ちです』と言いました。

その後、預言者様に向かい『すぐに私たちのもとを離れ、自分の部族の場所へと戻りなさい。誓って、私の部族と一緒にいたのでなければ、あなたの首を切っていたところです』と不幸な言葉を投げかけました。

この言葉は万物の王を大変悲しませ、ラクダへと乗りました。しかし、この無礼なベイユハーラーは預言者様をラクダから落としました。この出来事を見ていた教友のバー・ビンティ・アーミルという名の女性が悲鳴をあげ『アッラーが愛する方にこのようなことをするなんて、どういうことですか。私に免じて預言者様を彼らの手から救ってくれる人はいないのですか』と親戚に呼びかけました。すぐに彼女のいとこの三人が、不幸なベイユハーラーの方へと向かいました。ベイユハーラーの部族からは、二人がベイユハーラーに加勢しようとしていましたが、部族の他の人はベイユハーラーや彼を手伝おうとしていた者たちを叱りつけました。愛すべき預言者様は自分のために戦おうとした三人のために『アッラーよ、彼らにあなたの恵みをお与えください。ベイユハーラーと手伝おうとしていた者には、アッラーよ、彼らをあなたの恵みから遠ざけてください』と願われました。

祝福の祈りを受けた者たちはムスリムとなる名誉に与り、他の者たちは不信仰者として死ぬことになりました。アーミル族は自国に戻ったとき、啓典宗教を学んでいた部族のある年寄りにマッカで起こったことを話しました。彼は預言者様の名前を聞くと『アーミル族よ！　お前たちは何ということをしたのですか。イスマーイール家から出たものは、

誰一人として嘘で預言者であると主張したものはいなかったのです。絶対に彼の言っていたことは真実でした。逃したこの機会をつぐなうのは、もはや大変なことになってしまいました』と言って彼らを非難しました」

預言者たちの王の足を
いつも冠として頭に戴いていたらどうだろう
その足の主は預言者のバラの庭にあるバラ
だからバハティはそのバラの足に顔をつける

スルタン・アハマド一世（バハティ）

ミウラージュ

愛すべき預言者様は、あらゆる部族に出会うたびにこのようにしてイスラームを宣教していた。そして、自分を護り、人々にイスラームを伝えるのを手伝ってくれるよう求めていた。しかし、誰一人ムスリムになることはなく、庇護することに関心を持ってくれる人もいなかった。そればかりか、侮辱、虐待、拷問、嘲笑の中で否定されたのだった。万物の王は大変な疲れや飢え、渇き、悲しみ、そして深い傷心の中にいた。日中はこのようにして過ぎていき、夜の遅い時間までその状態が続くのであった。マッカの不信仰者たちは、絶え間なく後をつけまわし、カアバを訪れた人々がムスリムになるのを防ごうと、預言者様を虐げることを止めようとはしなかった。もはや預言者様が行くことのできる場所はなくなってしまった。周り中が敵だった。その夜は、叔父のアブー・ターリブの町にある、アブー・ターリブの娘ウンム・ハーニの家へと行った。

ウンム・ハーニは当時信仰をしてはいなかった。彼女が「どなたですか」と聞くと、預言者様は「叔父の息子、ムハンマド（アライヒッサラーム）です。入れてください、客として来ました」とおっしゃった。

ウンム・ハーニは「あなたのように正直で、信頼でき、上品で、祝福されたお客様は喜んでお迎えします。一人でいらっしゃることを事前に知らせていただけていたら、何か用意しておいたのですが。今は食べるものが何もないのです」と言った。

預言者様は「食べ物や飲み物はいりません。それらに関心はないのです。アッラーに礼拝ができ、その場所があれば十分です」とおっしゃった。

ウンム・ハーニは、愛すべき預言者様を中に招き入れ、草の敷物とたらい、そして水差しを出した。客として歓待をし、彼を敵から守ることを、アラブ人としての最も祝福された任務であると考えた。家にいるお客様に危害が及ぶことは、その家にとって大変な恥であった。ウンム・ハーニは「マッカは彼の敵だらけです。殺そうとしている者さえいます。

この恵まれた方を守るために、朝まで見張ることにしましょう」と考えた。そして、父の刀を手にして、家の周りを見回り始めた。

価値高く純なるその王がウンム・ハーニの家にいたその夜

預言者様は、その夜大変に心を痛めていた。清めをして、アッラーに願い、許しを請い、人々が信仰に導かれ幸福に恵まれるよう祈り始めた。大変に疲れており、空腹で、そして悲しんでいた。草の敷物の上で横になって寝入ってしまわれた。

そのとき、アッラーが大天使ジブリールに「愛すべき我が預言者を大変に悲しませています。神聖な身体、清らかな心を大変に傷めています。それでもなお、私に懇願しています。私以外には何も考えないのです。行って、私の最愛の者を連れて来なさい！　天国や地獄を見せましょう。彼や彼を愛する者に用意した慈悲を見せましょう。彼を信じない者や、言葉や文章や行動で彼を痛めつけた者に用意した罰を見せましょう。彼を私が慰めます。彼の清らかな心に出来た傷を私が治します」とおっしゃった。

大天使ジブリールは預言者様のところに来ると、彼がすやすやと眠っているのを見た。起こすのが惜しまれた。人間の形になり、神聖な足の下に口づけをした。心臓や血がないため、唇の冷たさが預言者様を起こした。大天使ジブリールであることがすぐに分かった。「我が兄弟ジブリールよ、このように突然にいらしたのはなぜですか。もしかしたら、私は過ちを犯したのでしょうか。アッラーの不興を買ったのでしょうか。私に悲しい知らせでももたらすのでしょうか」とおっしゃって、アッラーの叱責を受けるのではないかと大変に怖れていた。

大天使ジブリールは「創造された中で最も優れた者よ、アッラーの最愛の者よ、預言者たちの王よ、善の出ずる所よ、優れるものの源である名誉ある偉大な預言者よ！　アッラーがあなたに挨拶をし、あなたを自分自身のところへとお呼びになっています。どうぞ起きて一緒に向かいましょう」と言った。

愛すべき預言者様は清めを行い、大天使ジブリールは預言者様の神聖な頭に光でできたターバンを載せ、光でできた服を着せた。神聖な腰にはルビーのベルトをつけた。神聖な手には、四百の真珠で飾られたエメラルドの杖を渡した。真珠の一つひとつが金星のように輝いていた。神聖な足にも緑のエメラルドでできたサンダルを履かせた。それから、手をとってカアバへと向かった。ここで、大天使ジブリールは預言者様の神聖な胸を開いて心臓を取り出し、ザムザムの水で洗った。そして、神意や信仰に満ちたたらいを持ってきてその中に浸し、再び元に戻した。

その後、大天使ジブリールは、天国から連れてきたブラークという名の白い動物を示し「預言者様！　これにお乗りください。すべての天使があなたを待っています」と言った。だが、このとき預言者様は、悲しみに落ち込んでおり、想いにふけっていた。すると、アッラーはジブリールに「ジブリールよ！　尋ねなさい。最愛の者がなぜ心配をしているのかを」と命じた。預言者様は「私はこれほどの名誉や歓待を受けています。しかし、終末の日、私の弱い共同体の者たちはどうなるのでしょうか。五万年の間アラサート〔訳注…終末の日に人々が集まる場所の名〕の場を歩き、それほどの罪をどのようにして運び、三万年かかるスィラートの橋をどうやって渡るというのでしょうか」と返事をした。

アッラーからの返事が届いた。「最愛の者よ、喜ぶのです。あなたの共同体の者たちのためには、五万年を一瞬にしよう。悲しまないように」とおっしゃっていた。

預言者様はブラークに乗った。ブラークはかなりの速さで進んだ。ほんの一歩で視界の先まで進んだのだった。旅の途中、大天使ジブリールは愛すべき預言者様をいくつかの邸宅で降ろし、そこで礼拝をするように言った。万物の王は、これに従って三度降り、礼拝をした。大天使ジブリールは、礼拝したところを知っていますか尋ねて、その答

えを説明した。初めに降りたところがマディーナで、この町に移住をすることになると伝えた。残り二ヵ所うちの一ヵ所は、預言者ムーサー様が、そうと明かされてはいないものの、アッラーと話をしたシナイ山で、もう一ヵ所は預言者イーサー様の生まれたベツレヘムであり、そこで礼拝をしたのだと知らされた。その後、エルサレムにあるアクサー・モスクへと向かった。

アクサー・モスクでは、大天使ジブリールがある岩に指で穴を開け、ブラークをそこに結びつけた。以前の預言者たちの何人かの魂も人間の姿になってここに集まっていた。一団となって礼拝をするにあたって、預言者アーデム、ヌーフ、イブラーヒームがイマーム（礼拝の先導）になるよう、順に勧められた。しかし、彼らはそれを遠慮して受け入れなかった。そこで、大天使ジブリールが「あなたがいるところでは、他の人がイマームになることができません」と言って、アッラーの愛された者を前へと押した。

預言者様は他の預言者たちのイマームとなり、二回の礼拝を行った。その後の出来事については、このように伝えられている。「大天使ジブリールが、一つのカップには天国のワイン、もう一つのカップにはミルクを入れて持ってきました。私はミルクを取りました。ジブリールは私に、フィトラ（生まれながらに備わる本性）を選ばれました、と言いました。（ここでは、これを選択することで現世と来世両方の幸福を選んだ、という意味もある）その後、さらに別の二杯を差し出しました。一つは水、一つははちみつでした。両方とも飲みました。大天使ジブリールは「はちみつはあなたの共同体が終末の日まで続くことを示すもの、水はあなたの共同体が罪から清められることを示しているのです」と言いました。それから、一緒に天空に昇って行きました。ジブリールは、ある扉を叩きました。『どなたですか？』と返事がありました。『私はジブリールです』『隣にいるのはどなたですか？』『彼はムハンマド（アライヒッサラーム）です』『彼に（天に昇るための啓示や昇天の招待が）贈られたのですか？』『はい。贈られました』と話していました。『こんにちは。ようこそ。訪れた方は何と美しい旅人か』と言われ、ただちに扉が開かれました。そして、私は預言者アーデム様の前にいました。私に『こんにちは』と言って、祈りを捧げました…。

ここでたくさんの天使たちを見ました。全員が畏まって謙虚な様子で立ち『スッブーフム、クッドゥースム、ラッブル・マラーイカトゥ・ワルルーフ』という念唱をしていました。ジブリールに尋ねました。『この天使たちはこう祈るのですか？』すると『はい、彼らは創造されて以来、終末の日まで立ったままこうしているのです。あなたの共同体もこのように礼拝するようアッラーに願ってください』と言いました。私はアッラーに願いました。願いは叶ったのです。礼拝時の立っているときの姿勢はここから得られたものです。

ここである一団のを見ました。天使たちが彼らの頭を潰してはまた元に戻していました。あるいは、殴っては再び元に戻したりもしていました。『彼らは誰ですか？』と聞きました。『金曜日の礼拝や集まりを放棄した者たちです。そして立礼と跪拝を正しく行わなかった者たちです』と答えがありました。

また別の一団を見ました。空腹にしていて裸でした。ゼバーニという天使が彼らを地獄で放牧させていました。『彼らは誰ですか？』と聞きました。『貧乏人を憐れまなかった者や、ザカート（喜捨）を行わなかった者たちです』と答えがありました。

別の一団と出会いました。目の前にはとてもおいしそうな料理がありました。その一方で、動物の死骸もありました。彼らはそのおいしそうな料理を放っておいて、死骸を食べていました。『彼らは誰ですか？』と聞きました。『彼らは許されていることを行わず、禁じられたものを好んだ男女です。許されたものを持っていたにもかかわらず、禁じられたものを食べていた者たちです』と答えがありました。

さらに、背中に持っていたものの重さで、動く力がなくなっていた人々を見ました。その状態でもなお人々に対して、もう少し上に荷物を乗せてほしい、と言っていたのです。『彼らは誰ですか？』と聞きました。『この人々は、預かり物を裏切った人々です。人々の取り分を奪った上、さらに虐待をしていたのです』と答えがありました。

自分の肉を切り取っては食べている一団に出会いました。『彼らは誰ですか？』と聞きました。ジブリールが『彼らは悪い噂話をしていた人々です』と答えました。

顔を真っ黒くして目を空に向け、上唇は下に落ち、下唇は足元まで垂れ下がり、口からは血や膿を流していた一団を見かけました。彼らは、火のガラスを使って地獄に流れる毒の交ざった血や膿を飲ませられ、ロバのように叫んでいました。『彼らは誰ですか？』と聞きました。『彼らは酒を飲んでいた者たちです』と答えがありました。

またある一団に出会いました。舌が頭から引っ張られ、形は歪んで豚のような姿になりながら、地獄の責苦を味わっていました。ジブリールが『彼らは嘘の証言をしていた者たちです』と言いました。

別の一団に出会いました。腹は膨れて下に垂れ下がり、紫色になった手足は縛られていて起き上がれない状態でした。ジブリールに彼らのことを聞きました。『彼らは利子を貪っていた者たちです』

ある女たちの一団に出会いました。顔は真っ黒く、目は紫色でした。火からできた服を着ていました。天使たちが彼女たちを火の矛で叩いていました。彼女たちは犬や豚のように一斉に叫んでいました。『彼女たちは誰ですか？』と聞きました。ジブリールは『彼女らは不貞を行った者や夫を傷つけた者たちです』と言いました。

ある一団を見ました。大変たくさんの人でした。地獄の谷に閉じ込められていたのです。火が彼らを焼き尽くしても、再び蘇らせられて、また焼かれていました。『彼らは誰ですか？』と聞きました。『彼らは父親に反抗した者たちです』と答えがありました。

その後、ある一団と出会いました。作物の種をまくと、一瞬にして穂ができました。『彼らは誰ですか？』と聞きました。ジブリールは『アッラーのために礼拝をしていた者たちです』と言いました。

ある海岸に行きました。この海の不思議な状態を説明するのは不可能です。ミルクより白く、山のような波が立っていました。『この海は何ですか？』と尋ねました。『この海の名は、生命の海です。アッラーが亡くなった人々を甦らせるとき、この海に雨を降らせるのです。腐ってばらばらになった身体は甦り、草のように墓から起き出してきます』と言いました…。

その後、二段目の天空に上がりました。ジブリールが再び扉を叩きました。質問がありました。『どなたですか？』

『私はジブリールです』『では隣にいるのはどなたですか？』『彼はムハンマド（アライヒッサラーム）です』『彼に啓示や昇天の招待が贈られたのですか』『はい。贈られました』とやりとりがありました。『こんにちは。ようこそ。訪れた方は何と美しい旅人か』と言われ、ただちに扉が開かれました。私は叔母の息子の預言者イーサーや、預言者ヤフヤー・ビン・ザカリーヤーの隣にいました。私に『こんにちは』と言い、そして、私のために祈ってくれました…。

ここで天使たちの一団に出会いました。一列に並んで立礼を行っていました。ずっと立礼を続け、頭を上げて見ようともしませんでした。ジブリールが『この天使たちの礼拝はこのようなものなのです。あなたの共同体も、このように礼拝するようアッラーに願ってください』と言い、私はアッラーに願いました。願いは叶ったのです。礼拝時の立礼はここから得られたものです。

その後、三段目の天空に上がりました。同じような質問や返事の後で扉が開かれ、私は預言者ユースフの隣にいました。見ると、彼に美の半分が与えられていました。私に『こんにちは』と言い、私のために祈りを捧げてくれました。

ここでもたくさんの天使たちを見ました。一列になって全員が跪拝をしていて、彼ら独特のタスビフ（アッラーへの賛美）を行っていました。ジブリールが『この天使たちの礼拝はこのようなものなのです。あなたの共同体も、このように礼拝するようアッラーに願ってください』と言い、私はアッラーに願いました。願いは叶ったのです。礼拝時の跪拝はここから得られたものです。

四段目の天空に到達しました。純銀で出来た光輝く扉がありました。光の錠前がかけられていました。錠前には『ラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマドゥン・ラスールッラー』と書かれていました。同じ質問や同じ返事の後、私は預言者イドリースの隣にいました。私に『こんにちは』と言い、私のために祈りを捧げてくれました。アッラーは彼について『そしてわれは彼を高い地位に挙げた』（マルヤム章第五七節）ということを下しています。

ある天使を見ました。壇に座っていて、心配そうにして悲しんでいました。周りにはたくさんの天使たちがいました。その数はただアッラーのみがご存知です。右側には光に包まれた天使たちを見ました。緑の服を着て、大変よい

香りをさせていました。それぞれがあまりにも美しく、顔を直視することもできませんでした。左側には口から火を放つ天使たちがいました。その前には火からできた槍や鞭がありました。あまりにも恐ろしい目をしていたため、見るのは堪えられないほどでした。壇に座っていた天使には、頭から足まで目がありました。いつも、前の帳面を見ていて、一瞬たりともその帳面から目を離しませんでした。その前には一本の木がありました。それぞれの葉には一人ずつ名前が書かれていました。前には金だらいのようなものもありました。ときどき、右手でその中から何かをすくっては、右側にいる光をまとった天使たちに手渡し、ときどき左手でその金だらいから何かをすくっては、左側にいる虐待の天使たちに渡していました。この天使のことを考えていると、心に恐れを覚えました。ジブリールに『この天使は誰ですか?』と聞きました。すると『イズラーイール〔訳注…魂を取り上げる役目の天使〕です。この天使の顔を見ることは誰にも堪えられません』と答えました。そして、隣に行き『イズラーイールよ！ 彼が最後の預言者で、アッラーの最愛の者です』と言いました。イズラーイールは顔を上げ、微笑みを浮かべました。礼義正しく立ち上がり『こんにちは。アッラーはあなた以上に名誉な者を創造しませんでした。あなたの教友たちも、他の教友たちより上にあります。私はあなたの教友たちに対して、その両親以上に憐れみをかけるのです』と言いました。私は『あなたに一つ願いがあります。私の教友たちは弱いのです。彼らに優しくして下さい。彼らの魂を取るときには優しく取ってください』と求めました。すると『あなたを最後の預言者として送り、そして、あなたのことを最愛の者としたアッラーの真理に従い、アッラーが夜に昼に七十回『ムハンマド（アライヒッサラーム）の教友たちの魂を優しく、そして簡単に奪い、彼らに恩恵を施しなさい』と命じたことに基づいて、私はあなたの教友たちに、その両親以上に憐みをかけるのです』と答えました。その後、五段目の天空へと上がりました。そこで預言者ハールーンと出会いました。私に『こんにちは』と言いました。そして、善なる祈りを捧げてくれました。

五段目の天空にいる天使たちの礼拝を見ました。全員が立ったまま、足の指を見つめ、決して他のところを見ることもなく、大きい声で念唱していました。大天使ジブリールに『この天使たちの礼拝はこのようにするのですか?』

と聞きました。『はい。あなたの共同体も、このように礼拝するようアッラーに願ってください』と答えました。私はアッラーに願いました。願いは叶ったのです。

その後、六段目の天空に上がりました。そこで預言者ムーサーと出会いました。私に『こんにちは』と言いました。そして、善なる祈りを捧げてくれました。さらに、七段目の天空に上がりました。同じ質問や返事の後、預言者イブラーヒームがバイティ・マームルというところに背中を寄りかけているのを見ました。バイティ・マームルには、毎日七万の天使たちが入るのです。（天使たちは一度だけしかそこへ入ることはない）預言者イブラーヒームに挨拶をしました。そして私の挨拶を受け『こんにちは。敬虔なる預言者よ、敬虔なる息子よ！』と言いました。（その後）『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 天国の場所は大変快く、土は清らかです。ここにたくさんの木を植えるよう教友たちに伝えてください』と言いました。『どのようにして天国に木を植えるのですか?』と尋ねると『ラー・ハウレ・ワ・ラー・クゥエテ・イッラー・ビッラー』（別の説によると『スブハーナッラーヒ・ワルハムドゥ・リッラーヒ・ワラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワッラーフ・アクバル』）という念唱を唱えるのです』と答えました。（ジブリールが）その後、私をスィドラート・アル・ムンタハーという木があるところへ連れて行きました。その葉は、まるで象の耳のようで、その実は塔のようでした。それはアッラーの命令があったときに、いろいろな形に美しく変化するのでした。アッラーが創造した誰であろうとも、その美しさを説明することはできないのです。

ジブリールがスィドラート・アル・ムンタハーの先まで送り、私に別れを告げました。私はこう言いました。『ジブリールよ！ 私を一人にするのですか?』ジブリールは悲しげな様子になりました。そして、アッラーの威光に震え始めました。『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ もし、あともう一歩進んだら、私はアッラーの威光のために死んでしまいます。身体すべてが焼け、なくなってしまいます』と言いました。」

万物の王は、ここまでジブリールとともにやって来た。ここで、ジブリールは自分が創造された形になって六百の羽を開き、一つの羽ごとに真珠やルビーが見えるようにした。その後、太陽よりも輝く、レフレフという名の緑色を

した天国の乗り物がやって来た。途切れることなくアッラーの名前を唱え、辺りは念唱の声であふれんばかりとなった。

レフレフは預言者様に挨拶をした。そして、預言者様はレフレフの上に座った。一瞬にしてはるか上にあがり、ヒジャーブという名の七万の天幕を通り過ぎた。ヒジャーブとヒジャーブの間はかなり離れていて、すべてのヒジャーブに天使たちがいた。レフレフは預言者様を一つひとつその天幕を通させた。こうして、天空の二番目に高い場所であるクルスィと、最も高い場所であるアルシュ、そして魂の世界を超えていった。

預言者様が天幕を超えるたび「怖がるな、ムハンマド（アライヒッサラーム）よ。近づくのだ、近づくのだ」と命じられるのが聞こえた。非常に近づき、カーベカウセイン、つまり二張り分の弓程度の距離のところまで近づいた。知ることも、理解することも、説明することもできない方法で、アッラーの許したところまで上がった。場所や時の概念もなく、形では表せない状況で、方向や面もなくアッラーを見たのである。そして、目や耳を使うことも、間に介するものも場所もなくアッラーと話をした。他の者には知ることも理解することもできない祝福に恵まれたのだった。

イマーム・ラッバーニーは『メクトゥーバート』という著書でこのように伝えている。『預言者様はミウラージュに際して、アッラーをこの世で見たわけではない。あの世で見たのである。なぜなら、預言者様はその夜、時間や空間の概念を超えていたからである。始まりや終わりのないときにいた。そして始まりも終わりも同一であるところを見た。何千年後に天国に行く者や、彼らが天国にいたところを見た。そして、そこから見ることは、この世から見ることとは異なっていた。つまり、あの世からの視点で見たということである』

預言者様は「アッラーを称えよ！」と言われると、ただちに「アッタヒーヤット・リッラーヒ・ワッサラワート・ワッタイーバート」（全ての言葉による称賛、賛美、そして身体による務めや礼拝、そして資産による善行や恵みはアッラーにこそ向けられる、の意）とおっしゃった。まずアッラーが、愛する預言者様に目や耳、媒介や空間を要さない形で「アッサラーム・アライカ・アイユハン・ナビーユ・ワ・ラフマトゥッラーヒ・ワ・バラカートゥフ」（我が預言者よ！私の挨拶、恩恵、慈悲があなたの上にありますように、の意）と伝えて挨拶を送った。すると預言者様は「アッサラーム・アライナー・ワ・アラー・イバーディッラーヒ・サーリヒーン」（アッラーよ！私たちに、そして敬虔なあなたのしもべたちに挨拶を、の意）と返事をした。それを聞いていた天使たちは、全員が異口同音に「アシュハド・アンラー・イラーハ・イッラッラー、ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ」（目で見たように信じます、アッラー以外に神はなく、ムハンマド（アライヒッサラーム）はアッラーが創造したしもべであり、預言者である、の意）と言った。

預言者様が「アッサラーム・アライナー…」と言うと、アッラーは「最愛の者よ！ここには私たち以外誰もいません。なぜアライナー（私たちに）と言ったのか』と聞いた。預言者様は『アッラーよ！共同体の者たちの身体は私と一緒にはいませんが、彼らの魂は私とともにあります。彼らに対する私の保護や努めは、彼らから遠いところにあるわけではないのです。あなたは私に挨拶をし、すべての悪から私を遠ざけていただきました。世界の終末に近づけば暴動に出くわす、あの貧しく悲しい共同体に対し、このような歓待や恵みを前にしてどうして何も得させないというのでしょう。このような恵みを前にして彼らをどのようにして不運に晒そうというのでしょう』

アッラーがおっしゃった。「最愛の者よ、今夜、あなたは私の客人である。願うものがあれば叶えよう」すると、預言者様は「共同体のことを願います。（アッラーよ）」とおっしゃった。

一説によると、アッラーはこのような質問を七百回繰り返した。これに対して預言者様は、毎回共同体のこと、共同体のことを願います、と返事をした。アッラーが「いつも共同体のことばかりである」とおっしゃると、預言者様は「アッラーよ！願いをするのは私です。それを叶えるのはあなたです。共同体すべてのことを私に免じてお救いください」と願った。

するとアッラーは「もし今夜、共同体の全員を救ったら、私の恵みやあなたの価値は明らかとはならない。あなたに免じて一部を今夜救います。残りは後にします。最期の審判の日、あなたが願えば私が救いましょう。それで私の恵みやあなたの価値が明らかとなる」とおっしゃった。

あるハディースによると、愛すべき預言者様はこのようにおっしゃっている。「その夜（ミウラージュの夜）、すべての共同体に代わって、私を最期の審判にかけてもらうよう、アッラーに願いました。するとアッラーはこうおっしゃいました。『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたの望みは、共同体の者が誰一人として罪を受けないようにすることです。あなたは憐みに満ちた預言者です。しかし、私は、彼らの罪を他の者には密やかなものとしたとおり、彼らの行った悪事をあなたにも知らせたくはないのです。ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたは彼らの導き手です。一方、私は彼らのアッラーです。あなたは共同体のことを知ってからまだ間もない。しかし、私は昔からはるか先のことまで彼らのことを見ています。ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ もし私が共同体と話すのを好まないのであれば、最期の審判の日に、彼らに罪の大小を問うことさえしなかっただろう』

アッラーは続けました。『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 神聖な目を開き、足の裏をよく見るがいい』見てみると、足の裏に土がついていました。アッラーがおっしゃいました。『すべての物事はあなたの足裏にある土のようなものなのです。その土を親友のところに持ってきたのですか。私にとっては、親友の服についた埃を赦すことより、あなたの共同体を赦すことの方がたやすいことなのです』」

愛する者よ、あなたへの歓待に比べれば
世界のすべては一握りの土の価値ほど
神聖な者よ、私があなたを愛したら
優しい者よ、現世と来世はあなたのものとなる

あるハディースによると、預言者様は次のようにおっしゃっている。「アッラーにたくさんの質問をし、その返事を聞きました。けれども、質問したことを後悔しました。（これらの質問のいくつかは次のようなものでした）『アッラーよ、ジブリールには六百の羽を与えられました。私に対しての恵みは何でしょうか？』アッラーがおっしゃいました。『あなたの一本の毛はジブリールの六百の羽よりも優れています。あなたの一つの毛によって、何千人もの罪深い人を最期の審判の日に自由にさせるのです。ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ ジブリールが羽を開けば、それは東から西までいっぱいに広がります。しかし、あなたが取り成しを行えば、たとえ東と西の間が罪深い人でいっぱいでも、あなたに免じて全員を赦すのです』それから、こう聞きました。『祖先の預言者アーデムには、天使たちを跪拝させました。私には何をお恵みくださるのでしょうか？』アッラーはこうおっしゃいました。『天使たちが預言者アーデムに跪拝していたのは、あなたの魂が彼の額にあったためです。ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたには彼より優れたものを与えました。あなたの名前を私の名前に近づけました。そして、天の最上段に書いたのです。そのときは、まだアーデムは創造されていませんでした。名前や印すらなかったのです。あなたの名前を天空の扉や天幕の上に、そして天国の扉や宮殿、木、天国のあらゆるところに記しました。天国では「ラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマドゥン・ラスールッラー」と書かれていないものは一つもありません。このような地位はアーデムに与えたものより勝っています』

自分が映る鏡の反射のようにあなたを創った
我が名前とあなたの名前を同じところに記した

『アッラーよ！ 預言者ヌーフには船を与えられました。これに対して私には何をお恵みくだされたのでしょうか？』と尋ねると、こうおっしゃいました。「あなたにはブラークを与え、一夜にして、元いた場所から天空の最上段へと到らせました。天国と地獄を見せました。あなたの共同体にはモスクを与え、終末の日には船に乗るかのようにモスクへ入れば、一瞬にしてスィラートの橋を渡って地獄から逃れられるようになるのです」

また「アッラーよ！ イスラエルの民にはマナという食べ物や、ウズラに似た鳥の肉を与えられました」と申し上げると、アッラーはこう言われました。「あなたとその共同体には、この世とあの世での恩恵を与えました。イスラエルの民の姿は、人の形から熊や猿、豚の形に変えました。あなたの共同体に対しては、誰一人としてこのようなことはしませんでした。彼らが行ったようなことをしていても、このような罰を与えることはしなかったのです。ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたにはクルアーンのある章を与えましたが、それに似たような章は旧約聖書にも新約聖書にもありません。その章とは『開端章（アル・ファーティハ）』です。誰であれ、その章を読めば、身体が地獄から逃れられるのです。誰であれ、その母や父の罰を軽くするのです。ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 私はあなたよりも、価値のある、優れた、名誉ある者を創造しませんでした。あなたとその共同体には、昼夜に五十回の礼拝を義務としました。

ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 私が唯一であることを認め、私に並ぶものを置かなければ、誰であれ天国は彼らのものとなります。このような共同体には地獄を逃れさせたのです。あなたの共同体に対しては、怒りに勝る恵みを与えたのです。

ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 私からしてあなたは誰よりも優れ、価値高く、名誉もあります。終末の日、あなたにはさまざまな歓待をして、人々はそれに驚かされるのです。最愛の者よ！ あなたが天国に入るまで、他の聖者やその共同体が先に入ることはありません。そして、あなたの共同体が入るまでは、他の共同体は入れません。ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたやあなたの共同体のためにどのような用意がなされているか、見てみたいのですか？』『アッラーよ、見たいです！』と返事をしました。すると、大天使イスラーフィールに呼びかけ『イスラーフィールよ！ しもべであり、信頼できる者であり、啓示を預かる者であるジブリールに言いなさい。最愛の者を天国に連れて行き、最愛の者や共同体のためにどのように天国を用意したのか見せるのです。そして、神聖な心が心配から解放され、やすらげるようにするのです』とおっしゃいました」

万物の王である愛すべき預言者様は、イスラーフィールとともにジブリールのもとへと向かった。アッラーが命じた場所へと連れて行くため、ジブリールは預言者様を天国へと連れていった。天使たちは、一方の手に天国での服、もう一方の手に光に満たされた入れ物を持って待っていた。ジブリールは「預言者様！ これらは預言者アーデム様の頃より八万年前に創造された者たちです。この場所で、階層で、入れ物の中にあるものを、あなたとその共同体に撒くのを今か今かと待っているのです。終末の日に、あなたとその共同体がアッラーのご命令とともに天国の入り口に来ると、この天使たちは入れ物から宝石をあなた方の上に撒くのです」と言った。天国で任務についているルドワーンという名の天使が彼らを迎えた。預言者様に吉報を伝え「アッラーが、天国の二つをあなたの共同体に、残りの一つを他の共同体に与えるため、三つに分けました」と言い、天国のあらゆるところを見せた。

アッラーの愛する預言者様は次のようにおっしゃっている。「天国の中央に、一つの小川を見ました。天空の上を流れているのです。あるところから、水やミルク、ブドウ酒、はちみつが湧き出ているのですが、決して互いに混ざり合うことはありませんでした。その小川の岸にはエメラルドのように輝く石がありました。岸にある石は宝石で、土はアンバー、草はゼフェラーンという美しい香りの花でした。辺り中に銀のカップが置かれていて、その数は空の星よりも多かったのです。周りには鳥がいて、その大きさはラクダのようでした。誰でもその肉を食べたり、小川から飲んだりしても、それはアッラーのお恵みだったのです。ジブリールに『この小川は何ですか』と尋ねると『カウサルです。アッラーがそれをあなたに与えました。この小川は八つの天国にある菜園に流れているのです』と答えました。川の脇にテントを見かけました。すべて真珠やルビーでできていました。ジブリールに尋ねるとこう答えました。

『あなたの妻たちのいる場所です』そのテントで天女たちを見ました。顔は太陽のように輝き、それぞれが大きな声でいろいろなことを話していました。彼女たちは『私たちは嬉しく楽しい。私たちには全く悲しみは訪れません。私たちは着飾って、わめくことなどしないのです。私たちは若々しく、決して年を取りません。私たちは良い習慣を持っていて、決して怒ることはありません。私たちは皆このようであり、決して死にもしないのです』といっていたのです。それらが幸福なる東屋や木に広がり、彼女たちの調子や声であらゆるところが満ちていました。彼女たちは美しい声をしていて、もし、その調子が現世に届いていたら、死や苦悩はこの世から消えていたことでしょう。ジブリールはこう言いました。『彼女たちの顔を見てみたいですか？』私は『見たいです』と言いました。一つのテントの入り口を開き、見てみました。大変に美しい顔を見ました。彼女たちの美しさについて、全生涯をかけて話しても、話しきれないほどでした。顔はミルクよりも白く、頬はルビーよりも赤く、太陽よりも輝いていました。そして、肌はシルクよりも滑らかで、月のように輝き、ムスクより快い香りをしていました。髪は極めて黒く、ある者は髪を編み、ある者は髪を結い上げ、ある者は髪を垂らしていました。髪を垂らした者が座ると、彼女の周りは髪でテントのようになり、立つと髪は足まで届くほどでした。それぞれの前には手伝いの者が立っていました。ジブリールが『これらはあなたの共同体のためのものです』と言いました」

また、預言者様はこのようにもおっしゃっている。「八つの天国の果樹園と菜園、あらゆる恵みを見ました。そこで、地獄とその階層も見ようと思いました。ジブリールが私の手を取り、地獄の最も偉大な天使であるマーリキーのところへと連れて行きました。そして『マーリキーよ！ムハンマド（アライヒッサラーム）が、敵の地獄での居場所をご覧になりたいそうです。（彼に地獄を見せるのです）』と言いました。マーリキーは、地獄の階層を開きました。私は七つの階層（の全てを）見ました。七段目の階層はハーウィエといい、そこでの罰は他の階層に比べて何倍もありました。マーリキーに尋ねました。『この階層ではどんな人々が罰せられるのですか？』マーリキーは『ファラオやカールーンのような人、そして、あなたの共同体の中のムナーフィク（偽信者）たちが罰せられるのです』と答えました。六段目の階層はラーズィといいました。そこでは不信仰者たち（全く信仰を持たない者たち）が罰せられていました。五段目の階層はフターメといいました。そこでは、火や牛を拝んでいた人々や、仏教徒たちが罰せられていました。四段目の階層はジャーヒムといいました。そこでは、太陽や星を拝んでいた者たちが罰せられていました。三段目の階層はサカルといいました。そこではキリスト教徒たちが罰せられていました。二段目の階層はサイールといいました。そこではユダヤ教徒たちが罰せられていました。一段目の階層が地獄でした。ここでの罰は他の階層の罰に比べると少ないものでした。（それにもかかわらず）そこでは火から出来た七万もの海を見ました。それぞれの海が大変に大きく、もし、全ての土地や全ての空をその海に落としてしまい、それをある天使に探せと言ったところで、千年たっても見つけるのは不可能であろうと思われました。ゼバーニたち（地獄での務めを行う天使たち）も大変に大きく、もし彼らの一人の口の端に、全ての土地や空を置いたとしても、気付かないだろうと思うほどでした。その海には波が立ち、恐ろしい音を響かせていました。もし、その音のうちの一つでも地球に届いていたら、すべての生き物が破滅していたことでしょう。『この階層はどんな人々のためなのですか？』と尋ねました。マーリキーは返事をしませんでした。改めて尋ねました。やはり返事はありませんでした…。

ジブリールがマーリキーに『あなたから返事を待っています』と言いました。マーリキーは『それは許してください』と謝りました。私は『どんな返事があろうとも、今日からそのための用意をしておきます』と言いました。すると、マーリキーは『預言者様、あなたの共同体の中の罪人のための場所です。彼らに忠告してください。このような恐ろしい所から自分たちを守るように。このような罰に身体を引き込むことを防ぐように。その日、私は罪人に同情はしません。年寄りであろうとも若者であろうとも、憐みをかけないのです』と答えました」

万物の王は泣き始めた。神聖な頭からターバンをとり、取り成しをアッラーに懇願し始めた。共同体は弱くこれほどの罰には耐えられないとおっしゃった。これを見て、大天使ジブリールやすべての天使たちも一緒に泣き始めた。アッラーの声が聞こえた。「最愛の者よ！あなたへの尊重や価値は私にとっては大きいものです。あなたの願いを受け入

れましょう。安心するのです。あなたの望みを叶えましょう。あなたには最良の地位が与えられているのです。たくさんの罪人をあなたの取り成しによって許します。あなたがもう十分です、と言うまで。最愛の者よ！　誰であれ、私の命令を守るのであれば、地獄での責苦や罰から逃れ、私の慈悲に恵まれるのです。天国で私を見る名誉に巡り合えます。あなたや共同体に対し、朝に夜に五十回の礼拝を行うことを義務とします」

　預言者様は続けてこう語っている。「その場所から天国の最も高い天空へと行きました。いろいろな空を渡り、預言者ムーサーのところへ来ました。私に『アッラーは、あなたや共同体にどのようなことを義務としましたか？』と尋ねました。私は『毎日、昼夜、五十回の礼拝を義務としました』と答えました。すると彼は『アッラーのところへ戻って、少なくするよう願ってください。なぜなら、共同体はこれを守ることができないでしょうから。私はイスラエルの民にこれを試してみたのです』と言いました。このため、私はアッラーのもとへと戻り、こう申し上げました。『アッラーよ！　共同体への義務を減らしてください』すると、五十回から五回だけが減らされました。預言者ムーサーのところへ戻り（五回減らされたことを）伝えました。預言者ムーサーは『アッラーのところへ戻って、もう少し減らすよう願ってください。なぜなら、共同体がこれを守ることはできないからです』このようにして、預言者ムーサーとアッラーとの間を行ったり来たりして、ついにアッラーがこうおっしゃいました。『この礼拝を五回に減らします。すべての礼拝に十の善行を与えます。ですから、結局五十回の礼拝に相当します。誰かが一つの善行を意図して、それができなかったとしても、そのために一つの善行を与えましょう。もし、それができたとしたら、一つの善行に対して十の善行を与えます。罪を意図しても、それを行わなければ何もしません。もし、それを行ったら、一つの罪に対して一つの罪を記します』その後、預言者ムーサーのところへ下り、状況を説明しました。預言者ムーサーは『もう一度戻って、もう少し少なくするよう願ってください』と言いました。しかし私は『アッラーにはもう随分とお願いしてしまったので、これ以上は恥ずかしいのです』と言いました」

　アッラーはこのようにして、愛すべき預言者様の背負っていた苦悩や、傷ついた神聖な心を慰めたのだった。どん

な創造物にも与えない、誰にも分からない、理解すらできないアッラーの恵みを彼に施したのである。

　万物の王はその後、一瞬にしてエルサレム、さらにはマッカのウンム・ハーニの家に戻った。寝ていた場所はまだ冷えておらず、金だらいの清めの水はまだ揺れたままだった。外を見回っていたウンム・ハーニは居眠りをし、何が起こったかを知ることはなかった。預言者様はエルサレムからマッカに帰る際、クライシュ族のキャラバンを見かけた。キャラバンにいた一頭のラクダは驚いて倒れてしまった。

　預言者様は朝になるとカアバへと向かい、昇天のことを説明した。不信仰者たちは「ムハンマド（アライヒッサラーム）は気が狂ったらしい、相当におかしくなった」と嘲笑した。ムスリムになろうという気持ちを持っていた者も困惑していた。不信仰者のうちの幾人かが喜びながらアブー・バクルの家にやって来た。というのは、彼が賢く、経験も豊かで、理知的な商人であることをよく分かっていたからだった。彼が扉のところに出てくると「アブー・バクルよ！　あなたは何度もエルサレムとの間を行き来しています。よく知っていることでしょう。マッカからエルサレムへ行って戻ってくるのに、どれくらいの時間がかかりますか？」と聞いた。アブー・バクル様は「よく知っています。一ヶ月以上はかかります」と答えた。

　この答えに気を良くした不信仰者の一団は「賢く、経験豊かな人の答えがこうなのです」と言い合った。一団は嘲笑し、そしてアブー・バクル様も自分たちと同じように考えたことに喜んで「あなたが信じる方は、一晩でエルサレムへ行って戻って来たと言っているのです。もはや相当におかしくなってしまいました」と言った。アブー・バクル様に愛情と尊敬を示して、頼りにしようとした。

　アブー・バクル様は預言者様の神聖な名前を聞くと「もし彼がそう言っているのなら真実です。一瞬で行って戻ってきたことを私も信じます」と言って家の中へと入っていった。不信仰者たちは驚きの中「何ということだ、ムハンマド（アライヒッサラーム）は何と恐るべき力を持っている占い師だ。アブー・バクルに魔法をかけたらしい」と言いながら戻っていった。

アブー・バクル様は、すぐに預言者様のもとへと向かった。大群衆の中、大きな声で「預言者様、ミウラージュ、おめでとうございます！ 我々はあなたのような偉大な預言者に奉仕するという恩恵に与り、そして、神聖なお顔を拝見し、心をつかみ魂を引き付ける美しい言葉を聞くという恵みに与り、アッラーにこの上ない感謝を捧げるのです。預言者様よ！ あなたのすべての言葉は真実です。信じます。あなたのために喜んで犠牲となりましょう！」と言った。アブー・バクル様の言葉は、不信仰者たちを驚かせた。不信仰者たちは何も言わずに散っていった。このことは疑念を感じていた信仰の弱い一部の人たちに対しても、その心を強くさせた。預言者様はこの日、アブー・バクルのことを「スィッディーク」（真実の人、の意）とおっしゃった。この名前を受けて、彼の地位は一段と高まったのだった。

この状況に怒りを募らせた不信仰者たちは、ムスリムたちの強い信仰心や、預言者様のあらゆる言葉を直ちに信じ、常に彼の周りをプロペラのようにムスリムたちが取り囲んでいたことに我慢ができなかった。預言者様に恥をかかせ、そして、勝利してみせようと試み始めた。

「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたはエルサレムへ行ったと言っています。試してみましょう。モスクには扉がいくつ、窓がいくつあったのですか？」などと質問をし出した。預言者様は、すべてに一つ一つ答えた。預言者様が答えると、アブー・バクル様が「その通りです、預言者様」と言うのだった。預言者様は内気で恥ずかしがりのため、話すときに相手の顔をまじまじと見ることはなかった。後に預言者様がおっしゃるには「アクサー・モスクの周り中をすべて見た訳ではありませんでした。質問を受けたものは見ていませんでした。しかし、その瞬間、大天使ジブリールがアクサー・モスクを私の目の前に見せたのです。窓を見て数を数え、質問に対してすぐに返事をしたのです」とのことだった。また、預言者様は、途中でラクダを連れた旅人がいたのを見たこともおっしゃった。そして「インシャーアッラー、恐らく水曜日に到着するでしょう」と言われた。水曜日の日暮れに、キャラバンがマッカに到着した。彼らに尋ねると、嵐のようなものが吹いて、一頭のラクダが倒れたということを言うのだった。このことでムスリムたちの信仰は一層強まった。一方で、不信仰者たちの敵意は次第に高まっていった。

ヒジュラの一年前、ラジャブ月二十七日の金曜の夜に起こったこの奇跡のことを、ミウラージュ（昇天）という。ミウラージュは、預言者様の精神も肉体も目覚めている状態で起こった出来事だった。この夜、預言者様には大いなる神聖な真理が示され、また、五回の礼拝が義務となったのである。さらに、『雌牛章（アル・バカラ）』の最後の二節も下された。ミウラージュについては、クルアーンの『夜の旅章（アル・イスラーゥ）』や『星章（アン・ネジム）』をはじめ、いくつかのハディースでも伝えられている。

愛すべき預言者様はミウラージュの後、教友たちに天国について説明し「アブー・バクルよ！ あなたの宮殿を見ました。紅い金でできていました。あなたのために用意された恵みを見ました」とおっしゃった。アブー・バクル様も「その宮殿と宮殿の持ち主をあなたに喜んで捧げます、預言者様」と言った。預言者様はウマル様の方を向き「ウマルよ！ あなたの宮殿を見ました。ルビーでした。その宮殿にはたくさんの天女がいました。しかし私は中へは入りませんでした。あなたに遠慮したのです」とおっしゃった。ウマル様は大いに泣いた。涙ながらに「父や母、そして私自身の命をあなたに捧げます、預言者様！ あなたに妬むことなどありえません」と言った。その後、ウスマーン様におっしゃった。「ウスマーンよ！ あなたをあらゆる天空で見ました。天国で宮殿を見てはあなたを思い出しました」そして、アリー様にこうおっしゃった。「アリーよ！ あなたの姿を四段目の天空で見ました。ジブリールに質問しました。彼が言うには『預言者様よ！ 天使たちはアリー様を見るのが好きなのです。アッラーは彼の姿をした天使を創造されました。四段目の天空に置き、天使たちは彼のところに訪れてはその恵みを受けるのです』とのことでした。その後で、あなたの宮殿に入りました。一本の木から、ある果物の香りを感じました。宮殿からは一人の天女が出てきましたが、顔はベールで覆っていました。『あなたはどなたで、どこの方ですか』と尋ねると、『叔父様の息子であるアリー様のために創造された者です、預言者様』と言いました」

ミウラージュの明け方に大天使ジブリールが来て、預言者様に対して先導となり五回の礼拝を決められた時間に行った。あるハディースによると、預言者様はこのように述べている。「大天使ジブリールは、カアバの扉の隣で二日間私

のイマームを行いました。私たち二人は、夜が明ける直前に朝の礼拝を、太陽が真上を過ぎたときに昼の礼拝を、すべてのものの影がそれ自身の長さになったときに午後の礼拝を、太陽が沈むとき（太陽の上の端が見えなくなったとき）夕方の礼拝を、そして完全に暗くなったときに夜の礼拝を行いました。二日目は、明るくなったときに朝の礼拝を、すべてのものの影がそれ自身の二倍の長さになったときに昼の礼拝を、それからすぐ後に午後の礼拝を行いました。夕方の礼拝は断食が明けるときに、夜の礼拝は夜の三分の一になったときに行いました。その後『ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！　あなたや以前の預言者たちの礼拝の時間もこの通りです。あなたの共同体はこの五回の礼拝のそれぞれを、私たちが礼拝した二つの時間の間に行うようにするのです』と言いました」

　礼拝の時間がこのようにして知らされると、エチオピアにも、五回の礼拝が義務となったことが伝えられ、義務となったときから知らせが伝わるまでの間の礼拝も、カダーの礼拝（定刻過ぎの礼拝）として行わることとなった。

ヒジュラ

　愛すべき預言者様は、毎年カアバを訪ねに来る部族たちに宣教を行い、彼らが地獄の火から守られ、永遠の幸福に出会えるようにと努力をし、あらゆる侮辱に負けることなく預言者としての責務を続けていた。部族たちの野営地に留まって、訪れた人々に「アッラーの預言者としての責務を果たすにあたって、私を保護し、手伝ってくれる方はいませんか？　こうすることで、あなたは天国が得られるのです」とおっしゃっていた。しかし、保護しようとする者も、手伝おうとする者も見当たらないのだった。

　預言者となって十一年目だった。定期市で、カアバを訪れるために来ていたマディーナのある一団に出会った。彼らに「あなた方はどなたですか？」と尋ねると、マディーナのハズラジ族であるとの答えだった。預言者様の祖父、アブドゥルムッタリブの母親のサルマ様も、ハズラジ族のナジュラーン家の出身だった。預言者様は、ハズラジ族のこの六人とともにしばらく座り、彼らに『イブラーヒーム章』の第三五から五二節を詠み、イスラームについて説明した。そして、この宗教に入るよう宣教をした。部族の名士たちやマディーナに住んでいるユダヤ人たちから、近々預言者が現れるであろうということを聞いていたこれらの人々は、預言者様が自分たちを宗教へ招くと互いに顔を見合わせた。そして「ユダヤ人が知らせていたのは、つまりこの預言者様だ！」と仲間内で話をした。

　マディーナでは古くから、アウス族やハズラジ族は、ユダヤ人と敵対していて、機会がある度に互いに襲撃をしていた。ユダヤ人よりも前にムスリムとなり、イスラームの恵みに与れば、彼らに勝利してマディーナから追放できると確信した。こうして、すぐに預言者様の前で信仰告白の言葉を唱えてムスリムとなった。そして「預言者様！　私たちの部族は、現在ユダヤ人たちと戦いのさなかにあります。願わくは、アッラーが、あなたに免じて私たちの仲間にも信仰をお恵み下さいますように。私たちは戻ったらすぐに、アウス族と我々の部族に対して、あなたが預言者であることを認めるように宣教しましょう。この宗教から得た教えを彼らにも説明します。もし、アッラーがこの宗教の

もとに私たちを一つにするのであれば、あなた以上に尊敬され、名誉を持つ人物はいなくなりましょう」と言った。
この六人は心から信仰し、アッラーが預言者様に下したものを受け入れて承認した。やがて故郷へと戻るため、預言者様の許しを得て別れを告げた。新しくムスリムとなったこの六人とは、ウクバ・ビン・アーミル、アスアド・ビン・ズラーラ、アウフ・ビン・ハーリス、ラーフィー・ビン・マーリキー、クトゥバ・ビン・アーミル、ジャービル・ビン・アブドゥッラーという人々だった。

第一のアカバの誓いとマディーナに生まれた太陽

ムスリムとなった六人は、マディーナの部族のもとへと戻ると、すぐにイスラームや預言者様のことを説明し、人々をイスラームに入るよう宣教を始めた。これが非常によく伝わり、マディーナの中では預言者様やイスラームのことを話さない家は残らないほどだった。こうして、イスラームは、ハズラジ族の間で広まっていくとともに、アウス族でもムスリムとなる者が出てきた。
先のアカバでの出会いの後、その翌年にアスアド・ビン・ズラーラとイスラームを認めた十二人の仲間が、巡礼の季節にマッカへとやって来た。その年、不信仰者たちは例年以上にムスリムたちに対して圧迫と虐待を加えていた。預言者様を常につけ回し、預言者様と話した者には誰であれ拷問を行っていた。これを知ったマディーナの人々は、預言者様と夜半にアカバで会うように約束した。夜になって会った。預言者様に従うことを述べ、あらゆる命令や望みを受け入れることを約束して誓いをたてた。この誓いにあたっては「アッラーと並ぶものを置かないこと、不義を行わないこと、盗みをしないこと、嘲笑をしないこと、非難しないこと、食糧がなくなることを恐れて子供を間引かないこと」について約束をした。アウス族からの二名とハズラジ族から成るこの十二名の人々の長はアスアド・ビン・ズラーラであった。

愛すべき預言者様は、この十二人を彼らの地方での代理人とした。彼らは自分たちの部族にイスラームを説明する一方、部族の代理人として預言者様に対する保証人となった。さらに彼らの中でアスアド・ビン・ズラーラが、代表に任命された。この「第一のアカバの誓い」を行った人々とは、マーリキー・ビン・ナッジャール家のアスアド・ビン・ズラーラ、アウフ・ビン・ハーリス、ムアズ・ビン・ハーリス、ズレイキ・ビン・アーミル家のラーフィー・ビン・マーリキーとゼクワーン・ビン・アブディカイス、ガンム・ビン・アウフ家のウバーベ・ビン・サーミト、グサイナ家のイェズィード・ビン・サーレベ、アジュラーン・ビン・ザイド家のアッバース・ビン・ウバイダ、ハラーム・ビン・カアブ家のウクバ・ビン・アーミル、サワード・ビン・ガンム家のクトゥバ・ビン・アーミル、アブドゥルエシェル・ビン・ジュシェム家のアブルヘイセム・マーリキー・ビン・テイーハーン、アムル・ビン・アウフ家のウベイム・ビン・サーイデであった。
この誓いの後、マディーナへ戻ったアスアド様とその仲間は、故国の人々に昼夜を問わずイスラームを説明し、真実の宗教へと招いた。この宣教の結果、イスラームはマディーナで急速に広まり始めた。そして、以前は互いに敵対していたアウス族とハズラジ族は一つになり、イスラームをよりよく伝えるために、預言者様からある師を迎えたいと考えるようになった。預言者様もクルアーンの章句やイスラームを教えるため、マッカの教友の中からムスアブ・ビン・ウマイル様を師としてマディーナへ送ることにした。
ムスアブ様は、アスアド様の家に滞在した。彼と共に家々を巡り、すべての人にイスラームについての話をした。預言者様への愛情を持ち、預言者様をあらゆる敵から守るため懸命に協力するよう求めた。そして、彼らと預言者様との間で今後再び行う誓いについても準備した。
アスアド・ビン・ズラーラの部族の族長はサアド・ビン・ムアズで、彼らは親戚であった。当時アラブ人の間では、親戚に対する侮辱行為は避けることが習慣だったため、まだ信仰をしていなかったサアド・ビン・ムアズは、アスアド・ビン・ズラーラ様の家に人を行かせ、彼の行動を止めさせようとした。族長として、このことに手を貸したくなかっ

たのである。こうして、名士の一人であるウセイド・ビン・フダイルを呼び「我々の町に行って、やって来た人物を見かけたら何をしようと構いません。アスアドが私の叔母の息子でなければ、このことをあなたに任せたりはしませんでした」と命じた。

そこで、ウセイド・ビン・フダイルは槍を持ち、ムスアブ・ビン・ウマイル様のいた家に向かった。そこに着くと怒りの中で話し始めた。「我々のところへなぜやって来たのですか？ 人々を騙しています！ 生きていたいのなら、ここから直ちに出ていくのです」と言った。彼のこの怒った状態を見たムスアブ・ビン・ウマイル様は「まずは座って、私の話を聞いてください！ 私たちの目的を説明しますので、それが気に入ったら認めてください。そうでなければ妨害なさってください…」と言って、大変柔らかく親しげな返事をした。ウセイドは落ち着き「もっともだ」と言って、槍を戻して座った。

ウセイドは、ムスアブ様の優しい話し方で語られる、人の心に染み入ってくる言葉の数々や、好ましい声で詠まれるクルアーンの章句を聞いた。思わず「これは何と素晴らしい！」と発した。その後「この宗教に入るにはどうしたらよいのですか？」と尋ねた。彼らは説明をし、ウセイド・ビン・フダイルは、信仰告白の言葉を述べてムスリムとなった。嬉しさにその場に留まることのできなかったウセイド様は「少し出かけて、あなた方のところにある人物を送るようにします。もし彼がムスリムになったら、マディーナの彼の部族で信仰しない者はいなくなりましょう…」と言って、急いで立ち上がって出ていった。まっすぐにサアド・ビン・ムアズのもとへと向かった。サアド・ビン・ムアズは彼を見ると「誓って、ウサイドはここから出て行ったときの顔とは違っている」と驚いた。

その後「何があったのですか、ウサイド？」と尋ねた。ウサイド・ビン・フダイル様は、サアド・ビン・ムアズにムスリムとなるよう強く勧め「あの方（ムスアブ・ビン・ウマイル）と話しました。彼からは一つの害悪も見つかりませんでした。ただ聞くところでは、ハーリス族の叔母の息子であるアスアドが、あの方を家でかくまっていることを心配し、彼を殺そうと動き始めているようです」と言った。

このことはサアド・ビン・ムアズの心を大きく揺さぶった。なぜなら、何年か前にあった戦いでハーリス族に勝ち、彼らをハイバルに追放させていたからである。一年後に許し、故国にもどることを許可したという経緯があった。これにもかかわらず、彼らがこのような失礼な態度であることを考えると、サアド・ビン・ムアズは怒り心頭となった。しかし、実際はこういった状況ではなかった。ウセイド・ビン・フダイル様はこの策略によって、サアド・ビン・ムアズの叔母とその息子であるアスアド・ビン・ズラーラ様に、そしてムスアブ・ビン・ウマイル様に危害が及ぶのを防ごうとしたのだった。こうして、族長を彼らのもとへ来させるようにして、結果彼もムスリムになるよう準備をしていたのだった。

サアド・ビン・ムアズは、ウセイド・ビン・フダイルの言葉に飛び上り、アスアド・ビン・ズラーラのもとへと向かった。そこに着くと、アスアドとムスアブ・ビン・ウマイルが全くやすらいで平穏の中に座り、会話をしているのを見た。傍へと近寄り「アスアド！ 我々が親族でなかったら、お前をこうはしていなかったのだ…」と言った。

この言葉に対してムスアブ・ビン・ウマイルは返事をして「サアドよ！ しばらく待って、私たちの話を座って聞くのです。私たちの話が気に入ればそれでよいし、気に入らなければ、勧めたりはしませんので行かれるがいい」と言った。サアド・ビン・ムアズは彼の穏やかで優しい言葉に落ち着き、一方に座って彼らの話を聞き始めた。

ムスアブ・ビン・ウマイル様は、サアド・ビン・ムアズにまずイスラームについて説明し、その基本を解説した。その後、優しく美しい声でクルアーンの章句をいくらか詠んで聞かせた。これを詠むとサアド・ビン・ムアズの態度は一変し、我をも忘れてしまった。クルアーンの章句のまたとない雄弁さを前に心は和らぎ、大きな効果が現れたのだった。間を置かず「この宗教に入るにはどうしたらよいのですか？」と言った。

ムスアブ・ビン・ウマイルは、すぐに信仰告白の言葉を教えた。彼も「アシュハド・アンラー・イラーハ・イッラッラー、ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ」と言ってムスリムになった。サアド・ビン・ムアズはムスリムとなったことの喜びのあまり、その場に留まっていることができなかった。すぐに家に行き、

教わったように清めを行った。その後、人々を集めさせた。ウセイド・ビン・フダイルを伴って、人々が集まった場所へと向かった。アブドゥルエシェル家の人々に呼びかけて「アブドゥルエシェルの者たちよ！　あなた方は私をどのように見知っているのですか？」と聞いた。彼らは異口同音に「あなたは我々の族長であり、年長者であり、我々はあなたに従っているのです」と答えた。サアド・ビン・ムアズは、彼らのこの答えを受けて「それでは、皆に知らせよう。私はムスリムになるという恵みに与りました。あなた方にもアッラーとその預言者様を信じるようになってほしいのです。もし信仰しないというのなら、今後はあなた方の誰とも、話したくも会いたくもない！…」と言った。

アブドゥルエシェル家の人々は、族長のサアド・ビン・ムアズがムスリムになったことや、自分たちのこともイスラームへ誘ったことを聞くやいなや、皆が一同にムスリムとなった。その日の夕方まで、マディーナの空には信仰告白の言葉とタクビールの声が響いたのだった。

この件があってからしばらく後、マディーナの全地域のアウス族とハズラジ族はイスラームを受け入れた。あらゆる家がイスラームの光に輝いていた。サアド・ビン・ムアズとウセイド・ビン・フダイルは、部族が持っていた全ての像を破壊した。愛すべき預言者様がこのことを知ると、大変に喜んだ。マッカのムスリムたちも歓喜の中にいた。このため、この年（西暦六二一年）は『セネトゥス・シュルール』（喜びの年）と言われるようになった。

第二のアカバの誓い

預言者様が、預言者としての責務を果たすようになって十三年目となった。マッカの不信仰者たちのムスリムに対する虐待はこれ以上ないほどになっていて、耐え難い状態だった。一方、マディーナでは、アスアド・ビン・ズラーラとムスアブ・ビン・ウマイルの努力が功を奏し、アウス族とハズラジ族はムスリムたちに手を差し伸べ、彼らを胸に抱き寄せて献身的に手助けをすることに、愛と喜びを溢れんばかりに感じていた。預言者様もできるだけ早くマ

ディーナに行きたいと願っていて、一方、預言者様のためには資産も命も捧げるいう約束もされていた。巡礼の季節が巡ってきた。ムスアブ・ビン・ウマイルとともに、マディーナの男性七十三名と女性二名のムスリムがマッカへとやって来た。巡礼の後、全員が再びアカバにて預言者様と会った。アスアド・ビン・ズラーラら十二人の代理人は部族の名のもとで、預言者様がマディーナへ移住することを願い出た。預言者様はクルアーンの章句を彼らに少し詠んだ後、自身の命や子どもたちの命を守るのと同じように保護してくれることを保証するよう、彼らの確かな約束を求めた。

まだムスリムにはなっていない預言者様の叔父であるアッバース様もその場に来ていた。そして誓いのために集まったこの一団に対して、このように呼びかけた。

「マディーナの者たちよ！　この人物は私の兄弟の息子であります。彼こそが人々の間で最も愛されているのです。もし彼を認め、アッラーからもたらされたものを信じ、そしてあなた方が彼を一緒に連れて行きたいというのであれば、まず私を満足させるだけの確かな約束をしなければなりません。ご存知の通り、ムハンマド（アライヒッサラーム）は私たちの出です。私たちは、彼のことを信じない者たちから彼を守ってきました。私たちの間で、彼の誇りと名誉が守られてきたのです。これにもかかわらず、彼は他の誰に対しても背中を向け、あなた方に加わって一緒に行こうとしているのです。もし、すべてのアラブ人が一致して、あなたがたに攻撃を加えてきたとしても、それに対して彼を守る力があるのならよいでしょう。このことを、あなた方の間でよく相談して、後で意見が分かれないように考えておくのです。約束を守り通し、彼を敵から守ることができるのでしょうか。これを完璧にできるのであればよいでしょう。しかし、このことが守れず、彼がマッカから出た後で一人にするようなことがあるのなら、今のうちにあきらめて、自分の故国でその名誉を守りながら生きるのです」

アッバース様のこの話に、マディーナの人々は悲しくなった。預言者様が自分たちのもとへ来てもらうにあたり、困難なときには彼を一人にするのではないかと思われていたことを知ったからだった。マディーナの教友の一人、アスアド・ビン・ズラーラ様が預言者様に向かい「預言者様！　お許しがあれば、いくつか話したいことがあります。あ

の方に申し上げたいのです」と言った。万物の王が許しを与えると、アスアド様は「預言者様、あなたのためには両親も喜んで犠牲にしましょう！　宣教には易しいものから厳しいものまであります。今、あなたが我々に宣教したことは、人々にとって受け入れるのが大変難しいものでした。なぜなら、人々は昔から寺院にある像を拝んでいて、イスラームを認めることに大きな抵抗があったからです。これにもかかわらず、我々は心のすべてをもってイスラームを認めました。さらに、不信仰者である親類との関係を切るという命令もありましたが、それも認めました。ご存知の通り、このこともまた受け入れるのは大変に難しいことです。あなたの叔父たちでさえあなたの敵となり、護ってはくれませんでした。しかし、あなた自身に手を差し伸べ、この名誉ある責務を果たさなければならないと、私たちは感じたのです。今言った言葉に全員が一致しています。口で言った言葉は心の中でも同じです。自分の子供を守るように、あなたの神聖な身体を、最後の血の一滴まで守ることを誓います。もしこの誓いが破られたなら、アッラーが約束を守らない一団の手中に我々を入れてしまっても構いません。預言者様よ！　我々はこの約束に忠実でありましょう。アッラーがそれを成し遂げさせて下さいます」と述べた。それから

「預言者様よ！　ご自身のために求めていた保証を我々から受けるだけでなく、これに条件をつけることもできます」と続けた。預言者様は彼らをイスラームの道へと鼓舞し、クルアーンの章句を詠んだ。そして「アッラーからあなた方への条件は、アッラーに礼拝をし、他の何ものも彼と並べないことです。私や教友たちへ条件は、私たちを保護して手助けし、あなた方自身が避けていたものから、私たちも守ることでです」とおっしゃった。

ベラー・ビン・マルールが「真実の宗教やクルアーンとともに預言者様を送られたアッラーに誓って、私たちは子供たちを保護し守るように、あなた方を守ります。私たちと誓いをしてください、預言者様」と言った。

マディーナのムスリムたちの間から、アッバース・ビン・ウバイダが出て、預言者様が認めてくれるよう後押しするため、仲間たちに向かって「ハズラジ族の者たちよ！　なぜムハンマド（アライヒッサラーム）が我々を認めて下さったのかを知っていますか？」と聞いた。彼らも「はい」と返事をした。これを踏まえて「あなた方は、平和なときも

戦いのときも彼を受け入れ、彼に従うこととなります。もし、我々の資産に損害が出たり、親族や近親者が死ぬことになったりしたときに、預言者様を一人にして、手伝うことなく放っておくのであれば、今のうちにそうするのです。アッラーに誓って、もしこのようなことがあったとしたら、この世でもあの世でも酷い目にあうことだろう！もし、宣教を行うに際して、資産がなくなろうとも、近い親族が死ぬことになろうとも、彼に対して忠誠を守り続けられると思うのであればそのとおりに護るのです。アッラーに誓って、このことは現世でも来世でもためになることであり、善となることなのです」と言えば、仲間たちも「我々は預言者様のために、資産に損害が出ようとも、近親者が死のうともあきらめません。彼からひと時たりとも離れません。死があろうとも、戻ることはないのです！」と言うのだった。

それから預言者様の方を向き「預言者様！　我々がこの誓いを果たしたならば、我々には何がありましょうか？」と尋ねた。愛すべき預言者様はこれに対して「アッラーのご満悦と天国があります！」とおっしゃった。

彼らの中から、各部族の代理人が代表として誓いを行った。まず初めにアスアド・ビン・ズラーラ様が「私はアッラーとその預言者に対する約束を守り、私の命や資産をもって彼を助けるという約束を守ることを誓う」と言った。続いて、それぞれがこのように誓いを行い「アッラーと預言者様の宣教を受け入れ、これに従います」と言って喜び合い、合意した。こうして、彼らは預言者様のために、命も資産も迷わず差し出したのである。女性たちもまた、言葉をもって誓いをたてた。

愛すべき預言者様は「アッラーと並ぶものを一切置かず、盗みや悪口、不貞、子供を間引くこと、嘘をつくこと、善に反対することなどを行わないこと…」といったことについても、彼らと約束をした。

マディーナの人々が預言者様と誓いを行っていたとき、アカバの丘からはある声が「ミナーで野営している者たちよ！　預言者とマディーナのムスリムたちよ、お前たちと戦うということで了解した」と叫んでいた。預言者様はこの声のことを「これが、アカバの悪魔なのです」と言った後、声に向って「アッラーの敵よ！　あなたのことも倒すことになりましょう」とおっしゃった。誓いを行ったマディーナの人々に対して「すぐに統治者の元へと戻りなさい」とおっ

しゃった。アッバース・ビン・ウバイダが「預言者様！ 誓ってあなたが望むのであれば、明日の朝、ミナーにいる不信仰者のところへと行き、彼らを皆殺しにしましょう」と言った。預言者様はその気持ちを嬉しく思ったが「私たちには、まだそのような形で行動するようには命じられていないのです。今のところは野営地へと戻るのです」とおっしゃった。

イマーム・ネサーイーは、アブドゥッラー・イブニ・アッバースの伝えるところとして、アンサール（ヒジュラで預言者様を受け入れたマディーナのムスリムたち）はアカバの誓いにいた人々が預言者様のもとへと集まったことによって、ムハージル（ヒジュラ以前のマッカのムスリムたち）のようになったと知らせている。

ヒジュラ（聖遷）

最後のアカバの誓いによって、マディーナはムスリムたちが平穏を見つけ、避難できる場所となった。しかし、この誓いのことを聞いたマッカの不信仰者たちの行いは非常に激しくなり、大変危険な状態になっていた。ムスリムたちにとって、マッカに残っていることは耐えられない程になっていた。そのため、預言者様にこの状態を申し上げ、移住の許しを得るようになっていた。ある日、愛すべき預言者様は、喜んだ様子で教友たちのもとへと来て「あなた方が移住をする場所が知らされました。それはヤスリブ（マディーナ）です。そこへヒジュラ（聖遷）をしてください」とおっしゃり、さらに「そこで、ムスリムの兄弟たちと一つになるのです。アッラーが彼らをあなた方の兄弟とさせました。ヤスリブ（マディーナ）をあなた方にとって安全で平穏な祖国としたのです」と続けた。預言者様の許しと勧めにしたがって、ムスリムはマディーナへ、一団また一団と移住を開始した。

預言者様は、ヒジュラを行うにあたっては慎重の限りを尽くし、警戒して行動するよう、よくよく注意をした。ムスリムたちは、不信仰者たちに気付かれないよう、少人数の一団で出発をし、できるだけ秘密のうちに行動した。マディーナへ初めてヒジュラを行ったのはアブー・サラマで、不信仰者たちから大変な虐待を受けていた人物だった。

後になってこのことに気付いた不信仰者たちは、ヒジュラをするために出発したムスリムたちのうち、見つけることのできた者は連れ帰し、女性たちはその主人から引き離して、無理やり牢に入れたりさまざまな拷問を加えたりした。彼らは宗教から戻させようと、ありとあらゆる虐待を行ったのである。しかし、内戦が起こることを恐れて、殺すことまではしなかった。しかし、ムスリムたちは、このような状況にもかかわらず、あらゆる機会を見つけてはマディーナへの道を辿ったのであった。

ある日、ウマル様もサーベルを身につけた。矢と槍も持ち、皆の前でカアバの周りを七度周回した。そこにいた不信仰者たちに対して、大声でこのように言った。「さて、私も宗教を守るため、アッラーの道においてヒジュラを行います。女たちを寡婦に、子供たちを孤児に、母親たちを泣かせたいものがいるのなら、そこの谷の後ろに出て来るがよい！……」

こうして、ウマル様とともに二十人のムスリムたちが、白昼堂々引き止められることもなく、マディーナへの道をとることができた。彼を恐れた不信仰者たちは、この一団の誰に対しても手を加えることができなかったのである。もはや移住する者は後を絶つことはなく、教友たちは一団、また一団とマディーナに到着した。

この間に、アブー・バクル様もヒジュラの許しを願っていた。すると、預言者様は「我慢しなさい。アッラーが私にもその許しを与えるであろうことを望んでいます。一緒にヒジュラをしましょう」とおっしゃった。アブー・バクル様が「あなたのために両親も犠牲にしましょう！ このような栄誉があり得るのでしょうか？」と言うと、預言者様は「はい、あるのです」と答え、アブー・バクル様を喜ばせたのだった。

アブー・バクル様は八百ディルハムを払って二頭のラクダを買い、その日が来るのを待ち始めた。もはやマッカでは、愛すべき預言者様とアブー・バクル様、アリー様、貧乏人、病人、老人、そして不信仰者たちによって牢に入れられた信者たちが残るばかりだった。

一方、マディーナの人々（アンサール）は、ヒジュラを行ったマッカの人々（ムハージル）に対して大変良く接し、

賓客としてもてなした。彼らの間には強い一体感が現れていた。

預言者様もヒジュラを行えば、ムスリムの長となる可能性があるため、マッカの不信仰者たちは混乱に陥っていた。重要なことを話し合おうと、あるときダール・ウン・ネドべというところに集まって、どうしたらよいかを話し合い始めた。すると、悪魔がシェイヒ・ネジディ、つまりネジュド出身の老人の姿になって不信仰者たちのもとへとやって来て、彼らの話を聞いていた。いろいろな案が出された。しかし彼はどれも気に入らなかった。その後、悪魔が話しに加わって「あなた方の考えはどれもうまくはいきません。なぜなら、彼の笑顔と優しげな言葉がどんな用心をも打ち破ってしまうからです。他の方策を考えなさい」と意見を述べた。

クライシュの族長であるアブー・ジャフルは「すべての部族から一人ずつ強者を選ぼう。それぞれの手にサーベルを持ってムハンマド（アライヒッサラーム）に襲いかかるのです。皆がサーベルを打ち下ろして血を流させます。そうすれば、誰が殺したのかは分からなくなり、保証金を払えば済むことになるでしょう。我々は保証金さえ払えば、心配から解放されることになります」と言った。悪魔もこの考えを気に入り、熱心に励まし、勧めたのだった。

不信仰者たちがこの取り決めのための準備を行っている間に、アッラーは預言者様にヒジュラをお命じになった。大天使ジブリールが来て、不信仰者たちが取り決めたことや、その夜は寝床で寝ないようにということを知らせた。愛すべき預言者様は、アリー様に自分の寝床にいるようにさせ、置いてあった所持品を持ち主に返すように命じてから「今晩は私の寝床で横になりなさい。この私の上着も被るのです！恐れることはありません。あなたには何の危害も及びません」とおっしゃった。

アリー様は、預言者様が命じたとおりに横になった。預言者様の場所で全く恐れることなく自分自身を犠牲にする用意をした。

ヒジュラの夜、不信仰者たちは預言者様の幸なる家の周りを取り囲んだ。預言者様は神聖な家から出た。『ヤー・スィーン章』の最初の十節を詠み、一握りの土を取って不信仰者たちの頭上に撒いた。この土が頭に届いた者は、全員がバ

ドルの戦いの際に死んだと伝えられている。一方、預言者様は無事に何事もなく彼らの間を通り過ぎ、アブー・バクル様の家へと着いた。不信仰者たちの中では誰一人として預言者様を見た者はいなかった。

しばらくして、不信仰者たちがいるところへある人がやって来て「ここで何を待っているのですか？」と聞いた。彼らは「ムハンマド（アライヒッサラーム）が家から出て来るのを待っているのです」と答えた。すると、その人は「誓って言いますが、ムハンマド（アライヒッサラーム）はあなた方の間を通り過ぎて行ってしまいました、あなた方の頭に土を振りかけたのです」と言った。不信仰者たちは手を頭に持っていった。確かに頭には土がついていた。すぐに扉をこじ開けて中へ入った。アリー様が預言者様の寝床にいるのを見つけ、預言者様がどこにいるのか尋ねた。アリー様は「知りません！あなた方は、私のことを彼の保護者だとでも思っているのですか？」と言った。これを聞いて、彼らはアリー様を手荒く扱った。カアバの隣でしばらく勾留し、その後、釈放した。不信仰者たちは、預言者様を見つけるために外に出て捜し始めた。

まずは、アブー・バクル様の家に行き、彼の娘であるアスマーに聞いた。返事がないと彼女を殴った。至るところを捜したが見つけることはできず、彼らは気が狂ったようになっていった。最も凶悪なアブー・ジャフルは、マッカとその周辺を大声で喚きながら、愛すべき預言者様とアブー・バクル様を見つけて連れてきたり、その場所を教えたりした者には百頭のラクダを与えると約束していた。彼のこの言葉を聞いた強欲な者たちは、武装して馬に乗って捜し始めた。

預言者様はアブー・バクル様の家に来ると「ヒジュラを行う許しがありました」とおっしゃった。アブー・バクル・スィッディーク様は興奮の中「神聖な足についた土埃に、私の顔をつけましょう、預言者様！…私もご一緒しますか？」と尋ね、預言者様は「はい」とおっしゃった。これを聞くとスィッディーク様は、喜びのあまり涙を流した。涙の中「両親や命をあなたに捧げます、預言者様！ラクダの用意はできています。どれか気に入ったものを選んでください」と言った。しかし、万物の王は「私の所有でないラクダには乗ることはできません。ですからお金を払います」とおっしゃっ

た。このことをどうしてもと言われたスィッディーク様は、ラクダの値段を言うほかはなかった。

アブー・バクル様は、アブドゥラー・ビン・ウレイクゥトという名の有名な道案内を呼んで有料で雇い、ラクダを三日後にセブル山の洞窟に連れて来るように命じた。サフェル月二十七日の水曜日、預言者様とアブー・バクル・スィッディーク様は、いくらかの食べ物を持って出発した。アブー・バクル様は、預言者様の周りを左に右に、前に後ろにと動き回っていた。預言者様がなぜこのようにするのかと尋ねると「周りから来る危険を防ぐためにです。もし何か危害があれば、まずは私に及びましょう。高貴な方のためには犠牲になります、預言者様」と答えた。万物の王は「アブー・バクルよ！　私のところへと来る災難が、私の代わりにあなたのところへ来てほしいというのですか？」とおっしゃった。スィッディーク様は「はい、預言者様！　あなたを真の宗教とともに真の預言者として送ったアッラーに誓って、災難はあなたに代わって私のところへ来てほしいのです」と言うのだった。

途上、愛すべき預言者様の靴がきつかったために壊れてしまい、神聖な足は怪我をして歩ける状態ではなくなってしまった。困難の中、山に登り洞窟へと到着した。入り口の前に来ると、アブー・バクル様は「アッラーのためです、預言者様。中にはお入りにならないでください！　私が入って、そこに害悪があれば私に及ぶようにしてください。神聖な方にはわずかな心配も少しの苦難も及ばせないようにしてください」と言って中へ入っていった。中を掃いてきれいにした。右や左には大小さまざまのたくさんの穴があった。着ているものをばらして穴を塞いだ。しかし一つ開いたままの穴が残ってしまった。そこで靴のかかとを使って塞ぎ、預言者様を中へと招き入れた。

預言者様は中へ入り、神聖な頭をアブー・バクル様の胸に置いて横になった。そのとき、スィッディーク様の足を蛇が噛んだ。預言者様を起こさないようにと我慢し、少しも動かなかった。だが預言者様の神聖な顔に涙が滴ったため「どうしたのです、アブー・バクルよ？」と尋ねられることになった。

アブー・バクル様は「私の足で塞いだ穴から蛇が出て、足を噛んだのです」と答えた。預言者様は、アブー・バクルの怪我がよくなるようにと神聖な口の湿りをそこへ塗ると、痛みはすぐに治まったのだった。

さて、預言者様とアブー・バクル・スィッディークが洞窟の中にいるとき、不信仰者たちは足跡を追跡しながら、洞窟の前へとやって来ていた。しかし、入り口にはクモの巣が張られ、二羽の鳩が巣を作っているのを見つけた。足跡を追っていたクルズ・ビン・アルカムは「ここで足跡が途切れています」と言った。だが、不信仰者たちは「もし彼らがここに入ったのなら、入り口の真ん中のクモの巣が破られているはずでしょう」と言った。

幾人かは「ここまで来たのです。誰か洞窟に入って見てみよう！…」と言ったが、ウマイヤ・ビン・ハラフは彼らに「あなた方には頭というものがついていないのですか？　入口の真ん中に幾重にもなったクモの巣があるその洞窟に一体何の用があるというのです？　誓ってこのクモの巣はムハンマド（アライヒッサラーム）が生まれる前から張られていたものでしょう」と言った。不信仰者たちが入り口の前で議論しているとき、中ではアブー・バクル様が心配しながら「預言者様！　本当に自分のことで悲しむことはありません。ただ、高貴な方に何か起こるのではないかと恐れています。私が死んでもただ一人のことであり、何も変わることはありません。しかし、あなたに危害が及べば、共同体のすべてが死に絶え、宗教が崩壊してしまうのです」と言った。万物の王は「アブー・バクルよ、心配ありません！…　間違いなくアッラーは私たちとともにあるのです」とおっしゃった。

アブー・バクル・スィッディークは「預言者様よ！　命をあなたに捧げます。彼らのうちの誰かが腰を折って中を見れば、私たちを見ることでしょう！」と言うと、預言者様は「アブー・バクルよ！　私たちは二人ですが、三人目はアッラーなのです。心配しないでください！…　アッラーは私たちとともにあるのです」とおっしゃった。不信仰者たちは中を見ることなく去っていった。

アッラーはこのことをクルアーンの章句でこのようにおっしゃっている。『仮令あなたがたがかれ（使徒）を助けず、不信心の者たちが、かれを追放しても、アッラーは必ずかれを助けられる。かれは、只一人（の同僚）と、二人で洞窟にいた時、その同僚に向かって「心配してはならない。アッラーはわたしたちと共におられる。」と言ったその時アッラーはかれの安らぎを、かれ（アブー・バクル）に与え、（天使の）軍勢でかれを強められ

た。また不信者たちの言葉を最も低いものになされた。アッラーの御言葉は最も高きにある。本当にアッラーは偉力ならびなく英明であられる。』（悔悟章（アッ・タウバ）第四〇節）

愛すべき預言者様とアブー・バクル様は、この洞窟で三日三晩を過ごした。アブー・バクルの息子のアブドゥッラーが、マッカで話を耳にすると、夜の間に洞窟へと行って情報を伝え、また、解放された奴隷であり道案内でもあった羊飼いのアーミル・ビン・ヒュヘイレも、夜の間にミルクを持って行っては彼らの足跡を消したのだった。

セブルの洞窟を四日目に発った預言者様は、クスワーという名のラクダに乗った。一説によれば、その後ろにはアブー・バクル様が乗り、もう一頭のラクダに、アーミル・ビン・ヒュヘイレ様と道案内として雇ったアブドゥッラー・ビン・ウレイクゥトが乗った。

万物の王である預言者様は、アッラーが称えた場所である、最も尊い故国のマッカから離れた。一旦、ラクダをカアバの方へと向け、悲しい様子で「誓って、あなたはアッラーが創造した場所のうち、最も善に満ち、最もアッラーが愛した場所なのです！　あなたから出ていかされることがなければ、自ら出ていこうとはしなかったでしょう。私には、あなたよりももっと美しい、もっと愛すべき祖国はありません。私の部族が、私を追い出さなければ出て行くこともなく、あなた以外の場所で生きることはなかったのです」とおっしゃった。

そのとき、大天使ジブリールが現れ「預言者様よ！　故国が懐かしいのですか？」と聞いた。預言者様は「はい、懐かしいのです！」とおっしゃった。大天使ジブリールは、後年マッカへ戻ることになるという吉報をもたらし、クルアーンの『物語章（アル・カサス）』第八五節を詠んで、神聖な心を慰めた。

旅は静かに過ぎていった。不信仰者たちはあらゆるところを捜したにもかかわらず見つけることはできなかった。アッラーが、愛するものを害悪から保護したのだった。預言者様はクデイドという場所に来ると、ウンム・マーベドという名の、その寛大さで有名な、賢明で、貞淑なある女性のテントの前で停まった。お金を払い、食べ物、ナツメヤシ、そして肉を買おうとした。しかし、ウンム・マーベドは「もし可能であったなら売るということではなく、お

客様として歓待し、ごちそうをしたかったところです。けれども、飢饉や最近の問題のせいで手元には何も残っていないのです」と言った。「ミルクはありますか？」と尋ねると「ありません。家畜たちは子を産まないのです」と答えた。万物の王である預言者様は、テントの隣にいた痩せこけた羊を指して「ウンム・マーベドよ！　この羊はどうしてここにつながれたままなのですか？」と聞いた。彼女は「ひどい病気で痩せているため、群れから残されているのです。力もないので行けないのです」と言った。「この羊にミルクはありますか？　この羊の乳を搾ってみてもよいでしょうか？」とおっしゃるので「両親をあなたに捧げます。けれども乳は出ないのです。もちろん、その羊の乳を搾ってみても構いません」と答えた。そこで、預言者様は羊のところへと行き、アッラーの名前を唱えた。恵みを願った後、神聖な手で羊の乳房を押した。すると、乳房はミルクであふれ、滴り始めた。すぐに入れ物を持ってきてそれを満たし、まずはウンム・マーベドに渡した。彼女が飲んだ後、アブー・バクルと他の者たちに渡し、いっぱいになるまで飲んだのを確かめた。最後に自分でお飲みになった。もう一度、神聖な手を羊の乳房に触れてなぜた。そして、このテントにあった一番大きな入れ物を持って来させた。それをも一杯にしてウンム・マーベドに渡した。

そこを発った後、ウンム・マーベドの夫が戻って来てミルクを見た。喜んで「このミルクはどうしたのですか？」と尋ねると、ウンム・マーベドは「どなたか神聖な方がお見えになって、私たちの家に恵みを与えてくださったのです。ご覧になったのは、その方のお助けと祝福なのです」と答えた。「詳しく話すのです。どのような風貌や姿だったのですか？」と続けて聞いた。

ウンム・マーベドは「お会いしたその神聖な方は、大変美しく、笑顔の方でした。目はいくらか充血していて、声には上品さがありました。神聖なまつ毛は長かったです。白眼は大変白く、黒眼は真っ黒で、アッラーのつくったアイラインがありました。髪は黒く、ひげは濃かったです。話さないときは威厳があり、落ち着いた感じでした。話すときは微笑んでいて、その言葉はまるで連なった一つの真珠のように、口から優しく優しくこぼれてきました。遠くから見ると大変威厳があるように見え、近くに来ると、とても優しく、引きつけられるようでした。付き従っている

方たちは、彼の命令を聞くために一生懸命走り回っていました」と言い、他にも数多くの特徴を挙げた。驚きをもってこの話を聞いていた夫は「誓ってその方は、クライシュ族が捜していた方に違いありません。もし、私がその方と巡り合っていたならば、お手伝いする恵みに与って、彼のもとを離れなかったことでしょう」と言った。一説では、先の羊は十八年も生きたという。万物の王の恵みにより、その羊からは彼らのところに朝に晩に糧が得られるようになった。ウンム・マーベドの夫は預言者様を捜しに出かけ、リームの谷で追いついてムスリムになった。そして、ウンム・マーベドもムスリムになったのだった。

スラーカ・ビン・マーリキー

不信仰者たちは、マディーナへ向かった預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）とアブー・バクル様を引き続き捜していた。見つけられなかった場合、自分たちにとっては大きな脅威が出現することになると考えていた。なぜなら、ムスリムたちが「イスラームの国」を作って、短期間で自分たちを滅ぼそうとするのではないかと考えたからだった。このため、不信仰者たちは、すべてのものを賭けていた。預言者様とアブー・バクル様を殺したり、あるいは捕虜としたりした者には、百頭のラクダとともに数えられないほどの金品を与えると約束した。この知らせは、スラーカ・ビン・マーリキーが属する、ムドゥリジ家の間にも広まった。スラーカ・ビン・マーリキーは、追跡を得意としていた。このため起きていることについて興味を抱いていた。

ムドゥリジ家はある火曜日に、スラーカ・ビン・マーリキーの住んでいるクデイドという場所に集まった。集まりには、スラーカ・ビン・マーリキーもいた。その際、クライシュ族から一人の人物が来て「スラーカよ！ アッラーに誓って、私はつい先ほど、海岸の方へと向かう三人のキャラバンを見かけました。彼らがどうやらムハンマド（アライヒッサラーム）とその教友であるらしいのです」と言った。スラーカは状況を理解した。だが、この件では多大な褒美が用意さ

れていたため、自分一人だけの手中にしたいと考えた。このため、他の人がこの知らせを耳にしないように「いいえ。あなたの見かけたという人たちは誰某の一行です。少し前に通っていきました。彼らのことを私たちも見かけました」と言って、何も重要なことはないかのように話した。

スラーカ・ビン・マーリキーはしばらく待ってから、人の注意を引かないようにして家へと戻った。手伝いの者に、馬と武器を持って谷の後ろで自分を待つようにと言いつけた。自身も矛を持ち、その閃きが人目を引かないように、刃を下へ向けて持った。そして馬を走らせ始めた。道を進み続け、ついに足跡を見つけた。やがて、互いによく見える距離まで近づいた。スラーカは、預言者様が詠んでいたクルアーンでさえ聞こえるほどに近づいた。だが、預言者様は後ろを全く見ていなかった。アブー・バクル様が後ろを振り返ったときにスラーカを見つけ、彼は慌てふためいた。預言者様は先の洞窟でのときのように「心配しないでください。アッラーは私たちとともにあるのです」とおっしゃった。

ブハーリーが伝えるところによると、アブー・バクル様は、一人の騎兵が自分たちのところに追いつこうとしていることを預言者様に申し上げたところ、預言者様は「アッラーよ！ 彼を落とてください」と願ったという。また別の説では、スラーカが脇まで来ると、アブー・バクル様は涙を流し始めたという。預言者様がなぜ泣くのかと聞くと「本当に自分自身のために泣いているのではありません。あなたに危害が及ぶことを恐れ、泣いているのです」と答えた。

スラーカは、預言者様を襲うまでに近づいた。そして「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたを今日、私から誰が守ってくれるというのか！」と言うと、万物の王は「ジャッバール（制圧者）であり、カッハール（征服者）であるアッラーが私を守ります」と返した。そのとき、スラーカの馬の二本の前脚が膝まで地面に沈み込んだ。スラーカがこれを直して、再び襲おうとすると、馬の脚はまた地面に突っ込んでしまうのだった。スラーカは、馬を立て直そうとしても、救うことはできなかった。もはや他に方法はなかった。仕方なく、憐れみと慈悲を預言者様に懇願し始めた。すべての徳を自身に集め、気品さをもって創造された預言者様は、彼のこの願いを認められた。スラーカは「ム

ハンマド（アライヒッサラーム）よ！ あなたが守られているということを、私も今や分かりました。願いを行って救ってください。今後はあなたに決して危害を加えません。あなたの後から追いかけてくる者たちにも、あなたのことを話しません」と言った。そこで、預言者様が「アッラーよ！ もし彼の言葉が本心からのものであれば、馬を救ってください」と願うと、アッラーはこの願いを聞き入れた。

スラーカ・ビン・マーリキーの馬は、この願いの後、くぼみから出ることができた。このとき、馬の足が沈んだ場所から天の方へ向かって、煙のようなものが立ちのぼるのが見えた。すべてのことが終わると、スラーカは驚きの中で立ち尽くし、目撃した多くのことからムハンマド（アライヒッサラーム）が常に守られていることを理解した。最後に「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 私はスラーカ・ビン・マーリキーです。私を決して疑わないでください。あなたに約束します。今後は、あなたの気に入らないことは何一つ行いません。私の部族は、あなたとその友人たちを捕えた者に対して、大変な褒美を与えるという約束をしていたのです」と言い、クライシュ族の不信仰者たちが行おうとしていることを一つ一つ説明した。さらに、彼らに道中の食料と乗るためのラクダを贈ろうとしたが、預言者様はそれをお認めにはならず「スラーカよ！ あなたがイスラームを認めないのであれば、あなたのラクダや牛を欲しくはありません。あなたは私たちを見たことを秘密にしてくれれば、それで十分です」とおっしゃった。

イブニ・サアドは次のように伝えている。スラーカは、預言者様に対して何でも命令してもらうように言ったところ、預言者様は「故国に戻るのです。そして、誰も私たちに追いつけないようにしてください」とおっしゃった。

アッラーが望めばすべてはそのとおりになる。アッラーを純粋に信頼し、アッラーのご満悦を得る道を進むことで、思ってもみないようなことが起こったのだった。預言者様を殺して多大な褒美に与ろうという貪欲さとともに、ほえるライオンのような様子で現れたスラーカは、今や親しく素直な子供のようになっていた。すべては全能のアッラーが、最愛の者に危害が及ばないよう、スラーカの心を良い方面へと向けたのであった。もちろん、アッラーは愛する預言者様を一人にはしておかなかったのである。なぜなら、彼は人類に対する憐れみのため、そして、人々が現世と来世の永遠の繁栄と幸福に恵まれるために送られた、愛すべき預言者様であるのだから。

スラーカはこの後、足跡を辿って戻っていった。起こったことについては、出会った誰にも言うことはしなかった。

吉報！吉報！万物の王がやって来る！…

預言者様は、アブー・バクル様とアーミル・ビン・ヒュヘイレ様、そして案内人のアブドゥッラー・ビン・ウレイクゥトとともに、ヒジュラ一年目のラビーウ・ル・アウワル月の八日、月曜日（西暦六二二年九月二十日）の午前中、クバー村に到着した。この日がムスリムにとって、ヒジュラ暦の始まりとなった。一行はクウスン・ビン・ヒディムという名の、あるムスリムの家で滞在した。ここで初めてのマスジドが作られた。クバーの谷では、初めて金曜日の集団礼拝を行い、初めてのフトバ（説法）も行われた。クバーのマスジドについては、クルアーンの章句でも『悔悟章（アッ・タウバ）』第一〇八節の『…最初の日から敬虔に礎えを定めて建立されたマスジド』と啓示され、称えられている。

このとき、マッカにいたアリー様は、預言者様が日頃カアバでいた場所に座っていた。そして「預言者様に物を預けた人々は集まってください」と大声で言った。全員が集まり、預けたものの印を言って、それらを引き取った。このようにして、預かっていたものが所有者に返された。

マッカに残っていた教友たちは、アリー様の庇護のもとに身を寄せ合った。預言者様の幸なる家財道具がマッカにあるかぎり、アリー様はそこで留まった。やがて、預言者様は家財道具をマディーナに持ってくるよう命じた。

アッラーの獅子であるアリー様は、クライシュ族の不信仰者たちが集まっていたところへと行き「インシャーアッラー、明日、マディーナへ行きます。何か言うことはあるのですか。私がここにいるうちに言いなさい」と言った。全員が頭を垂れ、何も言うことはできなかった。朝になるとアリー様は預言者様の持ち物を集め、預言者様の家族や自分の親族とともに出発した。そして、預言者様のもとへ、腫れた足から血が出た状態でクバーに着いた。日中は隠れ、

夜には徒歩で進んだこの旅路の結果、預言者様の前に出られないほどの状態になっていた。預言者様はこの知らせを受けると自ら出向いた。アリー様を見るとその状態に心痛め、愛すべき、献身的ないとこを抱擁し、アッラーのために数多くの苦難に耐えたその優美で上品な足を神聖な手でなぜ、彼の健康のために祈ったのだった。さらにアリー様のこの献身に関して『また人々の中には、アッラーの御喜びを願って、自分を売った者がある。』（雌牛章（アル・バカラ）第二〇七節）というクルアーンの節が下ったと伝えられている。

先にマディーナへ移住していた教友たちとマディーナのムスリムたちは、万物の王がマッカから移住してくるということを聞くと、熱心にそして興奮して到着を待ちわびていた。このため、マディーナの人々は郊外に見張りを置いて、預言者様と出会うことで町が名誉に与るそのときを熱望していた。その愛情は燃え、灼熱の砂漠で水を渇望するかのように、目を地平線の方へと向けて毎日待っていた。ついに「いらっしゃる！ いらっしゃる！…」という声が聞かれた。声を聞いた人々は、熱い砂漠の中を見回し始めた。そう！… そうだ！…灼熱の砂漠で、太陽の熱に焼かれながらも、大いなる威厳をもって自分たちの方へ彼らが進んで来るのが見えたのだった。互いに喜び合って「吉報！… 吉報だ！ 預言者様がいらっしゃる！… 我らの預言者様がいらっしゃる！… ああ、幸せなマディーナの者たち。祝いをするのだ！ アッラーの愛する方がいらっしゃる！… 私たちの大切な方がいらっしゃる！…」と言って叫び始めた。この知らせはまたたく間にマディーナの町角に広まった。あらゆる人々、年寄りから病人に至るまで皆が、このかつてない喜びの知らせを待ちわびていたのだ。マディーナの人すべてが、一番上等な服を着て、すぐに万物の王にお会いしようと走った。タクビールの声は天にとどろき、うれし涙を洪水のように流していた。悲しみも喜びもたくさんの風が吹いたマディーナではあったが、この日、その歴史上で最も美しい日を迎えていた。皆から「アル・アミーン」という尊称で知られていたアッラーの最愛の者を殺そうと、褒美を用意する者たちがいる一方、預言者様と友人たちを守り、固い絆を持って命さえ犠牲にしようとしている人々がいたのだった。

マディーナの人々は、一瞬でも早く、愛すべき預言者様の光に満ちた姿を見たいと願っていた。マディーナはこのように喜びにあふれ、これほどの神聖な瞬間も見られたことはなかった。その日まで起こったことのない、まさに祝典であった。

かつて同じようなことは見られたことはなく、また、将来も見られないであろうこの祝典において、子供たちや女性たちは次のような詩を吟じていた。

別れの坂から満月が私たちの上を照らした
アッラーに呼びかければ、私たちにとって感謝は義務となる
あなたは私たちに遣わされ、アッラーの命令を携えてきた
マディーナにようこそ、あなたの宣教によって私たちは名誉に与る
栄光ある恩恵を受け、昔のことから解放された
敬意を纏ってそれに満たされ
以下であったものは以上に転じた
虐待をなくす月は語る、挨拶をするのだ
ムハンマド（アライヒッサラーム）に従う者に決して虐待はない
私たちは皆約束をした、誓いの日に

真実は私たちの道、私たちの宗教に裏切りはない
アッラーに誓って忘れない、苦悩の日はなくなった

あなたも証人です、アル・アミーンの星よ
あなたの忠実な愛は豊かにある

「ようこそ、預言者様」「どうぞ私たちのところへ、預言者様」といった願いがあちこちに響いていた。マディーナの名士たちの何人かは、ラクダのクスワーの手綱を取って「預言者様！　どうぞ私たちのところへ…」と言って自分たちのところで歓待しようとした。預言者様は彼らに「ラクダを歩かせるがままにさせてください、彼の思うようにさせるのです。誰かの家の前で座り込んだら、そこの客となります！」とおっしゃった。皆、大変に興奮し、やきもきし始めた。一体クスワーはどこで座るのだろう？　クスワーはマディーナの町中へと進み、あらゆる扉の前を通り過ぎるときには、家の主人が「預言者様！　私どものところへいらしてください、私どものところへいらしてください！」と懇願するのだった。預言者様が彼らに微笑んでおっしゃるには「ラクダの道を開けてください！　どこで座るかを彼には命じられているのです」ということだった。ついにクスワーは、今日では祝福されたモスクの扉がある場所に座った。預言者様はラクダから下りなかった。ラクダは再び立ち上がり、歩き始めた。しかし、元のところで再び座り、今度は立ち上がらなかった。これを見て預言者様はクスワーから下り「インシャーアッラー、泊まるのはここでしょう」とおっしゃり「ここはどなたの土地ですか？」と尋ねた。「預言者様！　アムル家のスヘイルとセフルのところです」という返事があった。この子供たちは孤児だった。そこで預言者様は「誰か私の親戚の家はここから近くにありますか？」と聞いた。というのも、預言者様の祖父であるアブドゥルムッタリブの母がネッジャール家の一人であったからだった。ハーリド・ビン・ザイド・アブー・アイユーブ・アル・アンサーリ様は喜んで「預言者様！　私の家が近くにあります。ほらそれが私の家で、それが扉です」と興奮して言った。クスワーの荷を降ろし、預言者様は賓客となった。

マディーナのムスリムたちとムハージルたちは、預言者様のヒジュラに大変喜んでいた。

あなたの魂はアッラーの御光の地点です、預言者様
あなたの麗しさは喜びを強め満足を与えます、預言者様
すべてのムスリムが知っている、あなたの身体から出ずるもの、それは慈悲の徴
不信仰のすべての暗闇が取り除かれたのです、預言者様

あなたは使者たちのバラ園のバラの茂み
しかも、あなたはアッラーが育てた最後のバラのつぼみです、預言者様
慈悲をお示しください、ああ、保護する者、アッラーの最大の名誉の徴よ
あなたの知識の光線がナジーブの苦悩を救うのです、預言者様

スルタン・アハマド三世（ナジーブ）

第二章　マディーナ時代

愛すべき預言者様は、預言者となって十三年目のラビーウ・ル・アウワル月十二日、西暦六二二年に、マディーナにヒジュラをし、これから十年続くマディーナ時代が始まろうとしていた。

預言者様がハーリド・ビン・ザイド・アブー・アイユーブ・アル・アンサーリ様の家を訪れると、下の階に住むことを選び、そこに住み始めた。こうして万物の王をもてなし、自分の家に迎えるという名誉が、この神聖な人物に与えられたのだった。

ハーリド様はこのように語っている。「預言者様が私の家に名誉を与えてくださったとき、一階の方に住むことを選びました。私たちがその上に住んでいたため、この状況が大変気になっていました。ある日『両親をあなたに捧げます、預言者様！私が上の階で、あなたが下の階にいらっしゃることに心は穏やかでなく、よろしくないのではないかと思っています。これは私にとって大変重いことです。お願いします。高貴な預言者様が上の階に、私たちが下の階に住むようお許しください』と言いました。それに対して『アブー・アイユーブよ！家の一階にいるのは私たちにとって適当なことであり、また都合のよいことなのです』とおっしゃいました。訪れる方々とより楽に話ができるという理由で、一階にいることを適当と考えていたのでした。私たちは上の階に住み続けました。

ある日、壺が壊れました。こぼれた水が預言者様の上に滴って迷惑をかけることを恐れ、唯一のベルベッドの布団で妻とともに水を押えました」

アブー・アイユーブ・アンサーリは上の階にいることを大変気にしていた。結局、自分たちが下の階に、預言者様が上の階に住むことになった。アブー・アイユーブ・アンサーリ様はこのように語っている。「預言者様に毎晩食事を用意し、持っていかせました。残ったものが私たちに戻ってきたときには、私や妻のウンム・アイユーブは、預言者様の手がついているところを探し、そこから食べて恵みに与りました。またある日、作っていかせた玉ねぎとにんにくの食事を預言者様が残しました。その食事には手がつけられていなかったため、悲鳴を上げて預言者様のもとへと行きました。『預言者様、両親をあなたに捧げます。夕食をお戻しになりましたが、あなたの神聖な食べた痕が見られませんでした。私やウンム・アイユーブは、あなたが返した食事から手がついているところを探し、そこから恵みに与っていたのです』と言いました。預言者様はこうおっしゃいました。『この野菜に匂いを感じました。ですから食べなかったのです。私は天使と話す者です』『その料理は禁じられたものですか？』と尋ねると、『いいえ。しかし私は匂いのため、それはあまり好きではありません』とおっしゃったので『あなたが好まないものは、私も好みません』と言いました。しかし、預言者様は『あなた方はそれを食べなさい』とおっしゃいました。これに従って、私たちはそれを食べました。

その後、預言者様には二度とこれらの野菜で食事を作ることはしませんでした。

また、ある日預言者様とアブー・バクル様に足りるくらいの食事を作り、前に上がりました。預言者様は『アブー・アイユーブよ！（マディーナ出身の）アンサールから三十人を招待しなさい』とおっしゃいました。私が食事の少なさのことや、もしかしたら預言者様がたくさんあると勘違いしているのではないかと考えていると『アブー・アイユーブよ！アンサールから三十人を招待しなさい』とおっしゃいました。いろいろと考えながらも、アンサールから三十人を招待しました。彼らはやって来ました。その料理を食べ、皆が満腹になりました。これが奇跡であることを理解し、訪れた人々の信仰はより強くなり、再び誓いを捧げて帰っていきました。

その後『六十人を招待しなさい』とおっしゃいました。私は奇跡として食事が少なくならないことを見ていたので、喜んで六十人を預言者様の前に招待しました。彼らがやって来て、その食事を食べました。

全員が預言者様の奇跡を確認して帰っていきました。次に『アンサールから九十人を呼びなさい』とおっしゃいました。招待しました。そして彼らがやって来ました。預言者様の命令にしたがって食卓に座って食べ、全員がこの素晴らしい奇跡を見て帰っていきました。このようにして合計百八十人が食事をしました。食事は私が持っていったと

きの量のままで、誰も手をつけていない状態でした」

アンサールとムハージルが兄弟となる

預言者様はマディーナでより強固な関係を築くため、移住してきたムハージルと、彼らを自分たちの家でもてなすアンサールとの間を、一人ひとり互いに兄弟とさせた。しかし、アリー様が最後に残されたため、自分のことを忘れられたのかと思い「預言者様！　私のことを忘れてしまったのですか？」と尋ねた。すると世界の王は「あなたはこの世でもあの世でも、私の兄弟です」とおっしゃった。この兄弟の絆は、物質的にも精神的にもお互いに助け合い、関係の基盤となっていった。こうして、故郷や家、親族から離れているという悲しみを、全部ではなかったとしても軽減されることとなった。マディーナのムスリムたちはアッラーの宗教に基づいて生活をし、また、これを広めるために自分の故郷を離れたムハージルの兄弟に胸を開き、家に招いて彼らにあらゆる手助けをしようと一生懸命に努力をしていた。この兄弟関係ができたことによって、ムスリムたちの互いの結びつきは強くなった。預言者様はそれぞれのムハージルに対して、性格的に合うアンサールを兄弟とさせていた。こうして兄弟となった者たちは、父から残された遺産でさえ分け合うほどになっていた。

マディーナ出身の一人ひとりが、土地や果樹園、菜園、家、資産など持っているものをすべて二つに分け、その半分をムハージルの兄弟に喜んで与えた。ムハージルのアブドゥルラハマーン・ビン・アウフ様はこのように語っている。

「私たちがマディーナに移住したとき、預言者様は私をサアド・ビン・レビーと兄弟としました。これを受けて、兄弟のサアドは私に『兄弟のアブドゥルラハマーンよ！　私は資産の面では、マディーナの裕福な者の中にあっても裕福です。資産を二つに分けました。半分はあなたのものです』と言いました。私は『アッラーがあなたの資産を神聖にし、そして幸運を与えますように。私に資産は不要です。ただ、買い物をする市場へ私を連れていってください。それで

十分です』と返事をしました」

このような献身は、イスラームの兄弟であるからこそできたことであった。預言者アーデムからこの日まで、移住は数多く行われてきた。しかし、これほどまでに意義深く高尚で、外から来る人と元からいた人との間でこれほどの愛情にあふれ、親密になり、心からの結びつきを持った移住はあったためしがなかった。事実、アッラーが下したクルアーンの節でも『信者たちは兄弟である。』（部屋章（アル・フジュラート）第十節）と述べられている。これは、本当の愛情や誠実さというものは、物質的な利益からではなく、信仰や信心によってできるものであるという印なのである。そして教友たちのこの絆は、預言者様の話によって生まれたものであった。預言者様の神聖な心からあふれた海のような学識や恵みが教友たちの心に流れ入り、その結果、前例のない自己犠牲のもとで互いを慈しみ、兄弟を自分のことよりも優先して考えるほどになっていた。

アンサールとムハージルは、この新しいイスラームの土地において手に手をとり、心に心をつなぎ、イスラームという宗教を強くするため、あらゆる犠牲に耐え、最後には殉教者の地位を得ようと約束をしていた。このようにして預言者様の周りに集い、イスラームという宗教の基本に従って、新しい秩序のもとで幸福な生活を送るようになったのだった。もはやイスラームはヒジュラによって「国家」となる道の一歩を踏み出したのである。マディーナは、イスラームの中心地となりつつあった。

マディーナでは、教友たちのほか、キリスト教徒やユダヤ教徒、偶像崇拝を行う不信仰者たちも住んでいた。ユダヤ教徒としては、カイヌカー族、クライザ族、ナーディル族という三つの部族があった。これらは、イスラーム、特に愛すべき預言者様を激しく敵視していた。

このとき、マッカの不信仰者たちは、預言者様がマディーナで教友たちを互いに兄弟にさせるという方法をとって、彼らが親しくなっていくことを、自分たちにとっては大きな脅威であると見なしていた。短期間のうちにこれに対処しなければ、ムスリムたちは力をつけてマッカを包囲し、残していった土地や家屋、祖国を取り戻そうとするかもし

れない…。このように考えたマッカの不信仰者たちは、マディーナのムスリムたちに脅迫の書簡を送った。この書簡の一つでは『敵対するアラブ人の中でも、間違いなく、あなた方ほど我々をひどく立腹させた者はない。なぜなら、我々から出たある人物を引き渡す必要があるにもかかわらず、彼を助け、胸を開いて守っているからである。これはあなた方にとって、実に大きな怠慢である。彼と我々の間から出ていき、彼のことは我々に任せるのだ。もし、彼が生き方を直したら、それに最も喜ぶのは我々である。逆であれば彼を始末することが我々の義務である』と言っていた。

この書簡に対して、カアブ・ビン・マーリキー様が、預言者様を褒め讃える大変素晴らしい返事を書いた。

マッカの不信仰者たちは、マディーナの不信仰者たちにも同じように脅迫の書簡を書いた。彼らには『もし、その人をあなた方の町から追い出すか、あるいは殺さなければ、あなた方に攻撃をして殺し、女たちを手伝いの身に貶めることになる！…』と脅したのだった。

これを受けて、マディーナの不信仰者である、アブドゥッラー・ビン・ウベイが不信仰者たちを集め、機会を見つけ次第、預言者様に攻撃を加えることに決めた。

ムスリムたちはこのことを知ると、愛すべき預言者様を守るため、あらゆる熱意を示して、その身の周りをしっかりと固めた。夜に街中へ出ることはできず、家でも安心して眠れなくなっていた。ウベイ・ビン・カアブはこう語っている。「預言者様と教友たちがマディーナにいらっしゃったとき、ムスリムたちは、不信仰者のアラブ人から敵として狙われていました。教友たちは武装して朝まで見張りを行っていました」

教友たちは一致団結して、危険なときに全力でムスリムの兄弟のために手助けしようと奔走していた。この先頭に立っていたのが、愛すべき預言者様であった。預言者様は、あらゆる善行で先頭に立ったように、勇気の面でも教友たちの先頭に立っていたのだった。夜のどんな時間であろうとも、叫び声が聞こえれば、誰かが到着するよりも前に、預言者様が馬に乗って稲妻のようにそこへ行き、恐れることは何もないということを教友に語り、彼らを落ち着かせていた。

預言者モスク

預言者様がマディーナにいらしてからの最初の仕事は、教友たちを育てることであり、集団で礼拝できるマスジドを作りたいと考えた。このとき、大天使ジブリールが来て「預言者様！　アッラーは自らのために石と日干しレンガでバイト（モスク）を作ることをあなたに命じられています」と言った。万物の王は、直ちにマディーナに来たときにラクダのクスワーが座った場所を所有者から買い取ろうと考えた。所有者は「預言者様！　その対価はアッラーからお待ち申し上げることにします。その土地はアッラーのご満悦を得るため、あなたにお贈りいたします」と言って寄付することを強く申し出た。しかし、預言者様はお認めにはならず、多いほどの対価を支払った。

支払いを行って手続きを進める一方、日干しレンガを切ったり、石を引いてきたりもし始めた。ついに、すべての準備が整い、基礎を打つために集まった。基礎の最初の石を、預言者ムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）が、神聖な自らの手で置いた。その後「アブー・バクルよ、石を私の石の隣に置きなさい！　ウマルよ、石をアブー・バクルの石の隣に置きなさい！　ウスマーンよ、石をウマルの石の隣に置きなさい！　アリーよ、石をウスマーンの石の隣に置きなさい」とおっしゃった。それぞれが命じられたところに置いた後、その場の教友たちにも「あなた方も石を置きなさい」とおっしゃった。彼らも石を置き始めた。

マスジドを作るにあたっては、愛すべき預言者様を筆頭に、すべての教友たちが休むことなく働いた。神聖な背中に石や日干しレンガを乗せて運んだのである。一・五メートルほど石を積み上げ、その上に日干しレンガを重ねていった。ある日、預言者様は日干しレンガを運んでいた。すると教友の一人が前に出て大変恥じ入った様子で「預言者様！　日干しレンガを私に運ばせてくださいませんか？」と言った。預言者様は彼に、自分も善行を得るには、この役務をまだ必要としている、ということを一層丁寧に知らせて日干しレンガを渡さなかった。そして彼も自分で行って、石を持ってくることを勧めた。

預言者モスクの建設に際し、最も働いた人の一人は預言者様であった。最も重い岩を担ぎ、神聖な胸をきつくさせながら、職人たちのところへと運んでいった。こうして、石や日干しレンガを運ぶ仕事の対価に恵まれようと、その恩恵に与ろうと、教友たちは熱心に運んだのだった。

預言者様のこの熱心さを見たムスリムたちは、大きな愛情をもって働いた。特に、アンマール・ビン・ヤーセルは、皆が一つずつ日干しレンガを運ぶとき、一つは預言者様のため、一つは自分のためといって二つの日干しレンガを同時に運んでいた。この状態を見た預言者様は、彼の傍らに行った。神聖な手でアンマール様の背中をなぜ「スメイエの息子よ、あなたには二つの、他の者たちには一つの善行があるのです」とおっしゃった。モスクの壁は短期間で出来上がり、天井が覆われた。このほか、預言者様のためモスクのすぐ隣に、二つの部屋が日干しレンガで作られた。これらの部屋の上はナツメヤシの幹と枝で覆われた。（この部屋は時とともに九部屋まで増築された）モスクの建設が終わると、預言者様はハーリド・ビン・ザイド様の家から自分のために作られた家へと引っ越された。

ナツメヤシの株のうめき

預言者様は、金曜ごとに、モスクのハンナーネという名のついたナツメヤシの木の株によりかかって、フトゥバを行っていた。その後、三段の説法段が作られた。預言者様と教友たちは、ある金曜日に預言者モスクに集まっていた。預言者様が、フトゥバのために新しい説法段に上ると、以前よりかかっていた枯れたナツメヤシの木の株が、孕んだラクダが啼いているのを思い起こさせるような声で、皆に聞こえるほどに泣いてうめき始めた。すべての教友たちがびっくりしてこの声を聞いた。しかし、声は途切れることはなかった。このため、万物の王が説法段から降り、神聖な手で株をなぜた瞬間、泣いたりうめいたりするのが止まった。枯れたナツメヤシの株の、預言者様に対するこの親愛や愛情を見た教友たちは涙を留めておくことはできなかった。

この件に関して、エネス・ビン・マーリキー様は「モスクでさえ、その声で揺れ動かされました」と伝えており、イブニ・アブー・ベダーは「ナツメヤシの株が割れて、動き出しました。預言者様が来て神聖な手を置くと、その後は静かになりました」と言っている。

預言者様は「私の命を力ある手に握るアッラーに誓って、もしそれをなだめなかったら私に対する懐かしさと悲しみのため、終末の日までこのように泣いていたことでしょう」とおっしゃった。その後、預言者様の命令によって、ナツメヤシの株は埋められた。

別に伝わるところによると、このように言われている。「預言者様は枯れたナツメヤシの株に向かって『もし望むのであれば、あなたを元の庭に植えましょう。再び枝や芽をつけて昔のようになるのです。それとも、もしそう望むなら、あなたを天国に植えて、アッラーの親友たちに実を食べさせるのです』とおっしゃいました。預言者様が木に耳をつけると、このように言うのを聞きました。『私を天国に植えて、アッラーの親友たちに私から食べさせてください。古くなったり腐ったりしない場所にいたいのです』木がこのように話すのを、預言者様の隣にいた人々も聞いていました。これを受けて、預言者様は木に『あなたの希望通りにましょう』と返事をした。その後、教友たちの方を向いて『あの木は、現世よりも来世を選んだのです』とおっしゃいました」

アーイシャ様との結婚

万物の王である預言者様とアブー・バクル様は、ヒジュラを行う際に子供たちをマッカに残して来ていた。預言者様はハディージャ様が亡くなってから一年後、アーイシャ様とマッカで婚約をした。イマーム・ブハーリーの伝えるところによれば、アーイシャ様はこのようにおっしゃっている。「預言者様は私に『アーイシャよ！あなたのことを夢で二回も見ました。恐らく私は、緑の絹の布の上にあなたの姿を見て、そして『この姿の人が未来の妻である』と

言われたようでした』とおっしゃいました」この夢の後、預言者様とアーイシャ様は婚約をした。しかし、結婚はすぐには行われなかった。これについて、アーイシャ様はこのように語っている。

「預言者様がマディーナへヒジュラをしたとき、私たちやご息女たちをマッカに残されていました。マディーナを祝福されると、解放奴隷のザイド・ビン・ハーリサとアブー・ラーフィーを、二頭のラクダと必要な物を買うための資金の五百ディルハムを添えて私たちに送りました。父も、アブドゥッラー・ビン・ウレイクゥトを二、三頭のラクダとともに送り、母、私、妹のアスマーをラクダに乗せて送ること、そして、兄弟のアブドゥッラーに手紙を書くことを命じました。私と母のウンム・ルマーン、預言者様のご息女のザイナブ様が、皆一緒に出発しました。クベイド地方に着くと、ザイドは五百ディルハムで三頭のラクダを買い足しました。このキャラバンには、タルハ・ビン・ウバイドゥッラーも加わりました。ミナー地方からベイドという場所に着いたとき、私のラクダが逃げました。私はラクダの上に置かれた輿の中にいました。母も隣にいました。母は『ああ、娘よ、何ということでしょう、花嫁よ！』と言いながらやきもきしていました。アッラーが私たちのラクダを落ち着かせ、私たちをお救いくださいました。なんとかマディーナへと来ました。私は父の家の人々とともに降りました。預言者様の家の人々は、預言者様の家の前で降りました」アーイシャ様は、父であるアブー・バクル様の家で、しばらくの間住んでいた。アブー・バクル様がある日、万物の王である預言者様に「預言者様！婚約者と結婚するのが遅れている理由は何でしょうか？」と尋ねると、預言者様は「婚資です」とおっしゃった。アブー・バクル様は、預言者様に婚資を贈った。

こうして、アーイシャ様との結婚が行われた。このとき、預言者様は五十五歳だった。アーイシャ様は大変賢く有能で、さまざまな事柄を記憶して、詩の形で伝えている。学んだことや暗記したことを決して忘れなかった。大変賢明で頭がよく、知的、文学的であり、貞潔であり敬虔だった。記憶力に大変優れていたため、教友たちはいろいろなことを彼女から聞いて学んだ。また、クルアーンの節でも称えられている。

アザーン

預言者モスクを建設した後、礼拝の時刻に、時間が来たことを知らせ、ムスリムたちをモスクへと呼ぶための方法は存在しなかった。ただ『アッサラートゥ・ジャーミア』とだけ言われていた。

預言者様はある日、教友たちと相談をして、礼拝の時間に、信者たちをモスクへどのようにして呼んだらよいのかを聞いた。ある者は、礼拝の時間を知らせるため、キリスト教徒のように、鐘を鳴らしたらどうかと、また、あるものはユダヤ人たちのように、ラッパを吹いたらどうかと言った。またある者は「礼拝の時間に火を焚いて上に掲げたらどうか」という考えを述べた。預言者様はどれもお認めにならなかった。

アブドゥッラー・ビン・ザイド・ビン・サレベとウマル様は、アザーンを詠む夢を見た。アブドゥッラー様は、愛すべき預言者様のところへ行き、夢のことを話してこう説明した。

「緑の肩掛けと腰布をまとい、手に鐘を持ったある人を見ました。私は彼に『持っている鐘を打ってもらえますか？』と頼みました。彼は『それをどうするのですか？』と尋ねました。『礼拝の時間を知らせるために鳴らすのです』と答えると、その人は『あなたにもっと良いものを教えましょう』と言って、キブラの方を向いて高い声で『アッラーフ・アクバル、アッラーフ・アクバル…』と詠み始めました。それが終わると『礼拝を始めるときにも』と言って、アザーンをもう一度詠み、最後の方に『カド・カーメティッサラートゥ』という一言を付け加えました」

これを聞いた預言者様は「夢は真実です。その文言をビラールに教えて詠ませましょう！」とおっしゃった。これがアザーンと名付けられた。

ウマル様は、アザーンの声を聞くと、息せき切って預言者様のもとへとやって来た。ビラール様の発した言葉を、夢で見たと申し上げた。その晩、教友たちの何人かも、それぞれ夢で見たということだった。このとき、クルアーンの『合同礼拝章（アル・ジュムア）』第九節が啓示され、そこでも知らせるところとなった。

ビラール・ハベシは、ある日朝の礼拝の時刻に、預言者様の家の前で「アッサラートゥ・ハイルン・ミナンナウム（礼拝は眠りよりも良い）」と二回言った。預言者様はこれを気に入った。「ビラールよ、これは何と美しい言葉でしょうか！朝のアザーンを詠むときには、これも言いなさい」とおっしゃった。このようにして、朝のアザーンでは、この言葉も言われるようになった。

預言者様が亡くなるまで、ムアッズィン〔訳注…礼拝の呼びかけを行う者〕を行ったビラール・ハベシの声は力強く、大変美しく、そして非常に効果的であった。彼がアザーンを詠み始めると、皆が大きな愛情を持って恍惚として聞き、我をも忘れてしまうのだった。アザーンが詠まれると、皆が感涙していた。教友たちは礼拝の時刻になると、アザーンの恵みとともにモスクへ向かう一方、マディーナの不信仰者たちやユダヤ人たちは大変奇妙な気分になっていた。アザーンが詠まれると、嘲笑して笑ったりもしていた。彼らがこれを面白がる一方、アッラーは、クルアーンの章句でこのように伝えている。『あなたがたが（人びとを）礼拝に招く時、かれらはそれを嘲笑し、戯れごとにする。それはかれらが理解しない民のためである。』（食卓章（アル・マーイダ）第五八節）

教友たちの教育

万物の王である預言者様は、教友たちを育て成長させるため、預言者モスクで大変素晴らしい講話を行い、アッラーが自分に与えた学識や恵みを彼らの心に流していた。預言者様の講話に参加するという恵みに与った教友たちは、初めての講話でも心に大きな変化を感じ、アッラーの高い恵みに出会うこととなったのである。こういった講和により、教友たちは、預言者様をはじめとした他の教友たちの方を、自分のことより大切に考えていた。アッラーは彼らを、クルアーンの章句にて称賛している。彼らは預言者様の前で、まるで頭に鳥が止まってでもいて、動けば飛び立ってしまうかのように非常に礼義正しく、注意深くじっとしていた。こうして、教友たちは預言者たち、そして偉大な天

使たちに次いで、創造されたものの中で、特に選ばれ、最も優れた人々となったのである。

アッラーは、クルアーンの章句でこのように伝えている。『あなたがたは、人類に遣わされた最良の共同体である。あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ…』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一一〇節）

『（イスラームの）先達は、第一に（マッカからの）遷移者と、（遷移者を迎え助けたマディーナの）援助者と、善い行いをなし、かれらに従った者たちである。アッラーはかれらを愛でられ、かれらもまたかれに満悦する。かれは川が下を永遠に流れる楽園を、かれらのために備え、そこに永遠に住まわせられる。それは至上の幸福の成就である。』（悔悟章（アッ・タウバ）第一〇〇節）

『ムハンマドはアッラーの使徒である。かれと共にいる者は不信心の者に対しては強く、挫けず、お互いの間では優しく親切である。あなたは、かれらがルクウしサジダして、アッラーからの恩恵と御満悦を求めるのを見よう。かれらの印は、額にあるサジダによる跡である。（ムーサーの）律法にも、かれらのような者の譬えがあり、（イーサーの）福音にも、かれらのような譬えがある。それは蒔いた種が芽をふき、丈夫な茎を伸ばして、種を蒔いた者を喜ばせるようなもの。それで不信者たちは、かれらに憤激することであろう。だがアッラーは、かれらの中で信仰して善行に勤しむ者に、容赦と偉大な報奨を約束なされる。』（勝利章（アル・ファトフ）第二九節）

預言者様はあるハディースで、教友たちの偉大さや、地位の高さを説明して「教友たちの誰にも口を出してはいけません。彼らの名誉にふさわしくない言葉を言わないでください！私の命を預かっているアッラーに誓って、あなた方一人ひとりが、ウフド山ほどの金の寄付を与えても、教友たちによる一すくいの大麦程度の善行にも満たないのです」と述べ、また「教友たちは天空の星のようなものです。その中の誰に従っても救われるのです」とおっしゃっている。

アスハーブ・スッファ

預言者様は、預言者モスクの北側に、ナツメヤシの枝で木陰となる場所を作った。そして、マッカから移住した、資産や不動産をもたない未婚の教友たちはここで寝起きするように命じた。その人数は十から四百の間で推移したこの教友たちは、預言者様の傍らから決して離れることもなく、講話を逃すことも全くなかった。昼に夜にクルアーンを詠み、知識を深め、ハディースを暗記していた。日々の多くは断食をして過ごし、礼拝からひと時たりとも隔たることはなかった。

ここで育った者たちは、新しくムスリムとなった部族のもとへと派遣され、彼らにクルアーンやスンナ、そしてイスラームという宗教について教えた。非常に高い徳を持つこの神聖な教友たちは、偉大な知識の軍団であった。預言者様は彼らを大変愛し、彼らとともに座って話をしたり一緒に食事をとったりした。この場所にいた人々のことを「アスハーブ・スッファ」という。

預言者様はある日、アスハーブ・スッファを見て、これ以上ないほど貧しいことをお考えになった。そのような状態にありながらも、彼らの心はやすらぎ、輝きをもって礼拝を行っていたのだった。預言者様は憐みをよせて、彼らに「スッファの教友たちよ！　あなた方に吉報があります。もし、私の共同体において、あなた方が受けているこの困難な状況の中にあっても、それを受け入れる者がいるとすれば、その人は確かに私の友人になるのです」とおっしゃった。

愛すべき預言者様は、何よりも先に、この選ばれた教友たちの必需品を確保し、その後、自分の家族のための必需品を得るようにしていた。アブー・フレイレはこのように語っている。「唯一の神であるアッラーに誓って、私はときどき空腹のため腹這いになり、ときには地面から石を拾って腹に押し付けていました。このような日のことでした。その日、私は預言者様がモスクへと行く道に座っていました。そのとき、世界の恵みとして送られた二つの世界を彩

る方が、光を放ちながらそばにやって来ました。私の状態を分かると微笑んで『アブー・フレイレよ！』とおっしゃいました。『命をあなたに捧げます、預言者様！　どうぞおっしゃってください』と私が言うと『私と一緒に来なさい』と言われました。すぐに後ろについて歩いていきました。預言者様の幸福なる家に入りました。家には一杯分のミルクがありました。『さあ、スッファの教友たちのところへ行きなさい。彼らを私のところに呼ぶのです』とおっしゃいました。彼らを呼ぶために行きながら、自分自身に『すべてのスッファの教友たちに一杯分のミルクでどう足りるというのだろうか？　私も一口飲めるのだろうか？……』と考えていました。私は彼らを呼び、預言者様の家へと行って、許しを得て中へと入りました。それぞれが適当な場所に座ると、預言者様は『アブー・フレイレよ！　そのミルクのカップを取り、彼らに渡しなさい！』とおっしゃいました。私はカップを取り、順に友人たちに渡しました。一人ひとりがカップを受け取り、いっぱいになるまで飲んでから私に戻しました。全員が飲んだのに、カップの中は全く減っておらず、このようにしてミルクで満腹になるのを目の当たりにしました。このようなやり方で、やって来たすべての友人たちにご馳走をしました。全員が飲んで満腹になりました。その後、預言者様はカップを手に取って私に微笑み『アブー・フレイレよ！　ミルクを飲んでいないのは、私とあなたしか残っていません。さあ、あなたも座って飲みなさい！』とおっしゃいました。座って飲みました。『もっと飲みなさい！』とおっしゃったので、私はまた飲みました。預言者様は何度か『飲みなさい！』とおっしゃいました。私もその度に飲みました。ついに『両親をあなたに捧げます、預言者様！　もはや飲めません。あなたに真実の宗教をお送りしたアッラーに誓って、満腹になりました』と言いました。『それではカップを私に戻しなさい』とおっしゃいました。返しました。預言者様は、アッラーに感謝と称賛をささげてから、バスマラを唱えてミルクを飲まれました」

モスクにて、預言者様の講和の一つたりとも逃さずに知識を学んでいった、この特筆すべき教友たちに対し、マディーナの教友たちはまたとないほどの親愛の情で支えていた。ある夕方、空腹のために力がなくなっていたスッファの一人の教友が、預言者様の前に上がって状況を申し上げた。預言者様は家に何か食べるものがあるかどうかを尋ねた。「今、

家にある食べ物としては、水以外何もありません」という返事を受けると、これを見守っていた教友たちに対して「誰かこの空腹の方を接待する人はいませんか？」と聞いた。すると、教友たちのうちのマディーナ出身のある人物が皆の前に出て「両親をあなたに捧げます、預言者様！　彼を私が歓待しましょう」と言った。

客人を伴って家に行くと、妻に「預言者様のお客様を歓待するために何か準備をしてください」と言った。妻は「今、家には子供たちが食べるもの以外何もありません」と返事をした。すると「まずは子供たちを眠らせ、それから子供たちの分の食事を持ってきなさい」とその教友は言い、やがて一人分の食事を持って客人がいる部屋へと入っていった。これを食卓に置いて食事を勧めた。一緒に食事を始めると立ち上がり、明かりを直すふりをして消した。真っ暗な食卓に再びについた。彼は食べているように振る舞いながら、客人が満腹になるのを待った。客人が満腹になると、食卓を立った。その夜は、子供たちとともに空腹のまま朝を迎えた。朝になって、預言者様の前に行くと「アッラーは、あなたの昨夜の行動に満足されています」とおっしゃった。これに関して、アッラーは『集合章』（アル・ハシュル）第九節を下され、次のように伝えている。『自分（援助者〔アンサール〕自身に先んじて（かれらに）与える。仮令自分は窮乏していても。』

ジブリールの出来事

預言者様は教友たちに、宗教における義務や禁止について、事細かに説明し、教えていった。イスラームの信仰や、信仰行為である礼拝、断食、巡礼、喜捨に関するあらゆる判断、クルアーンの解釈、食べ物で許されたものと禁じられたもの、衣服、誓い、願掛け、罪の償い、売買に関すること、飲食、着衣、人と会うことや話すこと、挨拶の規範、近所付き合い、親戚付き合いや友人関係、結婚、生計手段、遺産と相続の問題、訴訟、罰、契約や共同関係、健康に関すること、敵との衝突、戦争に関する法律…といった『イスラーム』についてのあらゆることを、誰もが分かるように説明し、重要と考えられることについては三回繰り返した。女性たちに関する情報も、預言者様の神聖な妻たちを介して教えられた。

ムスリムたちの勇士の長であり、高尚な教友たちの中にあって常に正しいことを言うことで有名な、愛すべき偉大なウマル・ビン・ハッターブ様は次のように語っている。

「そのようなある日のことでした。何人かの教友たちが預言者様の前にいました。その日、その時間は、あれほどまでに名誉があり、あれほどまでに価値があり、そしてまたと手に入れることのできない日でした。その日、預言者様の講話において、そのそばにいられるという名誉を与った者は、魂には栄誉を、命には喜びや愉しみを与える預言者様の姿を拝見するという機会に恵まれたのでした。（この日の栄誉の尊さを説明して『そのようなある日のことでした…』と語ったのである。この日は、後述のように大天使ジブリールを人間の姿で見て、またその声を聞き、同時に、しもべにとって必要な情報を、大変に美しく、また分かりやすい形で、預言者様の神聖な口から聞くという名誉ある日となった。このように光栄で貴重なひとときは他にあるのだろうか？）

そのとき、月が出るかのようにして、ある人物が私たちのところへやって来ました。着ていたものは大変に白く、髪は真っ黒でした。そこには、埃や土、汗といったような旅路の痕は見られませんでした。預言者様の教友である私たちの誰一人として、彼のことを知りませんでした。つまり、よその方でした。彼は預言者様の前に座り、膝を神聖な膝に近づけました。（やって来たのはジブリールで、人間の姿になっていた。ジブリール様はこのように座り、重要なことを知らせるために来ていたのである。つまり、宗教について学ぶ際、恥ずかしい思いをしないように、そして先生には虚栄心や自負があってはならないということを示そうとしていたのだった。また、ジブリール様は、宗教について学びたい者は誰でも、自由に恥ずかしがらずに聞くべきであることも教友たちに伝えようとしていた。なぜなら、宗教を学ぶことや、アッラーに対する人としての義務を教えることや学ぶことについて、恥ずかしがるのは正しいことではないからである）

その人物は、手を預言者様の神聖な膝の上に置き、そして『預言者様よ！ 私にイスラームと、ムスリムの特徴を説明してください』と言いました。

預言者様はおっしゃいました。『イスラームの第一の要件は『信仰告白』を行うことです。（信仰告白とは『アシュハド・アン・ラー・イラーハ・イッラッラー、ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ』と述べることである。つまり、理性があって成年に達した話のできる人であれば誰でも『天にも地にも、それのほかに礼拝され、崇められるにふさわしい何も、そして何者もない。真の神は唯、アッラーのみである。それは、不可欠な存在であり、あらゆるものの上位である。それには全く一つの欠陥もない。その名前はアッラーである』ということを述べ、これを心から明言して信じることである。そしてまた『バラ色で、白と紅の輝く愛おしい顔で、黒い眉に黒い目、広く神聖な額を持ち、良い習慣があって影は地面に映らず、優しい言葉を持ち、アラブのマッカで生まれたためにアラブ人と言われ、ハーシム家の子孫でアブドゥッラーの息子であるムハンマド（アライヒッサラーム）という名の人物を、アッラーのしもべでありラスール、つまり預言者である』と言うことである）

『時間が来たら礼拝をすること。喜捨を施すこと。ラマダーンでは毎日断食を行うこと。それができるほどに足りているならば、一生に一度はハッジを行うことでです』その方は預言者様のこの答えを聞くと、『正解をおっしゃいました、預言者様！』と言いました。私たち聞いていた者たちは『彼は質問をしたのに、その答えも分かっている！』と彼の言葉に驚いていました。

さらに、この方は『預言者様！ 信仰とは何かを私に教えてください』と言いました。（このハディースにおける信仰という用語については、辞書における一般的な意味を聞いているわけではない。辞書における信仰という用語の意味は、承認し、認め、信じることである。どんなに無知なアラブ人でも、これを知らない人は一人もいない。当然、教友たちも必ずこのことは知っていた。ジブリール様は「イスラームにおける信仰」の意味を教友たちに教えたかったのである。従ってここでは、イスラームでは何を信仰するのかということを尋ねた、という意味となっている）預言者様は信仰について、定められた六つのことを信じることであると伝えました。

『まずはアッラーを、そして、天使たちを、諸啓典を、預言者たちを、最後の審判の日を、運命やこの世のすべてがアッラーの神意によってなされているということを信じることです』その方は再び『正解をおっしゃいました』といって確かめました…。その後再び『預言者様！ 恩恵とは何か私に教えてください』と言いました。預言者様は『アッラーを見るようにして礼拝することです。なぜなら、あなたはアッラーを見ることができなくても、アッラーは必ずあなたを見ているからです』とおっしゃいました。その方はさらに『預言者様！ 私に終末の日について教えてください』と言いました。預言者様は『このことについては、聞かれる側は聞く側に比べると師ではありません』とおっしゃいました。するとその人物は『それでは、終末の日の印について知らせてください』と言いました。預言者様は『女奴隷が産んだ子が長となることです。素足で裸の貧しい羊飼いが（金持ちになり）高い建物を作ることに互いに競い合うのを目撃することです』とおっしゃいました。その後、その人物は帰っていきました。

預言者様は私の方を向いて『ウマルよ！ あの質問をした方が誰だか知っていますか？』と尋ねました。『アッラーと預言者様が、よりご存知のことと思います』と私は言いました。預言者様は『彼はジブリールです。あなた方に宗教を教えるためにやって来ました』とおっしゃいました」

預言者様は、説明をする際には、教友たちの立場にあわせて分かりやすく行っていた。教友たちの中でも優れていたウマル様は、ある日、預言者様がアブー・バクル様に何か話していたところを通りかかった。そこで、彼らのそばに行って、その話しを聞いた。このことを他の人々も見てはいたが、一緒に行って聞くのは遠慮していた。翌日、ウマル様を見かけると「ウマルよ！ 預言者様が昨日何かを話していました。それを私たちにも教えてください」と言った。なぜなら、預言者様はいつも「私から聞いたことを宗教の兄弟にも語るようにしてください。互いに知らせ合うのです」とおっしゃっていたからである。だが、ウマル様は「昨日、アブー・バクル様が、クルアーンから理解できなかったある章の意味を尋ね、預言者様がそれを説明していました。しかし、一時間聞いても私には何一つ分かりませんでした」

と答えたのだった。なぜなら、預言者様はアブー・バクルの地位にあわせてそれを説明していたからである。ウマル様も相当に高い地位であったことについて預言者様は「私は最後の預言者であります。私の後に預言者は現れません。しかし、もし、私の次に預言者が現れていたとしたら、ウマルが預言者になっていたことでしょう」とおっしゃっていた。このように高い地位を得て、母語のアラビア語をよく理解していたにもかかわらず、アブー・バクル様に説明していたクルアーンの解釈を理解できなかったのである。アブー・バクル様の地位は彼よりも高く、また、アブー・バクル様やジブリール様でさえ、クルアーンの意味や神秘を預言者様に聞いていたのである。預言者様はクルアーンのあらゆる解釈を教友たちに説明していた。このようにして、愛すべき預言者様は教友たちに宗教を教え、さらに審理を行って証人からの話を聞き、最も困難な係争の判断も下していたのである。

サルマーン・ファーリスィがムスリムとなる

日が経つにつれてイスラームの光は広がり、預言者様の神聖な名前が聞かれると、人々の心の中ではそれが大きな位置を占めるようになっていった。彼がいらっしゃることを熱望して待っていた学者たちは、彼と会うことを追い求め、興奮してマディーナへと走りながら、信仰の名誉に与っていた。このような人々の中の一人に、サルマーン・ファーリスィ様がいた。彼はムスリムになったときのことをこのように説明している。

「私はファーリス（ペルシア）のイスファハン、ジェイ村の出身です。父は村で最も金持ちで、土地も物も豊かに持っていました。私は、家の唯一の子供で、父の愛情を一身に受けていました。このため、私を深窓の令嬢のように育てていたのです。私が家の外に出るのを許可しませんでした。拝火教徒であったため、私を拝火教徒となるように不足のないよう教えていました。家では消えることなく火が焚かれており、私たちもそれを拝み、伏していました。父の資産や領土は大変多かったため、あるとき私を外に連れて行き『息子よ！　私が死んだときには、これらのものの持ち

主はお前になるのだから、出かけて自分の資産や土地のことを見るがいい』と言いました。私は『分かりました』と言って、私たちの田畑を歩き回りました。

ある日、田畑を見に行ったとき、教会を見つけました。キリスト教徒たちの声を聞きました。近くに行き、中で礼拝をしている人たちを見ました。私はそれまでこのようなものは見たことがなかったため、驚き、印象に残りました。なぜなら、私たちの礼拝というのは火を燃やし、それに伏す以外何もなかったからでした。彼らはといえば、見ることのできないアッラーに礼拝をしていました。私は自分に『アッラーに誓ってこの宗教は真実であり、私たちのものは迷信だ』と言いました。夕方まで彼らを興味深く見ていました。田畑に行かないうちに日暮れがさしせまっていました。彼らに『この宗教の中心地はどこですか？』と聞くと、彼らは『シャームです』と言いました。その後『シャームへ行けば私も認めてもらえるのでしょうか？』と尋ねると『はい、認められるでしょう』と返事がありました。『あなた方のうち、近々シャームへ行く人はいますか？』と聞けば、しばらく後に、あるキャラバンが行く予定であることを話しました。私が話した人々はシャームからイスファハンへ来ていた少数の人たちでした。

私はこういったことで時間を過ごしたため、家へ行くのが遅れてしまいました。私が戻らないのを知った父は捜し始めていて、人を送っていました。捜しても見つかりませんでした。彼らが慌てている中、私は家に戻りました。父は『このような時間までどこにいたのだ？　お前をいたるところ探したのだ』と言いました。私は『父よ！　私は今日田畑を見回りに出かけました。すると、道端にキリスト教徒の教会を見つけました。中へ入ってみました。見ると彼らは、目にすることもできない、そしてあらゆるものを支配する全能で唯一のアッラーに信仰をしていました。彼らが礼拝しているのに驚いていました。夕方まで彼らを見ていたのです。彼らの宗教が真実であると分かりました』と言いました。これを聞いた父は『息子よ！　間違えて考えている。祖先たちの宗教は彼らの宗教よりも、一層正しいのだ。彼らの宗教は崩れている。決してだまされるな、信じてはならない！』と言いました。私は『いいえ、彼らの宗教は、私たちの宗教よりも善であり、かれらの宗教は真実で、私たちの宗教は迷信なのです』と言い返しました。父はこれに大変

怒り、私の手と足を縛って、家に閉じ込めました。

この状況の中、引き続き私はシャームへ行くキャラバンからの連絡を待っていました。ついにキリスト教徒の修道士たちが、キャラバンの準備をしていることを知りました。縄を切って逃げ、キャラバンのいる教会へと行きました。私はもはやこの辺りにいることはできないことを説明し、キャラバンに加わってシャームへの道を辿りました。シャームでは、キリスト教の最も偉大な学者について尋ねました。ある人のことを教わり、彼のもとへと行って状況を説明しました。私はその人のところに留まりたく、彼の手伝いをすることを伝え、また、キリスト教について学び、アッラーについても教えてもらえるようお願いしました。彼はそれを認めました。そして彼の手伝いをし、教会の仕事をし始めました。彼もまた私にキリスト教について教えました。

しかし、やがて彼は悪人であることが分かりました。というのは、キリスト教徒が、貧者に与えるために集めていた施しである金や銀を隠し、必要な人に与えていなかったからでした。ちょうど七杯分の金と銀を蓄えていました。これは私以外に知っていた者はいませんでした。しばらくして、彼は亡くなりました。キリスト教徒たちが埋葬するために集まりました。私は彼らに『なぜ彼にこれほどまでに尊敬を示すのですか、彼は尊敬に値する人ではありません！』と言いました。彼らは『どうしてあなたはそう言うのですか？』と言い、私を信じませんでした。私は蓄えていた金銀を見せました。彼らは七杯分の金銀を出させて『この人は葬儀にふさわしい人ではない』と言って、適当なところに投げ入れ、石で上を覆いました。彼の代わりには、他の人が任に就きました。

後任の方は本当に知識のある人物で、この世のことにはまったく無頓着でした。来世のことを考える人で、常に来世のために働き、昼も夜もいつも礼拝をしていました。私は彼のことを大変愛し、長い間そのそばで過ごしました。好んで手伝いをし、一緒に礼拝も行いました。

ある日、彼に『先生！長い間私は先生のそばにおり、先生のことをとても愛しています。なぜなら、あなたはアッラーが命令されたことに従い、禁止されたことを避けているからです。あなたが亡くなった時には、私はどうしたら

よいか教えてもらえますか？』と尋ねました。『我が息子よ！シャームでは人々を改める人はもはや残ってはいません。誰の所へ行ったとしても、あなたを正しい道には導かないでしょう。しかし、ムスールにある人物がいるそうです。彼を見つけることを薦めましょう』と返事をもらいました。

彼が亡くなると、私はムスールへと行き、教えられた人を見つけ、起こったことを最初から説明しました。手伝いをすることを認めてくれました。彼もまた、他の方のように大変尊く、この世に執着せず、常に礼拝をしている人でした。彼のもとでも長い間手伝いをしました。しかし、ある日彼は病気にかかりました。亡くなるとき、以前と同じ質問を彼にも聞きました。すると、ヌサイビンのある方を私に推薦しました。彼が亡くなると、すぐにヌサイビンへと行きました。言われた方を見つけ、そばに残りたいということを伝えました。彼はそれを認め、しばらくの間、彼の手伝いをしました。やがて彼も病気になり、私に別の方のところへ行くよう言いました。今回は、アムリエという名のルームの町にいるある方の名を告げました。彼が亡くなると、アムリエへと出発しました。言われていた方を見つけ、手伝いをして長い間過ごしました。

彼も亡くなるのが近づいていました。私が頼る人について推薦をお願いしたところ『アッラーに誓って、今はそのような誰かを知りません。しかし、最後の預言者が現れるのが近づいているようです。彼は、アラブ人の間から出て、故郷から移住をし、石だらけの中にナツメヤシがたくさんある町にやって来るでしょう。贈物なら受け取るものの、施しは受け取りません。双肩の間に預言者の印があるのです』と言って、その他の特徴も数え上げました。この方も亡くなり、私は言われたことに従って、アラブ地方へ行くことに決めました。

私はアムリエで働き、数頭の牛といくらかの羊を持つようになっていました。やがて、ケルブ族というある部族のキャラバンが、アラブの町へ行くことになりました。彼らに『この牛と羊をあなた方に差し上げますので、私をアラブの町へと連れていってください！』と頼むと、私の申し出を受け入れ、一緒に行くことになりました。しかし、ワーディイ・ウル・クーラという所へ来ると彼らに裏切られ、私を示して奴隷であると言われ、あるユダヤ人に売り渡されたのです。

そのユダヤ人のいた場所には、ナツメヤシの田畑が見られました。『最後の預言者様がヒジュラをするのはここかもしれない』と思いました。しかし、どうにも好きになることができませんでした。このユダヤ人にしばらくの間仕えました。その後、彼は私を叔父の息子へと売り渡しました。その人は私を買うとマディーナへ連れていきました。マディーナへ着くと、ここを以前にも見たことがあるように感じました。やがて日々はマディーナで過ぎていき、私はそのユダヤ人のブドウ園で働いて仕えていました。一方では、元来の目的に出会うために我慢できずにいたのでした。

ある日、あるナツメヤシの木に登って働いていました。私の主人は木の下で誰かと話しをしていました。すると『アウス族とハズラジ族は滅びてしまえ。マッカからある人物がクバーに来たそうです。その人は自分のことを預言者であると言っています。あの部族たちは彼のことを認めて、その宗教に入っているのです…』と聞こえてきました。私はこの言葉を聞くと、我を忘れたようになりました。すぐに下に降り、その人に『何と言ったのですか？』と尋ねたのです。主人は私に『お前には関係がない。なぜ聞くのだ、お前は仕事に戻れ！』と言いながら、平手打ちをしました。その日、夕方になると、いくらかのナツメヤシの実を取り、すぐにクバーへと行きました。預言者様のところへ行き『あなたは敬虔な方であり、そばには困窮している方々がいらっしゃいます。このナツメヤシの実を施しとして持ってきました』と言いました。

預言者様は、そばにいた教友たちに『来て、ナツメヤシを食べなさい』とおっしゃいました。彼らは食べました。しかしご自身では一つも食べませんでした。私は自分に『これはその印の一つだ。施しは受け取らない』と言いました。預言者様がマディーナにいらした後、再びいくらかのナツメヤシの実を持って、預言者様のところへ行きました。『これは贈物です』と私は言いました。今回は、そばにいた教友たちとともに食べました。『これで二つ目の印も現れた』と私は言いました。私が持ってきたナツメヤシの実は二十五個くらいでした。しかし、食べた後に残ったナツメヤシの種は千個もありました。預言者様の奇跡によって、ナツメヤシが増えたのでした。私は自分に『また一つ印が現れた』と言いました。預言者様のもとへと再び行きました。誰かの埋葬をしていました。預言者の印を見たいと申し上げようと十分近づきました。私の望みを理解し、シャツを持ち上げました。神聖な背中が開かれ、預言者の印を見ると、私はすぐにそこに口づけをして泣きました。そのときに、信仰告白の言葉を述べて、ムスリムになりました。

その後、預言者様に今までのことを頭から一つひとつ説明しました。私の状況について感嘆して聞き、このことを教友たちにも話すよう命じられました。教友たちが集まり、私は起こったことを最初からほんの些細なことまで説明しました…」

サルマーン・ファーリスィが信仰に入ったとき、彼はアラビア語を知らなかったため通訳を希望した。やって来たユダヤ人の通訳は、愛すべき預言者様を褒めたことに対して、わざと逆に言って通訳した。そのとき大天使ジブリールが現れ、サルマーン様の言葉を正しい形で預言者様に伝えた。このユダヤ人は状況を分かると、信仰告白をしてムスリムとなった。

サルマーン・ファーリスィはムスリムになった後も、しばらくの間は引き続いて奴隷の身分であった。あるとき、愛すべき預言者様が「サルマーンよ！自らを奴隷から救いなさい」とおっしゃったため、主人のもとへ行き、解放してほしいと願い出た。これにしぶしぶ承知したユダヤ人の主人は、三百のナツメヤシの苗木を植えて育て、その実をもらうこと、そして四十ルキヤの金（当時の単位でいういくらかの金）をもらい受けるという条件で同意した。

このことを預言者様に知らせた。預言者様もまた、教友たちに「あなた方の兄弟を助けてください」とおっしゃった。そして、彼のため三百のナツメヤシの苗木が集まった。預言者様は「これらの苗床を準備して、準備ができたら私に知らせるのです」とおっしゃった。苗床を準備し、預言者様に知らせると、そこを訪れて苗木を自らの神聖な手で植えた。一つだけはウマル様が植えた。ウマル様が植えたもの以外、アッラーのお許しによって、すべての木がその年にすぐ実をつけた。預言者様がその実の一つを取って、自らの神聖な手で改めて植えると、植えた瞬間、またナツメヤシの実をつけたのだった。

サルマーン・ファーリスィ様はこう語っている。「ある日、ある人が私を捜して『サルマーン・ファーリスィ、ムカー

テビ・ファキル（所有者との間で自由になるための約束をしていた奴隷）はどこですか？』と言っていました。私を見つけると、手に卵ほどの大きさの金を渡しました。これを持って預言者様のところへ行き、状況を申し上げました。

預言者様は金を再び私に返し『この金を持って支払いとしなさい』とおっしゃいました。私は『預言者様！この金はユダヤ人が要求した重さには足りません』と言うと、預言者様はその金を手に取り、神聖な舌で触れました。そして『これを持っていくのです！アッラーがこれであなたの借りを支払います』とおっしゃいました。アッラーの正しさにより、その金の重さを量ると、要求されたほどになっていました。それを持っていって支払をしました。私はこうして奴隷から解放されました」

サルマーン・ファーリスィはこの日以降、アスハーブ・スッファの間に入ることとなった。

天使たちが聞きにやって来る

預言者様はクルアーンの章句を、それほどまでに美しく、それほどまでに優しく、人に感化を与えるほどに詠むので、それを聞いた人はムスリムでない者でも感じ入ってしまうのだった。これを聞いてムスリムとなった人も大勢いた。

ベラー・ビン・アズィーブ様は「ある日の夜の礼拝の後、私は預言者様が『無花果章（アッ・ティーン）』を詠むのを聞いていました。大変に美しく詠まれ、声も詠み方も、彼以上に完全な人を聞くことはありませんでした」と語っている。

教友たちの中でも、声が大変美しい者がクルアーンを詠むときには、泣いたり涙を流したりする人が大勢いた。このような詠み手の一人がウセイド・ビン・フダイルだった。ある晩、馬を脇につないで『雌牛章（アル・バカラ）』を詠み始めた。詠んでいると、馬が驚いて突然跳び上がった。ウセイドが詠むのをやめると馬はおとなしくなった。詠み始めると、また馬が跳び上がった。やめるとまた落ち着いた。再び詠み始まるとまた跳び上った。ウセイド・ビン・フダイルの息子のヤフヤーは、馬の近くで横になっていた。このままでは馬が息子に何か危害を加えるのではないか

と心配して、ウセイドは詠むのをやめた。そのとき空を見上げると、白い雲の影のような霧の中で、ランプのように光る何かに気が付いた。詠むのをやめると、その光っているものは点になるまで昇っていくのが見えた。朝になって、愛すべき預言者様の前に出て、始めから起こったことを説明した。預言者様は「彼らが何であるか知っていますか？」と尋ねるので、ウセイド様は「両親をあなたに喜んで犠牲にします、預言者様！知りません」と返事をした。預言者様は「それらは天使でした。あなたの声に近づいていったのです。もし詠むのを続けていたら、朝まであなたを聞き、人々も彼らを見て、眺めていたことでしょう。彼らも人々の目から身を隠すことをしなかったでしょう」とおっしゃった。

クルアーンを燃え立つように詠む者の一人に、アブー・バクル・スィッディーク様がいた。礼拝をするときに詠み始めると、自分をも抑えることができず、神聖な目からは涙が溢れ出すのだった。この状態を見た者たちは心を動かされた。ある日、不信仰者たちが集まり「あの人物は、預言者が携えてきたというものを、燃え立つように詠んでは泣いている。我々の子供たちや女たちが彼のこの様子に心を打たれて、ムスリムになるのではないかと心配だ」と言っていたほどである。

愛すべき預言者様の神聖な姿を見て、彼に愛情を持ち、そして神聖な言葉や詠んでいたクルアーンを聞くと心打たれ、ムスリムとなった者の一人がアブドゥッラー・ビン・セラーム様だった。

旧約聖書や新約聖書も熟知していたアブドゥッラー・ビン・セラームは、ムスリムとなる前はユダヤ教の学者であった。自身がムスリムになったことをこのように説明している。「私は旧約聖書とその解説を父から学びました。ある日、父は終末のときに現れる預言者の風貌や印、行うことについてを私に説明し『もし彼がハールーン家から出るのであれば、彼に従います。そうでなければ従うまい！』と言っていましたが、彼は預言者様がマディーナへ来る前に亡くなりました。

預言者様がマッカで預言者であることを宣言したと聞いたとき、私は彼の風貌、名前、現れた時間のことを分かっていました。ですから、彼のことを見て確認しようと思いました。預言者様がマディーナ近郊のクバーという場所で、

アムル・ビン・アウフ家で客人となっていることをある人から教わるまで、このことはユダヤ人にも秘密にして黙っておきました。

ある日、畑でナツメヤシの木から熟した実を集めていたとき、ナーディル家の一人が『今日、あのアラブ人が来た』と叫んでいました。私は震え出しました。すぐに『アッラーフ・アクバル』とタクビールを行いました。そのとき、叔母のハーリデ・ビンティ・ハーリスが木の下に座っていました。大変年を取った方でした。タクビールを聞くと『アッラーがあなたの望みを叶えず、あなたの望みに巡り合わせませんように。誓って、ムーサー・ビン・イムラーン（預言者ムーサー）が来ることを聞いても、あなたはこれほどまでに喜びはしなかったでしょう！』と言って、私をとがめました。そこで彼女に『叔母よ！　誓って彼はムーサー・ビン・イムラーンの兄弟であり、彼のような預言者なのです。彼の道にあり、タウヒード（訳注：アッラーの唯一性）とともに送られたのです』と言いました。

これを聞くと叔母は『兄弟の息子よ！　もしかすると、彼は終末の日が近づいていることを私たちに知らせる預言者なのですか？』と言いました。私が『そうです』と答えると『それならば、あなたは正しい』と言いました。

預言者様がマディーナへヒジュラをしたとき、私は彼を見ようと、すぐに人々の間へと入りました。神聖な姿や、光に満ちたお顔を見て『あの顔は嘘を言う人の顔ではない！』と言いました。預言者様は集まった人々にイスラームを説明し、忠告を与えていました。ここで預言者様から聞いた初めてのハディースは次のようなものでした。

『あなた方の間で、挨拶することを広げ、空腹の人を満腹にさせ、近しい親戚を訪ね、人々が寝ている間にあなた方は礼拝をするのです。このようにすることで、あなた方は無事に天国に入るのです』

万物の王である預言者様は、預言者の力で私のことが分かり『あなたは、マディーナの学者のイブニ・セラームですか？』と尋ねました。私が『はい』と答えると、愛すべき預言者様は『近くに寄りなさい』とおっしゃって『アブドゥッラーよ、アッラーのために言うのです！　あなたは旧約聖書にある私の特徴を読み、それを学びはしませんでしたか？』とおっしゃいました。そこで私は『アッラーの特性とは何でしょうか、教えていただけませんか？』と言い

ました。この質問に対して預言者様は少し間をおき、そして、ジブリール様が『純正章（アル・イフラース）』を啓示しました。預言者様が詠んだこの章を聞くと、私は預言者様に『はい、預言者様。あなたは正しいことをおっしゃっています。証言します。アッラー以外に神はなく、あなたはアッラーのしもべであり、預言者であります』と言って、信仰告白の言葉を述べ、ムスリムとなりました。

その後、『預言者様！　ユダヤ人は驚くほどの嘘つきで、根拠のない中傷や悪口を行う横暴な民族です。もし、私のことを彼らに聞いて教えてもらうのであれば、彼らは私がムスリムとなったことを分かったとしたら、あなたの前で思ってもないような私の悪口を必ず言うでしょう。私のことをまずは彼らから聞いてください』と言って、家の奥に隠れました。私の後からついてきたユダヤ人の名士たちの一団が中に入りました。預言者様はユダヤ人たちに向って『あなた方の仲間のアブドゥッラー・ビン・セラームはどのような人物ですか？』と尋ねました。ユダヤ人は『彼は私たちの中で最も高尚な学者であり、最も優れた学者の息子でもあります。イブニ・セラームは、私たちの中でも最も善良であり、最も善良な人物の息子でもあります』と言いました。そして、預言者様は彼らに『もし彼がムスリムとなったら、あなた方はそれに対して何と言いますか？』と聞きました。ユダヤ人たちは『アッラーが彼をこのようなことから守りますように』と言い返しました。

そのとき、私は隠れていたところから出て『ユダヤの一団よ！　アッラーを畏れなさい。あなた方に訪れたものを受け入れなさい。アッラーに誓って言いますが、あなた方も知っているとおり、旧約聖書で名前や特徴が書かれていたアッラーの預言者はこの方です。私は証言します。アッラー以外に神はありません。そして証言します。ムハンマド（アライヒッサラーム）はアッラーのしもべであり、預言者であります』と言って、彼を認めました。こうなるとユダヤ人たちは『彼は私たちの中でも最も悪い人で、最も悪い人の息子なのです』と言って、さまざまな欠点を並べ立てて、私の悪口を言いました。私は『やはり恐れていたとおりのことが起こりました、預言者様。私は彼らが横暴で嘘つきで、悪事を行い、悪口を言う民族であることはお知らせしたとおりです。ほら、すべてが明らかになりました』と述べました。

預言者様はユダヤ人たちに対して『あなた方が最初にしていた証言で十分です。その後の証言は必要ありません』とおっしゃいました。こうして直ちに家に戻りました。家族や親戚をイスラームに宣教しました。叔母をはじめ、全員がムスリムとなりました。

私がムスリムになったことに対して、ユダヤ人たちはひどく怒っていました。そのため、私に圧迫をかけはじめました。さらに、ユダヤ人の学者の何人かは『アラブ人の中から預言者が出ることはありません。その人は統治者なのです』と言って、私をイスラームから戻そうとしました。しかし、それを成し遂げることはできませんでした。

私を含め、サレベ・ビン・サーイエ、ウセイド・ビン・サーイエ、アサド・ビン・ウバイドなど、何人かのユダヤ人は心からのムスリムとなりました。しかし、ユダヤ人の学者の何人かは『単に私たちの間で最も悪い者がムハンマド（アライヒッサラーム）を信じたのです。もし彼らが善良な者たちであれば、祖先の宗教から離れることはなかったでしょう』などと言っていました」このことに関してアッラーは、彼らへの返事としてクルアーンの章句を啓示し、このように伝えている。『かれら（全部）が同様なのではない。啓典の民の中にも正しい一団があって、夜の間アッラーの啓示を読誦し、また（主の御前に）サジダする。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一一三節）

ヒジュラの一年目に起きたいくつかのその他のこと

ヒジュラの一年目、アンサールのアスアド・ビン・ズラーラ、ベラー・ビン・マルール、クルスム・ビン・ヒドゥム、ムハージルのウスマーン・ビン・マズーンが亡くなった。また、不信仰者たちと戦う許可が与えられた。そのほか、マディーナの天候と水の影響により、アブー・バクル様とビラール・ハベシ様がマラリアにかかった。これを受けて、預言者様は「アッラーよ！　マッカを私たちに好ましくしたように、マディーナも私たちに好ましくして、ここで私たちを豊かさと恵みに満たしてください」と願った。アッラーは願いを受け入れ、ムハージルたちがマディーナを好ましくなるようにされた。

また、預言者様自らが参加して、エブワー、ワッダーンの戦いがこの年に行われた。二年目が始まると、ブワート、サフェワーン、ズルシェイレの出征が続いたが、これらは実際に戦うまでには至らなかった。

記述された初の条約

マッカのムスリムたちはこの事態を放ってはおかず、預言者様に対して、マッカでできなかったことをマディーナで行おうととりかかった。マディーナの不信仰者たちに脅迫の書簡を送ったように、マディーナのユダヤ人の部族にも脅しに満ちた書簡や知らせを送ってよこしていた。しかし、彼らのこの脅しは、ユダヤ人たちを預言者様に近づける結果となった。

ユダヤ人たちは預言者様のもとへと行き「あなた方と和平を結びに来ました。条約を結び、互いに危害を加えないようにしましょう」と言ったのだった。預言者様は彼らとの間に、五十五条から成る条約を結んだ。このうちのいくつかは次のようなものである。

一、この条約は、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）、マッカとマディーナにいるムスリムたち、彼らに従う者、彼らに後から加わる者、および彼らとともに戦いに参加する者との間に結ばれたものである。

二、疑いなく、彼らは他の人々とは別の一団である。

三、すべての部族は捕虜になった者の解放のため、（ムスリムたちの間での習慣によって）保釈金を一緒に支払う。

四、ムスリムたちは、自分たちの間で混乱を起こした者について、それがたとえ我が子であったとしても敵対することとなる。

五、ユダヤ人たちの中でムスリムに従った者については、いかなる虐待も行うことはなく、手助けを行うこととする。

六、ユダヤ人たちはムスリムたちとともに一つの集団を形成し、各自が自身の宗教に必要なことを行うこととする。
七、ユダヤ人たちは誰一人として、ムハンマド（アライヒッサラーム）の許可なくして、いかなる戦役にも出てはならない。
八、誰一人として、互いに協定をした者に対して悪事を行わず、虐待を受けた人には手助けをすること。
九、マディーナの谷は、この条約を結んだ者たちにとって不可侵であり、禁制の場所となる。
十、マッカの不信仰者たちと彼らに協力する者に対しては、いかなる形での庇護も行わないこと。
十一、マディーナを攻撃する者がいた場合、ムスリムたちとユダヤ人たちは互いに協力すること。
ユダヤ人たちはこの条約により（表面上）ムスリムたちと親交を結び、彼らに恨みや敵意をもたないこととなった。

最愛の者よ、悲嘆するな！…

預言者様がヒジュラを行う前、マディーナでは、ハズラジ族の長であるアブドゥッラー・ビン・ウベイが統治者に選ばれようとしていた。しかし、アカバの誓いの後、ヒジュラによってアウス族とハズラジ族の多くがムスリムになると、アブドゥッラー・ビン・ウベイは統治者となるに至らなかった。このため、彼は預言者様をはじめ、ムハージルの教友たち、マディーナの教友たちに対して復讐の機会をうかがっていた。しかし、敵であることは明らかにはしなかった。自分と同様の幾人かとともに、偽信者の一団を作り上げた。彼らはムスリムたちの隣ではイスラームの宗教に入ったと言い、しかし後ろでは嘲笑していた。隠れて仲違いの種をまき、暴動や混乱を起こそうとしていた。このことを大変にひどい形で行い、万物の王の神聖な言葉を逆の意味で伝えたり、歪曲させたりしていた。

敵であることを隠していたユダヤ人たちは、預言者様と先の条約を結んでいた。そこで、預言者様のもとに一団、また一団とやって来て、預言者様に大変難しい質問を投げかけた。そして、返ってきた返事から、彼が真実の預言者

であることを理解した。だが、彼らは頑固で嫉妬していたため、信仰しようとはしなかった。これに対して愛すべき預言者様は「ユダヤ人の学者の十人が私を信じていたら、ユダヤ人全員が信仰していたことだったでしょう」とおっしゃった。預言者様がこのようにして悲嘆していると、アッラーは次のクルアーンの節を啓示して慰められた。『使徒よ、互いに不信心に競う者のためにあなたの心を痛めてはならない。かれらは口で「私たちは信仰する」と言うが、心では信じてはいない。またユダヤ人の中には、虚偽を聞き出すことばかりに熱心で、あなたの処に全く寄りつかない者がいる。かれらはその言葉を（正しい）意味から歪めて言う。「もしこれが、あなたがたに与えられたもの（律法と同じである）と思うならば受け入れなさい。だがあなたがたに与えられたものと同じでないならば、用心しなさい」アッラーが一度試みにかけようと御望みの者には、あなたはかれらのため、アッラーに対し何の件にもない。これらの者は、アッラーがその心を清めるのを、望まれない者たちである。かれらは現世において屈辱を受け、来世においても酷い懲罰を受けるであろう。』（食卓章（アル・マーイダ）第四一節）

また、結ばれた条件によって、教友たちの幾人かは近隣のユダヤ人たちと親しい関係を築くようになった。アッラーは彼らのこのような行為を禁じ、こう啓示した。『信仰する者よ、あなたがたの仲間以外の者と、親密にしてはならない。かれらはあなたがたの堕落を厭わない。あなたがたの苦難を望んでいる。憎悪の情は、もうかれらの口からほとばしっている。だがその胸の中に隠すところは、更に甚だしい。われは既に種々の印を、あなたがたに鮮明にした。只あなたがたの理解する力が問題なだけである。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一一八節）

マッカの不信仰者たちは、マディーナの不信仰者や偽信者、そしてユダヤ人たちや、マディーナの郊外にいた部族に対して、休みなく挑発したり、脅しを続けたりした。そして一日も早くイスラームの光をなくそうと、預言者様の神聖な身体を消す方法を考えていた。

偽信者や不信仰者たちのこのような行動に対して、預言者様はいつも平和的に和解しようと努めていた。しかし、何人かの教友たちは、もはや敵に反発する時期であると考え「アッラーよ！　私たちにとって、あなたの道において、

あの不信仰者たちと争うより価値あるものはありません。あのクライシュ族の不信仰者たちは、あなたの愛する預言者様を否定し、マッカから出るよう強制したのです。アッラーよ！どうぞ彼らと戦うことをお許しくださいますように」と願っていた。

　預言者様は、このことでもアッラーの命令を待ち、命じられたことによってのみ行動をしたのだった。今やその時間がやって来ていた。ジブリール様がもたらした啓示で次のように伝えられたのである。『あなたがたに戦いを挑む者があれば、アッラーの道のために戦え。だが侵略的であってはならない。本当にアッラーは、侵略者を愛さない。かれらに会えば、何処でもこれを殺しなさい。あなたがたを追放したところから、かれらを追放しなさい。本当に迫害は殺害より、もっと悪い。だが聖なるマスジドの近くでは、かれらが戦わない限り戦ってはならない。もし戦うならばこれを殺しなさい。これは不信心者への応報である。だがかれらが（戦いを）止めたならば、本当にアッラーは、寛容にして慈悲深くあられる。』（雌牛章（アル・バカラ）第一九〇～一九二節）

　その後、啓示された別の節では、このようにも伝えられている。『迫害がなくなって、この教義がアッラーのため（最も有力なもの）になるまでかれらに対して戦え。だがもしかれらが（戦いを）止めたならば、悪を行う者以外に対し、敵意を持つべきではない。』（雌牛章（アル・バカラ）第一九三節）

初の小部隊

　世界の誇りである預言者様は、マディーナの治安を守るため、そして敵の状況を把握するため、セリイエ、つまり小部隊を設立した。この小部隊に参加した者の数は四百から五百の間で推移した。また、預言者様も加わって、自ら管理した戦いのことはガザーという。愛すべき預言者様は、敵の急襲から守るため、マディーナでは当直を決め、安全に必要な措置を取った。

　一方、交易や財政的な面で不信仰者たちを弱め、屈服させる必要があった。そのため、シリアとの交易の道をおさえることが重要だった。このとき、ある不信仰者のキャラバンがマディーナの近くを通り過ぎるという情報を得た。愛すべき預言者様はただちに出征の準備をするよう命じ、三十人の騎兵の長として、ハムザ様を司令官に任命した。彼に、アッラーのことを畏れ、部下を良く扱うよう忠言した後『アッラーの道で、アッラーの名前を言いながら戦いに出なさい。アッラーを知らない者と戦うのです』とおっしゃった。ハムザ様には白い旗を渡し、見送った。

　ハムザ様は、部下の騎兵たちを、三百の騎兵で防護している不信仰者のキャラバンの方へと進めた。キャラバンは、シャームからマッカへと行くため、シーフルル・バフルという場所に来たとき、戦士達とまみえたのだった。名誉ある教友たちは、ただちに戦闘体制に入り、戦いの準備をした。そのとき、その場にいあわせたメジディ・ビン・アムル・アル・ジュハイニが追いついて間に入った。メジディ・ビン・アムル・アル・ジュハイニは、双方と協定を結んでいた。ムスリムたちの数が大変少なく、不信仰者たちがあまりにも多かったのを見て、ムスリムたちが敗北するであろうと考えた。ムスリムたちの統治が永久に続くことを願って仲裁をし、双方は戦いを中止した。その後、ハムザ様と友人たちはマディーナへと戻った。メジディのこの行動が預言者様に伝えられると、満足の気持を表して「素晴らしい。善なる正しいことを行いました」とおっしゃった。

　その後も小部隊は解散しなかった。ウバイダ・ビン・ハーリス様には六十人もしくは八十人の戦士が与えられ、ラビグへ赴いた。不信仰者たちは、ムスリムたちを恐れ、無事でいようと逃げ回っていた。

　預言者様はある日、クライシュ族の不信仰者たちを偵察するため、ナハレ地方に小部隊を配置しようと考えた。赴く兵士たちの司令として、アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフ様にその任務を与えようとした。しかし、アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフはこの命令を受けると、預言者様から離れることの痛みに泣き始めた。預言者様は彼の代わりにアブドゥッラー・ビン・ジャフシ様を任命した。

　アブドゥッラー・ビン・ジャフシは熱心にイスラームに従って生活していた人だった。彼がムスリムなったとき、

不信仰者たちは彼に思いもよらないような拷問をしていたにもかかわらず、信仰の力で拷問に耐え、圧迫や虐待を我慢していた。そのため、預言者様は彼について教友たちに「…空腹と渇きに最も我慢し、耐え忍んだのは彼です」とおっしゃっている。アブドゥッラー・ビン・ジャフシは預言者様が殉教者について語っていた吉報について聞いており、いつも殉教者になりたいと熱望していた。戦では前面に立って英雄的に戦っていた。

アブドゥッラー・ビン・ジャフシはこのように語っている。「その時、預言者様は夜の礼拝をし、私を隣に呼びました。『朝早く私のもとに来なさい。武器の準備もするのです。あなたをある場所へ行かせます』とおっしゃいました。朝になって、モスクへ行きました。サーベルや弓、矢、荷袋を持ち、盾も持っていきました。預言者様は朝の礼拝を行い、その後、家に戻りました。私はそれより前に来ていたため、扉の前で待ち始めました。預言者様はムハージルから私とともに行く何人かを選びました。『あなたをこの人々の司令官に任命します』とおっしゃって、ある手紙を渡しました。『行きなさい。そして二晩の距離を行ったところで、この手紙を開けるのです。その手紙に書かれているとおりに行動しなさい』とおっしゃいました。『預言者様、どの方向に行きましょうか？』と尋ねると『ネジュドに向かいなさい。レキイェにある井戸を目指すのです』とおっしゃいました」

アブドゥッラー・ビン・ジャフシがナハレへの旅を命じられたとき、初めてアミール・アル・ムウミニーン、つまり信徒たちの長という尊称が与えられた。彼は、イスラームにおいて初めてこういった名前で呼ばれた長となった。八人もしくは十人とともに、二日後にメレル地方に着いたときに手紙を開いた。

「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム。この手紙を読んだら、マッカとターイフの間にあるナハレの谷に入るまで、アッラーの名前と恵みによって歩いていきなさい。一緒にいる友人たちには無理強いしなくて構いません。ナハレの谷にいるクライシュ族のキャラバンを偵察し、様子をうかがうのです。彼らの情報を私たちに知らせなさい」と書かれていた。

アミール・アル・ムウミニーンのアブドゥッラー・ビン・ジャフシは、手紙を読むと「私たちはアッラーが創造し

たしもべであり、全員がアッラーのもとに帰ります。私はそれを聞き、服従しました。アッラーや愛すべき預言者様の命令に従います」と言って、手紙に口づけをして額につけた。その後、友人たちに向かって「誰でも殉教者となりたいのであれば、私と一緒に来るのです。行きたくない者は帰っても構いません。誰一人にも無理強いはしません。来なかったとしても私は一人で行き、預言者様の命令を実行します」と言った。全員が「私たちは預言者様の命令を聞きました。アッラーや預言者様に、そしてあなたに従います。どこへ行くにしても、アッラーのお恵みを受けて歩くのです」と返事をした。

サアド・ビン・アブー・ワッカース様も参加していたこの小部隊は、ヒジャーズ地方に向ってナハレへとやって来た。ある場所に隠れ、そこから通過するクライシュ族を見張り始めた。その時、クライシュ族のキャラバンが通過した。ラクダに荷物を積んでいた。ムスリムの戦士たちはキャラバンに近づき、彼らに宣教をした。彼らがそれを認めないと、戦いが始まった。一人を殺し、二人を捕虜とした。別の一人は馬に乗っていたため逃げていった。不信仰者たちのすべての財産は、ムスリムの小部隊の戦利品となった。アブドゥッラー・ビン・ジャフシは、この戦利品の五分の一を預言者様のために取っておいた。これはムスリムにとって初の戦利品となった。

二つのキブラを持つモスク

愛すべき預言者様がマディーナにヒジュラをして十七ヵ月が過ぎた。それまでは、エルサレムにあるアクサー・モスクへ向かって礼拝を行っていた。これを見たユダヤ人が「これは何とおかしいことか。宗教は私たちと異なるのに、キブラは私たちと同じとは」と言っていたことが預言者様の耳に入った。このように言われたことに心を痛めていた。ある日、大天使ジブリールが来たとき、彼に「ジブリールよ！ アッラーが、礼拝するときに私の顔が向かうところを、ユダヤのキブラからカアバへと変えることを望みます」とおっしゃった。すると、ジブリール様は「私はただの

しもべです。それをアッラーに願ってください」と返事をした。その後、雌牛章（アル・バカラ）第一四四節が啓示され、このように伝えられた。『われはあなたが（導きを求め）、天に顔を巡らすのを見る。そこでわれは、あなたの納得するキブラに、あなたを向かわせる。あなたの顔を聖なるマスジドの方向に向けなさい。あなたがたは何処にいても、あなたがたの顔をキブラに向けなさい。本当に啓典の民は、それが主からの真理であることを知っている。アッラーは、かれらの行うことに無頓着な方ではない。』

この章が下されたとき、預言者様は昼の礼拝を行っていたところだった。礼拝の半分にさしかかったとき、啓示を受けるやいなや方向をカアバの方へと変えた。教友たちも預言者様に従って、その方向に向かった。このため、このモスクには『マスジディ・クブレティン』つまり、二つのキブラを持つモスク、と名付けられた。その後、預言者様はクバーに行き、初めて作られたモスクのキブラを神聖な手で新しく作り変え、モスクの壁も変更した。

バドルの戦い

先の小部隊での教友たちの勝利に、不信仰者たちは恐れを感じ始めていた。いまやキャラバンは一団となり、軍を伴って旅に出るようになった。ヒジュラ二年目に、マッカの不信仰者たちは全家族から資金を集め、千頭のラクダから成るキャラバンをシャームに送った。その長としては、マッカの族長であるアブー・スフヤーンがついたが、当時はまだムスリムとなってはいなかった。キャラバンを守るため、四十人ほどの護衛をつけて任務に当たらせた。そして物品を売った後、十分な金で武器を買い、これらをムスリムたちとの戦いで使う予定であった。

預言者様は、不信仰者たちが大規模な交易キャラバンをシャームに送ったという知らせを受けると、状況を把握するためムハージルたちの中の幾人かを任務につかせた。彼らがズルアシーレという場所に着くと、キャラバンが通るという情報を得て、マディーナへと戻った。不信仰者たちから武器や物品を奪えば、彼らがイスラームに危害を加えることも、また自分たちを守ることもできなくなると考えられた。このため、預言者様はタルハ・ビン・アブドゥラーと、サイード・ビン・ザイド様をキャラバンが戻る時期を調べさせるための偵察として送ることとした。

これはまたとない機会だった。預言者様はただちに準備を整え、マディーナでは礼拝の先導としてアブドゥッラー・イブニ・ウンミ・メクトゥンを残すこととした。また、妻が病気であったウスマーン様のほか、彼と同様の六人にも任務を与えて、マディーナに残るよう命じた。そしてムハージルとアンサールから成る三百五人の教友たちとともに、ラマダーン月の十二日、バドルという場所へ向けて進んでいった。任務を受けてマディーナで残った者を含めると、その人数は三百十三名となる。バドルはマッカ、マディーナ、そしてシャームへと通じる交易の要衝だった。この戦いに出征しようと、若者や女性たちも預言者様に願い出ていた。ウンム・ワラカは預言者様の前に出て「両親をあなたのために捧げます、預言者様！ お許しをいただければ、あなたとともに行きたいのです。怪我をした者の傷を治したり、病人の世話をしたりしましょう。そして、もしかするとアッラーが私に殉教者という恵みを授けるかもしれま

せん」と言うのだった。しかし、預言者様は「あなたは家に残りなさい。そしてクルアーンを詠むのです。必ずやアッラーがあなたに殉教者という恵みを授けるでしょう」とおっしゃった。

サアド・ビン・アブー・ワッカースはこのように語っている。「預言者様が、私とともに戦いに行きたがる年少の者たちを思いとどまらせようとしていたとき、兄弟のウマイルがどこかに隠れ、見つからないようにしていたのを目にしました。当時彼は十六歳でした。『なぜあなたは隠れているのですか？』と聞きました。すると『預言者様は私をまだ幼いと思い、戻させようとするのではないかと恐れているのです。けれども、私は戦いに参加し、アッラーが私に殉教者という恵みを授けることを望んでいるのです』と答えました。そのとき、預言者様は彼のことに気付き『あなたは戻りなさい』とおっしゃいました。すると、兄弟のウマイルは泣き始めました。同情の海である預言者様は彼の涙に耐えられず、参加の許しを与えました。しかし、兄弟はまだ自分でサーベルをつけることができなかったため、私が彼の腰に付けてやりました」

万物の王である愛すべき預言者様の軍旗は、ムスアブ・ビン・ウマイル、サアド・ビン・ムアズ、そしてアリー様が掲げた。教友たちのもとには、たった二頭の馬と、七十頭のラクダがあるばかりだった。それらに順に乗っていた。預言者様はアリー様、アブー・ルバーベ様、そしてメルセット様と交替しながら乗っていた。しかし、皆が預言者様は歩かず、ラクダに乗ったままでいてもらいたいと望んでいた。「命をあなたに捧げます、預言者様！あなたはラクダから下りないでください。高貴な人物の代わりに私たちが歩きます」と言って懇願した。しかし、万物の王は、自分を特別扱いしないように「歩くことに関しては、あなた方が私よりも能力に秀でているわけでもないし、善行や褒賞に関しては私があなた方より必要としないわけではないのです」とおっしゃった。預言者様と教友たちは砂漠の灼熱の暑さの中を歩いていった。しかも断食中だった。教友たちはイスラームを広めるため、さまざまな苦難に耐え、愛や喜びをもって預言者様に従っていた。なぜなら、その結果としてアッラーと預言者様のご満悦を得て、強く期待していた殉教者と天国があったからである。愛すべき預言者様は教友たちの状態を見て「アッラーよ！彼らは徒歩な

のです。彼らに乗り物をお与えください。アッラーよ！彼らは着る物がないのです。彼らに着せてください。アッラーよ！彼らは空腹です。彼らを満たしてください。アッラーよ！彼らは貧しいのです。あなたの寛大なる恵みにより、彼らを豊かにしてください」と願っていた。

預言者様の神聖なる軍隊が、灼熱の暑さの中をバドルに向って進んでいたとき、シャームから来ていた不信仰者たちのキャラバンもバドルに近づいていた。預言者様はキャラバンの状況を知るために二人の教友を行かせると、彼らはキャラバンが一日か二日後にバドルへ到着するであろうことを知り、急いで戻っていった。キャラバンにいた人々は、ムスリムの二人が情報を得た村まで来たとき、村人に「ムスリムの偵察のことを何か知っているか？」と聞いた。村人たちは「知りません。しかし、二人が来て、この辺りにしばらく座って帰っていきました」と言った。

アブー・スフヤーンは聞いた場所に行き、調べてみようと、地面にあったラクダの糞をつぶし、その中から出た餌の種を見た。そして「この種はマディーナの餌だ。恐らくその二人はムハンマド（アライヒッサラーム）の偵察だろう」と言った。ムスリムたちがかなり近くにいることを察知し、恐怖に陥った。キャラバンの行く末を心配し、朝も夜も歩き通し、ひと時も無駄にせず紅海の海岸に沿ってマッカへ急行することに決めた。さらに、ダムダム・ビン・アムル・グファーリーという名の者を、状況を知らせるためにマッカへと送った。

彼はマッカに着くと、シャツを自分で前からも後ろからも破った。ラクダの鞍もひっくり返した。変な調子で「助けてくれ！助けてくれ！クライシュ族よ！助けてくれ！あなた方のキャラバン、アブー・スフヤーンのもとにあるあなた方の資産をムハンマド（アライヒッサラーム）が襲っている。間に合えば、キャラバンを救えるだろう」と言って、悲痛な叫び声を上げた。

これを聞いたマッカの人々は、ただちに集まって準備をした。七百頭のラクダ、百人の騎兵、百五十人の歩兵を集めた。アブー・ラハブに「あなたも参加するのだ」と訴えると、彼は恐怖におののいて、病気であるという言い訳をした。代わりにアス・ビン・ヒシャムを送った。ウマイヤ・ビン・ハラフという不信仰者は、戦いの準備を非常に気

が進まない様子で行っていた。なぜなら、彼はかつて預言者様が「私の教友たちがウマイヤを殺すだろう」と言っていたということを聞いていたからだった。預言者様が決して真実以外は言わないことを知っていたため恐れていたのである。このため、アブー・ジャフルからの参加の強要に対し、年を取っていて太っていることを言い訳にしていた。しかし、アブー・ジャフルが彼のことを臆病だと挑発したため、行かざるを得なくなった。

不信仰者たちの軍隊のほとんどが鎧をつけていた。一緒に声の美しい女たちもいた。楽器や酒も持って行くことを忘れなかった。このような力のある軍を前に、三百人どころか、千人の軍であっても勝利を収めるであろうと考えられた。出発前に、誰を殺し、得らえるであろう戦利品の計算をしている者すらいた。しかし、全員の最大の目標はイスラームを消滅させることだった。この狂暴な不信仰者の群れは、女たちが叩く太鼓や歌の中出発していった。

そのときアブー・スフヤーンはバドルから相当離れ、マッカに向かって進んでいた。危険がなくなったことを確信し、カイス・ビン・イムリ・ウル・カイスという名の者をクライシュ族のもとに行かせ「クライシュ族よ！　あなた方はキャラバンや人、物品を守るため、マッカから出発したようですが、我々は危険を脱しました。もう帰って大丈夫です」と伝えた。さらに「ムスリムたちと戦うため、マディーナに行くのは避けなさい」と忠告もした。

カイスは不信仰者の一団にこの知らせをもたらしたが、アブー・ジャフルは「誓って我々はバドルへと行き、三日後の朝、祭りを行い、ラクダを犠牲にして酒を飲むことになる。周りの部族は我々をうらやむことになるのだ。我々は恐れを知らないということを、周りの部族も目にすることだろう。そして我々の威光の前に、誰も我々を攻撃しようという勇気を持たなくなるだろう。負け知らずのクライシュの軍団よ、前進だ！…」と言うのだった。

カイスは、アブー・ジャフルが忠告を聞かないことを分かると戻り、アブー・スフヤーンに状況を説明した。一方、先見の明があり、慎重なアブー・スフヤーンは「ああ、遅かったか。残念なクライシュ族よ…。これはアムル・ビン・ヒシャム（アブー・ジャフル）の計画だろう。これはきっと、人々の先頭に立ちたいがために行ったことだろう。しかし、このような手に負えない狂暴なことは、常に途中で挫け、不吉な結果となるものなのだ。もし、ムスリムたちが彼ら

とまみえたら、クライシュ族にとっては残念なことになる…」と言った。そしてキャラバンを急いでマッカへと連れて行き、後から軍隊に追いついた。

この間、世界の王である預言者様は教友たちとともにバドルに近づいていた。そのとき、マディーナの不信仰者であるフベイブ・ビン・イェサーブと、カイス・ビン・ムハッリスがイスラーム軍の中にいるのを見つけた。フベイブの頭にある鉄の兜によって、彼のことが分かったのだった。預言者様はサアド・ビン・ムアズ様に「あれはフベイブではありませんか？」とおっしゃった。サアドは「はい、預言者様」と答えた。フベイブは戦術に優れ、勇敢な戦士であった。カイスとともに預言者様の前に出た。預言者様は彼らに「あなた方がなぜ私たちとともに来るのですか？」と尋ねた。彼らは「あなたは私たちの姉妹の息子で、私たちの近隣でもあります。私たちもあなた方とともに、戦利品を得るために行くのです」と答えた。これを受けて預言者様はフベイブに「あなたはアッラーやその預言者を信じますか？」とおっしゃると「いいえ」と答えた。すると預言者様は「では戻るのです。私たちの宗教でない者は、私たちとともにいることはできません」とおっしゃった。

フベイブは「私が勇敢であり英雄であること、そして敵の胸元に傷を与える勇者であることは誰でも知っています。戦利品を得るため、あなたとともに敵に対して戦います」と言った。しかし、預言者様は彼のこの提案を受け入れなかった。

しばらく行くと、フベイブは望むことを再び繰り返した。しかし預言者様はムスリムとならない限り、その希望には応えられないと知らせた。レウハーという場所に来たとき、フベイブは預言者様の前に上がり「預言者様、アッラーが全世界の神であること、そしてあなたが預言者であることを信じます」と言うと、愛すべき預言者様は大変喜んだ。カイスもマディーナに戻った後で信仰の名誉を得ることとなった。

イスラーム軍がサフラという場所に来たとき、マッカの人々が軍を作って、キャラバンを救うためにバドルに向って出発したという情報を得た。預言者様は教友たちを集め、このことについて相談をした。というのは、マディーナ

のムスリムたちは、預言者様にアカバで誓いをたてたとき「預言者様よ！　私たちとともに私たちの町に来て下さい。あなたをそこで、敵に対しては命が尽きるまで守り、そしてあなたに従います」と約束をしていたのだが、今はマディーナの外に出ていたからであった。そして、人数も武器も持ち物も、自分たちの数倍の大きな敵の軍に対峙していた。預言者様が教友たちの意見を聞くと、ムハージルのアブー・バクル・スィッディークとウマル・ウル・ファールクがそれぞれに立ち上がり、敵の軍と戦うべきだ、という意見を述べた。また、ムハージルのミクダード・ビン・アスワドも立ち上がり「預言者様！　アッラーの命令であれば何であれ、それを行いましょう。アッラーの命令により指示してください。いつもあなたとともにいます。一瞬たりともあなたから離れることはありません。私たちはユダヤ人が預言者ムーサーに言っていたように『だがかれらは言った。「ムーサーよ、本当にわたしたちはかれらがそこに留まる限り、決してそこに入れない。あなたとあなたの主が、二人で行って戦え。わたしたちはここに座っている」』（食卓章（アル・マーイダ）第二四節）といったようなことは言いません。命や首をアッラーや預言者様のために犠牲にします。あなたを真の預言者として送ったアッラーに誓って、海の向こうにあるエチオピアへ行くように言われれば、そこに行くでしょう。あなたに対して、ほんの些細な反対も決して行いません。あなたの願いを実行するための用意はできています。両親や自分の命をあなたに捧げます、預言者様…」と言った。ミクダードのこの話は、愛すべき預言者様を喜ばせた。そして彼のために善を願ったのだった。

だが、この件ではマディーナのムスリムたちの同意が重要だった。なぜなら、彼らの方が人数として多く、また、預言者様をマディーナで守ることについてのみ誓約をしていたからだった。マディーナの外で戦うことについて誓約はしていなかった。この点が明確にされると、アンサールのサアド・ビン・ムアズが立ち上がり「預言者様！　もしお許しをいただけるなら、アンサールの代表として話がしたいのです」と言った。許されると「預言者様よ！　私たちはあなたを信じ、あなたが預言者であることを認めました。あなたが伝えたことはすべて真実であり事実なのです。私たちは言われるとおりに行い、あなたに従うことを固く誓いました。その誓いを決して破ることはしないのです。そ

して、あなたがどこへ行こうと、その命令に従います。あなたの命令をとても大切に考えます。命や首をあなたのために捧げます。あなたを真実の預言者として送ったアッラーに誓って、あなたが海に飛び込んだら、私たちも飛び込むのです。誰一人として、この件について一歩も退く者はおりません。ご希望が何であろうと、私たちに命じてください。私たちはそれを守ります。資産や命をあなたに捧げます。敵から決して顔をそむけません。戦いに耐え忍びます。私たちの希望は、あなたを喜ばせ、あなたのご満悦を得ることです。アッラーの恵みが私たちの上にありますように…」と述べた。この言葉を聞いた教友たちは興奮していた。全員がこの言葉に心から賛同した。預言者様は大変嬉しく思っていた。そして、サアド様や教友たちのために祈念した。

もはや、すべてのためらいは消えていた。敵がいくら大勢であって、いくら力を持っていたとしても、名誉ある教友たちは愛すべき預言者様の後ろから一瞬たりとも離れずに殉教の道を歩き、アッラーや預言者様のご満悦を得ようとしていた。先頭に万物の王がいる限り、行かないところはなかったのである。地上の誇りである預言者様は、教友たちの自分に対する結束や熱意を見ると、彼らに「さあ、出発のときです。アッラーの恩恵に与りますように。アッラーに誓って、今、クライシュ族が戦地で打たれ、倒れていくのが見えています」と吉報をもたらした。この吉報とともに、教友たちは意気高く預言者様の後について出発した。

天使たちが手助けに来る

バドル近郊に着いたときは金曜日だった。愛すべき預言者様は教友たちに「あの小さい山のふもとにある井戸のところで、いくつかの情報が手に入ることでしょう」とおっしゃった。そしてアッラーの獅子であるアリー様や、サアド・ビン・アブー・ワッカース様、ズバイル・ビン・アウワーム様をはじめ、何人かの教友たちをそこへ行かせた。

アリー様たちはただちに井戸のところへ行った。そこでクライシュ族のラクダ番と水番を見た。彼らはムスリムた

ちを見ると逃げていった。しかし、そのうちの二人を捕らえることができた。一人はハッジャージ家の奴隷であるエシレムで、もう一人はアス・ビン・サーイド家の奴隷であるアリズ・アブー・イェサルだった。彼らが預言者様の前に連れてこられると、預言者様は彼らに「クライシュ軍はどこにいますか?」と尋ねた。彼らは「あそこに見えている砂丘の後ろに留まっています」と返事をした。さらに預言者様が「クライシュ軍は何人ですか?」と尋ねたが「私たちには分かりません」との答えだった。そこで「一日に何頭のラクダをほふっていますか?」と尋ねると「九頭の日もあれば、十頭の日もあります」と返事があったので、預言者様は「では千人より少なく、九百人より多いでしょう」とおっしゃった。それから「クライシュ族の名士たちの中では誰が参加していますか?」と尋ねた。彼らが「ウトゥバ、シャイバ、ハーリス・ビン・アムル、アブー・ブフテリ、ハーキム・ビン・フザム、アブー・ジャフル、ウマイヤ・ビン・ハラフ…」と言うと、預言者様は教友たちに向って「マッカの住民は大切なものをあなた方に犠牲に差し出しました」とおっしゃった。その後、預言者様がこの二人に対して「途中でクライシュ軍から抜ける者はいましたか?」と尋ねたところ「はい。ズフレ族のアハネス・ビン・アブー・シェリキが抜けました」と返事があった。預言者様が「彼がまだ正しい道にはないうちから、そして、来世やアッラー、啓典をまだ知らないうちから、ズフレ族に正しい道が示されたのです。彼以外に戻る者はいましたか?」とおっしゃると「アディイ・ビン・カアブ家の息子たちも抜けました」という返事を受けた。

預言者様は、最後警告を行ってクライシュ族と調停をさせるため、ウマル様を向かわせた。ウマル・ビン・ハッターブは彼らに「頑迷なる民よ!預言者様がこう伝えています。『全員がこの戦いをあきらめ、無事で戻りなさい。なぜなら、私にとってあなた方以外の者と戦うことの方が、あなた方と戦うより受け入れやすいことなのです…』」と言った。

これに対し、クライシュ族の不信仰者であるハーキム・ビン・フザムが前に出て「クライシュ族たちよ!ムハンマド(アライヒッサラーム)があなた方に良心的な提案をしています。彼の提案をただちに受け入れよう。もし、彼の言うとおりにしなければ、誓って今後はあなた方に同情をしなくなるだろう…」と言った。アブー・ジャフルはハキムのこの言葉に怒り「そのようなことは決して受け入れない。そして、ムスリムたちに復讐をしない限り戻ることはない。まさに、これから一人たりとも、我々のキャラバンに襲撃をしないようになるまで」と言って和解の扉を閉めた。ウマル様は戻っていった。

その夜、預言者様と名誉ある教友たちは、不信仰者たちよりも先にバドルへと来て、井戸の近くで野営をした。預言者様は教友たちと相談し、司令部をどこに設置するべきか、彼らの考えを聞いた。その中で若干三十三歳のハッバーブ・ビン・ムンゼルが立ち上がり、発言の許しを求めた。許されると「預言者様よ!私たちが今いるこの場所は、司令部を作るためにアッラーが預言者様に命じたところでしょうか。そして必ずここにいなければならないのでしょうか。あるいは、預言者様自身のお考えのもと、一つの戦略としてここを選んだのでしょうか?」と尋ねた。預言者様は「いいえ。ここは戦略として選ばれたのです」とおっしゃった。

これに対してハッバーブ様は「両親を、そして自分の命をあなたに捧げます、預言者様!私たちは戦いをよく知っています。この辺りもよく知っています。クライシュ軍が留まっているところの近くにある井戸には、たくさんの清らかな水があります。お許しがあるのなら、私たちはそこに司令部を置きましょう。周りにある井戸はすべて閉じるのです。そして貯水池を一つ作り、中に水を貯めておきます。敵と戦うときに喉が渇けば、その貯水池の水から飲むのです。一方で敵は水を見つけることができなくて途方にくれることになります」と言った。

そのとき、大天使ジブリールがこの意見が正しいということを知らせた。預言者様は「ハッバーブよ!あなたは正しい意見を述べました」とおっしゃって立ち上がった。全員が話に出た井戸のところへと移動した。その清い水の出る井戸以外はすべての井戸を閉め、大きな貯水池を作った。中に水を満たし、飲むための道具も用意した。

そのとき、サアド・ビン・ムアズ様が預言者様の前に進み出て「預言者様!あなたのためにナツメヤシの枝で、中に座れるほどの木陰を作りましょう」と提案した。世界の誇りである預言者様は、サアドのこの提案に喜び、そして祈念をした。すぐに木陰が作られた。

預言者たちの王は、名誉ある教友たちとともに、戦闘になるであろう広場を歩いて下調べをした。ときどき立ち止まり「インシャーアッラー、明日の朝、ここで誰其が打たれて倒れます。インシャーアッラー、明日の朝、誰其が打たれて倒れるところはここです。ほら、ここです！ここです！…」とおっしゃって、神聖な指でクライシュ族の不信仰者が死ぬ場所を示した。後に、ウマル様がこの件について「彼らは一人ひとり、預言者様の神聖な手で示された場所の真上で打たれ、死んだのを見ました。ほんの少しの前後もありませんでした」と知らせている。

万物の王である預言者様は、教友たちを三つのグループに分けた。ムハージルの軍旗をムスアブ・ビン・ウマイルに、アウス族の軍旗をサアド・ビン・ムアズに、ハズラジ族の軍旗をハッバーブ・ビン・ムンジルに渡した。それぞれが軍旗のもとに集まった。預言者様は軍隊の列の前を通って、隊列を整えた。

整列させる際、サワード・ビン・ガズィーエが列から前に出ていたため、その胸を神聖な手にあった杖で小突いた。そして「並びなさい、サワード」とおっしゃった。すると、サワードは「預言者様！手にお持ちの杖が、私の胸を痛くしました。あなたを真実の宗教とともに、啓典と正義とともに送ったアッラーの真実のため、私もあなたの杖でそのように突きたいのです」と言った。彼のこの言葉に、すべての教友たちは驚かされた。万物の王に仕返しをしたいなどということがあり得るのだろうか？このようなことができるというのだろうか？しかし、預言者様は神聖な上着の前を開け「さあ、突きなさい、そして真実を得るのです」とおっしゃった。

サワード様は、万物の王である預言者様の胸に、大いなる喜びと愛情を持って口づけをした。皆はてっきり突くものと思っていたところで見ることになったこの光景に接し、兄弟のサワードに驚くとともに、彼のようにできたらとうらやんだのだった。愛すべき預言者様が「なぜこのようにしたのですか？」と尋ねると「両親の命をあなたに捧げます、預言者様！私は今日、アッラーのお許しのもと、最後の日を生きるでしょう。高貴な方とお別れすることになるのではないかと恐れています。ですから、最後の時に際して、神聖なお身体に唇をつけたいと考えたのです。このことは、最後の審判の日に私をとりなし、来世の罰から守る理由となるであろうと期待したのです」と答えた。彼のこの話に預言者様は大変感動し、サワード様に対して祈念を行った。

神聖なイスラーム軍の右翼では、勇敢な戦士であるズバイル・ビン・アウワームを、左翼ではミクダード・ビン・アスワドを司令とした。預言者様は戦いをどのように始めるかについて、名誉ある教友たちと相談しようとしていた。「どのように戦いましょう？」と尋ねた。アースム・ビン・サービトが立ち上がり、手に弓矢を持った状態で「預言者様！クライシュ族が私たちに百メートルほどの距離になったときに、彼らを矢で攻撃しましょう。その後、石が届くほどの距離に来たら石を投げましょう。槍が届く距離になったら、槍が壊れるまで槍で争いましょう。その後、サーベルを抜いて戦いましょう」と意見を述べた。この戦術を預言者様は気に入った。そして、教友たちにこのように命じた。「隊列を離れてはなりません。持ち場で耐えなさい。私が命令を出さない限り、戦い始めないように。敵があなた方に近づく前に、矢を無駄に使わないようにするのです。敵が盾で身を防ぎ始めるほどになったら矢を使うのです。敵がかなり近づいたら、手で石を投げなさい。さらに近づいたら槍を使いなさい。胸と胸が合うようになったら、サーベルで戦うのです…」

その後、見張りを置いて、教友たちを休憩させた。彼らはアッラーの恩恵により、まぶたが上げられないほどに睡眠をとることができた。預言者様がナツメヤシの枝でできた木陰の下に入ると、アブー・バクル様、続いてサアド・ビン・ムアズ様が刀を抜いたまま、木陰の前で護衛をした。愛すべき預言者様は神聖な手を上げ「アッラーよ！あなたがこの小人数の一団を滅亡させたら、もはやこの地上では、あなたに対して礼拝する者はいなくなります…」と言って悲嘆の中で懇願し、そのような願いを朝まで続けていた。

神聖なイスラーム軍の司令部が置かれたところは砂地の上だった。そのため、歩くことも困難で、足が砂にとられてしまっていた。しかし、その夜アッラーの恵みにより、そして預言者様の願いにより、一向に激しくなっていく雨が降り始めた。沢はあふれ、洪水となった。貯水池は水を一杯に満たし、地面は足が沈まないように固くなった。

一方、不信仰者たちは泥と洪水にまみれた。夜が明けると、預言者様は教友たちと礼拝を行った。朝の礼拝が終わ

ると、敵と戦うことについてや殉教についての美徳を述べて士気を高め、こうおっしゃった。「アッラーは必ず真実と正義を命じます。誰一人として、アッラーの同意に基づかない行動は受け入れられることがありません。アッラーが、この場所であなた方に恩恵や免罪を約束しました。その命令を実行するために努力をし、この試練を乗り越えるのです。なぜなら、アッラーの約束は真実であり、アッラーの言葉は正しく、そして、その罰は激しいものだからです。私やあなた方は、ハイイ（永遠）でありカイユーム（自存）であるアッラーと結ばれています。そしてアッラーに身を委ねました。アッラーにすがります。アッラーに頼ります。最後に帰るところはアッラーのもとなのです。アッラーが私やすべてのムスリムをお赦しくださいますように…」

　ラマダーン月十七日、金曜日の太陽が昇った。後に歴史上、最も激しく比類のない、最も重要で最大とされる戦いが始まろうとしていた。一方には世界の誇りである預言者様や、命を捧げるにあたって微塵もひるむことのない数少ない名誉ある教友たちが、もう一方にはイスラームを滅ぼそうと、アッラーの愛する名誉ある預言者様を殺そうと集まった凶暴で尋常でない異教徒たちがいた。残念なことに、それらの中には預言者様の親族もいた。彼らは愛すべき甥と戦うためにバドルへやって来ていたのだった。

　預言者様は隊列を改めて整え、先ほどの命令を繰り返した。そのとき、クライシュ族の不信仰者たちが司令部から出て、バドルの谷に向ってあふれるように歩き出した。その多くは鎧をつけていた。大いなるうぬぼれと優越感に浸りながら、イスラーム軍に攻撃をし始めた。預言者様は不信仰者たちのこの状況を見ると、アブー・バクル様とともにテントへ入った。そして、神聖な手を上げてアッラーに懇願し始めた。「アッラーよ！ 今、クライシュ族の不信仰者たちが、大いなるうぬぼれと優越感の中でやって来ます。彼らはあなたに挑戦し、私を否定しています。アッラーよ！ 私にお約束いただいた助力や勝利をお願いします。アッラーよ！ もし、この数少ないムスリムたちを滅亡させることをお望みであるならば、これ以降、あなたに礼拝をする者はいなくなってしまいます…」

　このように、途切れることなく繰り返しアッラーの助力を求め、懇願した。預言者様は大きな悲嘆と心を砕くよう

な懇願に我をも忘れ、上着が神聖な肩から落ちるまで続けていた。この心の中からの願いにこらえられなくなったアブー・バクル様は、神聖な上着を丁寧に地面から拾い、預言者様の神聖な肩に置きながら「命をあなたに捧げます、預言者様！ これほどの願いであれば十分なことでしょう。アッラーに対して何度も祈念されました。必ずやアッラーはあなたに約束された勝利をもたらすことでしょう」と言って慰めた。

　そのとき、世界の王はこのクルアーンの節を詠み、テントから出た。『やがてこれらの人々は敗れ去り、逃げ去るであろう。いや（審判の）時は、かれらに約束された期限である。しかもその時には、最も嘆かわしい最も苦しい目にあうであろう。』（月章（アル・カマル）第四五、四六節）

　預言者様は軍の先頭に立った。そして、次のクルアーンの節を詠んだ。『あなたがた信仰する者よ。（敵の）軍勢と遭遇する時は堅固に持して、専らアッラーを唱念せよ。恐らくあなたがたは勝利を得るであろう。あなたがたはアッラーとその使徒に従いなさい。そして論争して意気をくじかれ、力を失ってはならない。耐えなさい。アッラーは耐え忍ぶ者と共におられる。』（戦利品章（アル・アンファール）第四五、四六節）

　全面戦争はこれが初めてだった。まさに戦いが始まろうとしていた。興奮は最高潮に達していた。預言者様が『専らアッラーを唱念せよ…』という節を詠み上げたときには、教友たち全員が「アッラーフ・アクバル！… アッラーフ・アクバル！…」と言って、勝利に恵まれるようアッラーに懇願した。もはや預言者様の合図を待つばかりとなっていた。

　当時の習慣では、両軍が戦う前にそれぞれから勇者が前に進み出て、一騎打ちを行うことになっていた。これにより、両軍の戦意が高まり、戦いの前哨となっていたのだった。しかし、不信仰者のアーミル・ビン・ハドゥラーミはこの習慣を破り、イスラーム軍に矢を放った。矢はムハージルのミフジャーに当たり、彼は殉教者となって神聖な魂は天国へと上がっていった。預言者様はこの初の殉教者について「ミフジャーは殉教者の王である」と述べてその吉報をもたらした。教友たちは我慢できなくなっていた。しかし、預言者様からの合図はまだ出なかったため、ほんの少しも動かなかった。一人ひとりの心は火山のように燃え立っていた。

そのとき、不信仰者たちから三人が突進してくるのが見えた。彼らはラビーア家の狂暴なイスラームの敵であるウトゥバ、その兄弟のシャイバ、そして息子のワリードであった。ムスリムの戦士達に向かって「お前たちの中から我々と戦う者はいるのか?」と叫んだ。最初に教友たちの中からアブー・フゼイフェ様がその父であるウトゥバと戦うために前に進み出たが、世界の王は彼に「あなたは留まりなさい」とおっしゃった。次にマディーナ出身の戦士たちの中からアフラー・ハートゥンの息子であるムアズ、ムアッベス、そしてアブドゥッラー・ビン・レバーハが前に進み出た。彼らはウトゥバ、シャイバ、そしてワリードの前に立ちふさがった。手にはサーベルを持っていた。

　不信仰者たちは「お前たちは誰だ」と言って、名乗るように求めた。彼らが「マディーナのムスリムたちである」と答えると、不信仰者たちは「我々はお前たちに用はない。我々はアブドゥルムッタリブ家の者を求める。彼らと戦いたいのだ」と言い、イスラーム軍に向って「ムハンマド(アライヒッサラーム)よ!我々に釣り合う者を出すのだ」と叫んだ。

　預言者様は前に出た三人の勇敢な教友たちのために祈念をした後、元いた場所に戻るように命じた。それから教友たちを見回し「ハーシム家の者たちよ、立ち上がるのだ!迷信的な宗教でアッラーの光を消そうとやって来たあの人々に対し、アッラーのために戦うのだ。アッラーは預言者をそのために行かせたのです。立ち上がるのだ、ウバイダ!立ち上がるのだ、ハムザ!立ち上がるのだ、アリーよ!」とおっしゃった。

　アッラーの獅子と言われたハムザ様、アリー様、そしてウバイダ様は兜をかぶって前に歩き出した。そして、彼らの前に立ちふさがった。不信仰者たちは「お前たちは誰だ。もし我々に釣り合う者であれば、お前たちと戦おう」と言った。これを受けて「私はハムザだ!私はアリーだ!私はウバイダだ!」と返事をすると、不信仰者たちは「お前たちも我々と同じく名誉ある者たちだ。お前たちとの戦いを受け入れよう」と言った。勇敢なイスラームの戦士たちは、まず不信仰者たちに信仰するよう宣教したが、それは受け入れられなかった。そのため、三人は同時に刀を抜いて、不信仰者たちに攻撃した。ハムザ様とアリー様がウトゥバとワリードを一撃で殺した。ウバイダ様はシャイバを負傷させた。シャイバもウバイダ様に怪我を負わせた。しかし、ハムザ様とアリー様がウバイダ様の加勢に間に合い、シャイバをそこで殺した。ウバイダ様を抱きかかえて預言者様の前に戻っていった。

　ウバイダ・ビン・ハーリス様の神聖な足首からは血や髄液が流れていた。彼はこの状態にまったく気にもとめず「命をあなたに捧げます、預言者様。私がこのまま死んだら、殉教者とはならないでしょうか?」と尋ねた。預言者様は「そうです、あなたは殉教者となります」とおっしゃって天国に行くと吉報をもたらした。(ウバイダ様は戦いからの帰還中、サフラ地方で亡くなった)

　この戦いにより、三人の重要な人物をなくした不信仰者たちは驚いていた。それにもかかわらず、アブー・ジャフルは軍の士気を正そうと「お前たちはウトゥバ、シャイバ、そしてワリードが死んだことを気にするな。彼らは戦いに急いて、無駄に死んだのだ。誓ってムスリムたちを捕えて縛り上げるまで戻ることはないのだ…」と言って慰めようとした。

　勇敢な教友たちは一秒でも早く、不信仰者たちを刀で罰しようと待ち切れないでいた。預言者様は途切れることなく「私にしていただいたお約束をお願いします。アッラーよ!もし、この数少ないムスリムたちを滅亡させることをお望みであるならば、これ以降、あなたに礼拝をする者はいなくなってしまいます…」という祈念を繰り返していた。

　そのとき、不信仰者たちの隊列から、クライシュ族の中で最も勇敢で、鋭い矢を放つ、当時まだムスリムとはなっていなかった、アブー・バクル様の息子のアブドゥルラハマーンが前に出て戦う者を求めた。ムスリムの戦士たちの間からは、ただちに一人が刀に手をかけて歩き出したのが見られた。この人物は最初のムスリムであり、スィッディークという地位と名誉を受けていた、預言者様に次いで最も偉大で勇敢なアブー・バクル様だった… 息子と戦うために前に出たのだった。しかし、世界の王は「アブー・バクルよ!分かりませんか。あなたは私の目であり、私の耳でもあるのです…」とおっしゃり、戦うことを止めさせた。アブー・バクル・スィッディーク様は息子に向って「この性悪め!私との絆はどうしたのだ」と言うのを抑えることができなかった。

その後、預言者たちの王である愛すべき預言者様が、地面にかがんで一握りの砂を手にしたのが見られた。その砂を敵の上に放り投げ「不幸になるように。アッラーよ、彼らの心に恐怖を与えたまえ。足に震えをもたらしたまえ」とおっしゃってから、教友たちに向かって「突撃だ！　攻撃しろ！」と命じた。この合図を待っていた名誉ある教友たちは、以前に言われた指図のとおり行動し始めた。「アッラーフ・アクバル！…　アッラーフ・アクバル！…」という叫び声の中、矢はひゅんひゅんと音をたて、石は標的に当たり、槍は鎧に当たり始めたのだった。アッラーの獅子と言われたハムザ様は、両手に持った刀で戦った。アリー様、ウマル様、ズバイル・ビン・アウワーム様、サアド・ビン・アブー・ワッカース様、アブー・ドゥジャーネ様、アブドゥッラー・ビン・ジャフシ様は、不信仰者たちの隊列の頭から入って後ろから出てきて彼らを驚かせた。教友たちの一人ひとりが落ちることのない砦のようになっていた。「アッラーフ・アクバル！…　アッラーフ・アクバル！…」という声が轟いた。アッラーの栄光が異教徒の頭にハンマーのように打ち下ろされた。預言者様は「ヤー・ハイユーム！　ヤー・カイユーム！（ハイイ（永遠）でありカイユーム（自存）である御方よ、の意）」と言ってアッラーに懇願した。後にアリー様は「バドルで、私たちのうち最も勇敢で最も英雄的だったのは預言者様でした。不信仰者たちの隊列に最も近かったのは預言者様だったのです。私たちの動きが取れなくなったときには、預言者様のもとに避難したものです」と語っている。

不信仰者たちの司令官であるアブー・ジャフルは自軍の中央にいた。そして、その中にいた一人を自分のように仕立てて影武者を作った。この不幸な者の名前はアブドゥッラー・ビン・ムンジルであった。アリー様はアブドゥッラーに攻撃をして、アブー・ジャフルの目の前で彼の首を切り落とした。その後は、アブー・カイスを影武者とした。彼のことはハムザ様が殺した。

アリー様は、ある不信仰者と戦っていた。不信仰者が刀でアリー様に攻め立てると、刀は盾に突き刺さった。アリー様が不信仰者の鎧に守られた体に刀を振り落とし、肩から胸まで鎧もろとも二つに分けようとしたそのとき、頭上で刀がきらめくのが見えた。急いで頭を曲げた。光った刀の持ち主が「受けろ、これはハムザ・ビン・アブドゥルムッタリブからだ」と言った瞬間、相手の不信仰者の首が兜とともに地面に落ちた。アリー様が後ろを振り返ると、叔父のハムザ様が両手の二本の刀で援護するのを見た。預言者様は教友たちのこのような勇敢な戦いを見るたびに「彼らは地上におけるアッラーの獅子である」とおっしゃって彼らを誉め称えた。

あるとき、預言者様のすぐ隣で戦っていたウカシェ様の刀が壊れた。それを見た愛すべき預言者様は、地面に落ちていた一本の棒を拾って彼に手渡し「ウカシェよ！　これで戦うのだ」とおっしゃった。ウカシェが棒を受け取ると、預言者様の奇跡の一つとして、その棒は長く光る力にあふれた鋭い刀に変わった。戦いが終わるまで、この刀で多くの不信仰者を殺すことになった。

世界の王である預言者様は戦う一方で、教友たちを鼓舞し「私の命を手にしているアッラーに誓って、今日、アッラーのご満悦を望んで耐え、努力して戦い、後退せずに前進して殺された者を、アッラーは必ず天国に入れるのです」とおっしゃった。この神聖な言葉を聞いたウマイル・ビン・ヒュマムは「素晴らしい、素晴らしい。それならば天国に入るためには殉教者となる以外必要なことはない」と言って、攻撃を一段と強めた。そして、敵と戦う一方「アッラーのところへ物を持って行くことなどできはしない。ただアッラーを畏れ、来世のために行動し、戦いでの忍耐や努力によってのみ、アッラーのもとへ行くことができる。それ以外は間違いなく無となってしまう」と言っていた。このようにして、殉教者となるまで戦った。

戦いはさらに激しくなった。一人の教友に対して、最低でも三人の不信仰者たちが攻撃していた。だが、相手一人ひとりに刀で応戦する名誉ある教友たちは、決してひるむことはなかった。「アッラーフ・アクバル！…　アッラーフ・アクバル！…」と言う度に改めて力を得て、何度も攻撃を行い、あきらめることはなかった。あるとき、不信仰者たちの攻撃が激しくなり、教友たちは窮地に陥った。

すると、預言者様はアブー・バクル様とともに、ナツメヤシの枝で作られた木陰に入った。預言者様は再びアッラーに懇願し始めた。「アッラーよ！　私にお約束いただいた助力をお願いします…」と言って願った。そのとき啓示が下

された。『あなたがたが主に援助を懇願した時を思いなさい。その時あなたがたに答えられた。「われは、次ぎ次ぎに来る一千の天使であなたがたを助けるであろう」』（戦利品章（アル・アンファール）第九節）預言者様はすぐに立ち上がり「吉報です、アブー・バクルよ！　あなた方にアッラーのお助けが届きました。ほら、それはジブリールです。砂丘の上で馬の手綱をとって、武器を身につけて合図を待っています」とおっしゃった。

『戦利品章』で知らされている通り、アッラーは天使たちにこうおっしゃった。『あなたの主が、天使たちに啓示された時を思いなさい。「われはあなたがたと一緒にいるのだ。信仰する者たちを堅固にせよ」われは不信者たちの心の中に、恐れを染み込ませよう。その時あなたがたはかれらの首を刎ね、またそれぞれの指先を打ち切れ。これは、かれらがアッラーとその使徒に反抗したためである。アッラーとその使徒に反抗する者には、本当にアッラーは痛烈な懲罰を下される。』（戦利品章（アル・アンファール）第一二、一三節）

この命令によって、ジブリール、ミカーイル、イスラーフィールの各天使が脇に千人の天使たちを従えて、預言者様のもとへと右や左にやって来た。

ジブリール様は頭に黄色いターバンを巻いていた。他の天使たちの頭には白いターバンがあった。ターバンの先端は後ろに垂らし、白い馬に乗っていた。世界の王である預言者様は教友たちに「天使たちは目印を持っています。あなた方も一つずつ目印を付けなさい」とおっしゃった。ズバイル・ビン・アウワームは頭に黄色の、アブー・ドゥジャーネは赤の布をターバンのように巻いた。アリー様は白い印を、ハムザ様は胸元にダチョウの羽をつけた。

天使たちが戦いに加わると、状況は一変した。教友たちが目の前の異教徒にまだ刀を振るう前に、相手の頭が体から離れ、地面に転がるのだった。預言者様の右や左に、前や後ろに、今まで見たことのない人々がいて、不信仰者たちと戦うのが見られた。

セヒル様はこのように語っている。「バドルの戦いのとき、私たち一人ひとりが不信仰者たちの頭に刀を打ち下ろそうとすると、刀がまだ相手に当たる前から、その首が体から離れ地面に転がるのを目にしました…」

アブー・ジャフルの死…

不信仰者たちの軍旗を持っていたアブー・アズィーズ・ビン・ウマイルが捕虜となった。しかし、司令官のアブー・ジャフルは、クライシュ軍を鼓舞するため、休むことなく詩を詠み、兵士たちの士気を高めようとしていた。若者のように攻撃をし「このような日のために母は私を生んだのである」と言って自慢し、若者たちを激励した。

不信仰者のウバイダ・ビン・サイードは、頭から足先まで鎧をつけていた。目だけが見える状態だった。馬上からあちこちに向って「我こそはアブー・ザートゥルケリシである。我こそはアブー・ザートゥルケリシである」つまり、私は大きな腹を持った者である、私は父なる腹である、と言って、自分なりに挑発していた。勇敢な戦士であるズバイル・ビン・アウワーム様が彼の隣に近づき、槍をちょうど目に当たるように狙った。そして「アッラーフ・アクバル！」と言って槍を突いた。的に当たった槍は、彼を馬から地面に落とした。ズバイル様が走ってそこへ行くと、ウバイダは死んでいた。足を彼の頬に押し当てて、力一杯引っ張っても槍を抜くのは困難なほどに曲がっていた。

ズバイル様がバドルの戦いで見せた勇敢さは大変なものであった。体中、怪我をしていないところはなかった。その状態について、息子のウルウェが「父は三つの大きな刀の打撃を受けていました。そのうちの一つは首でした。怪我は大変な痕を残していて、中に指が入るくらいのものでした」と語っている。

アブドゥルラハマーン・ビン・アウフ様も容赦なくクライシュ族と戦い、受けた怪我から流れる血を気にもとめず、前に立つ者を倒していった。アブドゥルラハマーン様は目にしたことをこのように語っている。

「あるとき、前には誰もいませんでした。左右を見るとアンサールの二人の若者を見かけました。そのうちの力があって戦いにも秀でた者と一緒に行こうといました。この若者のうちの一人が私をじっと見て、それから『叔父よ！　アブー・ジャフルとは知り合いですか？』と尋ねました。私は『はい。知っています』と言いました。『兄弟の息子よ！　アブー・ジャフルをどうするのですか？』と尋ねると『私が聞いた話では、彼は預言者様を罵ったそうです。アッラーに誓って、

彼を見たら殺すまで、あるいは自分が殺されるまで、決して彼から離れません』と言いました。この若者が興奮しながら語った、断固たる決心の言葉に驚かされました。

この若者たちのうちのもう一人も私をじっと見て、先ほどの若者が言ったのと同じことを言いました。そのとき、アブー・ジャフルを見ました。彼はクライシュの名士たちの間で、休むことなく前に後ろに回っていました。私は『若者たちよ！あちらこちらに慌てて走っているあれがアブー・ジャフルだ』と言うと、彼らはすぐに刀に手をかけ、アブー・ジャフルの方に向かって戦い始めました。その若者たちはアフラー・ハートゥンの息子たちのムアズとムアッベスの兄弟でした。

そのとき、勇敢な教友であるムアズ・ビン・アムルがアブー・ジャフルの脇に入り込む機会を見つけました。尾の長い馬に乗っていたアブー・ジャフルに攻撃を加え、全力でその足に刀を打ちつけました。アブー・ジャフルの足が地面に落ちました。すると、父親の加勢に来ていた、まだムスリムとはなっていなかったイクリムが、ムアズ・ビン・アムルと戦い始めました。

ちょうどそのとき、ムアズとムアッベスの兄弟が、鷹のように前に飛び出しました。前に立ちふさがる者たちを倒し、アブー・ジャフルのところに到達しました。そして、死んだと思われるまで打ちつけたのでした」

ムアズ・ビン・アムル様はイクリムとの戦いで、手や足に怪我を負っていた。神聖な手は手首から切られ、手は皮一枚でぶらぶらと揺れていた。戦いに集中していたムアズ・ビン・アムルは、その手を治療して巻く時間はなかった。切られた手が皮でぶら下がっていたときも勇敢に戦っていた。「アッラーフ・アクバル！」何と強い信仰心であろう。これは一見の価値ある光景だった。ムアズ様はしばらくこのような状態で戦った後、自分の動きが鈍ったように感じた。その理由は切られた手であった。それを直ちに足の下で踏みつけ、引っ張って切って捨てた…。

狂暴なイスラームの敵であるナウファル・ビン・フェリドは、クライシュ族での最も有名な勇者であった。休むことなく叫び続け、不信仰者の群れを鼓舞させようと躍起になっていた。預言者様は、彼のこの行動を見て「アッラーよ！

ナウファル・ビン・フェリドに対峙する私をお助けください。彼のことはあなたにお任せします」とおっしゃって祈念した。アッラーの獅子と言われたアリー様が不信仰者のナウファルを見ると、ただちに攻撃をかけた。力一杯刀を振り下ろすと、その脚は鎧で覆われていたにもかかわらず、二本とも切られたのであった。その後、刀を首に打ちつけると、首は胴から切り離された。

ビラール・ハベシ様を焼ける砂に横たえさせ、胸に巨大な岩を置いたウマイヤ・ビン・ハラフは、不信仰者たちの中にあって、最も狂暴な一人だった。預言者様に拷問をしようとあらゆる機会を狙っていたこの最大のイスラームの敵は、バドルの谷で不信仰者たちをまとめようと、そしてイスラームの光を消そうと骨を折っていた。彼のこの様子を見ていたビラール様は、刀を持って彼の前に立ち「不信仰者の頭のウマイヤ・ビン・ハラフよ！あなたが助かるのなら、私は救われない」と言って攻撃した。そして「アンサールの兄弟よ！手伝ってくれ。不信仰者の頭がここにいる！」と言うと、教友たちはウマイヤを取り囲んですぐに殺した。不信仰者たちの軍には、もはや司令官が残っていなかった。誰ひとり、どうしたらよいのか分からず、あちこちに逃げ惑っていた。こうして、不信仰者の砦が滅びたのだった。名誉ある教友たちは、追跡を続けた。不信仰者たちの一部を捕らえ、捕虜とした。預言者様の叔父であるアッバースも捕虜の中にいた。

勝利は信じる者たちとともに…

預言者様は名誉ある教友たちに、ナウファル・ビン・フェリドについて「何か情報はありますか?」と尋ねた。アリー様が前に出て「預言者様！私が彼を殺しました」と言った。この知らせに大変喜んだ愛すべき預言者様は「アッラーフ・アクバル！」と言って、タクビールを唱えた。そして「アッラーは、彼に対して行った私の願いを実行されたのです」とおっしゃった。

ウマイヤ・ビン・ハラフが殺されたということを聞いたときにも、大変喜び「アルハムドゥリッラー、アッラーに感謝します。アッラーが私をお認めくださいました。そして宗教を何よりも優先なさったのです」とおっしゃった。

預言者様はアブー・ジャフルについて「一体、アブー・ジャフルはどうなったのでしょうか？ 誰か行って確認してもらえますか？」とおっしゃって、遺体の中から彼を探すよう命じた。だが、探しても見当たらなかった。預言者様は「探すのです。彼に対して言うことがあります。もし彼のことが見ても分からなかったら、膝にある怪我の痕を見るのです。ある日、私と彼はアブドゥッラー・ビン・ジュドアンの晩餐にいました。二人ともまだ若かったのです。私は彼よりも少し大柄でした。窮屈にされたので彼を押し戻しました。すると彼は膝から転びました。膝の一つを怪我して、その痕が残っています」とおっしゃった。これを受けて、アブドゥッラー・ビン・イブニ・マスードが、アブー・ジャフルを探しに行った。そして、怪我をした状態のアブー・ジャフルを見つけた。「アブー・ジャフルか？」と聞き、足でその首を押しつけた。そして、あご髭を引っ張りながら「アッラーの敵よ！ アッラーがついにあなたを蔑み、おとしめたのだ」と言った。アブー・ジャフルは「なぜ私が蔑まれ、おとしまれるというのだ？ 羊飼いめ！ お前こそ、蔑まれ、おとしまれるのだ。お前は険しい場所へと登っていくのだ。今日勝利したのはどちら側か知らせろ」と言った。イブニ・マスード様は「勝利したのはアッラーと預言者様の側である」と返した。それからアブー・ジャフルの兜を頭から外し「アブー・ジャフルよ！ お前を殺す」と言った。アブー・ジャフルは「お前が自分の部族の仲間を殺すのは初めてのことではない。しかし、お前に殺されるのは、私にとっては無念なことだ。少なくとも、首を胸に近いところで切ったら、威厳ある頭に見えるだろう…」と言い、不信仰や虚栄心、そしてうぬぼれがどれほど強いかを示していた。イブニ・マスードはアブー・ジャフルの頭を自分の刀では切ることができなかったため、アブー・ジャフル自身の刀で首を切り落とし、武器や鎧、兜とともにその首を預言者様のところへ持っていき、そこへ置いたのだった。そして「両親をあなたに捧げます、預言者様！ これがアッラーの敵であるアブー・ジャフルの頭です」と言った。愛すべき預言者様は「アッラー以外に神はない」とおっしゃった。それから立ち上がり、教友たちとともにアブー・ジャフルの死体の近くへと行った。そこで「アッラーに感謝します。あなたを蔑み、おとしめた者です。アッラーの敵よ！ あなたはこの共同体に対するファラオでした」とおっしゃった。その後「アッラーよ！ 私への約束を実行していただきました」とおっしゃってアッラーに感謝をした。それから預言者様は教友たちの怪我を治療させた。殉教者の確定を行い、ムハージルからは六名、アンサールからは八名、計十四名が殉教者となった。全員の神聖な魂が天国へと昇っていった一方で、イスラームの光を消そうとした不信仰者たちからは七十名が戦死し、それと同じくらいの数の捕虜が捕らえられた。

預言者様は、勝利の吉報を届けるため、アブドゥッラー・ビン・レバーハとザイド・ビン・ハーリサをマディーナへ送った。

預言者様は、殉教者の葬儀の礼拝を行い、それぞれを埋葬した。

不信仰者たちの死体のうち、二十四体は枯れた井戸に、その他のものは集めて穴に入れ、その上をふさいだ。

万物の王は名誉ある教友たちとともに井戸の端に行き「井戸に投げ入れられた者たちよ！」とおっしゃった後、死んだ不信仰者たちの名前を、その父の名とともに数え上げて「ウトゥバ・ビン・ラビーア！ ウマイヤ・ビン・ハラフ！ アブー・ジャフル・ビン・ヒシャム！… あなた方は、預言者に敵対する何と悪い部族であったことでしょう。あなた方が私を否定したのに対し、他の人たちは私を認め、肯定したのです。あなた方が、私を我が町から、国から追い出したのに対し、他の人たちは私に扉を開けて胸を開いたのです。あなた方が私と戦いを行ったのに対し、他の人たちは私を手助けしたのです。アッラーが約束したものとは出会いましたか？ 私はアッラーが約束なさった勝利に巡り合いました」と語りかけた。

ウマル様は「預言者様！ 死骸となった者たちに話しているのですか？」と尋ねた。これに対して万物の王は「私を真の預言者として送ったアッラーに誓って言いますが、あなた方には、彼らのことが私より多く聞こえているわけではないのです。ただ、彼らは返事をしないだけなのです」とおっしゃった。

不信仰者たちは、戦場から命からがら急いで逃げるにあたって、持ってきたものすべてを残していった。すべてはムスリムたちの手に渡った。預言者様は、バドルの戦いに参加し、そして任務にあたったすべての教友たちと戦利品を分け合った。

その頃、吉報を知らせるために送られたアブドゥッラー・ビン・レバーハとザイド・ビン・ハーリサはマディーナに近づいていた。日曜日の午前中、アキキ地方まで来ると二人は別の道を辿った。アブドゥッラー・ビン・レバーハは一つの方向から、ザイド・ビン・ハーリサは別の方向からマディーナに入り、家々を歩き回って勝利を知らせた。預言者様の詩人であったアブドゥッラー・ビン・レバーハは

「アンサールの人々よ！吉報を送ろう
アッラーの預言者は生きている

不信仰者たちは殺され、捕虜となった
その中には名士たちもいる
ラビーアとハッジャージュのすべての息子たち
そしてバドルに死した、アブー・ジャフル・アムル・ビン・ヒシャム」

と詩を詠みながら、大声で勝利の吉報をもたらした。アースム・ビン・アディィ様が「イブニ・レバーハよ、本当ですか？」と尋ねると、アブドゥッラー・ビン・レバーハは「はい。アッラーに誓って本当です。インシャーアッラー、明日、預言者様が手を縛った捕虜たちとともにいらっしゃるに違いありません」と答えた。

一方その日、愛すべき預言者様の娘であるルカイヤ様が亡くなった。夫のウスマーン様は葬儀の礼拝を執り行った。この悲しみの中でもたらされた勝利の吉報は、彼をいくらか慰めたのだった。

預言者様は教友たちとともに、バドルの戦いにおける勝利を自分たちに恵んだアッラーに対して感謝の礼拝を行った後、マディーナに向け捕虜たちを連れて出発した。

事前に吉報を伝えたアブドゥッラー・ビン・レバーハとザイド・ビン・ハーリサは、バドルの戦いで起こったことや、誰が殉教者となったかについても話をした。マディーナに残っていた子供や女性、そして任務にあたっていた者たちは大変喜び、預言者様を迎えに出た。殉教者の中にはハーリス・ビン・スラーカもいた。ハーリス様の母親のレビーは、息子が貯水池で水を飲んでいるとき、敵の矢に当たって殉教者となったことを知った。レビーはこの知らせを聞いたとき「預言者様がいらっしゃらない限り、息子のためには泣きません。幸せとともにマディーナに戻られたとき、預言者様に尋ねます。もし息子が天国にいるのであれば、決して泣きますまい。もし、地獄にいるのであれば、目から涙の代わりに血を流して泣くでしょう」と言った。愛すべき預言者様が神聖な教友たちとともにマディーナに戻って来た。レビーは預言者様のところへ行き「両親をあなたに捧げます、預言者様！息子のハーリスに対する愛情をご存知のことと思います。殉教して天国に入ったのでしょうか？もしそうであれば我慢できます。その逆であれば、目から血の涙を流します」と言った。愛すべき預言者様は彼女に「ウンム・ハーリスよ！あなたの息子は一つだけではなく、いくつかの天国にいるのです。彼の居場所はフィルダウスという最上の天国です」とおっしゃって吉報をもたらした。これに対してレビーは「もう息子のためには泣きません」と言った。万物の王は入れ物に水を持ってくるよう命じた。彼女を憐れみ、神聖な手を水の中に浸してから出した。その水をハーリス様の母親と妹に飲ませた。さらにこの水を彼女たちの頭や顔につけた。その日以降、レビーと娘の顔は大変輝いていたのだった。そして長い寿命を全うすることとなった。

愛すべき預言者様は、マディーナに連れて来られた七十人の捕虜を教友たちの間で分配し、丁寧に扱うよう命じた。

捕虜の処遇については、アッラーからまだ啓示が下されていなかった。預言者様は教友たちと話し合い、捕虜たちを保釈金で解放することに決めた。捕虜一人ひとりの資産状況に応じて、保釈金の額が決められた。資産のない者の中で読み書きができる者は、マディーナの住民で読み書きのできない者に教えたら、マッカに戻ることができると決められた。捕虜たちの中には、預言者様の叔父であるアッバースもいた。預言者様は彼に「アッバースよ！ あなた自身のため、そして兄弟の息子ウカイル（アキール）・ビン・アブー・ターリブと、ナウファル・ビン・ハーリスのため、保釈金として銀貨を支払うのです。なぜなら、あなたは裕福だからです」とおっしゃった。アッバースは「預言者様！ 私はムスリムです。クライシュ族が私を無理やりバドルに連れて来たのです」と言った。預言者様は「あなたがムスリムであるかどうかは、アッラーがご存知です。本当のことを言っているのであれば、アッラーがあなたに間違いなく善行を与えるでしょう。しかし、あなたは表面上、私たちに敵対しています。そのため、解放されるためには銀貨を支払わないといけません」とおっしゃった。アッバースが「預言者様！ 私には戦利品として取られてしまった八百ディルハム以外の資産はありません」と言うと、預言者様は「アッバースよ！ あの金のことをなぜ言わないのですか？」とおっしゃった。彼は「どの金のことですか？」と尋ねた。すると、愛すべき預言者様は「あなたがマッカから出発する日、ハーリスの娘、あなたの妻のウンム・ル・ファードゥルに与えた金のことです。それらを与えるとき、あなた方のそばに他の者はいませんでした。あなたがウンム・ル・ファードゥルに『この旅では身に何が起きるか分からない。もし万が一のことがあって戻らなかったら、金のこの分があなたのものです。この分はアブドゥッラーのものです。そしてこの分がウバイドゥッラーのものです。この分がクサムのためです』と言っていた、あの金のことです」と答えるので、アッバースは目を丸くした。「誓って、私があの金を妻に渡したとき、そばに他の者はいませんでした。そのことをなぜ知っているのですか？」と聞くと、預言者様は「アッラーが知らせたのです」とおっしゃった。アッバースは「あなたがアッラーの預言者であること、そして真実を言っていることを認めます」と言い、信仰告白を行った。アッバースはムスリムとなると、預言者様はアッバース様にマッカでの任務を与えた。そこでのムスリムを守り、イスラームに敵対する者の情報を送るように命じたのだった。

バドルの戦いで敗北したクライシュ族には知らせを送り、保釈金により捕虜たちが解放されることを伝えた。しかし、ヒジュラ以前に預言者様に対してあまりにも多くの苦難や拷問を行っていたナーディル・ビン・ハーリスについては、その首が切られることとなった。また、もう一人、預言者様がカアバで礼拝をしていたとき、神聖な背中にラクダの胃袋を置いた不幸で低俗なウクバ・ビン・アブー・ムアイトも殺された。この狂暴なイスラームの敵の頭が胴体から切り離されると、預言者様はアッラーに感謝をした。そしてその隣に行き「アッラーに誓って、アッラーや預言者、そしてクルアーンを否定し、預言者にさまざまな拷問を行った、あなた方のような悪人を、私は他に知りません」とおっしゃった。

捕虜たちは、保釈金によって解放されるまで教友たちのもとにいた。教友たち全員が、捕虜を丁重に扱い、自分たちの食事を彼らと分け合った。ムスアブ・ビン・ウマイルの兄弟のアブー・アズィーズも捕虜の一人だった。彼はこう語っている。「私もマディーナ出身のあるムスリムの家で捕虜となっていました。私に対して大変丁重に接し、朝と夜、彼らが食べる分のパンを私にくれて、自分たちはナツメヤシの実だけで過ごしていました。彼らはパンを手にしたら、必ずそれを私に持ってきたのでした。恥ずかしく、パンをお返ししました。しかし彼はそのパンを再び私にくれたのでした」

また、捕虜となったイェズィードという名のクライシュ族の一人もこのように語っている。「ムスリムたちは、バドルからマディーナに戻るとき、私たち捕虜を動物に乗せ、自分たちは徒歩でした」

不信仰者たちがバドルで敗北し、ばらばらになって戦いから逃げたことは、マッカでは大変な驚きとなっていた。全く考えたこともなく、思ってもみなかった結果となったのだった。最初、アブー・ラハブやその他の不信仰者たちは、知らせをもたらした者の言葉を信じなかった。戦いから逃れたアブー・スフヤーンがマッカに戻ると、ただちに彼を呼び寄せた。アブー・ラハブは彼に「兄弟の息子よ！ 説明するのだ。どうなったのだ？」と尋ねた。アブー・スフヤー

ンはその場で座り込み、たくさんの人は立ったまま話を聞いた。アブー・スフヤーンはこう話した。

「ムスリムと向かい合ったとき、まるで手足が縛られたようになりました。しかし彼らは自由に動いていました。私たちの一部を殺し、一部を捕虜としました。誓って私は、私たちの側にいる誰のことも、咎めたり非難したりはしません。なぜなら、あのとき地面と空の間に、白い雲に乗って白い服を着た者たちと出会ったからです。彼らに耐えられる者はなく、向かっていける者もいませんでした」

アッバースの奴隷のアブー・ラーフィーはイスラームの初めの頃からムスリムとなっていたが、不信仰者たちの虐待を恐れ、ムスリムであることを明らかにはしていなかった。その場には彼もいた。この出来事を静かに聞いていたアブー・ラーフィーはあまりの喜びに我を忘れ「アッラーに誓って、彼らは天使です」と口走ってしまった。アブー・ラハブは彼に激しく平手打ちをし、床に叩きつけた。その後も殴り続けた。その場にいたアッバース様の妻のウンム・ル・ファードゥルは耐えることができなかった。なぜならば、彼女も前からムスリムとなっていたためだった。ウンム・ル・ファードゥルは部屋にあった丸太の一つを取り「彼には他に守る者がなく、一人きりとでも思ったのですか？」と言って、アブー・ラハブに丸太を強く叩きつけた。アブー・ラハブの頭は割れた。軽蔑され、惨めな状態で帰っていった。それから七日後、彼には、当時、黒赤と言われた熱病が与えられ、その病気によって死んだ。息子たちは二晩か三晩の間、埋葬もせず放置していた。やがて、異臭が漂い始めた。皆はアブー・ラハブがかかった伝染病から逃げるようにして遠ざかり、嫌悪していた。クライシュ族の一人がアブー・ラハブの息子たちに「あなた方にはがっかりです。恥ずかしくないのですか。異臭を放つまで父親を家に放っておくとは。せめて彼をどこかに埋葬しなさい」と言った。息子たちはその人に対して「私たちは父親のかかった病気にうつるのが怖いのです」と返事をした。その人は彼らに「あなた方は先に行きなさい。私も行きましょう。あなた方を手伝います」と言った。その後、三人は一緒に遺体を持ってへんぴな場所に置いた。体が見えなくなるまで、上に石を投げ入れた。アブー・ラハブはこうして永遠の罰と火の中にその居場所を見つけ、真っ暗な地獄である穴、つまり墓に入ったのだった。

バドルの戦いで捕虜となったクライシュ族の中に、ワリード・ビン・ワリードもいた。彼のことはアブドゥッラー・ビン・ジャフシが捕虜としていた。ワリードの兄弟であるヒシャムと、まだムスリムとなっていなかったハーリド・ビン・ワリードがマディーナにやって来た。だが、アブドゥッラー・ビン・ジャフシは保釈金、つまり解放のための金額を受け取らなければ釈放しようとは考えていなかった。兄弟のハーリドが支払いに同意しても、異母兄弟のヒシャムは同意しなかった。そこで、預言者様が彼らの父親の武器や装備などで代用することを提案した。これにはヒシャムが同意したものの、今度はハーリドが反対した。しかし結局、父親の百ディナール相当の刀や鎧、兜を保釈金の代わりとして支払った。ワリードは解放され、マッカへと向かった。しかし、ワリードはマッカへ向かう途中で、マディーナから四マイルほどの距離にあるズル・クレイフェという場所で彼らと別れ、預言者様のもとへと戻って信仰に入り、教友たちの仲間となった。ムスリムとなってからしばらくして、兄弟のいるマッカへと向かった。すると兄弟のハーリド・ビン・ワリードが「もしムスリムとなるのだったら、解放するための保釈金を払わなければよかった。父親から残された遺品を手放してしまったではありませんか。なぜこのようなことをしたのですか」と詰問した。これに対してワリードは「クライシュ族から『奴隷の状態に耐えられなくて、ムハンマド（アライヒッサラーム）に従ったのだ』と言われることを心配したからです」と答えた。

この返事に怒った兄弟たちは彼をマンズン家でムスリムとなっていたイヤシ・ビン・アブー・ラビーアや、サラマ・ビン・ヒシャムのいた牢に閉じ込めた。ワリード・ビン・ワリードは信仰しているということだけで、何年間も獄中で過ごすことになった。イスラームの狂暴な敵である叔父のヒシャムをはじめ、不信仰者の親戚たちから多くの虐待や拷問を受けた。預言者様は不信仰者たちから虐待を受けている、イヤシ・ビン・アブー・ラビーア、サラマ・ビン・ヒシャム、そしてワリードのため「アッラーよ！ ワリード・ビン・ワリード、サラマ・ビン・ヒシャム、イヤシ・ビン・アブー・ラビーアを、そして弱く無力な他の信者たちを、不信仰者たちの手からお助けください。アッラーよ！ クライシュ族に対して一層重く、一層激しい罰をお与えください。彼らの年月を預言者ユースフの時代のようにしてくだ

さい」と祈った。ワリードは預言者様の願いの恵みにより、機会を見つけて縛られたところから逃げた。マディーナへと来て、愛すべき預言者様の前に上がった。愛すべき預言者様が、イヤシ・ビン・アブー・ラビーアとサラマ・ビン・ヒシャムの様子を聞くと、彼らは足を互いに縛られ、激しい虐待や拷問に苦悩していると知らせた。

万物の王は、彼らの状態に大変悲しみ、助ける方法を探した。誰が助けられるかと尋ねると、ワリードが何年間も拷問を受けていたにもかかわらず、大いなる勇気を持ち、そして愛情を込めて「預言者様！私が彼らを助け、あなたのもとに連れてきます」と返事をした。再びマッカへ戻ると、拷問を受けているムスリムたちに食事を運ぶ一人の女の後を追うことで彼らの居場所を見つけることができた。二人とも天井のない建物で捕らえられていた。ワリードは夜、命を懸け、最高の勇気をもって壁を降り、友のところへと向かった。信仰したというだけで、何の罪も犯していない迫害されたこの二人は、不信仰者たちによって岩に縛られ、アラビア半島の砂漠の灼熱の暑さの中で、さまざまな拷問を受けていた。ワリードはこの神聖な兄弟を助け、ラクダに乗せた。自分は素足のまま徒歩でマディーナへ、最も愛する預言者様のもとへ一秒でも早く行こうと出発した。彼を焼いていたのは、砂漠のひりひりする熱さではなく、預言者様に会いたいという愛情であった。

マディーナには、空腹と渇きの中、素足のまま三日間でやって来た。足の指は石のせいで怪我をしていた。ワリード・ビン・ワリードは血だらけのまま、愛すべき預言者様の前に上がった。

バドルの戦いに勝利したことは、ムスリムたちを大変に喜ばせていた。一方、不信仰者たちは大きな落胆に陥っていた。エチオピアの王・ネジャーシは、預言者様が勝利したことを聞くと、ただちに自分の国にいた教友たちのところへ出向き「アッラーに感謝します。アッラーが預言者様にバドルで勝利をもたらしました」と言って、吉報を伝えた。

アリー様とファーティマ様の結婚

ヒジュラ二年目の年だった。万物の王の娘のファーティマ様は十五歳となっていた。

ある日、ファーティマ様は手伝いのために預言者様の前に上がった。預言者様は娘たちが結婚する時期に来ていると考えた。その日以降、ファーティマ・トゥズ・ゼフラ様を多くの人が相手として求めた。預言者様はそれらを丁寧に断り「彼女のことはアッラーの命令に従います」とおっしゃっていた。

ある日、アブー・バクル様、ウマル様、そしてサアド・ビン・ムアズ様がモスクで座り「アリー様を除いて全員がファーティマ様を相手として求めていたが、その全員が断られました」と話していた。アブー・バクル・スィッディーク様は「恐らく、アリーに恵まれるのだろう。一緒に彼を訪ねに行き、このことを話してみましょう。もし、貧しいことを理由にしているのなら、手伝うのです」と言った。サアド様は「アブー・バクルよ！あなたはいつも善を行っています。私たちもあなたとともに友人として一緒に行きましょう」と言った。三人はモスクから出てアリー様の家に行った。アリー様はラクダを連れて出かけていた。アンサールの一人のナツメヤシの畑に水をまいていたのだった。彼らを見ると挨拶をした。アブー・バクル様は「アリーよ！あらゆる善において、あなたは先頭に立っています。預言者様の目からすると、他の人は巡り合わないほどの地位にあるのです。さて今、ファーティマ様を皆が求めています。しかし、誰もが断られているのです。恐らくあなたに巡り合うのだろうと考えています。なぜ動かないのですか？」と尋ねた。

アリー様はこれを聞くと神聖な目は涙で湿った。「アブー・バクルよ！私の心を一層揺り動かします。私ほど彼女を求める人はいないのです。しかし、手元のものがないので叶いません」と言った。アブー・バクルは「そのようには言わないでください。アッラーや預言者様から見れば、これほどの価値はないのです。それに、貧しいというのは理由にはなりません。行って求めるのです」と言った。

後にアリー様はこのように語っている。「預言者様の前へ恥ずかしがりながら、緊張しながら上がりました。預言者様は威厳や威光そのものでした。前に座りましたが、話すことはできませんでした。預言者様は『どうして来たのですか？ 何か必要なものがあるのですか？』とおっしゃいました。しかし、私は返事ができませんでした。『恐らくはファーティマを求めに来たのですね』とおっしゃったので、私は『はい』と言いました。（預言者様はファーティマ様に、アリー様が求めているとおっしゃったが、彼女は返事をしなかったという説もある）預言者様から『ファーティマに婚資として何を渡しますか？』と聞かれたので『私のもとには彼女に差し上げるものが何もありません』と答えました。すると『あなたに差し上げたフターミーの鎧はどうしたのですか？』と尋ねました。『それは手元にあります』と言うと『それを売って、そのお金を持ってきなさい。婚資はそれで充分です』とおっしゃいました」別に伝わるところによると、預言者様がアリー様に「何か持っているものはありますか？」と尋ねると「馬や鎧があります」と返事があったため、預言者様は「馬は後で必要となるでしょう。しかし、鎧を売りなさい」とおっしゃった。また別の話によると「アリーよ！ 行って自分のために家を借りなさい」ともおっしゃった。

アリー様は結婚するまで、預言者様と一緒に住んでいた。しかし預言者様の命令に従って、預言者モスクの近くで、アーイシャ様の家の向かいのハーリス・ビン・ヌーマンの家を借りた。鎧はウスマーン様に四百八十ディルハムで売った。ウスマーン様は鎧を買った後、贈物としてアリー様に渡した。

アリー様が鎧と婚資を持って預言者様のところに来ると、預言者様はウスマーン様のために多く祈念をし「ウスマーンは、天国で私の親友です」とおっしゃった。その後、ビラール・ハベシを呼んで婚資の一部を渡し「このお金で市場に行きなさい。少しバラ水を買い、余ったお金ではちみつを買って、モスクの近くできれいな入れ物に入れ、水と混ぜなさい。はちみつのシロップを作って、婚約式が終わったらそれを飲むことにしましょう。アンサールとムハージルの教友たちをモスクに招待するのです。ファーティマとアリーが結婚することを、人々に知らせてください」と命じた。

ビラール・ハベシは外に出て、アリー様とファーティマ様が婚約することになったことを人々に知らせた。教友たちは預言者モスクに集まり、中も外も一杯となった。預言者様は立ち上がって、次の説法を読んだ。「すべての感謝は専ら万物の主アッラーのものです。アッラーが与えた恵みに対して、人々は称賛するものであります。そして、アッラーの永遠の力や能力に対しては礼拝をされ、来世の罰や裁判は恐れられ、その判決や命令は地と天を支配するものであります。創造物をその力で創造し、公正な審判を行い、創造物をそれぞれに分け、人々にはイスラームや預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の名誉を与えたのはアッラーであります。

アッラーは私に、娘のファーティマをアリー・ビン・アブー・ターリブと結ぶよう命じました。今、あなた方を証人とします。（アッラーの命令により）四百ミスカル（一ミスカルは四・六五グラム）の銀の結納金によって、ファーティマをアリー・ビン・アブー・ターリブと婚約させました。アッラーが両人をともにさせ、幸福になさいますように。彼らの子孫を清廉であり慈悲ある鍵とし、また神意の源とし、ムハンマド（アライヒッサラーム）の共同体にとって信頼できる者としますように。私が言うことはこれだけです。アッラーが、私とあなた方のために、罪をお免じくださいますように」

アリー様も立ち上がり、次の短い話を行った。「…今、前にいらっしゃる預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に挨拶をします。神聖な娘のファーティマを四百ミスカルの銀の結納金によって、私と婚約させていただきました。私の宗教の友よ！ 間違いなく預言者様の言葉を聞き、その証人となりました。私もこれを同意します。そのとおり認めます。そして、アッラーが私たちの言葉の証人であり、私たちにとっての庇護者であります」

婚約が終わった後、預言者様は新鮮なナツメヤシを持って来させ「このナツメヤシを食べなさい」とおっしゃった。全員がそれを食べた。その後、ビラール様がはちみつのシロップを配り、教友たち全員が飲んで「バーレケッラーフ・フィ・クマ・ワ・アレイクマ・ワ・ジャマア・シェムレクマ」と願った。

ファーティマ様は婚約後、泣いていた。預言者様は彼女のところへ来て「ファーティマよ！ なぜ泣いているのです

か？アッラーに誓って、あなたを求めた中で最も博識で生まれついて性格が優しく、最も賢い、最初にムスリムとなった者と結婚をさせるのです」とおっしゃった。ファーティマ様は「父よ！結婚する女性は誰でも、結納金の金や銀で評価され、価値が決められてしまいます。私もこの結納金で評価されたら、父と他の人々との違いはどうなってしまうのでしょうか。あの世での審判の日、父は罪深い多くの信者たちにとりなしをなさいます。私も同じように信者の妻たちにとりなしをしたいのです。私の望みはそればかりです」と言った。

アッラーがファーティマ様のこの願いを受け入れることを知らせると、預言者様は「ファーティマよ！預言者の子供であることを証明しました」とおっしゃった。

アリー様は次のように語っている。「このことから一ヶ月が過ぎました。それ以来、結婚の件について話は出ませんでした。私も恥ずかしくて黙っていました。しかし、預言者様はときどき、私が一人でいるのを見かけると『あなたの妻は何と素晴らしい女性でしょうか。私からあなたに吉報をもたらします。彼女は世界中の女性たちの長なのです』とおっしゃっていました」一ヶ月後、アリー様の兄弟であるウカイル様が「アリーよ！この婚約を私たちは大変喜んでいます。ですが、私の望みはあなた方二人が互いにそばにいられるようになることです」と言った。アリー様は「私もそう望みます。しかし、それを言うには恥じらいがあるのです」と答えた。ウカイル様がアリー様の手をとって預言者様の家に行くと、預言者様の家の女奴隷のウンム・アイマンに出会った。状況を彼女に説明した。ウンム・アイマンは「この件では、あなた方がお出でになる必要はありません。私たちが預言者様の奥様方の意見をまとめ、あなた方にお知らせしましょう。なぜなら、この件では婦人たちの言うことを聞くべきだからです」と言った。ウンム・アイマンは、このことを預言者様の妻たちに伝えた。妻たちはアーイシャ様の部屋に集まった。ハディージャ様のことを思い出し「もし彼女が生きていたなら、私たちにはこのような心配はなかったことでしょう」と言うのだった。預言者様は泣いてこのようにおっしゃった。「ハディージャのような妻はどこにいるというのでしょう。人々が私を否定したとき、彼女は私を認め、全財産を私のために使ったのです。イスラームのために多大な貢献をしました。彼女

が生きていたとき、アッラーが私にこう伝えました。『ハディージャに吉報をもたらせます。天国で彼女のためにエメラルドで出来た宮殿が作られました』」

妻たちは預言者様にアリー様の望みについて話した。これを受けて預言者様は、ウンム・アイマンにアリー様を招くよう命じた。アリー様が来ると、その場にいる妻たちは立ち上がって帰っていった。アリー様は頭をうなだれて座っていた。預言者様は「アリーよ！妻をもらいたいのですか？」と尋ねた。

「はい、預言者様。両親をあなたに捧げます」と彼は言った。預言者様はアスマー・ビンティ・ウメイスに「ファーティマの家の準備をしに行きなさい」とおっしゃった。アスマーはファーティマ様が花嫁として行く家に向かった。一つのクッションは新しいなめし皮で、また別のクッションは継当てで、さらに別のクッションは草で編んだもので作り、それぞれの中にナツメヤシの繊維を入れた。預言者様は夜の礼拝の後、ファーティマ様の家に行き、用意されたものを見回した。預言者様はアリー様の持ってきた結納金の三分の二で食べ物や飾り、香水などを、残りの三分の一で着るものを買ってくるように命じ、こうして家の準備を整えた。ファーティマ様の嫁入り道具と家財道具は、以下のとおりであった。アスマー・ビンティ・ウメイスの作った三つのクッション、房のついた一枚の絨毯、中にナツメヤシの繊維が詰まった一つの枕、二台の粉ひき、水を運ぶ革袋一つ、一つの土製の壺、なめし皮でできた一つのカップ、一枚のタオル、一枚のスカート、一枚の羊の革、古くなったため毛がとれてしまった何色もの糸で織られたイエメンの絨毯、ナツメヤシの葉で編んだ一つの背のない椅子、イエメンで作られた何色かでできた二枚の服、一枚のベルベットの布団。この後、預言者様はアリー様に少しのお金を渡し、ナツメヤシと油を買うように言った。アリー様はこの後のことを次のように語っている。

「五ディルハムでナツメヤシを、四ディルハムで油を買いました。預言者様の前に持っていきました。すると革製の食事台が入用だと言われました。預言者様はナツメヤシ、小麦、油、そしてヨーグルトを神聖な手で混ぜ、一つの料理を作りました。そして『アリーよ！見かけた者全員を連れてきなさい』とおっしゃいました。私は外に出ると、た

くさんの人々を見かけました。全員を家に招待しました。中に入って『預言者様！人々は大勢います』と申し上げました。

世界の王、そして世界の誇りである預言者様は『彼らを十人ずつ中に入れ、食事をさせなさい』とお命じになり、そのようにしました。計算すると、男女あわせて七百人が食事をし、満腹になっていました」

アリー様とファーティマ様の婚礼の食事が供された後のことについて、ウンム・アイマンは次のように伝えている。預言者様はアリー様に「アリーよ！娘のファーティマは花嫁としてあなたの家に行きました。私も夕方の礼拝が終わったら、行って祈念を行います。私を待っていなさい」とおっしゃった。アリー様は家に来ると、部屋の隅に座った。ファーティマ様も部屋の反対の隅に座った。その後、預言者様が来て扉を叩いた。ウンム・アイマンが扉を開けた。預言者様は「兄弟はここにいますか？」とおっしゃった。ウンム・アイマンは「両親をあなたに捧げます、預言者様！あなたの兄弟とはどなたですか？」と尋ねた。預言者様が「アリー・ビン・アブー・ターリブです」と答えると、ウンム・アイマンは「自分の娘を兄弟と結婚させたのですか？」と聞いた。これに預言者様は「はい」とおっしゃった。ウンム・アイマンは預言者様が「兄弟はここにいますか？」と尋ねたため、結婚が合法でないのではないかという思いがよぎった。しかし、預言者様が「はい」とおっしゃったことで、結婚することを禁じられたのは、同じ母から生まれた兄弟の場合を指すことであるという意味が分かった。

その後、預言者様はウンム・アイマンに「アスマー・ビンティ・ウメイスはここにいますか？」と尋ねた。「はい」と答えると、預言者様は「預言者の娘の手伝いに来たのですか？」と聞いた。ウンム・アイマンが「はい」と答えると「善いことに巡り合いますように」とおっしゃった。

その後、一つの入れ物に水を持ってこさせ、神聖な手を浸した。さらに、水の中に少しのムスクを入れた。それからファーティマ様を呼んだ。ファーティマ様は恥ずかしがって、自分の服ばかり見つめていた。預言者様は水を少し取って、ファーティマ様の胸元や頭、背中に振りかけた。そして「アッラーフンマ・インニー・アイズハー・ビカ・ワ・ズッ

リエティハー・ミン・アッシャイターニル・ラジーム（アッラーよ、彼女と彼女の子孫が、アッラーから追い出され石を当てられた悪魔の悪事から護られるよう、あなたの保護を求めます、の意）」と願った。その後、アリー様にも同様のことをして「アッラーフンマ・バーリク・フィヒマ・ワ・バーリク・アレイヒマ・ワ・バーリク・ラフーマ・フィ・ネスリヒマー」と言って祈念を行った。さらに、クルアーンの『純正章（アル・イフラース）』と『黎明章（アル・ファラク）』、『人々章（アン・ナース）』を詠んでから「アッラーの名前と恵みにより、妻のところへ行きなさい」とおっしゃった。その後、神聖な手で扉の二つの端を引き、恵みを願いながらそこから離れた。

アリー様はこう語っている。「結婚の後、四日が過ぎ、預言者様が私たちの家にいらっしゃいました。心を動かす奥深い考えのもとに、私たちに忠告を与えました。『アリーよ！水を持って来なさい』とお命じになり、私は立ち上がって水を持ってきました。一つのクルアーンの章を詠んでから『この水を少し飲み、少しを残しておきなさい』とおっしゃいました。その通りにしました。残った水は頭や胸にかけました。預言者様は再び『水を持ってきなさい』とおっしゃいました。再び水を持ってきました。私にした通り、ファーティマにも同じことをしました。その後、私を外に出しました」

彼が外に出た後、預言者様は娘にアリー様について尋ねた。ファーティマ様は「父よ！彼にはあらゆる円熟した品格が備わっています。しかし、何人かのクライシュ族の夫人たちが私に『あなたの夫は貧乏だ』と言うのです」と言うと、預言者様はこうおっしゃった。「娘よ、あなたの父や、あなたの夫は貧乏ではないのです。この地上と天空すべての財物や秘宝が与えられました。しかし、私はそれを受け入れなかったのです。アッラーからみて価値のあるものを選んだからです。娘よ！もし私が知っていることをあなたが知っていたなら、あなたから見てこの世は軽蔑され、価値のないものであったことでしょう。アッラーの真実のため、あなたの夫は教友たちの先頭に立っています。イスラームにおける偉大な人物であり、最も深い知識を有しているのです。娘よ！アッラーは私の家族から二人を選びました。一人はあなたの父、もう一人はあなたの夫です。決して彼に反抗をせず、そして命令に反対をしないようにするのです」

世界の誇りである預言者様は娘に注意を与えた後、アリー様を中へ呼んだ。彼にもファーティマのことをお願いした。「アリーよ！ ファーティマを思いやってください。彼女は私の一部です。彼女に親切に接してください。もし彼女を悲しませたら、私を悲しませることになります」とおっしゃった。そして二人のことをアッラーに委ねた。それから立ち上がって行こうとしたとき、ファーティマ様が「預言者様！ 家の中の手伝いは私が行います。外の手伝いはアリーが行います。私に一人の女奴隷をいただければ、いくつかの仕事を手伝ってくれるでしょう。私も満足しましょう」と言った。預言者様はこうおっしゃった。「ファーティマよ！ あなたには手伝いの者より、もっと良いものを与えましょうか、それとも手伝いの者を与えましょうか？」

ファーティマ様は「手伝いの者よりも良いものをお願いします」と言った。預言者様は「毎晩、寝るときに三十三回、スブハーナッラー、三十三回、アルハムドゥリッラー、三十三回、アッラーフ・アクバル、そして一回、ラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワハデフー・ラー・シェリーケ・レフ。レフル・ムルク・ワ・レフル・ハムドゥ・ワ・フワ・アラー・クッリ・シェイイン・カディールと言いなさい。あわせて百の言葉です。審判の日、千の善行を与えられましょう。審判の際に善が重くなります」とおっしゃった。その後、預言者様は娘の家から出て、自分の幸福なる家に戻った。

アリー様とファーティマ様の婚約はヒジュラから五ヶ月後、結婚はバドルの戦いの後に行われた。

カアブ・ビン・アシュラフの死

バドルの戦いの勝利にともない、マディーナにいたユダヤ人や偶像崇拝の不信仰者たちの心は恐怖に陥っていた。一部のユダヤ人たちは良心を取り戻し「その特徴を私たちの啓典でも読んでいた人物というのは、必ずやあの方のことでしょう。もはや彼に敵対しているのは不可能です。なぜなら彼は、いつも勝利を手にするであろうから」と言ってムスリムとなった。しかし一部は「ムハンマド（アライヒッサラーム）は戦いというものを知らないクライシュ族と

戦いました。だから勝利したのです。もし我々と戦っていたなら、どのように戦いというものを行うのか、どのようにして勝利というものを得るのか、我々は彼に見せていたことだろうに」と言っていたのだった。

カアブ・ビン・アシュラフという名のあるユダヤ人は、バドルの戦いでイスラーム軍が勝利したことを聞くと、ムスリムたちに対する敵意からマッカへと向かった。マッカの不信仰者たちを集め、マディーナを攻撃させるために詩を読み、彼らを鼓舞し扇動した。そして、預言者様と戦うことで彼らと約束した。さらに、愛すべき預言者様の暗殺計画まで立てたのだった。アッラーはこの状況を預言者様に知らせ、このような啓示を下された。『〈啓典の一部を与えられていながらも不届きなことをする〉これらの者は、アッラーの怒りを被むる者である。アッラーが見はなした者を誰一人援助しはしないであろう。』（婦人章（アン・ニサーア）第五二節）

これを受けて預言者様は、名誉ある教友たちに「誰がカアブ・ビン・アシュラフを殺しますか？ なぜなら彼は、アッラーと預言者に苦悩をもたらしたからです」とおっしゃった。ムハンマド・ビン・メスレメが「預言者様！ お望みであれば、私が彼を殺します」と言った。預言者様はこれに「はい、望みます」と応えた。ムハンマド・ビン・メスレメは、何日間かこの任務のために留まって、計画を練った。友人たちのうち、アブー・ナーイレ、アッバース・ビン・ビシュル、ハーリス・ビン・アウス、アブー・アブス・イブニ・ジェビルのもとへと行き、この問題について彼らと相談した。皆が賛同し「一緒に殺そう」と言った。皆で預言者様のところへとやって来た。「預言者様！ あなたのお許しがあればですが、私たちが彼らと話す際、あなたのことについて、カアブが気に入るようなことを言ってもよいでしょうか？」と尋ねた。預言者様は、彼らに対し思うように話す許しを与えた。

こうして、ムハンマド・ビン・メスレメは友人たちとともに、カアブ・ビン・アシュラフのもとへと向かった。そして「あのムハンマド（アライヒッサラーム）は、我々から施しを要求しました。我々にたくさんの税を要求しています。そのため、あなたからお借りしようと来たのです」と言った。カアブは喜んで、ムハンマド・ビン・メスレメが自分と同じように考えていると思い込み「彼はあなたをもっとうんざりさせることになるだろう」と言った。ムハンマド・ビン・

メスレメは「仕方がありません。彼に従うことにしてしまったのです。従い続けましょう。見てみましょう、今後はどうなるのでしょうか？ さて、私たちにいくらかのナツメヤシを貸してください」と言った。カアブは「はい、貸しましょう。ですが、あなた方は私に何か担保を渡すのです！」と言った。ムハンマド・ビン・メスレメと友人たちは「何がお望みですか」と聞いた。カアブは「奥さん方を担保としてお預かりしたいのです」と言うので、彼らは同意しなかった。カアブは「では息子さん方を担保としていただきます」と言った。「息子たちも担保として差し出すことはできません。ムスリムたちの間で、一、二頭のラクダに乗せたナツメヤシに対して、妻子を担保としたと話が広まれば、我々にとって忘れることのできない不名誉となりましょう。しかし、武器や鎧なら担保としてお預けできます」と言った。カアブはこの申し出を認めた。彼らにいつ来たらよいかも知らせた。

　ムハンマド・ビン・メスレメが、ある晩カアブのもとへとやって来た。アブー・ナーイレも一緒だった。カアブは彼らを砦に呼んでいた。自分も彼らを出迎えるため、砦の下に降りた。カアブの妻が「このような時間にどこへ行くのですか？」と聞いた。カアブは「やって来たのは、ムハンマド・ビン・メスレメと、私の兄弟のアブー・ナーイレだ」と答えた。妻は「この話には気乗りがしません。彼からはどうも血の匂いがするのです」と言った。しかしカアブは「いや、彼らはムハンマド・ビン・メスレメと乳母兄弟のアブー・ナーイレなのだ。彼はとても良い青年だ。夜、刀の打ち合いに呼ばれたとしても、ためらわずに来てくれることだろう。そういう人だ」と話した。ムハンマド・ビン・メスレメを同行の二人、別の説では三人とともに砦に入れた。一緒にいたのはアブー・アッバース・ジェビール、ハーリス・ビン・アウス、アッバース・ビン・ビシュルであった。ムハンマド・ビン・メスレメ様は、友人たちに「カアブが来たら、彼に髪の匂いを嗅ぎたいと言うのです。頭を抱えて匂いを嗅いでください。あなた方がカアブの頭をしっかりつかんだのを見たら、刀で打ちましょう」と言った。カアブ・ビン・アシュラフはきれいな服を着て、良い匂いを放ちながら、彼らのところへとやって来た。イブニ・メスレメが「今までこんなに美しい香りを嗅いだことはありません」と言って、カアブの近くに寄った。カアブは「アラブの最も芳しい香りをする女たちが、私のところにいるのです」と言って自慢した。ムハンマド・ビン・メスレメが「頭の匂いを嗅いでもよいですか？」と聞くと、カアブはそれを許した。メスレメが彼の香りを嗅ぎ、友達にも嗅がせた。そしてもう一度、嗅ぎたいと言った。するとムハンマド・ビン・メスレメが頭をつかみ、友達に刀で切るよう合図をした。最初、刀が打ちつけられたとき、カアブが激しく叫んだが死には至らなかったため、ムハンマド・ビン・メスレメが短刀で彼を殺した。戦士たちはそこを離れ、マディーナに戻った。預言者様に吉報をもたらすと、預言者様はアッラーに感謝をし、戦士たちのために祈念を行ったのだった。

　カアブ・ビン・アシュラフという異教徒が死んだことに、ユダヤ教徒たちは恐怖に陥った。なぜならカアブのような名士が殺されるのであれば、自分たちが殺されるのは時間の問題だと考えたからだった。朝になると集まり、預言者様のところへとやって来た。前夜起こったことについて、預言者様に苦情を申し立てた。預言者様は「彼はいつも私たちに迷惑をかけ、私たちに対する詩を述べていました。もしあなた方の中からこのようなことをする人がいたら、その罰は刀であることを知っておくのです」とおっしゃった。この忠告に対してユダヤ人たちは、恐怖の中で預言者様と改めて誓約を結び直したのだった…

カイヌカー族のユダヤ人たち

　ある日、カイヌカー族のユダヤ人たちが、一人のムスリムの女性をからかおうとした。それを見ていた教友の一人が刀を抜いて、そのユダヤ人を殺した。ユダヤ人は集まり、その神聖な教友を殉教させた。この事件が預言者様に知らされた。預言者様は彼らをカイヌカーの市場に集め「ユダヤ人の一団よ！ アッラーがクライシュ族に与えた罰にまみえるのを恐れ、あなた方もムスリムとなりなさい。私がアッラーから送られた預言者であることは、あなた方はよく知っているはずです。このことも、アッラーが約束していたことも、あなた方はその啓典で読み、知っていたはずです」とおっしゃった。

このような慈悲があったにもかかわらず、誓約を破ったユダヤ人たちは世界の王に対し「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 戦いのことなど知らない民族を敗北させたからといって、自分のことを誤解しないように。誓って私たちは戦いに通じた精鋭なのです。私たちとの戦いが始まったら、あなたは私たちがどれほど勇敢であるのか知ることとなるでしょう…」と言って挑発した。

こうして、彼らは以前に結んだ誓約を破り、ムスリムたちに挑戦することを明白にした。すると、ジブリール様が来て、次の啓示を伝えた。『また人々の中あなたに対し裏切る恐れがあるならば、対等の条件で（盟約を）かれらに返せ。本当にアッラーは裏切る者を愛されない。』（戦利品章（アル・アンファール）第五八節）

また、別のクルアーンの章句では、このように伝えられている。『信仰を拒否する者に言ってやるがいい。「あなたがたは打ち負かされて、地獄に追い集められよう。何と悪い臥床であることよ」』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第十二節）

アッラーの愛する預言者様は、ただちに一つの軍隊を作り、カイヌカーのユダヤ人がいた砦に出発した。白い旗をハムザ様が背負い、マディーナでは代理人としてアブー・ルバーベが残った。神聖な軍隊はカイヌカー砦を包囲した。「私たちがどれほど勇敢な戦士であるか」と言っていたユダヤ人たちは抵抗するどころか、砦から一本の矢でさえ射る勇気がなかった。預言者様は出入り口をおさえた。一人も外に出ることはできなかった。このような状態が十五日間続いた。ユダヤ人は恐怖にさらされ、降伏した。全員が殺されるところだったが、世界に恵みとして送られた預言者様は同情をし、カイヌカーのユダヤ人がシャームへ逃れる許可を与えた。こうして、彼らはマディーナから追放された。

愛すべき預言者様はマディーナで、ユダヤ人やアブドゥッラー・ビン・ウベイのようなムスリムに見せかける偽信者、さらには不信仰者たちと戦っていた。一方、マディーナの郊外では、不信仰者たちの部族をイスラームに宣教し、ムスリムとなる名誉に与るよう努力していた。セビック、ガタファン、カルデ、バハラーン…などの戦いは、すべてバドルの戦いの後に行われたものである。

この間、喜捨が義務とされ、施しを与えること、祭りの礼拝を行うこと、動物による犠牲の命令が下された。預言者様は、娘のウンム・クルスームをウスマーン様と結婚させた。また、預言者様はザイナブ・ビンティ・ジャフシ、さらにウマル様の娘であるハフサ様と結婚した。また、アリー様には息子のハサン様が生まれた。

ウフドの戦い

マッカの不信仰者たちは、バドルの戦いで味わった敗北からは何も学ばず、また、その敗北感を忘れることもなかった。クライシュ族の名士の多くは先の戦争で死んでいた。他にもシャームとの交易の道がムスリムたちの手に渡っていたため、このことも彼らが激怒する理由となっていた。

　そのようなとき、アブー・スフヤーンが隊長をしていた交易キャラバンが、元金を倍にする利益をあげてマッカに戻ってきた。資金を出していた人たちの多くがバドルの戦いで死んでいたため、キャラバンの利益はダール・ウン・マディベという名の不信仰者たちの集会場に蓄えられることとなった。

　サフワン・ビン・ウマイヤ、イクリム・ビン・アブー・ジャフル、アブドゥッラー・ビン・ラビーアなど、父親や兄弟、妻、息子をバドルの戦いで亡くしていた人々は「ムスリムたちが我々の名士たちを殺したのです。我々を途方に暮れさせてしまいました。今こそ彼らに復讐するときです。キャラバンで得た利益で、軍隊の準備をしましょう。マディーナに攻撃をして復讐をするのです」とアブー・スフヤーンに申し出た。

　アブー・ジャフル、ウトゥバ、シャイバなどの狂暴な不信仰者たちは既に死んでいたため、不信仰者たちの長には、まだムスリムとなっていなかったアブー・スフヤーンがついた。シャームの交易では十万個もの金を得ていた。この半分が元金で、残り半分が利益であった。元金は資金提供者に配られ、利益は二つに分けて、半分を武器、残りの半分で兵士を集めた。他に詩人や演説家にも金を与えた。演説家や詩人は人々を鼓舞させ、戦争に参加するよう詩や挽歌を読み、これに女たちがダルブッカや小さい太鼓を叩いて加わっていた。ムスリムたちをマディーナから追い出して愛すべき預言者様を亡き者にし、イスラームを消滅させることを目的としていた不信仰者たちは、近隣の部族たちを周って兵士を集めていった。

　ついに、マッカでは三千人の強大な軍隊の準備が整った。その中の七百人が鎧をつけ、二百人が騎馬で、三千頭の

ラクダもいた。楽隊や女たちも加わっていたこの軍隊の司令はアブー・スフヤーンが行った。妻のヒンドが女性たちに司令を行い、不信仰者たちが戦争に加わるように鼓舞していた。というのも、彼女はバドルの戦いで、父親や二人の兄弟を亡くしていたからであった。その傷を忘れることはできず、戦争に参加したがらない人々に対して「バドルの戦いを思い出すのです。妻や子供たちに会うため、バドルの戦いから逃げたでしょう!…　この戦いから逃げようとするのなら、その前に私たちが立ちはだかります…」と言って彼らの口を閉じさせていた。このようにして不信仰者たちを扇動し、彼らが全力で戦争に参加するよう激励していた。

　不信仰者のジュベイル・ビン・ムトゥイムは、腕が立ち、大変熟練した槍の名手であるワシーという名の奴隷を持っていた。狙った的に当てる名人であった。ヒンドの父親であるウトゥバと、ジュベイルの叔父であるトゥアイマは、バドルの戦いでハムザ様に殺されていたため、彼に対して恐るべき復讐心に燃えていた。ジュベイルは奴隷のワシーに「もしお前がハムザを殺したら、お前を解放し、自由にしよう」と言っていた。ヒンドも「もし彼を殺したら、お前にたくさんの金や宝石をあげましょう」と言って、約束をした。

　すべての準備を整えたクライシュの軍は旗を開き、一つはタルハ・ビン・アブー・タルハ、もう一つをエハービシュ族の一人に、もう一つをウベフの息子のスフヤーンに渡した。

　マッカでは準備が整った。アッバース様は、不信仰者たちが三千人の軍を編成したこと、そのうちの七百は鎧をつけ、二百は騎馬であること、また、三千頭のラクダや数えきれないほどの武器が用意されていて、彼らが出発しようとしていることを伝え、そして、これに対して警戒するよう求める手紙を、ある信頼できる人に託してマディーナへと送った。

　これに対して預言者様は状況を把握するために、何人かに任務を命じた。彼らはマッカに向かって出発した。途中で不信仰者たちの軍がやって来るという情報を得て、調査を行った。短期間で任務を終わらせ、ただちにマディーナに戻った。見たことや手に入れた情報は、事前に送られてきていた手紙と一致していた。万物の王はすぐに準備に取

りかかった。あわせて急襲を受けないよう、マディーナの周りには当番を配置し、警戒にあたった。教友たちは短期間で集まって準備を整えた。家に残る者とは別れを告げ、暇乞いをした。そして預言者様の周りに集まった。
その日は金曜日だった。預言者様は教友たちと金曜の礼拝を行った。説法の際には、アッラーの宗教を広げるための聖戦やアッラーの道における戦いの重要性について話をした。これらのために命を落とす者は殉教者となり、天国に行くという吉報をもたらした。また、敵の前で奮闘する者や、苦難に耐え忍ぶ者にはアッラーからの助けが来ると知らせた。

預言者様は教友たちと、戦争をどこで行うべきか話し合い、また、前日の夜に見た夢についても語り、こうおっしゃった。「夢では自分が丈夫な鎧の中にいるのを見ました。刀のズルフィカルの口から、一つの割れ目が開き、首を切られた一頭の牛と、その後ろから一頭の雄羊が連れて来られるのを見ました」これを聞いた教友たちが「預言者様！その夢をどう解釈しますか?」と尋ねると、預言者様は「丈夫な鎧を着ることは、マディーナにいるようにとの印です。マディーナにいるのです。刀の口に出来た割れ目は、ある損害を受ける印です。首を切られた牛は、教友たちの何人かが殉教する印です。その後ろから連れて来られた雄羊は、相手軍の団結の印です。インシャーアッラー、それらをアッラーが殺します」とおっしゃった。

別の説によると「夢では刀を地面にぶつけました。刀の口が壊れました。これはウフドの戦いで、教友たちの何人かが殉教する印です。刀を再び地面にぶつけました。元通り平らに戻りました。それはアッラーからは勝利を得て、信者たちが集まるという印です」とおっしゃったと言われている。

預言者様は啓示として自分に知らされないものについては、教友たちと話し合い、それに基づいて行動を決めていた。敵をどこで迎え撃つべきかについて、ある教友たちは「マディーナに残り、防衛戦を行おう」と言った。この提案は預言者様の考えと一致していた。アブー・バクル様やウマル様、さらにサアド・ビン・ムアズ様などの教友たちの名士も預言者様に賛成していた。

しかし、バドルの戦いに参加していなかった勇敢な若い教友たちは、バドルの戦いに参加していた教友たちが得ていた善行や、バドルの戦いで手に入れた殉教者の地位などについて預言者様から聞くたびに、その戦争に参加していなかったことを大変残念に思っていた。そのため、敵をマディーナの外で迎え撃ち、対面して戦いたいと考えていた。ハムザ様やヌマン・ビン・マーリキー、サアド・ビン・ウバイダも彼らと同じ考えだった。このとき、ハイセメ様が許しを得てこのように発言した。「預言者様！クライシュ族の不信仰者たちは、いろいろなアラブ人から軍を編成していました。ラクダや馬に乗り、私たちの土地に足を踏み入れています。防衛戦となったら、私たちの家や城を取り囲み、やがて去っていくでしょう。しかし、後でたくさんの中傷を行うことと思います。この状況は彼らに勇気を与えてしまうこととなり、再び攻撃をすることにもつながるでしょう。今、彼らの前に出なかったら、他のアラブ人たちも私たちに目をつけることになるかもしれません。アッラーが私たちに、不信仰者たちに対して勝利を与えてくださることを願います。

もし、そうでなかったとしても、殉教者の地位を得ることになります。バドルの戦いで私はその地位を手に入れることはありませんでした。私はそれを大変熱望しています。息子がバドルの戦いに参加したいと言ったとき、私とくじ引きを行いました。彼は私より運が良かったようです。彼は殉教者となりました。預言者様！殉教者となることを非常に熱望しています。昨晩、夢で息子を美しい姿で見ました。天国の庭や川の間を歩き回り、私に『天国の住民に加わってください。私はアッラーが私に約束していたものを手に入れたのです』と言っていました。預言者様よ！誓って、私は今朝早く、息子と天国で友人となれるよう祈りました。もう十分に年も取りました。アッラーに巡り合う以外に望みはありません。

命をあなたに捧げます、預言者様！殉教者となり、天国で息子と友となる名誉に与るため、アッラーに願ってください」このように言って、預言者様に懇願したのだった。預言者様は彼のこの願いを聞き入れ、殉教者となるよう祈念した。

大勢がこのような考えであることを知った愛すべき預言者様は、敵をマディーナの外で迎え撃つことに決定した。その後「教友たちよ！ 忍耐し我慢すれば、今回もアッラーがあなた方を手伝います。私たちに与えられた任務は、熱意をもって努力することなのです」とおっしゃった。

万物の王は午後の礼拝を行い、幸福なる神聖な家へと戻った。後ろからはアブー・バクル様とウマル様が許しを得て中へと入った。預言者様のターバンを巻いたり、鎧をつけたりする手伝いをした。預言者様はサーベルを身に付け、盾を背中に乗せた。

この間、外では教友たちが集まり、預言者様を待っていた。マディーナに残って防衛戦をしようと考えていた人たちは、他の人たちに対して「預言者様はマディーナの外に出るという意見ではありませんでした。あなた方の言葉に従ってこれを受け入れたのです。しかし預言者様は命令をアッラーから受ける方です。あなた方はこのことを預言者様に任せるべきでした。彼の命じたとおりにしましょう」と言っていた。他の人々も、自分たちが行ったことを後悔し「預言者様に反対しないようにしよう」と言って、先の意見を取り消そうとした。愛すべき預言者様が家から出るとそばへ行き「私たちの命をあなたに捧げます、預言者様！ 預言者様が行いたいようにしてください。マディーナに残りたいのであれば残りましょう。私たちがあなたの命令に反対したことに、アッラーのお許しを求めます」と言って謝った。預言者様は「預言者は戦いが終わらない限り鎧は外しません。アッラーが預言者と敵との間で判決を下すまで。あなた方に対しての忠告は、私の命じたことを行うことです。アッラーの名前を念じて忍耐すれば、アッラーがあなた方を手助けするでしょう」とおっしゃった。

この間、アムル・ビン・ジェムフ様は家で四人の息子に「息子たちよ！ 私をこの戦争に連れていくのだ」と言っていた。それに対して息子たちは「あなたの足は不自由なので、アッラーがあなたの弁解を受け入れてくださいます。預言者様はあなたがこの戦争に行くことを許可しませんでした。あなたには聖戦に出る義務はありません。あなたの代わりに私たちが行きます」と言って父親を説得しようとした。しかし、アムル様は「お前たちにはがっかりだ。バドルの戦いのときにもこう言って、私が天国に行くことを引きとめたのです。今回もそうしようとしているのですか」と言うのだった。その後、愛すべき預言者様の前に上がり「命をあなたのために捧げます、預言者様！ 息子たちがいくつかの理由をつけて、私がこの戦いに行くのを引き止めようとしています。誓って、私はあなたとともにこの戦争に出て、天国に入る名誉に与りたいと願っています。預言者様よ！ この不自由な足では、私がアッラーのために戦って殉教者となっても、天国に行くことは許されないのですか？」と語ると、万物の王は「はい、許します」とおっしゃった。これに大変喜んだアムル・ビン・ジェムフ様は準備をして軍に参加した。

マディーナでは残った人々の礼拝の先導として、アブドゥッラー・ビン・ウンミ・メクトゥムが残った。

預言者たちの王は三つの旗を持った。その一つはハッバーブ・ビン・ムンズィレに、一つはウセイブ・ビン・フダイルに、一つはムスアブ・ビン・ウマイルに渡した。千人ほどの軍隊には、二頭の馬と鎧で武装した者が百人いた。

鎧をつけたサアド・ビン・ウバイダとサアド・ビン・ムアズ様を前方にし、右側にムハージル、左側にアンサールを従えて出発をした愛すべき預言者様は、金曜の午後の礼拝の後「アッラーフ・アクバル！」とタクビールをして、意気高く祭りに行くかのようにウフドへと出発した。

途中でユダヤ人から成る六百人の軍隊と出会った。彼らは偽信者の頭であるアブドゥッラー・ビン・ウベイ・ビン・セルールの同盟者たちであり、イスラーム軍に参加したいと言ってきた。預言者様が「彼らはムスリムとなっているのですか？」と尋ねると「いいえ、預言者様」と返事が返ってきた。預言者様は「彼らのところへ行って、帰るように伝えなさい。なぜなら、私たちは不信仰者に対するにあたり、異教徒の手伝いを受けないからです」とおっしゃった。

預言者様はマディーナとウフドの間にある、シェイ・ハインという場所に来た。ここで夜を明かすため野営をした。まだ太陽は沈んでいなかった。軍隊の中には、敵と戦って殉教者の地位を得たいと考えていた、まだ子供とも言える年頃の教友たちもいた。愛すべき預言者様は、この場所で軍隊を視察すると、十七人ほどの子供がいるのを見つけた。その中の一人ラーフィー・ビン・ハディージは爪先立ちになって背を高く見せようとしていた。ズハイル様が「預言

者様！　ラーフィーは矢を射るのが上手です」と言ったため、彼は軍に参加させることになった。このことを見ていたセムレ・ビン・ジュンドゥブが「私は取っ組み合いではラーフィーに勝ちます。ですから、私も戦争に参加したいのです」と言った。預言者様は微笑み、二人にレスリングをさせた。セムレがラーフィーに勝つと、彼も戦士たちの間に加わった。残りの子供たちはマディーナにいる人々を守るために帰された。

夕方や夜のアザーンをビラール・ハベシが燃え立つ声で詠んだ。愛すべき預言者様は皆と礼拝を行った後、ムハンマド・ビン・メスレメに五十人の部隊をつけて、朝まで当番をするよう命じた。教友たちは休憩に入った。その夜、預言者様の枕元で当番をする名誉に与ったのはゼクワン様だった。

このとき、敵の軍隊は、イスラームの軍隊がシェイ・ハインで休憩についたことを知り、イクリムは騎兵部隊を巡回させるよう命令した。まだムスリムとなってはいなかったイクリムは、その部隊とともにハッレという場所までイスラームの軍隊に近づいたが、イスラームの兵士の巡回に恐れて戻っていった。

夜が明けると、万物の王は教友たちを起こした。その後、ウフド山まで進軍し、ここで両軍が相対した。ビラール・ハベシ様が魂を揺さぶり心を溶かすような燃える声で朝の礼拝のアザーンを詠んだ。イスラームの兵士たちは武装したまま、愛すべき預言者様の後ろで礼拝を行い、祈念をした。万物の王は二重の鎧をつけ、神聖な頭には兜をかぶった。

このとき、イスラーム軍にいた偽信者の頭であるアブドゥッラー・ビン・ウベイが「我々はここに、自分たちを殺させるために来たとでもいうのか。それをなぜ初めから分からなかったのだ」と言って、三百人ほどの偽信者とともに、撤退してマディーナへ帰っていった。

信者たちや、心でつながっている者、首をこの道のために捧げた者、恐れを知らない者たちは、殉教者としての地位を得ることを熱望していた。その数は七百人ほどであった。全員が愛すべき預言者様のことを、最後の血の一滴になるまで守りきろうと約束した。

預言者様は戦士達を整列させた。

背後にはウフド山、前にはマディーナを望んで軍を配置した。右翼はウカーシェ・ビン・ミフサン、左翼はアブー・サラマ・ビン・アブドゥセレドを司令官として任命した。サアド・ビン・アブー・ワッカースと、アブー・ウバイダ・ビン・ジェッラーフが正面に立ち、射手部隊の長となった。鎧をつけた部隊の長にはズバイル・ビン・アウワームが、正面にいる鎧のない部隊の頭にはハムザ様があたった。ミクダード・ビン・アムルは後陣の部隊の任務についた。

イスラーム軍の左面には、アイネイン山があった。この山には細い峠があった。預言者様はこの峠にアブドゥッラー・ビン・ジュベイルを司令官とし、五十人の射手をつかせた。射手たちは峠に配置された。愛すべき預言者様は彼らのところへ来て、次のような絶対的な命令を行った。「私たちを後ろから守りなさい。ここにいて、決してここから離れてはいけません。敵が勝つのを見たとしても、あなた方に知らせが来ない限り、こちらから人をよこさない限り、持ち場を絶対離れてはなりません。敵が私たちを殺そうとしたり、あるいは殺すところを見たりしても、降りて来て私たちの援護をしないように。彼らから私たちを守ろうとしてはなりません。敵があなた方に向ってきたら、彼らの騎兵に弓矢を引きなさい。なぜなら、騎兵は来る矢に対しては防げないからです。アッラーよ！　彼らにこの命令を知らせたということを、どうぞお認めください」

この命令を何度も繰り返した預言者様は、さらに「鳥たちが私たちの遺体を奪い合うのを見たとしても、私があなた方に人を送らない限り、決して持ち場から離れないように。もし私たちが不信仰者たちに勝って、足下で彼らを踏みつけるのを見ていても、私があなた方に知らせを送らない限り、決して持ち場を離れてはなりません」とおっしゃった。その後、そこから離れ、軍の先頭に立った。

軍旗はムスアブ・ビン・ウマイルに渡された。ムスアブ様は手に旗を持ち、預言者様の前に立った。

このとき、結婚して間もないハンザラ様が、マディーナから急いでウフドに来て、戦士の隊列に合流した。

ウフドに三日前に来ていた不信仰者の軍では、アブー・スフヤーンが司令官となっていた。彼らはマディーナを後ろにする形で陣形をとった。右翼の騎兵ではハーリド・ビン・ワリードが、左翼の騎兵ではイクリムが司令官となった。

別に伝わるところでは、サフワン・ビン・ウマイヤも騎兵の司令官となったという。不信仰者たちの軍旗はタルハ・ビン・アブー・タルハが持っていた。両軍の力はかなり偏っていた。クライシュ軍の人数や武器、そして装備は、イスラーム軍の四倍ほどもあった。

クライシュ軍は騒々しい音やわめき声にあふれ、復讐の怒りに目を回していた。女たちはダルブッカや小太鼓などを叩き、歌を歌いながら軍を鼓舞し、崇めている像に手助けを求めていた。

一方、ムスリムの戦士側は、祈念をし「アッラーフ・アクバル!… アッラーフ・アクバル!…」と言ってタクビールを行っていた。また、イスラームの宗教を守り、そして広げるためアッラーの助力を求めていた。愛すべき預言者様も勇敢な教友たちに対し、彼らが聖戦で、そしてアッラーの道で戦うよう激励し、これによって得る善行について「教友たちよ! 数の少ない者が敵と戦うことは大変なことです。もし、あなた方が頑張って努力を重ねれば、アッラーはあなた方を喜びに導いてくれましょう。なぜなら、アッラーは自身に従う者とともにあるからです… アッラーがあなた方に約束した褒賞を求めるのです…」とおっしゃっていた。ウフドの戦いに際しては、次の啓示が下されている。

『アッラーと使徒に従いなさい。そうすればあなたがたは、慈悲を受けられるであろう。あなたがたの主の御赦しを得るため、競いなさい。天と地程の広い楽園に(入るために)。それは主を畏れる者のために、準備されている。順境においてもまた逆境にあっても、(主の贈物を施しに)使う者、怒りを押えて人々を寛容する者、本当にアッラーは、善い行いをなす者を愛でられる。』(イムラーン家章(アーリ・イムラーン)第一三二―一三四節)

『これらの者への報奨は、主からの寛大な御赦しと、川が下を流れる楽園であり、かれらはその中に永遠に住むであろう。奮闘努力する者への恩恵は何とよいことであろう。』(イムラーン家章(アーリ・イムラーン)第一三六節)

心は信仰で満たされ、目からは勇気の閃光がほとばしり、殉教者になる願望で一杯になっている教友たちはいても立ってもいられずに、一秒でも早く敵に襲いかかろうと命令を待っていた。バドルの戦いのように、アリー様が白の、ズバイル・ビン・アウワーム様が黄色の、アブー・ドゥジャーネ様が赤のターバンを巻いていた。ハムザ様はダチョウの羽から作られた飾りをつけた。

両軍は互いに近づいた。もはや緊張感は最高潮に達していた。一方ではアッラーの宗教を広げるために、最も近しい親戚と戦うことになっても決してひるまないイスラームの戦士たちが、もう一方では迷信的な道に固執したイスラームの敵がいて、もう少しすると、両軍の間で大きな戦いが始まろうとしていたのであった。

矢が届く距離まで近づくと、敵の列から一頭のラクダが出て、それに乗った鎧をつけた不信仰者が、ムスリムから一人の戦士を求めた。皆が自分のことを恐れていると思い込み、その要望を三度も繰り返した。これに対し、イスラーム軍からは、背が高く、黄色いターバンを巻いた、ある勇敢な兵士が歩いて前に出るのが見えた。彼は預言者様の叔母の息子であるズバイル・ビン・アウワームであった。イスラーム軍から「アッラーフ・アクバル!…」という叫び声が上がり、ズバイル様が勝利するよう願いをかけていた。ズバイル・ビン・アウワームが、その不信仰者に近づくやいなやラクダの上に飛び上がるのが見えた。ラクダの上で恐るべき争いが始まった。そのとき、愛すべき預言者様が「彼を地面に叩き落としなさい」とおっしゃるのが聞こえた。ズバイル様はこの命令を聞くと、ただちに相手を下に押しやった。さらに自分も飛び降りて、刀を相手の首に当てた。兜をつけた不信仰者の頭は、鎧をつけた胴体から切り離された。預言者様はズバイルのために祈念をした。

その後、不信仰者の軍旗を持っているタルハ・ビン・アブー・タルハが前に飛び出し「お前たちの中から、私の前に出られる者がいるのか?」と叫んだ。アッラーの獅子と言われたアリー様が前に出た。頭から足まで鎧に覆われていた不信仰者の旗手を、一撃で頭から顎まで切り捨てた。これを見ていた愛すべき預言者様は「アッラーフ・アクバル!… アッラーフ・アクバル!…」と言ってタクビールを行った。これに教友たちも加わると、タクビールの声は天空まで上がっていった。

不信仰者たちの旗が地面に落ちたのを見ると、今度はタルハの兄弟であるウスマーン・ビン・アブー・タルハが前に走り出た。軍旗を地面から持ち上げ、一人の対戦相手を求めた。彼に対してはハムザ様が前に出た。「アッラーよ!」

と言って、ウスマーンの肩に強烈な一撃を加えると、旗を持っていた腕がとれた。不信仰者は転び、死んでしまった。
さらに、不信仰者からはアブー・サアド・ビン・アブー・タルハが歩いて前に出た。彼も頭から足まで鎧をつけていた。不信仰者たちの旗を地面から持ち上げ、イスラーム軍に向って「我こそはクサムの父である。私の前に誰が出られるというのだ」と叫び始めた。預言者様は彼の前に再びアリー様を出した。アリー様はその不信仰者も殺し、軍旗を地面に落とさせてムスリムの列に戻った。

その後、大勢の不信仰者たちが順に前に出て、地面に落ちた軍旗を持ち上げ、イスラーム軍から対戦相手を求めた。しかし、毎回勇敢な教友たちがアッラーの許しを得て勝利をつかんだのだった。不信仰者の旗手が死ぬたびに、イスラーム軍からはタクビールの声が上がり、敵には大きな悲しみや絶望を与えたのだった。また、騒々しさを増していた不信仰者の女たちでさえ「お前たちにはがっかりだ」と言って自軍の兵士に侮辱を放つ一方「何を待っているのだ」と言って戦いを鼓舞していた。

両軍が待ち切れなくなっていたとき、愛すべき預言者様は「恐れは恥、進めば名誉と尊敬がある。恐れたとしても人間は運命から逃れられない」という二行連句が書かれている刀を見せ「この刀をもらいたい人はいますか?」とおっしゃった。それを聞いた教友たちの大勢がそれを求めて同時に手を挙げた。しかし、預言者様が「これに値する者は誰でしょうか?」と尋ねると、教友たちは黙って身を引いた。刀を熱心に求めていたズバイル・ビン・アウワームは「私がいただきます、預言者様!」と言った。しかし、預言者様は刀をズバイル様には差し上げなかった。アブー・バクルやウマル、アリーの求めも預言者様は断った。

アブー・ドゥジャーネが「預言者様! この刀に値することというのは何でしょうか?」と尋ねた。愛すべき預言者様が「これに値することとは、この刀が曲がってかしぐまで敵に打ちつけることです。これに値することとは、ムスリムを殺さないこと、これを持って異教徒の前から逃げないことです。そして、アッラーがあなたに勝利、あるいは殉教に巡り合わせるまで、アッラーのために戦うことです」と答えると、アブー・ドゥジャーネが「預言者様! 私は

これに値することを行うため、その義務を背負います」と言った。預言者様は手に持った刀を彼に渡した。アブー・ドゥジャーネは、大変な勇者であり、戦いにおいては抜け目がなかった。「戦いは計略である」というハディースに完全に従っていた。アブー・ドゥジャーネ様は刀を譲り受けると、戦場に向って堂々と、威厳や誇りにあふれた様子で、二行連句を詠みながら歩き出した。服と頭の赤いターバン以外、何も身につけてはいなかった。

アブー・ドゥジャーネ様のこの歩き方は教友たちの間で、あまり良い態度ではないと思われた。それに対して預言者様は「この歩き方は、戦い以外のところではアッラーの怒りを買う理由となるでしょう」と述べ「ただし、敵に対して堂々とした歩き方は適っています」と知らせた。これ以上は待っていられなかった不信仰者たちの側にいたハーリド・ビン・ワリードは、部下の一団と攻撃を始めた。愛すべき預言者様は、やはり待ち切れずにいた教友たちに攻撃の命令を出した。その瞬間「アッラーフ・アクバル!」の声が戦場にとどろいた。先頭にいたハムザ様は両手に持った刀で、鎧をつけていない一団の先頭で、異教徒に対して刀をふるい始めた。そのため、大きな怒りをもって来ていたハーリド・ビン・ワリードの部隊は直ちに引き返すこととなった。このとき、ハーリド・ビン・ワリードは峠を回り、後ろから攻撃しようとアイネインの丘へと来た。しかし、アブドゥッラー・ビン・ジュベイル様と部下の五十人が彼らを激しく弓で射て撃退した。

今や戦いは激しくなっていた。両軍は全力で戦っていた。一人の教友が少なくとも四人の不信仰者たちと戦いながら前進しようとしていた。ハムザ様は一方で「アッラーフ・アクバル!… アッラーフ・アクバル!…」と叫び声を上げ、もう一方で「我はアッラーの獅子である」と言って敵を打ち砕きながら進んでいた。サフワン・ビン・ウマイヤは周りにいる人々に「ハムザはどこだ、私に示すのだ」と言って、戦場で彼を探していた。そのとき、彼の目が二本の刀で戦っている人物をとらえた。そして「あの戦っている者は誰だ?」と聞いた。周りにいた人が「あなたが探していたハムザです」と答えた。すると、サフワンは「私は今日まで、自分の部族を殺すために攻撃したり、これほどに怒った目を他の人にしたことはなかった」と言った。

戦いは一段と激しさを増していたが、ムハージルのズバイル・ビン・アウワームは、先ほどの刀が自分に与えられなかったことに対して残念に思っていて「私は預言者様に刀を求めたが、アブー・ドゥジャーネに渡してしまわれた。しかし、私は預言者様の叔母のサフィーヤの息子だ。しかも、クライシュ族の人間だ。それに、先に私が求めたのだ。行って見てみよう。アブー・ドゥジャーネが私より何ができるというのか」と独り言を言った。そして、アブー・ドゥジャーネを探してみた。アブー・ドゥジャーネ様は「アッラーフ・アクバル！」とタクビールを行いながら、前に現れた不信仰者たちをだれかれ構わず殺していた。そのとき、不信仰者たちの中でも最も狂暴で体格がよく、体全体が鎧で覆われていて、ただ目しか見えていなかった者がアブー・ドゥジャーネとまみえた。まずその人がアブー・ドゥジャーネ様に攻撃をした。アブー・ドゥジャーネは彼の一撃を盾で防いだ。不信仰者の刀はアブー・ドゥジャーネの盾に突き刺さった。刀を引き抜こうとしたが、抜けなかった。今度はアブー・ドゥジャーネの番だった。一撃で相手を殺した。

　その後、アブー・ドゥジャーネは前に現れた不信仰者を倒しながら、山の麓でダルブッカを鳴らして不信仰者を鼓舞していた女たちのところまでやって来た。刀を振り上げたが、アブー・スフヤーンの妻のヒンドを殺すことはしなかった。これを見ていたズバイル・ビン・アウワームは「刀が誰に与えられるべきか、アッラーと預言者様は私よりご存知だったのだ」と納得したのだった。そして「アッラーに誓って、彼以上に戦い、争う人を私は見たことがない」と言った。

　ミクダード・ビン・アスワド、ズバイル・ビン・アウワーム、アリー様、ウマル様、タルハ・ビン・ウバイドゥッラー、ムスアブ・ビン・ウマイルといった人々は、それぞれが通ることのできない砦であった。預言者様は敵の近くで戦っていて、何度も何度も自ら攻撃するのを見た名誉ある教友たちは、いても立ってもいられなかった。預言者様に危害が及ぶのではないかと心配した教友たちは預言者様の周りに集まり、鎧で覆われた敵に、目を開けておく余裕すら与えなかった。このときアブドゥッラー・ビン・アムル様が殉教したのが見られた。これは、ウフドの戦いにおける初めての殉教だった。彼が殉教したのを見た友人たちは、まるでライオンのようになってアッラーのご満悦を得るため、敵の間へと飛び込んでいった。

　戦いが最も激しくなったとき、勇者の象徴であるアブドゥッラー・ビン・ジャフシ様と、弓の名手であるサアド・ビン・アブー・ワッカース様が出会った。お互いにいろいろなところに怪我を負っていた。サアド・ビン・アブー・ワッカース様はこう語っている。「ウフドの戦いで、戦況が激しくなっていたときのことでした。突然、アブドゥッラー・ビン・ジャフシが私のとなりに来て手を取り、ある岩のそばへと引っ張っていきました。そして私に『今ここで、あなたがアッラーに祈念を行い、私はそれに対して『アーミーン』と言いましょう。そうしたら私が祈念をするので、あなたも『アーミーン』と言うのです』と言いました。私は『分かりました』と答えました。私は『アッラーよ！　私に最も難しい敵と戦わせてください。彼らに容赦なく戦い、全員を殺します。勇敢な戦士として帰れますように』と願いました。私が行った願いに対して、彼は心の底から『アーミーン』と言いました。

　その後、彼が願いをかけはじめました。『アッラーよ！　私に最大の敵と出会わせ、彼らと容赦なく戦えますように。戦いにふさわしくありますように。全員を殺しますように。最後には誰かが私を殉教者としますように。そして唇や鼻、耳を切り落とされますように。血だらけになってあなたの前に行けますように。あなたが『アブドゥッラーよ！　唇や鼻、耳はどうしたのだ？』と尋ねたら『アッラーよ！　私はそれらでたくさんの過ちを犯し、ふさわしいように使いませんでした。あなたの前にお持ちするのが恥ずかしかったのです。愛すべき預言者様のいらしたある戦いで、埃や土にまみれ、あなたのところへと来たのです』と言えますように』と言いました。このような願いに私は心から『アーミーン』と言いたくはありませんでした。しかし、私は事前に約束していたため、心ならずも『アーミーン』と言いました。

　その後、刀を抜いて戦いを続けました。二人とも目の前に現れた者たちを殺して進みました。彼は最高に勇敢な様子で攻撃をし、敵の列を乱させていました。敵に何度も何度も攻撃をし、殉教者となるため、尽きることのない気持ちで攻撃を行ったのでした。『アッラーフ・アクバル！……アッラーフ・アクバル！……』と言いながら戦っていたとき、彼の刀が壊れてしまいました。そのとき愛すべき預言者様が彼に、ナツメヤシの枝を手渡し、戦いを続けるようおっしゃいました。この枝は奇跡によって刀となり、前に現れた者と戦い続けました。彼はたくさんの敵を殺しました。戦い

の終りの頃、アブル・ハーケムという名の不信仰者の投げた槍により、彼は望みどおり殉教者となりました。殉教者となると、異教徒たちが遺体にまで攻撃を加え、鼻や唇、耳を切ったのでした。体中が血だらけとなりました」

　ムスリムの隊列から、クズマンという戦士が刀の鞘を壊し「死ぬ方が逃げるよりましだ」と言って、不信仰者たちの間に刀一本で飛び込んでいった。彼はかなりの勇気や勇敢さを見せていた。一人で七、八人の異教徒を殺したが、最後に、負傷して地面に倒れた。教友たちは、彼のこの勇敢さに驚き、預言者様に知らせたが、預言者様は「彼は地獄に行きます」とおっしゃった。カターデ・ビン・ヌーマン様がクズマンのところへと行き「クズマンよ！　あなたの殉教を祝福します」と述べると、クズマンは「私は宗教のためではなく、クライシュ族がマディーナに来て私のナツメヤシを破壊しないようにと戦ったのだ」と言い、その後矢じりで手首の脈を切って自殺した。預言者様が「彼が地獄に行きます」とおっしゃっていた真意がこのことで明らかとなったのだった。

　戦いが始まってからというもの、愛すべき預言者様をはじめ、教友たち全員が全力で戦っていた。激しく攻撃して不信仰者たちの軍を後退させていた。やがて、石や木で作られた、ラート、ウッザー、ヒュベルとして崇められていた像にご利益と助力を求めていた不信仰者たちの一団は、ムスリムの戦士たちの勇敢さを前に、散り散りになって逃げ始めた。彼らを激励するために来ていた女たちは悲鳴を上げて、逃げだした軍に追いつこうとしていた。

　クライシュ族の不信仰者たちが戦場を捨て、手元に持ってきたものを残してマッカへと逃げ始めると、イスラーム軍は喜び、アッラーが自分たちに約束した勝利に巡り合ったことを感謝した。人数や武力が格段に上だったにもかかわらず、不信仰者たちはムスリムたちに対して粉砕されてしまったのだった。互いに我先にと逃げているところを、幸運なる教友たちが後を追った。追いつくと攻め立てて殺した。この喧噪の中、結婚したばかりのハンザラ・ビン・アブー・アーミル様が、馬で逃げようとしていた不信仰者の軍の司令官であるアブー・スフヤーンに追いついた。馬の脚を刀で攻め、馬はその場で崩れた。倒れたアブー・スフヤーンは、ありったけの力で「クライシュ族よ！…　助けてくれ！…　私はアブー・スフヤーンだ！　ハンザラが私を刀で切り刻もうとしている！…」と叫び始めた。しかし、彼とともに逃げようとしていた不信仰者たちは、この状況を見ても自分の命のことに没頭し、司令官には関わろうとしなかった。

　しかし、そのときハンザラ様の後ろにいた不信仰者のシェッダド・ビン・アスアドが槍をハンザラ様の後ろから突いた。ハンザラ様は「アッラーフ・アクバル！」と言いながら攻撃しようとしたが、倒れて殉教者となったのだった。そして神聖な魂は天国へと昇っていった。預言者様は「天使たちがハンザラを、天と地の間で銀の盆の上に乗せ、雨水で洗っていたのを私は見ました」とおっしゃった。アブー・ウセイディはこのように語っている。「預言者様のこの言葉を聞いて、ハンザラのところへ行きました。頭からは雨水が垂れていました。戻って預言者様に知らせました。預言者様はハンザラ様について『ガッスィール・ウル・マラーイカ（天使たちによって洗われたのです、の意）』とおっしゃいました」

　このとき、不信仰者たちが逃げるのを見たアイネイン峠の射手たちの幾人かは、戦いが終わったと思い込み、持ち場を離れた。しかし、司令官のアブドゥッラー・ビン・ジュベイルと十二人はその場にとどまった。

アリー様の勇敢さ

　このとき、油断なく待ち構え、あらゆる機会に巻き返しを図ろうとしていたクライシュ族の射手たちと司令官のハーリド・ビン・ワリードは、峠にいた戦士が少なくなるのを見ると、部下の騎兵を動かした。イクリム・ビン・アブー・ジャフルとともに、すぐにアイネイン峠にやって来た。アブドゥッラー・ビン・ジュベイル様と誠実で忠実な仲間たちは、一列になって並んでいた。矢入れの矢が尽きるまで、敵に矢を降らせた。その後、槍を持ち、相手と胸が合わさると「アッラーフ・アクバル！…　アッラーフ・アクバル！…」と言いながら、刀で見事な勇敢さを示し、信仰のない者たちの間において信仰をもって、一人に対して二十五人ほどの大人数を相手にしていた。幸運なる教友たちは、預言者様の命

令を実行するため、血が最後の一滴となるまで戦った。一人ずつ後から後から殉教という果汁を飲み、神聖な身体を土に横たえ、その魂は天国へと昇っていった

不信仰者たちは、その恨みからアブドゥッラー様の上着を破り、神聖な身体に槍で穴をあけた。腹を裂き、内臓を外に出した。

ハーリド・ビン・ワリードとイクリムは、峠の戦士たちが殉教すると、すぐにイスラーム軍の背後から攻撃をした。教友たちは、突然背後に現れた敵を見たが、軍をまとめる機会はなかった。なぜなら大勢が既に武器を外していたからだった。すべては突然に変わった。前方で逃げていたクライシュ族の不信仰者たちは、ハーリド・ビン・ワリードが背後から攻撃をしたのを見ると、再び戻って来た。戦士たちは、二方の猛火の間に挟まってしまった。敵は前からも後ろからも攻撃をしかけ、戦士たちを苦しめ始めた。教友たち同士の連絡も途絶えた。散り散りとなって取り残されたのである。

アリー様はこのように語っている。「私は、イクリム・ビン・アブー・ジャフルもその中いた不信仰者の一団の真ん中に飛び込みました。自分の周りを攻撃し、その多くを殺しました。別の一団の中に入りました。彼らからも大勢を殺しました。私の死ぬ時間はまだ来ていなかったようで、私には何も起こりませんでした。あるときは、預言者様が見えなくなっていました。『誓って、彼は戦場をそのままにして行かれる方ではない。恐らく、私たちが彼に対して行っていた不適切な行動のため、アッラーが預言者様を私たちの間から引き抜いてしまわれたのだ！もはや私には、戦いに戦って殺される以外、他に道はない』と独り言を言って刀の鞘を壊しました。不信仰者たちに攻撃をして彼らを散らしていると、預言者様が彼らの間に残されているのを見ました。アッラーが天使たちとともに預言者様を守っていたということを理解しました」

敵軍は、アッラーが愛する預言者様のすぐ脇まで近づいていた。状況は大変危険だった。愛すべき預言者様は、一人で一団の軍のように奮闘していて、その場から動かなかった。一方では敵と戦い、他方ではばらばらになった教友

たちを集めようとして「誰某よ、私の方へ来なさい！誰某よ、私の方へ来なさい！私が預言者です。私のところへ戻れば天国があります」とおっしゃっていた。アブー・バクル様、アブドゥルラハマーン・ビン・アウフ、タルハ・ビン・ウバイドゥッラー、アリー・ビン・アブー・ターリブ、ズバイル・ビン・アウワーム、アブー・ドゥジャーネ、アブー・ウバイダ・ビン・ジェッラーフ、サアド・ビン・ムアズ、サアド・ビン・アブー・ワッカース、ハッバーブ・ビン・ムンズィル、ウセイド・ビン・フダイル、セフル・ビン・ハニーフ、アースィム・ビン・サービト、ハーリス・ビン・スィンメがすぐに愛すべき預言者様の周りで輪になり、彼を守るため、彼らによって生きた砦の壁が現れたのだった。

この間、アッバース・ビン・ウバイダ様は、散り散りになった教友たちを集めようと「兄弟たちよ！我々が直面したこの災難は、預言者様の命令を守らなかった結果である。散らばるな！預言者様の周りに来るのだ！もし、我々が彼を守っている者たちとひとまとまりにならずにいて、預言者様に何らかの危害が及ぶことになったとしたら、もはやアッラーを前にして我々ができる申し訳はないのだ」と叫んでいた。そして、アッバース・ビン・ウバイダ様は、脇にハーリジェ・ビン・ザイドとアウス・ビン・アルカムを従えて、敵の中へ「アッラーフ・アクバル！」という叫び声とともに、むき出しの刀をもって飛び込んだ。預言者様のため、彼を守るため勇敢に戦った。ハーリジェ・ビン・ザイドは十九ヶ所に傷を負った。他の二人の傷も彼より少ないわけではなかった。三人は一様に、切望していた殉教者の地位を手に入れたのだった。

教友たちは、この大変危険な状況下で、預言者様の周りに少しずつ集まり始めた。不信仰者たちは、愛すべき預言者様を自分の身で守ろうと防護壁になっている名誉ある教友たちの周りを輪になって取り囲んだ。あらゆる方向から同時に前進してその輪を狭めていった。クライシュ族のある一団が前に出てきたのを見た万物の王は、そばにいて命を捧げる用意のある教友たちに「あの一団の相手を誰がしますか？」と尋ねた。ウェフブ・ビン・カーブス様が「命をあなたに捧げます、預言者様！私が相手をします」と言い、前に飛び出すのが見られた。アッラーの祝福された名

前を常に口にしていたこの勇者は、刀をもって不信仰者たちの間に飛び込んだ。預言者様は「あなたに天国の吉報をもたらします」とおっしゃった。そして、彼が敵に対して見せた奮闘ぶりと熱意を見て「アッラーよ！ 彼に慈悲を与え給え！ 彼に憐れみを」とおっしゃった。

不信仰者たちがウェフブ様を取り囲み、槍で殉教させようとするのを見たサアド・ビン・アブー・ワッカースは、彼を助けようと前に飛び出て敵の中へと入り、見たこともないような勇敢さを発揮した。たくさんの異教徒を倒した。他の敵も押し返して、愛すべき預言者様のもとへと戻って来た。預言者様は、ウェフブのために「私はあなたに満足します。アッラーもご満足しますように」とおっしゃった。

預言者様は、戦士たちの作っていた輪に穴が開けられ、自分の方へ異教徒の一隊が前に向かってくるのを見ると、アリー様に「彼らに攻撃しなさい」と命じた。アリー様は攻撃を加えてアムル・ビン・アブドゥッラーを殺し、他の人々を押し返した。刀が折れると、預言者様はズルフィカル（預言者様の刀の名前）を彼に渡した。別の一隊が来ると、預言者様は「アリーよ！ 彼らの害悪が私に及ばないようにしなさい」とおっしゃった。命を預言者様に捧げているアッラーの獅子はただちに攻撃を行った。シャイバ・ビン・マーリキーを殺し、他の者たちを押し返した。そのとき、大天使ジブリールが来て、預言者様に「預言者様！ アリーに見られるこの戦いぶりは、見事に男らしく勇敢なものです」と言った。これを聞いた預言者様は「彼は私の側にあり、私は彼の側にあります」とおっしゃった。ジブリール様は「私もあなた方二人の側にあります」と言った。そのとき、ある声がして「アリーのような勇者、ズルフィカルのような刀は見つかるまい」と聞こえてきたのだった。

不信仰者たちは、愛すべき預言者様のもとへは近づけないであろうことが分かると、矢を射始めた。放った矢は上を通ったり、前に、右に、左に落ちたりしてきた。敵を後退させるために命をかけて戦っていた教友たちは、この状態を見るやいなや、万物の王の周りに集まり、向かってくる矢を神聖な身体で防ごうとし始めた。預言者様は教友たちに、弓矢で反撃するようおっしゃると、教友たちも敵に矢を射始めた。預言者様は、サアド・ビン・アブー・ワッ

カース様を前に座らせた。大変見事な名射手であるサアド様は、直ちにひゅんひゅんと敵に矢を降らせ始めた。矢筒、つまり矢入れから一本ずつ矢を抜いては「アッラーよ！ これはあなたの矢です。これで敵を打ちのめしてください！」と言っていて、預言者様もまた「アッラーよ！ サアドの願いをお認めください！ アッラーよ！ サアドの矢の方向を正してください！… 続けるのです、サアド！ 両親をあなたのために犠牲に捧げます！」とおっしゃっていた。このようにして、それぞれの矢を射るとき、預言者様は同じ願いを繰り返したのだった。

サアド様の矢が終わると、愛すべき預言者様は自分の矢を彼に渡して射させた。サアド・ビン・アブー・ワッカース様の射たそれぞれの矢は、敵に当たったり、敵が乗っていた動物に命中したりしていた。

不信仰者たちが矢を射ると、アブー・タルハ様は預言者様の前に戻り、飛んでくるすべての矢を自分の身体と盾を使って防御し、ときには敵が驚いて身を引いてしまうような叫び声を発していた。預言者様は「軍にあっては、アブー・タルハの声は百人分よりも善いものである」とおっしゃった。アブー・タルハは機会を見つけては、不信仰者に矢を放ちに戻り、強く大変鋭い矢を射た。それらは的を外さなかった。射た矢のことを預言者様が気にして頭を上に持ち上げると、アブー・タルハは預言者様に矢が当たることを恐れて「両親をあなたに捧げます、預言者様！ 神聖な頭を上げないでください。敵があなたに矢を命中させて危害を与えないように！ 私の身体でもって神聖なあなたの身体を守り、あなたのために犠牲になります！ 私を殺さない限り、彼らがあなたに至ることはありません！ 私が死なない限り、あなたには何も危害はありません！…」と言って、愛すべき預言者様を自分自身よりも優先した。

ウフドの戦場ではあらゆるところで、容赦のない恐るべき戦いが、最大限の激しさで続いており、ある者は馬に乗り、またある者は徒歩で信仰者対不信仰者の戦いを続けていた。教友たちはまだ集まってはいなかった。しかし、預言者様の周りには三十人ほどの教友たちがプロペラのように回っていて、降りかかる矢や、槍や、刀を自分の身体で受け止めていた。唯一の願いは預言者様の命令を実行し、彼にやって来るあらゆる危害を防ぐことだった。勇者の頭であるハムザ様は、喧噪の中、預言者様から離れてしまっていた。敵陣の中に飛び込んで両手に持った二本の刀で戦って

「アッラーフ・アクバル！…」と叫びながら、敵を怯えさせる攻撃をしていた。それまでに、一人でちょうど三十一人の不信仰者を殺し、大勢の者の腕や脚を切り落としていた。飛び込んでいった不信仰者の群れを散らしていたその時、シバー・ビン・ユンム・アンマールが「私の相手をできる勇者はいるのか？」と言って、ハムザ様に挑戦した。ハムザ様は「私のところへ来るがいい、割礼を施す女の息子よ！ あなたはアッラーと預言者様に挑戦しようと言っているのか？」と言って、彼が瞬きをする間もなく脚を取って地面に倒した。上から襲って、頭を胴から切り落としたとき、向かいの岩の後ろで槍を手にしたワフシが自分を狙っているのに気付いた。すぐにそちらへ向かったが、洪水で開いた窪みのところへ来ると、足をすくわれて仰向けに転んでしまった。その瞬間、腹からは鎧が取れた。この機会を捉えてワフシは槍を投げつけた！… 槍は飛んでハムザ様の神聖な身体を突いて貫通した。勇者の中の勇者は「アッラーよ！」と言って地に崩れた。殉教し、熱望していたその地位に巡り合ったのだった。アッラーの道に、愛すべき預言者様のために命を捧げたのだった。

この間、敵の隊列からある人物が「クライシュ族の一団よ！ 親族関係を気にしない者であり、私の部族を分断した者であるムハンマド（アライヒッサラーム）との戦いから一歩も退いてはならない。もし、ムハンマド（アライヒッサラーム）が救われたなら、私が救われない！…」と言いいながら、万物の王である預言者様への攻撃を不信仰者たちに鼓舞していた。この声は、アースィム・ビン・アブー・アウフのものだった。アブー・ドゥジャーネ様がこの声を聞いた。戦いに戦ってアースィム・ビン・アブー・アウフを見つけ、すぐに殺した。しかし、後ろにいた不信仰者のマーベドが、ありったけの力でアブー・ドゥジャーネ様に刀を振り下ろした。アッラーの恵みとして、すぐに、そしてすばやく動いて地面に伏せたアブー・ドゥジャーネは死の一撃から逃れた。ただちに立ち上がり、刀をマーベドに振り下ろして殺した。

クライシュ族の不信仰者たちの的は万物の王だった。彼に近づこうと、あらゆる労力を費やしていた。しかし、周りをプロペラのように回って、一つの危害でも及ぶことを怖れつつ、命を捧げることに微塵もたじろぐことのなかった幸運な名誉ある教友たちが、少しも進ませることをしなかった。この勇敢な三十人の勇者たちは、預言者様の前で「預言者様！ あなたのところから決して離れないように、我々の顔は神聖な顔の前で防護壁となり盾となり、そして、我々の身体をあなたの神聖な身体のために捧げましょう。あなたには危害が及ばないように」と言っていた。不信仰者たちは集団で攻撃をしてきていた。世界の誇りである預言者様は、隣にいて自身の身体を防護壁としていた幸運で勇敢な教友たちに、その集団を示して「アッラーの道で、誰が身体を私たちのために捧げますか？」とおっしゃると、マディーナ出身の五人の教友たちが前に飛び出した。預言者様の神聖な目の前で、タクビールをして周りながら戦っていた。ついに、そのうちの四人が殉教者となった。五人目が十四ヶ所に傷を負って地面に倒れると、世界の王は「彼を私のところへ連れてきなさい」とおっしゃった。身体のあらゆるところから血が流れていた。愛すべき預言者様は座って、神聖な脚に彼の頭を載せた。その形で殉教者となる名誉を手に入れたこの幸運な教友は、ウマーレ・ビン・イェズィト様だった。

タルハ・ビン・ウバイドゥッラーの勇敢さ

不信仰者たちがかなり近づいたとき、預言者様は「彼らに誰が相手をし、誰が止めますか？」と尋ねた。すると、タルハ・ビン・ウバイドゥッラー様が「私です！ 預言者様！」と言って、前に突進しようとした。しかし預言者様は「あなたのような者は他に誰かいますか？」とおっしゃった。マディーナ出身の教友の一人が「預言者様！ 私です！」と言って許可を求めた。預言者様が「さあ、あなたが相手をしなさい」とおっしゃると、前に飛び出して不信仰者たちを攻め立てた。相手に対して勇敢さを発揮し、幾人かの不信仰者を殺した後、殉教という名誉に与った。

預言者様は再び「あれらに誰が相手をしますか？」とおっしゃった。誰よりも先に、再びタルハ様が名乗り出た。預言者様が「あなたのような者が他に誰かいますか？」と尋ねると、アンサールの一人が「私が相手をします、預言

者様！」と答えた。預言者様は「さあ、あなたが相手をしなさい」とおっしゃった。彼も不信仰者たちと戦いに戦って殉教した。このようにして、そのとき預言者様のそばにいたすべての教友たちが、戦って戦って殉教に達した。万物の王のそばにいるのは、タルハ・ビン・ウバイドゥッラー様以外に残っていなかった。タルハ様は預言者様に危害が及ぶことを気にかけ、四方に走り回って不信仰者たちと戦った。これほどまでにすばやく刀を振り、同時に預言者様の周りを取り囲んでいた敵に同時に反撃して、弓や槍、そして刀の一撃に身を挺して守ることは、なかなか見られないことであった。タルハ様はプロペラのように周り、自分に当たる刀のことは気にしなかった。ただ望むのは、万物の王を守ることと、そのために他の兄弟のように殉教者となることだった。身体に傷のないところはなかった。着ていたものには血以外見られなかった。しかし、彼はこれにもかかわらず、四方に同時に攻撃していた。そのときアブー・バクル様とサアド・ビン・アブー・ワッカース様が預言者様のもとへとやって来た。

勇者の王であるタルハ様は、このとき失血のため熱い地面に倒れて気を失った。あらゆるところが刀や槍、矢の攻撃によって穴だらけになっていた。六十六ヶ所の大きい怪我、数えられないほどの傷を負っていた。愛すべき預言者様はアブー・バクル様に、ただちにタルハ様の救助に行くよう命じた。アブー・バクル・スィッディーク様は、タルハ様の意識が戻るよう、神聖な顔に水をかけた。タルハ・ビン・ウバイドゥッラー様は意識が戻るやいなや「アブー・バクルよ！預言者様はどうされていますか？」と言って、預言者様との絆の強さの面で最大級に美しい規範を示した。預言者様を愛すること、命を彼の神聖な身体の代わりに捧げることというのは、これほどのものであった。アブー・バクル様が「預言者様は無事です。私をあなたのために行かせました」と言うと、タルハ様は安堵の息をついて「アッラーに永遠の感謝をします。彼が無事であれば、他の災難は些細なことなのです」と言った。そのとき幾人かの教友たちもやって来た。

万物の王であるムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）が、タルハ様のもとへとやって来た。傷だらけのこの戦士は預言者様の無事を見ると、喜びの涙を流した。預言者様が彼の身体を手でこすった後、手を上げ「アッラーよ！彼に全快を与えてください。彼に力を恵んでください」と願った。すると、預言者様の一つの奇跡として、タルハ様は何事もなく立ち上がり、再び敵と戦い始めた。預言者様は彼について「ウフドの戦いにおいて、右ではジブリール、左ではタルハ・ビン・ウバイドゥッラーよりも、地上で私に近い者は他に見ませんでした。地上を歩く天国の住民を見たいのであれば、タルハ・ビン・ウバイドゥッラーを見ればよいのです」とおっしゃった。

すべての前線で戦いは全力で続いていた。預言者様の周りには、アブー・ドゥジャーネ、旗手のムスアブ・ビン・ウマイル、タルハ・ビン・ウバイドゥッラーと、預言者様を守るため、後列から走って来たネスィーベ・ハートゥンと幾人かの教友たちがいた。彼らは預言者様とともに不信仰者たちと戦っていた。このとき、頭から爪先まで武器や鎧、兜を装備していた狂暴な不信仰者のアブドゥッラー・ビン・フネイドが預言者様を見かけると、馬に拍車をかけた。「私はズヘイルの息子だ。私にムハンマド（アライヒッサラーム）を示せ。私が彼を殺すか、あるいは彼のところで私が死ぬかだ」と叫んでいた。馬を預言者様の方へ走らせたとき、アブー・ドゥジャーネ様が前に立ちふさがり「来い。私は自分の身体でムハンマド（アライヒッサラーム）の神聖な身体を守る一人だ。私を踏みつぶさない限り、彼には到達しない」と言った。そして、馬の脚に刀を振り下ろし、アブドゥッラー・ビン・フネイドを地面に落とした。そして刀を振りかざして「さあ、これはハラーシェの息子からだ」と言って、一撃で地面に倒した。この出来事を見ていた万物の王は「アッラーよ、私はハラーシェの息子（アブー・ドゥジャーネ）に満足です。あなたもご満足なさいますように」と言って祈念した。

不信仰者たちの中には、大変鋭い射手の名人がいた。射たものを確実に当てるマーリキー・ビン・ズヘイルが、あらゆるところで預言者様を探し、一瞬の隙も逃さないように、矢で射ようとしていた。預言者様の近くまで来て、矢を引いた。愛すべき預言者様の頭に狙いをつけ、矢を放った。瞬きするほどの時間もなかった。そのとき、タルハ様が手を上げて代わりに的となった。矢はタルハ様の手のひらに突き刺さり、手を粉々にした。指のすべての神経が切られ、手の骨が折れた。この出来事を世界の誇りである預言者様が見て「もし、（私を守るために手を矢の方に伸ばし

たとき)ビスミッラーと言っていたら、天使たちがあなたを天空に上げるのを、人々が見ていたことでしょう」とおっしゃった。

マッカの不信仰者たちのうち、アブドゥッラー・ビン・カミーア、ウベイ・ビン・ハラフ、ウトゥバ・ビン・アブー・ワッカース、アブドゥッラー・ビン・シハービ・ズフリという名の四人が、預言者様の命を終わらせることで一致して誓いを立てた。この困難なときにあって、預言者様は、脇に何人かの教友たちだけを従えて、敵に容赦なく攻撃を行っていた。預言者様の前には、旗手のムスアブ・ビン・ウマイル様がいた。ムスアブ様は身に着けていた鎧のため、預言者様に大変似ていた。彼もまた、右手にイスラームの旗を掲げた状態で不信仰者たちに恐るべき攻撃を行っていた。このとき、鎧に覆われたイブニ・カミーアが馬に乗ってそこへ近づいてきた。出る限りの大声で「私にムハンマド(アライヒッサラーム)を示すのだ。彼が救われるなら、私は救われないのだ!」と叫び、預言者様の方へと馬の拍車をかけた。ムスアブ様とネシーベ・ハートゥンが相手をし、自分の身体を預言者様の盾としながら戦い始めた。だが、この異教徒にどんなに刀を振るっても、鎧のせいで効果がなかった。イブニ・カミーアは、ネシーベ・ハートゥンに刀を振るい、肩をばらばらにした。その後、旗を持っているムスアブ様の右手に刀を振り下ろした。右手が切られたムスアブ・ビン・ウマイルは命よりも尊い神聖なイスラームの軍旗を地面に落とさないように左手で持った。そのとき彼は『ムハンマドは、一人の使徒に過ぎない。使徒たちはかれの前に逝った。もしかれが死ぬか、または殺されたら、あなたがたは踵を返すのか。誰が踵を返そうとも、少しもアッラーを損うことは出来ない。だがアッラーは、感謝(してかれに仕える)者に報われる。』(イムラーン家章(アーリ・イムラーン)第一四四節)という一節を詠んだ。イブニ・カミーアは今度、刀をムスアブ様の左手に打ちつけた。左手が切られた名誉ある旗手は、イスラームの軍旗を地面に落とさなかった。勇敢なこの教友は、軍旗を腕と胸の間で抑えて翻し続けた。イブニ・カミーアは今度、槍を名誉ある教友の身体に突いた。彼も他の友人たちのように殉教者となり、来世へと旅立った。

ムスアブ様が地面に倒れるとき、名誉あるイスラームの軍旗は地面に落ちることはなく、それをムスアブの姿になった一人の天使が代わりに持った。愛すべき預言者様が「進むのだ、ムスアブ!」とおっしゃると、旗を持っていた天使が「私はムスアブではありません」と言った。そのとき、万物の王は彼が天使であることに気付き、軍旗をアリー様に手渡した。

イブニ・カミーアは、ムスアブ様を預言者様と勘違いしていたため、急いで不信仰者たちのところへ戻り「ムハンマド(アライヒッサラーム)を殺した!」と叫んだ。それを聞いた不信仰者たちは、自分たちの目的が達せられたことに喜んで、一段と狂暴になった。真実を知らなかった教友たちは、これを聞いて手足が固まってしまった。周りには悲しみの風が吹いていた。ウマル様でさえ両手の力が抜けて、同志たちとともにその場に座り込んでしまった。エネス・ビン・ナーディルは彼らのこのような状況を見ると「なぜ座っているのですか?」と聞いた。

彼らは「預言者様が殉教者となったようです」と返事をした。エネス様は「預言者様が殉教者となったとしても、彼のアッラーは永遠です。預言者様の後に私たちが生きながらえてどうするのですか。立ち上がるのです。預言者様が戦って神聖な命をお返ししたことのために、私たちも命を捧げるのだ」と言って刀の鞘を折り「アッラーフ・アクバル!」という叫び声を上げて、たった一つの刀で敵の間に飛び込んでいった。大勢の異教徒を殺し、彼もまた殉教者となった。顔だけで七十ヶ所の傷を負い、身体には数えられないほどの傷があった。そのため、彼のことを妹以外は判別できないほどだった。

教友たちの大勢が散り散りになっており、一部は殉教者となっていた。彼らがこのようにばらばらになっていることを利用しようとしていた不信仰者たちは、預言者様の周りに集まって来た。石や刀で二つの世界の王を殉教者にしようと骨を折っていた。だが、二つの鎧を重ねていたため、打撃の影響は受けなかった。ウトゥバ・ビン・アビー・ワッカースの投げた石が、愛すべき預言者様の顔に当たって下唇に怪我を負わせ、下あごの神聖な右の犬歯を折った。そのとき、イブニ・カミーアという不信仰者がやって来て、刀を万物の王の神聖な頭に振りかざした。愛すべき預言者様の兜が壊れ、二つの輪が神聖なこめかみに刺さった。また、イブニ・カミーアの振り下ろした打撃で神聖な肩に傷を負

い、ムスリムたちを落とすためにアブー・アーミルの掘っていた深い穴に横倒しになって落ちてしまった。愛すべき預言者様は裏切り者のイブニ・カミーアに対して「アッラーがあなたを軽蔑し、惨めにしますように」と願いをかけた。イブニ・カミーアは、大変に喜んで「ムハンマド（アライヒッサラーム）を殺した！ムハンマド（アライヒッサラーム）を殺した！」と叫びながら、アブー・スフヤーンのところへと戻った。不信仰者たちは目的を達成したと思い、もはや預言者様に関心を払わなくなった。預言者様のいた穴の周りからはいなくなり、教友たちと戦い続けたのだった。

預言者様が穴に落ちたとき、神聖な頬から血が流れた。神聖な手を顔にやると、手や神聖な髭が血に染まったのを見た。一滴の血が地面に落ちる前にジブリールが間に合い、その神聖な血を取ってこう言った。「アッラーの最愛の者よ！アッラーに誓って、もしこの血の一滴が地面に落ちていたら、最後の日まで地面から草木は生えてこなくなったことでしょう」世界の誇りである預言者様も「もし私から一滴の血でも地面に落ちていたら、天空から罰が下りたことでしょう。アッラーよ！私の部族をお許しください。なぜなら彼らは分からないのです」とおっしゃって、自分を殺そうとしていた者たちに対して、神聖な身体に刀を打ち下ろし、神聖な歯を折り、神聖な顔を血だらけにした者たちに対しても、信仰者となるように願ったのであった。

そのとき、カアブ・ビン・マーリキー様が「ムスリムたちよ、吉報だ！ほら預言者様はここにいらっしゃる」と大声で叫んだ。この声を聞いた名誉ある教友たちは、生き返ったかのように喜んで、そちらへ走っていった。アリー様とタルハ・ビン・ウバイドゥッラーが直ちに向かい、穴から預言者様を引き上げた。アブー・ウバイダ・ビン・ジェッラーフ様が、愛すべき預言者様の神聖なこめかみに刺さっていた兜の輪を歯で引き抜いた。この鉄くずを引き抜くとき、二つの前歯が取れた。教友のマーリキー・ビン・スィナー様は、預言者様の神聖な顔から染みていた血を吸った。それに対して預言者様は「私の血が血に混ざる者は、地獄の火が触れることはできません」とおっしゃった。

不信仰者たちは、再び優勢になり始めていた。しかし、教友たちは、預言者様と再び会えたことの喜びで、一瞬にして預言者様の周りで輪を作り、一人たりとも不信仰者を放っておきはしなかった。預言者様に対して、もはや何もできないであろうことを悟った不信仰者たちは、山頂に登り始めた。現世と来世の王は、隣にいたサアド・ビン・アブー・ワッカース様に対して「彼らを連れ戻しなさい」とおっしゃった。サアド様が「預言者様！私のもとにはただ一本の矢があるばかりです。これでどのようにして連れ戻したらよいのでしょうか？」と尋ねると、預言者様は再び同じ命令を与えるのだった。このため、矢の達人であったサアド・ビン・アブー・ワッカース様は、手に矢筒を持って矢を放った。矢が一人の不信仰者を倒した。手を再び矢筒に伸ばすと、まだ一本の矢があるのを見た。よく調べると、この矢は先ほど放ったものだった。また一人の不信仰者を殺した。この状態が何度も続いた。愛すべき預言者様の一つの奇跡として、サアド様は何度も、矢筒に先ほど射た矢を見つけたのだった。次々と仲間が死んでいくのを見たクライシュ族たちは、山に登るのをあきらめた。下に降りて引き返した。

その中からウベイ・ビン・ハラフが、預言者様の方へと進み「どこだ、あの預言者だと主張した者は？私の前に出て、私と戦え！」と叫び始めた。教友たちは、彼の相手をしようとしたが、愛すべき預言者様はお許しにならなかった。ハーリス・ビン・スィンメ様が槍を持って前に出た。不幸なウベイは馬に拍車をかけた。「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！あなたが救われたなら、私が救われないのだ！」と言いながら近づいた。彼は頭から足先まで鎧で覆われていた。万物の王は受け取った槍をウベイの首めがけて投げつけた。槍は飛んで、兜と鎧の襟元の間に突き刺さった。ウベイは牛のように呻いて馬から転がり落ち、肋骨が折れた。不信仰者たちは、彼を立ち上がらせて連れ戻った。その路すがら「ムハンマド（アライヒッサラーム）が私を殺した！…」と叫び叫び絶命した。

預言者様は、教友たちとともにウフドの岩場に向かって登り始めた。岩場に着くと、さらに上へと登ろうとした。預言者様はあまりにも疲れていた上、二重の鎧を着て、神聖な身体に七十ヶ所以上も刀で傷を負っていたため、力がなくなっていた。このため、タルハが預言者様を背負い、岩場の上へと登った。愛すべき預言者様は「タルハよ！預言者に手伝ったときから、天国に入ることが義務となりました」とおっしゃった。そして、力を使い果たし、昼の礼拝は座ったままで行った。

山の麓にいる教友たちは、一人ひとりが獅子となり、不信仰者の上に飛びかかっていた。預言者様に刀を振るった者には、地上の牢獄を味わわせた。ある時、ハティブ・ビン・ベルテアが愛すべき預言者様のところへ来て「命をあなたに捧げます、預言者様！あなたにこのようなことを誰がしたのですか？」と聞いた。預言者様が「ウトゥバ・ビン・アビー・ワッカースが石を投げ、私の顔に当てて下の犬歯を折りました」とおっしゃると、ハティーブ様は「預言者様！彼はどこに行きましたか？」と再び尋ねた。預言者様は彼が行った方を指し示した。ハティーブ様はただちにその方向に走っていった。捜しに捜してウトゥバを見つけ出した。馬から落とし、一撃で頭を切り、それを預言者様のところへ持ってきて吉報をもたらした。預言者様は「アッラーがあなたにご満足なさいますように。アッラーがあなたにご満足なさいますように」と言って、彼のために祈念した。

不信仰者たちは目の前に、再び集って攻撃するようになった教友たちを見た。そこで、七十人の遺体を残し、戦場を後にしてマッカに戻っていった。やがて、預言者様が殉教者となったという噂はマディーナに届いた。ファーティマ様、アーイシャ様、ウンム・スレイム、ウンム・アイマン、ハムネ・ビンティ・ジャフシ、クワイベなどの女性たちがウフドへと走った。ファーティマ様は父である預言者様が怪我をしているのを見ると泣いた。預言者様は彼女を慰めた。アリー様は盾で水を持ってきた。ファーティマ様がその水で預言者様の神聖な血を洗った。しかし、顔から流れる血が止まらなかった。ファーティマ様がある草の敷物を焼いて、その灰を傷跡に押し付けると血が止まった。

その後、戦場に降りて行った。まず、怪我をした者を探し、怪我を治療した。不信仰者たちが何人かの教友たちを、判別できなくなるほどにさせていた。耳や鼻、手足が切られ、腹が引き裂かれていた。アブドゥッラー・ビン・ジャフシ様もその一人だった。この状況を見た愛すべき預言者様と教友たちは大変に悲しんだ。最も名誉ある教友たちが殉教者となり、ウフドの地を血で染めて天国へと飛んでいった。しかし、殉教者に対して不信仰者たちが行ったことは到底耐えられるものではなかった。預言者様と教友たち全員が悲嘆に心を痛めていた。この光景に接して、万物の王は泣いた。神聖な目から涙が滴ったとき「私はこの殉教者たちがアッラーの道で命を捧げたことを、審判の日に証言します。彼らを血がついたまま埋葬しなさい。アッラーに誓って、来世では彼らが傷から血を出しながら現れるのです。血は血の色ですが、ムスクの香りになっています」とおっしゃった。

愛すべき預言者様は「ハムザが見あたりません。彼はどうしたのでしょうか？」とおっしゃった。アリー様が捜して見つけ出した。預言者様がそこに着くと、思いもよらなかった光景に出くわして、耐えることはできなかった。ハムザ様の耳や鼻、手足は切られて、顔は判別のつかないような状態になっており、腹は引き裂かれて内臓がえぐり出されていた。預言者様は神聖な目から涙を流しながらハムザ様に話しかけて「ハムザよ！いかなる時も、いかなる人も、あなたほどの災難には見舞われませんでしたし、見舞われることもないでしょう。預言者の叔父よ！アッラーの、そして預言者の獅子であるハムザよ！善を働くハムザよ！預言者の守護者であるハムザ！アッラーがあなたに慈悲を与え給いますように！…」とおっしゃった。

このとき、向こうから慌ててやって来る一人の女性が見えた。彼女は、愛すべき預言者様の叔母のサフィーヤ様だった。彼女も他の女性たち同様、預言者様が殉教したとの噂を聞いて、すべてを忘れて走りに走ってウフドへと来たのだった。預言者様は叔母を見ると、ハムザ様が殉教した状況に耐えられないだろうと考え、その息子のズバイル・ビン・アウワーム様に「お母様を連れ戻して、兄弟の遺体を目にさせないようにしなさい」とおっしゃった。ズバイル様は走って母のもとへと行った。神聖なこの婦人は興奮して「息子よ！預言者様のことを教えるのです！…」と言った。そばにはアリー様も向かった。彼が「預言者様はアッラーのおかげでご無事です」と言うと胸をなでおろした。しかし「彼を私に見せてください」と言ってきかなかった。アリー様は、万物の王の姿を示した。サフィーヤ様は、二つの世界の太陽が無事であるのを見ると大変に喜び、アッラーに感謝をした。今度は、兄弟のハムザ様の状況を見ようと前に歩こうとした。息子のズバイルは「母よ！預言者様がお戻りになるように命じられたのです」と言うと、サフィーヤ様は「もし、彼がされたことを私に見せないようにするために戻るということであるのなら、やはり兄弟の遺体は切られてばらばらにされたのだということが分かりました。彼がこうなったのは、アッラーの道で奮闘したおかげなの

です。私たちは、この道ではもっと悪いことが起こったとしても満足です。善行をアッラーから待ちましょう。インシャーアッラー、我慢をして、忍びましょう」と言った。ズバイル・ビン・アウワーム様は戻ってこのことを知らせると、預言者様は「そうであれば、お会いさせなさい」とおっしゃった。

サフィーヤ様は、ハムザ様の遺体のわきに座り、そして、声を立てずに泣いた。

サフィーヤ様は来るときに、二つの上着を持ってきていた。それらを取り出し「これらは兄弟のハムザのために持ってきました。彼を包んでください」と言った。サイイドゥス・シュヘダー、つまり殉教者となったハムザ様はこの上着で包まれた。

アッラーの愛する預言者様は、旗手のムスアブ・ビン・ウマイルのところへとやって来た。ムスアブ様は両手を切られ、非常に多くの箇所に傷を負っていた。いたるところが血にまみれた状態だった。預言者様はこのことについても大変悲しみ、この親愛なる殉教者たちに呼びかけて、クルアーンの『部族連合章（アル・アハザーブ）第二三節を詠み『信者の中には、アッラーと結んだ約束に忠実であった人々が（多く）いたのである。或る者はその誓いを果し、また或る者は（なお）待っている。かれらは少しも（その信念を）変えなかった』とおっしゃった。預言者様はその後、このようにおっしゃった。「アッラーの預言者が証人となります。あなた方は来世の日に、アッラーの前で殉教者として生き返されるのです」

その後、そばにいた人たちの方に向き直って「この人たちのところを訪ねなさい。各自挨拶をするのです。アッラーに誓って、この人たちに対して、この世で挨拶をすれば、来世では、この親愛なる殉教者たちがそれぞれに挨拶を返してくれることでしょう」

ムスアブ・ビン・ウマイル様のためには白布となるようなものが見つからなかった。彼が着ていたものでは、神聖な身体全体を覆うことができなかった。頭の方を覆えば足が、足の方を覆えば頭が出てしまうのだった。預言者様は「頭の方を着物で、足の方を草で覆いなさい」とおっしゃった。人生をイスラームに捧げて過ごし、このために殉教者

という地位に巡り合った幸せなこの教友は、この世からは白布が半分の状態で旅立ったのだった。

他の殉教者たちのためにも礼拝が行われ、血のついた服とともに二人ずつ、三人ずつと、一つの墓に埋葬した。ウフドの戦いでは七十人の殉教者が出た。彼らのうち六十四人がアンサールで、六人がムハージルであった。

教友たちの大多数は親族の誰かが殉教者となっていた。このため、心には傷を受けていた。残った者たちを慰めるため、アッラーの愛する預言者様はこのようにおっしゃった。「アッラーに誓って、どれほど私も教友たちとともに殉教して、ウフド山の胸元で夜を過ごしたかったことでしょうか。あなた方の兄弟が殉教したとき、アッラーは彼らの魂を緑色の鳥の餌袋に置かれました。彼らは天国の小川へとやって来てはその水を飲み、果物を食べるのです。天国のあらゆる所を見物し、バラの園を飛ぶのです。その後、天国の最上段に掛かっている金のランプの中に入って、夜はそこで過ごします。彼らはこのようにして食べたり飲んだりすることに喜び、美しいものを見ては『アッラーが、私たちにどれほどまでに歓待なさっているかを兄弟たちが知っていれば、聖戦から身を引くことも、戦いを恐れることも、敵から顔をそむけることもないのです』と言うのです。アッラーも『私があなた方の状況を彼らに伝えます』とおっしゃいました。（そして、クルアーンの節が啓示され、このように続けた）『アッラーの道のために殺害された者を、死んだと思ってはならない。いや、かれらは主の御許で扶養されて、生きている。かれらはアッラーの恩恵により、授かったものに満悦し、かれらのあとに続く（生き残った）人たちのために喜んでいる。その（生き残った）人たちは恐れもなく憂いもないと。アッラーの御恵みと恩恵を喜び、またアッラーが信者への報奨を、決して無駄にされないことを喜んでいる。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一六九～一七一節）…アッラーは彼らを見ると『私のしもべたちよ！　何か希望があれば言いなさい。あなた方にそれ以上のものを与えよう』とおっしゃいます。彼らは『アッラーよ！　私たちにお恵みくださったあなたの恩恵よりも、さらに上の恩恵というのは一つもなく、ほかに期待するものはありません。私たちは天国で求めるものを食べています。しかし、私たちは魂を死体に戻して現世へと戻り、あなたの道のために戦って、再び殺されることを望みます』と言うのです」

もはや、ここで行うべきことは何も残っていなかった。片づけをし始めた。ジハードゥ・フィ・セビリッラー、つまりアッラーの宗教を広めるためにやって来たウフドで、史上類をみない戦いが行われたのだった。見たことがないほどに、想像をはるかに超えるほどに、教友たちは勇敢に戦って殉教し、異教徒たちはまた一つ学ぶこととなったのだった。

万物の王は、神聖な教友たちとともに、光にあふれたマディーナへと向かわれた。ハッレ地方に来た時、教友たちを一列に並ばせ、神聖な手をあげてアッラーに懇願してこのように祈念を行った。「アッラーよ！　最大の感謝と称賛をあなたに捧げます。アッラーよ！　逸脱したままとなった者を正しい道に導くことも、正しい道にある者を逸脱させることも、あなた以外に誰もできません。アッラーよ！　私たちに信仰を愛するようにさせてください。そして心を信仰で飾ってください。私たちが不信仰や狂暴、横暴を嫌うようにさせてください。私たちを宗教やこの世に対する悪について知る者とし、正しい道に導く者としてください。アッラーよ！　私たちをムスリムとして生かし、そしてムスリムとして死なせてください。私たちを敬虔で善良な人々の一団とさせてください。なぜなら彼らは名誉も品位も失わず、宗教に背くこともないからです。アッラーよ！　あなたの預言者を否定し、あなたの道から顔を背け、あなたの預言者と戦う不信仰者たちに罰を与えてください。彼らに真実なるあなたの罰を与えてください！…　アーミーン」教友たちもまた「アーミーン、アーミーン」と言ってこの願いに賛同したのだった。

愛すべき預言者様は、教友たちとともにマディーナへと近づいた。マディーナで残っていた女性たちや子供たちは道にあふれ出て、心配し悲嘆しながら、やって来た軍の中にいる世界の王を見ようとしていた。そして、彼の姿を、周りを明るくさせる御光にあふれたお顔を見て、アッラーに感謝をしたのだった。その後で、視線は軍に吸い寄せられ、父親たちや主人たち、息子たちや叔父たちを探すのだった。見つからなければ…涙をとどめておくことはできなかった。教友たちのこの悲嘆する様子を見た憐みの主である預言者様もまた大変に悲しみ、神聖な目から涙を流したのだった。

あるとき、サアド・ビン・ムアズ様の母親であるケブシェ・ハートゥンが預言者様の方へ近づくのが見られた。ウフドの戦いで、息子のアムルが殉教していた。預言者様の前へと行き「両親を、私の命をあなたに捧げます、預言者様！　アッラーのお陰で、あなたがお元気で無事であることを拝見しました。あなたが無事であるのなら、あらゆる災難は私にとっては何でもありません！」と言った。自らの一部ともいえる息子のことは尋ねなかった。愛すべき預言者様は彼女に、息子のアムルのお悔やみを述べた後「サアドの母よ！　あなたと家の方々に吉報があります。殉教者になった者全員が天国で集まり、お互いに友となりました。そして、彼らは家の人々に対するとりなしを行うことでしょう」とおっしゃった。ケブシェ・ハートゥンは「アッラーからもたらされるすべてに満足します。預言者様よ！　この吉報があった後で、もはや彼らのために誰が泣くというのでしょう！　これからは、あなたは後に残った者たちのために願いをおかけください」と言った。万物の王は「アッラーよ！　彼らの心から、すべての悲しみを去らせたまえ！　後に残った者たちにも、戻ってきた者たちにも、最大の善を与えたまえ！」と祈念した。

預言者様は、教友たちに欲望との戦いを指して「（教友たちよ！　今や）私たちは小さな聖戦から戻ってきて、大きな聖戦を始めるのです」とおっしゃった。その後、それぞれが家に戻って休息し、傷を癒すことを勧めた。ご自身もまた傷を負っていた。まっすぐ、幸福なる家へと向かわれた。

ハムラー・ウル・アサドへの出征

預言者様はマディーナへ戻ると、不信仰者たちが何時たりとも戻ってきて、マディーナを襲う可能性があることを警戒した。翌日、怪我を負った状態でも、ムスリムたちが昨日の戦いで弱気になっていないことを知らしめて敵に力を示し、彼らがマディーナに戻ってこないよう、ビラール・ハベシに「預言者は、あなた方に敵を追うよう命じます！　昨日、ウフドで私たちとともに戦わなかった者たちは行かず、戦いに加わった者が行くように言うのです！」とおっしゃった。彼が教友たちにこの命令を聞かせると、大勢が傷を負った状態でただちに準備を行った。しかも、重傷を

負ったアブドゥッラーとラーフィーという名の兄弟たちでさえ、預言者様の要請を聞くやいなや、あらゆる重くひどい痛みにもかかわらず「預言者様とともに戦いに出る機会を逃してなるものか！」と言って、戦士たちの列へと走ったのだった。

愛すべき預言者様は幸運なる教友たちとともに、不信仰者たちを追い始めた。すると、不信仰者たちはレブハーという地方で集まり、マディーナへ押しかけてムスリムたちを亡き者にしようと決めたということを知った。これに対する警戒もまた、預言者様の一つの奇跡として現れたものであった。

不信仰者たちは、預言者様が自分たちに向かって来るということを聞くと、恐れてその場を捨ててマッカへと戻って行った。

預言者様は彼らをハムラー・ウル・アサドという場所まで追っていった。不信仰者たちの二人が捕らえられた。ここで三日を過ごした後、マディーナへと戻った。

アッラーは、ハムラー・ウル・アサドへと向かったこの名誉ある教友たちについて、クルアーンの章句でこのような意味のことを言われている。『負傷した後でもアッラーと使徒の呼びかけに応えた者、正義を行い、また主を畏れる者には、偉大な報奨がある。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一七二節）

ウフドの戦いで、預言者様を殺そうと誓いを立てたイブニ・カミーアは、マッカへ戻る途中、ある日、羊を見に行こうと山へ登った。頂上で羊を見つけた。すると、その中の一匹の雄羊が、すばやく走っていってイブニ・カミーアに頭突きをし始めた。突きに突いてイブニ・カミーアをばらばらにして殺した。

アブドゥッラー・シハーブ・ズフリも、マッカへと戻る途中、白い斑点のある一匹の蛇に噛まれて死んだ。預言者様を殺そうとした者たちは皆、一年以内に罰を受けて死んでいった。

レジの事件

ウフドの戦いで活躍した射手の一人である、アースム・ビン・サービト様は、この戦いで、不信仰者のムサーフィ・ビン・タルハとその兄弟のハーリスを殺していた。彼らの母親は根に持つことで有名なスラーフェ・ビンティ・サアドで、息子たちのうちの二人を殺したアースム・ビン・サービト様の首を持ってきた者には、百頭のラクダを与えると約束したのだった。そして、アースィム様の頭蓋骨で酒を飲むという誓いを立てた。また、預言者様の送った部隊にいたアブドゥッラー・ビン・ウネイスは、ルフヤーン家のハーリド・ビン・スフヤーンを殺したため、ルフヤーン家の者たちと、アデル族およびカレ族の者たちが同盟を結んだ。

マディーナ近郊にいたこの二つの部族はある計画を立て、使者たちを準備した。彼らに「ムスリムであると言うのだ。『喜捨を施します。これを受け取り、私たちにイスラームを教えるための先生を希望します』と言うのだ。やって来た者の一部を殺し、仇を取ろう。別の一部はマッカに連れていってクライシュ族に売ろう」と言った。

ヒジュラ四年目のサフェル月に、この二つの部族の六人あるいは七人の代表団が預言者様のところへと来て「我々はムスリムとなりました。我々にクルアーンや宗教を教える先生を送ってください」と言った。このとき、愛すべき預言者様は、マッカの不信仰者たちが戦いの準備を行っているかどうかを探るため、十人から成る部隊を準備していた。アデル族とカレ族からこのような代表団が来て、先生を求めたことを受けて、状況を把握し、調査して知らせるよう、この十人の偵察隊をやって来た者たちとともに派遣することにした。教友たちで構成されたこの部隊には、メルセド・ビン・アブー・メルセド、ハーリド・ビン・アブー・ブケイル、アースム・ビン・サービト、フベイブ・ビン・アディイ、ザイド・ビン・デスィネ、アブドゥッラー・ビン・ターリク、ムアッティブ（ムギル）・ビン・ウバイド、および名前が知られていない三人の教友たちがいた。

この偵察隊は、昼間は隠れ、夜は歩くという形で、朝方にレジの井戸の入口に着いた。そこでしばらく休み、アジュ

べという良質のマディーナのナツメヤシを食べた。その後、そこから離れ、近くのとある山へと上って隠れた。そのとき羊を追っていたフゼイル族の一人の女もレジの井戸の入口に来ていた。ナツメヤシの種を見つけて、マディーナのナツメヤシが食べられていることに気が付いた。そして「ここにマディーナから来ている人たちがいるらしい」と叫んで、自分の部族に知らせたのだった。この間、教友たちから成るこの十人の部隊と一緒にいた、アデル族とカレ族の使節の一人が、ある口実をつけてそばから離れた。すぐにルフヤーン家の者たちのところへ行き、知らせをもたらした。

　ルフヤーン家はこの知らせを受けると行動を起こした。百人の射手を含む、二百人の軍をこの小さな部隊に送った。やって来たこの不信仰者たちは、アースム・ビン・サービト様と、その仲間たちを山の上で見つけ、取り囲んだ。そのとき、十人の教友たちのことを不信仰者たちに知らせた者も彼らに加わっていた。こうして教友たちは騙されたことに気付き、戦いを決心して刀を抜いた。彼らのこの行動を理解した不信仰者たちは、さらに彼らを騙そうとして「もし我々に降伏したら、一人も殺さない。固く約束しよう。誓って、あなた方を殺したくはないのだ。ただ、マッカの住民から保釈金を取ることにするだけだ」と言った。

　アースム・ビン・サービトと、メルセド・ビン・アブー・メルセド、ハーリド・ビン・アブー・ブケイルは「不信仰者たちの約束や誓いはいかなるときでも認めない」と言って、すべての提案を拒んだ。アースム・ビン・サービト様は「いかなるときでも不信仰者たちの庇護には入らないと誓ったのです。アッラーに誓って、彼らの庇護や言葉に騙されて、降伏することはありません」と言った。そして、両手を広げ「アッラーよ！　預言者様に私たちの状況を知らせ給え」と言って祈った。アッラーは、アースム様の願いを受け入れ、預言者様に彼らのことを知らせた。

　アースム様は不信仰者たちに「私たちは死ぬことを恐れない。なぜなら、私たちの宗教では、この先があるからです。（死んだとしたら殉教者となり、私たちは天国へ行くのです）」と言った。不信仰者たちの長は「アースムよ！　自分や友人たちを失うな、降伏しろ！」と迫ったが、アースム・ビン・サービトは弓矢を構えた。矢を放ちながら

「私には力がある、足りないものはない
弓矢の強い絃をぴんと張る
詩は真実、人生は空しく尽きるもの
運命は必ずや起こるもの
人は遅かれ早かれアッラーのもとへ
もしお前たちと戦わなかったら
母は悲しみに気が狂うだろう」

という一行連句を読んだ。アースムの矢筒には七本の矢があった。放ったすべての矢で、一人ずつ不信仰者を殺した。矢が尽きると、槍で突いて大勢を殺した。しかし槍も折れてしまった。すぐに刀を抜き、鞘を折った。（これは、死ぬまで戦い、降伏することはない、という意味である）その後「アッラーよ！　私は今日まであなたの宗教を学んできました。今日の終りに際して、私の身体を守るようあなたにお願いしたいのです」と祈った。そして、アースム・ビン・サービト様と他の教友たちは「アッラーフ・アクバル！」と叫んで山々をうならせた。二百人に対する十人の戦士は死に物狂いで戦い、近づこうとする者には罰を与えた。だが、アースム様はついに、二本の足に怪我を負って地面に倒れた。不信仰者たちは、彼のことを大変恐れていたため、倒れても近くへ寄ることができず、遠くから矢を射て殉教させた。その日、その場にいた十人の教友たちのうち、七人が殉教し、三人が捕虜となった。

　ルフヤーン家の者たちは、スラーフェ・ビンティ・サアドに売ろうと、アースム・ビン・サービト様の神聖な頭を切ろうとしていた。しかし、アッラーはアースム・ビン・サービト様の願いを受け入れ、蜂の一群を送った。それらは、雲のようにアースム・ビン・サービト様の上でとどまり、不信仰者たちは近寄ることができなくなった。ついに彼ら

は「放っておこう。夕方になれば蜂は散っていって、我々も頭を切って持っていけるだろう」と言った。

夕方になると、アッラーは激しい雨を降らせた。濁流となって洪水が流れ、アースム・ビン・サービト様の神聖な遺体を持って、知られようもないある場所へと運んでいった。彼らがどんなに探しても見つけることはできなかった。このため、不信仰者たちはアースム・ビン・サービト様のいかなるところも切ることは成し遂げられなかった。蜂たちがアースム・ビン・サービト様を守った出来事が語られたとき、ウマル様は「確かにアッラーは、信者のしもべを保護なさる。アースム・ビン・サービトが存命のとき、不信仰者たちからその身を守ったため、アッラーは彼が亡くなった後でも彼の遺体を守り、不信仰者たちに触れさせなかったのです」と述べている。このためアースム・ビン・サービト様のことは「蜂に護られる方」と言われたのだった。

ルフヤーン家の者たちは、アースム・ビン・サービト様をはじめ、七人の教友たちを殉教させた。また、三人の教友たちは捕虜となっていた。捕虜となった三人の教友とは、フベイブ・ビン・アディィ、ザイド・ビン・デスィネ、アブドゥッラー・ビン・ターリクであった。ルフヤーン家の者たちは、三人を弓の弦でしばった。その中のアブドゥッラー・ビン・ターリクは、マッカの不信仰者たちのもとへと行かされることを拒否し、行かないように抵抗した。そして「殉教者となった仲間たちは天国に入る名誉に与った」と叫んだ。縛られていた手の弦を切ったが、ルフヤーン家の者たちが石を投げつけて殉教者とさせてしまった。フベイブ・ビン・アディイ様とザイド・ビン・デスィネ様は「預言者様が命じていた偵察の任務を行う機会があるかもしれない」と考えて耐えていた。

ルフヤーン家の者たちは二人をマッカへと連れて行った。バドルやウフドの戦いで近親者を亡くしていた不信仰者たちは、恨みや復讐の怒りで燃えたぎり、機会を待っていた。不信仰者のヒュジェイル・ビン・アビールハーブ・テミーミが、バドルの戦いで殺された兄弟の復讐のためにフベイブを、サフワン・ビン・ウマイヤが、バドルの戦いで殺された父親のウマイヤ・ビン・ハラフの復讐をするためにザイド・ビン・デスィネを買った。不信仰者たちの狙いは二人とも殺すことだった。しかし、戦いが禁じられている月に入っていたため、拘留し時間が過ぎるのを待っていた。

彼らは別々の場所で拘留されていたが、二人ともこの捕虜という扱いに、大変な我慢をし、名誉を守っていた。

フベイブ・ビン・アディイが拘留された家にいた、解放されたある女奴隷のマビイェ（この女性は後にムスリムとなった）はこう語っている。

「フベイブは、私がいた家のある独房に拘留されていました。彼ほどに善良な捕虜は見たことがありませんでした。ある日、彼は水差しのような大きなブドウの房を手にしていました。毎日それを食べていました。毎日このようなブドウの房を持っているのが見られました。その季節、マッカでブドウを手に入れることは絶対に不可能でした。アッラーが彼に食事として与えていたのです。拘留されていた独房で礼拝をし、クルアーンを詠んでいました。それを耳にした女たちは泣き、同情していました。ときどき『何か欲しいものはありますか？』と聞くと『私に甘い水をください。像のために犠牲にされた動物の肉は持って来ないでください。もう一つ、彼らが私を殺そうとしたとき、先に教えてください。それ以外望むことはありません』と言っていました。殺される日が近づいたとき、そこへ行って伝えました。それを知っても、ほんの僅かな変化も微塵の悲しみも見られませんでした。その日、彼のところに行くと、亡くなる前に身体を清めたいということで、剃刀を望みました。私は子供の手に剃刀を渡して、彼のところへ行かせました。子供が彼のところへ行くと、私は一瞬、恐怖に陥りました。『何てことを。あの人は子供を剃刀で切るでしょう。どうせ自分が殺されるからと思って』走って子供を見に行きました。

フベイブは剃刀を子供の手から取り、子供をあやそうと膝の上に座らせていました。私はその状態を見ると大変心配し、叫び声を上げ始めました。彼がこの状況を理解すると『この子を私が殺すだろうと思っているのですか？私たちの宗教では、そのようなことはありません。何もないのに命を奪うことは、私たちの行動や名誉ではあり得ないのです』と言いました」

フベイブ・ビン・アディイとザイド・ビン・デスィネを殺すため、不信仰者たちが決めていた日がやって来た。その日、朝早く、鎖が取られ、マッカの郊外にあるテミムという場所に連れて来られた。マッカの住民や不信仰者の名士たちが、

彼らの死刑を見るために集まっていた。周りには大変な人だかりができていた。
不信仰者たちが捕虜を死刑にする場所には、二つの絞首台が立てられていた。フベイブを絞首台に連れて行って縛ろうとすると、彼は「二ラカーの礼拝をするため、私に時間をください」と言った。これが認められ「そこで礼拝をしろ」と言われた。フベイブはただちに礼拝を始め、心安らかに二ラカーの礼拝を行った。集まっていた不信仰者たち、女たち、子供たちは興味深く彼を見ていた。礼拝を終わらせた後「アッラーに誓って、もし、死を恐れ、礼拝を長引かせたと思われる恐れさえなければ、もっと長く礼拝をしていただろう」と言った。このようにして、死刑にされるときに二ラカーの礼拝をすることがスンナとなった由来は、フベイブ・ビン・アディィ様によるところである。預言者様は彼が死刑にされたときに行った二ラカーの礼拝について聞かれたとき、この行動を適ったものであると認められた。
フベイブが礼拝を終わらせると、絞首台に乗せられ縛られた。顔をキブラからマディーナの方に変えさせられた。そして「宗教を戻すのだ。そうしたら自由にする」と言われた。これに対して、彼はこのように返事をした。「アッラーに誓って戻しません。全世界を私にくれたとしてもイスラームから離れません」この返事を聞いた不信仰者たちは「今、あなたの代わりにムハンマド（アライヒッサラーム）がここにいて、彼が殺されればいいと思うのか。もし思うのであれば、お前を解放しよう。家に戻って楽に生きるがいい」と言った。しかし、フベイブは「私はムハンマド（アライヒッサラーム）の足に一つのとげでさえ、刺さることが耐えられないのです」と答えた。不信仰者たちはからかって笑いながら「フベイブよ！ イスラームから戻るのだ。もし戻らないのであれば、間違いなくお前を殺そう」と言った。フベイブは「アッラーの道にいる限り、私にとって、殺されることは重要ではありません」と言い返した。
その後、フベイブは「アッラーよ！ ここには敵以外の顔が見えません。アッラーよ！ 私から預言者様に挨拶をお伝えください。私たちが受けたことを預言者様に知らせてください」と願った。そして「アッラーム・アライカ、預言者様！」と言った。フベイブがこの願いをしたとき、愛すべき預言者様は教友たちと一緒に座っていた。ザイド・ビン・ハーリサはこのように語っている。「ある日、預言者様が教友たちとともに座っていたとき『ワ・アレイヒッサラーム』と言いました。教友たちが『預言者様！ これは誰の挨拶に対する返事ですか？』と聞きました。『兄弟のフベイブの挨拶への返事です。ジブリールがフベイブの挨拶を私に伝えたのです』とおっしゃいました」
フベイブの周りに集まっていた不信仰者たちは「ほら、父たちを殺したのはこの人だ」などと言いながら、若者を槍で攻撃し、神聖な身体を傷つけ始めた。そのとき、フベイブの顔がカアバに向いた。不信仰者たちは顔をマディーナに向き直させた。フベイブは「アッラーよ！ もし私があなたのところでの善良なしもべであるのなら、私の顔をキブラに戻してください」と願った。顔は再びキブラに向いた。不信仰者たちは一人たりとも、彼の顔をカアバ以外に向けさせることはできなかった。そのときフベイブは、絞首台の上で、敵の間で孤独の中で殉教者となることについて詩を詠んだ。不信仰者たちが、手に持った槍で身体を突いて拷問をし始めると「アッラーに誓って、私はムスリムとして死ぬのであれば、打たれて身体のどこから倒れたとしても悔いはありません。これらすべてがアッラーの道にいるためのことなのです」と言った。
フベイブはその後、不信仰者たちについてこのように祈った。「アッラーよ！ クライシュ族の不信仰者全員に災いをもたらしてください。彼ら一団をばらばらにしてください。彼らの命を一人ひとり取って、生き永らえないようにしてください」不信仰者たちはこの願いを聞くと恐怖に陥り、一部はそこから離れていった。残った者の一部は槍を次々に突き、その中の一人が胸に槍を突いた。槍は背中を貫通した。フベイブ様の身体からは血がほとばしり出た。絞首台で吊るされて最後の息を引き取るとき「アシュハド・アン・ラー・イラーハ・イッラッラー、ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ」と言って殉教者となった。
フベイブ・ビン・アディィの遺体は、四十日間、絞首台に吊るされたままになっていた。しかし、身体は腐ったり臭いを放ったりすることはなかった。いつも新鮮な血が流れていた。愛すべき預言者様は彼の遺体を連れ戻すため、教友のズバイル・ビン・アウワームとミクダード・ビン・アスワドを行かせた。彼らは、夜、隠れてマッカへと入った。吊り下げられたままになっていた絞首台からフベイブを下ろし、ラクダに乗せてマディーナへと出発した。この

ことに気付いた不信仰者たちは、大勢の一団で彼らを追った。二人の教友は自分たちを守るため、遺体を地面に置いた。すると、遺体を置いた場所が割れて、遺体を中に引き込み、再び地面が閉じられたのを目にした。その後、マディーナへと向かった。ザイド・ビン・デスィネも梁に縛られていた。宗教を戻そうと強要されていた。しかし、ザイドの信仰は強まる一方だった。これに対して、ザイドには弓矢の雨が降った。その後、サフワン・ビン・ウマイヤの解放されたニスタスという奴隷によって、殉教者とされたのだった。

ビリ・イ・マーウネの出来事

また、同じ年のサフェル月、アラビア半島のネジュド地方に住むアーミル家の司令官、アブー・ベラー・アーミル・ビン・マーリクがマディーナにやって来て、預言者様を訪ねた。預言者様は彼にイスラームを説明し、ムスリムとなるよう勧めた。アブー・ベラーはムスリムとならなかった。しかし、イスラームは美しく、名誉ある宗教であるということを言った。さらに、ネジュドでイスラームを広げるため、教友たちの何人かを送るよう希望した。愛すべき預言者様は「行かせる人たちに対して、ネジュドの住民からの安全の確証が持てません」とおっしゃった。アーミルは「私が保護したら、誰も彼らに危害を与えることはできません」と言い切った。

万物の王は、この明確な約束を受け入れ、スッファの教友たちから七十人の代表団を準備し、ムンズィル・ビン・アーミル様を司令として出発させた。

自分の部族がイスラームの名誉に与るであろうと考えたアブー・ベラーは、スッファの教友たちよりも前に出発し、自分の部族に対し、この代表団を保護することと、彼らに決して危害を加えないよう注意した。甥のアーミル・ビン・トゥファイリ以外は、全員が彼らに手を出さないと約束した。しかし、アブー・ベラーの甥であるアーミル・ビン・トゥファイリは、三つの部族の人々を武装させ、自ら司令官となった。そして、ビリ・イ・マーウネという場所に来ていた教友たちを取り囲んだ。取り囲まれた教友たちは刀を抜き、一人を除いて全員が殉教者となるまで勇敢に戦ったのだった。

この神聖な教友たちの最期の言葉は「アッラーよ！ 今、預言者様に私たちの状況を知らせるのは、あなた以外にありません。彼に私たちの挨拶を伝えてください」というものだった。すると、大天使ジブリール様が大変悲しい様子で預言者様のところへ現れて挨拶を伝えた。そして「彼らはアッラーの御元へと向かいました。アッラーは彼らに満足をし、彼らもまたアッラーに満足したのです」と言った。愛すべき預言者様も「アレイヒムッサラーム」と挨拶の返事をした後、大変悲しい様子で教友たちに向かい「兄弟たちが不信仰者たちとまみえました。不信仰者たちは、彼ら全員を切ってばらばらにし、槍で傷だらけにしました」とおっしゃって、状況を知らせた。

この出来事において、敵と戦っている最中、アーミル・ビン・フヘイレ様の背中に、ジャッバールという人の槍が刺さった。すると、アーミル様は「アッラーに誓って、天国を得ました」と言って、ジャッバールをはじめ他の不信仰者たちの目の前で、天に向かって引かれていった。このことには誰もが驚き、ジャッバールだけはムスリムとなったのだった。

預言者様はレジとビリ・イ・マーウネの事件のことで大変に悲しんでいた。このような悲痛なことを行った部族たちに対し、一ヶ月の間ずっと、礼拝の後、彼らに対して災いがあるよう願い続けた。アッラーは預言者様の願いを受け入れた。その部族たちに恐るべき干ばつと飢饉を与えたのである。そして、伝染病で七百人もが死ぬこととなった。

ナーディル族のユダヤ人たち

ウフドの戦いの後、ヒジュラの四年目、ナーディル族というユダヤ人の部族が、愛すべき預言者様に対して暗殺計画を練っていた。それを大天使ジブリール様が愛すべき預言者様に知らせ、暗殺は未遂に終わった。これに対して万物の王は、約束を破ったこのユダヤ人の部族のところへムハンマド・ビン・サラマを向かわせ「ナーディル族のユダ

ヤ人のところへ行きなさい。彼らに対して、預言者が『この国から出て行きなさい。ここで私と一緒に生活をしないように。あなた方は私の暗殺を計画しました。あなた方に十日間の猶予を与えます。この期間が終わったら、あなた方のうちここにいる者は誰でも首を切られることになります』と命じていることを知らせるため、彼らのところへ行くのです」とおっしゃった。

ムハンマド・ビン・メスレメ様がこの命令を知らせると彼らは恐怖に陥り、出発の準備を始めた。しかし、偽信者の頭であるアブドゥッラー・ビン・ウベイはユダヤ人に対して「決して砦から出ないように。資産や国を放棄して行ってはならない。私の二千人の部下があなた方を助けに行く」と知らせたのだった。そのため、万物の王は教友たちとマディーナの四キロ程先にあるナーディル家の砦に向かって進軍し、軍旗はアリー様が掲げた。そして、砦を包囲し始めた。以前、教友たちに挑んでいたユダヤ人たちは、砦から出る勇気も持っていなかった。偽信者の助けも来なかった。教友たちは砦の出入りを抑え、鳥でさえ出入りすることができないほどだった。この包囲は二十日間ほど続き、最終的にユダヤ人たちは投降した。すべての武器や金銀をムスリムたちに明け渡して、一部はシャームに、一部はハイバルに行かされた。こうして、マディーナのユダヤ人としてはクライザ族だけが残ることとなった。

ファーティマ・ビンティ・アサドの死

飲酒を禁じるクルアーンの章句が、ヒジュラの四年目に啓示された。ウフドの戦いで怪我をし、その後亡くなったウンム・サラマ様の夫は、後に何人かの子供を残していた。ウンム・サラマ様は年を取っており、苦労を重ねている状態だった。愛すべき預言者様は彼女に同情して結婚することとなった。

また、この年、ザートゥルリカの戦いを行い、周囲の不信仰者の部族を制圧した。

また、ウスマーン様と、預言者様の娘であるルカイヤ様との間の、息子のアブドゥッラーが六歳で亡くなった。万

物の王は孫のために礼拝をし、自ら墓に埋葬した。大変に悲しみ、神聖な涙が墓に滴った。墓石を神聖な手で置き「アッラーがしもべの中で同情心のある者と心柔らかい者には慈悲をかけるのです」とおっしゃった。

この年には、アリー様の母であるファーティマ・ビンティ・アサド様も亡くなった。このことに、愛すべき預言者様は深く悲しみ「今日、母が亡くなりました」とおっしゃった。愛すべき預言者様は、祖父のアブドゥルムッタリブが亡くなった後、彼女のところで育てられたのだった。預言者であることを知らせたとき、彼女はただちにムスリムとなる名誉にも与っていた。このため、万物の王は彼女を母代わりとし、大変尊敬をしていた。彼女に対する憐みから、着ていた神聖なシャツを脱ぎ、白布として巻くよう命じた。埋葬の礼拝を行った後、七万人の天使がこの礼拝に参加していたということを知らせた。そして、墓の中まで下りていった。墓での時を楽に、安らいで過ごせるようにと、墓の角を広げるかのように指し示した後、墓の中で身体を伸ばした。

墓から上がると、神聖な目は涙に満ち、その神聖な涙が墓に滴っていた。何という憐みであろうか。彼女は何と幸運な人であろうか… ウマル様でさえ思わず「命をあなたに捧げます、預言者様！誰一人のためにしなかったことを彼女のためになさいました」と言うと、忠実なしもべの中で最も忠実なしもべである預言者様は「アブー・ターリブの後、この女性ほど、私に親切に接してくれた人はいませんでした。彼女は私の母でした。自分の子供たちが空腹だったときも、先に私を満腹にさせたのです。自分の子供たちの服や身体が埃でまみれていても、先に私の髪の毛をとかしてバラの油をつけてくれたのです。彼女は私の母でした。

彼女が天国の着物を着られるよう、私のシャツを白布として着させました。墓の中での時が彼女にとって、安らいで穏やかに過ごせるよう、私は墓で彼女の隣に身体を伸ばしたのです。ジブリールは『この女性は天国の住民です』というアッラーの御言葉を私に知らせました」とおっしゃった。その後、ファーティマ・ビンティ・アサド様のためにこのような祈念をした。「アッラーがあなたをお免じくださいますように。あなたをお赦しくださいますように。そして、あなたに褒賞を与えますように。母よ！　アッラーがあなたに慈悲を給いますように。あなたは空腹のとき、私

を満腹にさせました。あなたは自分で着ずに私に着させ、自分は食べずに私に食べさせてくれました。生かせることも死なせることもアッラーの手にあります。アッラーは永遠です。アッラーは死ぬことはありません。アッラーよ！母のファーティマ・ビンティ・アサドを赦し、お免じください。彼女にあなたの印を知らせ、その墓を広げてください。憐みの中で最も憐みの主であるアッラーよ！　預言者である私と、以前の預言者たちに免じて、私の願いを叶えてください」

　さらに、預言者様の神聖な妻であるザイナブ・ビンティ・フゼイメ様が、三十歳のときに亡くなった。一方、この年、アリー様とファーティマ様の間には二番目の子供であるフサイン様が生まれた。

　この年、マッカの不信仰者たちは、アブー・スフヤーンの司令のもと、二千人の軍とともに、イスラームが広がるのを防ごうと、バドルに向かった。万物の王は、千五百人の勇敢な教友たちとともに、彼らより先にバドルへとやって来た。ムスリムの戦士たちが、自分たちより先にバドルに来ていたことを知った不信仰者たちの心は恐怖に陥った。そのため、メルラーズ・ザハラーンまでしか進軍できなかった。勇敢なイスラーム軍とまみえる勇気はなく、マッカへと戻っていった。預言者様は、名誉ある教友たちとともに、不信仰者たちを八日間待っていた。その後、マディーナへと引き返した。

ムスタリク族との戦い

　ヒジュラの五年目の年、ムスタリク族の司令官のハーリス・ビン・アブー・ディラールが、預言者様と戦うために大勢の人を集めた。彼らに武装させ、マディーナに攻撃をする予定でいた。この情報が愛すべき預言者様に伝わると、ただちに七百人の部隊とともにムスタリク族に対して戦いに出た。ミューレイスィの井戸に司令部を設置し、まず、ムスタリク族をイスラームに宣教した。彼らはそれを拒否し、矢を放って戦いを始めた。預言者様は「全員が一気に

攻撃をしなさい」と命令し、これを受けた教友たちは、ムスタリク族の十人を殺した。司令官は逃げて命は助かったが、娘のバッラを含め、部族の六百人が捕虜となった。やがて、戦利品が分配された。バッラは預言者様の前に上がり「戦利品の持ち主との間で、九百の金の代わりに自由にしてもらえると合意しました。その件でお手伝いいただきたいのです！」と言った。預言者様は同情をし、彼女の望みを叶えて買い取った。その後、解放して自由にさせた。愛すべき預言者様のイスラームの宣教により、彼女はムスリムとなった。彼女がムスリムとなったことに大変喜んだ万物の王は、褒賞として結婚の名誉を与えた。それを見た教友たち全員が「私たちは預言者様の奥様となった方の親戚を、手伝いの者として使うことは恥と感じます」と言って、捕虜たちを解放した。この結婚によって、何百人もの捕虜が解放されたのだった。愛すべき預言者様は、神聖な妻のバッラの名前をジュワイリーヤに変えた。ジュワイリーヤ様について、アーイシャ様は「私はジュワイリーヤより、善良で恵み豊かな女性を見たことがありません」と語っていた。

　イスラーム軍が勝利してマディーナに向かっていくと、周りの不信仰者の部族は恐れをなし、ムスリムに攻撃することがどれほど危険であるかを理解したのだった。

あなたは全世界の医者、私は心の患者
治療を受けようとあなたのもとに来た

背中には罪の山、顔はわら屑のようになり
それを滅ぼそうとここに持ってきた

全世界の長、あなたを愛し感嘆する
あなたとの別れに朝も夜も泣く

あなたの偉大な慈悲は人生の水、私はその水を求める
その一滴がなければ私の命は尽きるのだ

彼を褒め称えるのに脳は苦悩する
アッラーに身を委ねる、
　私の頭が理解できるのはこれだけ

彼の美徳を称賛するのは不可能なこと
彼を言葉で語るのはなお難しい

赦しがあって優しく寛大で
水の真珠、石の玉、棘から出ずるバラ

太陽の光が散るのであれば、それは彼の光
バラの滴がバラのように顔から出ずる

彼を表すのはこれ以上
これ以上に表したら人々が反対するほどに

世界のすべてを一つのものに入れるのは可能でも
言葉で彼を表しきることはできない

　メブラーナ・ハーリド・バグダーディー

塹壕の戦い

ヒジュラの五年目のことだった。マッカから追い出された騒動の原因であるユダヤ人のナーディル族は二つに分かれ、一部はシャームへ、一部はハイバルへと向かった。しかし、イスラームや預言者様に対する恨みや復讐の気持ちが心を覆い続けていた。そして、司令官のフエイが、部族の名士たちの二十人とともにマッカへと向かった。アブー・スフヤーンと話し合い、愛すべき預言者様の神聖な身体を消すことで一致し「このことが終わるまで、離れることなくあなた方とともにあります」と言った。しかし、アブー・スフヤーンは「我々が敵対している者を敵にする者は、我々にとっては受け入れられる者たちです。しかし、あなた方を信頼するためには、私たちの像を崇める必要があります。そうすれば、あなた方が本気であると認め、安心しましょう」と言った。目的を達成するには、自分たちの宗教でさえ裏切るこのユダヤ人たちは、像を崇めようと地面に伏した。啓典を持つ異教徒から、啓典を持たない者へと成り下がったのだった。そして、愛すべき預言者様を消し、イスラームを壊すために誓いを立てた。

　不信仰者たちは、ただちに戦いの準備を始めた。周囲の不信仰者の部族にも人を送った。ユダヤ人もあらゆる部族を説得するため動き出した。いくつかの部族には金やナツメヤシを与えることを約束して武装させた。不信仰者たちは、マッカ周辺の部族から四千人の大きな軍隊を作った。アブー・スフヤーンがダル・ウンネドエという場所で軍旗を掲げ、ウスマーン・ビン・タルハに渡した。この軍には三百頭の馬と、多数の武器、千五百頭のラクダがあった。四千人の不信仰者の軍隊が、メルラーズ・ザハラーンに来ると、スライマーン家、フェザーレ家、ガタファンの住民、ムッレ家、アサド家などたくさんの部族から六千人が加わり、不信仰者たちの軍は合計一万人に達した。これはその時代にあっては大規模な軍隊であった。以前から、預言者様と友好関係を結んでいたフザー族は、ただちにマディーナに情報をもたらそうと使者を送り、十日間の距離を四日間で到着した。そして、預言者様に不信仰者たちの状況を詳しく知らせた。あらゆることを教友たちと話し合ってから実行していた愛すべき預言者様は、ただちに教友たちを集め、状況

を話し合った。戦いをどこで、どのように行うかなどを教友たちが提案をした。この話し合いにいた、サルマーン・ファーリスィ様は許しを得て「預言者様！ 私たちにはある戦いの方法があります。敵が奇襲する可能性を考慮し、周囲に塹壕を掘って防護するのです」と発言した。預言者様や教友たちはこの戦法を気に入り、そのように敵と戦うことに決めた。預言者様はすぐに、教友たちの幾人かと塹壕をどこへ掘る必要があるかを調べた。マディーナの南側は農場で、たくさんの木があった。不信仰者たちがここから全体攻撃をかける可能性は低かった。ここの防護は、少ない部隊で行うこととした。東側には同盟を結んでいるクライザ族というユダヤ人の部族がいた。従って、不信仰者たちは西あるいは北側の空いた土地から攻撃を行ってくると考えられ、この方面で塹壕を掘る場所が決められた。教友たち一人あたりに三メートルほどが割り当てられた。全員、自分に割り当てられたところを二人分の高さ（約三・五メートル）程掘り、速度を上げて走って来る馬が飛び越えられないような幅で塹壕を造ることになった。しかし、時間は少なく、敵はマッカから出発してマディーナへと向かっていた。塹壕は出来るだけ早く掘る必要があった。愛すべき預言者様は、自ら先頭に立って、勇敢な教友たちと「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム」と言って、初めての一掘りを入れた。全員が一秒でも早く掘を完成できるよう全力で掘り始めた。また、子供たちも参加していた。預言者様のために、スバブの丘に一つのテントが準備された。塹壕から出された土は、入れ物で運ばれてこの丘の周りに捨てられ、帰りには敵に投げるため、セル山から石が運ばれた。入れ物が見つからない者は、自分の服で土を運んだ。愛すべき預言者様も疲れるまで働いた。この状況を見た教友たちは一層奮起し「命をあなたに捧げます、預言者様！ 私たちの働きで十分です。あなたは働かないでお休みください」と言うのだったが、預言者様は「私も働くことで、あなた方が得る善行を得たいのです」と返事をされた。

　その当時、天候は寒かった。しかも、その年は日照りのため、飢饉が続いていた。食料を見つけるのはかなり困難だった。万物の王を含め、すべての教友たちは、恐るべき空腹にさいなまれていた。自分たちに力が沸くよう、腹の上に石を押さえつけて胃を締め付け、食欲を抑えようとしていた。全世界に慈悲として送られた愛すべき預言者様は、

自分の空腹を気にすることなく、教友たちがこの寒さの中、空腹で働くことや、受けていた苦難に大変悲しんで同情し「アッラーよ！ 来世以外に求めるものは他にありません。アッラーよ！ アンサールとムハージルをお赦しください」と言って祈念した。彼らも、自分たちの命よりも大切な、アッラーの愛する預言者様に「命が尽きるまで、アッラーの示した道でイスラームを広げるため、預言者様に従います」と言って返事をした。このような互いのやりとりが、空腹や喉の渇きといった苦難を、根こそぎ消していったのだった。

　塹壕を掘るのは、朝早くに始まり、夕方まで続いた。ある日、掘っているとき、アリー・ビン・ハケム様が足に怪我をした。馬に乗せて預言者様のところへ連れていかれた。万物の王が「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム」と言って、彼の足をさすった。預言者様の奇跡により、一瞬にして足の血が止まり、痛みもなくなった。

　塹壕を掘ることは続いていた。教友たちはあるとき、大変固い部分に出くわした。掘ることは不可能だった。預言者様のところへ行き、状態を知らせた。預言者様自らその場所へ行き、塹壕の中に降りた。そして、入れ物に水を持ってくるよう言った。口にひと口水を含み、再びその入れ物に戻した。その後、その水を固い部分にまいた。ハンマーを持ってその場所を打つと、一打で砂のように粉々になり、そこは簡単に掘れるようになった。打ちつけたとき、預言者様の神聖な腹が見え、そこにいる人々は預言者様が空腹のため、胃の上に石を縛っているのを見たのだった。預言者様のこの状況を見たジャービル・ビン・アブドゥッラー様は許しを得て前に上がり「両親をあなたに捧げます、預言者様！ もしお許しがあれば、家まで行ってきます」と言って許可を求めた。許しを得たジャービル様はこのように語っている。

「許しをもらうと家に行き、妻に『預言者様があれほど空腹な状況なのを見ました。耐え難いものです。家に食べるものは何かありますか？』と尋ねました。彼女は『この子山羊と一つかみの大麦以外何もありません』と言いました。すぐに子山羊を切りました。その間、妻が大麦を粉ひきで粉にして持ってきました。それで生地を作りました。肉を土鍋に入れて、かまどで焼き始めました。その後、預言者様のところへ行き『預言者様！ 少ないですが食事があります。何人かを連れて私たちの家へ来ていただけませんか？』と言いました。

預言者様は『料理はどれくらいありますか?』と尋ねました。私はその返事をしました。すると『それなら量も多く、おいしい食事です。私が行くまでかまどから肉もパンも取り出さないように奥様に伝えてください』と言われました。その後、戦士たちに『塹壕を掘っている者たちよ、行きましょう。ジャービルが出す食事があります』とおっしゃると、その命令に従って教友たちが集まり、預言者様の後に歩き始めました。私はすぐに家に戻り、言われたことを妻に話しました。『どうすればいいのでしょう?』と言うと、妻は私に『預言者様は食事の量がどれくらいなのか聞かなかったのですか?』と尋ねました。私は『聞きました。そして私は返事をしました』と答えました。妻は『教友たちを招待したのはあなたですか、それとも預言者様ですか?』と聞きました。『預言者様が招待したのです』と言うと『そうであれば、預言者様がご存知のはずです』と言って私を慰めました。

しばらくすると、預言者様の光にあふれたお顔が、私たちの家の扉の前で見られました。大勢の教友たちに向かって『お互い押し合わないで中に入りなさい』とおっしゃいました…。教友たちの兄弟が十人ずつ一団で座りました。預言者様はパンや肉がたくさんとなるよう祈念しました。その後、土鍋をかまどから取り出さずに、ひしゃくで中にあるものを取ってはパンの上に置いて、教友たちにご馳走しました。すべての教友たちが満腹になるまで、このようなことを続けていました。アッラーに誓って、食事を食べた人数は千人以上だったにもかかわらず、パンや肉はまったく減りませんでした。私たちが食べた後には、近所の人にもご馳走しました」

サルマーン・ファーリスィ様は、大変上手に塹壕を掘っていた。一人で十人分の仕事をしていた。彼も友人たち同様、自分に与えられた場所を掘っていると、大変固く大きな白い岩に当たった。それを割るのに苦労していたが、すべての苦労は報われなかった。しかも、ハンマーやつるはし、スコップも壊れてしまった。サルマーン様は愛すべき預言者様のところへ行き「両親をあなたに捧げます、預言者様! 塹壕を掘っていると、固い岩に当たりました。鉄でできたあらゆる道具が壊れてしまいましたが、石は一寸たりとも動きません」と言って、状況を説明した。アッラーの愛する預言者様はそこに行き、ハンマーを求めた。その場にいた教友たちは結果がどうなることかと見守っていた。

預言者たちの王は下に降り「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム」と言ってから、ハンマーを振り上げ、岩にぶつけた。この一打でマディーナを光に包むほどの稲妻が走った。そして、岩からは破片がはじけ飛んだ。預言者様は「アッラーフ・アクバル!」と言ってタクビールを行った。それを聞いた教友たちもタクビールを行った。そして二打目のハンマーを打ち下ろした。またもや、周りを光らせる稲妻… そして、岩からはじける破片… 愛すべき預言者様はさらに「アッラーフ・アクバル!」と言ってタクビールを行った。それを教友たちが繰り返した。三度目にハンマーを打ち下ろしたとき、周りすべてを光らせる稲妻が走り、岩はばらばらに砕けた。万物の王は再び「アッラーフ・アクバル!」と言ってタクビールを行った。名誉ある教友たちも預言者様に従った。

サルマーン様が手を伸ばし、愛する預言者様を引き上げた。サルマーン・ファーリスィが「両親をあなたに捧げます、預言者様! 人生の中で今まで見たことのないものを見ました。この神意は何でしょうか?」と聞くと、愛すべき預言者様は教友たちに向かって「サルマーンが見たものをあなた方も見ましたか?」と尋ねた。彼らも「はい、預言者様。ハンマーを岩に打ちつけたとき、激しい稲妻が光るのを見ました。あなたがタクビールを行ったとき、私たちもタクビールを行いました」と答えた。すると、預言者様は「一打目の光で、(メダインにある)キスラーの宮殿が私に見えました。ジブリールが現れ『共同体がその場所を手に入れるでしょう』と知らせをもたらしました。二打目では、ルームの町(シャーム)の赤い宮殿が見えました。ジブリールが『共同体はそこも手に入れるでしょう』と言いました。三打目では、サヌア(イエメン)の宮殿が見えました。ジブリールが『共同体はその場所も手に入れるでしょう』と知らせました」とおっしゃった。

その後万物の王が、ペルシアにあるメダインのキスラーの宮殿のことを説明すると、そこの出身であるサルマーン様が「命をあなたに捧げます、預言者様! あなたを真実の宗教と啓典とともに送ったアッラーに誓って言いますが、その宮殿はまさにおっしゃった通りです。あなたがアッラーの預言者であることを認めます」と言うのだった。預言者様は「サルマーンよ! シャームも必ずや征服するでしょう。ヘラクリウスは最も遠い場所へと逃げていきます。あ

なた方は、シャームのあらゆるところを支配するでしょう。あなた方に誰も逆らうことはなくなります。イエメンも必ずや征服するでしょう。あの東国も必ずや手に入れ、王は殺されるでしょう。これらの征服は、私の後、アッラーがあなた方に恵むことになるのです」とおっしゃった。

サルマーン・ファーリスィ様は「預言者様が吉報をもたらしたすべてのことが、現実となったのを見ました」と語っている。

敵はもはや来ようとしているところだった。塹壕は出来る限りの速さで掘られ、少しでも早く終わらせようと全員が働いていた。戦士たちは必要なとき、預言者様の許しを得て仕事を止め、用事を終わらせた後、再び仕事に走って戻った。

しかし、偽信者たちは、もたもたしていて好きなときに仕事に来ては、許しも得ずに止めたりしていた。しかも、教友たちがこのように働いていることをからかって、預言者様のもたらした吉報にも「我々は敵を恐れて塹壕に頼っているのです。それなのに、彼は私たちにイエメンやルーム、そしてペルシアの国々の宮殿を約束しています。あなた方のこの状況には驚くばかりです…」と言っていた。

これに対して、戦士たちのためにクルアーンの章句が下された。『（真の）信者とは、アッラーとその使徒を（心から）信じ、ある要件で（人々が）集まり使徒と一緒にいる時、その許可を得るまでは立ち去らない者たちである。本当に何につけあなたに許しを求める者こそは、アッラーとその使徒を信じる者である。かれらが自分の要件で、あなたに許しを求める時には、良いと思う者は許し、かれらのためにアッラーの御赦しを請え。本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。』（御光章（アン・ヌール）第六二節）

一方、偽信者たちには、次のクルアーンの章句が下された。『あなたがたは使徒の呼びかけを、あなたがた相互間の呼びかけのようにしてはならない。アッラーはあなたがたの中、密かに抜け出す者を知っておられる。それで、かれ（アッラー）の命令に違犯する者は試練が下り、または痛ましい懲罰が科せられるから、用心させなさい。聞け、天と地の

凡ての有はアッラーの有である。かれは、あなたがたのあるが儘を確と知っておられる。かれらがかれの許に帰される日、かれはかれらの行ったことを、かれらに告げ知らせるであろう。アッラーは凡てのことをよく知っておられる。』（御光章（アン・ヌール）第六三、六四節）

塹壕を掘り始めてから六日が経った。全員が自分に与えられた仕事を完全に終わらせた。しかし、一つの場所では時間が足りなかったため、広く、そして深くは掘れなかった。預言者様はその場所について心配をし『不信仰者たちは、ここ以外の場所からは渡れません』とおっしゃった。そのため、この場所に番兵を置くことにした。

不信仰者たちの軍がマディーナにかなり近づいたとき、ユダヤ人のナーディル族の司令官であるフヘイが、クライシュ族の司令官に「マディーナにいるクライザ族のユダヤ人はムスリムたちと同盟を結んでいますが、彼らの司令官であるカアブ・ビン・アサドを騙して、自分たちの側に寝返らせましょう」と伝えた。クライシュ族の司令官は「フヘイよ、すぐカアブ・ビン・アサドのところへ行きなさい。ムスリムたちと結んだ同盟を破り、我々に味方するよう求めるのです」と言った。この同盟の条項の一つには「マディーナに敵の軍が攻撃してきた場合、ムスリムたちとともに敵に対抗すること」というものがあったのである。

ユダヤ人のフヘイは、不信仰者の軍から離れ、夜中、クライザ族のカアブの家へと向かった。扉を叩いて名乗り「カアブよ！我々はクライシュ族の全軍隊や、キナーナ家、ガタファン家などの多くの部族から一万人ほどの軍を連れてきました。もはや、ムハンマド（アライヒッサラーム）と教友たちは助かるまい。彼らを完全に滅ぼすまで、クライシュ族とともにここから離れないと誓ったのです…」と言った。するとカアブは「もし、ムハンマド（アライヒッサラーム）と教友たちが殺されず、クライシュ族やガタファン家が自分の国へと戻ったら、私たちはここで一人取り残されてしまいます。その結果、我々全員が殺されることになるのではないかということが心配です」と言って懸念を表した。しかし、フヘイは「そのような心配をなくすため、クライシュ族とガタファン家から、七十人の人質を求めなさい。この人質があなたのもとにある限り、彼らはここから離れないでしょう。万が一、負けて引き上げることになっても、

私があなた方のもとから離れません。あなた方にもたらされる被害が、私にももたらされることになるからです」と言って、カアブや他のユダヤ人たちを寝返らせ、ムスリムたちとの約束を破らせたのだった。このようにして同盟は破棄された。

フヘイは不信仰者の軍に戻って状況を説明し、クライザ族がムスリムたちを裏切るであろうことを知らせた。

七日後、不信仰者たちは一万人という大軍で、マディーナの西や北に集結して司令部を作った。この司令部は塹壕が作られた場所にあった。不信仰者たちの目的は、この大軍がマディーナを上から下まで焼き尽くし、預言者様や教友たちを殺してイスラームを消すことであった。

彼らは見かけ上、対抗できない力を持つ大軍だった。

しかし、不信仰者たちは考えてもみなかった塹壕という障害を見ると驚き、意気が挫けてしまった。というのも、塹壕は馬が走っても飛び越えられない幅であったからだった。中に落ちれば簡単には外に出られなかった。しかも、鎧をつけた者が上に登るのは、大変困難であった。

愛すべき預言者様は不信仰者たちが来たという知らせを受けると、六日間休まずに働いて疲れ切った教友たちをただちに集め、塹壕の手前側にあるセル山のふもとに司令部を作った。背後にはセル山とマディーナがあり、前方には塹壕と敵があった… また、マディーナでの預言者様の代理人として、イブニ・ウンミ・メクトゥムが残され、女性たちと子供たちは砦に立てこもった。三千人のイスラーム軍には三十六人の騎兵がおり、軍旗はザイド・ビン・ハーリサとサアド・ビン・ウバイダ様が持った。革でできた預言者様のテントはセル山のふもとに作られた。

教友たちは、再び大いなる勇敢さを示そうと、注意深く敵の動きを追っていた。このとき、愛すべき預言者様の前にウマル様が進み出るのが見られた。「預言者様！ 聞いた話ではクライザ族のユダヤ人が、我々との同盟を破り、我々と戦う準備をしているとのことです」と言った。予想外のこの知らせに対し、預言者様は「ハスブナッラーフ・ワ・ニーメル・ワキル（アッラーが私たちとっては充分です。アッラーは大いなる守護者です）と返答した。しかし、非常に悲

しんでいた。今や、イスラーム軍は進退きわまっていた。北と西には不信仰者の軍、南にはユダヤ人がいたのである。

預言者様はズバイル・ビン・アウワーム様をクライシュ族の砦に送った。ズバイル様はそこでの状況を偵察した。戻って来ると「預言者様！ 彼らは砦の修理をし、戦いの訓練や演習をしていました。また、動物も囲っていました」と言って、見たことを説明した。これに対してアッラーの愛する預言者様は、サアド・ビン・ムアズ、サアド・ビン・ウバイダ、ハッワート・ビン・ジュベイル、アーミル・ビン・アウフ、アブドゥッラー・ビン・レバーハをクライザ族に送って、同盟を保持するよう注意した。任務を受けたこの五人の教友たちは、クライザ族のユダヤ人の砦に行き、彼らに忠告を行った。しかし、それは受け入れられなかった。しかも、彼らは侮辱をし始めたのである。ついには「我々の兄弟のナーディル家を祖国から追い出したことは、我々の手足をもぎとったようなものだ。ムハンマド（アライヒッサラーム）とは一体何者だ。彼との間には何ら約束などはない。あなた方の預言者に対して、全員が攻撃をし、殺すことを誓っている。必ずや兄弟たちに加勢することになるだろう」と言ったのだった。

サアド・ビン・ムアズ様と仲間たちは、預言者様の前に上がり、他の人たちには分からないように説明をした。預言者様は「その知らせは伏せておきなさい。しかし、分かっても良い人には明かしなさい。なぜなら、戦争というのは、用心と騙し合いで成り立っているからです」とおっしゃった。

教友たちは塹壕の手前で預言者様を待ち、どのような指示が出るのかを待っていた。しばらくすると、万物の王が勇敢な教友たちのところへと来て「アッラーフ・アクバル！ アッラーフ・アクバル！」とタクビールを行った。これを聞いた名誉ある教友たちも、異口同音にタクビールを行ってアッラーの偉大さを表し、塹壕の向かいにいる大勢の異教徒たちの心に恐怖を与えた。不信仰者たちはタクビールを聞くと「恐らくは、ムハンマド（アライヒッサラーム）や教友たちを喜ばせた知らせが来たのだろう」と言ったのだった。

預言者様は教友たちに「ムスリムの一団よ！ アッラーの征服やその奉仕を喜びなさい」とおっしゃって、勝利するであろう吉報をもたらした。名誉ある教友たちは、今まで多くの出征を行い、バドルやウフドの戦いにも加わっていた。

数や戦力に勝る不信仰者たちを、アッラーの許しと預言者様の願いの恵みにより、毎回敗北させていた。これを知っていた教友たちの先頭に、創造されたものの中で最も大切な預言者様がいる限り、不可能や耐えられない苦悩はなかったのである。周りは寒さや飢饉、激しい空腹にあふれていた。預言者様も含めた多数が、神聖な腹に石を巻き付けて空腹を紛らせていた。そして、向かいにはまるで砂のように大勢の敵がいた!… しかし、名誉ある教友たちにとって、敵が大軍であることや、耐えている苦悩は重要なことではなかった。アッラーこそが最良の保護者であり、アッラーと結ばれいたからである。そして、アッラーに頼り、アッラーに身を寄せていたのだった。

クライシュ族の名士である司令官や、クライシュ族とともに来ていた他の部族の司令官は、一斉攻撃をする前に、塹壕を越えられるところがないか探していた。塹壕を隅から隅まで見回った。果たして、完成途中となっていた幅の狭い箇所で止まり、ここから攻撃することに決めた。不信仰者の軍は司令官の後ろから動き出した。塹壕を見て、また、名誉ある教友たちを見て驚いていた。そして「誓ってこれはアラブ人の戦法ではない。あのペルシア人の勧めたものに違いない」と言っていた。

クライシュ族の司令官たちが、軍隊に塹壕の狭いところを示し「ここから誰が飛び移って行けるのだ?」と問うと、軍の中の五人の騎兵が前に進み出た。彼らは一対一で戦うため、塹壕の向かい側に移ろうとした。教友たちも不信仰者たちの軍も、興味深くこの五人の騎兵の動きを見守った。騎兵たちは、速度を取るため後ろに下がった。その後、馬の向きを塹壕の最も狭い部分に向けて、最高速度で走らせた。猛スピードで走っていった五頭の馬は、一度の跳躍で塹壕の反対側に飛び移ることに成功した。しかし、彼らの後に大勢の騎兵が続こうとしたものの、それらは失敗して塹壕の中に落ちたのだった。塹壕を渡った者の中には、アムル・ビン・アブドという名の大変な力持ちがいた。頭から足先まで鎧を着けて、尊大な様子をしていた。一見して人の心に恐怖を与えるこの人が、ムスリムの戦士たちに向って「私と戦える者が誰かいるのなら、前に出るのだ」と叫んだ。

このとき、アリー様が愛すべき預言者様の前に行き「命をあなたに捧げます、預言者様! 私が彼と戦いましょう」

と言って、許しを求めるのが見られた。鎧でさえ身に付けてはいなかった。教友たちは感心してアリー様を見ていた。愛すべき預言者様は、自らの神聖な鎧を外し、アリー様に着せた。自分の刀も彼につけさせた。神聖な頭からターバンを取り、彼の頭に自らの手で巻いた。その後「アッラーよ! バドルの戦いのときには叔父の息子ウバイダが、ウフドの戦いのとき叔父のハムザが殉教者となりました。私のところには、叔父の息子である兄弟のアリーが残されています。彼をお護りください。あなたの手助けを彼にお恵みください。私を一人にしないでください」と言って願ったのだった。教友たちも「アーミーン」と言った。

祈念やタクビールの中を歩いて進んでいったアッラーの獅子は、馬の上に化け物のように立っていたアムル・ビン・アブドの前に立ちふさがった。目以外のすべてが鎧で覆われていたアムルは、この勇者のことを知らなかった。そして、誰かと尋ねた。彼が「私はアリー・ビン・アブー・ターリブだ」と言って名乗ると、アムルは「兄弟の息子よ! あなたの父は私の親友だった。だから、あなたの血を流したくはない。私の前に出られる叔父の一人はいないのか?」と言って、彼なりに情けをかけた。しかし、アリー様は「アムルよ! アッラーに誓って、私はあなたの血を流したいのだ。しかし、二人は対等である必要があるだろう。それが勇者の名誉にふさわしいものではないか。しかし、私は徒歩であり、あなたは馬に乗っている」と言って、彼に挑んだ。

これを聞いたアムルは勇気があるところを見せようと、すぐに馬から降りて、馬の脚を刀で切り捨て、怒りながらアリー様の前に立ちふさがった。彼が攻撃しようとしたとき、アッラーの獅子は「アムルよ! 聞くところでは、あなたはクライシュ族の一人と出会ったとき、その人の二つの願いのうちの一つを叶えると誓ったということだ。これは本当か?」と尋ねた。彼が「本当だ」と返事をするとこう言った。「それならば、私の一番目の願いは、あなたがアッラーや預言者様を信じ、ムスリムとなることである」と言って宣教をした。これを聞いたアムルは怒り「それはできない。それは私に必要ではないのだ」と言った。アリー様が「では二番目の願いは、戦いを止め、マッカへ戻ることである。なぜなら、預言者様が敵に勝利すれば、あなたはそうすることで預言者様を手助けすることになるからだ」と言った。

アムルは「これもできない。私は復讐をしない限り、香水をつけないと誓ったからだ。他の願いがあるのなら言がいい」と答えたため、アリー様は「アッラーの敵よ！もはやあなたと戦う以外、道は残っていない」と言った。

アムルはこの言葉に笑い「驚くべきかな。アラブの地方で、私の目の前に出る勇気のある者がいるとは思いもしなかった。兄弟の息子よ、誓ってあなたを殺したくはない。なぜなら、あなたの父は私の親友だったからだ。私の前にクライシュ族のアブー・バクルやウマルのような者に出てきてほしかったのだ」と言った。アリー様が「そうであったとしても、私はあなたを殺すためにここに来たのだ」と言い返すと、アムルの頭には血が上った。刀を振りかざして、振り下ろすのは一瞬のことだった。それを待っていたアッラーの獅子は稲妻のように飛びすさり、その攻撃を盾で防いだ。しかし、アムルは、今までこのような盾をたくさん壊してきたのだった。彼の攻撃には、最も強い盾でさえ持ちこたえられなかった。やはり、今回も同じことが起こった。アリー様の盾は壊れ、しかも刀が頭をかすって傷を負った。だが、攻撃の順はアリー様だった。「アッラーよ！」と言って、ズルフィカルをアムルの首めがけて振り下ろしたとき、イスラーム軍からの「アッラーフ・アクバル！アッラーフ・アクバル！」という声が、地や空を揺るがしていた。異教徒の軍では叫び声が上がっていた。預言者たちの王、そして創造された者の中で最上の者の願いは叶ったのである。巨人のアムルは地に倒れ、体からは血が噴き出て、頭は兜とともに飛んでいった。最も信頼を寄せていたアムルが地面に横たわるのを見た仲間たちは、すぐにアリー様に攻撃をした。これを見た教友たちもそこへ走って行った。ズバイル・ビン・アウワームがナウファル・ビン・アブドゥッラーに怪我を負わせ、馬とともに塹壕に落とした。アリー様は塹壕に下りて、ナウファルを二つに分けた。残っていた者たちは、どうにか塹壕を再び越えて戻っていった。不信仰者たちの司令官は、戦いがまだ始まる前に大変な失望に落ちたのだった。

もはや、戦いの方法は決まっていた。胸と胸を合わせて戦うには、塹壕が障害となっていた。矢を使って互いに交戦しようとした。だが、これは決着を延ばすだけのことだった。不信仰者たちはこのようにしていても勝利することはできないと理解し、塹壕のあらゆるところから攻撃するのが最善の方法であろうと考えて攻撃を始めた。一万人の敵が塹壕を渡ろうと試みた。一方では、三千人の名誉あるイスラーム軍が矢や石で彼らが塹壕を超えないよう奮闘した。恐るべき争いが始まった。この争いは夕方まで続いた。

預言者様は夜、塹壕のあらゆるところに番兵を置いた。自らも塹壕の最も狭い場所で当番をし始めた。マディーナには五百人ほどの部隊を見張りのために向かわせ、町中で大声でタクビールを行うよう命じた。こうして、ユダヤ人やクライシュ族の不信仰者たちからもたらされる被害から、女性たちや子供たちを守ろうとしたのである。

クライザ族のユダヤ人たちは、フエイ・ビン・アフタブを不信仰者たちのもとへ遣わし、夜の奇襲を行うため、二千人の軍を求めた。夜、無防備な女性たちや子供たちに攻撃をしようとしたのだった。しかし、ムスリムの戦士たちによる朝までの巡回と「アッラーフ・アクバル！」というタクビールが心に大きな恐怖を与えることとなった。砦に引き返し、よい機会を待つこととし、小隊となってときどきマディーナへ入ることにした。

ある夜、クライザ族の名士のうちの一人であるガッザルが、十人の部隊で預言者様の叔母であるサフィーヤ様のいる家まで来ることに成功した。家の中には女性たちや子供たちがいた。自分たちを守るための武器は一つもなかった。ユダヤ人たちは家に矢を射て、その後中に入ろうとした。部隊の一人が中まで入ることに成功し、周りを確認しようとした。そのとき、愛すべき預言者様の勇敢な叔母様は、周りにいる人々に声を出さないよう注意した後で下に降り、扉のところへと向かった。ターバンで頭をきつく巻き、男のような姿になった後、手にはこん棒を持ち、腰にナイフをつけた。扉をゆっくりと開けて、そのユダヤ人の背後に近づいた。そして、手に持ったこん棒を激しく頭に打ちつけた。一瞬でユダヤ人を地面に倒して殺したのだった。その後、殺されたユダヤ人の頭部を、外で弓を射ているユダヤ人たちに投げつけた。仲間の切られた頭が自分たちの足元に転がるのを見たユダヤ人たちは恐怖に陥って逃げ始めた。そして「ムスリムたちの家には男が一人も残らず、全員戦地に行っているという情報がもたらされていたのだが…」と文句を言っていたのだった。

朝になると、戦いはまた同じように激しく続いた。弓は空で音を立てて飛び交っていた。万物の王は、名誉ある教

友たちに「私の存在を力ある手に持つアッラーに誓って言います。私たちがまみえた苦悩は、必ずや取り除かれます。あなた方は平安に導かれるのです」と言って、彼らに忍耐を勧め、勝利は信仰する者たちのものであるという吉報をもたらした。この吉報を聞いた勇敢な教友たちは、空腹や食料不足などの苦悩を忘れ、一生懸命に奮闘した。一人の不信仰者も塹壕を渡らせることは許さなかった。教友たちの名士の一人である、サアド・ビン・ムアズ様は、大変な勇敢さを見せて戦っていた。戦いの際、ヒッバン・ビン・カイス・ビン・アラーカという不信仰者が射た矢で腕に怪我をした。矢は脈に命中したため、たくさんの血が流れることとなった。サアド様は怪我をしたとき、周りの人が血を止めようとしているのを見て、状態が悪いことを理解し「アッラーよ！クライシュ族が戦いを続けるのであれば、私の命を助けたまえ。なぜなら、あなたの預言者様を虐待し、彼を否定したこの不信仰者たちと戦うこと以上に好ましいことはないからです。もし、行っている戦いを終わらせるのであれば、私を殉教者の地位に上げてください。しかし、クライザ族の末路を見る前には命を取り上げないでください」と言って願った。願いは叶い、血は止まった。

一方、教友たちとともに戦っているように見えるアブドゥッラー・ビン・ウベイなどの偽信者たちは、極めて漫然として、前線に近づこうとはしなかった。しかも、ムスリムの戦士たちの士気を落とすようなあらゆることをしながら「ムハンマド（アライヒッサラーム）はあなた方に、カイセルやキスラーの宝を約束した。しかし、今、我々は塹壕の内側に囲まれてしまっている。恐怖で用を足しに行くことすらできない。アッラーや預言者は私たちを騙している以外何ものでもないし、望みも与えてはくれないのだ」と言って、反乱を起こそうとしていた。動きがとれなくなったときには、家に敵が攻撃しているという口実を作って任務を放棄し、居場所を離れたりした。偽信者たちのこの行動は、もう一つの悩みの種であり、心配事であった。

不信仰者の軍は、一秒でも早く結果を出すため、全力を費やしていた。しかし、名誉ある教友たちの勇敢な防御に、まったく動きを取ることができなかった。最も攻撃をしていたところは、塹壕が狭くなっている部分だった。愛すべき預言者様はここから離れず、教友たちを戦いに激励していた。預言者様の隣で、戦いをするという名誉に与っていた教

友たちは戦地で類を見ない勇敢さを示していた。ある時、不信仰者たちが激しく弓矢を射始めたのが見られた。すべての的は万物の王のいたテントだった。

愛すべき預言者様は、神聖な身体を鎧で覆っていた。神聖な頭には兜があった。テントの前でしっかりと立ち、戦況に応じて教友たちに命令を出していた。不信仰者たちが、ときどき最も弱いと思われる場所を急襲すれば、神聖な教友たちはそこへと走って、宗教の敵を撃退するまで心を込めて戦っていた。この例を見ない戦いは、非常に激しく続き、勇敢な教友たちは戦うこと以外、周りを見る暇もなかった。その日、朝から始まった戦いは、遅い時間まで続いていた。礼拝の時間が来たとき、名誉ある教友たちが「預言者様！礼拝をまだ行っていません」と言うと、世界の王も大変悲しんで「アッラーに誓って、私もまだ行っていません」とおっしゃった。夜の礼拝の頃になって、礼拝をさせなかった不信仰者たちを激しい攻撃で撃退し、散り散りにさせた。ばらばらになった状態をまとめることができなかったクライシュ族とガタファン家は、夜を過ごすため司令部に引き返した。ムスリムの戦士たちは、愛すべき預言者様のテントの方に歩き出した。このとき、全世界に恵みとして遣わされた万物の誇りである預言者様は、彼らが礼拝をさせなかったことに我慢できず、その習慣にはなかったものの、災いをもたらすよう願い「彼らは太陽が沈むまで私たちを動かし、礼拝から引き止めました。アッラーが彼らの家、そして腹の中、墓の中に火を満たしますように」とおっしゃり、不信仰者たちに災いがあるよう祈ったのだった。時間どおりに行えなかった昼や午後、夕方の礼拝を行った後で夜の礼拝を行った。

イスラームを根底から滅ぼそうと不信仰者たちが行っていたこの戦いの後、昼間ではムスリムたちに勝利できないであろうことを理解した。彼らにとっての唯一の方法は、同様の激しさで夜襲をかけることだった。ムスリムたちには、この方法でしか勝利できないと考えたのである。この決定はただちに実行され、ユダヤ人のクライザ族とともに夜襲を行い始めた。軍隊をたくさんの集団に分けた不信仰者たちは、順番に攻撃を仕掛けた。この状態が何日間も続いた。愛すべき預言者様をはじめ、勇敢な教友たちは空腹や寝不足、疲労の中で守り続けた。敵の軍隊を一人でさえ、

塹壕の内側に渡らせなかった。懸命に行われたこの防護は、以前に行われたあらゆる戦いよりも、恐ろしく、激しく、苦しいものであった。

数日間戦っていた不信仰者たちは、食糧不足が起こり始めた。馬やラクダも、土地に草が見つからずに死に始めた。このため、不信仰者たちの司令官はディラール・ビン・ハッタープに命じて、ある部隊をユダヤ人のクライザ族のところへ送って、備蓄食を得てくるようにした。不信仰者たちにあらゆる物資を手配していたユダヤ人たちは、ただちに二十頭のラクダいっぱいに小麦や大麦、ナツメヤシ、動物のためのわらを載せて引き渡した。ディラールとその部隊が喜んで帰る途中、クバーの近くで教友たちの一団と出会った。勇敢な教友たちはすぐに攻撃を行った。激しい戦いの後、不信仰者たちを退散させ、荷をつけたラクダを預言者様に差し上げた。預言者様は彼らのために多くの祈念を行った。

万物の王は、一ヶ月近く続いたこの激しい戦いにより、大変に苦労していた勇敢な教友たちに同情をし、彼らの両親よりもさらなる憐みを示していた。名誉ある教友たちが示していた人並み外れた努力に対し、自らの神聖な額を地につけ、彼らのためアッラーに対してこのように懇願した。「困窮する者を助け給うアッラーよ！　窮乏する者、手立てのない者の願いに応えるアッラーよ！　私や教友たちの状況を必ずやご覧になっており、お分かりでしょう。アッラーよ！　不信仰者たちを敗北させ、彼らを仲間割れさせ、彼らに対抗する私たちを助け、勝利にお導きください」

愛すべき預言者様のこの願いは、戦いの終盤、しばしば続けられた。

不信仰者たちは食料不足のために苦しんでいたため、一日でも早くムスリムたちを滅ぼそうと、全力を費やしていた。このように戦っていたある夜、不信仰者たちの軍から、心にイスラームへの愛情を持つ一人が預言者様の前に現れた。この人は、ガタファン家のヌアイム・ビン・マスードであった。そして、愛すべき預言者様に「預言者様！　私はアッラーが唯一であること、そして、あなたが真実の預言者であることを認めるために来ました。ムスリムとなる名誉に与ったことに感謝します。私は今まで、あなた方に対して戦っていました。しかし、今からは不信仰者たちに対して戦い

ます。預言者様！　私にどのような命令があったとしても、その通りに行います。私がムスリムとなったことを、私の部族はまだ知りません」と言った。預言者様は「あの不信仰者たちの間に入って、意見の食い違いを起こし、仲間割れをさせることはできますか？」と尋ねた。彼は「預言者様！　アッラーの助けがあれば、彼らを仲間割れさせることができましょう。しかし、どのようなことを言っても許されるのでしょうか？」と聞いた。これに対して預言者様は「戦争は計略です。好きなことを言って構いません」とおっしゃった。

ヌアイム・ビン・マスード様は、まずユダヤ人のクライザ族のところへ行って「私のあなた方に対する愛情はご存知のことでしょう。しかし、今から話すことは秘密にして、明かさないようにしてください」と言った。ユダヤ人たちは「誰にも知らせません」と誓った。これを受けてヌアイム様は「あの人（預言者様）の行うことは、間違いなく災いです。彼がナーディル家やカイヌカー家にしたことをご存知のことでしょう。彼らを祖国から、家から追放したのは皆が目撃しているところです。今、クライシュ族やガタファン家が来て、ムスリムたちと戦っています。あなた方も彼らに手助けをしています。しかし、何日間も戦っているにもかかわらず、まだ結果は出ていません。この形で包囲が続いたら、戦いはもっと長引くでしょう。クライシュ族やガタファン家の資産や財産、土地、子供たちは、あなたたちのようにここにあるわけではないのです。もし勝利することができたら、彼らは戦利品を集めて戻っていきます。逆に、敗北することとなっても、そのまま帰るだけです。ただ、あなた方だけがムスリムたちに対して残されるのです。しかし、あなた方だけでムスリムたちと戦う勢力はありません。この戦いの状況では、ムスリムたちが勝利するように見えます。考えた通りとなったら、ムスリムたちはあなた方を刀で切りつけるでしょう。ですから、急いで用心する必要があるのです…」と言った。

大変に緊張し、恐怖の中でこの言葉を聞いていたユダヤ人たちは、ヌアイム様が自分たちのことをここまで心配してくれることに満足した。そして「あなたは私たちの親友としてふさわしい態度を示しました。私たちがどのような用心をすべきか話してください」と言った。この機会を待っていたヌアイム・ビン・マスードは「率直に言うと、ク

ライシュ族とガタファン家から人質を取らない限り、ムスリムたちとは決して戦わないようにすることです。人質があなた方のところにいる限り、彼らが戦いから逃げることはないでしょう」と言った。この言葉も気に入ったユダヤ人たちは彼に感謝をし、歓待して食事をふるまった。

　ヌアイム様はユダヤ人たちから別れると、まっすぐにクライシュ族の司令部に入った。そして、司令官にこう言った。「私のムハンマド（アライヒッサラーム）に対する敵対心や、あなた方に対する愛情をご存知のことでしょう。耳にしたある情報を、親友であるあなた方に知らせるのは私の任務であります。しかし、今から言うことを誰にも言わないよう約束し、誓っていただく必要があります」彼らは誓い、心配をしながら「話すのだ、聞こう」と言った。「知っていただきたいことは、クライザ族のユダヤ人たちが、あなた方との同盟に後悔し、ムハンマド（アライヒッサラーム）にこのような知らせを送ったということです。『クライシュ族やガタファン家の名士たちの首を切るため、人質をとってあなたに渡します。その後、あなたとともに不信仰者たちを滅ぼすまで戦いましょう。しかし、兄弟であるナーディル家を赦して祖国に戻るようにさせてください』ムハンマド（アライヒッサラーム）はユダヤ人のこの望みを受け入れたらしいとのことです。もし、ユダヤ人たちがあなた方から人質を求めたら、決して認めてはなりません。全員が殺されるでしょう。決して私の言ったことを誰にも言わないように…」と語った。クライシュ族はこの重大な情報に対して、ヌアイムに多くの感謝をし、彼を丁寧にもてなした。

　ヌアイム・ビン・マスードはそこから離れ、ガタファン家のところへ行った。そして、クライシュ族に話したことを彼らにも伝えた。

　翌日、クライシュ族の司令官が、クライザ族に「もはやここにいることは我々にとって困難である。なぜなら、天候も寒く、動物たちも空腹で死んでいるからだ。今夜、十分な準備をし、明日、全員が一団となって激しい攻撃を行う」という知らせを送った。するとユダヤ人たちは「私たちは土曜日には戦いません。そして、あなた方と一緒に戦いに参加するには、あなた方の名士たちの何人かを人質として預かる必要があります。もし、包囲期間が長引き、あ

なた方が諦めて祖国に戻ったら、私たちはムハンマド（アライヒッサラーム）に引き渡されることとなるのです。しかし、あなた方が人質を預けるのであれば、私たちを残してはいかないでしょう…」と伝えた。この知らせがクライシュ族の司令官に届くと「ヌアイム・ビン・マスードの言葉は本当だった」とつぶやいた。そして、ユダヤ人に再び知らせを送り「私たちはあなた方に一人の仲間でさえ人質として渡さない。もし、明日私たちと共に戦うのであれば、それでよろしい。その逆であるなら、私たちは祖国に戻ることとする。そうすると、あなた方がムハンマド（アライヒッサラーム）や教友たちと、一対一になるだけである…」と伝えた。

　これを聞いたユダヤ人のクライザ族は、ヌアイムの言ったことが本当であると考え「この状況では、私たちはあなた方と共に、ムスリムたちと戦わない…」と返答した。このようにして、双方が疑心暗鬼となっていった。

　このとき、預言者様のもとへ大天使ジブリール様が現れ、アッラーが竜巻で不信仰者たちをばらばらにするという吉報をもたらした。これに対して、万物の王は、神聖な膝をついて座り、神聖な手を上げ「アッラーよ！ 私や教友たちを憐れんで下さることに感謝します」と言って、アッラーに感謝をした。その後、教友たちにこの吉報を知らせた。

　それは土曜日の夜だった。辺りは恐るべき暗闇で覆われ、一寸先も見えなかった。ついに、激しい寒さの後、猛烈な風が吹き始めた。この夜のことをフゼイフェト・イブヌ・イェマン様がこのように語っている。

「あの夜ほどに暗い夜はありませんでした。激しい暗闇の中で、雷のような音を立てて恐ろしい風が吹き始めました。そのとき、不信仰者たちの軍は焦って恐怖に陥り、仲間割れしたということを預言者様が私たちに知らせました。私たちは、厳しい寒さや空腹、暗闇の恐ろしさから立つこともできず、上から何かを被って待っていました。

　預言者様は礼拝を始め、夜のしばらくの間を礼拝で過ごした後、私たちにこのようにおっしゃいました。『あなた方の中で不信仰者たちの軍のところへ行って、状況を調べて私に教えてくれる人はいますか？ その知らせを持ってくる者は、天国で私と友となるようにアッラーに願います』その場にいた人たちは空腹や寒さのため立ち上がることができませんでした。やがて、預言者様は私のところへいらっしゃいました。寒さや空腹から両膝を丸めて座っていまし

た。預言者様は私に触れ『あなたは誰ですか？』とおっしゃいました。『私はフゼイフェトです、預言者様』と答えました。すると、預言者様は『あの部族たちが何をしているのか、行って見て来なさい。私のところに戻って来るまで、彼らに矢や石を投げてはなりません。槍や刀も使わないように。あなたが私のところに戻って来るまで、寒さからも暑さからも害は受けません。捕虜にされることもなければ、虐待されることもないのです』とおっしゃいました。

　私は刀や矢を持ち、向かう準備を整えました。預言者様は私のため「アッラーよ！　彼を前後左右から、上からも下からもお守りください」と言って願いをかけてくれました。

　不信仰者たちの方へと歩き出しました。まるで風呂の中を歩いているようでした。アッラーに誓って、怯えや寒さ、恐怖は感じませんでした。ついに、不信仰者たちの司令部に近づきました。司令官や名士たちが防護壁の中で、火をともして体を温めていました。アブー・スフヤーンは『ここから退却すべきだ』と言っていました。その場で彼を殺そうと思いました。矢筒から一本の矢を出して、弓に当てがいました。火の明かりを頼りに彼に当てようとしました。しかし、ちょうど矢を放とうとするとき、預言者様が「私のところに戻って来るまで、何事も起こさないように」とおっしゃっていたことを思い出して、彼を殺すことを思い留まりました。その後、自分の中に強い勇気を感じました。不信仰者たちのところへ行き、火の前に座りました。見たことのない激しい風や目には見えないアッラーの軍隊（天使たち）が、彼らに苦悩を与えていました。風で持ち物は倒れ、火や光は消えてテントが頭に落ちてきました。そのとき、不信仰者たちの中からアブー・スフヤーンが立ち上がり『この中に偵察やスパイがいるかもしれない。注意しろ。全員、隣にいる者が誰か確認するのだ。全員、隣にいる者の手を取れ』と言いました。アブー・スフヤーンが、自分たちの中によその者が入っていたことに気付いたようでした。私はすぐに両手を伸ばし、右や左にいる人の手を取って、彼らより先に名前を聞きました。こうして、自分が何者か知られずに済みました。

　ついに、アブー・スフヤーンが軍にこう命令しました。『クライシュ族よ！　あなた方は耐えうる場所にいないのだ。馬やラクダも死に始めた。食料不足があらゆるところで起こっている。風で起こったことも見ただろう。ただちに移

動して帰還するのだ。さあ、私も戻ろう』そして、ラクダにまたがりました。不信仰者たちの軍は、惨めな状態で集まってマッカへと歩き出しました。しかし、彼らの上には砂や小石が降ってきました。

　不信仰者の軍隊が去っていくと、私は預言者様の方へ歩き始めました。途中まで来たとき、前に二十人ほどの白いターバンをした騎兵たち（天使たち）が現れました。そして、私に『預言者様に知らせなさい。アッラーが敵をばらばらにしました…』と言いました。預言者様のところへ着いたとき、預言者様は敷物の上で礼拝をしていました。私は戻るやいなや、行く前の寒さと震えが戻ってきました。預言者様は礼拝の後、どのような知らせを持って来たのか尋ねました。私は不信仰者たちが散々な状態に陥り、帰っていったことを知らせました。預言者様はこの知らせに大変喜び、微笑みました。何日間も寝ていらっしゃいませんでした。預言者様は、座っていた敷物を、私にもかけてくれました。その夜はそのようにして過ごし、朝を迎えました。朝、預言者様が私を起こしました。朝になると、不信仰者たちの軍隊はいなくなっていました。彼らがマッカの近くに来るまで、彼らの後ろからは激しい風が吹き、タクビールの声が聞こえていました。

　クライシュ族の不信仰者たちが司令部を離れて逃げると、彼らに従ってきた他の不信仰者の部族たちもマディーナを離れました。彼らは忘れ難い敗北の悲壮感に満ちていました。彼らがこの敗北を喫したとき、万物の王と名誉ある教友たちは感謝の礼拝を行って、その気持ちを表しました。ムスリムの戦士たちは『アッラーフ・アクバル！　アッラーフ・アクバル！』という声の中、光にあふれたマディーナへと歩き出しました。マディーナの町中は一瞬にして子供たちであふれ、万物の王や神聖な父たちや叔父たち、兄たちを迎えに出ました。預言者様は笑みをたたえて、彼らに対しました…」

　塹壕の戦いでは六人の殉教者が出た。この戦いについて、アッラーがクルアーンの章句でこのようにおっしゃっている。『アッラーは不信心な者たちを、怒りのうちに（アル＝マディーナから）何ら益するところなく撤退なされた。戦いには、アッラーは、信者たちの戦闘を（強風や天使によって）凡てにわたって、守って下さる。アッラーは強大に

して偉力ならびなき方であられる。』（部族連合章（アル・アハザーブ）第二五節）
『信仰する者よ、あなたがたに与えられたアッラーの恩恵を念え。大軍があなたがたに攻め寄せて来た時、われはかれらに対し大風と、目に見えぬ軍勢を遣わした。アッラーは、あなたがたの行うことを（明確に）御存知であられる。』（部族連合章（アル・アハザーブ）第九節）

この戦いの後、愛すべき預言者様は「これからは、あなたがたの番です。今後、クライシュ族があなた方に対して攻撃することはありません」とおっしゃった。

クライザ族のユダヤ人たち

預言者様はマディーナに戻ると、アーイシャ様のいる家に向かい、武器や鎧を外した。神聖な身体は埃にまみれていたため、身体を清めた。そのとき、ドゥフエ様の姿で、鎧を着けて武器を持った一人の騎兵がやって来た。これは大天使ジブリール様だった。預言者様のもとへと来ると「アッラーの預言者よ！アッラーがクライザ族に対してただちに攻撃するよう命じています」と言って、命令を伝えた。万物の王は、ビラール様を呼び、教友たちに知らせるよう、次のような命令を伝えた。「教友たちよ！立ち上がりなさい。馬やラクダに乗るのです。信仰する者は、午後の礼拝をクライザ族の場所で行います」

アッラーが愛する預言者様は、ただちに鎧を着け、刀を身にまとった。兜を神聖な頭にかぶり、盾を背中にして槍を手に持った。そして、馬にまたがった。教友たちのところへと行って、アリー様にイスラームの軍旗を渡し、先鋒としてクライザ族のユダヤ人の砦へと行かせた。いつもの通り、アブドゥッラー・イブニ・ウンミ・メクトゥムが代理としてマディーナに残された。

名誉ある教友たちは、愛すべき預言者様を中央にして「アッラーフ・アクバル！アッラーフ・アクバル！」とタク

ビールを行ってマディーナから出発した。途中、ガンマ家の人々と出会った。武器を身につけ、預言者様を待っていた。預言者様は彼らに「あなた方は誰かに出会ったのですか？」と尋ねた。すると「預言者様！私たちはドゥフエ・イ・ケルビと出会いました。鞍をつけた白いロバに乗っていました。そのロバには、サテンのベルベッドがありました」と答えたのだった。愛すべき預言者様は彼らに「それはジブリールです。クライザ族のところに送られたのです。彼らの砦を揺るがし、心に恐怖を与えるために…」とおっしゃった。クライザ族の砦に行くまでに、イスラーム軍の数は三千人に達していた。

アリー様はイスラームの軍旗をユダヤ人のクライザ族の前に立てた。これを見たユダヤ人たちは、預言者様に対抗する言葉を言い放った。アリー様はこのことを預言者様に伝えて状況を説明した。預言者様は、三千人の軍とともにそこへ来た後、憐みをかけて、まずは彼らをイスラームに宣教した。ユダヤ人たちはこの提案を受け入れなかった。愛すべき預言者様は「そうであるなら、アッラーや預言者の命令に従って、砦を出て降伏しなさい」とおっしゃったが、それも拒否した。そのため、万物の王は弓の名手である、サアド・ビン・アブー・ワッカース様に「サアドよ！進み出て彼らに矢を射なさい」とおっしゃった。サアド様と他の射手たちは、矢筒の矢をタクビールの声の中、ユダヤ人の砦に向って放ち始めた。彼らも矢や石を投げ返し、戦いが始まった。

ムスリムたちが劣勢なときには裏切り、妬みから預言者様を認めなかったユダヤ人の一団は、砦の扉を開けて外に出る勇気すらなかった。

戦いでは包囲が続いた。イスラーム軍の中にいる偽信者たちは、隠れて砦に情報を送り「決して降伏しないように。マディーナから出ていくように求められたとしても、受け入れてはなりません。もし戦い続けるのなら、私たちは全力であなた方を助け、あらゆることに尽くしましょう。もし、あなた方をマディーナから追い出すのであれば、私たちも一緒に出ていきます…」と言っていた。この情報により、ユダヤ人たちは偽信者の助けを待ち、改めて防衛戦に決意や希望を持ったのだった。包囲は長引き一ヶ月が過ぎたが、偽信者からの助けは来なかった。心には恐怖が芽生え、

協定を結びたいと知らせてよこした。

協定を結ぶため、ネッバシュ・ビン・カイスという名のユダヤ人が預言者様の前にやって来た。そして「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ ナーディル家に示した憐みを私たちにも見せてください。資産や武器はあなたに渡します。命だけは助けてください。子供や女たちとともにこの場所から出ていくことで許してください。家族ごとに一頭のラクダ分の武器を除いた荷物を持って行くことを許してください…」と言った。万物の王は「いいえ、この提案は受け入れられません」とおっしゃった。そこで「荷物を持って行くのはあきらめましょう。女たちや子供たちを連れて行くことをお許しください」と言った。愛すべき預言者様は「いいえ、無条件で頭を下げて服従し、降伏する以外に道はありません」とおっしゃった。ユダヤ人のネッバシュは散々な体で砦に戻り、話し合いの結果を語った。今やクライザ族は大きな悲嘆に沈んでいた。

族長であるカアブ・ビン・アサドは良心を取り戻し、部族にこのような告白と提案を行った。「我が部族よ！ 我々は目にしたとおり、大いなる災難に見舞われました。この件で、あなた方に三つの提言をしよう。その中から好きなものを選んで、実行するがよい。一つ目は、彼に従い、預言者であることを認めることだ。アッラーに誓って、彼がアッラーから送られ、そして、救世主としての特徴を書かれた預言者であることを私たちは分かっている。もし、彼を信じるのであれば、命や子供たち、女たち、資産は助かる。我々が彼に従わない唯一の理由は、アラブ人に対する妬みと、彼がイスラエル家から出なかったことにある。だが、それはアッラーが知ることだ。彼に従うのだ…」しかし、ユダヤ人の全員が反対した。そして「いいえ、私たちはそれを受け入れられません。私たち以外の者には従いません」と言うのだった。

次にカアブは、二つ目の提案をした。「全員が子供や女たちを殺し、後に考えるものをなくしたら、ムスリムたちに攻撃をしよう。死ぬまで戦うのだ…」ユダヤ人たちはこれも拒絶した。

カアブは三つ目の提案をした。「今夜は土曜の夜である。ムスリムたちは、今夜我々が戦わないことを知っているため、

安心して気が緩んでいるだろう。刀を抜いて扉から全員出るのだ。このような急襲によって勝利ができるかもしれない…」しかし、ユダヤ人たちは「土曜日に働くのを禁じることを変えません」と言って、この提案も拒絶した。ただ、彼らの中からエスィドとセレベという兄弟と、その叔父の息子のアサドが、一番目の提案を受け入れ、ムスリムとなる名誉に与った。砦から出て、教友たちのところへと向かった。

ユダヤ人たちは、自分たちの中で長い間議論をした。結果として、降伏の旗を上げ、預言者様の判断を仰ぐため、一人を調停人として指名するよう依頼した。預言者様は「教友たちの中から、好きな者を調停人として選んで構いません」とおっしゃった。そこで彼らは「我々はサアド・ビン・ムアズの判断に従います」と言った。預言者様はそれを受け入れ、サアド・ビン・ムアズ様に来るよう命じた。

サアド・ビン・ムアズは塹壕の戦いで重傷を負っていた。預言者様は彼を、預言者モスクにあるテントの中で治療させていたが、調停人に選ばれたため、サアド様を担架でクライザ族の砦に連れて行った。途中、サアド様は自分自身に「アッラーに誓って、アッラーの道で私を非難した者に対しては、誰一人耳を貸さない」とつぶやいた。預言者様の前まで来ると担架から下ろされた。預言者様は「サアドよ！ 彼らはあなたの調停に基づいて、降伏することを受け入れました。彼らに対する処置を私に教えてください」とおっしゃった。サアド・ビン・ムアズは「命をあなたに捧げます、預言者様！ 必ずや、判断をするのは、アッラーと預言者様の方がふさわしいのです」と答えた。しかし、預言者様は「彼らについての決定を下すことを、アッラーがあなたに命じているのです」とおっしゃった。サアド様はユダヤ人に対し、決定に従うことについて固い約束を求めた。両者は下される決定がどうなるのか見守っていた。これに対して、サアド様は骨髄が固まるほどに自らの名誉にふさわしい偉大な決定を述べた。

「理性ある成人男性はすべて首を切ることに決定する。女たちと子供たちは捕虜とし、資産はムスリムたちの間で分配することとする…」

この決定に対して、ユダヤ人たちは固まった。なぜならば、自分たちの啓典である旧約聖書には、狂暴な者たちに

対する罰が正にこのようなものだったからである。『ある町へ戦いに入ったときには、まず彼らに和平を呼びかけろ。これを受け入れ、扉を開くのであれば、その中の全員があなたに貢物を捧げ、手伝うようにさせるのだ。逆に、戦うことに決めたなら、彼らを包囲しろ。アッラーの恵みによって彼らに勝利したとき、男全員を刀で切り、女たちや子供たち、資産は戦利品としてもらうのだ』と書かれていたのだった。

サアド・ビン・ムアズ様の下した決定がアッラーの判決に適っていたため、万物の王である愛すべき預言者様は彼を称賛した。そして「あなたは彼らについて、アッラーの七つの空の上にあるラウフ・マフフーズ〔訳注…すべての運命、出来事が刻んである天の書版〕に適った決定を下しました」とおっしゃって評価したのだった。

ユダヤ人たちは、自分たちの旧約聖書に書かれているこの決定に反対はできなかった。理性ある成人男性全員が集められて縛られ、決定どおりに行われた。子供や女たち、資産は教友たちの間で分配された。

このようにして、ムスリムたちが最も困難なときに裏切り、結んでいた協定を破り、預言者様が子供のときからその時に至るまで、神聖な身体をなくそうと奮闘していたこの部族は、マディーナから消えたのだった。教友たちは安心の中で喜び、光に満ちたマディーナへと向かって行った。

捕虜の中で一人の女性がムスリムとなる幸福に与った。彼女のこの行動に大変喜んだ愛すべき預言者様は、彼女を喜ばせ、天国での地位を上げるため、同情して彼女を妻として受け入れた。これが、レイハーネ様であった。

サアド・ビン・ムアズ様の殉教

サアド・ビン・ムアズは、ユダヤ人のクライザ族について決定を下した後、再びテントに戻った。傷は悪化し、状態はひどくなっていた。預言者様は彼のもとへと来て、彼を抱擁した。そして「アッラーよ！　サアドはあなたのお認めを得るため、あなたの道で戦いました。預言者もそれを承認します。彼に容易さをお恵みください…」とおっしゃっ

て祈念した。サアド・ビン・ムアズ様は、愛すべき預言者様のこのような神聖な言葉を聞くと、目を開け「預言者様！　あなたに挨拶をし、敬意を表します。あなたがアッラーの預言者であることを認めます…」とささやいた。その後、サアド・ビン・ムアズの近親者が、彼のいたテントからアブドゥル・エシュヘル家のテントへと連れて行った。その夜、容体は一段と悪化した。大天使ジブリール様が預言者様のところへ来て「預言者様！　今夜、あなたの共同体の中で亡くなり、その死が天使たちの間で吉報となったのは誰ですか？」と尋ねた。これに対して万物の王がただちにサアド・ビン・ムアズの状態を聞くと、家に連れて行かれたと答えがあった。預言者様は教友たちの幾人かを連れて、サアド・ビン・ムアズのところへと向かった。歩いていくとき、大変に急いでいたため、教友たちが「疲れました、預言者様」と言った。預言者様は「天使たちがハンザラの葬儀で私たちより先にいたように、サアドの葬式でも私たちより先にいるようです。私たちは先には間に合わなさそうです」とおっしゃって急いだ理由を述べた。預言者様がサアド・ビン・ムアズのところへ着いたとき、彼は亡くなった。枕元に立ち、サアド・ビン・ムアズの名前を呼びかけながら「アブー・アムルよ！　あなたは族長の中で最も優れた者でした。アッラーがあなたに幸せや豊かさ、そして、善をお与えくださいますように。あなたはアッラーに行った約束を実行しました。アッラーはあなたに約束していたものを与えるでしょう」とおっしゃった。そのとき、サアド・ビン・ムアズの母親が泣きながら、このような二行連句を詠み上げた。

「どう耐えられるのであろうか
哀れな母親が
忍耐を求めて
泣く、私におきた災難に」

エスレム・ビン・ハーリスはこのように語っている。「預言者様がサアド・ビン・ムアズの家にいらっしゃいました。

私たちは扉の前で待っていました。預言者様は中に入り、きわめて大きい歩幅で歩いていきました。私たちも後ろについて歩きました。預言者様が合図をすると止まって戻りました。中にはサアドの遺体以外誰もいませんでした。預言者様は中にしばらくいた後、外に出てきました。何があったのか気になって『預言者様！大きい歩幅で歩いていたのはなぜですか？』と尋ねました。すると『こんなに混んでいる集まりにはいたことがありませんでした（天使たちで一杯でした）。天使の一人が私を翼の上に乗せてくれたので、私も座ることができたのです』とおっしゃいました。その後、サアド・ビン・ムアズの名前を言いながら『あなたに平安がありますように』とおっしゃいました。彼の死は、預言者様を大変悲しませ、涙を流させていました。葬式にはすべての教友たちが集まりました。愛すべき預言者様が葬儀の礼拝を行い、遺体を運びました。教友たちは、サアド・ビン・ムアズの遺体を運ぶとき『預言者様！私たちはこのように楽に運べる遺体はありませんでした』と言っていて、これに対して預言者様は『天使たちが降りて、彼を運んでいるのです』と答えました。

　遺体が運ばれるとき、偽信者たちが中傷して「あんなに軽いのか」と言うのを聞くと、愛すべき預言者様は「サアドの葬式には七万人の天使が降りてきたのです。今まで地上にこれほど大勢が降りたことはありませんでした」とおっしゃった。

　アブー・サイード・アル・フドゥリはその祖父がこのように述べていたと語っている。「サアド・ビン・ムアズの墓を掘った一人は私でした。彼のために墓を掘りはじめると、墓の中から周りにムスクの香りが広がりました」また、シュラフ・ビル・ビン・ハサーネはこのように語っている。「サアド・ビン・ムアズが埋葬されるとき、一人が墓の中から一握りの土を持っていきました。その後、それを家に持って行くと、その土はムスクとなりました。遺体が墓に下ろされるとき、預言者様は墓の脇に座っていて、神聖な目は涙ぐんでいました。神聖な自分の髭を手で取りながら大変悲しんでいました。そして『サアド・ビン・ムアズが亡くなったことで天空が揺れました』とおっしゃいました」

　あるとき、預言者様は大変尊い着物を与えたことがあった。教友たちが「何と素晴らしい」と言うと「サアド・ビン・

ムアズの天国でのハンカチはこれよりも美しいのです」とおっしゃっている。

　ヒジュラの五年目には、いくつかの重大な出来事が起こった。シャームへと向かう旅人たちを困らせ、マディーナにとって危険をもたらしていたドゥーメトゥル・ジャンダルに住む部族に対し、預言者様は千人の軍隊をもって出征した。イスラーム軍が来るという知らせを耳にした敵の部族たちは逃げて行った。そこに数日間留まった後、マディーナへと戻った。

　預言者様はズー・アル・カアダ月にザイナブ・ビンティ・ジャフシと結婚した。この年、ヒジャーブについて、クルアーンの節が下された。そしてムスリムの女性たちの着衣について命令があった。また、偽信者たちがアーイシャ様に中傷をし、一部のムスリムたちがこれに騙された。しかし、クルアーンの章句が下され、偽信者の中傷が明らかとなり、アーイシャ様は称賛された。このほか、マディーナの近くに住むムゼイネ族に代表団が送られ、彼らはムスリムとなってムハージルとなった。また、同じ年には、地震や月食が発生した。さらに、ハッジもこの年に義務となった。

あなたに会いたい気持ちで、心が軽蔑しています、預言者様よ
この情熱にどう耐えたらよいのか分かりません、預言者様よ
永遠の愛情の場所で泣いていました、預言者様よ
あなたの美しさに喜んで打たれました、預言者様よ

焼ける心にとってあなたは薬です、類をみない癒しです
あなたは偉大なる寛大さです。あなたが願えば道が示されます
あなたはアッラーの愛する者、ムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）
あなたの美しさに喜んで打たれました、預言者様よ

バラは開かず、川は流れない、あなたのアッラーからの御光がなければ
万物は終わり、息は止まる、あなたがいなければ
別れに泣き、再会に泣く。永遠に書かれたものがなければ
あなたの美しさに喜んで打たれました、預言者様よ

フダイビーヤの和議

塹壕の戦いの後、周辺の部族たちはイスラーム国家の勢力を認めるようになった。今や、ムスリムたちと友好関係を結んだり、ムスリムとなることが最善の道であることが理解されていた。いくつかの部族は、預言者様の前に上がり、ムスリムとなる名誉に与った。全世界の王はイスラームを広めるため、教友たちから一団を作り、周囲の部族をイスラームに宣教するために送った。いくつかの部族に対しては自ら出向くこともあった。言われた忠告を受け入れ、ドゥーメトゥル・ジャンダルの部族のようにムスリムとなった部族もあった。一方で、ガタファン家やリヒヤン家のような部族は、イスラーム軍と出会うことを恐れて逃げていった。このように、周りの部族に対して力が示されるようになっていった。

ヒジュラ六年目のときには、恐ろしい干ばつが起こり、空からは一滴の雨でさえ降ってこなかった。そのため、地上では草が生えず、人々や動物たちは食料不足に陥った。ラマダーン月のある金曜日、愛すべき預言者様に「預言者様！祈願を行ってください。アッラーが雨をお恵み下さるように…」と言って、望みが伝えられた。預言者様は教友たちとともに砂漠へと出て、アザーンやイカーマをせずに二ラカーの礼拝を行った。預言者様は神聖な上着を逆さにしてタクビールを行った。その後、神聖な腕を服の袖から脇が見えるほどに上げ「アッラーよ！私たちに雨をお恵みください…」と祈念し始めた。教友たちも「アーミーン、アーミーン…」と言った。

そのとき、空は快晴で雲一つなかった。しかし、預言者様が祈念すると、風が吹き始め、空に雲が集まってきたのが見られた。その後、小雨が降り始めた。万物の王は続いて「アッラーよ！この雨をあふれるほどに降らせ、私たちに恩恵を施してください」と祈念した。その瞬間、土砂降りの雨が降ってきた。

預言者様と教友たちの服には濡れていないところはなかった。家に戻るまでには、周り中水にあふれて湖のようになっていて、皆が水につかって歩いていた。雨は降り続いた。その日、次の日…その次の日…次の金曜日、教友たちは「預言者様！家が雨水で壊れ、家畜が溺れ始めました。アッラーに祈念して、雨を止めさせてください…」と言った。

愛すべき預言者様は微笑んで神聖な手を上げ「アッラーよ！この雨を耕地に、木がある所に、谷に降らせてください」と祈念した。すると、一週間続いていた雨がやんで、願った場所だけが雨になった。

ヒジュラ六年目のズー・アル・カアダ月だった。ある夜、預言者様は夢で教友たちとマッカに行ってカアバを周回し、髪を短くしている人や、剃っている人を見た。預言者様がこの夢を教友たちに話すと、彼らは非常に興奮した。ヒジュラのときから今まで離れ、生まれ育って思い出の詰まった、あの美しい祖国であるマッカに行くことだろう。一日五回の礼拝で向かっていた、懐かしいカアバを訪ね、周回をするであろう。これは大変に美しい吉報だった。愛すべき預言者様が「あなた方は必ずやカアバに入るでしょう」という吉報を受けるやいなや、教友たちはただちにその準備をし始めた。

アッラーの愛する預言者様は、準備を終わらせた後、アブドゥッラー・ビン・ウンミ・メクトゥムをマディーナに代理人として残した。そして、ズー・アル・カアダ月の最初の月曜日に、クスワーという名のラクダに乗り、準備を整えた千四百人の教友たちとともに、マディーナに残る者たちと別れを告げた。ウムラ（小巡礼）の意志表明を行ってから、神聖な場所であるマッカへと向かった。旅人たちの武器としての刀と、犠牲とするために用意した七十頭のラクダも連れていた。キャラバンには二百頭の馬と四人の女性の教友たちもいた。その女性たちのうちの一人は、愛すべき預言者様の神聖な妻であるウンム・サラマ様であった。

預言者様はズル・フレイフェというミーカート（巡礼境界地点）へ来たとき、イフラーム（巡礼着）に着替えた。そして、昼の礼拝を行った後、犠牲とするラクダの耳に印をつけ、首にひもをつけた。ナーズィイェト・イブヌ・ジュンドゥブ・エスレミエに手伝いをつけてラクダの世話を任せ、アッバード・ビン・ビシュルを二十人の騎兵の司令官に任命して、事前に視察をさせた。また、ブシュル・ビン・スフヤーンがマッカに使者として送られた。

イフラームを着た愛すべき預言者様と勇敢な教友たちは、真っ白に覆われた様子でアッラーに感謝を捧げ、その最大なる名誉を認めて懇願し始めた。「ラッバイカ！アッラーフンマ、ラッバイカ！ラッバイカ！ラー・シェリーカ・

ラカ・ラッバイカ！インナル・ハムデ・ワンニーメテ・ラカ・ワルムルク、ラー・シェリーカ・ラカ！」この神聖なタルビヤ（巡礼の最中に唱える言葉）で天も地もいっぱいになった。ズル・フレイフェは光に満ちた空間にあふれた。皆が興奮し、できるだけ早くマッカに着こうとズル・フレイフェを出発した。

途中、ウマル様とサアド・ビン・ウバイダ様が、アッラーの愛する預言者様に近づき「預言者様！あなたと戦おうと態勢を整えている人々のところへ、武装もせずに行くのでしょうか？クライシュ族があなたに攻撃をし、神聖な身体に何かの危害を及ぼすのではないかと心配しています…」と言って、不安を表した。二つの世界の王は彼らに「私はウムラの意志表明をしました。このようにしたとき、武器を持ちたくはないのです」とおっしゃった。

旅は穏やかに続いていた。途中でいろいろな部族のところに立ち寄り、預言者様は彼らをイスラームへと宣教した。一部は認めることを避け、また一部は貢物をした。このようにして、旅は半分を過ぎ、ウスファンに次いでガーディル・ウル・エシュタートという場所へやって来た。ここで、マッカの住民に知らせを伝えるために先に向かっていたブシュ・ビン・スフヤーン様が、クライシュ族と話をして戻ってきた。見聞きしたことを預言者様にこのように述べた。「預言者様！クライシュ族はあなたが向かっているという知らせを聞いていたようです。恐怖に陥っており、周りの部族を接待して彼らの助けを求めているようです。そして、偵察のために二百人の騎兵から成る軍をこちらに出発させたとのことでした。周りの部族は彼らの頼みを受け入れ、ベッラ地方で彼らに加わりました。たくさんの騎兵を組織し、あなたをマッカに入れさせないように誓っています」

この知らせに、万物の王は大変悲しんだ。「もはやクライシュ族は終わりです。やはり、戦いが彼らを滅ぼしたのです。クライシュ族の不信仰者たちは、自分たちには力があると思い込んでいるのです。アッラーに誓って、この宗教を広めて統治し、支配するまで、頭が身体から離れるまで、彼らとの戦いから決して身を引くことはありません」とおっしゃった。

さらに、勇敢なる教友たちに向かって、この件についての意見や考えを聞いた。あらゆることで自分たちを預言者

様に捧げていた名誉ある教友たちは「このことはアッラーや預言者様がご存知のとおりです。命をあなたに捧げます、預言者様！　私たちはカアバを周回する意図をもって出発しました。誰一人殺したり、戦ったりするために来たわけではありません。しかし、カアバを訪ねることを止めさせようとするのであれば、必ずや彼らと戦って目的を達成します…」と答えた。

教友たちのこの決意を愛すべき預言者様は喜んだ。そしてこのようにおっしゃった。「そうであるなら、アッラーの名前のもと、進むのです…」教友たちは、預言者様の周りで「ラッバイカ！　アッラーフンマ・ラッバイカ！…」と言ってタルビヤを唱えたり「アッラーフ・アクバル！　アッラーフ・アクバル！…」と言ってタクビールを行ったりしながら、マッカに向かって歩き出した。

ある日の昼、ビラール・ハベシが美しい声で神聖なアザーンを詠み、礼拝の時間に入ったことを知らせた。このとき、二百人のクライシュ族の騎兵がやって来て、マッカと教友たちの間に割り込み、攻撃をする構えを取った。これに対して万物の王は、偉大な教友たちと列になって礼拝をし始めた。愛すべき預言者様の後ろには、千五百人ほどの教友たちが何列にもなって、動くこともなく立っていたり、立礼したりするのは一見の価値あるものだった。さらに、全員が一斉に跪拝したときは、巨大な山が伏したり立ちあがったりするように見えた。

彼らがアッラーの前にあっては、神聖な額を土につけ、謙虚であることを示したことは、クライシュ族の一部の騎兵たちの心に、イスラームへの親愛を引き起こした。教友たちが礼拝を終わらせると、クライシュ族の騎兵の司令官は「この隙にムスリムたちを攻撃していたら、大勢を攻撃できていたことだろうに。彼らが礼拝中のとき、なぜ攻撃をしなかったのだろうか」と言って後悔した後「心配するな。どうせまた、命や子供たちより大切にする礼拝に入るであろう…」と考えて、次の機会を逃さないよう仲間に伝えた。

彼らのこの言葉を、アッラーは大天使ジブリールを通じ、クルアーンの節を啓示して預言者様に知らせた。

クルアーンの節では次のように述べられている。『あなたがかれら（信者）の中にあって、かれらと礼拝に立つ時は、

（まず）かれらの一部をあなたと共に（礼拝に）立たせそしてかれらに武器を持たせなさい。かれらがサジダ（して第一のラカート「礼拝の単位」）を終えたならば、あなたがたの後ろに行かせ、それからまだ礼拝しない他の一団に、あなたと共に礼拝（の第二のラカート）をさせ（て礼拝を終わり）、かれらに武器を持たせ警戒させなさい。不信者たちは、あなたがたが武器や行李をゆるがせにする隙に乗じ、一挙に飛びかかって襲おうと望んでいる。ただし雨にあい、またはあなたがたが病気の時、自分の武器をおいても罪はない。だが、用心の上に用心しなさい。アッラーは不信者のために恥ずべき懲罰を備えられる。』（婦人章（アン・ニサーア）第一〇二節）

午後、ビラール様がアザーンを詠んだとき、クライシュ族の騎兵たちは再び、マッカと教友たちの間に入って攻撃する構えを見せた。預言者様は、教友たちにクルアーンの節で知らされた通りに礼拝を行わせた。

ムスリムたちが用心して礼拝を行ったことに不信仰者たちは驚いた。そしてアッラーが彼らの心に恐怖を与えた。行動一つ起こす勇気は出ず、マッカに情報を届けるためその場を離れた。一方、預言者様と教友たちはここからフダイビーヤという場所へ出発した。

神聖なマッカの国境まで来たとき、預言者様のラクダのクスワーが、見たところ何の理由もないのに突然座り込んでしまった。立ち上がらせようと、いろいろやってみたが立ち上がらなかった。これに対して、預言者様はこうおっしゃった。「彼がこのように座り込むことはありませんでした。しかし、かつてアブラハの象にマッカに入るのを止めさせたアッラーが、今クスワーを止めているのです。命を預かっているアッラーに誓って言いますが、もし、クライシュ族が（戦いや流血の禁止など）アッラーの禁じたいずれかのことを私に求めるのなら、それを受け入れましょう」

その後で、クスワーを立ち上がらせた。するとラクダは勢いよく立ち上がった。しかし、マッカの国境の向こうへは入らず、ちょうど国境のフダイビーヤという場所で止まった。預言者様は水の乏しいこの場所で野営をした。

預言者様は、テントを神聖なマッカの国境の外側に立て、教友たちとここで待ち始めた。礼拝の時刻になると、マッカの国境の内側で礼拝を行った。しかし、井戸には飲める水や使える水はなくなってしまっていた。ただ、預言者様

の水筒に水があるばかりだった。困難な状況下にあった教友たちは「命をあなたに捧げます、預言者様！ 今、私たちのもとには、ただあなたの水筒の中だけに水がある状態です。これでは、死んでしまいます」と言った。

万物の王は「私があなた方の中にいる限りは大丈夫です」とおっしゃった。その後「ビスミッラー」と言って、神聖な手を水筒の上に置いた。それから持ち上げて「受けなさい」とおっしゃると、神聖な指の間から蛇口のように水が流れ始めた。教友たちはたくさん飲み、清めを行い、自分たちの水筒を満たし、馬やラクダにも水をやった。教友たちを微笑んで見ていた同情の海である預言者様はアッラーに感謝をした。

その日、その場にいたジャービル・ビン・アブドゥッラー様はこう語っている。「私たちは千五百人いました。もし、十万人いたとしてもあの水は全員に行き渡っていたことでしょう」

（驚きで指を噛む
誰かがその話を聞いたら
激しい日々に
指から与えた）

ビアート・ウ・ルドゥワン

預言者様がフダイビーヤにいたとき、以前からムスリムたちと友好関係にあった、フザー族の族長のブデイルが預言者様のところへ来て知らせを伝えた。それによると、クライシュ族の軍が彼らに加勢していた周りの部族とともにフダイビーヤに来て野営をし、力尽きるまで戦うことを誓った、ということだった。これに対して預言者様は「私たちは誰かと戦うためにここへ来たわけではないのです。ただ、ウムラを行い、神聖なカアバを周回し、訪ねるために

来たのです。しかし、私たちがカアバを訪ねるのを引き止めようとするのなら、それに対して戦います。間違いなく、今まで行ってきた戦いで、クライシュ族は大変に消耗して弱体化し、大きな被害を受けてきました。もし彼らが望むのであれば、彼らとの間に休戦の期間を決めましょう。この期間中、私のことでは安心して過ごすことができます。彼らは、私と他の部族との間に介入しないようにし、私とその部族を一対一にさせておくのです。もし、私がその部族たちに勝利し、アッラーが彼らに恵みを与えてムスリムとなるのであるのなら、クライシュ族の不信仰者たちも、そう望めば同じようにムスリムとなれるのです。逆にクライシュ族が考えるように、私が他の部族に勝利できないのであれば、そのときは、悩まずにまた力を蓄えればよいでしょう。もし、クライシュ族の不信仰者たちが、この協定を受け入れずに私と戦おうとするのなら、私の命を預かるアッラーに誓って、この宗教を広めるため、頭が身体から離れるまで彼らと戦います。そのときアッラーは、私に約束していた手助けを必ずや行われるでしょう」

フザー族の長のブデイルは、預言者様のおっしゃったことをクライシュ族の軍に伝えるため出発した。不信仰者たちはブデイルから預言者様の言葉を聞くと、名士の一人、ウルウェ・ビン・マスードを調停のため預言者様のところへ送った。ウルウェが、誰一人としてマッカに入れさせない固い決意をクライシュ族が行ったことを知らせると、アッラーの愛する預言者様は「ウルウェよ！ アッラーのために言いなさい。このラクダたちを屠るにあたって、神聖なカアバを訪ね、周回することを止めさせるのですか？」と尋ね、フザー族の長に話したことをウルウェにも語った。

ウルウェは、預言者様の話を聞く一方、教友たちの状況や行動、お互いや預言者様に対する態度、あるいは尊敬や敬意を示している様子を注意深く見ていた。愛すべき預言者様の提案を聞いた後で立ち上がり、クライシュ族に説明するために戻っていった。彼らのところに戻ると「クライシュ族の者たちよ！ 私はカイセル、ネジャーシ、そしてキスラーのようなたくさんの王たちの前に代表として行ったことがあることは、あなた方も承知のことです。誓って、今まで、ムスリムたちがムハンマド（アライヒッサラーム）に対して表していた尊敬や敬意を、他の王たちが受けているのを私は見たことがありません。教友たちも誰一人として、その許しを得ない限り話すことはなく、その頭から一本

の毛でも落ちようものならそれを拾って恵みとして胸元に取っておくのです。彼の隣で話すときには、教友たちは声が聞こえないほどに小声で話していました。彼に対する敬意から、その顔を見ることもせず、視線を下げていたのです。また、彼が教友たちに何かの合図をしたり、命令したりしたら、命を捧げてそれを実行していました。

クライシュ族の者たちよ！　手をいくら刀にかけても、あらゆる手段を探しても、教友たちは預言者の一本の毛でさえ、あなた方に渡さないだろう。そして、彼に少しの危害も及ばないよう、誰かが手を触れることがないようにするだろう。状況はこのとおりです。今からよく考えなさい。この状況下で、ムハンマド（アライヒッサラーム）は私たちによい条件で停戦の提案をしています。これを逃さないようにするのです」と言った。

クライシュ族の不信仰者たちはこの言葉を受け入れず、ウルウェに対して手荒く扱い、彼に怪我を負わせた。

預言者様はクライシュ族の司令部から知らせが来ないため、提案を再度伝えるため、ヒラシ・ビン・ウマイヤを代表として遣わした。不信仰者たちはイスラーム軍の代表を非常に酷く扱い、そのラクダを殺して食べてしまった。代表も殺そうと襲ったが、ヒラシ・ビン・ウマイヤは逃れ、預言者様のところへ戻って状況を説明した。預言者様は代表に対してなされた彼らの行為に大変悲しんだ。

このとき、不信仰者の司令部からアハービシ族の長のフレイスがやって来るのが見えた。預言者様の方へと来ていた。不信仰者たちが代表として彼に任務を与えていたのだった。愛すべき預言者様は、フレイスが来るのを見ると「やって来るこの人は、犠牲とする動物を尊重し、アッラーの命令を実行し、礼拝を行うにあたって努力をする部族の者です。教友たちよ！　犠牲にするラクダを彼の方へと歩かせてみせなさい」とおっしゃった。教友たちは犠牲とするラクダを彼の方へ歩き出させた。そして「ラッバイカ！　アッラーフンマ・ラッバイカ！」とタルビヤを行った。

フレイスは、首が結ばれ、耳に印をつけられたこの犠牲となる動物たちに気が付くと、それをじっと見つめた。目は潤み「ムスリムたちはカアバを周回し、訪ねる以外に目的はないのだ。彼らを、それらから引きとめることは何と悪い行為であることか。カアバの神に誓って、クライシュ族は自分たちが起こしたこの間違いのために災いに会うだ

ろう」と思わず口にした。この言葉を聞いた世界の王は「はい。その通りです。キナーナ家の兄弟の一人よ！」とおっしゃった。フレイスは大変に恥じ入ったため預言者様の前まで来ることができず、神聖な顔も見ることはできなかった。そして、クライシュ族の司令部に戻っていった。目撃したことを彼らに説明し「彼らがカアバを訪ねることを、あなた方が引きとめるのは正しい行動とは思いません」と言って、自分の意見を述べた。クライシュ族の不信仰者たちは大変に怒り、フレイスのことを無知であると非難した。

不信仰者たちは今度、その狂暴さで有名なミクレーズ・ビン・ハーフスを代表として行かせた。彼も返事をもらって戻ってきた。ミクレーズが帰ってきた後、不信仰者たちはムスリムたちから襲われるのではないかという恐怖に陥っていた。

預言者様はこの状況を逃さず、クライシュ族からも尊敬を受けている教友の一人を行かせようと考えた。その結果、ウスマーン様が遣わされることが決まった。愛すべき預言者様は、ウスマーン・ビン・アッファーンに『私たちはここに誰とも戦いに来たわけではありません。ただ、偉大なるカアバを周回し、訪ねる目的で来たのです。持ってきた犠牲のラクダを屠って戻ります』と言いなさい。そして彼らをイスラームに宣教するのです」とおっしゃった。また、マッカにいるムスリムたちには、マッカが近々征服されるという吉報を伝えるようにも話した。

ウスマーン様は不信仰者たちのところへ行き、預言者様のおっしゃったことを一言一句違わずに伝えた。彼らはウスマーン様の提案も拒絶した。そして、もし望むのであれば、ウスマーン様一人だけにカアバを周回する許可を与えると言うのだった。ウスマーン様は「預言者様がカアバを周回しない限りは私も行いません」と返した。

これに怒った不信仰者たちは彼を人質にし、これが教友たちには「ウスマーンが殉教者となった」という形で伝わった。状況が預言者様に知らされると大変悲しみ「この知らせが本当のことであれば、この部族と戦わない限りここからは離れません」とおっしゃった。その後、近くにあるセムレという名前の一本の木の下に座り「アッラーが私に誓うよう命じました」とおっしゃって、教友たちを誓いへと呼びかけた。

勇敢な教友たちは、手を預言者様の神聖な手の上に置き「アッラーがあなたを勝利に恵みあわせるまで、戦って勝利をつかむか、この道で殉教者となることを誓います」と言って、約束をした。預言者様は一方の手の上に別の手を置き、その場にはいなかったウスマーン様に代わって自らが誓いを立てた。預言者様は教友たちのこの誓いに大変満足し「木の下で心から誓いを行った者は誰でも地獄には入らないのです」とおっしゃった。この誓いのことは「ビアート・ウ・ルドゥワン」と呼ばれている。

教友たちは、今や刀を抜いて待ち切れない状態で、預言者様の合図を待っていた。

このとき、イスラーム軍の司令部を見ていたクライシュ族の偵察は、ムスリムの戦士たちが愛すべき預言者様に対して、この道で殉教者となるまで戦う誓いを立てていたことや、そのための準備を進めていることを目撃した。ただちにクライシュ族の司令部に戻り、出来事をすべて報告した。

預言者様は起こりうることを想定して、夜は教友たちを守るための当直をおいた。ウスマーン様が捕らわれた後のある夜、ミクレーズという名前の司令官のもと、五十人の不信仰者の一団が、イスラーム軍が寝ているときに攻撃をかけてきた。その夜は、ムハンマド・ビン・メスレメとその部下が当直にあたっていた。やって来た異教徒を短時間の争いの後で捕虜とした。ミクレーズだけは逃げていった。捕虜たちは預言者様の前に連れてこられた。一部はそのまま捕虜とされ、一部は釈放された。不信仰者たちは次の夜も攻撃しようとしたものの、再び捕らえられた。預言者様は彼らも赦して釈放した。

私を助けてください、預言者様！……

イスラーム軍は朝でも夜でも戦いの体制が出来ていて、待ち構えていた。いつでも攻撃できることが分かると、異教徒たちは恐怖に陥った。もはや講和をするしか道はないことを理解し、急いで代表団を選んだ。スヘイル・ビン・

アムルが代表となったこの一団は「今年はマッカに入らない条件で、講和を結ぶように」と命じられていた。

愛すべき預言者様は、クライシュ族の代表団を迎えた。彼らの最初の望みは、拘留された者を解放することだった。万物の王は「マッカで捕らわれた教友たちが解放されない限り、この人々を釈放しません」とおっしゃった。スヘイルは「正直に申し上げると、私たちに対して大変公正で寛大な対応をしてくれました」と言い、マッカで捕らわれたウスマーン様と、その前に拘留されていた十人ほどの教友たちを釈放するよう手配した。その後、攻撃した際に捕えられていた不信仰者たちが解放された。

長い話し合いの後、講和が締結された。続いてそれを文章にすることとなった。アリー様が書記として選ばれた。条項を書くために、紙やインクが準備された。世界に恵みとして送られたアッラーの愛する預言者様は、アリー様に「書きなさい」とおっしゃった。「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム」これに対してスヘイルは、ただちに異議を唱え「誓って私は、ラハマーンという言葉の意味が分かりません。そのようには書かず、ビスミケアッラーフンマ、と書くのです。そうしなければ、和平にはなりません」と言った。預言者様は講和を結ぶことが意義深いものであると考えていた。そのため「ビスミケアッラーフンマも美しい言葉です」とおっしゃって、アリー様にそのように書くよう命じた。それが書かれた後、預言者様が「これは預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）が、スヘイル・ビン・アムルと合意した和平と、その条件を互いに実行するために署名した条約である」とおっしゃると、スヘイルがアリー様の手を取ったのが見られた。そして預言者様に向かって「誓って、我々があなたを預言者であると認めていたら、あなたに反対などせず、カアバを訪ねるのを引きとめることはしませんでした。ですから、預言者の代わりに、アブドゥッラーの息子のムハンマド（アライヒッサラーム）、と書くのです」と言った。

預言者様はそれも受け入れ「アッラーに誓って、あなた方が私に反対をしたとしても、私は間違いなくアッラーの預言者なのです。私の名前や父の名前を書かせたとしても、私が預言者であることを取り消すことはできません。アリーよ！ それを消し、ムハンマド・ビン・アブドゥッラー（アライヒッサラーム）と書きなさい」とおっしゃった。

預言者という言葉が消されることに関して、教友たちは誰一人として気に入らなかった。一瞬、すべてを忘れ「アリーよ！ 預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）と書くのです。そうでなければ、この不信仰者たちと我々の間の問題を解決するのは刀のみとなるだろう…」と言っていた。預言者様は教友たちのこの行動を嬉しく思ったものの、神聖な指で静かにするよう合図をした。そして、アリー様に消すように命じた。しかし、アリー様は「命をあなたに捧げます、預言者様！ あなたのこの神聖な預言者という呼称を消すことは私にはできません…」と言って謝った。預言者様はその箇所を示すように求めた。そして、それを取って自分の神聖な指で消した後、アブドゥッラーの息子、と書かせた。

それから、条項が書かれ始めた。

一、条約期間は十年とし、期間中、両者は戦わないこととする

二、ムスリムたちは今年カアバを訪れることはしない。ただし、一年後から訪ねることができる

三、カアバを訪れるムスリムたちは三日間滞在し、武器は旅のためのもの以外所持しない

四、ムスリムたちがカアバを周回する際、マッカの不信仰者の住民はカアバから外に出て、ムスリムたちが自由に周回できるよう便宜を図る

五、クライシュ族のうち、ムスリムとなる者が保護者の許しを得ないでマディーナに行った場合は帰される。しかし、ムスリムからクライシュ族側に行くために、マッカに来た場合は帰されない…ウマル様がこの点について「預言者様！ この条件は受け入れるのでしょうか？」と尋ねると、愛すべき預言者様は微笑んで「はい。私たちから彼らに行く者を、私たちに近づけないようアッラーに願います」とおっしゃった。

六、教友たちは誰でも、ハッジやウムラをする意図でマッカへ来た場合、その命や資産は保護される

七、不信仰者がシャーム、エジプトなどの他の地方へ行く途中でマディーナに立ち寄った場合、その人の命や資産も保護される

八、他のアラブ部族は自分たちが望んだ側の保護の下に入ることができる。ムスリムたちあるいは不信仰者たちと同盟を結ぶことは自由とする

条約に署名をする段となった。そのとき、足にある鎖を引きながら、イスラーム軍の方へと来る者が見えた。近づくと彼は「私を助けてください！…」と叫んだ。この声を聞いたクライシュ族の一団の長は、すぐに飛び上って、持っていた針葉樹の枝で彼の頭や顔を打ち始めた。彼は全力を尽くして身体を預言者様の神聖な膝に投げた。そして「私を助けてください、預言者様！」と懇願した。これはマッカでムスリムとなる名誉に与っていたため、その父によって鎖につながれた一人のムスリムだった。毎日、大変な虐待を受け、像を崇めるように強制されていた。不信仰者たちがフダイビーヤに行った隙に機会を見出し、鎖を壊して誰にも見つからないようにマッカから出て、ムスリムたちの間に身を投げ出したのだった。真実の道を選んだ神聖なこの人物は、不信仰者の代表であったスヘイルの息子のアブー・ジャンダル様だった。スヘイルは、預言者様に息子のアブー・ジャンダルを示し「先ほど行った条約に従って、彼を私たちに返してもらう必要がある。その初めての者はこの者である」と言った。

預言者様と教友たちは、大変に心を痛めた。皆、預言者様がどのような返事をするのか息をのんで見守っていた。一方に条約、もう一方に虐待を受ける教友…万物の王はスヘイルに「私たちは、まだこの条約に署名はしていません」とおっしゃった。スヘイルは「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ、まだ息子がここに来る前に条項は書き終わったのです。もし息子を返さないのであれば、私は一生あなたとの条約の下に署名はしません」と意地を張った。

預言者様は「彼のことは私に免じて、この条約に当てはめないようにしてください」とおっしゃったが、不信仰者たちはこれを拒否した。スヘイル・ビン・アムルが息子を引っ張りながら連れて行くとき、アブー・ジャンダルは「預言者様！ ムスリムの兄弟たちよ！… ムスリムとなる名誉に与り、あなた方に身を寄せたにもかかわらず、私を不信仰者たちの手に渡すのですか。私が毎日耐え難い拷問を受けていることを見逃すのですか？ 預言者様！ 宗教を戻させるために私を彼らに渡すのですか？…」と言って悲鳴を上げた。

この悲痛な懇願に耐えるのは難しいことだった。心を痛めた教友たちは泣き始めた。同情の大海である愛すべき預言者様の眼も潤んでいた。スヘイルのところへ行き「そのようにはしないでください！ 彼を私に渡すのです！」とおっしゃった。しかしスヘイルは「絶対に渡さない！」と返事をした。

これに対して、愛すべき預言者様は「アブー・ジャンダルよ！ もうしばらく我慢するのです！ 受けることに耐えるのです！ これらに対する褒賞をアッラーに願いなさい。アッラーがあなたや、あなたのように弱く守る者のないムスリムたちに対して、安らぎと解決策をもたらしてくれるでしょう」とおっしゃって慰め「約束を守らないことは、私たちにふさわしくないのです」とおっしゃった。

この心を痛める出来事は、その場にいた不信仰者たちでさえ耐え難く「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ アブー・ジャンダルをあなたに免じて私たちが保護しよう。スヘイルが虐待をする機会は与えない」と言った。これにより、預言者様と教友たちはいくらか気が楽になった。（スヘイル・ビン・アムルは、マッカ征服後、ムスリムとなって教友たちの一人となった）

条約は正副二枚が書かれて署名され、不信仰者たちは司令部に戻っていった。

この条約は、ムスリムたちにとって不利なものであるように見えたため、クライシュ族の代表たちは大変喜んでいた。実際は、この条約はムスリムたちにとって大きな勝利であり、これ以降有利なものとして働くこととなるのである。何よりも、ムスリムたちは国家として認められたことにもなった。マッカから不信仰者が交易なり別の理由なりで、シャームやエジプトに行くためマディーナに立ち寄った場合、命や資産は保護されることとなった。これにより、不信仰者たちは間近でムスリムの生き方に接することとなり、イスラームの正義や教友たちの互いに対する好ましい振る舞いに感心し、イスラームに好感を持つこととなろう。そして、やがてはムスリムとなって、教友たちの間に入ることになるであろう。

また、今後十年間続くこの条約でムスリムたちの数は増え、力も蓄えられることとなるであろう。そして、イスラームはあらゆるところに広まっていくことだろう。

ただ『クライシュ族のうち、ムスリムとなる者がマディーナに行った場合は帰される』という条項のため、預言者様は心を痛め「アッラーが彼らに必ずや、安らぎと解決策をもたらしてくれるでしょう」とおっしゃった…

もはや、不信仰者たちと行うことは何もなかった。預言者様は教友たちに「犠牲の動物を屠りなさい。髪を切った後、イフラームを解くのです」とおっしゃった。預言者様は誰よりも先に犠牲の動物を切り、その後、床屋のヒラシ・ビン・ウマイヤ様に自分の髪を切らせた。教友たちはその神聖な髪の毛が地面に落ちないうちに取り合い、その恵みに与ろうと大切にした。教友たちも犠牲にするものを切り、髪の毛を剃ったり、短くしたりした。

フダイビーヤでは、二十日間ほど滞在した。預言者様は仲間たちとともにマディーナへと出発した。途中でアッラーが預言者様に『勝利章（アル・ファトフ）』を啓示し、自らの恵みについてや、手助けを与えるであろうという吉報をもたらした。

万物の王が勝利の中、光に満ちたマディーナへと帰ってきた頃、クライシュ族の中のサーキフ族であるアブー・バースィルがムスリムとなる名誉に与った。彼は不信仰者たちの間で生きていくことができないことを分かっていたため、徒歩でマディーナへとやって来た。フダイビーヤの和議に従ってマディーナからは出て、紅海に面したイスという場所に住むことにした。ここはクライシュ族の不信仰者たちがシャームへ行く交易の途上にあった。これ以降、クライシュ族からムスリムとなった人は、マッカを離れ、マディーナではなくイスへ、アブー・バースィルのところへと向かったのだった。その最初の人物はアブー・ジャンダル様だった。この流れはその後も続き、五十人、百人、二百人、三百人となっていった。クライシュ族のキャラバンは、シャームに行く途中ここを通らざるを得なかった。アブー・バースィル様は、ともにいるムスリムたちとともに、ここを通る不信仰者たちに対して、ムスリムになるよう説いていた。そして、ムスリムとならない者たちに対しては、彼らと戦って困難に陥れた。

マッカの不信仰者たちは、シャームへの交易の道がもはや閉ざされたのを見て、マディーナに代表団を送った。フ

ダイビーヤの和議の「クライシュ族のうち、ムスリムとなる者が保護者の許しを得ないでマディーナに行った場合は帰される…」という条項を抹消してもらうよう懇願した。預言者様は同情して彼らの願いを受け入れた。こうして、クライシュ族のシャームとの交易は再開された。ムスリムたちも忍耐の褒賞として、マディーナの預言者様のもとへと来られるようになったのだった。

預言者様よ、あなたの訪れは慈悲、喜び、そして愉しみ
あなたが誕生したから、あなたを愛する者の悲しみは癒される

アーデムがまだ水と土の間であるとき、あなたはもう預言者だった
預言者様よ、だからあなたが預言者たちのイマームなのは当然です

人々の成熟はあなたの御光があるからこそ可能になった
預言者様よ、あなたの身体にはアッラーの名や美徳が反射する

人々はあらゆるものを必要とする
預言者様よ、あなたは必要とする者へ豊かに与えることが任務となった

預言者様よ、ですから見えること見えないこと全ての面でヒュダーイに仲裁をしてください
私はあなたの扉の前につながれた一人の貧者

アズィーズ・マハムード・ヒュダーイ

宣教の手紙

王たちへの手紙

預言者様はフダイビーヤから戻った後、イスラームを全世界へ広め、人々を地獄の罰から救い、真実の幸福へと導くことを願った。なぜなら、彼は全世界の恵みとして送られたからである。このため、周辺の王たちに代表を送り、イスラームを宣教することを考えた。ドゥフエ・イ・ケルビ様をルーム（ビザンチン帝国）へ、アムル・ビン・ウマイヤをエチオピアへ、ハティーブ・ビン・アブー・ベルテアをエジプトの王のもとへの代理として任務を与えた。そのほか、同様の任務のため、サリート・ビン・アムルをイェマーメへ、シュジャー・ビン・ウェフブをガッサンへ、アブドゥッラー・ビン・フゼイフェをイランの王のもとへと向かわせた。

この代理人たちは教友たちの中で最も優れた人々だった。心身ともに優れていた。王たちに対して、イスラームへ宣教するための手紙が書かれた。愛すべき預言者様は手紙の最後に、自身の銀の指輪に書かれた「アッラーの預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）」という印を押した。預言者様の一つの奇跡として、王たちに遣わされる代理人たちは、朝、行く場所の国の言葉が話せる状態で目を覚ましたのだった。

エチオピアに送られたアムル・ビン・ウマイヤ様の使命は、ネジャーシ・アスハーメに、以前、そこへヒジュラしていた教友たちをマディーナに戻すよう願い出ることだった。

アムル・ビン・ウマイヤは、短期間でエチオピアに行き、王のネジャーシ・アスハーメの前に上がった。ネジャーシは玉座から下り、手紙を大変尊重し、愛情をもった様子で受け取った。手紙に接吻して顔や目につけた後、開いて読ませた。

「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム。

アッラーの預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）から、エチオピアの王、ネジャーシ・アスハーメへ！…
正しい道に導かれた者に挨拶をします。王よ、無事でいることを願い、アッラーがあなたに与えた恵みに対して、アッラーに感謝をします。アッラー以外に神はありません。アッラーこそがマリク（王者／すべてを所有し、すべての命を発する者）であり、クッドゥース（神聖者／あらゆる過ちや欠陥とは無縁の者）であり、サラーム（平安者／しもべをあらゆる危険から平安に導かせる者）であり、ムウミン（信仰を与える者）であり、ムヘイミン（保護者／すべてを見守り保護する者）であります。

私は証言します。預言者イーサーは、大変美しく貞淑でこの世のあらゆることから顔を背けたマルヤムに対して、アッラーが与えた魂であり言葉であります。このようにして彼女はイーサーを孕みました。アッラーはアーデムを創造した力と同様に、イーサーもまた創造されたのです。

王よ、私はあなたが同類をもたないアッラーに信仰することを、アッラーに礼拝することを、そして私に従うことを、アッラーが私に下したことを信じるよう宣教します。なぜなら私は、アッラーの下されたものを伝える任務を受けた預言者であるからです。

今、私はあなたが必要とする伝導を行い、現世と来世の幸福に導く忠告を行いました。私の忠告を受け入れるのです。信仰に入り、正しい道に入る者に挨拶をします」

尊敬をもって預言者様の手紙を聞いていた王のアスハーメは、ただちに「アシュハド・アンラー・イラーハ・イッラッラー、ワ・アシュハド・アンナ・ムハンマダン・アブドゥフ・ワ・ラスールフ」と言って信仰告白を行い、ムスリムとなった。その後「誓って彼は、あのユダヤ人とキリスト教徒の人々が待ち望んでいた、以前の預言者たちが吉報をもたらした預言者である。

もし、彼のところに行くことができたなら、必ずやそこに行き、手伝う名誉に与っていたことだろう」と言って、手紙を美しい箱に大切にしまい「この手紙がここにある限り、エチオピアから善と豊かさはなくならないだろう」

と語った。

預言者様はネジャーシへ二通の手紙を送っていた。ネジャーシ・アスハーメはもう一つの手紙で伝えられた命令を実行し、愛すべき預言者様の神聖な妻であるウンム・ハビーバ様と当地にいる教友たちを船に乗せ、たくさんの贈物とともにマディーナに帰したのだった。あわせて送った手紙には、自分が信仰したことも書かれていた。

ドゥフエ・イ・ケルビ様もルーム王をイスラームに導くため任務についた。手紙はブスラにいるガッサンの王・ハーリスへ渡し、彼はその手紙をルーム王のヘラクリウスに送ることとなった。預言者様の宣教の手紙を大変丁重に扱っていたドゥフエ様は、速やかにブスラへと着いた。ハーリスと話し、状況を説明した。ハーリスはドゥフエに、まだムスリムとはなっていなかったアディイ・ビン・ハーテムを伴わせ、そのときエルサレムにいたヘラクリウスの元へと向かわせた。二人はエルサレムに着き、王と話すための機会を待った。王の家来は彼らに「王の前に上がったら、頭を下げて歩くこと。そして、近づいたときには、地に伏しなさい。頭を上げる許しが出るまで、決して頭を上げないように」と言った。

この言葉はドゥフエ様にとって重く感じ、彼らに「私たちムスリムは、アッラー以外には誰にも跪拝しないのです。人が人に対して跪拝することは、創造の原理に反しています」と言った。これに対し王の家来は「そうであるなら、王はあなたが持ってきた手紙を決して受け入れはしないし、あなたを追い出すだろう」と言った。ドゥフエ様は「私たちの預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）は、他の人が自分に対して跪拝することはもとより、少しでもお辞儀をすることでさえお認めになりません。自分と話したい者が奴隷であっても、その人に対して関心を持ち、前に来ることを受け入れて問題を聞き、それを解決して快くさせるのです。ですから、彼に従う者すべてが、自由で尊厳を保っているのです」と返事をした。すると、この言葉を聞いていた一人が「王に跪拝しないのであれば、任務を果たすための別の方法を教えましょう。王の宮殿の前部には休むための場所があります。王は毎日午後、その中庭に出て散歩をしています。そこには一つの敷物があります。その上に何かメモがあれば、まずそれを読み、その後で休むのです。

あなたもそこへ行き、敷物の上に手紙を置いて外で待つのです。手紙を見たら、あなたを呼ぶでしょう。そのときあなたは任務を果たせるでしょう」と言った。

こうして、ドゥフエ様は手紙を言われた場所へと置いた。ヘラクリウスが手紙を見つけると、アラビア語の分かる通訳が呼ばれた。通訳は預言者様の手紙を読み始めた。手紙の最初には「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム。アッラーの預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）から、ルームの名士ヘラクルへ」と書かれていた。ヘラクリウスの兄弟の息子であるイェンナクが、手紙がこのように始まったことに怒り、通訳の胸を激しく殴った。通訳は激しく殴られて地に倒れ、神聖な手紙はその手から落ちた。ヘラクリウスがイェンナクに「なぜこのようなことをしたのだ?」と尋ねると、彼は「手紙を見なかったのですか? 手紙はあなたの名前より先に自分の名前で始まり、あなたが王であることに触れず『ルームの名士ヘラクルへ』と書いてあるのです。なぜ『ルームの王』と書かずに、そしてまずはあなたの名前で始めないのでしょう。彼の手紙は今日はもう読まないようにしましょう」と答えた。

これに対してヘラクリウスは「アッラーに誓って、あなたは愚かなのか、それとも大変に気がおかしいのです。あなたがこういう人間とは思いませんでした。私がまだ手紙の中味を確認していないのに、破り捨てたいのですか? 私の人生に誓って、もし彼が言っていたとおりに預言者であるのなら、手紙に私の名前より先に自分の名前を書くことや、私をルームの名士と呼ぶことは正当なことなのです。私はただ人々の主であり、王ではないのです」と言って、イェンナクを目の前から追い出した。

その後、キリスト教の最大の学者であり、長であり、そして相談相手でもあるウスクフという名の人物を呼んで手紙を読ませた。手紙の続きはこのように書かれていた。『言ってやるがいい。「啓典の民よ、わたしたちとあなたがたとの間の共通のことば（の下）に来なさい。わたしたちはアッラーにだけ仕え、何ものをもかれに列しない。またわたしたちはアッラーを差し置いて、外のものを主として崇めない」それでもし、かれらが背き去るならば、言ってやるがいい。「わたしたちはムスリムであることを証言する」（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第六四節）』

預言者様の手紙が読まれたとき、ヘラクリウスの額からは汗が滴った。手紙が終わると「預言者スライマーン以降、このような『ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム』と始まる手紙は見たことがない」と言った。ヘラクリウスがウスクフにこの件についての意見を尋ねると「アッラーに誓って、彼は預言者ムーサーや預言者イーサーが私たちに来るであろうと吉報をもたらした預言者です。やはり私たちは彼が来ることを待っていたのです」と答えた。

ヘラクリウスが「あなたはこの件で、どうすればよいか、何を勧め、何が適切だと思うのですか?」と尋ねると、ウスクフは「彼に従うことが適切と思います」と返事をした。ヘラクリウスは「私はあなたの言ったことをよく分かっています。しかし、彼に従い、ムスリムとなるには私の力が不足しています。王という立場もなくなるし、私は殺されることになるでしょう」と言った。そして、ドゥフエ様とアディイ・ハーテムを呼んだ。アディイは「王よ！ 家畜やラクダの所有者であるアラブ人のうち、私の隣にいる人物が、母国で起こった驚くべき出来事を話しています」と言った。ヘラクリウスは「母国で起きたこととは何ですか?」と聞くと、ドゥフエ様は「私たちの間から、一人の人物が現れました。そして、預言者であることを宣言しました。人々の一部は彼に従い、一部は反対しています。我々信仰する者は、不信仰者たちとの間で戦いを続けています」と答えた。

その後、ヘラクリウスは預言者様について調べ始めた。シャームの知事に命令を下し、預言者様と同じ家系の者を見つけるように伝えた。その間、自分の親友であり、ローマにいるヘブライ語を話せるある学者に手紙を書き、このことを聞いた。その人からは、言われている人物が最後の預言者であることを知らせる手紙が届いた。一方、シャームの知事は、交易のためにやって来たクライシュ族のキャラバンと会った。キャラバンに中には、まだムスリムとなっていなかったクライシュ族の長であるアブー・スフヤーンがいた。

アブー・スフヤーンはこのように語っている。「私たちはガザにいたとき、ヘラクリウスの部下であるシャームの知事が、まるで私たちのところへ攻撃するかのようにやって来て『あなたたちは、あのヒジャーズにいる人物と同じ部族なのか?』と聞きました。『はい』と返事をしました。『それでは、私たちとともに王のところへ来てもらおう』と

言いました」このようにして、アブー・スフヤーンとそこにいた人々を連れて行った。そのとき、ヘラクリウスはエルサレムのある教会にいた。大臣とともに座り、頭には王冠を被っていた。ヘラクリウスはアブー・スフヤーンとともにやって来た三十人ほどのマッカの人々をここで迎えた。

　通訳を呼び、彼らに「あなた方のうち、預言者であると主張している人物に最も近い血縁の人は誰ですか？」と尋ねた。アブー・スフヤーンが「彼に最も近い血縁は私です」と返事をした。ヘラクリウスが「どのくらいの近さですか？」と聞くと「私の叔父の息子です」と答えた。ヘラクリウスは、アブー・スフヤーンに近寄るように言い、他の者はアブー・スフヤーンの後ろで待つように命じた。アブー・スフヤーンは会話の最初の頃は嘘を付いていたが、王の威厳に恐怖を感じ、嘘を言わなくなった。その後、二人の間でこのような会話がなされた。ヘラクリウスは

―預言者と主張している人物の家系はどのようなものか？

―彼は現時点で最も良い家系の者です。家系として私たちの中で最も優れています。

―あなた方の中から彼以前に、預言者として主張する誰かはいたのか？

―いませんでした。

―彼の祖先の中で王はいたのか？

―いいえ。

―彼に従うのは、名士たちかそれとも貧乏人や弱者か？

―彼に従うのは貧乏人、弱者、若者や女たちです。部族の年長者や名士たちは従いません。

―彼に従う者の数は増えているか、減っているか？

―増えています。

―彼の宗教に入った後、それを気に入らずに、あるいは怒って戻ってくる者はいるか？

―いません。

―預言者となる前に、彼が嘘をついたことがあるか？

―いいえ。

―その預言者が誓いを破ったり、約束を守らなかったりしたことがあるか？

―いいえ、ありません。しかし、私たちは今、彼としばらくの間休戦しており、条約を結んでいます。この期間中、彼が何をするかはまだ分かりません。

―彼はあなた方に何を求めているのか？

―唯一であるアッラーに礼拝することと、アッラーに同類のものを置かないことを求めています。私たちの祖先が崇めていたもの（像）を拝むことを私たちに禁じています。礼拝することや誠実であること、貧乏人を助けること、禁じられたものから自分を守ること、約束を守ることや、借りたものを裏切らないこと、そして親戚を訪ねることを求めています。

　教会の中でこのような話が行われ、預言者様の神聖な手紙が読まれた。ヘラクリウスが手紙に接吻をして目と頭につけると、ルームの人々の間では騒ぎが起こった。王はアブー・スフヤーンや一緒にいたクライシュの人々に外に出るよう命じた。まだムスリムとなっていなかったアブー・スフヤーンは、誓って愛すべき預言者様が行ったことが、ここで成功するであろうことを信じたのだった。

　その後、ドゥフエ様がヘラクリウスの前に来て、神聖な美しい顔と美しい声で「王よ！ あなたのところへはブスラからある人物（ガッサンの王・ハーリス）が私を送りました。アッラーの前にあっては、彼はあなたよりも忠実です。しかし、アッラーに誓って言いますが、私を彼のもとへ行かせた人物（預言者様）の方が、あなたよりも彼よりも、より忠実なのです。あなたは私の言葉を謙虚に聞き、私の話した忠告を受けるべきです。なぜならば、あなたが謙虚になれば、その忠告を理解できるからです。そして、忠告を受け入れなければ、良心的とはならないのです」と言った。

　ヘラクリウスは「続けなさい」と言った。ドゥフエ様は「そうであれば、私は預言者イーサーが礼拝していたアッ

ラーに信仰するよう、あなたに宣教します。私は以前の預言者ムーサーが、その後は預言者イーサーが吉報をもたらしていた文盲の預言者に信仰するよう、あなたに宣教します。もし、この件で何かを知っていて、現世と来世の幸せを得ようとするのであれば、よく考えてみてください。そうしなければ、来世の幸せは手の中からこぼれ落ち、不信仰や多神教のままとなるのです。分かっていただきたいのですが、あなたの神であるアッラーは、残忍な人間を殺し、恵みを思うままにするのです」と語った。

ヘラクリウスは「私が手にしたこの手紙を読まない限り、そして、分からない部分を学者から聞いて、そこが分かるようになるまでこの手紙は手放しません。この手紙からは益と善を得られるでしょう。私に考える時間と、真実の道を見つけ出すまでの時間をください」と言った。ヘラクリウスはその後、ドゥフエ様をわきに呼び、二人で話し合った。心の中の考えをこのように表したのである。「あなたを送った人物が、啓典で吉報をもたらされており、来ることが待たれていた最後の預言者であると私は分かっています。しかし、彼に従ったら、ルームの人民に殺されるのではないかと心配しているのです。人々の中で最も偉大な学者であり、そして私より尊敬されているダガートゥルという人のところへあなたを行かせましょう。あらゆるキリスト教徒が彼に従っています。もし彼が信仰したら、ルームの人々皆が信仰するでしょう。そのとき私も心の中と信仰を明らかにするでしょう」

その後、ヘラクリウスは手紙を書いてドゥフエ様に渡し、ダガートゥルのところへ向かわせた。

預言者様はダガートゥルにも手紙を送っていた。ダガートゥルはこの二通の手紙を読み、預言者様の特徴を聞くと、彼が預言者ムーサー様や預言者イーサー様が来ると知らせていた最後の預言者であることに疑いないと言って信仰した。家に閉じこもって、毎日曜日に行っていた説法にも三週間出てこなかった。キリスト教徒たちは「ダガートゥルはどうしたのですか？あのアラブ人と話してから外に出て来ません。出てきてほしい」と騒いでいた。

ダガートゥルは着ていた黒い法衣を着替えた。白い服を着て、手には杖を持って教会へ現れた。住民を集めた後、立ち上がり「キリスト教徒の者たちよ！私に預言者アハマドから手紙が来たことを知ってもらいたい。我々を真実の

宗教に宣教している。私は明白に知り、そして信じている。彼はアッラーの真実なる預言者である」と言った。キリスト教徒たちはこれを聞くとダガートゥルに攻撃をし、殴って殉教させた。ドゥフエ様は帰ってきて状況をヘラクリウスに知らせた。

ヘラクリウスは「私があなたに言ったとおりでした。ダガートゥルはキリスト教徒の信者からは、私よりも愛され、栄光ある者だったのです。もし、あなたの言うことをきいたら、私も彼のように殺されるでしょう」

ブハーリーの『サヒーフ』で、ズフリによって伝えられていることとして、次のように記されている。「ヘラクリウスはフムスにある宮殿にルームの名士たちを呼び、扉を閉じるよう命じた。その後、高座に上がり『ルームの者たちよ！あなた方を幸せや安らぎに導き、勢力が永遠に続くように預言者イーサーが述べていた言葉に従いたいか？』と問うた。ルームの人々は『我々の王よ！それを手に入れるためにはどうすればよいのですか？』と尋ねた。ヘラクリウスは『ルームの者たちよ！私はあなた方をある善いことのために集めた。私にムハンマド（アライヒッサラーム）から手紙が届いた。私をイスラームに宣教している。アッラーに誓って、彼こそが待ち望まれ、啓典で書かれたことを知り、そしてその印が伝えられてきた預言者なのである。彼に従えば現世も来世も幸せになれるのだ』と言った。これに対して、皆が悪言をつぶやきながら外に出ようと扉へと向かって行った。しかし、扉は閉まっていて出ることはできなかった。ヘラクリウスはルームの人々のこの行動を見て、イスラームをこれほどまでに避けているのを理解すると自分の命を心配し『ルームの者たちよ！私が言った言葉は、あなた方の宗教に対する絆の強さを図るためのものだった。この絆の強さによって、私を喜ばせた行動をこの目で確認した』と言った。これを聞くとルームの人々はヘラクリウスに跪拝し、宮殿の扉が開かれると出て行った」

ヘラクリウスはドゥフエ様を呼び、この出来事を話した。高価なたくさんの贈物を渡し、預言者様に手紙を書いた。準備した贈物に手紙を添えて、ドゥフエ様を預言者様のもとへ返した。ヘラクリウスはムスリムとなることを望んではいたものの、地位や死を恐れて信仰には至らなかった。預言者様に対して書いた手紙では「イーサー様が吉報をも

たらしていたアッラーの預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）へ。ルームの王・カイセルより。あなたの代理人が私のところへと来ました。私は認めます。あなたはアッラーの真なる預言者です。やはり我々は、あなたが新約聖書で書かれていたことを読んでおり、イーサー様はあなたのことを我々に吉報をもたらしていました。ルームの人々にあなたを信じるよう宣教したものの、彼らは私の話に耳を傾けませんでした。私の言うことを聞いていたら、必ずや彼らにとってより良いこととなっていたでしょう。私があなたのところにいて、手伝いをし、あなたの足を洗うことができていたらと思っています」と書かれていた。

ドゥフエ様はヘラクリウスのもとを離れ、ヒスマへとやって来た。途中のジュザムの谷からシェナルの谷の間で、フネイド・ビン・ウスの息子とその部下たちがドゥフエ様を恐喝した。服以外のすべてのものを奪っていった。この地方ではドゥベイベ・ビン・リファーエ・ビン・ザイドとその部族がムスリムとなっていた。ドゥフエ様は彼らのところへと行って、出来事を説明すると、彼らはフネイド・ビン・ウスとその部族のところへと攻撃を行い、奪われたものをすべて返させた。後に、預言者様がザイド・ビン・ハーリスをフネイド・ビン・ウスとその部下たちのもとへと送り、その地方にいる全員が信仰することになる。ドゥフエ様はマディーナに戻って来ると、自分の家に戻ることもなく、直接アッラーの愛する預言者様の家へと向かった。扉を叩くと預言者様が「どなたですか？」と尋ねた。ドゥフエは「ドゥフエ・トゥル・ケルビです」と答えた。万物の王は「入りなさい」とおっしゃった。ドゥフエ様は中に入って、起こった出来事を一言一句説明した。預言者様はヘラクリウスの手紙を読むと「彼にとっては、しばらくの間、勢力を保つこととなるでしょう。私の手紙がその元にある限り、彼らの勢力は続くでしょう」とおっしゃった。

ヘラクリウスが送った手紙には、預言者様を信じると書いてあったが、預言者様は「嘘をついています。彼は自分の宗教を離れてはいません」とおっしゃった。ヘラクリウスは愛すべき預言者様の手紙を絹で出来たサテンに巻き、金の丸い箱の中に入れた。ヘラクリウスの家族はこの手紙を保管し、それを秘密にした。この手紙を持っている限り、勢力を保つことができると言い、それを信じていた。実際、そのとおりだった。

さて、預言者様はハティーブ・ビン・アブー・ベルテアをエジプトの王のもとに行かせる前「教友たちよ！　褒賞をアッラーから待ち、誰がこの手紙をエジプトの王に持っていきますか？」と尋ねると、ハティーブ様が飛び出て「預言者様！　私が持っていきます」と言った。預言者様は「ハティーブよ！　この任務を行うあなたをアッラーが祝福しますように」とおっしゃった。

ハティーブ・ビン・アブー・ベルテア様は手紙を預言者様から預かった。別れを告げて家へと戻った。乗るものの準備を行い、家族と別れて出発した。エジプトの王のムカウクスがアレクサンドリアにいることを知り、宮殿へと向かった。門番は彼を中に入れさせる前にその目的を知り、ハッターブ様に大変な敬意を示し、彼のことを待たせなかった。ムカウクスはそのとき、海上の船の中で部下たちと話し合っていた。ハティーブ様は小さいボートに乗って、ムカウクスのいるところへとやって来た。そして、預言者様の手紙を渡した。手紙をハティーブから受け取ったムカウクスは読み始めた。

「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム。

アッラーのしもべである預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）から、コプト（古エジプト住民）の長ムカウクスへ。正しい道に従う者の胸の上に平安がありますように。あなたがアッラーの救いを得るため、イスラームへと宣教します。ムスリムとなれば救われ、そしてアッラーの二倍の善が得られます。もし、拒否すれば全コプトの罪をあなたが背負うこととなるのです。『言ってやるがいい。「啓典の民よ、わたしたちとあなたがたとの間の共通のことば（の下）に来なさい。わたしたちはアッラーにだけ仕え、何ものをもかれに列しない。またわたしたちはアッラーを差し置いて、外のものを主として崇めない」それでもし、かれらが背き去るならば、言ってやるがいい。「わたしたちはムスリムであることを証言する」（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第六四節）』」

万物の王の手紙を読むと、ムカウクスはハティーブ様に「おめでとうございます」と言った。エジプトの王は司令官たちや部下たちを集め、ハティーブと話し始めた。

「この件でいくつか質問をし、あなたと話がしたい」ハティーブが「どうぞ話しましょう」と答えるとムカウクスは
―あなたを送った人物について教えるのです。彼は預言者ですか？このことについて話をしなさい。
―はい。彼は預言者です。
―彼が本当に預言者であるのなら、なぜ自分を母国から追い出し、別の場所に避難させた者たちに呪いをかけなかったのですか？
―あなたはイーサー・ビン・マルヤムが預言者であることを信じていることでしょう。彼の部族が自分を捕え、殺そうとしていたとき、それに対して呪いはかけませんでした。そしてアッラーは彼を天空に上らせて褒賞を与えたのです。しかし、彼は部族を滅ぼすためにアッラーに呪いをかけたりはしませんでした。
―よい返事です。本当にあなたはアッラーから地位を受けた人物のところからやって来た学者です。今夜、我々のところに泊まりなさい。明日あなたに返事をしましょう。
ハティーブ様は、預言者ムーサー様の時代にいたファラオを示し、ムカウクスにこのように言った。
―あなた以前には、ここにはある王がいました。彼は国民に対し「最大の神は私である」と言って、自分が神であると主張しました。アッラーは彼をこの地上や来世で罰を与え、彼に復讐をしました。あなたはそこから学び、前例のようにはならないでください。
―我々は既にある宗教を持っているのです。自分の宗教よりも、より良いものでない以上そこからは離れないでしょう。
―あなたが従い、また、それよりも良いものでない限り離れないと言っていた宗教より、もっと良い宗教は間違いなくイスラームです。私たちはアッラーの最後の宗教であるイスラームにあなたを宣教します。アッラーが宗教をイスラームで完成させ、人々に十分なようにさせました。これは事実です。この預言者様はあなただけでなく、すべての人々をイスラームに宣教しています。そのとき、クライシュ族は人々の中で、最も彼に反対をし、不親切に接しました。ユダヤ人は最も敵視しましたが、キリスト教徒は他の者より近しかったのです。アッラーに誓って言いますが、預言者ムーサーが、預言者イーサーの吉報をもたらしたように、預言者イーサーは預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の吉報をもたらしているのです。ですから、私たちがあなたをクルアーンへと誘うことは、あなたがユダヤ人を新約聖書に誘うことと同じです。すべての預言者は必ず、自分の理解できる部族に送られています。そしてその部族は、その預言者に従うことが義務とされているのです。あなたもこの預言者様と同じ時代の者の一人です。私たちはあなたをこの宗教に宣教します。
ハティーブ様のこの言葉に対して、ムカウクスは「私はこの預言者の状況を分かっています。命令したものや禁じられたものの中で、決して理解できないものは一つもありません。分かった限りでは、彼は魔法使いや占い師、嘘つきではないのです。預言者の印であるいくつかのことも持っています。隠されていることを明らかにできることも、その印の一つです。この人物は、いくつかの秘密を知らせることもできました」と述べた。そして少し考えたいと言って、時間を求めた。
ムカウクスは夜、ハティーブ様を起こし、預言者様についてたくさんの質問をしたいと言った。その後、二人の間でこのような話が行われた。
―彼についての質問に対し、真実の返事をするのであれば、三つの質問をしてみたい。
―お好きな質問をしてください。私はいつでも真実を言いましょう。
―ムハンマド（アライヒッサラーム）は人々を何に宣教しているのですか？
―ただ、アッラーに礼拝することを宣教しています。夜、昼、五回の礼拝を行い、ラマダーンのときには断食をすること、約束を守ることを命じています。死んだ動物の遺骸を食べることも禁じています。
続けてムカウクスは
―彼の姿恰好を私に説明してください

と聞き、ハティーブ様は手短に説明をした。こと細かな特徴は言わなかった。ムカウクスは
―話していない他の特徴もあるでしょう。目にはほんの少し赤みがあり、背中には預言者の印がある。ロバに乗り、ソフという服を着て、ナツメヤシと、少ない肉で満足する。叔父や叔父の息子たちによって守られる…と言うと、ハティーブ様は
―これらは、彼の特徴です、と答えた。
ムカウクスは預言者様について、再び尋ねた。
―アイライナーは使うのですか？
―はい。鏡を見たり、髪をとかしたりします。戦いのときも平和なときも、鏡とアイラーナー入れ、櫛、ミスワークをいつもお持ちです。
―私は、後に一人の預言者が現れることを知ってはいましたが、それはシャームから出ると考えていました。なぜなら、以前の預言者たちは全員その地方から出ていたからです。最後の預言者がアラビア半島から、厳しい困窮の中にある貧しい国から出るという話も読んではいました。書物によれば、その特徴が書かれた預言者の出る時期は、間違いなく今なのです。我々は彼の特徴として、二人の姉妹とは同時期に結婚をしない、贈物は受け入れるものの施しは受け入れないというものも知っています。貧乏人とともに座ったり、一緒にいたりするとも書物に書いてありました。しかし、彼に従うことについて、コプトたちは私の言うことを聞かないでしょう。私は権力を捨てる考えもありません。その預言者はいろいろな国を支配し、彼の後を追う教友たちが、我々の国まで来ることでしょう。最終的にはここにいる者たちに勝利するのです。ですが、私はコプトたちに、このことについて一切話さないし、今の話は誰にも知らせません。
この話の後、ムカウクスはアラビア語の書ける学者を呼び、預言者様の手紙にこのように返事を書いた。
「アブドゥッラーの息子、ムハンマド（アライヒッサラーム）へ。コプトの名士ムカウクスより。あなたの上に平安

がありますように。送られた手紙を読みました。そこで書かれていたことや、宣教について理解しました。私はある預言者が現れるということを知っていました。しかし、それはシャームから出ると考えていたのです。あなたの代理人を歓待しました。そして、コプトでは高い価値のある二人の女奴隷と服をあなたに贈ります。そして乗るための一頭のロバを贈物として送ります」
ムカウクスはそれ以上、何もしなかった。ムスリムにもならなかった。ハティーブ様をエジプトで五日間、客としてもてなした。多くの敬意を示し、贈物も渡した。その後「ただちに母国の主のところへ戻りなさい。彼のために、二人の女奴隷、二頭の乗るための動物、千ミスカル（一ミスカルは四・八グラム）の金、二十着のエジプト産の薄地の着物など、ほかにも贈物を持って行くのです。あなたのためには、百ディナールと五着の服を渡します」と言った。それから「私のところを出発しなさい。決して、コプトたちがあなたの口から一つの言葉でさえ聞かないように」と命じた。
ムカウクスは預言者様に、他にもフリントガラス、良い香りのハチミツ、ターバン、エジプト産の麻布、香水、ムスク、杖、箱に入ったアイライナー、ローズオイル、櫛、はさみ、ミスワーク、鏡、針と糸を贈物として送った。
ムカウクスは、イスラームの代理人であるハティーブ・ビン・アブー・ベルテアのもとに護衛をつけて出発させた。アラビア半島へと足を踏み入れたとき、マディーナへ向かうキャラバンと出会った。ハティーブはムカウクスの護衛を帰させ、自分はそのキャラバンに加わった。
ハティーブ・ビン・アブー・ベルテアは贈物とともにマディーナに戻り、預言者様の前に出た。愛すべき預言者様は、ムカウクスの贈物を受け取った。ハティーブはムカウクスの手紙を渡し、話していた言葉を伝えると、預言者様は「何と罪深い人でしょうか。権力の壁を越えられませんでした。しかし、信仰することを妨げる勢力は彼のもとに残らないでしょう」とおっしゃった。
ムカウクスが贈物として預言者様に送った二人の女奴隷はマーリーヤとその姉妹のスィリンであった。ハティーブ・

ビン・アブー・ベルテアが旅の途中、彼女たちにムスリムとなるよう宣教すると、二人ともそれを受け入れ、ムスリムとなっていた。預言者様はマーリーヤ様たちがムスリムとなったことを喜び、彼女に自分と結婚するという名誉を授けた。彼女にはイブラーヒームという名の息子が生まれた。この子供は夭折した。スィリンは、教友の一人で、預言者様の詩人であるハサン・ビン・サービトに贈られた。最も良い種類で、白に近い灰色の毛をした二頭の動物の一つにはドゥルドゥル、もう一つにはウフェイルあるいはヤーフルと名付けられた。その日まで、アラビア半島では白い毛のロバはいなかったのである。ムスリムたちが初めて見た、白い毛のロバはドゥルドゥルだった。預言者様は贈り物として送られたフリントガラスで水を飲んだ。

　ムカウクスは預言者様の手紙に大変敬意を示し、象牙でできた箱の中に保管した。箱に押印して女奴隷の一人に見張らせた。（その手紙は、一二六七年（西暦一八五〇年）、エジプトのアーヒミン地方の古い修道院でコプトの本の間から発見され、オスマン帝国の王である、九十六代カリフのスルタン・アブドゥルメジド・ハンによって買い取られた後、イスタンブールのトプカプ宮殿で預言者様の神聖な持ち物を預かる場所に保管された）

　さて、イランの王に対しては、アブドゥッラー・ビン・フゼイフェが送られた。アブドゥッラー様は、高慢なイランのキスラー（王）に万物の王の大切な手紙を渡し、王は読ませるために学者に渡した。

「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム。

　アッラーの預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）からペルシアの名士キスラーへ…」

　学者がここまで読むと、高慢な王は血が頭に上り、手紙を奪って破った。手紙が預言者様の神聖な名前から先に始まっていたことに大変怒っていた。イスラームの代理人であるアブドゥッラー・ビン・フゼイフェを目の前から追い出そうとしたとき、アブドゥッラー様はキスラーとその隣にいる拝火教の信者にこのように言った。「イランの人々よ！あなた方は預言者たちを信じないし、啓典も認めません。住んでいるこの土地で限られた日々を過ごし、夢の世界に生きているのです…

　キスラーよ！　あなた以前にも大勢の王がこの玉座に座り、政治を司りました。アッラーの命令を実行した人は来世で成功し、その命令を実行しなかった者は、アッラーの罰に当たって、この世から去っていきました…

　キスラーよ！　あなたに持って来て渡したこの手紙は、実はあなたにとって大変大きな幸運でした。しかし、あなたはそれを軽蔑しました。アッラーに誓って、軽蔑したその宗教がここに到達したときには、逃げる場所を探すことになるでしょう…」

　その後、キスラーの宮殿を離れ、動物に乗って急いでそこから出発した。マディーナに戻って状況を万物の王に話したところ「アッラーよ！　彼が私の手紙をばらばらにしたように、あなたも彼を、そして彼の勢力をばらばらにしてください」とおっしゃった。

　アッラーは預言者様の願いを受け入れた。キスラーはある夜、自分の息子によって短刀でばらばらに殺害されたのである。ウマル様の時代になると、全イランの土地が支配され、ムスリムの手に渡ることとなる。

　シュジャー・ビン・ウェフブ様は、ガッサンの王であるハーリス・ビン・シミルのもとへ送られた。シュジャーは、まず王の門番と話をした。彼をイスラームに宣教すると受け入れ、預言者様に尊敬の挨拶を送った。そして、シュジャー様を待たせずに王と会わせた。ハーリス・ビン・アブー・シミルは手紙を読むと、怒って地面に叩きつけた。シュジャー様はすぐにマディーナに戻り、状況をアッラーが愛する預言者に知らせた。愛すべき預言者様は、手紙が地面に叩きつけられたことに悲しみ「勢力が衰えるように」とおっしゃった。しばらくすると、ハーリス・ビン・アブー・シミルは死に、国は崩壊した。

　サリート・ビン・アムルはイェマーメの王である、ヘブゼ・ビン・アリーのもとへ送られた。ヘブゼはキリスト教徒だった。預言者様の手紙ではこのように書かれていた。

「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム。

　アッラーの預言者であるムハンマド（アライヒッサラーム）から、ヘブゼ・ビン・アリーへ。

正しい道を得、正しい道に導かれる者に平安がありますように。ヘブゼよ！ ラクダや馬が行ける最も遠いところまで広まり、あらゆる宗教に勝利するということを知っていただきたいのです。あなたもイスラームを受け入れれば、アッラーから救われます。ムスリムとなったら、あなたが支配しているところを任せるでしょう…」

イェマーメ王のヘブゼは、この神聖な宣教を認めることを拒んだ。権力への執着や地位への欲望に眼がくらんでいた。そのため、万物の王の願いに恵まれるという大変貴重な幸運を逃したのだった。イスラームの代理であるサリート・ビン・アムル様は同情して

「イェマーメ王のヘブゼよ。あなたはここの部族の名士です。しかし、あなたが偉大だと考えていた王たちは死んで土となりました。

本当に偉大なものとは、アッラーの命令に従い、アッラーの禁じたものを避け、このようにして天国を手に入れる者なのです。ある一団が信仰という名誉に与ったなら、彼らをあなた自身の崩れた宗教から離し、正しい道から迷わせないようにするのです。私はあなたに対し、アッラーの命令に従い、禁じたものを避けることを勧めています。アッラーを信仰し、命令に従えば天国に入るのです。悪魔に従えば地獄に残るのです。

もし、私のこの忠告を受け入れるなら、心配していたことから解き放たれ、期待していたものに巡り会います。逆に、忠告を拒否したら、もはやあなた方にできることは一つもありません。後は、あなたが考えてください…」と言った。

しかし、ヘブゼはイスラームの代理人のこの美しい忠告にも耳を貸さなかった。サリート・ビン・アムルは、もうイェマーメにいる必要はないと理解して急いでマディーナへと戻り、愛すべき預言者様に結果を知らせた。預言者様は、彼がムスリムとなる幸せから遠ざかったことに悲しんだ。しばらくすると、ヘブゼの死の知らせが届いた。権力への執着や地位への欲望は、地獄の穴である墓で終わったのだった。

このようにして、六人のイスラームの代表が任務を果たし、当時の最も大きい国々へイスラームの存在について知らせたのだった。彼らに真実の幸せを知らせ、最後の審判の日に「私たちは聞いていません」という言い訳の隙を残

さないようにしたのである。

エチオピア王のアスハーメはムスリムとなり、教友たちを見たり、預言者様の神聖な願いに巡り合う名誉に与った。ルーム王のヘラクリウスとエジプト王のムカウクスは、ムスリムとはならなかったものの、預かった手紙に敬意を払い、親しい返答を書いて代理人たちによく接し、預言者様に贈物も送っていた。ガッサンやイランの王は、代理たちに対してよい扱いをしなかったし、敵であることを明白に表した。イェマーメの王は、イスラームの代理人には親切に接した。

ハイバルの征服

光にあふれたマディーナでは、一見、ムスリムに見せかけた偽信者のユダヤ人たちもいた。これらの中には、魔法をかけることで有名な偽信者のレビト・ビン・アーサンという名の者がいた。ユダヤ人たちは彼に金を渡し「ムハンマド（アライヒッサラーム）が私たちの民族をマディーナから追い出し、男たちを殺したのをあなたも知っているだろう。彼に魔法をかけ、罰を与えてほしい」と言った。彼もこれを認め、愛すべき預言者様の神聖な髪の毛や櫛の歯を求めた。この要求を預言者様の手伝いをしていた一人のユダヤ人の子供が実行した。

レビトは預言者様の神聖な髪の毛や櫛の歯を糸で十一回結んでから、息を吹きかけた。そして、井戸の中にある石の下に入れておいた。するとその後、預言者様は健康を崩された。病気となり、床に伏せたままとなってしまった。教友たちは頻繁に訪れ、毎日苦痛がひどくなっていくのを見るたびに、胸が締め付けられ、目には血の涙を流していた。一方の偽信者たちは、喜んで祭りのような雰囲気だった。

ある日、預言者様がアーイシャ様におっしゃった。「アーイシャよ！　知っていますか？　アッラーが私にどう治療したらよいのかを教えてくれました。私のところに二人（ジブリールとミカーイル）が来て、一人は枕元、一人は足元に座りました。一人がもう一人に『この方の病は何でしょうか？』と聞きました。するともう一人が『魔術にかけられたのです』と返事をしました。『誰が魔術をかけたのですか？』と尋ねると、もう一人の天使が『レビト・ビン・アーサンです』と答えました。その後『この魔術はどのようにかけられたのですか？』と聞きました。もう一人が『一本の櫛と髪の毛、そして雄のナツメヤシの実の中身を使ってです』と返事をしました。『それはどこにありますか？』という質問に対しては『ゼルワンという井戸の中です』との返事がありました」

ゼルワンはマディーナのズレイキ族という部族の庭にある一つの井戸だった。預言者様はその井戸にアリー様とズバイル、タルハ、アンマールを行かせた。井戸の水を汲んで、石を動かした。すると、その下から十一回結ばれた紐

を見つけた。それを預言者様のところへ持ってきた。時間をかけても結んであるものをほどくことはできなかった。すると、大天使ジブリール様がクルアーンの『黎明章（アル・ファラク）』と『人々章（アッ・ナース）』を啓示し、預言者様がこの二つの章、つまり合わせて十一の節を読むたびに、結び目が一つずつほどけていった。結び目がすべてほどけると、万物の王は楽になって健康を取り戻した。

ユダヤ人のレビトは捕らえられ、預言者様の前に連れてこられた。預言者様は彼に「アッラーが、あなたの行っていた魔術を私に知らせ、その場所を示したのです。あなたはなぜこのようなことをしたのですか？」と尋ねると「金に対する弱さです…」と返事をした。教友たちの何人かは「預言者様！　あなたのお許しがあるのなら、このユダヤ人の首を切りましょう」と言ったが、個人に対することでは誰一人として罰を与えなかった愛すべき預言者様は「最終的に彼に与えられるアッラーの罰の方が、より厳しいものとなるでしょう」とおっしゃって、殺すことは認めなかった。

ユダヤ人たちは、マディーナから追い出されると、アラビア半島の北の方へと向かった。その一部はハイバルに留まって生活していた。また、一部は北にあるシャームへと向かった。彼らは預言者様の殺害を図ったため、祖国から追放されたのだった。しかし、ムスリムの人々に対する恨みや貪欲さ、復讐の気持ちは決して消えることはなかった。しかも、毎日それは激しくなっていき、一日でも早く、万物の王であるアッラーの最愛の者の命を奪って、イスラームを滅ぼそうとしていた。何人かの名士たちは「ガタファン族のところへ行き、助力を願おう。ムスリムに対抗して彼らと同盟を結んで戦おう」と言った。また、何人かは「フェデッキ、テイマー、そしてワドゥ・イル・クラーのユダヤ人たちにも協力を求め、ムスリムたちが我々に攻撃してくる前に彼らの町を攻めて、今までの、そしてこれから起こりうることに対する復讐をしよう…」と言っていた。

ハイバルのユダヤ人は、この提案を受け入れ、周りのユダヤ人の部族たちとガタファン族に協力を求めた。ガタファン族だけからでも、大勢の選ばれた戦士たちがやって来て、ハイバルで準備を始めた。

このような準備をしているというユダヤ人の状況は、万物の王の知るところとなった。そこで、アブドゥッラー・ビン・

レバーハ様のもとへ三人の教友を送り、ハイバルで何が起きているのか調べるためにただちに出発させた。アブドゥッラー・ビン・レバーハと三人の仲間たちは、急いでハイバルに向かった。ここは、防護の固い八つの砦と豊かな土地、多くの果樹園や庭がある恵まれた町だった。アブドゥッラー様は仲間の一人をシュク砦へ、別の一人をケティベ砦へ、もう一人をナタート砦へ行かせた。自分でも別の砦へ行き、三日間ユダヤ人の状況と戦争の準備などを間近で調査した。三日後、約束された場所で落ち合い、マディーナに急いで戻って起こっていたことを預言者様に一つずつ説明した。

愛すべき預言者様は、教友たちに急いで準備をするよう命じた。ユダヤ人がマディーナに攻撃するのを避けるため、ハイバルに攻撃を行うことに決めた。この決定を耳にしたマディーナのユダヤ人たちは慌てていた。ムスリムたちの情熱を崩そうと「誓って、もしあなた方がハイバルにある砦や、そこに集まった勇敢な戦士達を見たら、決してそこには足を踏み入れないでしょう。山の頂上にある高い塔のある砦を、鎧で固めた勇者たちが守っているのです。周りからは何千人もの戦士が彼らのもとに加わったそうです。あなた方がハイバルを征服するのは果たして可能でしょうか…」と言うのだった。これらに対して勇敢な教友たちは「アッラーが愛する預言者様に、ハイバルが征服されるという約束があったのです」と言って、ユダヤ人たちに決して恐れないことを表した。教友たちのこの固い決心に、ユダヤ人たちは一層悲嘆に暮れて、心配を深めたのだった。

偽信者の頭であるアブドゥッラー・ビン・ウベイは「ムハンマド（アライヒッサラーム）が少数の軍隊で、あなた方に攻撃をしかけます。しかし、心配することはありません。ただし、警戒して持ち物は砦の中に持っていくように。彼らに対しては、砦から出て迎え討つのです」と言って、ハイバルへ知らせを急行させた。

教友たちは準備を整え、家族と別れを告げ、預言者様のもとへと集まった。二百人の騎兵と千四百人の歩兵がいた。アッラーの宗教を広め、ジハードを行い、殉教者としての地位を手に入れるため、愛すべき預言者様の命令を待つばかりだった。このとき、何人かの女性たちが、戦地での教友たちの食事の準備をしたり、怪我をした者の治療にあたったり、できることを行うため任務につけてもらえるよう預言者様に願い出た。預言者様は同情し、彼女たちからこの

善行が失われないように取り計らった。このようにして、戦士達に加え、預言者様の神聖な妻であるウンム・サラマ様をはじめとした二十人の女性たちも同行することとなった。

預言者様はマディーナでの代理人として、グファル族のスィバー様を残し、ハイバルへ出発する命令を下した。（ヌメイレ・ビン・アブドゥッラーも残されたという伝承もある）旅はタクビールとともに始まった。理由があって戦いに加わらなかった者や、年少のため参加が許されなかった若い教友たちは、預言者様や勇敢な父、祖父、叔父、兄たちをうらやましく見ながら、タクビールや祈念とともに見送った。

時は、ヒジュラ七年目だった。預言者様の神聖な軍旗はアリー様が持ち、右翼の司令官はウマル様が務めた。旅は喜びの中で続いた。詩人たちは詩を詠み、アッラーが下さった恵みに感謝し、愛すべき預言者様に挨拶を送って、勇敢な教友たちを称賛した。教友たちも、祭りにでも行くかのように、全員が一団となって「アッラーフ・アクバル！　アッラーフ・アクバル！　ラー・イラーハ・イッラッラーフ・ワッラーフ・アクバル！」と言いながら、意気高く進んでいった。休息をとる度に、万物の王は「アッラーよ！　将来について心配することから、昔のことで不安になることから、そして、弱さや不注意、けち、臆病、借金から、残酷で不誠実な人々に危害を加えられることから、あなたのもとへと避難します」と祈念していた。ハイバルに近づいたとき、愛すべき預言者様が止まるのが見られた。両手を上げ「天空や暗闇の主であるところのアッラーよ！　地上やその上にあるものの主であるところのアッラーよ！　悪魔や道を誤った者たちの主であるアッラーよ！　風が吹き散らしたものの主であるところのアッラーよ！　我々はあなたに、この場所の益と善を、またこの場所に住む人々の益と善を、そしてこの場所にあるあらゆる益と善を願います。そして、この場所の悪意や人々の悪意から、そして、この場所にあるあらゆる悪意からあなたのもとへと避難します」と言って祈念し始めた。教友たちの口からは「アーミーン、アーミーン」という声が出ていた。その後、預言者様は教友たちに「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム、と言って進むのです」とおっしゃった。

預言者様よ！

預言者様よ！あなたの家の前の奴隷の
足についた土に口づけしない者は
そしてその幸せのために命を捧げない者は
あなたへの愛情もないし、言葉は嘘だから信じまい

あなたが踏んだ土を頭上の冠としよう
それに口づけし、目につけ、心の薬としよう
正しい道を見つけ出すランプとしよう
そしてあなたの後を追う、あなたを愛し感嘆しながら

あなたから来るあらゆる風を嗅ぐ
芳しい香りがあるだろうか、と探る
あなたのために犠牲にする、家族や子供を
母や父、親戚、そして何千人もの命を

あなたを心から愛するメブラーナ・ハーリドは言う
全世界の王よ、地球が愛する者よ！
私のたった一つの命はあなたのもの、あなたの私への恵みは言い表せない
捧げるために持ってきたその一つの命

あなたの奴隷の印を額につけない者は
あなたの愛のネックレスを首に飾らない者は
あなたの見る対象とならない者は
あなたのことを愛していますと言わないでほしい、もし他の人の方が好きならば

千三百年の間、心を焼いてあなたを称える者たちのうち
いつもあなたを称えて仲裁を求める者たちのうち
あなたの扉へ来る者たちのうち
その中で最も悪く弱いしもべは力不足のこの私

こう言う、アッラーの愛する者よ、あなたのもとへと向かいましょう
すべてを忘れ、あなただけを知りましょう
砂漠に落ち、焼けて無くなりましょう
いつもあなたに向かって、あなたを称えながら

あなたへの愛情の熱のせいで渇いた唇を
湿らせようと口づけをする、預言者様の墓所の埃に
口づけをして顔にもつける、あなたのきれいな土を
それは魂には薬となり、病の身体には力となる

あなたの前で両手を開き、アッラーに懇願しよう
何時間も何日も、何ヶ月も、そうしよう
いつも赦しを求め、いつもあなたに挨拶を送ろう
赦しを求めます、いくら感謝をしてもそれは足りない

呻いては泣き、命をあなたに捧げよう
そして胸を焼く愛情の涙を流すのだ
涙が尽きたら血で泣いて、ロウソクのようになくなろう
そして空より高いラブダで命を渡すのだ

最も美しい乗り物はあなた、もっとも正しい道案内はあなた
永遠の幸せはただあなたが教える
そしてあなたに従う者に吉報をもたらす
それをペンでは説明できず、言葉でも語れない

一度でよいから、この貧乏人が王のように
子供の死で失明したヤークブのカナンの地のように
真っ暗闇の新月の光のように見えてほしい
はかない命が一瞬にして幸運を授かるように

教友たちは、預言者様の周りで再び歩き出した。ハイバルで最も守りの固い砦であるナタート砦の近くまで来て、司令部を設置した。時間は夕方だった。預言者様は習慣として、朝にならないと攻撃を行わなかった。そして、まずイスラームに宣教を行うのだった。その宣教が受け入れなかった場合、戦争を開始していた。これに従って、教友たちは朝を待ったのだった。ユダヤ人は一人たりとも、イスラーム軍が来ていたことに気付かなかった。

万物の王は、朝の礼拝を行った後、準備を整え、戦士たちを動かし始めた。二百人の騎兵や千四百人の歩兵が順序良く進み、ナタート砦の前に近づいてきた。このとき果樹園や庭園、畑での仕事をするため、砦から出ていたユダヤ人たちは、突然にイスラーム軍と出会って驚いた。そして「誓って彼らはムハンマド（アライヒッサラーム）の秩序ある軍隊だ…」と言って、後ろに逃げ始めた。彼らのこの状況を見た愛すべき預言者様は「アッラーフ・アクバル！アッラーフ・アクバル！ハイバルはもはや征服されます」とおっしゃり、この神聖な言葉を三回も繰り返した。

預言者様はユダヤ人たちに、ムスリムとなるか、あるいは降伏して貢物を収め税を支払うか、戦いを行って血を流すかという選択肢を示した。ユダヤ人たちは、名士の一人であるセッラム・ビン・ミシュケンのところへ行って、状況を説明した。セッラムは「以前、ムハンマド（アライヒッサラーム）に対して攻撃するよう求めたが、あなた方はそれを受け入れなかった。せめて、今、彼と戦うにあたって力を抜かないようにするのです。ムスリムたちと戦って死ぬことは、一人で生きることよりましでしょう…」と言って、彼らを戦いに激励した。ユダヤ人たちは急いで子供たちや女たちをケティベ砦に、備蓄をナーイム砦に、軍隊をナタート砦に集めた。

イスラーム軍からのムスリムになるという提案に対して、ユダヤ人は弓を射て返事とした。ムスリムの戦士たちは弓を盾で防いだ。愛すべき預言者様の命令のもと矢を放ち、砦の塔にいるユダヤ人に対して「アッラーフ・アクバル！…」という叫び声をあげて、弓を射たのだった。戦いの火ぶたが切って落とされた。一方には万物の王や勇敢な教友たちが、イスラームを広め、彼らがムスリムとなって地獄から救われるために戦っていた。もう一方には、忠告を理解せず、あらゆる機会でムスリムたちを後ろから攻めて、真実を見ようとしないユダヤ人たちがいた。ハーテム・ウル・

エムビヤー（最後の預言者）が自分たちの民族から出なかったため、妬みから彼を認めなかったのである。彼らは預言者様が子供のときから亡き者にしようとあらゆる手だてを講じてきたが、アッラーの保護のおかげで、彼らは何もできていなかった。

千六百人の名誉ある戦士たちに対して、一万人ほどのユダヤ人の軍が弓を放っていた。教友たちは次々と来る弓に対して盾で身を守り、隙があれば地面に落ちた矢をユダヤ人たちに射たのだった。しかし、何人かの教友たちが怪我をした。

あるとき、アッラーの愛する預言者様の前に、ハッバーブ・ビン・ムンズィル様が大きな尊敬を表した様子で近づくのが見られた。「命をあなたに捧げます、預言者様！司令部を別のところへ移したらどうでしょうか？」と彼が提案すると、預言者様は「インシャーアッラー、夜になったら変えましょう」とおっしゃった。戦士たちは矢が届く距離にいた。ユダヤ人たちが砦から射た矢は、イスラームの司令部の後ろまで届いていた。

あなたのもとに来ました！

罪ある者が逃れる場所、あなたのもとに来ました
数多の罪を犯し、懇願しようとあなたのもとに来ました

暗闇にいて流砂にのまれてしまったのです
正しい道を輝かす、光の源であるあなたのもとに来ました

残っているのは一つの命、すべての命の命であるあなた
言うことが適っているかは分かりませんが、命を捧げに来ました

悲しむ者の医者であるあなた、私は心の病にかかってしまいました
それを治そうと、あなたの扉を叩きにやって来ました

寛大な御方のもとに物を持っていくことは過ち
あなたが踏んだことで名誉に与った土に口づけをしようと来ました

罪は多く山のようで、顔は黒くタールのよう
この重荷と暗闇から解放されようと来ました

もちろんそれは清められるのです、あなたの恵みの海の一しずくで
私の顔は黒く、そして、罪の帳簿を持ってきました

あなたの扉に顔をつける、我が命より大切な方よ
水でできないものが、その土ならできるのです！

その日の夜まで、戦いは弓矢で続いていた。五十人ほどの教友たちが、放たれた矢で怪我をした。夕方になると新しい司令部の場所を探すため、ムハンマド・ビン・メスレメ様に任務が告げられた。彼はレジと言う場所が適当であると知らせると、イスラームの司令部はそこに移動することとなった。怪我人の手当が始まった。

翌日、ナタート砦の前まで来た勇敢な教友たちは、夕方まで戦っていた。三日目、四日目、五日目と包囲が続いた。ユダヤ人たちはずっと防護していた。このとき、愛すべき預言者様はひどい頭痛に見舞われており、二日間戦士たちの間に入らなかった。その初日には、軍旗をアブー・バクル様に、次の日にはウマル様に託した。二人とも教友たちの先頭に立って、ユダヤ人と激しく戦っていたが、砦を陥落させることはできなかった。

その間、自信を深めてきたユダヤ人たちが、砦の扉を開けて攻撃を開始したのが見られた。今や、胸と胸を合わせた戦いが始まったのだった。戦いは非常に激しくなっていた。預言者様が教友たちに「『アッラーフ・アクバル！アッラーフ・アクバル！』とタクビールをしなさい」とおっしゃるたびに、タクビールの声とともに愛情と情熱をもって

敵と戦うのだった。ムハンマド・ビン・メスレメの兄弟のマハムードが殉教者となった。戦いは激しいまま夕方まで続いた。

翌日、ハイバルの有名な司令官の一人であるメルハブが、鎧に身を固めて砦から外に出てきた。力のある怪獣だった。それまで前に立ちはだかる勇者はいなかった。戦士たちに向って「私はその勇気と勇敢さで有名なメルハブだ」と自慢し始めた。このようにして自慢を始めたとき、教友たちの中から一人の戦士が出てくるのが見られた。彼はメルハブに向って「私は恐ろしく激しい戦いにおいても、前に出ることを恐れないアーミルである」と大声を上げ、直ちに前に立ちはだかった。巨人のメルハブが「触った者を殺す…」と書かれた刀をアーミル様に全力で振り下ろした。勇敢なアーミルは、速やかに盾で防いだ。幅広の刀が盾にぶつかると、激しい金属音がして盾につき刺さった。

アーミル様はアッラーに身を寄せて「アッラーよ！」と言い、鎧をつけたメルハブの足に刀をぶつけた。刀は鋼の鎧に当たったが、はね返されてアーミル様の足に当たってしまった。刀は激しくはね返されたために、アーミル様の足の動脈が切れてしまった。教友たちは走ってアーミルを抱きかかえ、治療するため司令部に連れて行った。しかし、アーミル様は殉教者となった。

戦いは激しい状態で続いていた。夕方頃、愛すべき預言者様は、ユダヤ人のもとへ四千人の軍とともにやって来て、戦いに加わっていた不信仰者のガタファン族に、故国に戻るよう提案をした。もしそうすれば、ハイバルにおける一年間のナツメヤシの収穫を彼らに与えると約束をした。しかし、ガタファン族はこの提案を拒否した。これに対して万物の王は、教友たちにガタファン族がいる砦の周りに行って朝までそこで過ごすよう命じた。ガタファン族は、夜、戦士たちの攻撃を恐れて寝ることもできなかった。またその夜、どこから来たのか分からないある声がして「ガタファン族の国が攻撃され、子供や資産が奪われた」という知らせが三回も繰り返された。これはガタファン族を大きな恐怖に陥れた。司令官のウエイネもこの声を三度聞き、朝になると軍を集めてハイバルから急いで離れ、祖国へと戻ったのだった。朝、ユダヤ人たちは、ガタファン族が理由もなくハイバルを離れたことに驚き、希望を失ってしまった。

そして、彼らを手助けに呼んだことを後悔した。

アリー様の勇敢さ

その日も、ハイバルの前面では激しい戦いが続いていた。しかし、砦を陥落させることはできなかった。夕方になると、万物の王が「明日、軍旗をある勇敢な者に渡します。その人はアッラーや預言者を愛しています。アッラーや預言者もその人を愛しています。アッラーは彼の手をもって征服を行うでしょう」と吉報をもたらした。その夜、教友たちは興味深く朝まで待っていた。誰もが自分に旗を持たされることを期待し、このためアッラーに祈願したのだった。ビラール・ハベシ様が朝のアザーンを美しい声で詠み上げた。アザーンが詠まれると、軍には興奮と歓喜が現れ、信心にあふれた喜びでいっぱいになった。愛すべき預言者様は、教友たちと朝の礼拝を行った後、立ち上がって、神聖なイスラームの軍旗を持ってくるよう命じた。聖なる軍旗が持って来られたとき、教友たちは立ったまま、預言者様の口からどのような言葉が出るのか注意深く見守っていた。ついに、万物の王は「ムハンマド（アライヒッサラーム）に預言者としての名誉を与えたアッラーに誓って、私はこの旗を、逃げることを知らない一人の勇者に渡します」とおっしゃった後、神聖な目を教友たちの上に注ぎ「アリーはどこにいるのですか？」とおっしゃった。教友たちが「預言者様！彼は目が痛いようです」と言うと、預言者様は「彼を私のところに呼びなさい」とおっしゃった。そのとき、アリー様は目の痛みのため、目が開けないほどだった。アリー様のところへ行って状況を知らせ、神聖な肩をとって預言者様のところへと連れて行った。万物の王は、アリー様の健康を戻すためアッラーに祈念をし、神聖な指を口の中で湿らせて目につけた。その瞬間、アリー様の目には少しの痛みも残らなくなっていた。続けて「アッラーよ！暑さや寒さの苦難を彼からなくしたまえ」と述べて彼のために祈念をした。その後、アリー様に自らの神聖な手で鎧を着せ、腰には自分の刀をつけさせ、手には白いイスラームの軍旗を渡して「アッラーがあなたに勝利を結びつけるま

で戦うのです。決して後ろを振り返ってはなりません」とおっしゃった。

アリー様も「命をあなたに捧げます、預言者様！　彼らがイスラームに入信するまで戦います」と言った。愛すべき預言者様は「アッラーに誓って、彼らのうち誰か一人でも、アッラーがあなたの手によって正しい道へと導くのであれば、それはあなたにとって、たくさんの紅いラクダを施し物として差し上げるよりも幸運なことなのです」とおっしゃった。

アリー様は手に軍旗を持ってユダヤ人の砦に歩いていき、名誉ある教友たちもその後ろに続いた。砦に近づき、軍旗をある石の根元に立たせると、ナタート砦の門が開くのが見られた。ユダヤ人たちが攻撃をするため、外に出てきたのだった。彼らはハイバルの中でも選ばれた勇敢な者たちだった。皆が二重の鎧を身にまとい、鉄壁の守りを誇っていた。その中の一人が、アリー様に向って歩き、戦うために前に立つのが見られた。この人はメルハブの勇敢な兄弟のハーリスだった。すぐに戦いが始まった。二つの鋼がたてる音が戦場に響き渡った。ズルフィカルは雷のように振り下ろされ、ハーリスの身体を二つに分けた。そして「アッラーフ・アクバル！…　アッラーフ・アクバル！…」という声が空に轟いた。

兄弟が殺されたことを聞いたメルハブは、部下の軍とともに急いで戦場に走った。アリー様の前に立ちふさがった。彼も二重の鎧をつけていた。二つの刀を持つ、巨大な体をした怪獣のようだった。怒りの中「私は戦いが最も激しくなったとき前面に出て戦うメルハブだ。唸り声を立てるライオンでさえ、私は刀や槍でばらばらにするのだ…」と言って、自慢し始めた。

アリー様は「私は、母がハイダル（ライオン）という通称を付けた者だ。私は偉大なる獅子である。そしてあなたを一撃で地に倒す勇者の一人なのだ」と言い返した。メルハブはアリー様からハイダルという言葉を聞くと、心に恐怖が芽生えた。なぜなら、夜、夢で一頭のライオンが自分のことをばらばらにしたからだった。夢で見ていたライオンとはこの人だったのだろうか？　その後、巨人のメルハブが攻撃をし、アリー様がそれを盾で防いでいるのが見られた。

やがて、アッラーに身を寄せ、ズルフィカルを異教徒の頭へと振り下ろした。巨大なメルハブはズルフィカルを防ごうとしたが、それは厚い鋼の盾と鋼でできた兜を通り、彼の首まで二つに分けるのが見えたのだった。ズルフィカルの立てた恐ろしい音は、ハイバルのあらゆるところまで聞こえた。

預言者様は「喜びなさい。ハイバルの征服は楽なものとなりました」とおっしゃった。教友たちは、アリー様のこのような勇敢な行動に感心した。「アッラーフ・アクバル！」という叫び声が空をつんざいた。戦いは激しく続いていた。教友たちは戦いに戦って、砦の門のところへと来た。そのとき、一人のユダヤ人が刀をアリー様の盾に打ち付けた。盾は地面に落ちた。しかし、それを拾う時間はなかった。この機会を逃さなかったユダヤ人は、盾を奪って後ろへと逃げていった。これに落胆したアッラーの獅子は、ズルフィカルで周りにいる敵を退散させた後、砦の門を盾に使おうと考えた。「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム」と言って、鉄で出来た門の取っ手を引っ張った。ちょうつがいを壁から外した。アリー様が門を壊すと、砦全体が揺れた。八人や十人の者でも動かすことのできないこの門を使って、片手で盾として戦い始めたのだった。目の前には次々に、ユダヤ人の六人の勇敢な戦士が現れた。アッラーの助けのもと、彼らにも勝利したアリー様は、勇敢な仲間たちとともに砦に入っていった。砦の中で戦いが続いた。瞬く間に前に出てくる者はいなくなり、イスラームの軍旗が砦に翻った。こうして、難攻不落といわれたナタート砦が征服されたのである。

愛すべき預言者様はアリー様の目に接吻をして「あなたが行った勇敢さに対して、アッラーや預言者があなたに満足しています」とおっしゃった。この神聖な言葉を聞いたアリー様は喜びに涙を流した。預言者様が「なぜ泣くのですか？」と尋ねると「命をあなたに捧げます、預言者様！　喜びのために泣いているのです。アッラーや預言者様が私に満足しているからです」と答えた。これに対して愛すべき預言者様は「私だけではなく、ジブリールやミカーイル、そして他の天使たちもあなたに満足しているのです」とおっしゃった。

このとき、デビース族から四百人のムスリムたちが、預言者様のもとへ加勢してきた。その後、他の砦も征服するため、

戦いが激しく続いた。ハイバルの残りの七つの砦が一つずつ落とされると、対抗できないユダヤ人たちは、代表を送って戦いを終わらせようとした。預言者様はこの提案を受け入れ、次の和議を結んだ。

一、この戦いで、ムスリムたちと戦ったユダヤ人が処刑されることはない。

二、ハイバルから追放されるユダヤ人たちは、子供たちと一頭のラクダ分の日用品を持って行くことができる。

三、残された動産および不動産のすべて、鎧、刀、盾、弓、矢などのあらゆる武具、着ていた服以外のすべての衣服、布、金、宝飾品、馬やラクダ、羊等の家畜といった所有物はムスリムに残される。

四、ムスリムに残されるべきものは、決して隠さないこと。隠した者はアッラーや預言者の保護を受ける資格はないこととなる…

この条件を破って、宝物を動物の革に入れて地面に埋めたキナーナ・ビン・レビーは罰せられることとなった。得られた戦利品は山のようだった。ハイバルの豊かな土地やナツメヤシなどのすべてがイスラーム軍に残された。

このとき、祖国に戻っていたガタファン族は、ユダヤ人に加勢しようとハイバルに戻ってきた。預言者様がハイバルを征服し、ユダヤ人を降伏させたのを見ると「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！あなたは我々がハイバルから出ていくなら、ハイバルの一年間のナツメヤシを我々にくれると約束していました。我々は約束を守ったのです。だからそれらをもらいましょう」と言ってきた。預言者様は「どれそれの山の分をあなた方にあげましょう」とおっしゃった。しかし、ガタファン族は「そうであるなら、我々はあなた方と戦います」と言って、脅そうとした。すると、預言者様は「戦いの場所はジェナーフェにします」とおっしゃった。ジェナーフェは、ガタファン族のいる地方の一つだった。これを聞いたガタファン族は、恐怖に陥り帰って行った。

愛すべき預言者様と勇敢な教友たちは、ハイバルの征服のため、大変疲れきっていた。怪我人の治療を行う一方で休息を取っていた。そのとき、ユダヤ人の名士であるセッラム・ビン・ミシュケンの妻のザイナブは、預言者様を毒殺しようと考えていた。このため、一頭の山羊を切って料理を作り、肉にたくさんの毒を仕込んだ。そして、預言者

様の前に上がり、贈物を持ってきたと言うのだった。預言者様はこれを受け入れ、教友たちを呼んだ。全員が一緒に食事をしようと座った。

万物の王は、山羊の前脚の方からひと口を取り「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム」と言って神聖な口に入れた。二、三回噛んだ後、すぐに神聖な口から出し「教友たちよ！この料理から手を離しなさい。なぜなら、この前脚の肉が、毒を混ぜられたということを私に伝えたのです」とおっしゃった。教友たちはただちに手を料理から離したが、肉からは既にひと口食べていた。ビシュル・ビン・ベラー様の身体がすぐに紫色になり、殉教者となってしまった。愛すべき預言者様のもとにジブリール様が来て、神聖な唾に混ざった毒を消すため、神聖な肩の間から血を吸引するよう言った。そして、そのとおりに行われた。その後、毒の盛られた料理は土に埋められた。これを行ったザイナブは捕らえられ、預言者様の前に連れてこられた。預言者様は彼女に「この家畜の料理にあなたが毒を混ぜたのですか？」と尋ねた。彼女は行ったことを白状し「はい。私が毒を入れました」と答えた。預言者様は「なぜそうしようとしましたか？」と尋ねると「あなたは私の夫や父、叔父を殺したからです。私は自分に『もし、彼が本当の預言者であれば、アッラーが彼に知らせるだろう。そうでないのなら、この毒のせいで死ぬだろう。こうして私たちは助かるのだ』と思ったのです」と語った。教友たちはこの出来事に大変悲しみ「命をあなたに捧げます、預言者様！彼女を殺しましょうか？」と尋ねたが、自分個人に対して行われたことには全てを許していた万物の王は、このことについても許したのだった。この大いなる憐みを見たザイナブはムスリムとなった。

ハイバルで手にした戦利品となった捕虜の中には、フエイ・ビン・アフターブの娘のサフィーヤもいた。彼女は司令官の取り分として預言者様に献上されていた。万物の王は捕虜を自由にさせた。彼女はこのことに感動し、心から信仰告白を行ってムスリムとなった。これに喜んだ愛すべき預言者様は、サフィーヤ様に対し、結婚という名誉を与えて彼女を祝福した。こうして、サフィーヤ様は信者たちの母となったのだった。セヒバ地方で結婚式を挙げ、メロンやナツメヤシでベリーメ、つまり結婚式の料理がふるまわれた。

サフィーヤ様の神聖な目の部分は紫色になっていた。愛すべき預言者様が「このあざは何ですか？」と尋ねると、彼女は「かつて、ある夜、夢で月が空から降りてきて、私の胸に入ってくるのを見ました。前夫のケナーネに話したところ『お前は私たちに攻撃をしにきた、あのアラブの王の妻になろうと考えていたのだろう』と言って、目を平手打ちしました。そのためにあざがあるのです」と答えた。

ハイバルが征服された後、ユダヤ人たちは預言者様に「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 我々はハイバルから出て行きます。しかし、我々は農地や畑、果樹園や庭園のことをよく知っているのです。もしよければ、この豊かな土地を私たちに貸してもらえませんか。この土地を耕して、出来上がった作物の半分をあなたにあげましょう」と提案をした。愛すべき預言者様と教友たちは、畑の仕事をするための時間はなかった。彼らはイスラームを広めるために奮闘していて、ジハードのために朝も夜も努力していたのだった。この提案を預言者様は気に入り「私たちの都合次第で、あなた方はこの場所から出て行くという条件で」とおっしゃった。ユダヤ人たちはこれを受け入れ、ハイバルの土地を耕し始めた。

預言者様は教友たちとともに、勝利を得てマディーナに戻ってきた。このとき、以前エチオピアに亡命していた教友たちが、ジャーヒル・ビン・アブー・ターリブを筆頭に戻っていたことを見て大変喜んだ。預言者様はジャーヒル様の額に接吻して抱擁した。そして「私はハイバルの征服に喜ぶべきでしょうか、それともジャーヒルが戻ったことに喜ぶべきでしょうか。あなた方はヒジュラを二回行いました。あなた方はエチオピアにも、そしてこの地にもヒジュラをしたのです」とおっしゃった。

ハイバルで手に入れた戦利品は、フダイビーヤの和議に加わっていたすべての教友たちや、ハイバルの戦いに参加した人々、エチオピアからヒジュラをした教友たち、そして戦いに参加したデウス族の間で分配された。

ハイバルが征服されたことによって、アラビア半島にいるすべてのユダヤ人たちは、預言者様の命令に従うこととなった。もはや、ユダヤ人たちが不信仰者たちを助ける機会はなくなっていた。周りにあった部族や国は、武器や軍

隊では征服することが到底不可能であろうと思われたハイバルの砦をムスリムたちが手に入れたことで、これほどまでに大きな力を持っていることを理解し、イスラームの国を恐れ始めたのだった。マッカの住民である不信仰者たちは、ハイバルが征服されたことを悲しんでいた。この征服の後、大小さまざまな部族がムスリムとなるためにマディーナへと来て、教友となる名誉に与っていた。その中にはあのガタファン族でさえ…。一方、言うことをきかないいくつかの部族は制圧されることとなったのだった。

ウムレ・トゥル・カザーの出征

フダイビーヤの和議から一年が過ぎた。犠牲祭の一ヶ月前、預言者様は教友たちにウムラを行うための準備をするよう命じた。フダイビーヤでビアート・ウ・ルドゥワンに参加した者は、この時までに亡くなった者を除いて、全員が行くこととなった。この命令によって、二千人の教友たちが準備を整えた。犠牲としての七十頭のラクダも用意され、マッカまでこれらの世話をするため、ナージイェ・ビン・ジュンドゥブと四人の仲間たちに任務を託した。他に、ムハンマド・ビン・メスレメ様が、百人の騎兵とともに、鎧や槍、刀など戦いで使う武具を持っていくため、先に出発をした。不信仰者たちに対して油断はできなかった。何らかの攻撃があれば、このような武器が使われることとなるのだった。何人かの教友たちが「預言者様！ フダイビーヤの和議によれば、ウムラを行う際には鞘に入れた刀以外に武器は持っていかないという条件でした」と言った。万物の王は「私たちは、その武器をマッカやクライシュ族のところへは持っていきません。しかし、それらはクライシュ族が私たちに何らかの攻撃をしてくることを想定して、近くにあるようにしておくのです」とおっしゃった。

マディーナでは代理人として、アブー・ザール・アル・グファーリーが残された。別の説によれば、アブー・ルフム・アル・グファーリーが残されたとされている。二千人の教友たちが愛すべき預言者様とともに、マッカに向かって出発した。教友たちは大変興奮していた。何年間もアッラーのため、愛すべき預言者様のため、家や母国を離れていた今、その母国を目にしようとしていたのである。一日五回の礼拝で向かっていたマッカを訪ねようとしていたのである。ムスリムとなったものの、条約によってまだマディーナには来られない親戚と会おうとしていたのである。何年間も自分たちに目からは涙の代わりに血を流させ、虐待を行い、うめき声を上げさせ、像を崇めるために多くの兄弟を殉教させたクライシュ族の不信仰者たちに対して、イスラームの名誉や尊厳を示そうとしていたのである。このことによっては、不信仰者たちの心にもイスラームへの愛情が芽生え、ムスリムとなるかもしれない…

マディーナに残された者は「別れの坂」までタクビールや激励をしながら、万物の王を見送ってから戻った。

愛すべき預言者様は、マディーナから十キロメートルほど先にある、ズル・フレイフェという場所に来ると、イフラームに入った。名誉ある教友たちも預言者様に従って、全員、白い巡礼着に着替えた。ウムラを行うため、マッカへの旅が始まったのである。「ラッバイカ！ アッラーフンマ、ラッバイカ！ ラッバイカ！ ラー・シェリーカ・ラカ・ラッバイカ！ インナル・ハムデ・ワンニーメテ・ラカ・ワルムルク、ラー・シェリーカ・ラカ！」という叫び声が空に轟いた。アッラーに感謝や祈願をし、アッラーの神聖な名前を念唱しながら、旅は喜びにあふれる中進んでいった。

先に向かっていたムハンマド・ビン・メスレメを司令官とする一団がマッカに近づくと、クライシュ族の不信仰者たちが彼らを見つけた。恐る恐る近づき「我々は一年前に、このような条約は結ばなかったはずだ」という態度を示しながら「これはどういったことですか？」と尋ねた。ムハンマド・ビン・メスレメは、彼らが衝撃を受けることとなる次の返事をした。「彼らはアッラーやアッラーの預言者の騎兵たちです…。アッラーが許せば、明日、彼らもここにいらっしゃいます…」不信仰者たちは、怯えてマッカに舞い戻った。マッカの不信仰者の住民は「誓って、我々は条約を守っていた。それなのに、ムハンマド（アライヒッサラーム）はなぜ我々と戦うのだ？…」と言っていた。ただちに代表団を選んで、預言者様と話しをするために送った。

このとき万物の王は、マッカを望めるバートゥヌ・イェジェージという場所に来た。刀以外のすべての武器をここに残した。武器を守るため、二百人の教友たちを当番につけた。

このような準備が終わる頃、クライシュ族の一団が預言者様と話すため、許しを求めてきた。これが認められると「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ フダイビーヤの和議の後、あなた方に対して、我々は何一つ裏切ることをしませんでした。それにもかかわらず、マッカの自分の民族のもとへ、このような武器とともに入ってくるつもりなのですか？ しかし、条約では鞘に入れた刀以外、武器は持ってこないはずでした…」と述べた。これに対して万物の王は「私は子供のときから今日に至るまで、約束したことを守り、誠実な人として知られてきました。マッカには鞘に入れ

た刀以外の武器を持って行くわけではありません。しかし、武器は私の近くに置いておくことになります」と返事をした。一団は自分たちに知らされた情報が誤りであったことに安心し「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！　実のところ、あなたは私たちに対して、誠実でよい対応をしてきました。あなたにふさわしい態度はまさにこのとおりなのです」と言って、戻っていった。マッカに帰り、状況をクライシュ族に知らせた。そして、彼らも安心した。

クライシュ族の名士たちは恨みや嫉妬から、預言者様や教友たちの幸せな瞬間を見ないよう、マッカを出て山へと登った。

愛すべき預言者様は、犠牲となる予定の印をつけたラクダを、ズィトゥワ地方へ先に行かせた。その後、教友たちと準備を整え、神聖なマッカに入るため歩き出した。教友たちは、万物の王を中央にした。万物の王は、ラクダのクスワーの上で、何千個の星の光を押さえる太陽のように、周りに光をあふれさせた。アッラーよ！　何と美しく、何と偉大な光景であろうか。人々の口からは「ラッバイカ！　アッラーフンマ、ラッバイカ！　ラッバイカ！　ラー・シェリーカ・ラカ・ラッバイカ！…」と叫び声が上がり、心はアッラーや預言者様への愛情であふれていた。一歩一歩、偉大なカアバに向かって歩いていった。近づけば近づくほど興奮が高まっていった。マッカは全員が口をそろえて発するタルビヤ（巡礼の最中に唱える言葉）の声で満ち、不信仰者たちはこの素晴らしい光景を見るとうろたえる一方で、胸には温かい愛情が流れるのも感じていた。大勢の心にイスラームへの愛情が芽生えていた。ついに、最後にはムハンマド（アライヒッサラーム）が勝利を得たのである…。

こうして愛すべき預言者様と名誉ある教友たちは、腰に刀をつけてカアバへと入った。預言者様のラクダのクスワーのくつわを、アブドゥッラー・ビン・レバーハ様が持って進んでいった。マッカの何人かの不信仰者たちや女たち、子供たちはダル・ウン・ネドゥウェで並び、愛すべき預言者様や勇敢な教友たちを眺めていた。アブドゥッラー・ビン・レバーハは進みながら、このような詩を不信仰者たちの頭にハンマーのように叩きつけ、彼らの心の中まで打ち付けていた。

異教徒たちよ、預言者様の前から道を開けよ
アッラーが彼に啓示したクルアーン
すべての善や長所は彼の宗教の中にある
この宗教のために死ぬことは最善の死
真実の預言者であると、心から認める
今や私はすべての言葉を信じ、認めたのだ
異教徒たちよ、クルアーンがアッラーから
啓示されたことに反対したお前たちが
どのように突然の一撃を落とされたのか
そして頭を身体から分けたのか
あなた方がクルアーンの意味を信じなければ
同じように落とされるだろう、頭への一撃が

アッラーの神聖な名前で始めよう
アッラーの宗教のほかに宗教はない
そしてまたアッラーの名前で始めよう
ムハンマド（アライヒッサラーム）はアッラーのしもべであり預言者である

ウマル様は我慢できずに「イブニ・レバーハよ！　あなたは預言者様の前で、カアバを前にしながらなぜ詩を詠むのですか？」と注意しようとしたが、預言者様は「ウマルよ！　彼を止めなくてよいのです。アッラーに誓って、彼の言葉はこのクライシュ族の不信仰者にとって矢を浴びるより早く、一層の影響があるのです。イブニ・レバーハよ！　続けるのです」とおっしゃった。預言者様はしばらくすると、アブドゥッラー・ビン・レバーハ様に

「アッラー以外に神はない。アッラーは唯一なり。約束を果たすのはアッラーなり。このしもべを助けるのはアッラーなり。兵士たちを強くさせたのはアッラーなり。集まった部族を敗北させたのもアッラーだけである、と言いなさい」

とおっしゃった。アブドゥッラー・ビン・レバーハは、

「アッラー以外に
神はない
並ぶものはない
ラー・イラーハ・イッラッラー！

アッラーは力を与える
ムスリムたちの軍に
アッラーは散らして打ち負かす
異教徒たちを！」

と詩にし始めた。ムスリムたちもこの言葉を繰り返した。

愛すべき預言者様はカアバに入ると、神聖な右肩を露わにした。神聖な肌の美しさに目は眩み、心は奪われた。それから「今日、この不信仰者たちに対して、自分の力や健勝を示した勇者たちを、アッラーがその恵みによりお赦し下さいますように」とおっしゃった。その後、教友たちも右側の肩を開き、威厳をもって早足でカアバを三度周回した。ただし、ルクン・イ・イェマーニとハジャル・アル・アスワド（天国から降りた黒石）の角の間ではゆっくりと歩いた。預言者様と教友たちはハジャル・アル・アスワドに近づくと、そこに接吻したり、両手をハジャル・アル・アスワドに向って上げたりした。

不信仰者たちは後ろから教友たちを眺め、彼らの威厳のある様子や魅力ある歩き方に驚いていた。なぜなら、不信仰者たちの間では、ムスリムはマディーナに行ってから、力を失い病気になっていたという噂が広まっていたからだった。今、全く反対の様子を目撃し、驚きを隠せなかった。

残りの四度の周回はゆっくりと行われた。周回の後、マカーム・イブラーヒームで二ラカーの礼拝を行った。その後、サファーの丘とマルワの丘の間でサアイ（定められた形で七度往復をすること）を行った。犠牲の動物を捧げた後、預言者様は神聖な髪を切った。神聖な髪の毛が空中にあるうちに皆が取り合った。教友たちも髪の毛を切った。こうして、預言者様がちょうど一年前に見た夢が現実となったのである。

ウムラの訪問は終わり、昼となった。万物の王はビラール様にカアバでアザーンを詠むよう命じると、ビラールはただちに命令を実行した。彼がカアバでアザーンを詠むと、マッカのすべてが揺さぶられた。教友たちは幸せの中でアザーンを聞き、小さな声でアザーンを繰り返した。それが終わると、アッラーの愛する預言者様がイマームとなり、皆と一緒に昼の礼拝を行った。すると、不信仰者たちの心に対してまた一つの影響を与えることとなったのである。

愛すべき預言者様はエブターフで革製のテントを立てた。その周りで教友たちもテントを立てて三日間を過ごした。礼拝の時間にはカアバで集まり、一団となって礼拝を行った。他の時間は親戚を訪ねたりして、イスラームが自分たちに与えた美しい道徳を示して、その規範となったのだった。マッカの住民も、預言者様たちのこの美しい行動に、溶けるような感心を隠すことはできなかった。この三日間で、マッカはまるで内側から征服されたようだった。

三日間が終わった。別れの時がやって来た。夕方頃、預言者様が「（ウムラを目的として来た）ムスリムたちは誰一人として、今夜マッカで過ごすことはなく、出発をします」とおっしゃると、全員が準備をし、マディーナに向けて出発した…

ムーテの戦い

世界に恵みとして送られたアッラーの愛する預言者様は、ウムラのためにマッカに行ったとき、教友のワリード・ビン・ワリード様に「ハーリドはどこですか？彼のような人がイスラームのことを知らないなどあり得ません。彼があらゆる努力や勇敢さをムスリムたちとともに不信仰者に対して見せていたら、どんなに良いことであったでしょう。彼は愛され、よい扱いを受けていたことでしょう」とおっしゃった。ワリード・ビン・ワリードは、以前にも兄に対してときどき手紙を書いてムスリムとなるよう勧めていた。預言者様のこのような神聖な言葉を伝えると、ハーリドもイスラームに対する傾倒が強まっていった。ウムラの訪問を終えた教友たちはマディーナに戻ってきた。その後、何日間かが経過し、ヒジュラの八年目に入った。ハーリド・ビン・ワリードは、いても立ってもいられず、一秒でも早くマディーナへと行き、万物の王の前で膝をついて座り、ムスリムとなる名誉に与ることを待ち切れなくなっていた。そのことを自らこのように語っている。

「アッラーが私に預言者様の愛情を伝えたのです。心にイスラームへの愛情を注ぎました。良いことや悪いことを分別できるようにさせました。そして、自分自身に『私はムハンマド（アライヒッサラーム）に対抗するあらゆる戦いに加わった。しかし、すべての戦いから引き返したとき、これは正しくない、過ちであるという気分になっていて、彼がいつか必ず私たちに勝利すると信じて引き返したのだった。預言者様がフダイビーヤに来たとき、私は敵軍の騎兵の司令官だった。ウスファンでは彼に近づき、自分の姿を見せている。預言者様は私たちのことに心配もせず、教友たちと昼の礼拝を行っていた。そこへ急襲をかけようと思ったもののできなかったのだった。そうできなくて良かったのだ。預言者様は私たちが心で考えていたことを分かっていたかのように、午後の礼拝の際には警戒して行ったのだった』と考えました。

このことは私に影響を与えました。この人物のことをどうやらアッラーが守っているようだ、と言いました。互い

に別れた後、私がいろいろと考えている間、ムハンマド（アライヒッサラーム）がウムラのためにマッカへと入りました。しかし、彼から見られないようにしていました。兄弟のワリードとともに来ていましたが、私を見つけることはありませんでした。兄弟はこのような手紙を残しました。『ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム。まずは、アッラーに感謝をし、預言者様に挨拶をします。あなたがイスラームから顔を背けていることほど、驚くべきことを私は他に知りません。しかし、辿ってきた道が間違いであったことを分からないほど、あなたは無能ではありません。なぜ頭を使わないのですか。イスラームという宗教を知らず、理解もしないとは驚くほかありません。預言者様が私にあなたのことを尋ねました。あなたがイスラームを分かり、あなたの努力や勇敢さをムスリムの人々の間で、不信仰者たちに対するところで使ってほしいと考えているのです。兄弟よ！　今までたくさんの機会を逃してきました。もうこれ以上遅くはならないように』

兄弟の手紙が私に届くと、ムスリムとなる気持ちが一層強まりました。行くことを急いでいました。預言者様が私について語った言葉は、私を大変喜ばせました。その夜、苦難にあふれ、狭く、砂漠のように水のないところから、緑豊かで、広く、ゆったりした場所に着くという夢を見ました。マディーナに着いたら、この夢のことをアブー・バクル様に話し、その意味を彼に聞こうと決めました。

私が預言者様のところへ行くために準備をしていたとき「そこへ行くときには、一体誰が私とともに来てくれるのだろう？」と考えました。そのとき、サフワン・ビン・ウマイヤと出会いました。状況を彼に話しました。しかし、私の願いを断りました。その後、イクリム・ビン・アブー・ジャフルと出会いました。彼も拒否したので、家に戻りました。動物に乗り、ウスマーン・ビン・タルハのところへ行きました。ムスリムとなるため、預言者様のところへ行くにあたって私と一緒に来るよう彼に話しました。すると、考えることもなく受け入れ、翌朝、一緒に出発しました。ハッデというところに着いたとき、アムル・ビン・アスと出会いました。彼もムスリムとなるためにマディーナへ行く途中でした。

マディーナに着きました。服の中で最も見栄えの良いものを着て、預言者様と会うための準備をしました。そのとき、兄弟のワリードが来て『急ぐのです。なぜなら、あなたが来たという情報が預言者様に知らされたそうで、彼は大変喜んでいます。今、あなたを待っています』と言いました。急いで偉大な預言者様の前に上がりました。笑みをたたえていらっしゃいました。挨拶をし『アッラー以外に神がないことや、あなたがアッラーの預言者であることを認めます』と言いました。預言者様は『あなたを正しい道に導き、正しい道を示したアッラーに感謝をします』とおっしゃいました。その後、罪が赦されるよう、アッラーへの祈願を預言者様にお願いしました。私のために祈ってくださいました。そして『イスラームに入る前の罪はすべてなかったこととします』とおっしゃいました。他の二人の仲間もムスリムとなりました」

こうして、マッカで最も勇敢で、恐れを知らず、目的のためには命を捧げることにひるまないこの三人の勇者たちは、心からの親しみをもって預言者様の前で教友となる名誉に与ったのだった。今や、すべての持ちうる力を、不信仰をなくすために使うこととなった。彼らがムスリムとなったことに教友たちは大変喜び、その喜びを「アッラーフ・アクバル！」というタクビールを行って表した。

ヒジュラの八年目に、万物の恵みとして送られた預言者様は、イスラームを広めるため、再びさまざまな部族や国に代理を送った。そのいくつかは肯定的な結果となったものの、ブスラの知事に送られたハーリス・ビン・ウマイル様は、シャームのベルカ地方のムーテという村で、キリスト教徒の軍によって捕らわれてしまった。シャームの知事であるシュラフ・ビル・ビン・アムルのところへ連れていかれたハーリス様は、代理であったにもかかわらず、無残に殺され殉教者となったのだった。

この知らせに愛すべき預言者様は大変悲しみ、ただちに勇敢な教友たちに集まるよう命じた。この命令を受けた教友たちは、子供たちと別れを告げ、急いでジュルフという場所にある司令部に集まった。アッラーの愛する預言者様は、昼の礼拝を終わらせた後「戦いに出るこれらの人々の司令官として、ザイド・ビン・ハーリサを任命します。ザイド・

ビン・ハーリサがもし殉教者となった場合には、ジャーヒル・ビン・アブー・ターリブを代理とします。ジャーヒル・ビン・アブー・ターリブが殉教者となった場合には、アブドゥッラー・ビン・レバーハをその代理とします。アブドゥッラー・ビン・レバーハも殉教者となった場合には、ムスリムたちの間でふさわしい者を選び、その人を自分たちの司令官とするのです」とおっしゃった。これに対して、教友たちは名前のあがった勇者たちが、殉教者となるであろうことを理解し、泣き始めた。彼らは「預言者様！　彼らが生き続けていけるなら、そこから学ぶことがたくさんあったことでしょう…」と言った。預言者様は返事をしなかった。

このことは、その場にいたザイド様やジャーヒル、アブドゥッラーも聞いていたが、彼らは大変喜んだ。なぜなら、彼らの最大の目的は、アッラーの宗教を広めるために殉教者となることだったからである。今や、吉報がもたらされ、それを自らの耳で聞くところとなった。戦士たちは準備を終わらせ、司令官を待った。愛すべき預言者様は白いイスラームの軍旗を、ザイド・ビン・ハーリサ様に託した。ハーリス・ビン・ウマイルが殉教者となった場所まで行き、イスラームを伝えるよう彼に命じた。そして、もし相手が拒否したら、敵として戦うよう命じたのだった。

他の司令官たちとともにいたアブドゥッラー・ビン・レバーハ様は、仲間と別れを告げるときに泣いていた。「レバーハの息子よ！　なぜ泣くのですか？」と聞かれたとき、詩人であったアブドゥッラー・ビン・レバーハは

「泣いているのは
現世への愛着ではない
そしてアッラーに誓って
あなた方を懐かしむ
真の理由はこのこと

クルアーンでは
こう言われている
とある章でアッラーが

「必ずや知る
あなた方のうち
一人もいない
地獄に寄らない者は…」

預言者様がこの章を
詠むのを聞いた
この私が地獄に着いたら
どう耐えられるというのだろう」

と述べた。仲間たちは彼に「アッラーが、あなたを愛するしもべの一団の一人となさいますように。敬虔な者となさいますように」と祈った。その後も、アブドゥッラー・ビン・レバーハ様は「それでも、私はアッラーに赦してもらいたいのです。そして、血が泡を吹くような刀の一撃や、内臓をえぐり出すような槍の一突で、殉教者とさせてもらいたいのです」と言うのだった。軍が出発をしようとしていたとき、アブドゥッラー・ビン・レバーハ様は預言者様のところへ行って別れを告げ「預言者様！　私に暗記できて、決して忘れない何かを教えていただけませんか？」と

願った。預言者様は彼に「あなたは明日、アッラーに対する跪拝があまりにも少ない国に行くのです。そこで跪拝や礼拝をたくさんしなさい」とおっしゃった。アブドゥッラー・ビン・レバーハが「預言者様！　そのほかに何か加えることはありますか？」と言うと「アッラーの名前をいつも念唱しなさい。なぜならば、アッラーの念唱は、期待するものに達するための、あなたの助けとなるからです」とおっしゃった。

三千人のイスラームの軍が「アッラーフ・アクバル！…、アッラーフ・アクバル！…」と叫び声を上げて、歩き始めた。愛すべき預言者様とともにマディーナで残った教友たちは、戦士たちを「別れの坂」まで見送った。ここで、万物の王は神聖なイスラーム軍に対して、このように語りかけた。「私はあなた方にアッラーの命令を広め、禁じているものを避け、共にいるムスリムたちに対して善を成し、良く接することを勧めます。アッラーの道で、アッラーの名を唱えながら戦うのです。戦利品に不正を働かないこと。約束を破らないこと。子供たちを殺さないこと。それから、そこでは、キリスト教の教会で人々から離れ、礼拝のみにいそしむ幾人かの人に出会うこととなるでしょう。彼らには手を出さないように。彼ら以外に、頭に悪魔がとりついた幾人かとも出会うでしょうから、その人たちの頭は刀で切りなさい。そして、女たちや年寄たちを殺さないように。木を焼かないこと、燃やさないこと。そして家を壊さないように」

司令官のザイド・ビン・ハーリサには「不信仰者の敵と出会ったとき、彼らに三つの選択肢から一つを選ぶように伝えなさい…（もし、ムスリムとなったら）彼らをムハージルの国であるマディーナにヒジュラをするように言いなさい。それを受け入れるなら、ムハージルたちが持っている権利と同等の権利を受け、彼らが負っている義務も同等に負うこととなります。一方、ムスリムとなっても自分たちの国にとどまることを選んだなら、ムスリムの中における遊牧アラブ人と同様の扱いとなり、彼らに対して決められたアッラーによる基準が当てはめられます。その場合、戦いから得られる戦利品は分配されず、ただムスリムたちとともに戦いに参加した者たちだけが得られると知らせるのです。

もし、イスラームを受け入れないのなら、彼らにジズエ（庇護民に課される人頭税）を払うように伝えなさい。彼らの中でこれらを受け入れた者には手を出さないように。ジズエを払わないというのであれば、アッラーの助けを求めて彼らと戦いなさい…」とおっしゃった。

この忠告の後、戦士たちと別れを告げた。イスラーム軍はタクビールの叫び声とともに出発した。残った者たちは、出発する者たちに手を振り「アッラーがあなた方をあらゆる危険から守りますように。再び、生きて帰って来ますように…」と願った。地平線から見えなくなるまで、涙をためた目で後ろから羨望とともに見送った。

ザイド・ビン・ハーリサが掲げた神聖な軍旗は翻り、戦士たちは先の見えないほどの長い旅へと、アッラーの宗教に奉仕するために進んでいった。イスラーム軍は、急ぎシリアへ向かって進んだ。旅は何事もなく、喜びにあふれて過ぎていった。戦士たちはできるだけ早く敵とまみえようと、待ち切れないでいた。殉教者となることを願っていた者の一人に、アブドゥッラー・ビン・レバーハ様もいた。このことをザイド・ビン・アルカム様が次のように語っている。

「私はアブドゥッラー・ビン・レバーハに育てられた孤児でした。彼はムーテの戦いに出発したとき、私をラクダの後ろに乗せていました。夜、しばらく進んだとき、口からこのような詩が口ずさまれました。

「私のラクダよ！　砂漠の
井戸まで
さらにそこから四つ先へ
私を連れて行け

お前を二度とは連れて行かない

これ以上戦いへと
お前は自由になる
もうしばらくしたら

私は恐らく家に
戻らないだろう
臨むこの戦いで
私は殉教者となる

最後の休憩地で信者たちが
突然私を追い越した
レバーハの息子よ、
お前の最も近い親戚でさえ

兄弟の絆を
切って追い抜かした
お前をアッラーとともに
置いていった

もはや考えまい

残した資産に何があったか
決して気にはしまい
木々やなつめやしのことなど」

これを聞いて私は泣きました。アブドゥッラー・ビン・レバーハは、持っていた鞭で私をつついて「腕白者よ！どうしたのだ。私がこのようなことを言ったのが、あなたに何かもたらしたのか？アッラーは私に殉教者という地位をくだされ、あなたはこの動物に乗って帰っていくのだ。私はこの世のすべての悩み事や心配事、悲しみやあらゆることから解放され、楽になるのだ」と言いました。降りて二回の礼拝をしました。それが終わると、長い祈念を行いました。その後、私に『腕白者よ！』と呼びかけました。『はい』と答えると『この戦いで、インシャーアッラー、私は殉教者となるだろう』と言いました」

勇敢な教友たちがシャームに近づいたとき、その知事であるシュラフ・ビル・ビン・アムルは、イスラーム軍が接近してきているという情報を事前に入手していた。ただちに、ビザンチン王のヘラクリウスに状況を知らせ、多くの協力を得て安心していた。なぜなら、行った調査によれば、ムスリムたちはただ三千から五千人だったからである。それに対して自軍は十万人を超えていた。武器は数えきれないほどだった。

教友たちが、シャームのモアンという場所に着いたとき、ルームの十万人の軍が攻撃をするという情報を得た。そこに二日間とどまった。司令官のザイド・ビン・ハーリサ様は仲間を集め、状況を知らせた。ルームの軍隊に対し、何をすべきか彼らの意見を聞いた。教友たちの何人かは「ルームの軍隊と遭遇する前に、彼らの国に急襲をかけよう。人々を捕虜とし、マディーナに戻ろう」幾人かは「預言者様に手紙を書き、敵の数を教えましょう。私たちに急いで加勢を送るよう、あるいはどうしたらよいかを聞きましょう」と言っていた。二番目の意見の方が適切であると決められたとき、アブドゥッラー・ビン・レバーハ様がこのように言った。

「我が部族よ、何の理由で
迷っているのだ？
殉教者となるため
我々は戦いに来たのだ

武器や騎兵が
多ければ
異教徒たちと
戦うわけではない

アッラーが
我々に恵みを与えた
この宗教の力で
獅子のように戦う

行って戦え
必ずや善がある
この結果は
殉教者や勝利だ

バドルの日、アッラーに誓って
いた馬は二頭
ウフドの戦いのときは一頭で
武器も少なかった

この戦いで勝利することが
運命の中にあるのなら
やはりそのように約束した
アッラーも預言者様も

アッラーは約束を
決して覆さない
だから信者たちよ
前へと歩くのだ

殉教者となることが
我々の運命の中にあるのなら
天国で再開しよう
殉教者の兄弟として」

アブドゥッラー・ビン・レバーハ様のこの言葉は、戦士たちに勇気を与えた。そして「アッラーに誓って、レバーハの息子は真実を述べている」と言った。

もはや、賽は投げられた。殉教者となるまで戦い続けることとなった。名誉ある教友たちは、ムーテという村に来たとき、十万人のルームの大軍と遭遇した。見渡す限りが敵の軍だった。一方にはアッラーの宗教を広めるためにマディーナからシャームへと来た三千人のイスラーム軍、もう一方には、イスラームを滅ぼすために集まった十万人の異教徒の群衆がいた… 見るからに比較にならない力の差があった。このため、一人のムスリムは三十人以上のルームの軍と戦わなければならなかった。

両軍は戦列を組んだ。このとき、預言者様の命令によってイスラーム軍の代表団が、ルームの司令部に向かって歩き出すのが見られた。彼らは、ルーム軍に対して、イスラームに入信するか、もしそうしないならジズエを支払うようにと述べた。しかし、彼らはこの提案を拒絶した。もはや無駄にする時間はなかった。司令官のザイド・ビン・ハーリサ様は、イスラームの軍旗を手にして、攻撃の命令を行った。この瞬間を待っていたムスリムの戦士たちは「アッラーフ・アクバル！」と叫んで、矢のように突撃した。雷のように刀を引き、疾風のように敵の中へと飛び込んだ… 馬のいななきや、刀を打ち合う音、タクビールの声、そして打たれた者の叫び声が立ち上っていた。戦いは始まったばかりにもかかわらず、戦場は血の海となった。名誉ある教友たちが刀を振るたびに、相手の一つの首や一つの腕を落としていた。

手に預言者様の白い旗を持ったザイド様は、敵の真ん中にいて「アッラー、アッラー」と言いながら戦っていた。振り下ろした刀で、周りは一瞬にして開き、敵は前に出たことを後悔したのだった。司令官が勇敢に戦っているのを見た名誉ある教友たちは、彼の後を追い、一人で三十人の敵を刀で切ろうと奮闘していた。あるとき、いくつかの槍が同時に司令官のザイド様の神聖な胸に刺さるのが見られた。その後、他の槍も続いた。名誉ある教友の身体は孔だらけとなった。そして、ザイド・ビン・ハーリサが熱い地面に倒れ、待ち望んでいた殉教者となるのが見られたのだった。

ザイド・ビン・ハーリサに続いていたジャーヒル様が、ただちに軍旗を手にした。イスラームの旗が再び翻るのを見たムスリムの戦士たちは、改めて力の限り戦い続けた。ジャーヒル様もザイド・ビン・ハーリサのように勇敢に戦った。一方で敵と戦い、もう一方では仲間たちに勇気や熱情を与えていた。勇敢に戦っていたこの新しい司令官は、より速く刀を振って、敵の目を開けさせないほどだった。ジャーヒル様が夢中で戦っていると、仲間たちよりもずっと先へ進んでいった。ルーム軍の真ん中で一人で戦い、敵一人ひとりに刀を打ち付けていった。しかし、退路が絶たれていることは既に把握していた。勇敢な司令官は「私の任務は、異教徒一人ひとりに刀を振るうことだ」と言って、アッラーの神聖な名前を口にしながら、尽きることのない力をもって戦っていた。ついに、ある敵軍がジャーヒル様の右腕に刀を当てた。右手が切られたジャーヒル様は、神聖なイスラームの軍旗が地面に落ちる前に、左手に持ち替えた。旗は再び翻った。その間に刀のもう一撃… 左の手も切られた。今度は切られた腕を使って旗を胸に抑え、軍旗を翻そうとした。しかし、次々に激しく打ち付けられる敵の刀のため、待ち望んでいた殉教者の地位に導かれた。神聖な魂は天国の最も高いところへと飛んでいった… 身体には九十ヶ所以上の刀や槍の傷が数えられた。

司令官が殉教者となるのを見た勇敢な戦士たちは、地面に落ちたイスラームの旗を取って、アブドゥッラー・ビン・レバーハ様に渡した。彼は馬の上で軍旗を翻し、敵に激しく攻撃をした。敵と戦う一方でこのように言った。

「我が欲望よ、私に
もちろん従うのだ
今日は殉教者となると
誓っていた、この戦いで

お前がこれを

受け止めるか
無理やりそれを
受けるかだ

もしこの戦いで
殺されないのなら
死ぬことはないというのか
私に言うのだ、我が欲望よ

ジャーヒル・ビン・アブー・ターリブや
ザイド・ビン・ハーリサの
後を追えば
良いのだ

彼らは殉教者となった
我が欲望よ、お前が留まるな
後で不幸になってしまう
さあ、前に飛び込むのだ」

アブドゥッラー様も「アッラーフ・アクバル！」という叫び声とともに、敵と休むことなく戦い続けた。あるとき、

刀の攻撃の一打が指に当たった。そして、切られた指は手にぶら下がった。アッラーや預言者様への愛情に満ちていた神聖な司令官は、ただちに馬から降り、戦いの妨げとなっていた怪我をした指を足の下にして「お前はただの怪我をした指ではないか。この戦いへは、アッラーのために来ているのである」と言って、引っ張って切り取った。すばやく馬に乗り、全力で再び戦い始めた。しかし、これほど戦っても殉教者とならなかったことで自分を非難し、もう一度敵に攻撃をした。ついに、槍に突かれて地面に倒れた。アッラーや預言者様の道で戦うにあたって殉教者となり、神聖な魂は天国に飛んでいったのだった。

そのとき、アブドゥッラー様のとなりで戦っていた、アブー・ユスル・カアブ・ビン・ウマイルが軍旗を翻した。教友たちを見渡し、自分よりも年長でしっかりした人を探した。サービト・ビン・エクレムを見つけ、軍旗を彼に預けた。サービト様は旗を戦士たちの前に立てた後「兄弟たちよ！急いで司令官を選んで彼に従うのだ」と言った。彼らが「あなたを選びます」と言っても、サービト様はそれを受け入れなかった。その目はハーリド・ビン・ワリード様のところで止まっていた。彼に「アブー・スライマーンよ！あなたが軍旗を預かるのだ」と言ったが、ムスリムたちの間に入って間もないハーリド様は、礼儀から神聖な旗を取ることを遠慮していた。神聖な口からは「私はこの旗をあなたから受け取れません。あなたの方が、私よりこれにふさわしいのです。私よりも年長で、バドルの戦いでも預言者様とともに戦う名誉に与っているのです…」という言葉が出た。

しかし、時間は大切だった。周りの教友たちは敵と止まることなく戦っており、十万人の敵を引き帰させようと奮闘していた。サービト様は、同じ言葉を繰り返し「ハーリドよ！預言者様の神聖な旗を早く取るのだ。アッラーに誓って、これをあなたに渡すために私が持っているのです。あなたは戦い方を私よりよく知っている」と言って、周りの戦士達に「兄弟たちよ！ハーリドが司令官になることに、何か意見はあるか？」と尋ねた。彼らは全員「彼を司令官とします」と答えた。

これに対してハーリド様は、万物の王が自らの手で渡した軍旗を、大変な尊敬と敬意を持って受け取り、接吻をした。

馬に乗り、敵に荘厳さと偉大さをもって攻撃をしはじめた。
　勇敢なる教友たちは新しい司令官のもとで再び攻撃を開始した。ハーリド様は類を見ないほど勇ましく、また巧みに戦いを行っていた。前に出てくる者を倒し続けた。あるとき、クトゥバ・ビン・カターデ様が、敵の司令官の一人であるマーリク・ビン・ザーフィレの頭を体から切り離した。ルーム軍はこれに精神的なダメージを受けた。しかし、時間が押してきて夕方となり、暗くなり始めた。暗闇の中で戦うことは大変危険なことだった。なぜなら、誤って自分の仲間を攻撃する可能性もあるからだった。
　このため、両軍は司令部に引き返した。怪我人の治療が始まった。戦術はハーリド様の方が優れていた。翌朝は、敵の前に新しい戦略で出て、彼らを驚かせようとした。その夜、軍の配置を変更した。右翼にいる者は左翼に、左翼にいる者は右翼に、前衛にいる者は後衛に、後衛にいる者は前衛に変えた。
　翌朝、再び攻撃に出た勇敢なムスリムの戦士たちは「アッラーフ・アクバル！」という叫び声とともに戦い始めた。敵軍はこの日攻撃をしてくる軍隊を初めて目にした。彼らは昨日まで戦っていた人々ではなかったのである。恐らく、ムスリムたちに新しい軍隊が加わったのだろう…このようなことを恐怖の中で考えたルーム軍は意気消沈し、混乱していた。ハーリド様と勇敢な教友たちはこの機会に乗じ、その日は何千人もの敵を地獄へと送ったのだった。この日、ハーリド・ビン・ワリード様の手では、九つの刀が壊れた。アッラーの助けと預言者様の祈念によって、三千人のムスリムの兵士たちが十万人の敵軍を敗北させた。この大きな戦闘によって、十五人の殉教者が出た。そして、この知らせはビザンチン王に伝わり、彼らの南下を防ぐこととなった。
　預言者様は戦地からの情報が来る前に、ムーテであったことを知らせるため、教友たちをモスクに集めた。愛すべき預言者様の神聖な顔が大変悲しんでいたことは、誰もが分かった。一層悲しくさせるだろうと、誰も尋ねることができなかった。ついに、教友の一人が「命をあなたに捧げます、預言者様！あなたに見える悲しみのため、私たちも心に血が流れます。悲しみの程は、ただアッラーのみがご存じです」と言った。愛すべき預言者様の神聖な眼からは

涙が流れ、こうおっしゃった。「私に見えるこの悲しみや傷心は、教友たちが殉教者となったことによるものです。この悲しみは、彼らが天国で互いに面し、兄弟のようにして玉座に座っているのを見るまで続きました。ザイド・ビン・ハーリサが軍旗を持っていました。ついに殉教者となりました。彼は今、天国に入りました。天国で走り回っています。その後、旗はジャーヒル・ビン・アブー・ターリブが受け取りました。敵軍に攻撃を行いました。戦って、ついには彼も殉教者となりました。彼は殉教者として天国に入り、ルビーでできた二つの羽で自由に飛んでいます。ジャーヒルの後は、旗をアブドゥッラー・ビン・レバーハが受け取りました。手に旗を持ち、敵と戦い、そして殉教者となり、天国へ入りました。彼らが天国で金の玉座にいるのが私に見えました。アッラーよ！ザイドに慈悲をお与えください。アッラーよ！ジャーヒルに慈悲をお与えください。アッラーよ！アブドゥッラー・ビン・レバーハに慈悲をお与えください」
　万物の王の神聖な眼からは涙が流れ続けた。涙ながらにこう言った。「アブドゥッラー・ビン・レバーハの後、軍旗はハーリド・ビン・ワリードが受け取りました。今、戦いは激しくなっています。アッラーよ！彼（ハーリド・ビン・ワリード）は、あなたの刀の一つです。彼を助けたまえ」とおっしゃった。
　愛すべき預言者様は、アッラーの許しのもと、千キロも先にあった戦地の状況を、一つの奇跡として見ており、教友たちに知らせていたのだった。ジャーヒル・ビン・アブー・ターリブ様が殉教者となった日に、この出来事を話した後で立ち上がり、ジャーヒル様の家へと行った。妻は家事を終わらせ、子供たちを洗って、彼らの髪をとかしていた。愛すべき預言者様が「アスマーよ！ジャーヒルの息子たちはどこにいますか？彼らを私のところへ連れて来るのです」とおっしゃった。アスマー様が子供を連れてくると、預言者様は彼らを胸に抱きしめ、たくさん接吻をしてにおいを嗅いだ。神聖な心は我慢ができず、神聖な眼からは涙が雨のように流れた。これを見たジャーヒルの妻は「両親や私の命をあなたに捧げます、預言者様！なぜ息子たちに孤児の扱いのような同情をお見せになるのですか？もしかしたら、ジャーヒルや仲間から悲しい知らせがあったのでしょうか？」と懇願するように尋ねた。万物の王は、非

常に悲しみ「はい… 彼らは今日殉教者となりました…」とおっしゃった。アスマー様も孤児となった子供たちを胸に抱いて泣き始めた。この光景に愛すべき預言者様は、それ以上耐えられず、その場から離れた。

自分の部屋に戻ったアッラーの愛する預言者様は、妻たちに「ジャーヒルの家族のため、料理の準備をすることを忘れないように」とおっしゃった。三日間、殉教者の家族に食事が出された。

その後、数日が過ぎた。マディーナにはヤラー・ビン・ウマイヤ様によって吉報が届けられた。起こったことを話す前に、預言者様は彼に「起こったことを、あなたから知らせましょうか、それとも私から知らせましょうか」とおっしゃって、戦地でのことを細かく話した。これに対して、ヤラー・ビン・ウマイヤは「あなたを真実の宗教や、真実の啓典とともに送ったアッラーに誓って、戦士たちに起こったことの中で、言及されなかったことは一つも残っていません」と言った。預言者様は「アッラーが私のために戦場との距離を取り払ったので、戦地をこの目で見ていたのです」とおっしゃった。

さらに数日後、イスラーム軍がマディーナに近づいてきたことを伝達者が知らせた。預言者様と教友たちは立ち上がり、マディーナの外まで迎えに出かけた。遠くから土埃が上がり、神聖なイスラームの軍旗が翻った。刀や盾のきらめきが辺りを鏡のように反射させていた。誰もが非常に興奮していた。しばらくすると、ハーリド・ビン・ワリード様を先頭に、ムスリムの戦士たちがマディーナに入ってきた…

マッカの征服

ヒジュラ八年目の年だった。フダイビーヤの和議の一つの条項は『他のアラブ部族は自分たちが望んだ側の保護の下に入ることができる』というもので、ムスリムや不信仰者たちと同盟を結ぶことは自由であった。これによって、預言者様と同盟を結んでいるフザー族はムスリムの側に、ベキル族は不信仰者たちの側につくこととなった。フザー族とベキル族は昔から敵対しており、機会があれば互いに攻撃をしていた。フダイビーヤでの条約により、彼らも一時的に休戦しており、ベキル族はこれを二年間ほど守っていた。しかし、ベキル族の一人が愛すべき預言者様を侮辱する詩を詠み、それを聞いたフザー族の一人の若者が我慢できず、その人の頭をたたき割るということが起こった。ベキル族はこれを機会ととらえ、条約によって危険から守られていたフザー族に攻撃を行った。この攻撃に、クライシュ族の不信仰者たちが武器や人を隠して送って助けていた。マッカではフザー族の二十人ほどが殺された。戦いにあたって、フザー族の何人かのムスリムたちは、預言者様の助けを求めた。フザー族が受けた夜襲では、ベキル族の者たちとともに、クライシュ族の不信仰者たちがいたことが目撃されていた。

その夜、マディーナでは、妻のマイムーナ様の家にいた預言者様が礼拝をするため清めをしていたとき、アッラーが許した一つの奇跡として、マッカのムスリムたちが自分に助けを求めるのを聞いた。彼らに返事として「ラッバイカ（求めを受け入れます）」とおっしゃった。マイムーナ様が、預言者様のとなりに誰もいないのにこのように話すのを見て「預言者様！ となりに誰かいらっしゃいますか？」と聞いた。

預言者様は妻に「マッカで起きた出来事と、クライシュ族がそれに関わっていたことを知らされたのです」と答えた。

クライシュ族の不信仰者たちがベキル族を助け、フザー族に夜襲をかけて彼らを殺したことで、フダイビーヤの和議は破られることとなった。こうして、条約は破棄された。しかし、シャームに交易のために行っていたクライシュ族の長であるアブー・スフヤーンはこれを知らなかった。シャームから戻ると、この出来事が彼に伝えられた。そし

て「これは必ずや、正さないといけない出来事の一つである。隠しても無駄だろう。もし、正さなかったらムハンマド（アライヒッサラーム）は我々をマッカから追い出すだろう」と言った。そして「いくら私がこの出来事を知らなかったとはいえ、このことがマディーナに伝わる前に、条約を改めて、延長するために急いで行かなければなるまい」と言った。

しかし、愛すべき預言者様は、起こった瞬間にその情報を知らされていたのである。そのほか、この出来事から三日後に、フザー族のアムル・ビン・サーデムが四十人の騎兵とともに来て、状況を預言者様に話した。アッラーの愛する預言者様は「私がフザー族を助けないのなら、私も助けられることなどありませんように」とおっしゃって、一つの手紙を書かせた。クライシュ族の不信仰者宛に送られたこの手紙では、愛すべき預言者様が『…あなた方がベキル族との同盟を止めて関係を切るか、フザー族の殺された者に対して、慰謝料を払うこととするか、二つのうち一つを選ばない場合、あなた方と戦うことを知らせます…』とおっしゃっていた。

クライシュ族はこの手紙で示された同情すら理解できず「同盟を切ることもないし、慰謝料も払わない。代わりに戦う」と言って知らせてきた。しかし、このようなことをしたことを後悔して恐怖に陥り、条約を改めて作るため、アブー・スフヤーンをマディーナに出発させた。

アブー・スフヤーンがまだマディーナに到着する前から、預言者様は彼が来ることを教友たちに知らせた。そして「私が分かっているのは、アブー・スフヤーンが条約を改め、延長するために来るということです。しかし、望みを達することはできずに帰っていくでしょう…」とおっしゃった。

まだムスリムとなっていなかったアブー・スフヤーンがマディーナにやって来た。自分の娘であり、預言者様の妻であり、信者たちの母である、ウンム・ハビーバ様の家へと来た。愛すべき預言者様のクッションの上に座ろうとしていた。ウンム・ハビーバ様は、彼が座る前にクッションを片付けた。父はこのことに悲しくなり「娘よ！このクッションを私に使わせるのはいやなのか？」と驚きを示すと、預言者様の愛情を何よりも大切にしていた信者たちの母であるウンム・ハビーバ様は父に「このクッションはアッラーの預言者様のクッションです。それに不信仰者は座ることができません。あなたは不信仰者であり、汚れているのです。このクッションの上に座ることは、決してふさわしくないのです」と返事をした。

父は「娘よ！私の家から離れた後、お前にはいろいろとあったようだ」と言うと、彼女は「アルハムドゥリッラー（アッラーに感謝します）。アッラーが私にイスラームをお恵みくださいました。あなたはいまだに聞くことも見ることもできない、石でできた像を崇めているのです。父よ！あなたのようなクライシュの名士であり年長者が、どうしてイスラームを遠ざけるのですか…」と言った。父はこれに怒り「私に対してここまで不遜な態度をとり、私を無知であると非難するのか。祖先が崇めていたものをやめ、ムハンマド（アライヒッサラーム）の宗教に入れと私に言うのか」と言って、そこから離れた。

愛すべき預言者様の前に来たクライシュ族の長は「私はフダイビーヤの和議を改め、延長するために来ました。さあ、お互いに結んだこの条約を、改めて紙に記しましょう」と言った。アッラーの愛する預言者様は「私たちはフダイビーヤの和議に反する行動はしていないし、それを変えることはありません」とおっしゃった。クライシュ族の長は再び「条約を変えましょう。条約を改めましょう…」と言ったが、愛すべき預言者様は彼に返事をしなかった。クライシュ族の長はあらゆる努力が実を結ばないのを知るとマッカへと戻り、不信仰者たちに状況を話した。不信仰者たちは「何もできずに戻ってきたのか」と言って非難した。もはや彼らには待つこと以外他に選択肢はなかった。

カアバに避難する者は…

アブー・スフヤーンがマディーナから離れると、愛すべき預言者様はマッカを征服することを決めた。なぜなら、クライシュ族は約束を守らずに、条約を破棄したからだった。しかしこのことは秘密にし、不信仰者たちが準備を整

える機会を与えず、マッカで血が流れないように征服しようと考えていた。これは一つの戦いに対する警戒であった。というのは、マッカが征服されれば、どれほどの者がムスリムとなる名誉に与るのか、計り知れなかったからである。

この状況を、アブー・バクル様と教友たちの名士である何人かだけに話した。教友たちは戦いのために準備をし始めた。預言者様は他にも周りにいるムスリムの部族であるエスレム、エシュジャー、ジュヘイネ、フサイン、グファル、ムゼイネ、スレイム、ダムラ、そしてフザーの各部族に知らせを遣わした。『アッラーや来世を信仰する者は、ラマダーンの初めにはマディーナにいるように』と伝え、戦いに参加するよう呼びかけた。

アッラーが愛する預言者様は、警戒の一つとしてマッカに向かう道をふさぎ、連絡を絶つため、ウマル様にその任務を命じた。ウマル様はただちに山や谷の道、そのほかの道に当直を置き「マッカに行こうとする者を全員引き帰させなさい」と命じた。

愛すべき預言者様は、このことが秘密に行われるため「アッラーよ！ 私たちが彼らの祖国へと思いがけずに到着するまで、クライシュ族のスパイや諜報人が見たり、聞いたりできないようにさせてください。私たちを突然に見るようにさせてください」と言って、アッラーに祈念した。

預言者様は、北方の不信仰者たちやビザンチンに攻撃するような印象を与えるため、アブー・カターデ様を一団の軍とともに北のイザム谷へ行かせた。

そのとき、マディーナで行われていた準備をマッカの不信仰者たちに知らせるためにある手紙が送られたが、愛すべき預言者様の奇跡の一つとしてそれが明るみとなった。アリー様を行かせ、その人を捕えたのである。

ラマダーン月の二日目までに、周りの部族たちの加勢が集まった。アブー・イネーベの井戸のところの司令部に集結した。教友たちの数は一万二千人に達した。その中の四千人がアンサール（マディーナの住民）で七百人がムハージル（マッカからの移住者）、残りは各地方から集まった部族たちだった。愛すべき預言者様は、マディーナでの代理人としてアブドゥッラー・ビン・ウンミ・メクトゥム様を残した。ズバイル・アウワーム様を二百人の騎兵の長に任命し、偵察隊として送った。万物の王は、心がアッラーや預言者様への愛情に満ちあふれた一万二千人の大軍の先頭で、アッラーの名前を唱えて出発した。そのときから八年前、拷問や虐待を受け、ヒジュラ（移住）して出ざるを得なかった母国に行こうとしていたのである。像の家となっていた神聖なカアバを、像から解放するために行こうとしていた… 頑迷さを止められない不信仰者たちに、真実や正義、憐れみを示すために行こうとしていた… アッラーの宗教を広めるため、そして、そこにいる者を永遠の地獄の罰から救うために行こうとしていた。ああ、アッラーよ！ 何と偉大なる憐みであろう…

イスラーム軍は、ズル・フレイフェに来たとき、マッカから家族とともにヒジュラして来た預言者様の叔父であるアッバース様と出会った。愛すべき預言者様は、叔父が来たことに喜び「アッバースよ！ 私が最後の預言者であるように、あなたも最後のムハージルなのです」とおっしゃって、叔父を喜ばせた。アッバース様は荷物をマディーナに送った。そしてアッバース様は預言者様のもとで、マッカへの征服に参加した。

預言者様はマッカの近くにあるクデイドに来たとき、名誉ある教友たちに、隊列を作るよう命じた。部族ごとに別々の旗をそれぞれの旗手に与えた。ムハージルたちの旗はアリー様、ズバイル・ビン・アウワーム、サアド・ビン・アブー・ワッカースが持っていた。アンサールには十二人の旗手がおり、エシュジャー族と、スレイム族は各一人、ムゼイネ族には三人、エスレム族には二人、フザー族には三人、ジュヘイネ族には四人の旗手がいた。

マディーナを発って十日が過ぎた。夕方になったときに、マッカに近くなってきた。夜にメルラーズ・ザハラーンまで来た。預言者様は教友たちに、ここでとどまるよう命じた。そのほか、ウマル様に任務を与え、戦士一人ひとりが火をつけるよう命じた。一瞬にして、一万以上の火が近づくと、マッカが明るくなった。何事も知らされていないマッカの不信仰者たちは驚いた。何があったのかを知るために、アブー・スフヤーンに任務を与えた。彼もわきに供の者を従え、身を隠しながらイスラーム軍に近づいていった。このとき、愛すべき預言者様は、教友たちの何人かに「アブー・

スフヤーンを見張っていなさい。必ず、彼を見つけてくるように」とおっしゃった。彼らは進めば進むほど一段と驚きが高まり、恐怖に陥った。マッカの周りにどれほどの軍が集まり、どれほどの火が灯されていたことか… 彼らはこのようなことを話しながら、エラクというところまで来た。

そのとき、預言者様は再び「アブー・スフヤーンが今、エラクにいます」とおっしゃった。アッバース様が彼らのことに気付き、預言者様の前に連れてきた。途中、アブー・スフヤーンがアッバース様に「どういうことなのだ?」と聞いた。彼は「アブー・スフヤーンよ！ あなたにはがっかりです。預言者様はひるむことのない軍をもって、あなた方のところに向かっています。クライシュ族には悲惨な結末が待っているでしょう」と言った。アブー・スフヤーンと供の者は、恐怖の中、戦士たちの間を通り、預言者様の前に来た。万物の王は彼らを丁寧に迎えた。マッカの住民についての情報を聞いた。夜遅くまで話し合った後、彼らをイスラームへと宣教した。ハーキム・ビン・ヒザムとブデイルが、ただちに信仰告白をし、ムスリムとなった。しかし、アブー・スフヤーンはまだ迷っていた。

朝になって、同情の大海である愛すべき預言者様は「アブー・スフヤーンよ！ あなたには残念です。アッラー以外に神がないということを、まだ分からないのですか?」とおっしゃった。すると彼は「両親をあなたに捧げます。その優しい性格と名誉により、親戚のことを常に見守っているあなたほどの人はいません。私たちがあなたに対して行ってきた、これほどまでの辛苦を受けても、あなたはいまだに私たちを正しい道に宣教しています。何と美しい寛大な心の持ち主でありましょう。アッラー以外に神はないことを信じます… もし、他にいたとしたら、私を助けていたことでしょう。そして、あなたはアッラーの預言者であります…」と言い、教友となる名誉に与った。

アッバース様は「預言者様！ マッカの住民たちからの尊厳をアブー・スフヤーンが保てるよう、彼に何かを与えていただけませんか?」と言った。預言者様はこれを受け入れ「誰かがアブー・スフヤーンの家に入って保護を求めてきたら、その人の命の心配はありません」とおっしゃった。アブー・スフヤーン様は「預言者様！ もう少し増やしていただけませんか?」と願うと、愛すべき預言者様は「カアバの周りに入った人はその命を助けます。自分の家にいて外に出なければ、その人の命も助けます」と続けた。

預言者様はアブー・スフヤーンがイスラーム軍の偉大さや数の多さを見て、そのことをマッカの不信仰者たちへ説明させるため、アッバース様に「谷の狭い場所で馬が押し合うようにしている峠から帰しなさい。ムスリムたちやその軍の偉大さを見せるのです」と命じた。

アブー・スフヤーンがこれらを目にすると、見た光景を不信仰者たちに説明した。そして、反撃を行わせず、カアバに血が流れるのを防ぐようにした…

アッバース様がアブー・スフヤーンとともに峠へ行くときに、戦士たちは隊列を組んでいた。部族ごとに自分たちに与えられた旗を開き、その峠から歩き出していた。全員が鎧をつけ、武器を持っていた。一団ごとに通る時、タクビールを行った。アブー・スフヤーンが「彼らは誰ですか?」と聞くと、アッバース様は「彼らはスライマーン家の者たちです。司令官はハーリド・ビン・ワリードです」「彼らはグファル家です」「彼らはカボー家です…」と返事をした。天も地も「アッラーフ・アクバル！ アッラーフ・アクバル！」という叫び声に満ちていた。戦士たちの多さと武器の光が目を眩ませた。

アブー・スフヤーン様が最も気になっていたのは、世界の誇りである預言者様のことだった。彼の周りにいる軍がどのようにして通るのか気になっていて、他の者たちとは異なるだろうと考えていた。このため、しばしば「彼らは預言者様の一団ですか?」と質問をしていた。ついに、預言者たちの王である万物の王が太陽のように、光を放っているのがラクダのクスワーの上に見られた。周りにはムハージルたちやアンサールたちがいた。全員が頭から足までダブーディー鎧で固めていて、インドの刀をつけ、たくさんの種類の馬やラクダに乗って進んで来た。

アブー・スフヤーン様が彼らを見ると「これはら誰ですか、アッバースよ！」と気になって尋ねた。彼は「中央にいらっしゃるのが預言者様です。周りにいるのは、殉教者となる熱情に燃えるアンサールとムハージルたちです…」と答えた。

愛すべき預言者様は、彼らの脇を通り過ぎるとき、アブー・スフヤーン様に「今日は、アッラーがカアバの名誉を

一層高める日です。今日は、カアバに敷物を敷く日です。今日は憐みの日です。今日はアッラーがクライシュ族を（イスラームによって）高める日です」とおっしゃった。

アブー・スフヤーン様は、見ることを見、聞くことを聞いた。「私はビザンチンやペルシアの王たちの勢力も見ましたが、今までこれほどまでに壮麗なものは見たことがありません。私は今まで今日のような軍隊や一団と出会ったことはありません。このような軍に誰も反抗はできないし、力は足りないでしょう」と言ってマッカに向かった。

アブー・スフヤーンはマッカに戻ると、心配して待っていた不信仰者たちに、自分がムスリムとなったことを知らせ「クライシュの人々よ！ムハンマド（アライヒッサラーム）は、あなた方が立ち向かえないほどの大軍とともに近くまで来ています。無理をして自分たちのことを大きく見ないように。ムスリムとなれば救われます。私はあなた方が見ていないものを見たのです。数え切れないほどの勇者や馬、武器を見ました。誰も彼らに対抗はできません。誰かが私の家に入ったら、その人は助かります。殺されることから救われるでしょう。誰かがカアバに避難したら、その人も助かります。自分の家に入り扉を閉めた者も助かります」と言った。これに対して、不信仰者たちのうちの狂暴な何人かはアブー・スフヤーン様に反対をし、侮辱を述べた。しかも、イスラーム軍に対する準備をし始めた。しかし、彼らはあまりにも少数だった。他の者たちは彼らに加わらず、家に引きこもった。一部はカアバに避難した。

預言者様と名誉ある教友たちは、ズィトゥワ谷に集まっていた。万物の王は、神聖な眼で教友たちを見渡した後、八年前にマッカから離れてヒジュラした想いにふけっていた。そのときは家の周りを不信仰者たちが囲んでいて、クルアーンの『ヤー・スィーン章』から章句を詠みながら家を出たこと、アブー・バクル様とともに誰にも見つからないようにしながらセブルの洞窟に入ったこと、マッカの境に来たときに振り向き「（マッカよ）アッラーに誓って、あなたはアッラーが創造した中で最も善なる場所であることを私は知っています。アッラーから見ても、私から見ても最も愛される場所なのです。あなたから無理に離させられるのでなかったら、決してあなたから離れませんでした」と言ったこと、この嘆きに対してジブリール様が『物語章（アル・カサス）』第八五節を啓示して神聖な心を慰めたこ

と、マッカに再び戻ってくるという吉報がもたらされたこと、数少ない教友たちとともにバドルやウフドの戦い、塹壕の戦い、ハイバル、ムーテの戦いで、敵にどのように勝利したかを思い出していた。今、一万二千人の教友たちが、預言者様の周りでプロペラのように周り、マッカに入るための命令を待っていた。預言者様は、これらすべてをお恵みくださったアッラーに対して恩義と感謝でいっぱいだった。謙遜から神聖な頭を前に下げた。

万物の誇りである預言者様は、勇敢な教友たちを四つに分けた。右翼の司令官にハーリド・ビン・ワリード様を、左翼の司令官にズバイル・ビン・アウワーム様を、歩兵の司令官にアブー・ウバイダ・ビン・ジェッラーフ様を、残りの一団にはサアド・ビン・ウバイダ様を任命した。ハーリド様はマッカの南から入り、不信仰者たちの中で反抗する者がいれば、彼らに罰を与えた後、サファーの丘で万物の誇りである預言者様と合流することになった。ズバイル様はマッカの北から入り、ハジュンというところで軍旗を立て、預言者様を待つこととなった。西からはサアド・ビン・ウバイダ様が入ることとなった。

預言者様は司令官たちに「あなた方が攻撃されるまでは、決して誰一人とも戦わないように。誰一人も殺さないように」とおっしゃった。しかし、続けて名前が挙げられた十五人を捕えたときには、カアバの布の中に身を隠していたとしても、首が切られることとなった。

真理が訪れ迷信が過ぎ去る

ラマダーン月の十三日の金曜日だった。ムスリムの戦士たちの中で、最も先に出発したのはハーリド・ビン・ワリード様だった。マッカの南からハンデメ山のふもとに来たとき、狂暴なクライシュ族の不信仰者たちが自分たちに矢を放つのが見られた。二人のムスリムの戦士たちが殉教者となった。ハーリド様は、隊列を組んでいた軍に「彼らが敗れて逃げた場合には殺さないように」と命じた後、前に攻撃をかけた。一瞬にして、不信仰者たちを後退させた。こ

の一撃で七十人の不信仰者たちが殺された。残りは山や家に逃げ込んだ。

神聖なマッカに他の方面から入っていた名誉ある教友たちは、何の反撃にもあわなかった。死刑の宣告を受けていた者のうちの五人が捕えられ、処刑された。残りはマッカから逃げ出していった。ムスリムの戦士たちは、大変な興奮の中、波のように「アッラーフ・アクバル！… アッラーフ・アクバル！…」とタクビールを行いながら、マッカに入っていった。預言者様はラクダのクスワーの鞍の上に乗り、ウサーマ・ビン・ザイドをその後ろに従えて、神聖なカアバに恭しく入って行った。自らにこのような日を恵んだアッラーに感謝をし、マッカを征服する吉報をもたらした『勝利章（アル・ファトフ）』を詠んだ。

万物の誇りである預言者様は、大きな喜びの中、名誉ある教友たちに囲まれてカアバに向かった。右にアブー・バクル様、左にウセイド・ビン・フダイル様をともない、カアバに近づいてきた。ハジャル・アル・アスワド（黒石）を訪ねた後、タルビヤとタクビールを行った。これに教友たちが続き「アッラーフ・アクバル！… アッラーフ・アクバル！…」という声でマッカの空がとどろき始めた。この高貴な光景を見てムスリムたちは涙を流した。カアバに避難したり、家に閉じこもったりしていた不信仰者たちは恐怖の中で待っていた。

その後、万物の王は名誉ある教友たちとともに周回を始めた。七周目の周回を終わらせた後、ラクダから降りた愛すべき預言者様は、マカーム・イブラーヒームで二回の礼拝を行った。その後、アッバース様が井戸から汲んできたザムザムの水を飲み、その水で清めをした。万物の誇りが清めをする際、教友たちは愛すべき預言者様の身体に触れた水を地面にこぼれる前に取り合っていた。これを見ていた不信仰者たちは「私たちは人生の中でこのような王を見たことも聞いたこともない」と言って驚いていた。

預言者様は、カアバの周りにあった、石や木で造られたすべての像を壊すことを希望した。『言え「（今や）真理は下り、虚偽は消え去りました。本当に虚偽は常に消える定めにあります。」』（夜の旅章（アル・イスラーゥ）第八一節）というクルアーンの一節を詠みながら、神聖な手にある杖を像の方に伸ばした。杖が触れた像は、一つずつうつ伏せ

に倒れた。三百六十体の像が粉々になった。

昼の礼拝の時刻となると、預言者様はビラール様にカアバでアザーンを詠むように命じた。彼はすぐに神聖な任務を行った。アザーンが詠まれると、ムスリムたちの心には大きな喜びが起き、不信仰者たちは一層の嘆きと悲しみに落ちた。

愛すべき預言者はカアバの鍵を持ってくるように求めた。鍵が持ってこられた。何かが描かれた絵や倒れたすべての像を取り除いた後、となりにウサーマ・ビン・ザイド様、ビラール様、ウスマーン・ビン・タルハ様をともなって、カアバの内部へと入っていった。預言者様は、中に入ると扉を背にして二回の礼拝を行った。そして、すべての門でタクビールを行い、祈念をした。ハーリド・ビン・ワリード様が扉の前に立っていた。そこで混乱が生じないようにしていたのだった。

万物の王はカアバの扉の二つの角を神聖な二つの手で取った。クライシュ族のすべてがカアバにやって来た。心配と期待が入り混じった気持ちで愛すべき預言者様を見ていた。なぜなら、彼らは預言者様と教友たちにあらゆる拷問を行っていたからだった。首に紐をつけて引っ張ったり、火に落として火傷を負わせたりしてきたのである。また、熱い岩を胸に押し当てて失神するまで拷問をしたこともあった。火で熱せられた串を体に刺したこともあった。三年間も一つの町に閉じ込め、あらゆることから切り離したりした。足を二頭のラクダに結んで反対方向に歩かせてばらばらにもした。何よりも、祖国から彼らを追い出し、ムスリムたちを滅ぼそうと何度も戦いを挑んできた。

しかし、このようなあらゆることに対しても希望があった。というのは、相手は世界に恵みとして送られた、恵みの大海だったからである。愛すべき預言者様は、しばらく彼らを見た後「クライシュ族の人々よ！ 今、あなた方について、私が何をするであろうと思っていますか？」とおっしゃった。彼らは「私たちはあなたから善を待ち、善を期待しています。なぜなら、あなたは恵み多き兄弟だからです。寛大で善を持つ私たちの兄弟の息子です。あなたは私たちに勝利を収めました。あなたから善を待ちます」と答えた。預言者様は笑みをたたえ「『かれは言った。「今日あ

なたがたを、(取り立てて)咎めることはありません。アッラーはあなたがたを御赦しになるでしょう。かれは慈悲深き御方の中でも最も優れた慈悲深き御方であられます。』(ユースフ章第九二節)と言いましょう。あなた方は自由です」とおっしゃった。

この偉大な同情が頑なな心を和らげ、嫌悪を愛情に変えていった。万物の王が彼らをイスラームに宣教すると、ムスリムとなるためにその周りを取り囲んだ。愛すべき預言者様は、かつて預言者であることをクライシュ族に初めて知らせ、彼らをイスラームに初めて宣教したサファーの丘に上った。再びそこへ行き、大人や子供、女や男、すべてのマッカの住民の誓いを受け入れた。このようにして、クライシュ族はムスリムとなり、教友たちの仲間となる名誉に与った。

男たちと誓いを行った後、女たちともいくつかの約束を行った。

アッラーに対し、他に並ぶものを置かないこと。預言者に反抗をしないこと、盗みをはたらかないこと、貞節や純潔を守ること、女児を間引かないこともその中にあった。ムスリムとなった女性たちの中には、殺される人物として名前の挙がっていた、アブー・スフヤーン様の妻のヒンドもいた。しかし、世界に恵みとして送られた愛すべき預言者様は彼女を赦した。ムスリムとなった全員が家にあるすべての像を壊した。周りの部族にも軍を派遣し、そこにあった像はすべて破壊された。こうして、真理が訪れることによって、迷信は根底から消滅したのである。同情に巡り合った者の中には、アブー・ジャフルの息子のイクリムや、ハムザ様を殉教者とさせたワフシなどの人々もいた。イクリム様はヤルムクの戦いで殉教者となった。また、ワフシ様はイェマーメの戦いで偽預言者のムセイレメト・ウル・ケッザーブを殺すことになる。

アッラーのために人々を愛し、あるいは愛さなかった
自分自身のために親友や敵を作らなかった、その寛大さの源

大声で笑ったり、悪口を決して言わなかった
美しい言葉と常に笑みをたたえていた、その寛大さの源

恥じらいをもち、優しい品格を持ち、善を行った
隣に来て懇願する者を泣いたままにはしなかった、その寛大さの源

謝罪を受け入れ人々を赦した
偉大なる美徳と憐みを持っていた、その寛大さの源

フネインの戦い

預言者様がマッカを征服するためにマディーナから出発したとき、マッカの郊外に住んでいたヘワーズィン族とサーキフ族という名の二つの大きな部族は、ムスリムたちが自分たちに攻撃すると勘違いをし、戦うための準備を行い始めた。万物の王がマッカを征服するつもりであったことが分かると、少し安心はしたものの「クライシュ族の次は、必ずや我々の番だろう」と考え、準備を急いだ。しかも「誓って、ムスリムたちは戦いに秀でた民族とは出会っていないのだ。彼らが我々に攻撃をする前に、我々が彼らに攻撃をし、本当の戦いというものがどのようなものか見せてやろう」と言っていた。ヘワーズィン族の長であるマーリク・ビン・アウフの司令のもと、二万人の大軍が行動を始めた。軍の士気を高め、困難なときに兵が逃げないように、すべての貴重品や女たちや子供たちも一緒に連れて行った。

この知らせはすぐにマッカに伝わった。万物の誇りである預言者様は、この知らせが本当かどうか調べるため、アブドゥッラー・ビン・アブー・ハドゥレトをヘワーズィン族のもとへと送った。アブドゥッラー様は服を着替え、敵の間に入っていった。彼らの考えや行動の方法を知り、それをただちに預言者様に伝えた。

預言者様は、すぐに名誉ある教友たちを集めた。マッカでは二十歳のアッタープ・ビン・エスィド様を代理に任命し、急いで出発した。一万二千人の軍とともに、不信仰者のヘワーズィン族とサーキフ族の司令部に対して攻撃を行うこととした。ムスリムの戦士たちの軍旗はアリー様が持っていた。前衛の司令官にはハーリド・ビン・ワリード様があたった。万物の王は、兜や二重の鎧をつけていて、ドゥルドゥルという名のロバに乗っていた。シャウワール月の十一日に、フネインの谷に到着した。その夜、預言者様は軍隊を視察し、戦列を整えた。翌朝、礼拝を行った後、行動を開始した。

不信仰者たちの司令官は、夜を利用してフネインの谷の二つのふもとに部隊をおいて罠をしかけていた。前衛とともに進んでいたハーリド・ビン・ワリード様は、罠のことを知らずに峠に馬を進ませた。朝の暗闇で敵がまだはっきり見えなかった。一瞬にして、何千本もの矢が雨のように降って来た。この思いがけない矢の雨から身体を守ろうと、

戦士たちは退却せざるを得なかった。この急襲が後ろから来る軍を混乱させた。彼らも引き返すとき、二万人の敵軍が洪水のように谷に流れ出てくるのが見られた。

愛すべき預言者様は攻撃に出た不信仰者たちに対して、一人で前に飛び出した。これに、アッバース様やアブー・バクル様など百人ほどの勇敢な教友たちが、死を覚悟して預言者様に続いた。身体で預言者様の盾となった。アッバース様は預言者様のロバのくつわを、スフヤーン・ビン・ハーリス様が鞍をつかんで速度を落とし、預言者様が敵軍の間へと飛び込むのを止めようとした。万物の王はアッラーの宗教がなくなることを心配し「アッバースよ！　あなたは彼らに『マディーナの人々よ！　セムレの木の下で誓った教友たちよ！』と呼びかけるのです」とおっしゃった。アッバース様は体格がよく威厳があった。叫んだときには、その声は遠くからも聞こえた。全力で「マディーナの人々よ！　セムレの木の下で預言者様に誓った教友たちよ！　ばらばらになるな。ここに集まれ！」と叫んだ。これを聞いた教友たちは戻ろうとしたが、混乱に陥った動物のため、困難な状況だった。結局、鎧や刀、槍などを持って動物から飛び降りるしかなかった。急いで預言者様のところへと着き、敵と戦い始めた。「アッラーフ・アクバル！…　アッラーフ・アクバル！…」という叫び声を天と地にとどろかせ、敵を恐怖に陥らせた。バドルやウフドの戦い、塹壕の戦い、ハイバルの戦いで、素晴らしい勇敢さを見せた教友たち、特にアリー様やアブー・ドゥジャーネ、ズバイル・ビン・アウワームは戦いに戦って、敵を退却させようと攻撃した。

万物の王は教友たちがこのように命がけで戦っているのを見ると、神聖な口から「アッラーよ！　私たちをお助けください。決してあなたは、彼らが私たちに勝利するのを望んではいません」という祈念を行った。愛すべき預言者様はアッラーに祈念を行うときに、地面から一握りの砂を取り「顔が黒くなるように」と言って、不信仰者たちの上に投げつけた。愛すべき預言者様の一つの奇跡として、敵軍の目に砂が入らなかった者は残らなかった。天使たちも助けに来た。預言者様は「アッラーに誓って、彼らは敗北します」とおっしゃった。果たして不信仰者たちは敗北し、後ろに逃げ始めた。逃げるとき、追いかけてくる名誉ある教友たちを見ると、戦場に連れてきた妻や子供たち、貴重

品も置いたまま急いで逃げていった。戦場では七十人が死に、六千人が捕虜となり、数え切れないほどの貴重品がそのままとなっていた。逃げた者のうちの一部はターイフ砦に避難した。また、一部はナハレ地方のエブタスへと向かった。司令官のマーリク・ビン・アウフもターイフに避難した一人だった。教友たちは彼らをしばらく追いかけ、エブタスで再び激しい戦いを行った。敵はここでも敗北を喫した。

この戦いでも、アッラーのお許しのもと、預言者様の奮闘によって、再び勝利はムスリムたちのものとなった。四人の殉教者が出て、何人かの教友たちが怪我を負った。愛すべき預言者様は、ハーリド・ビン・ワリード様も怪我をしたことを聞くと彼のところへ行き、傷を神聖な手で覆った。すると怪我をしたところは一瞬にして治ったのだった。

私の命をあなたに捧げます、あなたの辿る道で
美しいという名で、自らも美しいムハンマド（アライヒッサラーム）よ
仲裁してください、この力のないしもべに
美しいという名で、自らも美しいムハンマド（アライヒッサラーム）よ

信者たちが多く持つ苦悩
その褒賞は来世にある
一万八千の世界の主、ムスタファ
美しいという名で、自らも美しいムハンマド（アライヒッサラーム）よ

七段の空を見る御方、
天空を旅する御方
ミウラージュで共同体と言う御方
美しいという名で、自らも美しいムハンマド（アライヒッサラーム）よ

あなたがいないなら、現世も来世もユヌスは何も要らない
間違いなく迷いなく、あなたは真実の預言者
あなたに従わない者は、不信仰のまま
美しいという名で、自らも美しいムハンマド（アライヒッサラーム）よ

ターイフへの出征

　万物の王はターイフに逃げ込んだ敵に対して攻撃を行い、決定的な勝利を得ることを希望した。マッカの近くにあるこの砦は、不信仰者にとって最後の砦であり、最も固く守られた砦の一つだった。預言者様はヒジュラの前に、ターイフへ来て一ヶ月間彼らに宣教を行っていた。しかし、ターイフの人々は万物の王に、類を見ない虐待や拷問を行ったのだった。神聖な足を血だらけにさせたりもした。愛すべき預言者様は、ここでザイド・ビン・ハーリサ様とともに、人生の中でも最も悲しまされ、痛めつけられた日々を過ごしたのであった。愛すべき預言者様はハーリド・ビン・ワリード様を先に行かせた。教友たちとともに、自らもターイフの手前まで進んだ。サーキフ族は固く守られた砦に、事前に食料を備蓄していた。教友たちが来たのを見ると門を閉じ、防衛戦に入った。そして、砦の近くまで来ていたムスリムの戦士たちに弓を射て、反撃を行った。戦いはこのようにして続いた。ターイフの人々は砦から出てきて、一対一の戦いを行う勇気は全く持ち合わせていなかった。

　教友たちの何人かが、砦の中に投石機で石を投げることを提案した。預言者様はそれが適っているとし、投石機が作られた。投石機で不信仰者たちに石を投げ続けるかたわら、包囲も続けていた。教友たちは命がけで、できるだけ早く砦を征服しようとしていた。このとき、十四人の教友たちが殉教者となる名誉に与った。しかし、砦は大変に固く守られていたため、征服は簡単ではなかった。

　包囲して二十一日目の夜、預言者様は夢で、自分に贈物として送られた、バターがぎっしり入った一つの入れ物を、一羽の雄鶏がつついて地面に落とすというものを見た。これはターイフが今年は征服されないと解読し、包囲を解くこととした。

　同情の大海である預言者様は、その時から八年前「お許しがあれば、あの山を彼らの頭に落としましょう」と言う天使に対して、自分を苦難におとしめるターイフの人々のため「私は世界に恵みとして遣わされたのです。あの不信

仰者たちの子孫から、アッラーを何者とも並べることなく、ただアッラーにのみ礼拝を行う世代を、アッラーがお出しするよう願います」と答えていた。今もまた憐みをかけて「アッラーよ！サーキフ族を正しい道にお導きください。彼らが私たちの側に来るように願います」と言って祈念したのだった。

　アッラーの愛する預言者様はターイフから離れ、フネインで手に入れた捕虜たちや戦利品が集められていたジラーネという場所へとやって来た。六千人の捕虜とともに、二万頭以上の牛やラクダ、四万頭以上の羊やヤギ、数えきれないほどの貴重品が戦利品として得られていた。それらをムスリムの戦士たちで分け合った。そのとき、ヘワーズィン族から一団が話し合いを求めてやって来た。愛すべき預言者様は彼らを受け入れた。一団からヘワーズィン族全員がムスリムとなったということを聞くと、万物の王は大変満足をした。これに対して、自分個人に与えられることとなっていた捕虜全員を自由にして返したのだった。教友たちもこれにならい、預言者様に続いた。預言者様の憐みのおかげで、六千人の捕虜が一瞬にして自由となったのだった。この情報がターイフに避難していたヘワーズィン族の長であるマーリク・ビン・アウフに届けられると、彼もやって来てムスリムとなった。預言者様は彼にも多くの恵みを与えた。

　もはや、ここで行うべきことは残っていなかった。万物の王はいつもの通り勝利を得て、教友たちとともにマッカに向かった。アッターブ・ビン・エスィドをマッカの知事に任命し、宗教を教えるため、ムアズ・ビン・ジェベル様をとどまらせた。カアバを周回してウムラを終わらせた後、名誉ある教友たちとともに、再びマディーナに向けて出発した。

　一年後、ターイフの人々はムスリムとなるため、六人の代理人をマディーナにいる愛すべき預言者様のもとへと送った。万物の王は、一年前にターイフから離れるとき「アッラーよ！サーキフ族を正しい道にお導きください。彼らが私たちの側に来るように願います」と祈念していた。まさに、今、サーキフ族がムスリムとなるために来ていたのである。預言者様は彼らがムスリムとなることに大変喜び、彼らにいくつかの特権を与え、ターイフに返した。長としてウスマー

ン・ビン・アブー・アス様が知事に任命された。

タブクの出征

預言者様はマディーナに帰ってきた後、さまざまな国に代理を送り、彼らをイスラームに宣教した。オマーン王、バハレーン王たちが、住民とともにムスリムとなる名誉に与った。ほかにも、たくさんの部族の代表が来て、預言者様に従うことを知らせ、幸福なる道に導かれた。

いまやイスラームは、急速に拡大していた。郊外の部族や国には、宗教の規則を教えるための教師や、統治するための知事が送られた。ヒジュラの九年目は、マディーナにムスリムたちの代表が集まった。ヒジュラの九年目のラジャブ月のことだった。ある日、預言者様が教友たちに「今日は、敬虔な兄弟が亡くなりました。立ち上がって、彼のために礼拝を行います」とおっしゃった。預言者様がイマームとなり、その場にはない亡骸のために礼拝を行った。その後、このようにおっしゃった。「兄弟のネジャーシ・アスハーメのために、アッラーに赦しを求めました」

しばらくすると、エチオピアから来た知らせにより、王のネジャーシ・アスハーメが亡くなったということが伝えられた。それは、預言者様が礼拝を行った日だった。

アラビア半島ではイスラームが急速に拡大していた。九年目には『イスラーム国家』を嫉妬し、その拡大を防ごうとしていたルームの王、ヘラクリウスに対し、キリスト教徒のアラブ人たちが「預言者であると主張していたあの人物が亡くなりました。ムスリムたちは今、危機と困窮の中にあります。もし、彼らの宗教を戻したいのであれば、今がその時です」という書簡を書いた。この手紙により、ヘラクリウスは四万人から成る軍隊を、クワードを司令官としてムスリムたちと戦うために出発させた。

この情報を知った万物の誇りである預言者様は、教友たちを集め、戦いの準備をするよう命じた。その年は飢饉があったため、教友たちは経済的に大変な苦難の中にあった。しかし、交易を行う者の何人かは経済的余裕があった。預言者様は軍隊の装備のため、教友たちに支援を願った。皆が手元にあるも

のすべてを持ち寄り、資産や命をもってジハードの準備を行い始めた。

預言者様と一緒に洞窟で過ごしたアブー・バクル様は全財産を持ってきた。預言者様は「家族のために何を残したのですか、アブー・バクルよ」とおっしゃると、彼は「アッラーや預言者様を残してきました」と返事をした。ウマル様は資産の半分を手伝うために持ってきた。預言者様は彼にも「家族のために何を残しましたか」と尋ねると「ここに持ってきたものと同程度のものを残しました」と返事をした。預言者様は「あなた方二人の間の差は、それぞれが語った言葉の差なのです」とおっしゃった。これに対して、ウマル様は「両親をあなたに捧げます、アブー・バクルよ！善の道におけるあらゆる競争で私より先んじています。もはや、どうやってもあなたを追い抜くことはできないと、よく分かりました」と言って、彼を称えた。

教友たちは力の限りの手助けをしようとした。しかし、偽信者たちは「あなた方は見せびらかすために出しているのだ」と言って、教友たちをからかっていた。だが、預言者様は「誰かが今日、ある施しを行えば、それは最後の日にアッラーの前にあって、その人が有利になるよう証人となるでしょう」とおっしゃった。預言者様の神聖な言葉に対して、信者たちは一層の助けを行い始めた。ウスマーン・ビン・アフワン様が軍の三分の一の装備の手配をした。このようにして、ムスリムの中で最も援助をしたのは彼であった。また、ウスマーン様は、軍隊が求めるものに完全に対応し、水袋を修理するときに必要となる太い針でさえ用意するのを忘れなかった。彼のこのような手助けに対し、預言者様は「今日から、ウスマーンには罪が書かれないことでしょう」とおっしゃった。経済的に最も苦しんでいた教友の一人は、戦いの手助けをして善行を得ようと、その夜、朝までナツメヤシの果樹園で水をまいて得たお金でナツメヤシを買い、預言者様に持ってきた。そして「預言者様！アッラーのご満悦を得ようと、手にあるものを持ってきました。お受け取りください」と言うのだった。

ムスリムの男たちができるだけの手助けをしようとしていたとき、女たちも自分たちに与えられた任務を十二分に行っていた。

タブクの出征の準備をしていたときは、ムスリムたちにとって大変困難な時期だった。激しい飢饉のため手には何も残っていなかった。大勢の教友たちが預言者様のところへ行って「預言者様！私たちは乗る動物がありません。食べるものもありません。しかし、この戦いであなたから離れずに、ジハードの善行を得たいのです」と言うのだった。預言者様は残念に思いながらも、彼らのために乗せる動物が残っていないことを知らせた。あるとき、サーリム・ビン・ウマイル、アブドゥッラー・ビン・ムガッフェル、アブー・レイラー・マーズィニ、ウルベ・ビン・ザイド、アムル・ビン・ヒュマーム、ヘレミ・ビン・アブドゥッラー、イルバード・ビン・サーリエが、預言者様の前に来て、同様の願いをした。預言者様は彼らに対しても大変悲しみながら「あなた方を乗せるものが見つかりません」とおっしゃった。すると、彼らは預言者様から離れることと、ジハードに参加できない悲しさで泣き始めた。これに対してアッラーがこのクルアーンの章句を啓示された。『またあなたに（戦のための）乗り物を求めて来たとき、あなたが「わたしにはあなたがたに提供する乗り物がない。」と告げると、両目に涙をたたえて（馬などを購入する）資金のないことを悲しんで帰っていく人々（も非難される筋はない）。』（悔悟章（アッ・タウバ）第九二節）結局、彼らについては、ウスマーン様とアッバース様が戦いの準備をさせることとなった。

準備が整うと、預言者様は軍をセニーエト・ウル・ベダーに集めた。戦いに参加しない者の方が少ないほどだった。預言者様は軍をまとめて出発を決定し、ムハンマド・ビン・メスレメをマディーナでの自分の代理として残した。出発のとき、預言者様は「予備の靴を持ちなさい。予備の靴がある限り苦難はありません」とおっしゃった。

軍が出発したとき、偽信者の頭であるアブドゥッラー・ビン・ウベイが、ムスリムたちを恐れさせようとひどいことを言った。「誓って、彼や教友たちが二人ずつ縄で縛られた様子が見えるようです…」と言ったりもした。しかし、教友たちはこういった言葉を気に留めず、ジハードに加わったという情熱が一層高まるばかりだった。これを見ていた偽信者たちは一段と落ち込んだ。預言者様はセニーエト・ウル・ベダーからタブクに出発するとき旗や軍旗を広げた。最も大きい軍旗をアブー・バクル様に、最も大きい旗をズバイル・ビン・アウワーム様に渡した。アウス族の旗をウ

セイド・ビン・フダイルに、ハズラジ族の旗をアブー・ドゥジャーネに渡した。預言者様が指揮していた教友たちの数は一万人の騎兵とあわせ、合計三万人だった。右翼の司令官にはタルハ・ビン・ウバイドゥッラー様、左翼の司令官にはアブドゥルラハマーン・ビン・アウフ様が任命された。

　名誉ある教友たちは大変暑い日に預言者様の指揮のもとで出発をした。先頭にアッラーの愛する人がいる限り、たとえ食糧や飲み物が不足したとしてもその踵を返しはしないし、たとえ旅が遠く、敵軍が大勢だったとしても、彼らを恐れさせはしなかった。このままどこまでも行けたことだったろう。

　愛すべき預言者様と勇敢なる教友たちは、野営し、休憩をしながら進んでいった。八回目の野営地は預言者サーリフ様の部族が滅亡したヒジラであった。彼らは預言者の言葉を聞かなかったため、アッラーが激しい音で彼らを滅亡させたのだった。万物の王は教友たちに「今夜、反対方向から猛烈な風が吹きつけます。誰もとなりに仲間がいない限り、立ち上がらないようにしなさい。皆でラクダの膝を結んで、立ち上がらせないようにするのです。ここは罰が下った場所です。誰もこの場所の水を飲んだり、その水で清めをしたりしないように…」とおっしゃった。全員がこの命令に従った。夜、激しい風があらゆるところを壊していった。しかし、ラクダを結んでいなかったある人が、探しに行こうと立ち上がると、強風に巻き込まれてタイイ山のふもとまで飛ばされた。別の一人は、用を足そうと出かけたところ、フナクという病にかかってしまった。預言者様が祈念をすると再び健康を取り戻した。

　翌朝、水筒の中には水が残っていなかった。全員のどが渇いて死にそうだった。偽信者たちはこれを機会に「ムハンマド（アライヒッサラーム）が本当に預言者であるのなら、願いをかけて雨を降らせていただろう」と言って、人々の間に混乱を起こさせようとしていた。このことが預言者様に知らされると、神聖な手をあげ、アッラーに雨を降らせるよう、雨をお恵みくださるよう懇願した。暑く、雲一つない空に、突然雨雲が現れた。そして、激しく雨が降り始めた。全員が水筒に水を貯めたり、清めを行ったり、動物たちに水を与えたりした。雨が止んで、雲が過ぎ去った後、その雨は軍の上だけに降っていたことが見られた。愛すべき預言者様と教友たちはタクビールを行い、アッラーに感

謝をした。そして、偽信者たちに「もう言い訳はないだろう。アッラーや預言者を信じ、敬虔なムスリムとなりなさい…」と言った。しかし、恥知らずの偽信者たちは「これくらいのこと…一つの雲がやって来て雨が降っただけだ…」と返事をした。

　空腹は激しさを極めていた。一粒のナツメヤシを二人で分け合うほどだった。激しい暑さと苦難、水不足の中で、タブクに近づいてきた。アッラーの愛する預言者様は「明日、インシャーアッラー、朝にタブクの湧水の場所に到着します。私がそこにいくまで水に手をつけないように」とおっしゃった。翌日、そこに到着した。湧水は大変少なかった。愛すべき預言者様は一つの入れ物にそこから水を汲み、中に神聖な手を入れて祈念をした。その後、その水を湧水に戻した。すると、水は一瞬にしてたくさん湧いてきた。三万人のイスラーム軍が全員持っていっても尽きることはなかった。その後も、預言者様の奇跡の一つとして、この水が周りを潤した。その地方は緑にあふれた場所となり、豊さにあふれた。

　預言者様が名誉ある教友たちとタブクに到着したとき、ビザンチンとアミレ、ラフム、ジュザムなどキリスト教徒のアラブ族の同盟であるルーム軍は見当たらなかった。ムーテの戦いでは三千人のムスリムたちに対し、十万人のルーム軍が敗北していた。今は、目の前に三万人のムスリムの戦士たちがいた。司令官は万物の王だった。ルームの人々は愛すべき預言者様が、勇敢な教友たちを集めて来たことを知ったとき、逃げ場を探していたのだった。

　預言者様は教友たちと話し合い、タブクより先には進まなかった。このとき、その地方に住んでいたいくつかの部族や国は、イスラーム軍が来たことを分かっていた。恐怖に落ち、預言者様に代理を送り、ジズエ（庇護民に課される人頭税）を払う代わりに助けを求めた。預言者様は同情をし、彼らの提案を受け入れた。それぞれと条約を結んで安心を与えた。

罠…

預言者様は二十日近く敵を待っていた。タブクでは、教友たちとたくさんの話をし、彼らの心を光の海で洗ったのだった。神聖な心からあふれた学識と恵みを彼らの心に流し込んだ。このようにして行われた類をみない対話の一つでは、このようにおっしゃった。「人々の中で最も善良で名誉ある者をあなた方に知らせましょうか？」教友たちは「教えてください、預言者様！」と言った。これに対して「人々の中で最も善良な者は、馬やラクダの上で、あるいは自分の二つの足をもって、最後の息となるまでアッラーの道で働く者です。人々の中で最も悪い者は、アッラーの啓典を読んでいても、そこから決して利益を得ない狂暴な人々です」とおっしゃった。

殉教者について質問をしたある人に対して「私の命を預かっているアッラーに誓って言いますが、殉教者たちは終末の日、刀を首から下げてやって来ます。そして光でできたクッションの上に座ります」とおっしゃった。

タブクからマディーナに帰る準備をしていたとき、空腹が耐えがたい状況となっていた教友たちは、このことを預言者様に申し出た。預言者様は彼らの間で残っていた料理を一つの革の敷物の上に集めた。これらすべてでも、一つの小さなべに入る程度だった。預言者様は清めを行い、二回の礼拝を行った。神聖な手を上げ、食料が多くなるよう祈念した。その後、教友たちに入れ物を持ってくるように命じた。軍にあるすべての入れ物の中で、空になったままのものはなくなった。しかも、すべての戦士たちが満腹になるまで食べたにもかかわらず、まだ食料は減っていないのが見られた。

戦士たちはタブクから離れ、マディーナに出発をした。ある夜、偽信者たちは、先にある細い峠で愛すべき預言者様に罠をしかけ、殺そうと決めて待ち伏せをしていた。預言者様のラクダのくつわは、アンマール・ビン・ヤーセル様が持ち、後ろからはフゼイフェ・ビン・イェマン様がついていた。偽信者たちが口裏をあわせて暗殺計画を立てていることを、大天使ジブリール様が預言者様に知らせた。預言者様がその場所に近づくと、偽信者の一団が顔に仮面

をつけて攻撃をしてきた。フゼイフェ様は「アッラーの敵たちよ！」と言って、手に持っていたこん棒で偽信者たちや彼らが乗っていた動物を打ち始めた。この騒ぎで恐怖に陥った十二人の偽信者は、すぐに軍隊の間に紛れ込んだ。預言者様は彼らの名前をフゼイフェ様に知らせた。そして、他の人には言わないように念を押した。

この出来事を聞いたウセイド・ビン・フダイル様は、預言者様に「命をあなたに捧げます、預言者様！ 彼らのことを私に知らせていただけたら、彼らの首を持ってきましょう」と言って願い出た。しかし、預言者様はそれを許可しなかった。

マスジド・イ・ディラール

ついに預言者様と勇敢な教友たちは、ビザンチンに恐怖を与え、抵抗を抑えた後、光に満ちたマディーナに近づいてきた。万物の王は、マディーナの近くにあるズィエワーンという場所で、教友たちに野営をするよう命じた。教友たちが休んでいたとき、何人かの偽信者が預言者様のところへ来て、マスジド・イ・ディラールに来てもらえるよう求めた。

マスジド・イ・ディラールはクバーにあった。それは、預言者様がマディーナにヒジュラした途中、クバーで造った初めてのモスクの目の前に、偽信者たちが作ったものだった。愛すべき預言者様が、教友たちとともにタブクへ行くとき、偽信者たちは預言者様の前に来て「預言者様！ 新しいモスクを作りました。いらっしゃって、私たちに礼拝を行ってもらえませんか？」と言って招待していた。しかし、出征中だったため、万物の王は「アッラーがお許しになれば、タブクから帰るとき立ち寄ることがあるかもしれません」とおっしゃっていた。

偽信者たちの目的は、ムスリムの一団を分断し、自分たちの目的のために彼らを使い、混乱を起こして仲違いさせることだった。しかも、ビザンチンの軍隊を招き、このモスクに集めていた武器をもって彼らに協力するつもりだった。

また、預言者様がそこで礼拝を行うことによって、マスジド・イ・ディラールが神聖な場所であるという印象を与えられるとも考えていた。こうしてムスリムたちがここで礼拝をするよう、いろいろと仕向けていたのだった。そして、偽信者たちは罠にかけようとしていたのである。

預言者様は、偽信者たちのこの招きを受け入れ、そこに行くことを決めた。しかし、アッラーがクルアーンの『悔悟章（アッ・タウバ）』第一〇七、一〇八節を啓示し、このことの正体を知らせた。これに従って、万物の王はマーリク・ビン・ドゥフシュンとアースィム・ビン・アディィに「あの乱暴な者たちが作ったモスクに入って、それを壊して焼き払いなさい」とおっしゃった。彼らは夕方と夜の間にそこへ行き、建物を焼き払った。その後、破壊した。偽信者たちが声を上げることはなかった。

預言者様と名誉ある教友たちが戻ってきたことを知ったマディーナの人々はすぐに集まり、大変な興奮の中で迎えに出た…

愛すべき預言者様がタブクの出征から戻ってきて二ヶ月後、偽信者の頭である、アブドゥッラー・ビン・ウベイが死んだ。その後、偽信者たちの間はばらばらになっていった。

こうして、偽信者だけでなく、不信仰者とユダヤ人の頭を押さえることで、アラビア半島では、イスラームに反対し、妨げるような行動はなくなっていったのだった。

別れのハッジ

イスラームの五つの信仰行為の一つであるハッジが、ヒジュラの九年目に義務となった。啓示されたクルアーンの章句ではこのように伝えられている。『その中には、明白な印があり、イブラーヒームが礼拝に立った場所がある。また誰でもその中に入る者は、平安が与えられる。この家への巡礼は、そこに赴ける人々に課せられたアッラーへの義務である。背信者があっても、まことにアッラーは万有に（超越され）完全に自足されておられる方である。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第九七節）

世界の誇りである預言者様は、アッラーのこの命令を教友たちに知らせた。その年、三百人が参加したハッジのキャラバンの責任者として、アブー・バクル様を任命した。このキャラバンにいた教友たちは、アブー・バクル様のもとマッカへとやって来た。このとき、『悔悟章（アッ・タウバ）』の最初の節が啓示された。これにより、契約に関するいくつかの規則が知らされた。愛すべき預言者様はこれらを伝えるため、アリー様をマッカに送った。

当時、アラブ人の間でよく行われていた習慣では、ある契約が結ばれたり、結ばれた契約が破棄されたりした場合、そのことを本人が発表するか、本人が任を与えた親族が発表することとなっていた。預言者様はこのために、アリー様をハッジのキャラバンの後からマッカに行かせたのだった。アリー様は、キャラバンに追いつき、一緒にマッカに入った。

アブー・バクル様が、ある説法を読み、ハッジの礼拝について説明をした。教友たちは、教示された方法に則り、ハッジを行った。ハッジの礼拝を行っている途中で、アリー様がミナー（のジェムレイ・アカバという場所）で説法を読んだ。この説法では

「人々よ！　預言者様が私をあなた方のところへ遣わしました」と言って、説法を始めた。そして、『悔悟章（アッ・タウバ）』の最初の節を詠んだ。その後「私はあなた方に四つのことを知らせるために任務につきました」と言った。

この四つのこととはこのようなものだった。

一、信者以外は天国に入れないこと

二、今年以降、不信仰者たちはカアバに近づかないこと

三、誰もカアバを裸で周回しないこと（当時、不信仰者たちはカアバを裸のままで周回していた）

四、誰かが預言者様との間で契約を行った場合、その契約は切られるまでの間有効なものとなる。しかし、それ以外の契約の有効期間は四ヶ月である。今後は、不信仰者たちに対して契約を結んだり保護したりすることは行わないこととする

その日以降、不信仰者たちは誰一人としてカアバに来なくなった。そして、誰一人として裸でカアバを周回しなくなった。このようなことが伝えられた後、不信仰者たちの多くがムスリムとなった。ハッジの義務が遂行された後、アブー・バクル様とアリー様は教友たちとともに、マディーナへ戻った。

ヒジュラ十年目の年、イスラームはアラビア半島全体に広まった。アラビア半島のあらゆるところから、人々がマディーナへとやって来て、ムスリムとなる名誉に与り、永遠の幸せに導かれるために互いに競い合っていたのだった。もはや、アラビア半島ではムスリムに反対する勢力は一つも残っていなかった。イスラームがあらゆる場所を治めることとなったのである。ただ、いくつかのユダヤ人やキリスト教徒の部族はムスリムとはならなかった。

愛すべき預言者様はヒジュラ十年目の年、ハーリド・ビン・ワリードを四百人の軍隊とともに、イエメンの近くにあるハーリス・ビン・カボー家をイスラームに宣教するために送った。ハーリド・ビン・ワリード様は、預言者様の命令に従い、この部族を三日間イスラームへと宣教した。彼らはこの宣教に応じてムスリムとなった。また、この年、預言者様はナジュラーンのキリスト教徒たちと平和条約を結んだ。彼らの何人かは自らムスリムとなった。同じ年、アリー様も三百人の教友たちとともに、イエメンにあるメドゥレジ族をイスラームに宣教するために遣わされた。当初は反対されたものの、その後彼らもムスリムとなった。預言者様はこの年、イスラームが広まったすべての地方に、

知事や税を集めるための責任者を送った。

ヒジュラの十年目の年、預言者様はハッジのための準備を行い、マディーナにいるムスリムたちにもハッジを行う準備をするよう命じた。マディーナ以外の人々にも知らせが送られた。こうして、何千人ものムスリムたちがマディーナに集まった。準備が整うと、愛すべき預言者様はズー・アル・カアダ月二十五日に、四万人のキャラバンとともに昼の礼拝を行った後、マディーナを出発した。預言者様は「アッラーよ！このハッジが、私の内に偽善や見せかけがなく、名声を求めたものでもなく、そして、善なるものとして、受け入れられるようにしてください」と言って願った。イフラームに入り、ジブリール様の知らせに基づいて大声でタルビヤを行い始めた。これに教友たちも加わると、天も地もタルビヤの叫び声でとどろいた。「ラッバイカ！アッラーフンマ、ラッバイカ！ラッバイカ！ラー・シェリーカ・ラカ・ラッバイカ！インナル・ハムデ・ワンニーメテ・ラカ・ワルムルク、ラー・シェリーカ・ラカ！…」愛すべき預言者様は、犠牲とするために百頭のラクダを連れて行った。十日間続いた旅の後、ズー・アル・ヒッジャ月の四日にマッカに到着した。イエメンからも、そして他の場所からもハッジを行うために集まった人々と合わせると、ムスリムの数は十二万四千人を超えた。愛すべき預言者様は、ズー・アル・ヒッジャ月八日にはミナーへ、九日（祭りの前日）にはアラファへと行った。その日の午後、アラファの谷の中央で、クスワーと名付けたラクダの上から、最後の説法を行って教友たちと別れを告げたのだった。

最後の説法

…人々よ！ 私の話をよく聞きなさい。もしかすると、今年以降、あなた方とここで会うことが永遠にないかもしれないのです。

人々よ！ あなた方にとって、ちょうど、この日々、この月々において、この町（マッカ）が神聖であるように、あなたがたの命や財産、そして名誉も神聖なものなのです。あらゆる侵犯から守られたものなのです。

教友たちよ！ 明日、あなた方は主と会うでしょう。そして、この世でのすべての行動や状況について、必ずや問われます。私の後、決して以前の異常な行動に戻ってお互いの首を切らないようにするのです。私のこの遺言を、ここにいる者はいない者に知らせなさい。もしかすると、知らされた者はここにいて聞く者より、より理解し、守るかもしれないのですから。

教友たちよ！ 誰かが手元に借りたものがあるのなら、それを所有者に返しなさい。あらゆる利息は禁じられています。それは私の足元で踏みにじられます。しかし、借りたものの元本は返すべきです。誰もあなた方を傷つけないように、そして、あなた方も誰かを傷つけないようにしなさい。アッラーの命令により、利息は禁じられています。無明時代からのこの醜い習慣の、あらゆる手立ては私の足下にあるのです。最初に放棄された利息はアブドゥルムッタリブの息子（叔父の）アッバースの利息です。

教友たちよ！ 無明時代の血の復讐もすべて放棄されます。放棄された初めての血の復讐はアブドゥルムッタリブの孫（叔父の息子の）ラビーアの血の復讐です。

人々よ！ 戦いを行うため、聖なる月の時期を変えることは、間違いなく不信心の先頭を行くことです。これは、異教徒たちが自らを堕落させる行為なのです。彼らは、ある年に聖なる月ではないと認めた月を、翌年には聖なる月であると宣言したりします。アッラーが神聖であると決めた数に、ただあわせるためだけにこのようなことをするのです。

彼らはアッラーが禁じられたものを許し、許したものを禁じます。

まったく疑いなく、今はアッラーが創造したときの正当な秩序に戻っているのです。

人々よ！ 今や悪魔は、あなた方の住むこの地上では、永遠なる影響力と支配力をなくしました。しかし、あなた方が、この放棄したもの以外のことで、小さなことだからといって悪魔に従ってしまったら、それは彼を満足させることになるのです。宗教を守るため、そのようなことも避けなさい。

人々よ！ 女性たちの権利を保護し、またこの点においてアッラーを畏れることを勧めます。あなた方は女性を、アッラーの信託として預かりました。彼女たちの名誉や貞節を、アッラーの名に誓っていただいたのです。あなた方は女性に対して、また、女性たちもあなた方に対して権利を持っています。あなた方の女性に対する権利は、好まない誰に対しても家族の名誉を傷つけさせないこと、もし、許可なく誰かを家に入れたら彼女たちを軽く叩いて控えるようにさせることです。女性たちのあなた方に対する権利は、公正な形で食料や衣類を提供してもらうことです。

信者たちよ！ あなた方に一つの信託を残します。それによく従うかぎり、決して道に迷うことはありません。その信託とはアッラーの啓典であるクルアーンです。（別の説によると、スンナおよび、預言者様の家族・家系も加わるとされている）

信者たちよ！ 私の話をよく聞き、そして、よく守りなさい！ ムスリムたちは、お互い兄弟です。こうしてすべてのムスリムたちは、兄弟となっているのです。宗教の兄弟が持つあらゆる権利に侵害を与えることは許されません。ただし、相手がそれを喜んで与える場合は別です。

教友たちよ！ 自分自身に対しても虐待をしてはなりません。自分自身に対しての権利もあるのです。

人々よ！ アッラーがすべての相続人の権利を（クルアーンで）知らせています。相続人に遺言状を記す必要はありません。子供が誰かの家で生まれたら、遺産はその人のものとなるのです。しかし、不貞による場合は没収されます。本当の父親以外に別の祖先を主張する卑しい者や、自分の主以外の者と取り結ぼうとする恩知らずに、アッラーの復

讐や天使とすべてのムスリムからの災いがありますように。アッラーはこのような人々の良心の呵責や、正しく行った信仰も受け入れないのです。
人々よ！　アッラーは唯一です。あなた方の父親も唯一です。皆がアーデムの子孫です。アーデムは土から創造されました。アッラーの前で、最も価値のある者は、信心深さに優れたものです。アラブ人がアラブ人でない人々に対して優越性があるわけではありません。優越性とは、信心深さによるものです。
人々よ！　明日私のことを、あなた方は聞かれるでしょう。果たして何と言うのでしょうか？」
教友たちは「アッラーの宗教を伝えました、使命を果たされました、私たちに遺言や忠告を残されました、と証言します」と言った。
これに対して預言者様は、神聖な人差し指を上げ、人々を指し示し、そして「アッラーよ！　証人となり給え。アッラーよ！　証人となり給え。アッラーよ！　証人となり給え」とおっしゃった。
愛すべき預言者様が、最後の説法を行った日、食卓章（アル・マーイダ）の第三節『今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなたがたのための教えとして、イスラームを選んだのである。…』が啓示された。預言者様がこの章を教友たちに詠むと、アブー・バクル様は泣き始めた。教友たちが泣く理由を尋ねると「この節では預言者様の死が近づいていることが暗示されているのです。ですから泣いたのです」と説明した。
預言者様は、マッカに十日間滞在し、最後の別れのハッジを行い、最後の周回を終わらせてマディーナへと戻った。最後のハッジの後、教友たちも各地に戻り、預言者様が知らせ、命じたことをそれぞれ伝えたのだった。
ヒジュラ十年目の年には、自らを預言者と称する偽の人々が現れるという出来事が起こった。その一人はイエメンにいたアスアド・アンスィという名の人物だった。愛すべき預言者様の命令により、アスアド・アンスィはイエメンでムスリムたちによって殺されることとなった。（別の一人は、ムセイレメト・ウル・ケッザーブであった。預言者様

が亡くなった後、アブー・バクル様がムセイレメトに対して、ハーリド・ビン・ワリードを司令官として部隊を送った。ムセイレメトはワフシによって殺された）

贅沢をよしとせず困窮を好み、それを誇った
資産のない者を自らの兄弟とした、その寛大さの源

服には継ぎ当てをし、靴をはいていた
病人を訪ねては治療した、その寛大さの源

自ら家の用事を喜んで行い
あらゆる困難を容易にした、その寛大さの源

大麦のパンをレンズ豆のスープに入れ
招かれれば客となった、その寛大さの源

ときにはラクダに、ときには馬に、そしてときにはロバやラバにも乗り
ときには裸で歩いていた、皇帝であるその寛大さの源

逝去

ヒジュラの十一年目の年だった。大天使ジブリール様が、その年になって愛すべき預言者にクルアーンを二回も最初から最後まで詠み上げた。しかし、それ以前の年にはクルアーンをすべて詠んだのは一度だけだった。預言者様はジブリール様が最後に啓示した『言え「ご加護を乞い願う、人間の主、人間の王、人間の神に。こっそりと忍び込み、囁く者の悪から。それが人間の胸に囁きかける。ジン（幽精）であろうと、人間であろうと。」』という『人々章（アン・ナース）』を聞いた後「ジブリールよ！ 私の死が近づいていることが、ここからが分かります」とおっしゃった。これに対してジブリール様は、クルアーンからこの節を詠んだ。『本当に来世（将来）は、あなたにとって現世（現在）より、もっと良いのである。やがて主はあなたの満足するものを御授けになる。』（朝章（アッ・ドハー）第四、五節）

愛すべき預言者はその日、マディーナにいるすべての教友たちを昼の礼拝の際に、モスクへ集まるよう知らせた。預言者様は礼拝を行った後、説法を行った。この説法を聞いたすべての心は揺れ、目からは涙があふれたのだった。その後「人々よ！ あなた方は、あなた方の預言者としての私をどうみなしていますか?」と尋ねた。教友たちは「預言者様！ 私たちはアッラーがあなたに数多くの恩恵を与えるよう願います。あなたは私たちのために深い憐みを持つ父であり、忠告をする情け深い兄弟のようです。アッラーがあなたに恵んだ預言者という任務を果たしました。啓示されたものを私たちに伝えました。アッラーの道、イスラームを神意や善き忠告をもって宣教し、呼びかけました。アッラーがあなたに最も善く、最も高い褒賞を与えるよう願います」と答えた。

預言者様は「信者たちよ！ アッラーの愛をもって、誰か私に負債があるのであれば、ここに来るのです。最期の日が来る前にここで清算しましょう」とおっしゃった。しかし、そのような人は一人もいなかった。預言者様は二度三度アッラーの名前を唱え「負債のある者は来るのです」とおっしゃった。それに対して、教友たちの中の年長者であるウカシェ様が立ち上がった。そして預言者様の前に来た。「両親をあなたに捧げます、預言者様！ 私はタブクの戦いであなたとともにおりました。タブクから離れた後、私のラクダとあなたのラクダが横に並んでいました。私はラクダから降りました。そして、あなたに近づきました。その目的はあなたの神聖な身体に口づけをすることでした。しかしそのとき、鞭で私の背中を叩きました。なぜ叩かれたのか分かりません」と言った。

預言者様は「ウカシェよ！ 預言者がわざと叩くことによって、アッラーがあなたを護るよう願います。ビラールよ！ 娘のファーティマの家に行きなさい。その鞭を私のところに持ってくるのです」と命じた。ビラール様はモスクから出た。手を頭にのせ「預言者様は自分に同様の報復をさせるつもりなのだろうか」と言って驚いていた。家に着くと扉を叩き「預言者様の娘よ！ 私に預言者様の鞭を貸してください」と言うと、ファーティマ様は「ビラールよ！ 今はハッジの時期でも戦いの時期でもありません。父は鞭で何をするのですか?」と尋ねた。ビラール様は「ファーティマよ！ 知らないのですか? それでもって預言者様に報復が行われるのです」と答えた。

ファーティマ様は「ビラールよ！ 預言者様に報復して負債を受け取ろうということに、誰の心がそのことを受け入れられるというのでしょう? でも、もし欲しているのであればお渡ししましょう。しかし、ハサンとフサインに言って、負債を求める人が、報復を彼らに行うように言ってください。その人の負債は彼らから受け取るように。絶対に預言者様に報復をさせないように伝えてください」とビラール様に言い含めた。ビラール様はモスクへ戻り、鞭を預言者様に渡した。預言者様はそれをウカシェ様に渡した。

アブー・バクルとウマルがこの状況を見て「ウカシェよ！ さあ、私たちがここにいる。負債は私たちから受け取るのだ。お願いです。預言者様から受け取ろうとはしないでください」と懇願した。これに対して預言者様はアブー・バクル様に「アブー・バクルよ！ あなたが間に入らないように。ウマル！ あなたもです。アッラーはあなた方の高い地位をご存じです」とおっしゃった。その後、アリー様が立ち上がり「ウカシェよ！ 預言者様を打つことに心が納得しません。さあ、私の背中や腹はここだ。こちらへ来て、負債を私から受け取るのだ。百回打っても構わない。しかし、預言者様に触れないようにするのだ」と言うと、預言者様は「アリーよ！ あなたも座りなさい。アッラーがあなたの

高い地位と状態をご存知です」とおっしゃった。次にハサン様とフサイン様が立ち上がり「ウカシェよ！あなたもご存じのとおり、私たちは預言者様の孫です。ですから、私たちに行う報復は預言者様に行う報復と同じです。負債を私たちから受け取ってください。お願いします。預言者様を打たないでください」と言うと、預言者様は彼らに「あなたたちも座りなさい。目に入れても痛くない者たちよ！」とおっしゃった。その後「ウカシェよ！来て打ちなさい」とおっしゃった。

ウカシェは「預言者様！あなたが私を打ったとき、私は服を身につけていませんでした」と言うと、預言者様は神聖な背中を開けた。このとき教友たちの間から泣き声が聞こえた。「ウカシェよ！預言者様の神聖な背中を打つのですか？」と言っていた。皆が悲しみの中で待っていた。ウカシェ様は預言者様の神聖な背中にある預言者の印を見て、突然「両親をあなたに捧げます、預言者様！負債を受け取るからといって、あなたの神聖な背中を打って報復を行うという、そのような力が一体誰にあり、一体誰ができるというのでしょう？」と言って、万物の王の神聖な預言者の印に口づけをした。これに対して預言者様は彼に「いいえ、打つか許すかです」とおっしゃると、ウカシェ様は「命をあなたに捧げます。許しました。一体、審判の日、アッラーが私を赦して下さるでしょうか」と言った。

預言者様は「私の天国での友を見たいという人がいるのであれば、この年長者を見るのです」とおっしゃった。預言者様のこの神聖な言葉を聞いた教友たちは、ウカシェの眉間に口づけをした。皆が「おめでとう、ウカシェ！預言者様とともにいるおかげで、天国での高いところに恵まれるのです」と言っていた。

サファル月の最後の日だった。万物の王は北にあるビザンチン帝国がムスリムたちにとって大きな脅威となる前に、彼らを再びイスラームへと宣教し、拒否されたら戦ってイスラームに従うようにしようと考えた。このため、戦いの準備をするよう教友たちに命じた。教友たちは準備をするため解散し、預言者様はウサーマ・ビン・ザイド様を呼び「ウサーマよ！シャームのベルカの国境からパレスチナにあるダルム、つまり、あなたの父が殉教者となったところに至るまで、アッラーの名とその豊かさとともに向かいなさい。そこを馬で踏み進むのです。あなたを軍の司令官に任命

します。ユブナーの人々に対しては急襲を行い、雷のように飛び込みなさい。行く場所に情報が先に伝わらないように、素早く行くのです。供として道案内をつけ、偵察を先に行かせなさい。アッラーが勝利をもたらしたら、彼らとともにしばらく留まりなさい」とおっしゃった。ジュルフにて司令部を作るように命じ、神聖な手で軍旗を結んで預けた。

預言者様はモスクでミンバルに上がり「教友たちよ！ウサーマの父のザイドは、司令官にふさわしく、そして私の目から見て愛すべき者であったのと同様、彼の息子のウサーマも司令官にふさわしい者です。ウサーマも私の目からして、人々の間で最も愛される者の一人です」とおっしゃった。

ウサーマ様を司令官として戦いに行く人々の中には、アブー・バクル様、ウマル様、アブー・ウバイダ・ビン・ジェッラーフ様、サアド・ビン・アブー・ワッカース様など、教友の名士たちも含まれていた。

しかし、翌日、万物の王が急病となったため、軍隊の出発は見合わせられ、後に預言者様が亡くなってから出発した。愛すべき預言者様はひどいマラリアに罹っていた。熱は一層上がり、病は激しくなっていった。痛みが弱まっていたある夜、預言者様は床から起き、着替えて出かける準備をした。これを見たアーイシャ様は「両親をあなたに捧げます、預言者様！どこへお出かけですか？」と尋ねた。預言者様は「バーキ墓地に埋葬されている人々のために赦しを願うよう、命令を受けたのです。そこへ行きます」とおっしゃった。一緒にアブー・ムベイヒビとアブー・ラーフィーを連れていった。墓地では時間をかけて祈念をし、彼らの赦しと免罪をアッラーに願った。預言者様のこの深い懇願に対して、ともにいた教友たちは「私たちもここで埋葬されていて、預言者様のこの祈願を受ける名誉を持っていたらよかったことだろうに」と言うほどだった。愛すべき預言者様は、アブー・ムベイヒビに向かって「アブー・ムベイヒビよ！私は現世の宝と来世の恵みのいずれかを選ぶことができました。永くこの現世にいてその後で天国へ行くか、リカーウッラー（アッラーに再会すること）を得て天国に行くかを問われたのです。私はアッラーに再会して天国へ行くことを選びました」とおっしゃった。

またある日は、ウフドの殉教者の免罪を願うために出向いた。彼らのためアッラーに深く祈った。その後、モスク

に戻って教友たちに「私はカウサル（天国での川の名）の池へと先に向かいます。そして、あなた方を迎えます。あなた方と再会する場所はそこです…。私の後、あなた方が不信仰者となってしまう心配はしていません。しかし、この世のことに取りつかれて互いに嫉妬し、そして互いに殺しあうことになるでしょう。結局はあなた方以前の人々が消えていったように、あなた方が滅びてしまうことを心配しています…」とおっしゃった。その後、自分の家へと戻っていった。

病は相当悪化していた。神聖な妻たちは愛すべき預言者様がアーイシャ様の家で留まるように、自分たちの家に迎える権利をアーイシャ様に譲った。預言者様は妻たちのこの自己犠牲に満足して全員のために祈念をし、その後の日々はアーイシャ様の家で過ごすこととした。

預言者様の熱はかなり上がっていた。激しい熱のため、床でのたうち回るほどだった。そのような状況の中、教友たちが訪ねに来ては預言者様の激しい苦悩に大変心を痛めていた。アブー・サイード・イ・フドゥリはこのように語っている。「神聖な預言者様の前に上がりました。上にはコールテンの布団がかかっていました。マラリアによる熱は布団から外に漏れ出るほどで、布団に手を触れることさえできないほどでした。私の驚きと悲しみを見てとった預言者様は

『最も激しい苦難は、預言者たちに降りかかるものなのです。しかし、預言者の苦難に対する喜びは、あなた方の恵みに対する喜びよりも大きいものなのです』とおっしゃいました」

ウンム・ビシール・ビン・ベラーはこのように語っている。「預言者様を訪ねに行きました。神聖な身体は火のように火照っていました。『命をあなたに捧げます、預言者様！　私は今までこれほどまでに激しい病を見たことがありません…』と言いました。預言者様はこのようにおっしゃいました。『ウンム・ビシールよ！　マラリアがこのように激しくなるのは、善行がより多くなるようにということなのです。この病はハイバルで口にした毒入り肉のせいなのです。あの肉の痛みをいつも感じていました。あの日口にした毒が、今大動脈を引きちぎっているようです』」

愛すべき預言者様はアブドゥッラー・ビン・マスード様にこのようにおっしゃった。「病となったムスリムは誰であれ、アッラーが彼らの過ちや罪を木の葉が落ちるように落としてくれるのです」

病は日増しに激しくなっていった。教友たちはこの状況に深く悲しみ、家にいても立ってもいられずモスクへと集まった。預言者様の容体を聞くためアリー様を送った。万物の王は、合図によって「教友たちは何と言っているのですか？」と彼に尋ねた。

アリー様は「預言者様が私たちの間から去っていったら…と話しながら、大変悲しんで心配をしています」と答えた。教友たちに対する最大の憐みの持ち主である愛すべき預言者様は、激しい病に耐えて立ち上がり、アリー様とファドゥル・ビン・アッバース様に肩を借りてモスクへと向かった。ミンバルに上がり、アッラーに感謝と称賛を行った後、教友たちに「教友たちよ！　私が去ることを考えて心配しているようです。誰であれ預言者がその共同体とともに永遠に残らなかったように、私もあなた方の間に残ることはありません。知っておきなさい。私はアッラーに再会するのです。あなた方に対しては、ムハージルの名士たちを尊敬するよう忠告します。ムハージルたちよ！　あなた方に対しては、アンサールによく接するよう遺言を残します。彼らはあなた方によく接してくれました。家で庇護してくれました。苦しい生活の中で、あなた方を自分よりも大切であるとみなしてくれたのです。財産をあなた方と分け合いました。アンサールたちを統治することになった者は、彼らを見守り、過ちを犯す人を許してほしいのです」とおっしゃった。その後も美しく心に残る忠告を続け「アッラーはあるしもべに対し、この世に残るか、あるいはアッラーに再会するかを自由に選ばせました。そのしもべはアッラーと再会することを選びました」とおっしゃった。アブー・バクル様は預言者様のこの言葉が亡くなる印であることを理解し「私たちの命をあなたに捧げます、預言者様！」と言って泣き始めた。憐みの大海である愛すべき預言者様は「泣かないように、アブー・バクルよ！」とおっしゃって、彼に耐え忍ぶ必要があると命じたのだった。神聖な目からは涙があふれ「教友たちよ！　イスラームの宗教の道において、正直であり、あらゆる務めや礼拝をアッラーのご満悦のために行い、資産を供したアブー・バクルに大変満足してい

ます。もし、来世への旅において友を連れて行くことができたとしたら、彼を選んでいたことでしょう」とおっしゃった。そして「モスクに開いた扉のうち、アブー・バクル以外の扉はすべて閉めるのです」と命じられた。

その後、ミンバルから降り、アーイシャ様の部屋に戻った。教友たちは泣き始めた。これを知って預言者様は、アリー様とファドゥル・ビン・アッバースの肩を借りて、再びモスクへといらっしゃった。ミンバルの下の段に座り、教友たちにこのようにおっしゃった。

「ムハージルたちよ！アンサールたちよ！時が知らされてはいないあることに対して、焦っても役には立ちません。アッラーは誰であれ、しもべのために急ぐことはないのです。ある人がアッラーの審判や運命を変えようとしたり、アッラーの意志に逆らおうとしたとしたら、アッラーはその人を押しやり、追い払います。アッラーを謀ろうとしたり騙そうとしたりする者は、自分自身が崩れ、自分自身が騙されることになるのです。知っているように、私はあなた方に対して、大変に同情し憐れんでいます。あなた方は私に再会するのです。会う場所はカウサルの池のほとりです。天国に入って私に再会したい者は、無駄な会話はしないようにしなさい。ムスリムたちよ！不信仰者となることや、罪を犯すことはアッラーの恵みを変化させ、日々の糧を少なくさせる理由となるのです。人々がアッラーの命令に従えば、指導者や長官、知事たちは彼らに同情をし、優しく接するでしょう。大罪を犯したり、罪を繰り返したり、あるいは乱暴をして罪をはたらいていたら、同情心を持つ指導者には巡り合わないでしょう。私の人生があなた方にとって善であったように、私の死もあなた方にとって善であり慈悲なのです。もし、私が誰かを理由なく叩いたり、傷つけたりすることを言ったことがあるならば、私に同じことをしてその借りを清算するのです。そして、あなた方の誰かから不正に何かを受け取ったのであれば、それを返すことに同意し、互いに許し合う用意ができています。というのも、現世の罰は来世の罰に比べればとても軽いのです。この世の罰に耐えることの方が容易なのです」先の説法でアブー・バクル様に対する満足感を表したように、今度の説法ではウマル様に対する満足を表し「ウマルは私と、私はウマルとともにいます。公正さは私に次いでウマルとともにあります」とおっしゃった。

預言者様はこの説法の後でミンバルから下りて礼拝を終わらせた後、再びミンバルに上がり、祈念や忠告を行ってから「あなた方のことをアッラーにお任せします」とおっしゃって教友たちのもとを去り、部屋へと戻っていった。

万物の王は激しい痛みに襲われたある日、教友たちと赦し合い、そして、来世に何らかの借りが残ったまま行くことのないようにと考え、ビラール・ハベシ様を呼んだ。彼に「人々を呼んでモスクに集めなさい。彼らに最後の遺言をしたいのです…」とおっしゃった。

ビラール様は教友たちをモスクへと集めた。愛すべき預言者様はアリー様とファドゥルに肩を借りてモスクへと向かった。ミンバルに座り、アッラーに感謝や称賛を行った後「教友たちよ！知っておきなさい。あなた方のもとから別れる日が近づいてきました。誰か私に貸しのある人がいるのであれば、それを私に求めてください。私にとって嬉しいことは、借りを求め、あるいは赦すかをして、それらを返した後でアッラーやその慈悲に再会することなのです」とおっしゃった。その後、ミンバルから下り、昼の礼拝を行った。礼拝が終わった後、ミンバルに再び上がり、礼拝の前におっしゃった言葉をもう一度繰り返した。

愛すべき預言者様が亡くなる三日前、病が悪化した。モスクへと行って教友たちと礼拝をともにすることもできなかった。預言者様が一緒に行わなかった初めての礼拝は、この日の夜の礼拝だった。ビラール様はいつもの通り、時間になると預言者様の扉のところへ行き「礼拝です、預言者様」と言った。愛すべき預言者様は立ち上がれず、モスクへ行く力は残っていなかった。そして「アブー・バクルに伝えて、教友たちの礼拝を彼が行いなさい」とおっしゃった。ビラール様はアブー・バクル様に状況を知らせた。アブー・バクル様はミフラーブで預言者様を見られなかったことに心を痛め、泣いていた。教友たちも泣き始めた。アッラーの愛する預言者様は、モスクから来るこの泣き声が何事なのか尋ねると、ファーティマ様は「命をあなたに捧げます、預言者様！教友たちがあなたとの別れに耐えられずに泣いているのです…」と状況を説明した。

憐みの海である愛すべき預言者様は大変悲しくなり、教友たちを慰めようと、病の痛みに耐えて立ち上がった。ア

リー様とアッバース様に肩を借りてモスクへと入っていった。礼拝の後「教友たちよ！　アッラーがあなた方を見守っています。そしてあなた方のことをアッラーに委ねます。信心深くありなさい。アッラーのことを畏れなさい。アッラーの命令を実行し、従うのです。私はもうすぐこの世から離れます」とおっしゃった。

アブー・バクル様は、預言者様が病の間、先導として十七回礼拝を行った。ある昼の礼拝の先導を行っているときのことだった。万物の王は、神聖な身体を軽く感じ、アリー様とアッバース様に肩を借りてモスクへと入っていった。アブー・バクル様は愛すべき預言者様がいらっしゃったことに気付き、一歩下がろうとした。しかし、預言者様は彼に「そのままでいなさい」という意味の合図を送った。預言者様はアブー・バクル様の左側に立ち、教友たちの先導として最後の礼拝を行った。

愛すべき預言者様が亡くなる三日前のことだった。大天使ジブリールが預言者様を訪ねに来て「預言者様！　アッラーがあなたに挨拶を送っています。あなたの状態を知ってはいますが、状況を尋ねています」と言った。万物の王は「寂しい気分です」とおっしゃった。

ジブリール様は日曜日にも来た。同じ質問を繰り返した。預言者様も同じ返事をした。他に、ジブリール様はイエメンで預言者と自称していたアスアド・イ・アンスィが殺されたことを知らせた。預言者様は教友たちにこのことを知らせた。病の前に自分に渡されたいくつかの金を貧乏人に、いくつかをアーイシャ様に渡した。日曜日には、預言者様の病気が悪化した。訪れに来た司令官のウサーマ様に何も言うことができなかった。しかし、神聖な手を上げて彼をなぜた。彼のために祈念をしていたことが、それによって分かった。

愛すべき預言者がこの世にお出でになり、そしてこの世から離れた日は月曜日だった。病に倒れてから十三日目…。共同体が何列にもなって礼拝をしていたとき、万物の王がモスクにいらっしゃった。教友たちがモスクでアブー・バクル様の後ろで朝の礼拝を行っていたのをご覧になった。喜んで微笑みをうかべた。預言者様もアブー・バクル様の後ろで礼拝を行った。教友たちは預言者様をモスクで見かけると、病気が治ったと思って喜んだ。預言者様はアーイシャ様の部屋に戻り、横になった。そして「アッラーの前に、この世のことを残したまま行きたくはありません。預かっていた他の金を貧乏人に分け与えなさい」とおっしゃった。その後、熱が上がった。しばらくすると、再び目を開け、アーイシャ様に金を配ったかどうか聞いた。これから配ります、と言われると、それらを直ちに配るよう命じた。すぐに分配されたことが知らされると「今、楽になりました」とおっしゃった。

ベッドでしばらく休んだ後、アリー様を呼んだ。神聖な頭を彼の膝に置いた。神聖な額からは汗が出て、その神聖な色も変わっていた。ファーティマ様は神聖な父がこのような状態なのを見るに耐えられず、息子たちであるハサン様とフサイン様のそばへと行った。子供たちの手を取って「私の父よ！　あなたの娘を誰が見守るのでしょう。ハサンとフサインを誰に委ねるのでしょう。父よ！　命をあなたに捧げます。あなたが亡くなったら私はどうなるのでしょう。私の目はあなたの神聖な顔以外、誰を見ればよいのでしょう」

預言者様は娘のこのような言葉を聞くと神聖な目を開けて、彼女を隣に呼んだ。「アッラーよ！　彼女に忍耐をお与えください」と祈った後「ファーティマよ！　私の目の光よ！　父は命を返そうとしているのです」とおっしゃると、心の底からの泣き声が一段と高まった。アリー様は「ファーティマよ！　お願いだから静かにするのだ。預言者様をこれ以上悲しませないようにするのだ」と言うと、愛すべき預言者は「彼女を傷つけないように、アリーよ。父のために涙を流すことを許すのです…」とおっしゃった後、神聖な目を閉じ、意識はなくなっていった。

その後、ハサン様が神聖な祖父の前に来て「私の神聖な祖父よ！　あなたとの別れに誰が耐えられるというのでしょうか。心の痛みを誰に癒してもらえるというのでしょうか。あなたの後、母や父に、そして兄弟に誰が憐れんでくれるというのでしょうか。家族や教友たちは、あなたの美徳を他にどこから得られるというのでしょうか…」と言って泣くと、預言者様の神聖な妻たちも耐えられなくなり、皆が泣き始めた。

外で悲しみながら集まっていた教友たちは、預言者様の病が一層悪化していることを聞いて心を痛めていた。彼らも泣き始めた。最後にもう一度だけでも愛すべき預言者様の神聖な顔を見ようと「扉を開けてください。お願いします。

預言者様の神聖なお顔をもう一度見たいのです…」と言って外で懇願していた。万物に憐みとして送られたアッラーの最愛の者は、教友たちのこの懇願を聞くと同情をし「扉を開けなさい」とおっしゃった。教友たちのうちの名士たちが中へと入っていった。

愛すべき預言者様は彼らに忍耐することや忠告を与えた後「教友たちよ！ あなた方は人々の中で最も優れた者たちであり、最も名誉のある者たちです。あなた方の後、誰が来たとしても、あなた方は彼らより先に天国へと入るのです。宗教を継続させるためにしっかりするのです。そして、クルアーンを頼りにしなさい。宗教に基づく統治を怠ってはなりません」とおっしゃった。その後「アッラーよ！ 伝えましたでしょうか」と言って、神聖な目を閉じた。神聖な顔からは汗が出ていた。アリー様は教友たちに合図を送って外に出した。

彼らが帰った後、アーイシャ様が来て忠告を求めた。預言者様は「アーイシャよ！ 家に留まり自分を護るのです！」とおっしゃった後、神聖な目から涙を流した。万物の王は泣いていた… その場を見た人々は心を痛め、身体も砕けるようであった。妻のウンム・サラマ様が「命をあなたに捧げます、預言者様！ なぜ泣いていらっしゃるのですか?」と尋ねると「共同体に憐みがあるようにと泣いているのです」とおっしゃった。

太陽は真上へと上がっていった。時が迫っていた… 愛すべき預言者様の神聖な頭は、アーイシャ様の胸に寄りかかっていた。万物の王は、今や最期の時を生きており、神聖な唇からは「ああ！ ああ！ それぞれの奴隷たちに対してよく接しなさい！ 彼らに服を着せ、満腹にさせるのです。彼らに優しく話しかけなさい。礼拝を、礼拝を続けるのです。女性たち、そして奴隷たちに関してアッラーを畏れなさい！… アッラーよ！ 私をお赦しください！ 私に慈悲をお与えください！… 私をレフィキ・アーラー（預言者たちやアッラーの親友たちがいる天国の最も高い場所）の人々とともにいさせてください！…」という言葉が流れ出ていた。ファーティマ様は涙を洪水のように流し、その嗚咽が人々の心を痛めていた。愛すべき預言者様は彼女をそばに座らせ「娘よ！ 少し忍耐して泣かないようにするのです。なぜならば、天使たちはあなたが泣いているから泣いているのです」とおっしゃった。ファーティマ様は涙を拭った。彼

女を慰め、アッラーのために忍耐するよう言った後「娘よ！ 私の魂は取られます。『インナー・リッラーヒ・ワ・インナー・イレイヒ・ラージウーン（訳注…私たちはアッラーのものです。そして、私たちが戻るところはアッラーの身許です、の意）』と言いなさい。ファーティマよ！ 降りかかるすべての災難に対してはその褒賞があるのです」とおっしゃった。しばらく神聖な目を閉じてから「今後は、あなたの父を悲しませたり、心配させたりすることはないのです。なぜなら、この世やこの世の辛苦から解放されるからです」と続けた。その後、アリー様に対して「アリーよ！ 私の手元には、あるユダヤ人のそれくらいの借りがあります。軍の準備をするために預かっていたものです。それを返すのを決して忘れないように。もちろん、私の借りを戻し、カウサルの池のほとりで私と最初に会うのはあなたなのです。私の後、多くの危害が及ぶのはあなたでしょう。忍耐するのです。人々が現世のことを欲するとき、あなたは来世のことを選びなさい」とおっしゃった。

司令官のウサーマが再びやって来た。預言者様は「アッラーの手助けがありますように！ さあ戦いに行くのです！」とおっしゃった。彼は立ち上がって軍へと向かった。すぐに出発の命令を行った。

万物の王は、もはや最期の息をしていた… 時はすぐそこまで近づいていた… アッラーはイズラーイール様に「私の最愛の者のところへ最も美しい姿で行きなさい！ もし許可があれば、非常に優しく軽やかに魂を取るのです。許可がなければ戻りなさい！」と命じられた。イズラーイール様は最も美しい姿、つまり人間の形となって、愛すべき預言者様の家の扉のところへとやって来た。そして「アッサラーム・アライクム、預言者の家の主よ！ 中へ入ってもよろしいでしょうか? アッラーがあなたに慈悲を与えますように」と言った。

アーイシャ様は、愛すべき預言者様の枕元に座っているファーティマ様に「あのやって来た方に返事をしてください」と言った。彼女は扉のところへ行き、大変悲しげな声で「アッラーのしもべよ！ 預言者様は今、ご自身のことでお忙しいのです」と返事をした。イズラーイール様は再び許可を求めた。同じ返事をした。さらにもう一度、面会の申し出を繰り返し、どうしても入る必要があるということを声高に言うと、預言者様が気付いて「ファーティマよ！ 扉の

ところに誰がいるのですか！」と聞いた。

ファーティマ様は「預言者様！扉のところで一人の方が入る許しを求めています。何度か返事をしました。しかし、三度目に声高に言われたときには怯んでしまいました」と答えた。これに対して預言者様は「ファーティマよ！扉のところの者が誰だか知っていますか？彼は愉しみを終わらせ、人々を散り散りにし、妻たちを寡婦にし、子供たちを孤児にし、家を破壊し、墓を整えるイズラーイールです。イズラーイールよ！入りなさい」とおっしゃった。そのときファーティマ様は説明できない悲しみに落ち、神聖な口からはこのような言葉がついて出た。「ああ、マディーナよ！荒れ果ててしまいました」

預言者様はファーティマ様の手を取って神聖な胸に当てさせ、神聖な目を閉じた。そこにいる人々は、預言者様の神聖な魂が取られたと思った。ファーティマ様は耐えられず、父の神聖な耳に向かって心を焼くような声で「ああ父よ！…」と呼びかけた。返事がないので今度は「命をあなたに捧げます、預言者様！どうか神聖な目を再び開けて私に何か言ってください…」と言った。万物の王は神聖な目を開けて娘の涙を拭き、彼女の耳元で亡くなることを知らせた。このためファーティマ様は泣き始めた。続いて耳元に「私の家族の中で最初に私のもとに来るのはあなたです」とおっしゃった。彼女はこの吉報に喜び、慰められた。

ファーティマ様は「父よ！今日は別れの日です！次にあなたといつ会えるのでしょうか？」と尋ねた。預言者様は「娘よ！終末の日に私を池のほとりで見るでしょう。共同体の者で池に来た者には水を与えます」とおっしゃった。ファーティマ様が「もしあなたをそこで見つけられなかったら、どうしたらよいのでしょうか？」と尋ねると、預言者様は「審判の場所で見つけられます。そこで私は共同体に仲裁を行います」とおっしゃった。

ファーティマ様が「預言者様！そこでも見つけられなければ」と言うと、預言者様は「スィラートの橋のたもとで見つけられます。私はそこでアッラーに『アッラーよ！私の共同体を業火からお救いください』と懇願するのです」とおっしゃった。

その後、アリー様が痛ましい声で「預言者様！あなたが魂を休められた後、あなたを誰が清め、どのように白布で覆ったらよいのでしょうか？礼拝を誰が行い、誰が埋葬したらよいのでしょう？」と尋ねた。預言者様は「アリーよ！私をあなたが清めなさい。ファドゥル・ビン・アッバースが水をかけなさい。ジブリールが三人目となりましょう。清めが終わったら、あなた方が白布を巻きなさい。ジブリールが天国から美しい香りを持ってきます。その後、私をモスクへ連れていって、あなた方は出るのです。なぜなら、まずジブリールが、次いでミカーイルが、次いでイスラーフィールが、さらに天使たちが一団一団となって礼拝を行うからです。その後であなた方が入って列になるのです。誰も私の前に出ないようにしなさい」とおっしゃった。

その後、待っていたイズラーイール様に対して「イズラーイールよ！訪ねに来たのですか、それとも私の魂を取りに来たのですか？」と尋ねた。イズラーイール様は「客として、そして任務を行うために来ました。アッラーは私に、あなたのもとへ許可を得て入るよう命じられました。神聖な魂はただ許可があったときだけに取りましょう。預言者様！許可があれば命令に従い、あなたの魂をお取りします。そうでなければ戻ってアッラーのもとへと行きましょう」と言った。

預言者様は「イズラーイールよ！ジブリールはどこに残してきたのですか？」と尋ねた。「ジブリールは地球の空に残してきました。天使たちはあなたが亡くなることについて、ジブリールに対して冥福を述べているのです」と答えた。そのように話しているときにジブリールが来た。預言者様は「兄弟のジブリールよ！今やこの世から離れるときが来ました。アッラーのもとで私には何が待っているのでしょうか？私が待ち望むことの吉報があれば、心安らかに預かり物を主にお返ししましょう」とおっしゃった。ジブリール様は「アッラーの最愛の者よ！私は空の扉を開いたままにしておきました。天使たちは列をなして、あなたの魂を喜びとともにお待ちしています」と言った。預言者様は「感謝はただアッラーのみにあります。私に吉報を教えてください！アッラーのところで、私のために何があるのですか？」と尋ねた。ジブリール様は「預言者様！あなたがいらっしゃるため、天国の扉は開かれ、天国の川は流れ、

天国の木々は茂り、天女たちは飾り付けています」と答えた。
預言者様は再び「感謝はただアッラーのみにあります。ジブリールよ、私に別の吉報をもたらすのです！」とおっしゃった。ジブリール様は「預言者様！ あなたは終末の日に初めて仲裁がなされる方であり、初めて仲裁が認められる方なのです」と答えた。愛すべき預言者様が再び「感謝はただアッラーのみにあります。ジブリールよ！ 私に別の吉報をもたらしなさい！」とおっしゃると、ジブリール様は「預言者様！ 何についてでしょうか？」と尋ねた。これに対して預言者様は「私のすべての心配や、悲しみ、悩みは私の後に残した共同体のことです」とおっしゃった。ジブリール様は「アッラーの最愛の者よ！ アッラーは終末の日、あなたが満足するまで共同体の人々を赦します。すべての預言者たちより先にあなたを、すべての共同体よりも先にあなたの共同体を天国へと入れるのです」と答えた。愛すべき預言者様はジブリール様に「アッラーに三つの願いがあります。一つ目は私の共同体の人々の罪について、私を仲裁者としてもらうこと、二つ目は共同体が現世で行った罪による罰を与えないこと、三つ目は木曜と月曜の共同体の行為を私に知らせることです。（もし共同体の行為が善であれば、祈念をしてアッラーはそれを受け入れるでしょう。その行為が善でなければ、仲裁をし、彼らの行為が書かれた帳簿からそれを消すように望むのです）」とおっしゃった。ジブリール様は、アッラーがこの願いを三つとも認めたということを知らせた。こうして愛すべき預言者様は気分を楽にした。
アッラーが「最愛の者よ！ 共同体にこれほどまでの愛情や憐みを示すことを、神聖な心に誰が教えたのですか？」と聞いた。これに対して預言者様は「私を創造し、私を育てたアッラーです」と返事をした。アッラーも「あなたの共同体に対しての私の慈悲や憐みは、あなたより千倍も多いのです。彼らのことを私に委ねなさい」とおっしゃった。その後、愛すべき預言者様は「今や楽になりました。イズラーイールよ！ 命じられた任務を行いなさい！」とおっしゃった。
イズラーイール様は、任務を行うため万物の王の前へと近寄った。愛すべき預言者様は、脇にある水入れに神聖な両手をつけ、濡れた手で神聖な顔を拭き「ラー・イラーハ・イッラッラー！ アッラーよ！ レフィキ・アーラー！…」とおっしゃった。イズラーイール様は万物の王の神聖な魂を抜き始めた。預言者様の神聖な顔色は赤くなったり、白くなったりした。イズラーイール様に「共同体の人々の魂も、このように激しく困難な形で取るのですか！」とおっしゃると、イズラーイールは「預言者様！ 他には誰もこれほどまでに簡単に魂を抜くことはないのです」と返事をした。最期の瞬間にあっても共同体のことを忘れることのなかった愛すべき預言者様は「イズラーイールよ！ 私の共同体の人々に行う激しさを私にするのです！ なぜなら彼らは弱いのです、耐えられないでしょう…」とおっしゃった。その後「ラー・イラーハ・イッラッラー！ レフィキ・アーラー！」とおっしゃって、神聖な魂を差し出し、天の最も高いところへと昇っていった…

アッサラート・ワッサラーム
アレイカ・ヤー・ラスールッラー！
アッサラート・ワッサラーム
アレイカ・ヤー・ハビーバッラー！
アッサラート・ワッサラーム
アレイカ・ヤー・サイイダル
アッワリーナ・ワル・アーヒリーン！
シャファート・ヤー・ラスールッラー！
ダヒーレク・ヤー・ラスールッラー！

ジブリール様は預言者様に「アッサラーム・アレイクム、アッラーの預言者様よ！ 私が求め、願うのはあなたのこ

とでした。もはや私がこの世には来ることはありません」と言って別れを告げた。

預言者様の神聖な魂が高みへと上ると、ファーティマ様や預言者様の妻たちが、声を上げて泣き始めた。

このとき、どこから来るのか分からないある声が「預言者様の家族よ！アッサラーム・アライクム、ワラフマトゥラーヒ・ワバラカートゥフ」と言って挨拶をした。そして『誰でも皆死を味わうのである。だが復活の日には、あなたがたは十分に報いられよう。（またこの日）業火から遠ざけられた者は、楽園に入れられ、確実に本望を成就する。この世の生活は、偽りの快楽に過ぎない。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一八五節）という一節を詠んだ。その後、彼らを慰め「アッラーの美徳や恵みを頼りにするのです。それを抱き、アッラーに期待しなさい。泣き叫ぶことはしないのです。真の不幸というのは善行を得られない者のことなのです」と言って、冥福を述べた。

その場にいる皆がこの言葉を聞き、挨拶を返した。この言葉を述べていたのはフズル様であった。

預言者様に亡くなった徴が見られると、ウンム・アイマンは娘に知らせを送った。ウサーマ、ウマル様、アブー・ウバイダ様はこの悲しい知らせを受けると軍から離れて預言者モスクへとやって来た。アーイシャ様や他の妻たちが泣いているのを聞いて、モスクにいる教友たちは驚いた。何があったのか理解できず、頭を打たれたようになった。アリー様は死んだように動けなくなっていた。ウスマーン様も言葉を失っていた。アブー・バクル様はそのとき自分の家にいた。走って来て、すぐに預言者様の部屋に入った。世界の誇りである人物の顔の覆いを開けて、亡くなったのを見た。神聖な顔や身体全体は、優美で清らかなな光のように輝いていた。「亡くなっても、生きていたときと同じように美しいのです、預言者様」と言って、口づけをした。たくさんの涙を流した。そして再び神聖な顔を覆った。家にいる人々を慰め、モスクへと向かった。ミンバルに上がって教友たちに説法を行った。アッラーに感謝や称賛を行い、預言者様に挨拶を送った後「ムハンマド（アライヒッサラーム）を崇めていたのであれば、ムハンマド（アライヒッサラーム）は亡くなりました。しかし、アッラーを崇めていたのであれば、アッラーは生き、永遠に死にません」と述べ、その後クルアーンから『ムハンマドは、一人の使徒に過ぎない。使徒たちはかれの前に逝った。もしかれが死ぬか、または殺されたら、あなたがたは踵を返すのか。誰が踵を返そうとも、少しもアッラーを損うことは出来ない。だがアッラーは、感謝（してかれに仕える）者に報われる。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一四四節）という一節を詠んだ。教友たちに忠告を行い、落ち着かせるようにした。そして皆が、預言者様が亡くなったことを理解した。悲しみや苦悩が教友たちの心に毒矢のように刺さっていた。目からは涙が流れ、寂しさで心は焼かれていた。

教友たちの最初の仕事は、すべてを管理するため、アブー・バクル様をカリフに選んだことだった。彼に誓いを立てて従い、その命令によって行動をすることとした。

預言者様はヒジュラ十一年目の年（西暦六三二年）、ラビーウ・ル・アウワル月の十二日の月曜日の午後、来世へと旅立った。そのとき、太陰暦によれば六三歳、太陽暦によれば六一歳であった。

アリー様、アッバース様、ファドゥル・ビン・アッバース様、クサム・ビン・アッバース様、ウサーマ・ビン・ザイド様、サーリフ様が預言者様の身体を清めた。清めるときには神聖な身体から、大変に芳しいムスクの香りが広がった。今まで誰もこのような香りを嗅いだことはなかった。その後、白布に包んだ。そして、担架に乗せてモスクへと連れていった。以前、愛すべき預言者様が知らせたとおり、いったん全員がモスクから出た。天使たちが一団一団やって来て礼拝を行った。天使たちの礼拝が終わると、誰が言っているのか分からない声がして「入って預言者様の礼拝を行いなさい」と聞こえてきた。これに従って教友たちは中に入り、先導なしに愛すべき預言者様の礼拝を行った。全員が終わるには、水曜日の夕方まで続いたのだった。

教友たちが愛すべき預言者様の神聖な墓を掘るにあたっては、アブー・バクル様が伝えたこのハディース「預言者たちは魂を召されたところで埋葬される」に従うことになった。アブー・タルハ・イ・アンサーリ様がラフドの形（墓を掘った後、さらに遺体が入るほどにキブラ側に掘る形式）で掘った墓に、真夜中に近い時刻に埋葬された。アッバースの息子のクサムは墓での仕事を終わらせ、墓から最後に上がった人物だった。彼はこのように伝えている。「預言者様の神聖な顔を最後に見たのは私です。神聖な唇が動いていました。耳を近づけると『アッラーよ、我が共同体よ…。

アッラーよ、我が共同体よ…』と言って懇願していました」
　愛すべき預言者様が来世に旅立った日、アブドゥッラー・ビン・ザイド様は「アッラーよ！　私はこの目を、あなたが愛する預言者様の神聖な御光のある顔を見るためだけに必要としていました。彼が見られなくなった今、もはや必要ではありません。アッラーよ、私の目をお取りください」と願った。そして目が見えなくなったのだった…

背教

　預言者様が亡くなった後、宗教に背く行為が始まった。このような行動は大きな変化をもたらした。これらと戦うにあたっては、アブー・バクル様の多大な尽力があった。もし、このような力のある人物がいなかったら、この危機がすべてのアラビア半島に広まる危険性があった。これについてアーイシャ様は「預言者様が亡くなると、アラブ人は宗教から背き始めました。仲違いが広がりました。父が背負った重責がもし山に乗っていたとしたら、その山は潰れていたことでしょう」と語っている。
　アブー・フレイレ様も「もし、アブー・バクルがいなかったら、ムハンマド（アライヒッサラーム）の亡くなった後、共同体は滅びていたことだろう」と述べている。
「自身以外に神のないアッラーに誓って、アブー・バクルがカリフの任務を受けなかったら、アッラーに礼拝する者はいなくなっていたことだろう」とも言って、この言葉を三度も繰り返した。
　アブー・レジャー・ウル・ウターリーディーはこのように語っている。「マディーナに入ると人々が集まっており、ある一人が『私はあなたのために犠牲となりましょう。アッラーに誓ってあなたがいなかったら、間違いなく私たちは滅亡していたでしょう』と言って、ある人の頭に接吻していたのを見ました。
『この接吻している人と、された人は誰ですか？』と尋ねました。すると『宗教に背いた者と戦うにあたって、アブー・

バクルの頭をウマルが接吻したのです』と言われるのを聞きました」
　アーイシャ様はこのように語っている。「アラブ人が宗教から離れていった日々、父が刀を抜いてラクダに乗ると、アリー様が隣に行ってくつわを取り『あなたに預言者様がウフドの戦いでおっしゃっていた言葉を言いましょう。刀を鞘に収めるのです。自分を危険にさらし、私たちを悲しみに落としてはなりません。アッラーに誓って、あなたに何かの危害が及んだら、あなたの後、もうイスラームが存続していかないのです』と言っていました」（後にアリー様はアブー・バクル様がカリフになることに反対したとする人々が現れるが、もしそうであるなら、このときアブー・バクル様を行かせ、亡くなることを願ったはずである。そうすれば、自分がカリフになる道が開けていたからである）
　また、アーイシャ様はこれらの日々について次のように語っている。「預言者様が亡くなった後、アラブ人の大勢が宗教から離れていきました。ユダヤ人やキリスト教徒、異教徒が再び出始めたのです。
　ムスリムたちは冬の夜に雨に降られ、ばらばらになった羊のようになっていました。このとき、マッカの住民の大勢がイスラームから離れる準備をしていました。このときスヘイル・ビン・アムルがカアバの扉に立ち、マッカの人々に話しかけました。彼らに大きな影響を与える演説を行い、彼らの迷いや宗教から離れることを防いでいました」
　イスラームの歴史において、宗教を拒絶し、宗教から離れることを『イルティダード』といい、このような行動を行う者のことは「ヌルテジ」と呼ばれる。これらの言葉は、このような日々の後から使われるようになったものである。
　預言者様が亡くなった後、異教徒やユダヤ人、キリスト教徒の扇動によって、部族ごとに宗教から離れ始めた。
　スヘイル・ビン・アムル様はカアバの扉のところに立ち、マッカの住民に声をかけた。彼らにこのように語ったのである。
「マッカの人々よ！　あなた方はムスリムとなった最後の一団でした。決してムスリムから離れる最初の一団となってはなりません。アッラーに誓って、預言者様がおっしゃっていたように、アッラーがイスラームを完遂させるのです。かつて預言者様が、今私が立っていたところに一人で立ち、こうおっしゃっていたのを聞きました。『私とともに、ラー・

イラーハ・イッラッラー、と言えば、あなた方を見てアラブ人はこの宗教に入り、アラブ人以外の者はあなた方に税を払うようになるのです。アッラーに誓ってキスラーやカイセルの財産がアッラーの道で使われるのです』

かつて嘲笑していた者が、今は税や施しの徴収人となっているのを、あなた方も目にしているでしょう。アッラーに誓って、他のことも現実となるのです。アッラーに誓って私には分かっています。太陽が昇ったり沈んだりするのが続く限り、この宗教は続きます。あなた方の間にいる、あのような人々に騙されてはいけません。私が知っているこれらのことは、実は彼らも分かっているのです。

しかし、ハーシム家の人々に対する嫉妬心で彼らの心は閉じられています。

人々よ！私はクライシュ族の中では、陸でも海でも、最も多くの乗り物を持つ者です。あなた方の長に従って、ザカートをその人に払うのです。

しかし、もしイスラームを最後まで続けないというのであれば、あなた方が支払ってきたザカートを、私が代わって返すことを保証しましょう」彼はそう語って泣いたのだった。

これを聞いて、人々は落ち着きを取り戻していった。

スヘイル・ビン・アムルが行ったこの演説により、マッカの住民が宗教から離れるのが防がれると、マッカの知事であるアッターブ・ビン・エスィドが再び人々の前に出られるようになった。

スヘイル・ビン・アムルがバドルの戦いで不信仰者たちとともに参加をして捕虜となったとき、預言者様はウマル様に「彼は非難されることのないある場所に立ち、人々に演説をすることになると思われます」とおっしゃったとされている。ここで示されたことは、この演説であったことが分かったのだった。

ウマル様はスヘイルのこの演説を聞いたとき、預言者様がスヘイル様についてかつて言っていたその言葉を思い出した。そして預言者様に「私は認めます。あなたは必ずや預言者です」とつぶやいたのだった。

墓での生活

墓に生きること

預言者たちは、私たちの理解できない生活を墓で送り、墓で生き続けている。聖者や殉教者たちも生き続けている。生きているという言葉は、言葉上の意味だけではない。実際に生きているのである。イムラーン家章（アーリ・イムラーン）の第一六九節では『アッラーの道のために殺害された者を、死んだと思ってはならない。いや、かれらは主の御許で扶養されて、生きている。』と啓示されている。

この節では殉教者たちが生きていることが知らされているが、当然ながら、預言者たちは殉教者たちよりも優れており、高い地位を持っている。あるイスラーム学者によれば、すべての預言者は殉教者として亡くなったとされており、預言者様も最期の病において「ハイバルで食べた料理の痛みを常に感じていました」とおっしゃっている。このハディースによれば、預言者様が殉教者として亡くなったことになる。

これを根拠として、預言者様も他の殉教者同様、墓で生きていることになるのである。『ブハーリー』『ムスリム』の各ハディースでも、預言者様がこのようにおっしゃったと伝えられている。「ミウラージュの際、預言者ムーサーの墓のところを通りかかりました。預言者ムーサーが墓の中で立ったまま礼拝を行っていました」

また、別のハディースによれば、預言者様は「アッラーは、預言者たちの身体を腐らせないように土に命じました」とおっしゃっている。このことが事実であることは広く学者たちに認識されている。『ブハーリー』『ムスリム』の各ハディースでは「アッラーがミウラージュの際に、すべての預言者たちを預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）のところへ行かせた。そして預言者様が彼らの先導として二回の礼拝を行った」と記されている。

礼拝は立礼や跪拝を伴う。したがって、前述のハディースは生きた身体を保っていることを証明しているのである。

預言者ムーサーが墓で礼拝を行ったことも、このことと同様である。『ミシカート』という書物の最後の巻にあるミウラージュの部の初めの章の最後には、『ムスリム』からアブー・フレイレが伝えたハディースを挙げて『『アッラーが私に見せました。預言者ムーサーが立ったまま礼拝を行っていました。痩せている人物でした。髪は縮れてはいなかったし、垂れ下げてもいませんでした。シェンエ族の勇者のようでした。預言者イーサーはウルウェ・ビン・マスード・セカーフィに似ていました』とおっしゃった』と伝えている。

シェンエは、イエメンにある二つの部族の名前である。このハディースでは、預言者たちがアッラーのもとで生きていることを示している。彼らの遺体は魂のように優美であり硬くはないのである。物質の世界でも魂の世界でも見ることができる。

したがって、預言者たちの魂や身体は見ることができる。ハディースでは、預言者ムーサーと預言者イーサーが礼拝していることを知らせている。礼拝するには動きを伴うため、これらの動作にあたっては身体が必要となり、魂だけでは行うことができないのである。預言者様が預言者ムーサーについて「背は中背で肉質的ではなく痩せ型で、髪が整っている様子で見ました」とおっしゃっていたのは、魂ではなく身体を見ていたことを示している。

イマーム・ベイヘキはこのように伝えている。「預言者たちが墓に入った後、魂は遺体に戻ってくる。しかし、私たちがそれらを見ることはできない。天使たちと同じく、見ることができないのである。ただし、アッラーが許し、恵みを与えた優れた者は見ることができる」イマーム・スユーティもこのように伝えている。

「大勢の人が、預言者様の墓から、挨拶に対する返事が聞こえたことを確認している。他の墓でも挨拶への返事がされたことが確認されている」

あるハディースでは、預言者様が「私に挨拶をされると、アッラーは私の魂を返し、その挨拶に返事をするのです」とおっしゃっている。

イマーム・スユーティはこのように伝えている。「預言者様はアッラーを見つめており、身体の感覚は忘れられている。

しかし、あるムスリムが挨拶をすると、神聖な魂はこの状態から離れ、身体に感覚がある状態に戻るのである。現世でもこのようなことは少なくない。現世のことや来世のことを集中して考えていると、隣で何が話されているか聞こえなくなるものである。従って、アッラーを見つめる預言者様が他のことを聞くことがあるだろうか」

カドゥ・ヤド様は『シファー』と言う本において、スライマーン・ビン・スハイムからの伝承を挙げている。『ある夜、夢で万物の王を見ました。『預言者様よ！あなたに挨拶する者のことが分かりますか』と尋ねました。『はい。分かります。そして、彼らの挨拶に返事をします』とおっしゃっていました』

預言者たちが墓で生きていることを伝えるハディースは数多くある。これは互いを強く証明し合うものである。例えば預言者様は「私の墓のとなりで、私のために言われた挨拶が私には聞こえます。遠いところから挨拶は私に知らされます」とおっしゃっている。

このハディースは、アブー・バクル・ビン・アブー・シャイバが伝えたものである。また、このことは、主要ハディースの編者六人によっても記されている。

アブドゥッラー・ビン・アッバース様がイブニ・アビーッドゥンヤに伝えたところによると『『ある人が知り合いの人の墓に立ち寄って挨拶を送ると、亡くなった人はその人のことが分かり、返事をします。知らない人の亡骸に挨拶をすると、亡くなった方は喜び、そして返事をします』と預言者様がおっしゃっていた』とのことである。

預言者様は、全世界から同時に行われた挨拶に対して、どのように返事をするのかという疑問に対しては、昼頃、太陽が同時に数千の町を明るくさせるのと同じようなものである、という返事ができよう。

イブラーヒーム・ビン・ビシャル様は「ハッジが終わった後、預言者様の墓を訪ねるためにマディーナへと行きました。墓所の前で挨拶をしました。すると『ワ・アレイクムッサラーム』という返事が聞こえました」と言っている。

預言者様は「私は死んだ後でも生きていたときのように分かるのです」とおっしゃっている。別のハディースによると「預言者たちは墓の中で生きていて、礼拝を行います」とおっしゃっている。

ある信頼できる本には、聖者の名士の一人であるサイード・アフマド・リファイ様が、預言者様に対して行った挨拶の返事を大勢の聖者たちが受けたとしていること、アフマド・リファイ様自身が預言者様の神聖な手に接吻する名誉に与ったことが書かれている。

イマーム・スユーティは「高い地位を持つ聖者たちは、預言者たちを生きている様子で見ることができる。また、預言者様が預言者ムーサーを墓で生きていたように見たことは一つの奇跡である。聖者たちにとってもこのように見ることは驚異すべきことなのである。そして、驚異を信じないことは無知である」と著している。

イブニ・ヒッバーン、イブニ・マージェ、アブー・ダーウードが伝えるハディースによると『預言者様は『金曜日に私に多くの挨拶を送りなさい。それらは私に知らされます』とおっしゃった。『亡くなった後でも知らされるのですか?』と聞かれると

『土が預言者たちの身体を腐らせることはできません。一人の信者が私に挨拶をしたら、一人の天使が私に知らせ、共同体の誰其の息子があなたに挨拶をしました。そして、祈念を行いました、と言うのです』と答えた』とされている。

預言者様は存命中のとき、教友たちにとっては、アッラーの一つの慈悲であり大きな恵みであったように、亡くなった後でもすべての共同体にとって、大きな恵みなのである。善を開く道となるのである。

ベキル・ビン・アブドゥッラー・ミュゼイニが伝えているある話によると、預言者様は「私の人生はあなた方にとって善であります。あなた方は私に話し、私もあなた方に話しをします。私が死んだ後には、私の死もあなた方にとっては善となるのです。あなた方の行動は私に示されます。あなた方の善い行動を見たときにはアッラーに感謝をします。悪い行動を見たときには、あなたがたのために赦しや免罪を願い出るのです」とおっしゃった、という。

クサム・ビン・アッバース様は預言者様を埋葬するという名誉に与った。墓での任務を終え、墓からは最後に彼が上がった。このように話している。

「預言者様の神聖な顔を最後に見たのは私です。神聖な唇が動いていました。耳を近づけると『アッラーよ、我が共

同体よ…。アッラーよ、我が共同体よ…』と言っていました。

預言者様を見ること

預言者様のことを夢もしくは現実として見ることはできるかどうか、また、それができたとしたら、その見たものが本当に預言者様かどうかについて学者たちがさまざまな意見を述べている。

墓で生きていることが知らされた後、預言者様は自らを見ることができることについても言及されている。このことはハディースによって伝えられていることである。あるハディースによれば、預言者様が「私を夢で見た者は、生きているかのように見ることとなります」とおっしゃっている。

そのため、イマーム・ネベビー様は「預言者様を夢で見ることは、預言者様ご自身を見ることです」と言っている。また、ハディースによれば、預言者様が「私を夢で見た者は、真実を見ているのです。なぜならば、悪魔は私の姿になれないからです」とおっしゃっていることを伝えている。

イブラーヒーム・レカーニ様は次のように伝えている。「ハディース学者たちの意見は、預言者様を夢で見るように、現実でも見ることができるということで一致している。双方においてさまざまな例が挙げられている」これらのいくつかを例示してみよう…

ムイーヌッディン・イ・チェシティ様は、立ち寄った多くの場所で墓を訪ね、そこにしばらく留まっていた。行った場所で自分のことが分かって人々の話題になると、そこには長く留まらず静かに別のところへ移動するのだった。このような旅の一つにマッカがあった。マッカに来て、カアバを訪ねた後、しばらくマッカに滞在し、そこからマディーナへと移動した。預言者様の墓を訪ねたある日、墓所の中から『ムイーヌッディンを呼びなさい』という声が聞こえてきた。

これに対して墓守が『ムイーヌッディン！』と呼びかけた。いくつかのところから『はい』という声が聞こえてきた。そこで『どのムイーヌッディンを呼んでいますか？ ここにはムイーヌッディンという名の人が何人かいます』と言った。

墓守は墓へと戻っていった。すると二度『ムイーヌッディン・イ・チェシティを呼びなさい』という声が聞こえてきた。墓守はこの命令に従って、人々に向かって『ムイーヌッディン・イ・チェシティが呼ばれています』と呼びかけた。

ムイーヌッディン・イ・チェシティ様はこの言葉を聞くと、顔色が変わった。泣いて、涙を流しながら、挨拶をして預言者様の墓所へと近づき、礼儀正しく立った。このとき『クゥトゥブ・イ・メシャーイよ、中に入るのです』という声が聞こえてきた。

預言者様がこのようにおっしゃった。『あなたは私の宗教に奉仕する者です。あなたはインドに行かなければなりません。インドに行くのです。そこには、エジミールという町があります。そこで、私の子孫のサイード・フサインという名の者がいます。彼はそこへジハードや戦いのために行っていました。彼は今、殉教者となりました。エジミールは異教徒の手に渡ろうとしています。あなたがそこへ行くことにより、またその恵みとして、イスラームが広まり、異教徒たちは散って力をなくし、その影響力は消えるのです』その後、彼に一つのざくろを渡した。そして『このざくろを注意して見るのです。これを見れば行くところが分かるでしょう』とおっしゃった。

ムイーヌッディン・イ・チェシティ様は預言者様からもらったざくろを持ち、命じられたとおり見てみた。そこで東から西まですべてを見たのだった。

アフマド・リファイ様はハッジに行った。帰る際にマディーナで預言者様の神聖な墓所を訪ねたとき、次の詩を詠んだ。

「遠くにいました
あなたの土に口づけしようにも
自らは来られず
代わりに魂を行かせていました
今あなたを訪ねに
その恩恵が与えられました
神聖な手をお貸しください
最愛の人よ、私の唇が口づけできるように！」

詩が終わると、預言者様の墓から神聖な手が見られた。サイード・アフマド・リファイは、非常にかしこまり、丁寧に預言者様の神聖な手に口づけをした。その場にいた者は全員驚きながらこの出来事を目撃した。

預言者様の神聖な手に口づけした後、ラブダ・イ・ムタッハラ（預言者モスクの中の、預言者様の墓所と当時のミンバルの間の場所）の扉のところで横になった。扉の敷居に横になり、涙を流しながら、その場にいる人に「私の上を踏んで渡るのだ」と懇願した。他の人々は別の扉から出ざるを得なかった。この驚くべき出来事は大変有名な話となり、人から人へと現在に至るまで伝わってきたものである。

イブニ・アビディーン様は宗教に従うことにあたって大変有名な人であり、驚くべき出来事やこれに類する話が多くある。一日の五回の礼拝で、タヒーヤートを詠んだとき、預言者様を見ていたという。見なかったときはその礼拝を改めて行っていた。

最大のイスラーム学者の一人である、イマーム・ラッバーニー・アフマド・ファールキ・セルヘンディ様はこのように述べている。「ラマダーンの最後の十日間に、大変美しいことが起きました。床で横になっていました。目を閉じていると、枕元に誰かが来て座ったのを感じました。見ると預言者様でした。

このようにおっしゃいました。『あなたのために証書を書きました。誰にもこのような証書は書きません』見ると、その証書には、現世の恵みや来世の救いが書かれていました」

アブドゥルカーディル・イ・ゲーラーニ様は『グンエ』という本で、イブラーヒーム・テミミ様からの伝聞をこのように伝えている。

「フズル様が私に次のように言いました。『もし、夢で預言者様を見たいのであれば、夕方の礼拝を終わらせた後、夜の礼拝までは誰とも話さず、夕方の礼拝の後にアッウワー・ビン礼拝（推奨される自発的礼拝の一つ）を行いなさい。二回の跪拝ごとに一度のタスリームを行うのです。

毎回の礼拝ごとに、一度『開端章（アル・ファーティハ）』、七度『純正章（アル・イフラース）』を詠みなさい。夜の礼拝を集団で行った後で家に戻り、ウィトルの礼拝を行いなさい。寝るときにはさらに二回の礼拝を行い、毎回『開端章（アル・ファーティハ）』と『純正章（アル・イフラース）』を七度詠むのです。礼拝が終わった後、跪拝して七度アッラーに赦しを求め、七度『スブハーナッラーヒ・ワルハムドゥ・リッラーヒ・ワラー・クゥエテ・イッラー・ビッラーヒル・アリーイル・アズィーム』と言いなさい。その後、額を跪拝から上げ、座ったまま両手を上げて『ヤー・ハイユ・ヤー・カイユーム、ヤー・ゼルジェラーリ・ワル・イクラーム、ヤー・イラーハル・アウワリーナ・ワル・アーヒリーン・ワ・ヤー・ラハマーン・アッドゥンヤ・ワル・アーヒレティ・ワ・ラヒメフマ、ヤー・ラッビ、ヤー・ラッビ、ヤー・ラッビ、ヤー・アッラー、ヤー・アッラー、ヤー・アッラー』と言いなさい。

その後で立ち上がって、先と同じ祈念をしなさい。さらに跪拝して同じ祈念をしなさい。続いて額を跪拝から上げ、キブラに向かって寝るのです。眠くなるまで預言者様に挨拶を送るのです』

私は『この祈念を誰に教わったのか、私に知らせてもらえませんか』と尋ねました。フズル様は『私を信じないのですか？』と言いました。『預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）を真実の預言者として送ったアッラーに誓って、あなたを信じます』と私は言いました。

フズル様は『私は預言者様がこの祈念を教え、遺言を残した場にいました。この祈念は、彼が教えた人から教わったのです』と言いました。

私はフズル様の言うとおりに行いました。そして床で預言者様に挨拶を送りました。預言者様を見る喜びで眠れませんでした。朝まで寝られなかったのです。

朝の礼拝を行い、太陽が昇るまで待っていました。その後、ドハー、つまり午前中の（自発的な）礼拝を行いました。自分に『夕方になったら昨夜行ったことをもう一度してみよう』と言いました。そのとき、どうやら寝てしまったようでした。夢で天使たちが訪れ、私を天国へと連れていきました。そこでルビーやエメラルド、真珠で出来た東屋や宮殿、天国の飲み物であるはちみつとミルクの川を見ました。

私を天国へ連れていった天使たちに『その東屋は誰のものですか？』と尋ねました。天使たちは『あなたがしていたことを行う者のためです』と答えました。天国の食べ物や飲み物を飲んだ後、天国から出ました。そして私を天国から元の場所へと連れて来ました。

その後、預言者様の隣に並んだ七十人の預言者たちが、東から西に至るまで七十列になった天使たちとともに私に挨拶を送り、手を取りました。私はそのとき『預言者様！　フズル様があのことをあなたから聞いたと話しました』と言いました。預言者様は『フズルは真実を語ったのです。話したことは本当です。フズルは地上における最大の学者です。聖者たちの長です。地上におけるアッラーの兵士の一人です』とおっしゃいました。私はまた『預言者様！　これを行ったら、私が見たもの以外に得られるものは何かありますか？』と尋ねました。『あなたが見たもの、あなたに恵まれたもの以上に何があるというのでしょう。あなたは、自分の天国での場所や地位を見たのです。天国の果実を食べ、飲み物を飲みました。私とともに天使たちや預言者たちを見ました。天女も見ました』とおっしゃいました。

『預言者様、私が行ったことを実行して、私が夢で見ていたものが見られない者は、この恵みに与ることができないのでしょうか？』と尋ねました。『私を真実の預言者として送ったアッラーに誓って、その人の行った大きな罪が赦さ

れます。アッラーのその人に対しての罰はなくなります。私を真実の預言者として送ったアッラーに誓って、このことを行えば、夢で私を見なくとも、あなたに与えられたことはその人にも与えられるのです。空からはある声がして、アッラーはこのことを行った者や、東から西の間にいるムハンマド（アライヒッサラーム）の共同体を赦します、と聞こえてくるのです』とおっしゃいました。

さらに『預言者様！ あなたの姿や天国を私が見たように、その人にもこれらが得ることができるのでしょうか？』と尋ねると『はい。すべてが与えられます』と答えました。『預言者様！ 男であっても女であっても、すべての信者たちにこの祈念を教え、そしてその善について知らせるのは適っていることでしょうか？』と尋ねると『私を真実の預言者として送ったアッラーに誓って、この礼拝はアッラーに愛された者として創造された人以外、行うことはないのです』とおっしゃいました」

夢で預言者様を見る者は、実際に預言者様を見ていることとなる。なぜなら、悪魔は預言者様の形にはならないからである。しかし、悪魔は別の姿になることは可能であるため、預言者様を知らない者が、その区別をするのは容易なことではない。

何人かの学者は「預言者様をいろいろな姿で見ることは、預言者様を見ることと同じである。しかし、これはその人の宗教における不足を表している。実際の預言者様を夢で見て、信者として死んだ者こそが天国へと行くのである」と述べている。

アブー・フレイレ様は預言者様が語ったという次のハディースを伝えている。『ある人が木曜日の夜、二度の礼拝を行い、そのいずれも『開端章（アル・ファーティハ）』と『アーヤ・アル・クルスィー』（雌牛章（アル・バカラ）第二五五節）を一度、『純正章（アル・イフラース）』を十五回詠んで礼拝の後に千回『アッラーフンマ・サッリ・アラー・ムハンマディン・ネビーイルウンミーイ』と言うと、翌日の金曜日が来る前に、私を夢で見るでしょう。その人の以前の、そして、将来の罪が赦されます。天国は私を見る者のためにあるのです』

預言者様の墓所への訪問

万物の誇りはこのようにおっしゃっている。「私が死んだ後に、誰かが私のところに訪ねに来たら、私が生きていたときに訪ねたのと同じことになります」また、『ミルアト・イ・メディーナ』という本で伝えられているハディースによれば、預言者様は「私の墓を訪ねに来る者には、私の仲裁が与えられます」ともおっしゃっている。このハディースをイブニ・フゼイメとベッザル、ダーレ・クトゥニや、タベラーニが伝えている。ベッザル様の伝える別のハディースによると、預言者様は「私の墓を訪ねる者に、私の仲裁が許されます」とおっしゃっている。

『ムスリム・イ・シェリフ』及びアブー・バクル・ビン・メッカーリの『ムージェム』という本で伝えられているハディースによると、預言者様は「ある人が私を訪ねに来て、他のことのための目的がなかったのであれば、審判の日、その人に仲裁が与えられることとなります」とおっしゃっている。このハディースでは、預言者様自身を訪ねるためにマディーナに来る人々に仲裁が与えられると知らされているのである。

ダーレ・キュトゥニが伝える別のハディースによると、預言者様は「ハッジを行い、私を訪ねに来ない者は、私を傷つけることになるでしょう」とおっしゃっている。預言者様が訪れてもらいたい理由というのは、共同体がこれにより善を得られるからである。

あるフィクフ（イスラーム法）の学者たちが、ハッジを終わらせた後、マディーナに来て預言者モスクで礼拝を行った。そして、ラブダ・イ・ムタッハラやミンバル、墓所、預言者様の座ったところや歩いたところ、身体を寄りかけたところ、啓示が下りたときに寄りかかっていた柱、モスクが作られたときや修理されたとき働いた者たちや財を出した教友たち、あるいはタービウーン（教友の後継世代で、教友から預言者様の言行を間接的に聞いた人々）の歩いたところを訪ねるという恵みに与った。彼らの後を辿って、他の学者たちや敬虔な者たちは、ハッジの後でマディーナを訪れ、フィクフの学者たちがしたことを行うようになった。かつてのように、現在でもハッジに行く人は、このことに従って、

マディーナを訪ねるのである。

ここはアッラーが愛する者の場所、ムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）の居場所
アッラーはいつもここを見る、だから礼儀正しくするのだ
ナービよ、目を覚ませ。この部屋にはあらゆる礼儀を保って入るのだ
なぜならば、ここはいつも天使たちが周回し、預言者様を訪ねている場所なのだ…

ナービ

イスラーム学者の太陽である、アブー・ハニーフェ様は最も優れた善行として預言者様の墓所を訪ねることを挙げ、推奨される行いの一つであると語っている。

預言者様の墓所を訪ねた人は、多くの挨拶をする必要がある。行われたこの挨拶は預言者様に届けられることがハディースによって伝えられている。預言者様を訪ねる際の作法は次のように伝えられている。

マディーナの街が遠くから見えてきたとき、預言者様に挨拶を送る。その後「アッラーフンマ・ハーザー・ハレム・ネビーイケ、ファジュアルフ・ヴィカーエテン・リ・ミネンナル・ワ・エマーネン・ミナルアザーブ・ワ・スーイルヒサーブ」と言う。可能であれば、街やモスクに入る前に大浄を行う。そして香水をつける。新しい清潔な服を着る。なぜなら、このようなことは敬意を示し尊敬を表す印だからである。マディーナに謙虚さや厳粛さ、心の平穏をもって入っていく。「ビスミッラーヒ・ワ・アーラー・ミッレティ・ラスールッラー」と言った後、『夜の旅章（アル・イスラーゥ）』の第八〇節を詠む。さらに「アッラーフンマ・サッリ・アラー・ムハンマディン・ワ・アラー・アーリ・ムハンマド。ワウフィル・リ・ズヌービ・ワフタ・リ・アブワーベ・ラフメティカ・ワ・ファドゥリカ」と言って預言者モスクへ入る。その後、預言者様のミンバルのもとで、ミンバルの柱が右側に来るようにして、二度のタヒーヤトゥ・ウル・マスジードの礼拝を行う。

愛すべき預言者様はこの場所で礼拝を行っていた。また、ここは預言者様の墓所とミンバルの間である。ハディースによれば、預言者様は「私の墓とミンバルの間は天国の庭の一つです。私のミンバルは（カウサルの）池のほとりにあります」とおっしゃっている。その後、訪れた者は、預言者様の神聖な墓所を訪ねるという恵みに巡り合ったことをアッラーに対して跪拝する。祈念を行った後で立ち上がり、預言者様の墓所へと移動する。そして、キブラを背にし、預言者様がいらっしゃるところから二メートルほど離れた場所で礼儀正しく立つようにする。それ以上は近付かない。謙虚や謙遜の気持ちをもって、アッラーがクルアーンで命じられたように、預言者様が生きているのと同様、その威厳を前にしているように礼儀正しくしていなければならない。厳粛さと謙虚さを決して忘れてはならない。手は墓所の壁につけず、離れたところで礼儀正しく立っていることが尊敬を表すのに最もふさわしいあり方である。礼拝しているときと同じ形で立っているようにする。

預言者様の神聖で優美な姿を思い描くようにして、また、自分が知っている言葉や挨拶、祈念を行い、それを聞いてくださっている、そして、それに返事が行われている、さらに、アーミーンと言ってくださっていると考えるようにする。預言者様は「私の墓で挨拶を行う者のことが聞こえます」とおっしゃっているのである。また、ハディースによれば、預言者様の墓には一人の天使が代理として存在し、その天使が共同体の者たちの挨拶を預言者様に伝えていると知らせている。その後次のように祈念を行う。「アッサラーム・アレイカ・ヤー・セイイディ・ヤー・ラスールッラー！アッサラーム・アレイカ・ヤー・ネビーヤッラー！アッサラーム・アレイカ・ヤー・サフィーヤッラー！アッサラーム・アレイカ・ヤー・ハビーバッラー！アッサラーム・アレイカ・ヤー・ネビーイェルラハメティ！アッサラーム・アレイカ・ヤー・シェフィーエル・ウンメティ！アッサラーム・アレイカ・ヤー・サイード・アル・ムルセリーン！

アッサラーム・アレイカ・ヤー・ハーテメン・ネビーイン！
アッラーがあなたに最も高い褒賞を与えられますように。私は認めます。あなたは預言者の任務を果たしました。課せられたことを行いました。共同体に忠告を与えました。亡くなることがあなたに近づくまで、アッラーの道においてジハードを行いました。アッラーがあなたに終末の日まで挨拶を送りますように。預言者様！ 私たちはあなたのもとへ遠いところから来ました。あなたの墓を訪ねる名誉に与り、あなたに対する義務を行い、あなたが過ごした場所を見たり、あなたを訪ねたりすることによって恩恵に与り、アッラーのもとで私たちに仲裁を求めるために来ました。預言者様！ あなたは仲裁する方であり、仲裁が受け入れられる方でもあります。マカーム・マハムードが、あなたのために約束されています。

クルアーンでは、アッラーが『われが使徒を遣わしたのは、唯アッラーの御許しの許に服従、帰依させるためである。もしかれらが間違った時あなたの許に来て、アッラーの御容赦を願い、使徒が、かれらのために御赦しを祈るならば、かれらはアッラーが、度々許される御方、慈悲深い御方であられることが分かるであろう。』（婦人章（アン・ニサーア）第六四節）とおっしゃられています。私たちはあなたの前に上がりました。しかし、私たちは自分自身に対して罪を犯しました。罪が赦されるよう願います。

預言者様！ アッラーのところでは私を仲裁してください預言者様よ！ あなたのスンナを行っているときに私たちの魂を取っていただくようアッラーに願ってください。明日、審判の日に人々が集まる場所に、預言者様とともに入り、あなたのカウサルの池に来て、そこから飲むことができるよう、アッラーに願ってください。預言者様！ あなたの仲裁を求めます」さらにクルアーンから『かれら（移住者、援助者）の後に来た者たちは、（祈って）「主よ、わたしたちと、わたしたち以前に信仰に入った兄弟たちを、御赦し下さい。信仰している者に対する恨み心を、わたしたちの胸の中に持たせないで下さい。主よ、本当にあなたは、親切で慈悲深くあられます。」と言う。』（集合章（アル・ハシュル）第十節）を詠むべきである。

その後、挨拶を預かった人たちからの挨拶を伝え「アッサラーム・アライカ、預言者様。誰某がアッラーのところであなたに仲裁をしてもらえるよう願っています。その人やすべてのムスリムの仲裁をしてください」と言って、思う限りサラワート（預言者様に対する満足感や忠誠を表して行う祝福の言葉）を詠む。続いて、五十センチほど右に移り、アブー・バクル・スィッディーク様の墓所の方へ行き「アッサラーム・アライカ、ヤー・ハリーフェテ・ラスールッラー！ アッサラーム・アライカ、ヤー・ラフィーカフ・フィルガール！ アッサラーム・アライカ、ヤー・エミーナフ・アラル・エスラール！ アッラーがこの共同体の先導として、あなたに最も高い褒賞を巡り合わせますように。あなたは預言者様の後、もっともふさわしい形でカリフとなりました。預言者様の偉大なスンナを最善の形で続けたのです。宗教に背く者や、正しい道から外れた者と戦いました。常に事実を語りました。亡くなるまで真実の道にいる人々を助けました。アッラーの挨拶や慈悲、そして恵みがあなたに与えられますように。アッラーよ！ あなたの慈悲により、彼への愛情をもったまま私たちの魂をお取りください。彼のところへ訪れたことを無としないでください」と祈念を行う。

さらに、五十センチほど右に移り、ウマル様の墓の方へ行き「アッサラーム・アライカ、ヤー・アミール・アル・ムーミニーン！ アッサラーム・アライカ、ヤー・ムズィヒル・アル・イスラーム！ アッサラーム・アライカ・ヤー・ムクスィール・アル・アスナーム！ アッラーがあなたに最も高い褒賞を与えますように。あなたは生きていたときも、亡くなった後もイスラームやムスリムたちを助けました。孤児の保護者となりました。親戚たちに良く接しました。ムスリムたちが満足するような、そして正しい道にいる者にとっても人々にとっても、正しい道に導く案内者となりました。彼らの物事を整えました。貧乏な人を豊かにし、傷ついたところを治しました。アッラーの挨拶や慈悲、恵みがあなたの上にありますように」と言う。

その後、アブー・バクル様とウマル様に対して「アッサラーム・アレイクマ・ヤー・ダジーアイ・ラスーリッラー・ワ・ラフィーカイヒ・ワ・ワズィーレイヒ・ワル・ムシーレイヒ・ワル・ムアービネイニ・ラフ・アラル・クヤーミ・フィッディーニ・

ワル・カーイメイニ・バーダフ・ビメサーリヒ・イル・ムスリミーン。アッラーがあなた方に最良の褒賞を与えますように。預言者様が私たちに仲裁を行ってくださることをアッラーに願います。そして、ハッジを受け入れて、私たちをイスラームの宗教にいるままで命を取り、イスラームの宗教にいるまま甦らせて最後の審判の日に、預言者様に近い人々の間にいられるように、あなた方の力もお借りします」と言う。

　さらに、自分自身や両親のこと、祈念を求めた人々や、あらゆるムスリムに対して祈念を行う。続けて、預言者様の神聖な墓所に向かって「アッラーよ！『われが使徒を遣わしたのは、唯アッラーの御許しの許に服従、帰依させるためである。もしかれらが間違った時あなたの許に来て、アッラーの御容赦を願い、使徒が、かれらのために御赦しを祈るならば、かれらはアッラーが、度々許される御方、慈悲深い御方であられることが分かるであろう。』（婦人章（アン・ニサーア）第六四節）と下されています。アッラーよ！あなたの偉大な言葉に基づき、あなたの命令に従って、愛すべき預言者様があなたの前で私たちの仲裁を行うよう求めます」と願った後、先に詠んだ『かれら（移住者、援助者）の後に来た者たちは、（祈って）「主よ、わたしたちと、わたしたち以前に信仰に入った兄弟たちを、御赦し下さい。信仰している者に対する恨み心を、わたしたちの胸の中に持たせないで下さい。主よ、本当にあなたは、親切で慈悲深くあられます。」と言う。』（集合章（アル・ハシュル）第十節）と「ラッバナー・フィル・ラナー・ワ・リ・アーバーイナー・ワ・リ・ウンマハーティナ・ワ・リ・イフワーニナル・ラズィーナ・サバクナ・ビル・イマーニ」及び「ラッバナー・アーティナ…」と「スブハーナ・ラッビカ…」というクルアーンからの節を詠んで、預言者様への訪問を終わらせる。

　その後、預言者様の墓所とミンバルの間にある、アブー・ルバーベ様が自分を縛ってアッラーの赦しを願った柱のところへ行き、ここで二度の礼拝を行って、アッラーに赦しを願う。好きな祈念を行った後、ラブダ・イ・ムタッハラへ移る。ここは、四角い場所である。ここで思う存分礼拝を行ってから祈念や念唱をし、アッラーに感謝や称賛を行う。続いてミンバルのところへ行き、預言者様の恵みが自分に届くようにと、預言者様が説法を行ったときに神聖

な手を置いたところに自分の手を置く。ここで、二度の礼拝を行い、また、アッラーへの祈念も行う。アッラーの怒りに代えて、慈悲に救いを求める。その後、ハンナーネという柱のところへ行く。この柱は預言者様が説法をする際ミンバルに移ったとき、自分の置かれた状況を嘆いたため、預言者様が下りて来てなぜると落ち着いたという柱である。ここにいる間は、夜はクルアーンを詠み、アッラーを念唱したり、ミンバルや墓の近くで、心の中であるいは口に出して祈念をしたり、ラービタ（アッラーや預言者様、あるいは聖者の前に自分がいるように想いを馳せること）を行う。

　預言者様の神聖な妻たちの部屋がモスクに取り込まれる以前は、フジュレ・イ・サアーデト（妻たちの部屋のうちの預言者様の墓所のある部屋）のキブラ側には場所があまりなく、ムワジェヘ・イ・サアーデト（妻たちの部屋のキブラ側のこと）に向かって立つのは苦労を要した。そのため、訪れに来る人々は、ラブダ・イ・ムタッハラの壁の扉の前で、キブラに向かって挨拶をしていた。その後、イマーム・ゼイネル・アビディーンがラブダ・イ・ムタッハラを背にして、挨拶を行った。その後長い間このようにして訪ねられることになった。神聖な妻たちの部屋がモスクに取り込まれた後は、ムワジェヘ・イ・シェリフェ（妻たちの部屋のあったキブラ側）の窓の前に立って訪ねることになった。

　アーイシャ様の部屋の高さは三メートルで、日干しレンガとナツメヤシの枝で出来ていた。一方は西、一方は北に開く二つの扉があった。西側の扉はラブダ・イ・ムタッハラに向かっていた。ウマル様のカリフ時代の終わり頃にモスクが拡張され、預言者様の妻たちの部屋の周りは石でできた低い壁で囲まれた。

　アブドゥッラー・ビン・ズバイルのカリフ統治時代にこの壁を壊し、黒い石でできた、より頑丈なものが作られた。当時天井はなかった。壁の北側には一つの扉があった。ハサン様がヒジュラ暦四九年に亡くなると、遺言によりフサイン様が兄の遺体を部屋の前に持ってきて、祈念や救いの祈願を行おうとしたが、ここに埋葬されると思って中に入れさせない者が出てきた。ハサン様はバーキ墓地に埋葬された。後世、このような出来事が起こらないように、壁と部屋の扉は塗り込めて閉じることとなった。

　ウマイヤ朝の第六代カリフであるワリードがマディーナの知事であったとき、モスクの壁を高くして、上に小さな

ドームをかけて天井を閉じた。三つの墓所は外から見えなくなり、中に入ることもできなくなった。ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズがマディーナで知事だったとき、七〇七年（ヒジュラ暦八八年）に、カリフのワリードの命により、妻たちの部屋を取り込んでモスクを拡張した。他にもこの壁の周りに五つの角と扉のない別の壁を作った。

イラクのゼンギが統治していたアタバクという国の大臣であり、サラハッディン・アイユーブのいとこでもあるジェマーレッティン・イスファハーニが一一八九年（ヒジュラ暦五八四年）に、部屋の外側の壁の周りに白檀の木と黒檀の木でモスクの天井まで届く柵を作った。

しかし、火事により一二八九年に焼失し、代わって鉄でできた柵が設けられ、緑色に塗装された。この柵はシェベケ・イ・サアーデトと名付けられた。シェベケ・イ・サアーデトのキブラ側がムワージェヘ・イ・サアーデト、東側がカーデム・イ・サアーデト、西側がラブダ・イ・ムタッハラ、北側がヒュジュレ・イ・ファーティマと呼ばれる。マッカがマディーナの南に位置するため、預言者モスクの中央、つまりラブダ・イ・ムタッハラでは、キブラに向かう人の左側に預言者様の部屋、右側にミンバルがあることとなる。

八四七年（ヒジュラ暦二三二年）には、シェベケ・イ・サアーデトのある場所と外壁との間や、この場所の外側に大理石が敷き詰められた。この任務はオスマン帝国のスルタン・アブドゥルメジドが完成させた。

預言者様の部屋の五つの角の壁の上には、クッベ・トゥンヌルという小さなドームが作られた。オスマン帝国のスルタンたちが送った敷物であるキスウェ・イ・シェリフェが、このドームに敷き詰められていた。クッベ・トゥンヌルのさらに上にある、預言者モスクの大きい緑のドームは、クッベ・トゥル・ハドラーと呼ばれる。シェベケ・イ・サアーデトという柵の外側に敷かれた敷物は、クッベ・トゥル・ハドラーの下にあるアーチに掛けられている。この内側と外側の幕をセッダーレという。

シェベケ・イ・サアーデトの東西と北側には一つずつ扉がある。シェベケ・イ・サアーデトの中には、かつては名士たち以外入ることはできなかった。従って、扉や窓がなく、ただ、ドームの中央に金網で閉められた小さな穴があった。

この穴と同じ位置に、クッベ・トゥル・ハドラーにも一つの穴が開けられていた。預言者モスクのドームは一八三七年（ヒジュラ暦一二五三年）までは銀色だった。スルタン・マハムード二世の命令により、緑色に変更された。一八七二年（ヒジュラ暦一二八九年）に、スルタン・アブドゥルアズィーズの命により、再び塗り直された。

預言者モスクの修理や修繕のために、スルタン・アブドゥルメジドほどに、金銭や労力を払う人物はいなかった。カアバや預言者モスクの修復のため、七十万個の金を使って一八六一年（ヒジュラ暦一二七七年）に、修理を完成させた。

預言者モスクの修理や修繕にあたって、何千個もの金を使ったスルタン・アブドゥルメジドは、かつての形をイスタンブールのヒルカ・イ・シェリフモスクで再現するよう命令し、これに従って、一八五〇年に技師の教授であり、画家のハッジ・イッゼト少佐をマディーナに送った。イッゼト少佐はすべての場所を計測し、五三分の一の模型を一年かけて作ってイスタンブールに送り、スルタン・アブドゥルメジドの作ったヒルカ・イ・シェリフモスクに置かれることとなった。

スルタン・アブドゥルメジドが行った修理の後、キブラの壁とシェベケ・イ・サアーデトの間は七・五メートル、東の壁からカーデム・イ・サアーデトとシェベケまでの間が六メートル、シェベケ・イ・シャーミの幅が十一メートル、ヌワジェヘ・イ・シェリフェ・シェベケとムワジェヘ・イ・シェリフェ・シェベケとシェベケ・イ・シャーミの間が十九メートルとなった。また、預言者モスクのキブラ側の幅は七十七メートル、キブラ側の壁からシャーミの壁までの幅は百十七メートルで、預言者様の部屋とミンバルの間にあるラブダ・イ・ムタッハラの幅は十九メートルとなった。

しかし、オスマン帝国崩壊後、この神聖な場所には多くの変更がなされ、オスマン帝国が作り上げた価値をつけられないほどの歴史的遺産は、破壊され、略奪が行われることとなる。

さて、預言者様を訪ねた後、バーキ墓地へ赴くことはムステワーフ、つまり善行を得ることとなる。さらには、他の墓地、特にサイード・ウ・シュヘダ（殉教者の王）ハムザ様の墓を訪ねるべきであろう。バーキ墓地では、ここに埋葬されているアッバース様や、ハサン・ビン・アリ、ゼイネル・アビディーンとその息子のムハンマド・バークル、

さらにその息子のジェーフェリ・サードゥク、また、ウスマーン様や預言者様の息子のイブラーヒーム、預言者様の妻たちや叔母のサフィーヤ、大勢の教友たちやその次の世代の名士たちを訪ねることとなる。さらに、ファーティマモスクでも礼拝を行う。このほか、木曜日の夜に、ウフドの戦いにおける殉教者を訪ねることは善行を得ることとなる。その場所では「セラームン・アレイクム・ビマ・サベルトゥム。フェニーメ・ウク・ベッダール。セラームン・アレイクム・ヤー・アハラ・ダル・イル・カウム・イル・ムウミニーン、ワ・インナー・インシャーアッラーフ・アン・カリービン・ビクム・ラーヒクム」と言い、続けて『アーヤ・アル・クルスィー』（雌牛章（アル・バカラ）第二五五節）と『純正章（アル・イフラース）』を詠む。

預言者様の部屋を訪ねる者は、非常に集中し、頭の中での現世の考えは消すべきである。それに代わって、ムハンマド（アライヒッサラーム）の神聖な御光や高い地位を考える。現世の利益を求めたり、偉人と会うことで利益を得ようとしたり、あるいは買い物などの考えのうちに行われた願いをアッラーは受け入れないことであろう。そして、その望みにも導かないことであろう。

預言者様の部屋を訪ねることは名誉ある一つの礼拝である。これを信じない者は、イスラームに背く恐れがある。なぜなら、これを信じないのであれば、アッラーや預言者、そしてすべてのムスリムに対立することになるからである。マーリキー派の学者の一部は、預言者様を訪ねることは行わなければならない義務であるとしているが、善行を得る行為ということで概ね一致している。

テベッスル

預言者様は常に ― 創造される前や、創造された後、現世における生活や死後において、地上での、そして墓での生活において ― テベッスルとなってきた。審判の日や復活後、アラサートという場所や天国でも、彼がテベッスルとなる。テベッスルというのは、アッラーの前にあっては一層アッラーに近づき、自分が求めることを得るための根拠とされることである。

預言者様のテベッスル、つまり、預言者様をアッラーのもとで理由とすることによって、預言者様の助けや仲裁を求めることは適ったことである。このようなことは、預言者様自身や教友たち、その次の世代、そしてさらに次の世代の人々、あるいは、イスラーム学者や他のムスリムたちが行ってきたことである。ムスリムたちの中で、このような行為を悪いと考える者はいない。今日まで、信仰が崩れた者以外、このことに賛同しない者はいないのである。

人類の父である預言者アーデムが地上に降りたときも、預言者様をその理由としている。これについて、あるハディースによれば、預言者様は次のようにおっしゃっている。「預言者アーデムが罪により天国から出されると『アッラーよ！私をムハンマド（アライヒッサラーム）に免じて赦してください』と言いました。アッラーは『アーデムよ！あなたはムハンマド（アライヒッサラーム）をどのようにして知ったのですか。まだ私は彼を創造していません』とおっしゃいました。預言者アーデムは『アッラーよ！私を創造し、私に魂を与えてくださったとき、目を開くと天空の上に『ラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマダン・ラスールッラー』と書かれているのを見ました。その名とあなたの名が一緒にあることから、その人があなたの好む者であることが分かりました』と答えたのでした。アッラーは『真実を語りました。アーデムよ！創造物の中で最も好む者は彼であります。彼に免じて願ったことで、あなたを赦しました』とおっしゃいました」別に伝わるところによると「アッラーが『彼はあなたの子孫のうちの一人の預言者であります。彼を子孫としなかったら、あなたやあなたの子孫を創造することはなかったことでしょう。彼を仲裁者としたことで、あなたを赦し助けます』とおっしゃいました」となっている。

テベッスルについては、何千もの例が挙げられる。そのうちのいくつかは次のとおりである。

両目の見えないある人が、目が見えるように預言者様に祈念を求めた。預言者様は「望むのであれば祈りましょう。しかし、我慢をして耐えるのであれば、あなたにとってそちらの方がよいのです」とおっしゃった。だが、彼は「私

に耐える力はありません。祈念をお願いします」と言った。預言者様は「そうであれば、清めを行い、次の祈念を詠むのです」とおっしゃった。「アッラーフンマ・インニ・アスアールカ・ワ・アタワッジャフ・イレイカ・ビ・ナビーイカ・ムハンマディン・ナビーイル・ラハメティ。ヤー・ムハンマド！インニ・アタワッジャフ・ビカ・イラー・ラッビ・フィ・ハージャティ・リタクディエ・アッラーフンマ・シェッフィーフ・フィーイェ」

彼がこの祈念を詠むと、アッラーはそれを受け入れ目が見えるようになった。このことは、ハディース学者であるイマーム・ネサーイーが伝えている。

預言者様に免じてもらうということについて、ウスマーン・ビン・ハニーフ様が次の出来事を語っている。「ウスマーン・ビン・アッファーンがカリフのとき、大きな問題を背負ったある人物がカリフの前に出ることを恥じ入り、私にその苦しみを述べました。私は、すぐに清めを行い、預言者モスクへ行って、先般書いた祈念を行うよう彼に言いました。そして願い事を言いなさい、と伝えました。

その人は祈念を行った後、カリフのいる場所へと赴きました。カリフは彼を礼拝用の絨毯の上に座らせ、悩み事を聞き、それを解決しました。彼は喜んで心晴れて私のところへとやって来ました。そして『アッラーがあなたに満足しますように。あなたがカリフに伝えて下さらなかったら、この問題は解決されなかったでしょう』と言いました。私がカリフと話したのだと思っていたのでした」

ウマル様がカリフのとき、飢饉が起こった。教友のビラール・ビン・ハーリスが預言者様の墓へと行き「預言者様よ！共同体は空腹で死にかけています。あなたに免じて雨が降るように懇願します」と願った。彼はその夜、夢で預言者様が「カリフのところへ行きなさい。私から彼に挨拶を送って、雨乞いに出るように伝えるのです」とおっしゃるのを見た。これを受けてウマル様が雨乞いに出ると、雨が降り始めたのだった。

アッラーは最愛の者に免じて願いを受け入れる。アッラーは預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）を大変に好んでいることを知らせている。したがって、ある人が「アッラーフンマ・インニ・アスアールカ・ビジャーヒ・ナビー

イカル・ムスタファ」と祈念をすると、その願いは拒絶されないのである。しかし、取るに足らないこの世のためのことで、預言者様に免じてもらうことは良いことではない。

ブルハーネッティン・イブラーヒーム・マーリキーはこのように述べている。「大変空腹になっていたある貧乏人が、預言者様の墓所に行き『預言者様よ！空腹です』と訴えていました。しばらくすると、誰かが来て貧乏人を家に連れて行き満腹にさせました。貧乏人が願いが叶った言うと、相手は『兄弟よ！あなたは家族の人々から離れ、遠くから預言者様を訪ねに来たのです。ひと口のパンのために預言者様の御前に出ることはふさわしいことでしょうか。あれほどの高い地位に見合うように、天国や永遠の恵みを求めるべきでした。ここで求めるものは、アッラーが拒絶しないのですから』と諭したのでした。預言者様を訪ねる名誉に与った者は、審判の日に仲裁してもらえるよう願うべきなのです」

イマーム・アブー・ベクリ・ムクリはある日、イマーム・タベラーニとアブー・シェヒとともに、預言者モスクで座っていた。数日間何も食べていなかったため、空腹となっていた。イマーム・アブー・ベクリが耐えられずに「空腹です、預言者様！」と言った後、とある一方の角に座った。すると、サイイド〔訳注…預言者様の子孫を指す言葉〕の一人が、二人の召使とともにやって来て「兄弟よ！あなたは、祖父である預言者様に苦悩を申し立てられていたようです。あなた方を満腹にさせることを命じられました」と言った。持ってきたものを一緒に食べ、残ったものを彼らに置いて帰っていった。

イスラーム学者のアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・メラーケシの記した『ミスバフ・ウズ・ズラム』（ヒジュラ暦六八三年／西暦一二八四年）という本には、預言者様に免じて望みに導かれる何百人ものムスリムや、彼らの願い事について数多く収められている。そのような人物の一人は、ムハンマド・ビン・ムンケディルである。彼はこのように語っている。「ある人が私の父に八十個の金を預け、聖戦へと行きました。『これらを預かってください。どうしても必要な者が現れたときには、これを使って手伝ってやっても構いません』と言われました。当時、マディーナ

では飢饉が起きていました。父は預かった金のすべてを、空腹で苦悩にあえぐ人々に配りました。やがて、金の持ち主が帰って来ました。父は『明日の晩来てください』と言いました。預言者様の墓所に行き、朝まで預言者様に懇願しました。すると、夜半にある人物が来て『手を伸ばしなさい』と言いました。一袋の金を渡して、その後いなくなってしまいました。父が家で金を数えると、ちょうど八十個であることが分かり、喜んで持ち主に返しました」

前述の本では、イマーム・ムハンマド・ムーサー様が、自分の経験したある出来事をこのように語っている。

「ヒジュラ暦六三七年、西暦一二三九年に、優れたある一団とともにサデル砦から出発しました。私たちの案内人も一緒でした。しばらく行くと水がなくなり、皆で水を探し始めました。私はこのとき用を足すため別の場所へ行きました。その際、ひどく眠くなってしまいました。どうせ彼らが出発するときに私を起こすだろうと思い、横になりました。

目が覚めると、砂漠の真ん中に一人残されていたことに気付きました。仲間たちは私を忘れて出発してしまったのでした。一人にされたことを大変恐ろしく感じました。砂漠で右往左往し始めましたが、自分がどこにいるのか、どこに行けばよいのか分かりませんでした。あらゆるところが平らな砂だったのです。しばらくすると、日が沈みました。旅に出ていたキャラバンの足跡さえありませんでした。私は夜の暗闇の中たった一人で、恐怖は一段と高まっていきました。慌ててもっと早く歩き始めました。

しばらく歩くと、大変喉が渇き、疲れて地面に倒れてしまいました。もはや生きる望みを失い、死が近づいていることを感じていたのです。喉の渇きや疲れから、苦悩と悲しみが湧き上がってきていました。そのとき、あることを思い出しました。暗闇の中『預言者様よ！ 助けてください。あなたにアッラーの赦しを得て、助けを求めます』と呻いたのでした。

言葉が終わるやいなや、誰かが私に呼びかけるのを聞きました。声の来る方を見ると、暗闇の中で周りに光を発する白い服を着た、そのときまで見たこともない人が私を呼んでいるのが見えました。私に近づき、手を取りました。

すると、あらゆる疲れや喉の渇きが消え去りました。再び生まれ変わったように感じ、彼に心温められながら、手を取ったまましばらく歩きました。人生の中で最も美しい瞬間の一つを過ごしていると感じていました。ある砂丘に上がると、一緒に旅をしていたキャラバンの火が見え、仲間たちの声が聞こえてきました。彼らのところまで近づいていきました。

私が乗っていた動物は一番後ろから彼らを追っていました。急に私の前にやって来て止まりました。乗り物を目の前に見ると、私は喜びに叫びました。私が叫ぶと、私と一緒に来ていた人物は、私の手から手を外し、私をその動物に乗せました。その後彼は『私たちから何かを求め、助けを必要とする者を放っておくことはしないのです』と言って帰っていったのでした。このとき、彼が預言者様だったことが分かりました。彼が帰っていくとき、周りにあふれた光が暗闇の空に上がっていくのが見えました。彼が目の前からいなくなると、突然に思い出して『どうして私は預言者様の手足に口づけをしなかったのだろう？』と後悔しましたが、もはや手遅れでした」

アブル・ハイル・アクターは、マディーナで五日間滞在した。預言者様の墓所に行き、預言者様に挨拶をした。その際、空腹であることを訴えた。その後、ある場所に行き、眠りについた。すると、夢で預言者様がいらっしゃるのを見た。右側にアブー・バクル・スィッディーク、左側にウマル・ファールーク、前にアリー・ウル・ムルテザーがいた。アリー様が来て、「アブル・ハイルよ！ 立ちなさい。何を寝ているのですか？ 預言者様がいらっしゃいます」と言った。すぐに立ち上がった。預言者様は大きなパンを与えてくれた。その後について、アブル・ハイルはこのように語っている。

「大変空腹であったため、夢の中ですぐに食べ始めました。半分食べたところで目が覚めました。すると、残りの半分が手に残っているのを見つけました」

アフマド・ビン・ムハンマド・スーフィは次のように語っている。「ヒジャーズの砂漠で一切の持ち物を失ってしまいました。マディーナに行き、預言者様の墓所で預言者様に挨拶をしました。その後、あるところに座って眠りました。夢で預言者様がお出でになり『アフマドよ！ 来たのですか？ 手を開きなさい』とおっしゃいました。私の手のひらは金でいっぱいになりました。目を覚ますと、やはり手のひらは金でいっぱいになっていたのでした」

イマーム・セムフーディは、扉の鍵を失くして見つけられていなかった。預言者様の墓所へと行き『預言者様よ！鍵を落としてしまいました。家に入れません』と訴えた。すると、一人の子供が手に鍵を持って現れた。これを拾ったのですが、あなたのものでしょうか、と言うのでした。

キリス出身のムスタファ・ウシキー様は、『メワーリディ・メジリエ』という歴史的な本にてこのように述べている。「マッカには二十年間滞在しました。ヒジュラ暦一二四七年、西暦一八三一年に、六十個の金を蓄えて、家族とともにマディーナにやって来ました。その蓄えは旅の途中で底を尽きました。ある知り合いのところで、客として留まりました。その後、神聖な墓所へと行き、預言者様の助けを求めました。三日後、滞在していた家にある男性が来て、私のためにある部屋を借りている、と言いました。そして、私の家具などをそこに運ばせました。一年分の家賃をその人が払いました。数日後、私は一ヶ月ほど病で臥せってしまいました。家には食べるものや売るものもありませんでした。妻の助けを借りて屋根に上がり、預言者様の墓所に向かって苦悩を訴えて助けを求めようと思いました。手を上げましたが、この世のことを願うのに恥入ってしまいました。結局何も言えないまま部屋に戻りました。

翌日、ある人が来て、誰某がこの金をあなたに贈物として渡しました、と伝えてきました。その袋をもらいました。生活は楽になったものの、病気は続いていました。また、人の助けを借りて預言者様の神聖な墓所の前に行き、預言者様に病から回復するよう願いました。モスクから出ると、誰の助けも借りずに家まで歩くことができました。家に入ると、病は治っていました。凶眼にあたらないよう、数日間外に出るときには杖をつくようにしていました。しかし、やがて今度はお金がなくなってしまいました。子供たちを暗闇の中に残し、預言者モスクへと行きました。夜の礼拝が終わった後、その苦悩を預言者様に訴えました。帰り道で、知らない人が私の隣に来て、私に小さな袋を渡しました。中には四十九個の金が入っていました。ロウソクや必要なものを買って家に戻りました」

『シャカイーク・イ・ヌーマーニィエ』という本の第二巻では、オスマン帝国初の宗教大臣であり、その時代のムジャッディド（ヒジュラ暦の世紀初めに宗教を革新する人物）であり、偉大なイスラーム学者であったメブラーナ・シェムセッ

ティン・ムハンマド・ビン・ハムザ・フェナーリの眼が見えなくなったときのことが次のように記されている。ある夜、預言者様が「『ター・ハー章』を解釈しなさい！」とおっしゃったため、彼は「預言者様の前でクルアーンを解釈することなど私にはできません。その上、目も見えないのです」と答えた。預言者たちの医者である預言者様は、神聖な上着から少しの綿を出し、神聖な唾で濡らした後、目の上に置いた。フェナーリが目を覚ますと、綿が目の上にあることが分かり、それを取ると目が見え始めた。そして、アッラーに感謝を行った。綿の繊維は取っておき、自分が死んだときには目の上に置くよう遺言を残した。彼は八三四年、西暦一四三一年にブルサで亡くなると、遺言通りにされたのだった。

アッバース朝のカリフの一人である、アブー・ジャーヒル・マンスールが、預言者モスクの中でイマーム・マーリキーと話していた。「マンスールよ！ ここは預言者モスクです。静かに話すのです。アッラーが『部屋章（アル・フジュラート）』で『あなたがたの声を預言者の声よりも高く上げてはならない』とおっしゃって、そのような人々を注意しています。一方『本当にアッラーの使徒の前でその声を低くする者は…』という節では、小さな声で話す人々を褒めています」

また彼は、預言者様が亡くなった後も敬意を示すことは、生きていたときに敬意を示すことと同じである、とも述べた。そこで、マンスールは首をかしげて「アブー・アブドゥッラーフ（イマーム・マーリキー）よ！ 私たちは今、キブラに向かうべきだろうか、それとも墓所に向かうべきだろうか？」と尋ねた。すると、イマーム・マーリキー様は「預言者様から顔を背けないようにするのです。審判の日、仲裁者となるその偉大な預言者は、あなたやあなたの父にあたる預言者アーデムを助ける理由となるからです」と答えた。

また彼は「墓所に向かって預言者様の神聖な魂を抱き、仲裁を求めるようにすべきでしょう。クルアーンでは『…もしかれらが間違った時あなたの許に来て、アッラーの御容赦を願い、使徒が、かれらのために御赦しを祈るならば、かれらはアッラーが、度々許される御方、慈悲深い御方であられることが分かるであろう。』（婦人章（アン・ニサーア）第六四節）と啓示されています。

この節では、預言者様に免じた者が、起こした過ちを二度と行わないよう誓えば、それが受け入れられると約束しているからです」とも述べた。これに聞くと、マンスールはその場から立ち上がり、神聖な墓所の前へとやって来た。そして「アッラーよ！ この節では預言者様に免じた者の過ちに対して、その反省を受け入れるとあなたは約束しています。私も偉大な預言者の前に行き、あなたの赦しを求めます。預言者様が生きていたとき、赦しを求めてそれが得られた人々のように、私のこともお赦しください。アッラーよ！ 偉大な預言者に免じてあなたに乞い願うのです。預言者たちの中でも最も高い地位を持つ預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）！ あなたに免じてアッラーに懇願しました。アッラーよ！ その偉大な預言者が私の仲裁をするようにしてください」と懇願し始めた。このとき、キブラを背にし、顔は墓所の窓に向けて、立ったまま祈念を行った。ミンバルは左側にあった。

ただし、イマーム・マーリキーがカリフ・マンスールに行った忠告では、墓所の前で願い事をする者は、よく注意しなければならないとしていた。また、その場所に対して適切な礼儀や敬意を払うことができない者は、マディーナで長い時間滞在することは好ましくない、ともおっしゃっている。

アナトリアのある村人がマディーナで数年間滞在し、そこで結婚をし、墓所である仕事を任されていた。ある日、高熱が出て、そのときアイラン〔訳注…ヨーグルトの飲料〕を欲した。「もし、村にいたのならヨーグルトから飲み物を作らせて飲めていたことだろうに」という考えが一瞬頭をよぎった。するとその夜、預言者様がシェイフ・ウル・ハレム様の夢に現れ、例の仕事を別の人に変えるよう命じた。シェイフ・ウル・ハレムは「預言者様！ その仕事を共同体の誰某が行っています」と言うと、預言者様は「その人に、村に戻ってヨーグルトを飲むように言うのです」とおっしゃった。翌日、この命令がその人に知らされると、この村人は自らの態度を理解し、元いた村へと戻っていった。

ただ少し考えただけでも、このような事態を招くようになることを考慮すると、アッラーを非難したり、冗談であっても不適切な言葉を言ったり、ふさわしくない行動をとったりすることが、どれほどの損害を引き起こすことになるのか、この例から理解するべきである。

預言者様に対する祝福の重要性とその徳

預言者様の名前が聞かれたときや書かれたときに、尊敬や敬意を表す一つの方法として、預言者様に祝福を行うことは最も大切なことの一つである。クルアーンの『部族連合章（アル・アハザーブ）』第五六節では『本当にアッラーと天使たちは、聖預言者を祝福する。信仰する者たちよ、あなたがたはかれを祝福し、（最大の）敬意を払って挨拶しなさい。』と書かれている。解釈学の学者はこの節で述べられているサラート（祝福）という言葉は、アッラーからの慈悲、天使たちからの赦し、そしてムスリムたちからの願い事という意味を示していると知らせている。すべてのイスラーム学者は、預言者様の神聖な名前の一つを聞いたとき、あるいは書かれたとき、または言ったときに、祝福を書いたり言ったりすることはごく基本のことであり、それが繰り返された場合、祝福を行うことで善を得ることになるということで一致している。アッラーに何かを願う人は、まずアッラーに感謝と称賛を行った後、預言者様への祝福を述べるべきである。このようにして行った願い事は、受け入れられるのにふさわしいものであろう。二回の祝福（願い事を始める前と終わった後）が行われた願い事は拒否されないのである。

アブー・タルハ様はこのように語っている。「預言者様の前に上がりました。預言者様が以前には見たこともないほどに喜び、満足しているのを見ました。その理由を尋ねると『喜ぶのは当然です。先ほどジブリールが吉報をもたらしました。アッラーがこのようにおっしゃったのです。『共同体の一人があなたに祝福を言えば、アッラーはそれに対して十倍の祝福を返します』』とおっしゃいました」

これに関するハディースのいくつかは次のとおりである。預言者様はこのように語っている。

「私の名前が述べられたときに、私に祝福や挨拶をしない者の鼻は地に落ちますように。ラマダーン月に入っても罪の赦しを得ないでその月を終わらせる人の鼻も地に落ちますように。母親や父親が老いたときに、彼らの満足を得て、

天国に入らない者の鼻も地に落ちますように」
「私の名前が述べられたときに、私に祝福や挨拶をしない者は、けちの中でも最もけちな者なのです」
アブー・フメイド・アッサーイディ様はこのように伝えている。「教友たちの何人かが預言者様に尋ねました。『預言者様よ！ あなたにどのような祝福や挨拶をしたらよいのでしょうか？』預言者様はこうおっしゃいました。『『アッラーフンマ・サッリ・アラー・ムハンマディン・ワ・アズワージヒ・ワ・ズッリイェティヒ・カマー・サッライタ・アラー・イブラーヒマ・ワ・バーリキ・アラー・ムハンマディン・ワ・アズワージヒ・ワ・ズッリイェティヒ・カマー・バーラクタ・アラー・イブラーヒマ・インナカ・ハミードゥン・マジード』と言うのです』」
別のいくつかの祝福には次のようなものがある。
「アレイヒッサラーム」「サッラッラーフ・アレイヒ・ワサッラム」「アッラーフンマ・サッリ・アラー・サイイディナー・ムハンマド」「アッラーフンマ・サッリ・アラー・ムハンマディン・ワ・アラー・アーリ・ムハンマド。カマー・サッライタ・アラー・イブラーヒマ・ワ・アラー・アーリ・イブラーヒーム…」「アッラーフンマ・サッリ・アラー・ムハンマディン・ワ・アラー・アーリヒ・ワ・サハビヒ・アジュマイーン」「アレイヒッサラートゥ・ワッサラーム・ワッタヒーヤ」「アレイヒ・ワ・アラー・ジェミーイ・ミナッサラワーティ・アテンムハー・ワ・ミーナトゥタヒーヤティ・アイマヌハ」
ある人がこのように述べている。「友人の一人からもらった手紙では、預言者様の神聖な名前が書かれたすべてのところに『サッラッラーフ・アレイヒ・ワサッラム・タスリーマン・ケスィーラン・ケスィーラ』と書かれていました。その人と会って、その理由を聞くと『若いとき、ハディースの本を書きました。預言者様の神聖な名前を書いたとき、祝福を書かなかったのです。夢で万物の王を見て、隣に行きました。神聖な顔を私から背けてしまいました。前に上がろうとしましたが、再び向きを変えてしまいました。
前に上がって『預言者様、なぜ私から顔を背けるのですか？』と尋ねると、こうおっしゃいました。『なぜならば、あなたは私の名前を書くときに、私のことを祝福しませんでした』そのとき以来、預言者様の名前の後には祝福を書いているのです』と答えました」
ハディースによれば、預言者様が「誰かが私に一度の祝福を行ったら、アッラーがその人に十回の祝福（慈悲）を授けます。彼の十の罪を赦し、地位を十倍も上げるのです」とおっしゃっている。
また「審判の日、私に最も近い者、そして私の仲裁に最もふさわしい者は、私にたくさんの祝福や挨拶を行った者です」とも伝えられている。
アッラーは預言者ムーサーに「ムーサーよ！ 舌にある言葉より、心にある考えより、身体にある魂より、目にある光よりも、もっと近くに私にいてほしいのですか？」と尋ねた。彼は「はい、アッラーよ」と答えた。「それであれば、ムハンマド（アライヒッサラーム）にたくさんの祝福をしなさい」とおっしゃった。続けて「ムーサーよ、審判の日、喉が渇くことを防ぎたいと思いますか？」と尋ねた。彼は「はい、アッラーよ」と答えた。「それであれば、ムハンマド（アライヒッサラーム）にたくさんの祝福をしなさい」とおっしゃった。
預言者様はこのように語っている。
「審判の日、あらゆる地位において私に最も近いのは、地上にいたときに私にたくさんの祝福を行った者です。金曜日やその前日の夜、私に百回の祝福を詠む者には、アッラーが百回の要望を叶えるのです。そのうちの七十は来世で、三十は現世でのことのためとなります。そして、アッラーは一人の天使とともに、その祝福を私の墓へと送ります。これはあなた方が受け取る贈物のようなものです。その天使は私に祝福を行う者の名前や祖先、そして部族について知らせます。私のところにある白い紙にそれを書きつけます。私が死んだ後に知ることは、生きていたときに知ることと同様です。
木曜日になると、アッラーは隣に銀のノートや金のペンを持つ天使たちを送ります。木曜日やその夜、預言者にたくさんの祝福を行う者は、そこに書かれるのです。

二人のムスリムが出会い、ムサーファハ（会ったときに握手をし、互いの顔を見ること）を行い、預言者に祝福をすれば、二人が別れる前の、そして以後の罪が赦されるのです。

誰かがモスクに入る際には、預言者に挨拶をし「アッラーよ、私を悪魔からお守りください」と言うのです！」

別に伝わるところによると「モスクから出るときには、アッラーフンマ・インニ・アスアールカ・ミン・ファドゥリカ、と詠むのです」ともおっしゃっている。

祈念を行う前に、アッラーへの感謝や預言者様への祝福を行わなければ、願い事はカーテンの後ろに隠れているようになるのである。願い事の前に、感謝や祝福が行われた場合は受け入れられる。

預言者様やその家族に祝福を行わない願いは、その願い事と天空の間に幕があるようなものである。祝福を詠むと、この幕が破れ、願い事は天空へと上がっていく。もし祝福を詠まなければ、願い事は跳ね返されてしまう。

ある集まりがあったとき、アッラーのことが話されなかったり、預言者様に祝福が行われなかったりした場合、そこにいる人々の上には鞭が振り下ろされる。願えば罰が与えられ、願えば赦されるものである。

また預言者様は、以下のことについても伝えている。

耳鳴りがした者は、私を思い出し、私を祝福するようにするのです。

新しい仕事を始めようと意図する人は、それについて互いによく相談するように。アッラーがその人の仕事に正しい道を示します。誰かが何かを言おうとしたときに、その言葉を忘れてしまったら、私を祝福するようにしなさい。なぜなら、私に親しく行う祝福の中にはその言葉の代わりとなるものがあるからです。それを思い出させることとなるでしょう。善なることにアッラーの名前や私への祝福を唱えずに始めたら、それは不十分であり、すべての恩恵は取り消されることとなってしまいます。

イスラームの名士の一人のアブー・ハフス・カウーディが亡くなると、ある人が夢で彼を見た。そこで、アッラーがあなたをどのようにされましたか、と尋ねると「私に慈悲をかけて赦し、私を天国に入れました」と答えた。その

理由は何であるかと尋ねると「私を天使たちの間で留まらせました。私の罪と預言者様に対する祝福が計算されました。祝福の方が多かったのです。アッラーが天使たちに『我が天使たちよ。あなた方の仕事は終わりました。それ以上彼に質問をしないように。彼を私の天国に連れていきなさい』とおっしゃいました」と返事をしたのだった。

セレフ（教友たち及びその次の世代、さらにその次の世代の人々のことを示す呼称）の一人がこのように語っている。「一緒にハディースを学んでいた一人の友人が亡くなりました。夢で彼が緑の法衣を着ているのを見ました。その理由を聞くと『すべてのハディースで見た預言者様の名前の横に『サッラッラーフ・アライヒ・ワサッラム』と書いていました。アッラーがその褒賞を授けてくださったのです』と言いました」

また、セレフの一人がこのように語っている。「ある書記官の近所の人が亡くなりました。その人を夢で見ました。アッラーがあなたをどのようにされましたか、と尋ねると、赦しました、と答えがあったとのことでした。その理由を聞くと、預言者様の名前を書くたびに、いつも横に『サッラッラーフ・アライヒ・ワサッラム』という言葉も書いていたためである、とのことでした」

アブー・スライマーン・ダラーニはこのように述べている。「ハディースを書くとき、預言者様の神聖な言葉を書く際『サッラッラーフ・アライヒ』まで書いて『ワサッラム』を書かなかったことがありました。夢で預言者様を見ました。私にこのようにおっしゃいました。『アブー・スライマーンよ、ハディースで私の名前を書くときに、祝福とともに『ワサッラム』も書きなさい。それは四つの文字です。それぞれの文字に十の善があるのです。書かなかったら、四十の善が得られないこととなります』また別の人も祝福を書いていませんでした。すると、預言者様は夢で彼に『どうしたのですか？私の祝福をすべて書かないとは』とおっしゃいました」

アブー・バクル・スィッディークはこのように述べている。「忘れがちな人は、預言者様によく祝福をするのです」

信心深い名士であるムハンマド・ビン・サーイド・ビン・ムタッルフは、次のように語っている。「毎晩、寝る前に決まった数の祝福を詠んでいました。ある夜、夢に預言者様が現れました。部屋の中に入って来ました。部屋の中は光でいっ

ぱいになりました。その後、私の方に来て『私にたくさんの祝福を行った口に接吻をしましょう』と言って、神聖な口で接吻をしました。それで驚いて目を覚ましました。部屋の中はムスクの香りに満ちていました。八日間、頬からその美しい香りがなくなることはありませんでした」

セレフの名士の一人である、ハッラード・ビン・ケスィルが亡くなると、頭の下に「これはハッラード・ビン・ケスィルが地獄から解放された証明書です」と書かれた一枚の紙が出てきた。親戚に彼の生前の礼拝はどのようなものであったかと尋ねると、毎週金曜日、祝福を上げていたということであった。

シェイフ・アイニーの『ゼイヌル・メジャーリス』という著書ではこのように書かれている。「預言者様は『審判の日、人々を三つに分け、彼らだけが一つの影以外に影のない空の下に集まります』とおっしゃった。彼らとは誰ですか、と尋ねると『共同体の苦悩を助ける者、私のスンナを実行する者、私にたくさんの祝福を行う者です』とおっしゃった」。

シェイフ・アブー・ムーサー・ダリーリはこのように語っている。「海で暴風雨に巻き込まれました。全員が死の恐怖に泣いていました。そのとき私に眠気が襲い、夢で預言者様を見ました。船にいる人々に千回『アッラーフンマ・サッリ・アラー・サイイディナー・ムハンマディン・ワ・アラー・アーリ・サイイディナー・ムハンマド。サラーテン・トゥンジナー・ビハー・ミン・ジェミーイル・アフワーリ・ワル・アーファート・ワ・タクディー・ラナ・ビハー・ジャミーイル・ハージャート・ワ・トゥタッフルナ・ビハー・ミン・ジャミーイッセイイアト・ワ・タルファウナー・ビハー・インデカ・アーレッデレジャート・ワ・トゥバッリウナー・ビハー・アクサル・ガーヤート・ミン・ジェミーイル・ハイラーティ・フィル・ハヤーティ・ワ・バーデル・ママート』と詠むようにおっしゃいました。三百回くらい詠んだところで暴風雨が落ち着き、私たちは助かりました」この祝福は重要なことやあらゆる災い、地震などの際に詠むよう勧められている。信頼できる本には、祝福に関する四十以上のハディースがある。そのいくつかは次のとおりである。

アッラーフンマ・サッリ・アラー・ムハンマディン・ワ・アラー・アーリ・ムハンマド、カマー・サッライタ・アラー・イブラーヒーマ・ワ・アラー・アーリ・イブラーヒーム、ワ・バーリク・アーラー・ムハンマディン・ワ・アラー・アーリ・ムハンマド、カマー・バーラクタ・アラー・イブラーヒーマ・ワ・アラー・アーリ・イブラーヒーム、インナカ・ハミードゥン・マジード。

アッラーフンマ・サッリ・ワ・サッリム・ワ・バーリク・ワルハム・アラー・サイイディナー・ムハンマディン・フワ・サイイドゥル・アラビ・ワル・アジャム・ワ・イマーミ・マッカトゥル・ムカッラマーティ・ワル・マディーナティル・ムナッワラーティ・ワル・ハレム。アッレム・アル・インサーナ・マーラム・ヤーラム。

アスルーフ・ヌールン・ワ・ナスルーフ・アーデム。バースフ・ムアッハルン・ワ・ハルクフ・ムカッデム。

イスムフシュ・シェリーフ・マクトゥーブン・アラル・レブフウル・マフフーズィ・ビヤーキル・カレム。

ワ・ジスムフシュ・シェリーフ・マドゥフーヌン・フィル・マディーナティル・ムナッワラーティ・ワル・ハレム。

ヤー・ライタ・アクタヒル・トゥラーバッラズィー・タハタル・カデム。

フェ・トゥーバ・スンマ・トゥーバ・リメン・デアー・ワ・タビアフ・ワ・リメン・エスレメ・サーヒベシュ・シェファーアティ・リル・アーリミーン。

カーイレン・ヤー・ラッビ！セッリム・ウンメティ、ウンメティ・ワ・ウンマター・ヤズル・ルトゥフィ・ワル・カレム。

フェ・ユナードゥイル・ムナーディ・ミン・クベリル・ラハマーン、カビルトゥ・シェファーテケ・ヤー・ナビーイル・ムフテレム。ウドゥフルル・ジャンナタ・ラー・ハウフン・アレイクム・ワラー・フズヌン・ワラー・エレム。

スンマ・ラディアッラーフ・タアーラー・アン・アビー・バクリン・ワ・ウマーラ・ワ・ウスマーナ・ワ・アリーイン・ズィル・ケレム。

ワ・サッラッラーフ・アラー・サイーディナー・ムハンマディン・ワルハムドゥ・ラカ・ヤー・ラッバル・アーリミーン。ビ・フルメティ・サイイドゥル・ムルセリーン。

折り目正しく座っていた、あるときは膝の上に、あるときは膝を立てて
礼儀に満ちていた、隠れた礼儀にも満ちていた、その寛大さの源

三本の指で食べていた、それを舐めていたおいしそうに
水を三口で飲んでいた、その寛大さの源

はちみつやハルワ、かぼちゃ、酢とティリド
満腹になるまで食べることはなかった、大麦のパン、その寛大さの源

空腹のため、神聖な腹を石で締め付けていた
心が揺れないようにと言っていた、その寛大さの源

神聖な家には何ヶ月もかまどの火が立たなかった
満足していた、なつめやしとざくろで、その寛大さの源

第三章　預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の神聖な容姿

ヒリエ・イ・サアーデト（預言者様の神聖な容姿）

神聖な名前と尊称

愛すべき預言者様で最も使われる名前は「ムハンマド（アライヒッサラーム）」である。大変に讃えられ、より多く好まれる、という意味である。この名前は、クルアーンでは『イムラーン家章（アーリ・イムラーン）』第一四四節、『部族連合章（アル・アハザーブ）』第四〇節、『勝利章（アル・ファトフ）』第二九節および『ムハンマド章』第二節において、四度言及されている。また、『戦列章（アッ・サッフ）』の第六節では、預言者イーサーが共同体に預言者様について「アッラーを多く褒め讃える者」という意味の「アハマド」という名前で知らせていることが書かれている。クルアーンでは「ムハンマド（アライヒッサラーム）」や「アハマド」という名前以外にも「マハムード」「ラスール」「ネビー」「シャーヒド」「ベシール」「ネズィール」「ムベッシル」「ムンズィル」「ダーイ・イ・イラッラー」「スィラージュ・ムニール」「ラウーフ」「ラヒーム」「ムサッドゥク」「ムゼッキル」「ムデッスィル」「アブドゥッラー」「ケリム」「ハク」「ムニール」「ヌール」「ハテムン・ネビーイン」「ラハメトゥ」「ニーメトゥ」「ハーディー」「ターハー」「ヤー・スィーン」…という名前でも言及されている。これらの神聖な名前以外にも、一部はクルアーンで、一部はハディースで、一部はそれ以前の預言者たちの神聖な啓典で言及されている。

あるハディースによると、預言者様が「私に限っては、五つの名前があります。私はムハンマド（アライヒッサラーム）です。私はアハマドです。私はマーヒです。アッラーは私の手によって不信仰をなくします。私はハーシルです。人々は終末の日、私の後によみがえります。私はアクーブです。私の後に預言者は来ません」とおっしゃったと伝えられている。

また、愛すべき預言者様とハディージャ様との間に生まれ、幼いときに亡くなった息子のカースィムによって、預言者様に「アブー・カースィム」という通称もつけられている。さらに、預言者となる前から備えていた正直さ、信用や信頼などの数え切れないほどの優れた特性により、クライシュ族の間では「アル・アミーン（信頼される者）」という尊称でも呼ばれていた。

クルアーンで言及されている預言者様の名前の一つは、クルアーンの心とも言われる『ヤー・スィーン章』に出てくる「ヤー・スィーン」という言葉である。学者の名士の一人であるサイード・アブドゥルハキム・イ・アルワースィー様は「ヤー・スィーンとは『私（アッラー）の愛の海の潜水士である最愛の者』という意味である」と述べている。

預言者様を讃える詩や文学以外にも、彼のためには数多くの文章が書かれている。しかし、これらの中でも有名で、全世界に知られ、何世紀にもわたって読み続けられたものでさえ、預言者様を讃えきることは不可能であるとされる。預言者様を見て、その美しさを愛おしむ人々は、できるだけの言葉を使いはするものの、それを説明しきることは不可能であるとも言われているのである。

預言者様の神聖な容姿

アッラーが愛する預言者様の容姿を説明することは『ヒリエ・イ・サアーデト』という。

イスラーム学者たちは、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に見えるあらゆる身体の部分について、その形、特徴、そして神聖な性格について、細かく明確にその人生のすべてを記し、また版を重ねてきた。これらの情報は、預言者様自身の話であるハディースから、あるいは教友たちが知らせた情報から集められたものである。このような

ことを集めた本のことを「スィエル」という。何千冊ものスィエルの中にあって、預言者様の容姿やその特徴について伝えている最も有名な本はイマーム・ティルミーズィーの『アッ・シェマーイル・ウル・ラスール』とカドゥ・イヤードの『シファーイ・シェリフ』、イマーム・ベイヘキおよび、アブー・ヌアイム・イスファハーニーがそれぞれ記した『デラーイル・ウン・ヌブッウェ』、イマーム・カスタラーニ様の『メワーヒビ・レドゥンニエ』である。

ハディースや教友たちが知らせていた情報によると、愛すべき預言者様の容姿は次のように伝えられている。

万物の誇りである預言者様の神聖な顔や、身体のすべての部分、神聖な声は、あらゆる人々の顔や身体の部分、そして声よりも美しかった。神聖な顔は少し丸みを帯びており、喜んだときには月のように輝いた。額を見ると喜んでいるかどうかが分かった。預言者様は昼に見るのと同じく、夜も見ることができた。前にあるものを見るように、後ろにあるものも見ることができた。横や後ろを見るときは、身体全体を向けて見ていた。空よりも地をより多く見ていた。神聖な目は大きく、まつ毛は長かった。神聖な目には少し赤みがあり、瞳は黒かった。夜にアイラインをつけていた。世界の誇りである預言者様の額は広かった。神聖な眉毛は細く、眉毛の間はあいていた。怒ると眉の間にある血管が浮き出た。神聖な鼻は大変に美しく、中央の部分が少し盛り上がっていた。神聖な頭は大きめだった。神聖な口は小さくはなかった。神聖な歯は白く、前歯の間が少し開いていた。言葉を発すると、歯の間から光が出てくるようだった。アッラーのしもべの間にあっては、預言者様より分かりやすく、そして、美しく話す人は他にはいなかった。神聖な言葉は大変分かりやすく、人々の心や魂を引き込むものだった。言葉を発すると、単語が真珠のように並んでいるようだった。その言葉を数えようとしても数えられないように流麗だった。ときには、理解してもらえるように、三回繰り返すことがあった。天国では皆がムハンマド（アライヒッサラーム）のように話すとされる。神聖な声は他の人の声が届かないところまで届いていた。

世界の誇りである預言者様は笑顔の方だった。笑みをたたえると、神聖な前歯が見えた。また、笑みをたたえると、その光が壁に反射するほどだった。泣くことも笑うこと同様、激しくは行わなかった。げらげら笑ったり、泣き喚いたりはしなかった。しかし、悲しいときには、神聖な眼から涙を流し、神聖な胸音が聞こえていた。共同体の罪を考えるときや、アッラーを畏れ、そして、クルアーンを聞くとき、ときには礼拝するときに泣いていた。

世界の誇りである預言者様の神聖な指は大きく、神聖な腕は筋肉質だった。神聖な手のひらは広かった。神聖な身体からはムスクよりも美しい香りがした。神聖な身体はしなやかで、強かった。エネス・ビン・マーリキーはこのように語っている。「預言者様に十年間手伝いをしました。神聖な手は絹よりも柔らかいものでした。神聖な肌はムスクや花よりも美しい香りをしていました。神聖な腕や足、指は長めでした。神聖な足の指は大きく、足の裏は厚くはなく柔らかいものでした。神聖な腹は広く、神聖な胸と同じ厚みでした。肩の骨は大きく、神聖な胸は広いものでした。預言者様の神聖な心はアッラーとともにある場所でした。

預言者様の背は高くも低くもありませんでした。けれども、となりに背の高い人が来ても預言者様がその人より高く見えていました。座っていたときには、神聖な肩が、座っている他の人の肩より上にありました。

神聖な髪の毛やひげは、縮れ毛でも直毛でもなく、生まれつきウエーブがかかっていました。神聖な髪の毛は長めでした。以前は、前髪が額にかかっていましたが、後に二つに分けるようになりました。神聖な髪の毛をときどき伸ばし、ときどき切って短くしていました。髪の毛やひげを染めたりはしませんでした。亡くなったとき、髪の毛やひげには白髪の数が二十本以下しかありませんでした。神聖な口ひげは短くしていました。口ひげの長さや形は神聖な眉毛ほどでした。預言者様には専属の床屋がいました。預言者様はミスワーク〔訳注…特殊な木でできた歯ブラシのようなもの〕と櫛を常に持っていました。神聖な髪やひげをとかすとき、鏡を見ていました。万物の誇りである預言者様は、前を見てさっそうと歩いていました。あるところを通ると、その美しい香りから預言者様が通ったことが分かったものでした。預言者様はアラブ人でした。つまり、赤味がかった白い肌を持ち、大変に美しく光に満ちた愛しい方でした。誰かが預言者様のことを黒人であると言うのなら、それは異教徒です」

アラブ人という言葉は辞書によると、美しい、という意味を持っている。例えば「リサーン・ウ・アラブ」というと「美

しい言語」という意味になる。広義には、つまり地理上におけるアラブ人とは、アラビア半島と名付けられた半島で生まれ育ち、そこでの季節や天候、水や食事の中で育ち、そこでの人々の中での地位を持つ人のことを指す。アナトリアで育った者がトルコ人、ブルガリアで育った者がブルガリア人、ドイツで生まれた者がドイツ人といわれるように、預言者様もアラビア半島で生まれたためにアラブ人であるといえる。アラブ人の肌は白く、小麦色である。特に、預言者様の一族の肌は白く、大変美しいものだった。やはり、祖先である預言者イブラーヒーム様の肌も白かった。彼はバスラの住民であるタールフという名前の色の白いある信者の息子であり、不信仰者であったアーゼルは、預言者イブラーヒームの父ではなく、叔父であり義理の父である。

愛すべき預言者様の父親であるアブドゥッラーの美しさは、エジプトまで知れ渡っており、その額に持つ御光によって、二百人もの女性が結婚を求めてマッカに来たほどだった。次いで、預言者様の御光は、アーミナ様に巡り合った。

叔父のアッバースと、アッバースの息子のアブドゥッラーの肌も白かった。預言者様の子孫は終末の日に至るまで美しく、そして、肌は白いのである。

預言者様の教友たちも白く美しかった。ウスマーン様も白く金髪だった。預言者様がルームの王であるヘラクリウスに送った代理人であるドゥフエ・イ・ケルビも大変に美しかった。道を歩くと、その顔を見ようとルームの女性たちが出てきたほどだった。ジブリール様はしばしばドゥフエ様の姿になって現れていた。

エジプト、シャーム、アフリカ、シチリア、スペインの住民はアラブ人ではない。アラブ人はイスラームを広めるため、アラビア半島から出てこれらの土地に来ていたため、現在これらの地方にも住んでいるのである。やはり、アナトリア、インド、その他の地域でもアラブ人がいる。しかし、現在、これらの国々の住民のことをアラブ人というのは適切ではないだろう。

エジプトの住民の肌は浅黒く、エチオピアの住民の肌は黒いため、エチオピアのことはハベシと呼ばれていた。また、ザンジバルの住民はゼンジと呼ばれていた。彼らも黒人である。預言者様の親類や子孫を愛することや、彼らの

ことを口にすることは、一つの礼拝である。彼らのことをすべてのムスリムが愛するのである。アナトリアを訪れた黒人やエチオピア人が、尊敬や接待を受けるため自分たちのことをアラブ人であると言い、アナトリアの心の美しいムスリムたちが彼らの言うことを信じて、良く接したという出来事もあった。なぜなら、その愛情には黒人や白人の差別はないからである。黒人のムスリムは白人の異教徒より何倍も上であり、より価値があり、親しみがあるのである。黒人であることで信仰の名誉を減少させることにはならない。ビラール・ハベシ様や、預言者様が大変にかわいがったウサーマ様は黒人であった。一方、悪や下等な者として知られていたアブー・ラハブやアブー・ジャフルという異教徒たちの肌は白かったのである。アッラーは人の肌の色ではなく、信仰の強さやどれだけ罪を避けてきたかによって判断するのである。しかし、このとき黒人が自分たちのことをアラブ人であると紹介したことは、イスラームの敵であるユダヤ人に利用されることとなった。一方で彼らは、黒人を下品であり不快な者であると広めて奴隷として扱い、他方では黒猫や黒い犬に対して「アラブ人、アラブ人」と呼びかけたり、新聞や雑誌に描いた黒い絵や漫画を指してアラブ人と称し、若い人々にアラブ人が黒人であるというイメージを植え付けていた。このようにして、ムスリムの若者たちを預言者様から引き離そうとしていたのである。

善良な性格はすべて預言者様に集まっていた。善良な性格はウェフビ、つまりアッラーから与えられたものであり、ケスビ、つまり努力によって後から得られたものではなかった。ムスリムに対しては誰一人として、決して呪うようなことをしなかった。決して神聖な手で人を叩いたこともなかった。アッラーのためには復讐をしても、自分個人のために復讐することはなかった。親戚や教友たち、そして手伝いの者たちに対して謙遜し、良く接していた。家の中では大変優しく、笑顔であった。病人を見舞い、葬式に参列した。教友たちの仕事を手伝い、子供たちを膝に乗せていた。しかし、心の中には現世のことは入り込んではいなかった。神聖な魂は天使たちの世界にあったのである。

預言者様が突然現れたのを見た人は畏敬を感じたという。預言者様が優しい方でなかったら、預言者たちが持つ偉大な特徴のため、誰一人として隣に座ったり、言葉を聞くことに耐えられなかったであろう。しかし、預言者様は内

気であり、誰の顔も神聖な眼で見据えることはしなかった。世界の誇りである預言者様は、人々の中で最も寛大であった。何かを求められた場合、ありません、と答えたことはなかった。求められたものが手元にあれば与え、なければ返事を返さなかった。数多くの善や恵みを人々に与えた。ビザンチンやイランなどの王たちといえども誰一人、預言者様のように恩恵を与えることはできなかったのである。しかし預言者様自身は苦悩の生活を好み、人生の中で食べ物や飲み物については考えることはしなかった。食事を持ってきてほしい、あるいは、あの料理を作りなさい、などということはおっしゃらなかった。食事が持って来られると食べ、果物をもらうと受け取った。ときには、少ない量しか食べず、空腹を好んだ。また、ときにはたくさん食べた。食後に水は飲まなかった。水を飲むときは座って飲んだ。他の人々とともに食べるときには、最後のひと口は預言者様が口にしていた。贈物は受け取った。贈物を持ってくる人に対しては倍のお返しをした。

いろいろな服を着ることは習慣だった。外国の使節が来たときには、価値のある美しい服を着て、美しい装いを見せていた。メノウがついた銀の指輪をつけ、それを押印の際にも使っていた。その指輪の上には「ムハンマドゥン・ラスールッラー〔訳注：アッラーの預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）、の意味〕」と書かれていた。ベッドは革製で中にはナツメヤシの木の繊維を詰めていた。ときにはこのベッドで、ときには地面に曳かれた革の上で、ときには草で編んだ敷物の上で、ときには渇いた土の上で寝ていた。神聖な手のひらを右の頬の下につけ、右を向いて寝ていた。喜捨を受けることはせず、生のたまねぎやにんにくを食さず、詩も詠まなかった。

預言者様の神聖な眼は寝ることがあっても、神聖な心が眠ることはなかった。空腹の際には寝て、満腹の際には起きていた。決してあくびはしなかった。神聖な身体は輝いていたため、身体の影が地面に落ちることはなかった。また、着る物にハエが止まったり、蚊や他の虫が神聖な血を吸ったりすることもなかった。アッラーによって、預言者であることが知らされた後、悪魔は天に上がってそこから情報を得たり、占いを行うことができなくなった。占い師たちは宣託を下すことができなくなったのである。預言者様は私たちが理解できない形で今でも生きている。神聖な遺体

は決して腐ることはない。墓所では一人の天使が見守っていて、共同体の人々が発した祝福を預言者様に伝えている。ミンバルと墓所の間のことをラブダ・イ・ムタッハラという。ここは天国の庭と形容されている。預言者様の墓所を訪ねることは、最も大きな信仰行為の一つであり、尊いことである。

預言者様の美しさについて、教友の名士たちがこのように語っている。アブー・フレイレは「預言者様より美しい人を見たことがありませんでした。まるで太陽の光が顔で輝いているようでした。笑みをたたえると、歯の光が壁に反射していました」と伝えている。

イブニ・アブー・ハレは「預言者様の神聖な顔は、満月のように輝いていました」と語っている。

アリー様は「彼を突然に見た人は、その偉大さのため畏れてしまっていました。預言者様と会話をし、そして預言者様のことを知ると、すぐに心が温まり、好きになるのでした」と語っている。

ジャービル・ビン・セムーレは「預言者様が神聖な手を私の顔につけました。手はまるで香水屋のかばんから新しく出されたある芳香のような香りがし、涼やかな感じがしました。預言者様が手を誰かの手にムサーフェハのために触れると、一日中その人の手には美しい香りが残っていました」と述べている。

アーイシャ様は「預言者様がある子供の頭をなぜると、他の子供との間で、その子供のことがその香りからすぐに分かりました」と語っている。

預言者様はある日、家で眠っていた。エネス・ビン・マーリキーの母であるウンム・スレイムがやって来た。眠っている預言者様の神聖な顔からは汗が出ていた。ウンム・スレイムは預言者様の神聖な汗を集め始めた。預言者様が目を覚まし、その理由を聞くと、預言者様の乳母の叔母であるウンム・スレイムは「その汗を香水に加えるのです。あなたの汗は香りの中でも最も美しい香りをしています」と言った。

また、アブー・フレイレは「歩くときに、預言者様より素早く歩く人を見たことはありませんでした。まるで、地面が預言者様のために縮んでいたようでした。預言者様と一緒に歩くと、私たちは全力を使わなければなりませんで

した」と語っている。

預言者様は大変美しく話をした。言葉をどこから始め、どこで終えるかを完全に知っていた。言葉の言い方は分かりやすく、非常に明白だった。言葉や単語を、常に正しい意味で使っていた。説明する能力が大変優れていたため、話し疲れたり、言葉に詰まったりはしなかった。

預言者様の美しさ

ウレマー・イ・ラースィヒーンといわれる、有形無形の学に優れた学者であり、預言者様の代理人ともなる偉大なイスラーム学者たちは、預言者様のあらゆる美しさを見ては、いとおしくなっていたという。その先頭を行く人物としてはアブー・バクル・スィッディーク様がいる。彼は預言者様にある預言者の御光を見て、その秀でた美しさや偉大さを理解していとおしみ、彼ほどにいとおしむ人は誰もいなかったという。アブー・バクル様の視界には常に、預言者様があった。一度、この状況について「預言者様よ！どこを見ても私はあなたを見ます」と語ったことがあった。また別のときには「私のあらゆる善はあなたの一つの間違いに匹敵します」とも語っている。預言者様の美しさを理解し、これを説明する別の一人は、信者たちの母であるアーイシャ様であった。アーイシャ様は学者であり、ムジュタヒド（自分自身の解釈・判断によってイスラーム諸学の見解を示す資格を持つ学者）であり、頭がよく賢明で、文学者でもあった。また、大変分かりやすく話をした。クルアーンの意味をはじめ、許されたことや禁じられたこと、アラブの詩や数学もよく理解していた。預言者様を褒め称える詩も多く残している。次の二行連句はアーイシャ様が作ったものである。

「もしエジプトの人々が
彼（預言者様）の頬の美しさを聞いていたら
（美しさで有名な）預言者ユースフに決してお金を渡さなかったでしょう
つまり、すべての資産を彼の頬を見るために取っておいたことでしょう
ゼリハーに「預言者ユースフに心打たれた」と噂していた女性たちが
預言者様の御光に満ちた額を見ていたら
手の代わりに心を切っても痛みを感じなかったことでしょう」

アーイシャ様はこのように語っている。「ある日、預言者様が神聖なサンダルの紐を外していました。私は糸車で糸を紡いでいました。預言者様の神聖な顔を見ました。御光に満ちた額から汗が流れていました。汗の滴が周りを輝かせていて、私の眼をくらませ、私は驚いていました。すると預言者様が私を見て『そのように我を忘れて、どうしたのですか？』とおっしゃいました。『預言者様！神聖な顔の光の輝きや、神聖な額の汗の滴のまばゆい光で我を忘れてしまいました』と答えました。預言者様は私のところへ来て、私の目の間に口づけし『アーイシャよ！アッラーがあなたに善を授けますように。あなたが私を喜ばせたほど、私はあなたを喜ばせませんでした』とおっしゃいました」つまり、あなたが私を喜ばせることの方が、私があなたを喜ばせることよりも多い、とおっしゃっていたのである。預言者様がアーイシャ様の神聖な目の間を口づけしたのは、彼女が預言者様を愛し、預言者様の姿を心から理解していたためであった。このために、その評価や称賛を与えられたのである。

預言者様の神聖な身体に現れる美しさは、他の人々の身体にはないものであった。イマーム・クルトゥビ様はこのように伝えている。「預言者様の美しさは、すべてが見えるわけではありませんでした。もし真の美しさが見えていたら、教友たちは預言者様を見ることに耐えられなかったことでしょう。真の美しさを見せていたら、誰も預言者様を見ることに耐えられなかったことでしょう」

預言者ユースフは外面の、私たちの預言者様は内面の美しさで人々を魅了した。預言者ユースフの顔を見たとき、思わず手にしていたナイフを滑らせて手を切ってしまったという話がある。一方、預言者様の場合は、そのあらゆる面での美徳によって司祭たちの腰紐は切れ、像は壊れ、不信仰の雲は砕けたのである。

教友たちは預言者様に「預言者様！あなたが美しいのですか、それとも預言者ユースフの方が美しいのでしょうか」と尋ねた。預言者様は「兄弟のユースフの方が私よりも美しかったのです。一方、私は彼よりも愛おしいのです。彼に見える美しさは、私に見える美しさよりも多いのです」と返事をした。

あるハディースによると、預言者様は「アッラーが送ったすべての預言者たちの顔や声は美しいものです。あなた方の預言者の顔や声は、最も美しいものです」とおっしゃったという。

クルアーンで書かれた預言者様の名前の一つは、クルアーンの心とも言われる『ヤー・スィーン章』の『ヤー・スィーン』という言葉である。イスラーム学者であるウレマー・イ・ラースィヒーンの名士の一人、サイード・アブドゥルハキム・イ・アルワースィー様は「ヤー・スィーンとは『私の愛の海の潜水士である最愛の者』という意味である」と述べている。この海の名前を聞く人々や、遠くから見た人々、近くまで来る人々、中に入って自分が得られる恵みまで深く入った人々全員が、人生のあらゆる時期で預言者様の愛情に燃え、嗚咽や涙、燃える言葉でその愛情を表すのである。そのような人々の中でも最も有名な一人が、この愛情の海から大きな恵みに巡り合ったメブラーナ・ハリディ・バーダーディ様である。預言者様に対する愛情や情愛を言葉に表した詩の一つで、彼はこのように表している。

全世界の王、あなたを愛し、心は燃える！
どこにいようと、あなたの美しい姿を探す

カーバ・カーセインの玉座の主はあなた、私には何もない
あなたの客であると言うのもはばかられる

地上すべてはあなたのために創造された
あなたの慈悲が私にも降れば、そのとき私の春となる

皆がカアバを周回しようとヒジャーズを訪れる
あなたに会いたい熱望とともに私は山を越える

夢の中で、私の頭に幸せの冠が置かれた
私の顔にはあなたの足元の土がまかれた

親友を称賛する愛のナイチンゲールである、ジャーミよ！
詩集にはこう書かれている、それが私を表している

「舌を出して水に浸す病の犬のように
あなたの恵みの海から一滴のしずくを求める」

預言者様を讃える詩以外にも、預言者様のためには多くの本が書かれている。これらの中でも最も有名であるものや、その技法が全世界で何世紀にもわたって生き続けたものでさえ、預言者様を讃えきることはできないと言われている。預言者様を見てその美しさを愛した者が、言葉の限りに説明を尽くそうとしても、その美しさを知らせるには人の力では不足していると証言している。イスラーム学者の本では、その愛情を持つ人々が知らせたことが何百も書いてある。読者はアッラーの愛する預言者が、考えられない地位で、そして、見飽きることのない美しさで創造されたことを理解することになり、見ずして預言者様に心を打たれることになる。預言者様に愛情をもつ者は、すべての息で肺に入る空気の涼やかさをもって、預言者様に対する愛情を感じるものである。そして、月を見るたびに、預言者様の神聖な目から来る光の反射を探すことを喜びとする。預言者様の美しさの海から一滴でも得られた者はすべて

「美しい声を知る者は
決してバラを見ようとしない
あなたの愛情に溶ける者は
薬を探すことはない」

と言うのである。
エネス・ビン・マーリキーが伝えたあるハディースによると、預言者様は「あなた方の誰でも、私自身のことを、その人の子供や父親、あるいは他の人々より愛情を持たなかったら、信仰したことにはならないのです」と伝えている。
ある日、ウマル様が預言者様に「預言者様よ！アッラーに誓って、私の命以外、何よりもあなたの方が愛おしいです」と言った。すると、預言者様は「自分自身の命よりも私の方が愛しいのでなければ、あなた方は誰一人として信仰に至ってはいないのです」とおっしゃった。これに対してウマル様は「預言者様！あなたにクルアーンを下したアッラーに

誓って、あなたは私の命よりも愛しいものです」と言うと、預言者様は「ウマルよ！今（充分）となりました」とおっしゃった。
ある人が預言者様のところへ来て「預言者様、終末の日はいつになるのでしょうか?」と聞いた。預言者様は「終末の日のために、どのような準備をしましたか?」と尋ねた。その人は「はい。たくさんの礼拝をし、断食をし、施しを行って終末の日の準備をしました。しかし私はアッラーやその預言者を愛しています」と言った。これに対して預言者様は「人は愛するものとともにあります」とおっしゃった。
預言者様を愛することは、すべてのムスリムにとって義務とされている。預言者様の愛情を心に刻んだら、イスラームの道に生きることや信仰、イスラームの味に飽きることはなく、より簡単になるのである。この愛情は現世と来世の王に完全に従うこととなる。そして、この愛情により、アッラーが愛すべき預言者様に与えた永遠や、説明のできない恩恵や慈悲に恵まれる名誉が与えられる。子供から大人まで、ムスリムであれば誰でも、直接預言者様の愛情に導く学者や本が、その恵みの保証となっているのである。
預言者様の神聖な名前を念唱する者や聞く者や信者は、預言者様の神聖な談話の場にいるように、静かに礼儀正しくし、心や身体を正すべきなのである。
預言者様の神聖な言葉や行動を知らせる場合、それが一つのことであっても、預言者様の名誉が上がるような形で伝える必要がある。それは、預言者様に対する尊敬を表すことである。人々の間で使われる、下品な言葉や地位の低い者に対して発せられる言葉を、預言者様に対して決して使ってはならない。
例えば、預言者様に対して貧乏人であるとは言えない。また、羊飼いとも言えない。また、預言者様は何々を好んでいた、と言って、しかし私はそれを好まない、と言ったら、それは否定することとなる。預言者様が「私は背をもたせて食事を取ることはしません」とおっしゃったことに対して誰かが「私は背をもたせて食事をとります」と言い、そのようにして食事をしてはならない。このように反対のことを行うことは、預言者様に対する否定となるのである。

このようなことをわざと行ったり、あるいはあまり気にかけたりしないのは、不真面目であり、不信仰へとつながる道となるのである。

また、クルアーンやハディースの本の上には、他の本や他の物を置かないことが、アッラーや預言者様に対する敬意の一つである。それらの上の埃を拭き、中にアッラーの祝福された名前や預言者様の神聖な名前が書かれた紙を捨てないことも、アッラーや預言者様に対する敬意の一つである。

このような紙を破ってはならない。イスラームの言葉が書かれた紙には、より多くの敬意を払わなければならないのである。もし、アッラーの祝福された名前やクルアーンの節が書かれた本や紙が古くなって破れたら、それらをきれいな布に巻いて土に埋めるか、水で洗ってその文字を消すか焼いて灰にしてから埋めるようにするのが適切である。焼く方が洗うことよりも、より良いとされている。なぜなら、洗うときに使う水が足下に落ちる可能性があるからである。

預言者様の家であるマディーナにも敬意や尊敬を示すこと、そこでは禁じられたこと（罪を犯すこと）を防ぐこと、また、マディーナの住民に良く接することも預言者様に対する敬意があるからこそ行われることである。

愛する者はあなたへの愛情で焼けるのです、預言者様
愛情のワインを飲んで、のどの渇きを潤すのです、預言者様

あなたを愛する人は、あなたのために頭を捧げます
現世と来世の太陽はあなたです、預言者様

あなたを愛する者たちをおとりなし下さい
信者にとってあなたは命、預言者様

あなたの姿を私は愛する、それはバラの庭のナイチンゲール
あなたを愛さない声など燃えてしまいますように、預言者様

あなたを愛するアッラーは万物の皇帝
私の命をあなたのために犠牲にします、預言者様

ダルウィーシュ・ユヌスの命を救い、全世界をとりなすのは
現世と来世の王であるあなたです、預言者様

預言者様の優越性

偉大な徳

アッラーは、自身が愛する預言者様に与えた恩恵や美徳を伝え、また、預言者様の神聖な心をなぜながら、預言者様に美しい特性を与えたことを知らせている。クルアーンでも、あなたは美しい特性をもって創造された、という意味の啓示が存在する。イクリム様はこのように語っている。「アブドゥッラー・イブニ・アッバースから聞きました。この節での『フルーク・アズィーム』つまり美しい特性というのは、クルアーンで啓示されていた徳のことを指すのです」クルアーンの節では『本当にあなたは、崇高な徳性を備えている』（筆章（アル・カラム）第四節）と下されている。『フルーク・アズィーム』とは、アッラーとの間での神秘や神意があることや、人々の間で善なる性格を持つことという意味になっている。大勢の人々がイスラームへと導かれるにあたっては、この預言者様の美しい徳がその理由となったのである。

その言葉は優しく、人の心をとらえ、魂を引き付けていた。そして、大変賢明であった。アラビア半島という、強情で頑固な人々の間から出て見事に導き、彼らの残忍さに耐え、彼らを優しさへと誘った。大勢が元の宗教を捨ててムスリムとなった。また、イスラームの道では父や子に対しても戦うことがあった。そのために、資産や母国を追われ、血を流したのである。しかし、このようなことは以前の慣習ではなかったことだった。預言者様の美しい性格や優しさ、許容や忍耐、美徳や寛大さは非常に大きく、大勢の人々を感心させていた。だから、彼を見る者や聞く者は喜んでムスリムとなったのである。行動や行為の一つとして、あるいは語る言葉の一つとして、醜いことや過ちは決して見られなかった。預言者様は誰のことも恨むことはしない一方、イスラームに対する敵や宗教に口や手を出す者に対しては、厳しく激しかった。

預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）は、何千もの奇跡を見せた。それを仲間や敵に対して語っている。この奇跡のうちでも最も優れていたものは、預言者様自身の礼儀正しさと高尚な性格であった。アブー・サイード・イ・フドゥリ様はこのように語っている。「預言者様は家畜に草を与えていました。ラクダをつないでいました。家を掃除していました。羊の乳を搾っていました。靴の壊れたところを直し、服の継ぎ当てをしていました。貧乏人や金持ち、子供と会うと、自分から先に挨拶をしていました。彼らとムサーファハ（握手をし、互いの顔を見ること）をするため、神聖な手を先に伸ばしていました。奴隷や主人、名士、黒人や白人などの差別はしませんでした。誰であっても呼ばれたところへ行きました。前に出されたものについて、不足しているなどと言って、下に見ることはしませんでした。食事は夜からのものを朝に、朝からのものを夜には残しませんでした。非常に善良な性格でした。良いことをするのを好み、誰にでも良い関係を保っていました。笑みをたたえ、優しい言葉を話し、話すときには笑いませんでした。悲しげに見えていました。しかし、眉間にしわを寄せるようなことはありませんでした。謙虚でした。しかし、卑屈ではありませんでした。威厳があり、尊敬や畏れを発していました。しかし、荒っぽいわけではありませんでした。上品で寛大でした。しかし、浪費はせず、必要のないところに与えることはなく、人々に憐みをかけました。神聖な頭はいつもうつむいていました。誰に対しても期待をしませんでした。幸福や幸せを求める者は、預言者様のようになるべきなのです」

エネス・ビン・マーリキーはこのように語っている。「預言者様に十年間お手伝いをしましたが、ただの一度も愚痴を言うことはありませんでした。また、それをどうしてこのようにしたのですか、あるいは、なぜこれをしませんでしたか、ということもおっしゃいませんでした」

アブー・フレイレは「ある戦いで、異教徒を滅ぼすよう預言者様に祈念を求めました。すると預言者様は『私は呪いをかけたり、人々に罰を与えたりするために送られたわけではないのです。私はすべての人に対して善を行い、幸せに導くために行かされたのです』とおっしゃいました」と伝えている。アッラーはクルアーンの『預言者章（アル・

アンビヤーゥ））』第一〇七節で『われは只万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである。』と下している。
アブー・サイード・イ・フドゥリはこのようにも語っている。「預言者様が持っていた恥じらいは、処女のムスリムの女性たちよりも深いものでした」
エネス・ビン・マーリキーはこのように述べている。「預言者様は誰かとムサーファハを行うと、相手が手を引くまで、神聖な手を引くことはしませんでした。相手が顔を離すまで、神聖な顔を離しませんでした。誰かと一緒に座るときは、正座して座り、相手に対して敬意を示すため、片膝を立てたりはしませんでした」
ジャービル・ビン・スムレはこのように語っている。「預言者様は、あまり多くは話しませんでした。必要なときや聞かれたときに話しをしていました」このことから分かるのは、ムスリムは必要のないことを話さず、静かにしているべきなのである。預言者様の神聖な言葉は明確で、大変に適切で分かりやすいものであった。
エネス・ビン・マーリキーはこのように語っている。「預言者様は病人を見舞い、葬式の列に加わり、招かれたところに行きました。ロバにも乗りました。預言者様をハイバルの戦いで見かけました。紐の手綱のロバに乗っていました。預言者様が朝の礼拝を終えると、マディーナの子供たちや、働いている人々が水を入れた入れ物を預言者様の前に持ってきて、神聖な指を中に入れてもらうように求めていました。冬の冷たい水であっても、彼らの願いを拒んだりはせず、彼らの心に優しく接していました」
また、エネス様はこのようにも述べている。「ある小さな女の子が預言者様の手を取り、何かをするために連れていこうとしました。預言者様は一緒に行ってその問題を解決していました」
ジャービル様はこのように語っている。「預言者様が何かを求められたとき、ありません、と答えるのを聞いたことはないのです」
また、預言者様は恥を持つことに関して、創造されたあらゆるものよりも優れていた。不適切なものに対しては、目が閉じられていた。誰であろうと相手の好まない呼び方では呼びかけなかった。

アーイシャ様はこのように語っている。「誰かが好ましくないことを行ったという知らせを預言者様が受けると、その人の名前を言わずに全体的な話として『彼らはなぜこのようにするのですか？』とおっしゃっていました。このようにしてその人が、行っていることや言ったことから手を引くようにしながらも、名前は知らせなかったのです」
エネス・ビン・マーリキーはこのように語っている。「ある日、預言者様の前に、顔に黄色い何かをつけていた人が入ってきました。彼には何も言いませんでした。相手を悲しませるような言葉を言わなかったのです。彼が外に出ると『顔についたものを洗うように言わなかったのはどうしてなのでしょうか？』と尋ねました」
預言者様は部族間の関係を良好なものにするようにしていた。彼らが互いに恨みを持たないようにさせていた。すべての部族の名士には、部屋の角の良い場所に座るよう求めていた。
誰に対しても神聖な姿を隠そうとすることはしなかった。教友たちを見れば、いない人のことを尋ねた。一緒に座る者には忠告を行い、彼らが必要としていることを与えていた。
また、その行動によって、別の人のことの方をより好んでいるだろう、という考えを思い起こさせなかった。苦情を申し立てにやって来た人のことに我慢して聞いていた。
訪れる人が自ら出て行かない限り、その人を一人にはさせなかった。すべての人々に対し、美しい性格や徳を最も適切な形で示していた。預言者様から見て、人々の権利や公正さは誰に対しても平等だった。誰かが誰かよりも上であるというような区別はしなかった。
アーイシャ様はこのように述べている。「預言者様ほど美しい徳を持つ方は見たことがありませんでした。教友たちや家族の一人が預言者様にいつ声をかけたとしても、必ず「どうぞ」と返事をしていらっしゃいました」
預言者様は教友たちを美しい名前で呼びかけ、人が話すときに間に割って入ることはしなかった。相手が話し終わるまで、あるいは行こうとして立ち上がるまで相手の言葉を切ることはなかった。
預言者様のこのような良い接し方や心の優しさ、慈悲についてアッラーが『…かれは、あなたがたの悩みごとに心

を痛め、あなたがたのため、とても心配している。信者に対し優しく、また情深い。』とクルアーンで啓示している。（悔悟章（アッ・タウバ）第一二八節）

さらに、『預言者章（アル・アンビヤーゥ）』第一〇七節では『われは只万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである。』と下されている。

約束を守ることにあたっても、人々の間で預言者様よりも優れた者はいなかった。

アブドゥッラー・ビン・アブル・ハムザはこのように語っている。「預言者様とは、自身が預言者様であると知らされる前から、互いに商取引がありました。彼には少し残金がありました。そこで、どこそこでいつ会うというように約束をしましたが、私がそれを忘れてしまいました。三日後、その約束を思い出し、すぐそこへ走って行きました。彼が三日間そこで待ち続けていたのを見ると、驚きのあまり言葉を失ってしまいました。私に『若者よ、私を疲れさせてしまいました！私はあなたをここで三日間待っていました』とおっしゃいました」

預言者様の持つ謙虚さは、他の人や、さらに言えば他の預言者にも見られないほど多く、そして比類のないものだった。

不遜な感じは預言者様には決して見られなかった。預言者様は王としての預言者と、しもべとしての預言者を選べる権利が与えられていたが、彼はしもべとしての預言者を選んだのであった。

これに関して、天使イスラーフィール様は預言者様に「間違いなく、アッラーは謙虚さという徳をあなたに与えました。なぜなら、終末の日、アーデムの子孫の中で最大の名士はあなただからです。墓からよみがえる最初の人間はあなたです。最初に仲裁を行うのはあなたです」と語っている。

預言者様はアーイシャ様にこのようにおっしゃった。「私は、マッカの石や土を金とさせましょう、という提案を受けました。『いいえ、アッラーよ』と答えました。一日は空腹で一日は満腹とします。空腹の日にはあなたに懇願します。満腹の日にはあなたに感謝し、称賛するのです」

大天使ジブリールが預言者様のもとに来て「アッラーがあなたに挨拶を送っています。望むのであればあの山々をあなたのために金に変えましょう。どこに行っても、その金の山があなたとともにあります」と言った。

愛すべき預言者様はこのように返事をした。「ジブリールよ！この世は家を持たない者の家なのです。そして、資産を持たない者のものなのです。頭を使わない人がこれらを集めるのです」

これに対してジブリール様は「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！アッラーがあなたを堅固にし、あなたを不動とさせました」と言った。

アーイシャ様は「ときには、一ヶ月待っていても、家で（料理を作るために）火をつけることがありませんでした。ただ、なつめやしと水があっただけでした」とおっしゃっている。

イブニ・アッバースは「預言者様とその家族は、多くの夜、夕食を食べずに休んでいました。夕方に食べるものがなかったのです」と述べている。

アーイシャ様はこのように語っている。「預言者様の神聖な腹は、決して食事で一杯になることはありませんでした。しかし、このことで誰にも不満を言いませんでした。欠乏は彼にとっては、過剰よりよかったのです。一晩中、空腹であっても、そのために翌日、預言者様が断食をすることに何の影響も与えませんでした。

預言者様が望めば、アッラーは地球すべての宝や食べ物をもって、豊かな生活を送ることができていました。アッラーに誓って、預言者様のこのような状態を見ると、同情して泣いていました。手で神聖な腹をさすり『命をあなたに捧げます！あなたに力を与えてくれる、この世からのいくつかのことで利益を得るのはいけないことなのでしょうか？』と尋ねました。

預言者様は『アーイシャよ！私がこの世のことで何をしようというのでしょう。偉大な決意を持った預言者たちの兄弟は、これよりも大きな苦悩に我慢していたのです。しかし、その状態でもこの生き方を続け、アッラーに再会したのでした。

ですから、彼らはアッラーのもとに戻るためによい方法をとり、それぞれの善行を増やしました。私が豊かな生活を送るのは恥なのです。なぜならば、そういった生活が私を彼らから取り残させるからです。
私にとって最も好ましいのは、兄弟たちや親友たちに再会し、彼らの間にいることでなのです』とおっしゃいました」
アーイシャ様は、さらにこのように語っている。「預言者様はこのように語った一ヶ月後に亡くなりました。
預言者様は寛大さについても、人々の間で知られていました。この美しい性格に関しては、誰も預言者様の域には達しませんでした」
イブニ・アッバースが「預言者様は良いことをするにあたって、人々の中で最も寛大でした。ラマダーンのときや、大天使ジブリール様と会ったときには、朝の風よりもさらに寛大でした」と述べている。
エネス・ビン・マーリキーはこのように語っている。「預言者様と一緒に歩いていました。預言者様はブルディ・ネジュラーニを持っていました。つまり、イエメン製の布で出来ていた外套を着ていました。後ろからある村人が来て、襟をあまりにも強く引っ張ったため、上着の襟が預言者様の神聖な首を傷つけ、その痕が残りました。預言者様はその人に微笑み、彼に何かを与えるように命じられました。

預言者様の近所には、ある年寄の女性がいました。その人が預言者様のところに娘を送り『礼拝をするために着る服がありません。私に礼拝できるよう何かを送ってください』と頼んでいました。預言者様はそのとき、着ていたもの以外の服を持ってはいませんでした。神聖な身体につけていたシャツを脱ぎ、その女性に持って行かせました。礼拝の時間となると、服がないためモスクへ行けませんでした。教友たちは、このことを聞くと『預言者様はあまりにも寛大だったため、シャツもなくモスクに来られなかったのです。私たちも持っているものすべてを貧乏人に配りましょう』と言いました。アッラーはすぐに、『夜の旅章』（アル・イスラーゥ）第二九節を啓示しました。まず、愛すべき預言者様に対して『あなたの手を、自分の首に縛り付けてはならない』と下され、その後『また限界を越え極端に手を開き、恥辱を被り困窮に陥ってはならない。』と下されました。

その日、礼拝の後、アリー様が預言者様のところに行き『預言者様！　今日、子供たちに食事を出すために八ディルハムの銀を借りました。このうちの半分をあなたに差し上げたいと思います。これで預言者様自身に服を買ってください』といいました。預言者様は市場に行き、二ディルハムで服を買いました。残りの二ディルハムで食べ物を買いに行く途中、一人の目の不自由な人が座っているのを見かけました。その人は『アッラーの満足を得て、天国の服を手に入れるため、誰が私に服を与えてくれるのでしょうか？』と言っていました。預言者様は買ったばかりの服を彼に与えました。目の不自由な人は、その服を手にすると、ムスクのような美しい香りがし、これが預言者様の手から渡されたことが分かりました。なぜなら、預言者様が一度着たものは、古くなってばらばらになっても、それぞれの断片が美しい香りを放っていたからでした。

目の不自由な人は祈念をして『アッラーよ！　この服に免じて私の目を見えるようにしてください』と言いました。すると、すぐに両目が見えるようになりました。預言者様はその場を離れ、一ディルハムで再び服を買いました。一ディルハムで食料を買いに行く途中、ある手伝いの女の子が泣いているのを見かけました。『少女よ、どうして泣いているのですか？』と尋ねました。『私はあるユダヤ人の手伝いです。私に一ディルハムを与えました。その半分で一つの瓶を、残りの半分で油を買うように言いつかっていました。それらを買って帰る途中でした。すると手から滑らせ、落としてしまったのです。瓶も油も駄目になってしまいました。どうしたらよいのか途方に暮れています』と言いました。預言者様は最後のディルハムをその女の子に渡し『これで、瓶と油を買って家に戻りなさい』とおっしゃいました。女の子が『家には戻るのが遅くなったので、ユダヤ人が私を殴るのではないかと心配しています』と言うと『大丈夫です！　あなたと一緒に行って、あなたに何もしないように私から言いましょう』とおっしゃいました。

その家に来て扉を叩きました。ユダヤ人が扉を開けると預言者様を見て驚きました。預言者様はユダヤ人に起こったことを告げ、女の子に何もしないようおっしゃいました。ユダヤ人は預言者様の足を抱き『何千人もの人々の冠であり、何千人もの戦士がその命令を待つ偉大なる預言者様よ！　一人の手伝いの女の子のため、私のような貧しい者の

ところまで名誉を授けにいらっしゃったのですか。預言者様よ！　この少女をあなたの名誉に免じて自由にさせます。私にも信仰とイスラームを教えてください。あなたの前でムスリムとなりましょう』と言いました。預言者様は彼にイスラームを教えました。彼はムスリムとなって家に入り、家族にこのことを説明しました。家族は全員ムスリムとなりました。このようなことは預言者様の美しい品格によって起こったことなのでした」

預言者様の美しい品格は数多くあった。ムスリムは誰でもこれを学び、このようなことで徳を高めていくべきである。このようにすることで、現世や来世の災いや苦悩から解放され、現世と来世で預言者様の仲裁に巡り合うこととなるのである。

預言者様の美徳のいくつかは下のとおりである。

一、預言者様は次の点などにおいて、他の預言者たちよりも多かった。知識、学識、聡明さ、明確に知ること、知覚、才能、寛大、謙虚、忍耐、努力、宗教や人々の権利を護ること、誠実、安心感、正しいことについて誰からも恐れないこと、偉大さ、相手にあわせた形で話すこと、明瞭で美しく述べること、忠告を即座に理解すること、顔の美しさ、罪から遠ざかること、貞節、恩恵、公平、恥、現世を重視せず多く礼拝すること、宗教が禁じたものから遠ざかること、アッラーを畏れることなど。また、親友や敵から受ける害や苦悩を赦していた。誰に対しても復讐を行わなかった。ウフドの戦いのとき、異教徒たちが頬に傷をつけ、神聖な歯を折ったときにも、そうした人々に対して「アッラーよ！　彼らを許したまえ。彼らは無知なのです」とおっしゃっている。

二、預言者様は自分自身を他の人よりも上に見ることをしなかった。ある旅の際、羊を料理するときに、一人が「私が切りましょう」と言った。別の一人が「私は皮をはぎましょう」と言った。別の一人は「私が焼きましょう」と言った。すると預言者様は「私は薪を集めましょう」と言った。他の人々は「預言者様！　あなたは休んでください。私たちが集めます」と言った。しかし預言者様は「はい、あなた方ですべてを行おうとしていることは分かっています。しかし、私は仕事をする者から離れていたくはないのです。アッラーは兄弟たちから離れて座っている者のことを好まないのです」とおっしゃって、薪を集めに行かれた。

三、教友たちが座っているところに行ったとき、最も良い場所には座らなかった。見つけた隙間に座っていた。ある日、杖を手にして外出したとき、預言者様を見た人が立ち上がった。すると「他の人が互いに起立しているように、私のために起立はしなくてよいのです。私もあなた方と同じ人間なのです。皆のように食べますし、疲れれば座ります」とおっしゃった。

四、概ね、立膝をついて座っていた。立膝をつき、膝を手で抱えていたのが見られていた。食べ物や着る物、その他のことで手伝いの者がいつもそばについていたが、預言者様は彼らの仕事を手伝っていた。誰一人に対しても殴ったり、醜い言葉をかけたりすることはしなかった。常に手伝いをしていたエネス・ビン・マーリキーは「預言者様には十年間手伝いをしました。しかし、預言者様が私にした手伝いの方が、私が預言者様にしていた手伝いよりも多かったのです。傷つくようなことを口にしたり、きつい言葉をかけたりすることはありませんでした」と語っている。

五、朝の礼拝が終わった後、一団に向かって座り「病人の兄弟はいますか？　見舞いに行きましょう」とおっしゃっていた。病人がいなければ「亡くなった方はいますか。手伝いに行きましょう」とおっしゃっていた。もしあれば、遺体を清めたり、白布で覆ったり、礼拝をしたり、墓まで行ったりしていた。亡くなった人がいなかった場合「夢を見た人はいますか？　それが何を意味するのか聞きましょう」とおっしゃっていた。

六、客や教友たちの手伝いを行い「集まった人たちの中で、最も優れている者は、手伝いをする者です」とおっしゃった。

七、大声で笑っていることは見られなかった。静かに笑みをたたえていた。笑うときには神聖な前歯が見えた。

八、必要のない、役に立たない言葉を発しなかった。必要なとき、簡潔に、有益で明瞭な意味の言葉をおっしゃった。よく理解してもらうため、三度繰り返して述べたこともあった。

九、預言者様の偉大さから、誰もその顔をじっと見つめることはできなかった。誰かが来て神聖な顔を見ると、そ

の人の顔は汗ばむのだった。すると預言者様は「緊張しないでください。私は王でもないし残忍な人でもありません。肉のスープを食する、ある女の息子です」とおっしゃっている。このように言うことで、相手の畏れが消え、言いたいことを言い始めることができたのだった。

十「あなた方の中でアッラーを最も理解し、アッラーを最も畏れるのは私です」「私が見ていたものをあなた方が見ていたら、少なく笑い、多く泣いていたことでしょう」とおっしゃった。空に雲を見ると「アッラーよ！この雲で私たちに罰を与えないでください」、風が吹けば「アッラーよ！私たちによい風を送ってください」、雷の音が聞こえると「アッラーよ！私たちを傷つけず、私たちを殺さずに、私たちに罰を与えず、健康を与えてください」と願っていた。礼拝をするとき、嗚咽するような声が預言者様の胸からしていた。クルアーンを詠むときも同様だった。

十一、心の強さや、真実に関して人々を怖れないことは、驚嘆するほどであった。フネインの戦いの際、ムスリムたちが散り散りになって、周りに三、四人しか残されていないことがあった。それにもかかわらず、何度も異教徒たちの攻撃に対して一人で立ち向かい、決して後退しなかった。

十二、非常に寛大だった。何百頭ものラクダや羊を与える一方、自分には何も残さなかった。多くの心の固い異教徒たちがこのような美徳を目の当たりにして、信仰するようになった。

十三、妻たちや手伝いの者たちに、一年分の大麦やナツメヤシを取り置いておき、その中から貧乏人に施しを与えていた。

十四、食べ物のうち、羊の肉、肉のスープ、かぼちゃ、デザート、はちみつ、ナツメヤシ、ミルク、クリーム、すいか、メロン、ブドウ、きゅうりを好んでいた。

十五、水をゆっくりとバスマラを言いながら三度で飲み切り、最後に「アルハムドゥリッラー」とアッラーに感謝をし、祈念を行っていた。

十六、着られるものは、許されている限り何でも着ていた。厚い布やイフラーム（巡礼着）のような縫っていない布をかけたり、腰巻を巻いたり、シャツや外套も着ていた。これらは綿や羊毛、毛糸で出来ていた。多くは白く、ときには緑色だった。裁縫された服を着ていたこともあった。金曜日や祭りの日、そして国外からの代表団が来ていたとき、また戦いの際には、価値あるシャツや外套、緑や赤、黒の色の入ったものを着ていた。服の長さは、腕は手首まで、神聖な脚は脛の半分までだった。

十七、アラビア半島での習慣により、髪の毛は耳まで伸ばしていて、それ以上になると切っていた。髪の毛には特別に作られた、美しい香りのする油をつけていた。

十八、手や頭、顔にはムスクやその他の香りをつけ、沈香（ジンチョウゲ科の香木）やクスノキを焚いて香りをつけていた。

十九、敷布団の中身にはナツメヤシの木の繊維が詰められ、外側はなめした革だった。中に羊毛が入っている敷布団が持ってこられたときにはそれを断り「アーイシャよ！アッラーに誓って、私が望めばアッラーはあらゆるところに金や銀の山を私のところに置いたことでしょう」とおっしゃった。ときには、植物の繊維で作ったござや木、敷布団、羊毛で編んだ敷物、あるいは土の上でも寝ていた。

二十、毎晩、目に三度アイラインを引いていた。

二一、家には鏡やくし、アイラインの入れ物、ミスワーク、はさみ、糸と針が常備されていた。旅をするときにもこれらを持っていた。

二二、夜の礼拝が終わると夜半まで寝て、その後起きて、朝の礼拝の時間まで礼拝を行っていた。身体を右にして寝て、右手は頬の下に置き、クルアーンからいくつかの章を詠んでから寝ていた。

二三、初めて見たものや突然見たものを良い兆候ととらえ、悪い兆候とは考えなかった。

二四、悲しいときには自分のあご髭をつかんで考えていた。

二五、悲しいときにはすぐに礼拝を行い始めた。礼拝の喜びや満足感によって、悲しみを消していた。

預言者様はアッラーのことを畏れ、そのアッラーに対する服従や礼拝は大変に多かったため、他の人は預言者様のこのような行為に誰も力が及ばなかった。神聖な脚が腫れるまで礼拝をしていたのである。「預言者様！ あなたは過去の、そして将来のすべての罪が赦されているというのに、なぜここまで自分を苦労させているのですか？」と聞かれると「私は、アッラーに最も感謝するしもべになりたいのです」と返事をしていた。

預言者様の美徳

預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の美徳を知らせている書物は何百冊もある。美徳というのは優れた点のことである。それらのいくつかを例示する。

一、創造されたものの中では、最初に預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の御光や魂が創られた。

二、アッラーが彼の名前を天の最も高いところや、天国の七段の天空に記した。

三、インドで見つかったバラの葉には「ラー・イラーハ・イラッラッラー、ムハンマダン・ラスールッラー〔訳注…アッラーのほかに神はなく、ムハンマド（アライヒッサラーム）は預言者である〕」と記されていた。

四、バスラの近くにある川で釣れた魚の右面に「アッラー」、左側に「ムハンマド（アライヒッサラーム）」と書かれているのが見つかった。

五、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の名前を言う義務だけを持つ天使たちがいる。

六、天使たちが預言者アーデムに跪拝するよう命じられたのは、額に預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の御光があったためである。

七、アッラーはすべての預言者たちに、ムハンマド（アライヒッサラーム）が来ることや、その時期になったときには、共同体が彼に従うよう命じるよう伝えた。

八、預言者様の誕生の際、大きな印が見られた。歴史書や預言者様の誕生について触れている書物にそのように記録されている。

九、誕生の際、既にへその緒は切られ、割礼もされていた。

十、預言者様がこの世に来ると、悪魔たちは空に上がって天使から情報を盗むことができなくなった。

十一、預言者様がこの世に来ると、地上にあったすべての像や、崇められていたものがうつ伏せに倒れた。

十二、揺りかごを天使たちが揺らしていた。

十三、揺りかごにいたとき、空にある月と対話し、神聖な手で示した場所に動かした。

十四、揺りかごにいたときに話し始めた。

十五、子供の頃、外を歩くと、頭の位置に一つの雲が一緒に動き、日陰を作っていた。この状態は預言者となるまで続いていた。

十六、すべての預言者たちの右手には、預言者である印があった。ムハンマド（アライヒッサラーム）の印は神聖な背中の肩甲骨の近くの、心臓と同じ高さにあった。

十七、前を見るのと同様に後ろも見えていた。

十八、明るいときに見るのと同様に、暗いときにも見えていた。

十九、唾によって苦い水でさえ甘くさせた。それは病人には薬となった。また、赤ん坊には乳のように、離乳食のようになった。

二十、目が寝ていても、心は起きていた。すべての預言者たちが同様だった。

二一、一生あくびはしなかった。（すべての預言者たちが同様である）

二二、神聖な汗はバラのように美しい香りをしていた。ある貧乏人が娘を結婚させるとき、預言者様の助けを求めた。しかし、そのとき与えるものが何もなかった。そこで、小さな瓶に汗を入れて与えた。娘が顔や頭にそれをつけると、

家はムスクのように香るようになった。彼女の家は「芳香の家」という名前で有名になった。

二三、中背であったが、背の高い人と一緒にいたときは背が高く見えていた。

二四、太陽や月の光のもとで歩いても、影が地面に映らなかった。

二五、身体や服にはハエや蚊などの虫がつかなかった。

二六、下着をいくら来ても汚れることはなかった。

二七、歩いたときには、後ろから天使たちがついていた。そのため、教友たちを前に歩かせ「後ろを天使たちのために空けておくのです」とおっしゃった。

二八、石の上を歩くと、足跡が残った。砂の上を歩くと、足跡が残らなかった。用をするときには地面が割れ、それを土の中に入れた。（すべての預言者が同様だった）

二九、人々や天使たちの中で最も多くの地位や知識が与えられた。読み書きはできず、つまり誰からも学ぶことはなかったが、アッラーが彼にすべてを教えたのであった。アッラーが預言者アーデムにすべての物の名前を教えたように、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）にもすべての物の名前や知識が知らされていたのである。

三〇、共同体の名前や姿、その間で行ったことすべてが預言者様に知らされる。

三一、すべての人々よりも賢かった。

三二、人々に見られるあらゆる善い性格が彼に与えられていた。偉大な詩人であるウマル・イブニ・ル・ファーリドは「預言者様をなぜ讃えなかったのですか？」と聞かれたとき「彼を讃えるには力が足りないと分かっているからです。預言者様を讃える言葉が見つかりませんでした」と答えている。

三三、アッラーが預言者様の名前を、信仰告白の言葉やアザーン、イカーマ、礼拝の際の言葉、多くの祈りの言葉で、また、説法や忠言、苦悩の際の言葉で、さらには、墓の中や来世、天国といったあらゆるものにおいて、自分の名前の隣に置いている。

三四、預言者様の優れていたことの中でも最も優れていたことは、アッラーに愛される者となったことである。アッラーは預言者様を自分の最愛の者であり親友としていた。預言者様を誰よりも、どの天使よりも愛し「イブラーヒームを親友としましたが、あなたは最愛の者としました」と告げている。

三五、クルアーンの『朝章（アッ・ドハー）』第五節では『やがて主はあなたの満足するものを御授けになる。』と伝えており、アッラーは預言者様に対し、あらゆる知識や優越性、イスラームに基づく判断、そして、敵に対したときに手助けをして勝利に導くこと、共同体を支配して勝利させること、また、終末の日にはあらゆる仲裁や恵みに巡り合わせると約束している。この章が下されたとき、預言者様は大天使ジブリールを見て「共同体の一人が地獄に残されることに同意はしないのです」とおっしゃっている。

三六、アッラーはクルアーンで、他の預言者たちのことを、それぞれの名前で呼びかけたが、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）については「我が預言者よ！」と呼びかけている。

三七、預言者様は明確で分かりやすく、アラビア語のあらゆる方言を話すことができた。さまざまな場所から来て質問をする人々に対し、それぞれの方言を使って返答していた。それを聞いた人々は感心し、預言者様は「アッラーが私を美しく育てたのです」と答えている。

三八、少ない言葉で多くのことを説明した。十万以上のハディースでそのことを証明している。一部の学者たちはこのように語っている。「ムハンマド（アライヒッサラーム）はイスラームの宗教の四つの基礎について、四つのハディースで知らせている。『行為はその意図により評価されること』『許されたものと禁じられたものが明らかであること』『原告は証人を見せる義務があり、被告は誓う必要があること』『ある人が自分のために求めたものを、宗教上の兄弟のためにも求めない限り信仰は万全とならない』。この四つのハディースのうち一つ目は礼拝を、二つ目は行動を、三つ目は公正さや政治を、四つ目は社会規範と道徳に関する基礎を指している。

三九、ムハンマド（アライヒッサラーム）は護られており、罪を犯さない人だった。意識して、あるいは無意識でも、

大小にかかわらず、四十歳以前にしろ以降にしろ、決して罪を犯さなかった。醜いことをしたこともなかった。

四十、ムスリムたちは礼拝を行うとき「アッサラーム・アライカ・アイユハンナビーユ・ワ・ラフマトゥッラーヒ」と詠んで、ムハンマド（アライヒッサラーム）に挨拶をするように命じられている。礼拝で、他の預言者たちや天使たちに対して挨拶することは義務とはされていない。

四一「あなたがいなかったら、他のものは創造しなかった」とアッラーが伝えている。

四二、他の預言者たちは異教徒たちからの中傷に対して各自が返事をしていたが、ムハンマド（アライヒッサラーム）への中傷に対しては、アッラーが返答をして預言者様を保護した。

四三、ムハンマド（アライヒッサラーム）の共同体の数は他の預言者たちの共同体の数の合計よりも多い。そして、彼らよりも優れ、名誉がある。天国に入る者の三分の二はムハンマド（アライヒッサラーム）の共同体であることがハディースによって伝えられている。

四四、預言者様に与えられた善は、他の預言者たちに与えられた善より何倍も多い。

四五、預言者様を名前で呼んだり、隣で大声で話したり、遠いところから呼びかけたり、道で前に出ることは禁じられていた。他の預言者たちの共同体は預言者たちをそれぞれの名前で呼んでいた。

四六、ジブリールを天使の姿で二度見ている。他の預言者たちはジブリールを本来の姿で見たことはなかった。預言者様のもとにはジブリールは二万四千回訪れていた。他の預言者たちの中で、最も多かったのは預言者ムーサーだったが、訪れた回数は四百回ほどであった。

四七、アッラーや預言者様の名前のもとに約束することは許されていることだが、他の預言者や天使の名前のもとに誓うことは許されていない。

四八、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）が亡くなった後、妻たちは他の人と結婚することは禁じられた。そのため、預言者様の妻たちは信者たち全体の母となっている。

四九、血縁や婚姻による関係、つまり親族関係は来世では役に立たない。しかし、預言者様の親族に限ってはこのことは当てはまらない。

五〇、預言者様の名前を唱えることは、現世と来世で良い結果をもたらす。預言者様の名前を持つ真の信者たちが地獄に入ることはない。

五一、預言者様のあらゆる言葉や、あらゆる行動は真理であった。すべての意見はアッラーによって正しいものとされた。

五二、預言者様を愛することはすべての者にとって義務である。「アッラーを愛する者は私を愛します」ともおっしゃっている。預言者様を愛することの印というのは、宗教やその道において、預言者様のやり方や道徳に従うということである。クルアーンでは『「…あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、わたしに従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛でられ、あなたがたの罪を赦される…」』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第三一節）と述べるよう預言者様に命じられた。

五三、預言者様の家族を愛することは、行うべきことである。「私の家族に敵対する者は、偽信者です」ともおっしゃっている。預言者様の家族とは喜捨を受け取ることを禁じられた親族のことである。つまり、妻たちやハーシム家の信者たち、つまり、アリー様、ウカイル、ジャーヒル・タイヤール、そしてアッバースの子孫の人々のことを指す。

五四、預言者様の教友たちすべてを愛することは、行うべきことである。「私が死んだ後、教友たちに敵対してはなりません。彼らを愛することは私を愛することなのです。彼らに敵対することは、私に敵対することなのです。彼らを傷つける者は、私を傷つけることになります。そして、私を傷つける者はアッラーを傷つけることとなります。アッラーを傷つける者には罰が与えられるのです」とおっしゃっている。

五五、アッラーは預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に、天空に二人、地上に二人の手伝いの者を創られた。それらはジブリール、ミカーイル、アブー・バクル、ウマルである。

五六、男性も女性も成人で亡くなった者全員が、墓の中で預言者様について尋ねられる。「あなたの神は誰ですか？」と尋ねられるのと同様に「あなたの預言者は誰ですか？」とも尋ねられるのである。

五七、預言者様のハディースを読むことは、一つの礼拝である。読む者には善行が与えられる。

五八、神聖な魂を預かるため、天使のイズラーイールは人間の姿で訪れた。そして、家の中に入るために許しを求めた。

五九、預言者様の墓の中の土は、他のところよりも、そしてカアバや天国よりも徳が高い。

六〇、墓の中で、私たちが理解できない状態で生きている。クルアーンを詠み、礼拝も行っている。他の預言者たちも同様である。

六一、地上のあらゆるところで、預言者様に対して祝福を詠んでいたムスリムたちの挨拶を聞いた天使たちは、それを預言者様の墓へと来て知らせるのである。毎日墓には何千人もの天使が訪れる。

六二、共同体の行為や礼拝は、毎朝や毎晩預言者様に見せられている。またその行為を行う人を見ている。罪を犯した人が許されるよう、祈念を行う。

六三、預言者様の墓所を尋ねることは、女性にとっても適ったことである。他の墓所に関しても、混雑していないときにムスリムにふさわしい服装で訪ねることも許されている。

六四、預言者様が生きていたときと同様、亡くなった後でも地上のあらゆる場所、時間で、預言者様を理由として、つまり預言者様の想いや敬意のために、アッラーは物事を求める人の願いを受け入れるのである。

六五、来世で終末の日に墓から最初によみがえるのは預言者様である。そのとき天国の服を着て、ブラークに乗って来世に向かう。手には「リワーウルハムド」と名付けられた旗を持っている。預言者たちやすべての人々がこの旗のもとに立つこととなる。全員が千年もの間待ち続けて苦しむ。人々は順にアーデム、ヌーフ、イブラーヒーム、ムーサー、イーサーという預言者たちのもとへ行って、裁判を始めるよう、仲裁するように求める。しかし、それぞれの預言者たちはアッラーに対する恥や畏れから、仲裁することは控えるのである。その後、預言者様のもとへ行って懇

願したとき、預言者様は跪拝し、祈念を行う。そしてその仲裁が受け入れられる。最初に預言者様の共同体の審判が行われ、彼らは最初に「スィラート」という橋を渡っていく。そして彼らは最初に天国へと入っていく。預言者様が行くところは光に導かれる。ファーティマ様はスィラートの橋を渡るとき「全員、目をつぶるのです。ムハンマド（アライヒッサラーム）の娘が通ります」と言う。

六六、預言者様は六種類の仲裁を行う。一つ目は「マカーム・マハムード」といわれる仲裁で、すべての人々を来世で待つことによる苦悩から解放する。二つ目はその仲裁で大勢の人々を天国に入れることである。三つ目は罰を受けることが確定した人々を罰から救うことである。四つ目は罪の重い信者たちを地獄から救うことである。五つ目は善行と罪が同じであった場合、アラフという場所で待たされる者たちを天国に入るよう仲裁することである。六つ目は天国にいる者の地位を上げるよう行う仲裁である。

六七、預言者様が天国でいる場所の名前はウェスィーレである。ここは天国の最も高い位置にある。天国にいる全員に一つずつその枝が伸びるというスィドラート・アル・ムンタハーという木の根はそこにある。天国にいる者の恵みはこの枝から来るのである。

イスティグファール（アッラーに罪の赦しを願うこと）

預言者様は創造されたものの中で最も優れていたものであり、また、アッラーの真実を理解し、アッラーを最も畏れていたのは預言者様であった。アッラーは罪を犯すことから預言者様を保護していたにもかかわらず、彼は休むことなく礼拝を行い、アッラーに祈念をし、赦しを求めていた。夜の始まりのころ（夜の礼拝の後）に寝て、夜半以降に礼拝を行っていた。

イブニ・アッバースはこのように語っている。「ある夜、信者たちの母であるマイムーナ様の家に客として呼ばれま

した。預言者様は夜半まで、あるいはその前後まで寝ていました。その後起きて座っていました。手で顔に残った眠りの痕を直しました。立ち上がり、掛かっていた水入れを持って清めを行いました。『イムラーン家章（アーリ・イムラーン）』の最後の方の十の節を詠んで礼拝に立ちました。私も立ち上がり、預言者様のように清めを行い、礼拝のときその後ろに立ちました。預言者様は二回の礼拝を行いました。その後、再び二回の礼拝を行いました。次に、ウィトルの礼拝を行いました。この後、朝のアザーンが詠まれるまで休みました。その後起きて、二ラカーの礼拝を行った後、モスクへ行って朝の義務の礼拝を皆とともに行いました」

アーイシャ様はこのように語っている。「ある夜、預言者様は寝ていました。目を覚ますと『アーイシャよ！　もしよければ、今夜はアッラーに礼拝することで過ごしたいのです』とおっしゃいました。そして、その後起きました。クルアーンを詠んで泣いていました。その涙で両膝は濡れていました。預言者様は詠み続けました。詠むと神聖な涙が身体のあらゆるところを濡らしました。この状態が朝まで続きました。

朝になってビラール・ハベシが来て、この状況を見ると『両親をあなたなに捧げます、預言者様！　アッラーがあなたの過去のそして将来の過ちを赦してくれなかったとでもいうのでしょうか？』と言いました。預言者様は『ビラールよ！　私は感謝するしもべになってはならないのでしょうか？　アッラーは今夜『本当に天と地の創造、また夜と昼の交代の中には、思慮ある者への印がある。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一九〇節）と啓示されたのです』とおっしゃいました」

ムスリム様によって知らされたあるハディースによると、預言者様は「心にいろいろな想いが落ちてきます。毎日、毎晩、このようなものに対して七十回アッラーに赦しを求めます」とおっしゃっている。また「心に『アッラーからの御光が届くのを妨げる』幕ができるのです。そのため、毎日、七十回の赦しを求めます」ともおっしゃっており、さらに「アッラーに毎日百回の赦しを求めます」とも伝えている。

預言者様のアッラーに対する畏れは大変に大きかったため、大声で笑ったことは見られなかった。

イマーム・ティルミーズィーはアブー・ザールが知らせたハディースで次のように述べている。「預言者様は『疑いなく、あなた方の見ていないものを私は見ています。あなた方の聞いていないものを私は聞いています。天空では、天使たちが跪拝を行っていない場所は、四本の指の太さほども空いていないのです。アッラーに誓って、私が知っていることをあなた方が知っていたら、もっと少なく笑い、もっと多く泣いていたことでしょう。道に出て声が出る限りにアッラーに懇願していたことでしょう』とおっしゃった」

アブー・フレイレの伝えたハディースによると、預言者様が「誰でも自分の行為のみによって天国に入れるわけではありません」とおっしゃると「あなたも同じですか？　預言者様」と聞かれたので「はい。私も自分の行為だけで天国に入れるわけではありません。しかし、アッラーの寛大さと慈悲が私を包んでいるのです」と答えたという。

イブニ・ウマルはこのように語っている。「預言者様と一緒に、ある集まりに行ったとき、預言者様が『アッラーよ！　私を赦し、二度と行わないという誓いを受け入れてください。あなたはそのような誓いを受け入れ、慈悲を与える御方であります』と百回おっしゃっていたのを数えました」

エネス・ビン・マーリキーはこのように伝えている。「預言者様は繰り返し『アッラーフンマ・ヤー・ムカッリブ・アル・クルブ。サッビト・カリビ・アラー・ディーニキ』とおっしゃっていました」

ティルミィーズィーがアブー・サーイド・イル・フドゥリから伝え聞いたハディースによると、預言者様はこのようにおっしゃっている。「床に入ったときに、三度『エスターフィルッラー・アル・アズィーム・アッラズィー・ラー・イラーハ・イッラー・フウェル・ハイユール・カイユーム・ワ・アートゥブ・イレイヒ』と言った人の罪は海の泡のように、あるいはテミム地方の砂や、あるいは木の葉のように、あるいは地球の日々ほどに多かったとしても、アッラーはその人の罪を赦します」

ブハーリーとムスリムが伝えるハディースによると、預言者様は次のように赦しを求めていた。「アッラーフンマウフィルリ・ハティアティ・ワ・ジャヒリ、ワ・イスラーフィ・フィ・エムリ・ワ・マー・アンタ・アーラム・ビヒ・ミンニー」（アッ

ラーよ！ あなたが御存じの通り、私が知りながら、あるいは知らないうちに行った度を越した行為や過ちをお赦しください）

「アッラーフンマウフィルリ・ヘズリ・ワ・ジッディ・ワ・ハターイ・ワ・アムディ・ワ・クッル・ザーリカ・インディ。アッラーフンマウフィルリ・マー・カッダムトゥ・ワマー・アッハルトゥ・ワマー・アスラルトゥ・ワマー・アーラントゥ・ワマー・アンタ・アーラム・ミニ・アンタル・ムカッデム・ワ・アンタル・ムアッハル・ワ・アンタ・アラー・クッリ・シェイイン・カディール」（アッラーよ！ 冗談にしろ真面目にしろ、忘れていてあるいは知りながら、私が行う可能性のあるすべての過ちを御容赦ください。アッラーよ！ 行ってきたこと、そして先延ばししたこと、そして隠してあるいは明らかに行った、あなたの知っている私のあらゆる過ちをお赦しください。ムカッディム（優先者）であり、ムアッヒル（猶予者）であるのはあなたです。あなたはあらゆることに全能であります）

預言者様の仲裁

預言者様は最後の日、共同体に仲裁を行い、彼らを苦悩や悲しみから救う。あるハディースでは預言者様はこのようにおっしゃっている。「共同体の半分を天国に入れることか、仲裁を行うことにするか、どちらかを選ぶよう求められました。私は仲裁を選びました。なぜならば、仲裁の方がより多くのことができるからです。仲裁はイスラームを真面目に遂行する人たちだけのためだとは考えず、過ちを犯した罪人のためでもあるのです」

アブー・フレイレ様が伝えるところによると、預言者様はこのようにおっしゃっている。「私の仲裁は心と口が互いに確かめ合った上で、アッラーの満足を得るため『ラー・イラーハ・イッラッラー』と言い、信仰告白の言葉を述べる人に与えられます」

いくつかのハディースによれば、預言者様は「共同体の中から、私の家族や子孫を愛する者に仲裁を行います」と

伝えられている。

また、共同体の中で大きな罪を犯した者にも仲裁は行われる。

教友たちの悪口を言う者以外、すべての人に仲裁が行われる可能性がある。

さらに、共同体の中で、自分自身に過ちを犯す者や、欲望に負ける者にも仲裁が行われる。

「終末の日、まず初めに私に仲裁が行われます」

「私の仲裁を信じない者は、それに恵まれることはありません」と預言者様はおっしゃっている。

終末の日には『スール』が吹かれ、その音の恐ろしさで鳥肌がたち、目はさまよい、信者も異教徒も来世の場所へと移動する。これは終末の日の激しさを一層大きくする一つの罰なのである。

このとき、天空を八人の天使が背負って持っていく。その天使の一人は一歩で二万年ほどの地球の道を歩くとされる。天使たちや雲は、天空の最上段が決めるまで、理解できないほどの念唱を行う。こうして、天空の最上段はアッラーがそのために創った白い地面の上で留まるのである。このとき、誰も耐えることのできないアッラーの罰の前に、皆が頭を垂れている。皆が苦悩の中に囚われて驚嘆し、慈悲を求めている。

預言者たちや学者たちも恐怖に陥る。聖者や殉教者たちも耐え難いこのアッラーの罰に叫ぶ。彼らがこの状態であるとき、太陽の光よりももっと大きな光が彼らを包む。太陽の熱さに耐えられない人々は、それを見ては散り散りとなって、千年もの間この状態のままとなる。アッラーは彼らに何も言うことはない。

このとき、人々は最初の預言者であるアーデム様のところへ行き「アーデム様！ あなたは栄誉があり、名誉ある預言者様です。アッラーがあなたを創造し、天使たちをあなたに跪拝させました。あなたにアッラーの魂を吹き込みました。審判を始めるよう、私たちに仲裁をし、アッラーの望むとおりの運命に従いましょう。そして命じられたところがどこであろうと、皆がそこへ行くのです。すべてを支配し、主であるアッラーが創造物に対して望み通りにするように」と懇願する。

アーデム様はこう返事をする。「私はアッラーが禁じた木の果物を食べました。今はアッラーに対して恥があります。ですから、あなた方はヌーフのところへ行きなさい」これに対して、千年の間互いに話し合いながら人々は待ち続ける。

その後、人々はヌーフ様のもとへと行き「耐えられない状況です。私たちの裁判ができるだけ早く行われるよう仲裁をしてください。この来世の罰から解放されましょう」と懇願する。ヌーフ様は彼らにこのように返事をする。「私は既にアッラーに願いをしてしまいました。地球にいる人間全員がその願いによって溺れたのです。ですから、アッラーの前では恥ずかしいのです。あなた方はアッラーの親友であるイブラーヒーム様のもとへと行きなさい。アッラーは『巡礼章（アル・ハッジ）』の最後の節で『…かれは以前も、またこの（クルアーン）においても、あなたがたをムスリムと名付けられた。…』とおっしゃっています。もしかすると、彼ならあなた方に仲裁を行うことでしょう」

再び、以前のように人々は千年の間互いに話し合う。その後、イブラーヒーム様のもとへと向かい「ムスリムたちの父よ！　あなたは、アッラーが自身の親友とした人物です。私たちに仲裁を行ってください。アッラーが創造物の判決を行いますように」と言う。イブラーヒーム様は彼らに「私は地上で三度言及して宗教の道で戦いました。今、アッラーからこの場で仲裁をする許しを求めるのは恥ずかしいのです。あなた方はムーサー様のところへ行きなさい。なぜならば、アッラーは彼と話をし、アッラーと精神的に近い関係をとったのです。彼があなた方に仲裁をしてくれるかもしれません」と言う。

これに対して再び千年の間、人々は立ち止り互いに話し合う。しかし、このときに状況はさらに困難になる。来世の場が狭くなるのである。その後、人々はムーサー様のもとへ行き、このように言う。「イブニ・イムラーンよ！　あなたはアッラーと話し、旧約聖書を啓示した預言者です。裁判を始めるよう私たちに仲裁を行ってください。なぜなら、ここで大変長い間立ち止まってきたからです。また、あまりの混雑で、足が足の上に乗るほどになってしまいました」ムーサー様は彼らにこう答える。「私はアッラーに対し、ファラオやその取り巻きに何年間も罰を与えるよう願いました。そして、その後に来る人々に警告となるよう願いました。今、仲裁を願うことには恥があります。しかし、アッラーは慈悲や憐みをお持ちです。あなた方はイーサー様のところへ行きなさい。なぜならば、知ることにあたっては、預言者たちの中で最も正しく、そして、才能、礼拝の数の面で最も優れており、学識の面で最も優れていたのは彼だからです。彼があなた方の仲裁を行うかもしれません」

来世の苦悩から救われようと、人々はその後、預言者イーサーのもとへと向かい、こう言う。「あなたはアッラーの魂であり、アッラーの言葉です。アッラーはあなたのために『イムラーン家章（アーリ・イムラーン）』の第四五節で『…かれは現世でも来世でも高い栄誉を得、…』とおっしゃっています。アッラーに私たちの仲裁をしてください」

イーサー様はこのように答える。「私の民族は、私や私の母のことを、アッラー以外に神として扱いました。こうした状況で私はどうやって仲裁するというのでしょうか。彼らは私に礼拝を行ったのです。私を息子、アッラーを父と言っていたのです。しかし、あなた方は、誰かの財布があってその中に何もなく、財布の口が封されていないのを見たのでしょうか？　その封を破る前に、中にあるものと巡り会ったというのでしょうか？　預言者たちの中でも最も高い地位にあり、そして最後の預言者であるムハンマド（アライヒッサラーム）のところへ行くのです。なぜならば、彼は宣教や仲裁を共同体のために準備していたからです。その民族は彼に数多くの苦悩をもたらしました。神聖な額を割ったり、神聖な歯を折ったりもしていました。彼のことを気が狂っていると中傷したりしました。しかし、彼は偉大な預言者であり、預言者たちの中にあっても誇り高く最も善良で、名誉においても最高の地位を持っている方なのです。彼らによる耐え難いほどの苦悩や残酷さに関して、兄弟の預言者ユースフが、クルアーンの節でも言及されているように『かれは言った。「今日あなたがたを、（取り立てて）咎めることはありません。アッラーはあなたがたを御赦しになるでしょう。かれは慈悲深き御方の中でも最も優れた慈悲深き御方であられます。』（ユースフ章第九二節）と伝えています」預言者イーサーが預言者様の美徳を説明したところ、全員ができるだけ早く彼に会おうとする。

人々はすぐにムハンマド（アライヒッサラーム）のミンバルに来て、こう言う。「あなたは愛される者です。愛は道具の中でも最も役に立つものです。私たちに仲裁をしてください。なぜならば、最初の預言者であるアーデムのとこ

ろに行きました。私たちを預言者ヌーフのところへ行かせました。預言者ヌーフのところへ行きました。すると、預言者イブラーヒームのところに行かせました。預言者イブラーヒームは預言者ムーサーのところへ行かせました。預言者ムーサーは預言者イーサーに、彼はあなたのところへ行かせました。預言者様。あなたの後、行くところはないのです」

預言者様は「アッラーが許し、そして、御満悦があれば仲裁をしましょう」とおっしゃる。

預言者様はスーラディカトゥ・イ・ジャラール、つまり、ジャラール（アッラーの尊厳）の幕に行き、アッラーに仲裁の許しを求める。許しが得られ、幕は開き天空の最上段へと上っていく。そして千年間跪拝をする。その後、アッラーに対する感謝を述べる。万物が創られて以来、誰もアッラーをこのようにして称賛することはなかった。何人かの賢者は、アッラーが万物を創造すると、それらはこのように感謝し、褒め讃えたということを伝えている。

来世において、人々の状態は一段と厳しくなり、苦難や苦悩が増していく。人々は一人ひとりが地上で持って手放さないようにと握りしめていた資産を首にぶら下げている。ラクダの喜捨を行わない者の首にはラクダがぶら下げられる。人々は叫ぶが、その重さは山のようになっていく。家畜の喜捨を行わない者も同じようになる。彼らの叫び声は雷の音のようになっていく。

作物によるザカートを行わない者の首には、その作物と釣り合うものを首に下げられる。地上でいかなる種類の作物でも、ザカートを行わなかった場合、その種類に釣り合うものを首に下げられる。小麦であれば小麦、大麦であれば大麦がぶら下げられる。その重さの下、人々は、ワ・ウェイラ、ワ・セブラ（ウェイルとは罰の意味であり、人が罰に耐えられないときにこのように叫ぶ。セブルとは破滅のときに使う）と叫ぶ。

金銀や紙幣、交易品のザカートを施さない者には、恐ろしい蛇がまとわりつく。叫びながら「これは何ですか？」と彼らが言うと、天使たちは「彼らは地上で施さなかったザカートの資産なのです」と返事をする。このような恐ろしい状況が『イムラーン家章（アーリ・イムラーン）』の第百八十節でこのように語られている。『…かれらの出すのを嫌ったそのものが、復活の日には、かれらの首にまつわるであろう。…』。

別の一団は、恥部から膿が流れている。彼らの悪臭に周りの人々も忌み嫌う。彼らは不貞を働いた者や禁じられたことを行った人々である。

別の一団は、木の枝にぶら下げられている。彼らは地上で男色を行っていた者たちである。

別の一団は、口から舌が出てそれが胸まで伸び、大変醜い状態になっている。人々は彼らを見たくない思いにかられる。彼らは嘘や中傷を行った者たちである。

別の一団は、腹が高い山ほどに大きくなっている。彼らは地上で必要がないのに、働かずして利子で物や金を取引する者たちである。このようにして、罪を行った者たちの罪が明らかになる。

やがてアッラーは「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！　頭を跪拝から上げるのです。言いなさい。聞きましょう。仲裁を受け入れます」とおっしゃる。これに対して預言者様は「アッラーよ！　しもべたちの間で良い者と悪い者を分けてください。時間が相当に長引いていました。一人ひとりがそれぞれの罪でアラサートの広場（来世の広場）で恥をさらしています」と述べる。

これに対して、ある大声が聞こえ「はい、ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！」と言われる。アッラーは天国に命令をする。天国はいろいろな宝物で飾り付けられ、アラサートの広場に持って来られる。大変に美しい香りが五百年の距離から漂ってくる。このことで、人々の心は楽になり、魂はよみがえる。（しかし、異教徒やイスラームから離れた者、ムスリムたちを嘲笑する者、若者を騙して信仰を奪う者、悪い行為をしてきた者は天国の香りを嗅ぐことはできない。審判の日になると、アッラーは天国や地獄に来るように命じる。このとき、地獄の叫び声やその音、飛び散る炎、空のすべてを真っ黒にする煙が見える。その音や騒音、熱さは耐えられないほどである。人々の腰は抜けてその場に座り込む。

預言者たちも自分を抑えることができなくなる。預言者イブラーヒームや預言者ムーサー、預言者イーサーは天空

の最上段を抱く。預言者イブラーヒームは犠牲とした預言者イスマーイールのことを忘れてしまう。預言者ムーサーは兄弟の預言者ハールーンのことを、預言者イーサーは母のマルヤム様のことを忘れてしまうほどである。全員が「アッラーよ！ 今日、自分自身が助かる以外何も求めません」と言うのである。

このとき、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）は「共同体を救い、彼らを解放したまえ、アッラーよ！」と願う。そこでは、この状態に耐えられる者などいないのである。アッラーが『跪く時章（アル・ジャーシヤ）』の第二八節ではこのように知らせている。『あなたは、各集団が跪きながら、夫々の集団で自分の記録の所に呼ばれるのを見よう。…』

アッラーは『大権章（アル・ムルク）』の第八節で啓示されているように『激しい怒りのために破裂するかのようである。…』というようになっている。このため、預言者様は前に出て地獄を止まらせる。そして地獄に対してこのようにおっしゃる。「卑しむべきもの、軽蔑されるものとして戻りなさい。あなたに入る者があなたのところに行くまで」

地獄は「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ！ 私を許してください。なぜならば、あなたが私に入るのは禁じられているのです」と答える。天空が呼びかけて「地獄よ！ ムハンマド（アライヒッサラーム）の言葉を聞きなさい。そして彼に従いなさい」と言う。その後、預言者様は地獄を引っ張り、天空の左側に置く。審判の日、預言者様のこの慈悲ある行動や仲裁について、人々は互いに吉報をもたらし合い、恐怖が少し和らぐ。『預言者章（アル・アンビヤーゥ）』の第一〇七節では『われは只万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである。』と啓示されている。

最終的に、預言者様は六種類の仲裁を行う。一つ目は「マカーム・マハムード」といわれる仲裁で、すべての人々を来世で待つことによる苦悩から解放するものである。二つ目はその仲裁により大勢の人々を天国に入れることである。三つ目は罰を受けることが確定した人々を罰から救うことである。四つ目は罪の重い信者たちを地獄から救うことである。五つ目は善行と罪が同じであった場合、アラフという場所で待たされる者たちを天国に入るよう仲裁することである。六つ目は天国にいる者の地位を上げるよう行う仲裁である。

奇跡

愛すべき預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）が、アッラーの預言者であることを説明する証人たちは数え切れないほど大勢いる。アッラーは『あなたがいなかったら万物は創造しなかった』と伝えている。すべての創造物はアッラーの存在と唯一性を示すように、ムハンマド（アライヒッサラーム）が預言者であることや、その優れた人格を示している。共同体の聖者に見られる驚異はすべて、預言者様の奇跡である。なぜなら、そのような驚異は預言者様に従う者と、預言者様の後を追う者に見られるものだからである。また、すべての預言者たちも、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の共同体の一人になろうとしていること、さらに、その全員が預言者様の御光から創造されていたことから、他の預言者たちの奇跡も、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の奇跡の一部と考えられるのである。

愛すべき預言者様の奇跡は、時の面で三つに分けることができる。第一は、神聖な魂が創造されてから預言者であることが知らされるまでの間のこと。第二は預言者となってから亡くなるまでの間に起こった奇跡。第三は亡くなってから終末の日までの間に起きたことや起こるものである。これらのうち第一の奇跡については、イルハスと呼ばれる。さらに、奇跡はそれぞれの時期で、見られるものと、見ることはできず頭で理解するものの二つに分けられる。預言者様の奇跡はあまりにも多いため、限定することや数えることは不可能である。第二の時期に起こった奇跡の数だけでも、三千より多いと伝えられている。それらのうち、最も有名ないくつかは下の通りである。

一、ムハンマド（アライヒッサラーム）の奇跡のうち、最大のものはクルアーンである。今まで生きたあらゆる詩人や文学者は、クルアーンの韻や意味の前では無力であり、クルアーンに心打たれたのであった。たった一つの節でさえ、似たものを誰も作ることはできない。その深長さと雄弁さは人の言葉とは似ていない。つまり、一つの言葉を抜いたり加えたりしただけで、意味と美しさが崩れてしまうのである。ある言葉の代わりに別の言葉を探したとしても見つけることはできない。その韻はアラブ人の詩人の詩にも似ていない。また、かつて起こったことや将来起こる多くの

秘密を知らせている。聞く者や詠む者は味わい尽くすことはできず、疲れていても退屈することはない。詠むことや聞くことで苦悩が消える経験をした人は数多くいる。クルアーンを聞けば、恐怖に陥り、そのために亡くなる者さえいるほどである。大勢の狂暴なイスラームの敵が、クルアーンを聞くことによって心が柔和になり、信仰するようにもなっている。

二、ある日、預言者様が叔父であるアッバースの家に行き、彼とその息子の隣に座った。彼らの上をイフラームで覆い、そして「アッラーよ！この叔父や教友たちを私が覆ったように、あなたも地獄の火から彼らをお護りください」と願った。すると、壁から三度「アーミーン」という声が聞こえた。

三、ある日、手に像を持った人に対して、預言者様が「この像が私に話したら信仰しますか？」と尋ねた。その人は「私はこの像を五十年も崇めていますが、私に何も言ったことはありません。どうしてあなたに何か言うというのでしょう？」と答えた。そこで預言者様は「像よ、私は誰か？」とおっしゃると「あなたは、アッラーの預言者です」という声が聞こえてきた。その像の持ち主はただちにムスリムとなった。

四、預言者様がある牧草地に行く際、三度「預言者様よ！」という声が聞こえてきた。声が来たところを見ると、つながれた一頭の鹿を見つけた。その隣にはある人が寝ていた。預言者様がその鹿に望みを聞くと「この猟師が私を捕まえました。しかし、向こうの丘には二匹の赤ん坊がいるのです。私を放してください。彼らの腹を満たしたら戻ってきます」と言った。預言者様は「約束を守り、戻ってきますか？」と尋ねた。鹿は「アッラーのために誓います。戻ってこなかったら、アッラーが私を罰しますように」と答えた。預言者様は鹿を放した。しばらくすると鹿が戻ってきた。猟師は目を覚まし「預言者様！何かご命令でもあるのでしょうか？」と尋ねた。預言者様は「この鹿を放してあげるのです」とおっしゃった。その人は鹿の紐を解き、放してやった。鹿は「アシュハド・アンラー・イラーハ・イッラッラー、ワ・アンナカ・ラスールッラー」と言って、去っていった。

五、ティルミーズィーとネサーイーの『スネン』という本には次のように記されている。両目が不自由な人が来て

「預言者様！私のために目が見えるよう願ってください」と言った。預言者様は同情し、完全な清めを行うよう言った。それからこう願いをするよう教えた。「アッラーよ！あなたに願います。愛すべき預言者様をとりなしとして、あなたに願います。最も愛する我が預言者のムハンマド（アライヒッサラーム）をとりなしとして、アッラーに願います。あなたに免じてこの願いを受け入れるよう求めます。アッラーよ！この偉大な預言者様を私の仲裁者としてください。彼への敬意により、私の願いを受け入れてください」その人は清めを行い、その祈念を唱えると目が見えるようになった。ムスリムはこの願いを常に詠み、それぞれの願いに導かれるのである。

六、ある女性が贈物としてはちみつを贈った。預言者様はそれを受け入れ、その入れ物を返した。アッラーの力により、入れ物ははちみつで一杯になったまま返された。女性は預言者様のところへ来て「預言者様！私の罪は一体何でしょうか？なぜ私の贈物を拒まれるのでしょうか？」と言った。預言者様は「あなたの贈物を受け入れました。あなたが目にしたはちみつは、アッラーがあなたの贈物に対して与えた恵みなのです」とおっしゃった。女性は喜び、はちみつを家に持って帰った。家族全員が何ヶ月もそのはちみつを食べた。決して減ることはなかった。ある日、誤ってそのはちみつを別の容器に入れ替えてしまった。すると、それを食べ切るとはちみつはなくなってしまった。このことを預言者様に伝えると、預言者様は「私が返した入れ物の中に置いておいたら、地球が回っている限り、決して減ることはなかったでしょう」とおっしゃった。

七、預言者様は、後に共同体の大勢の人々が海を渡って戦いに行くこと、そして、教友の一人であるウンム・ヒラーンという名の女性もその戦いに参加するということを伝えた。ウスマーン様がカリフの時代、ムスリムたちは船でキプロス島に行って戦った。その女性も、彼らと一緒だった。そしてその地で殉教者となった。

八、預言者様がムアーウィヤ様に「いつか私の共同体の指導者となったら、善を行う者に対して褒美を与えなさい。悪を行う者を赦しなさい」とおっしゃった。ムアーウィヤ様はウマル様とウスマーン様の時代、シャーム（現在のシリア周辺）で二十年間知事となり、その後二十年間はカリフとなった。

九、預言者様がアブドゥッラー・イブニ・アッバースの母を見て「あなたは一人の息子を産みます。産んだら、私のもとに連れてくるのです」とおっしゃった。子供を連れてくると、耳にアザーンとイカーマを詠み、神聖な唾を赤ん坊の口につけた。名前をアブドゥッラーと名付け、母親に返した。そして「カリフたちの父となるこの子供を連れて帰りなさい」とおっしゃった。子供の父であるアッバース様がこれを聞いて、預言者様に尋ねると、預言者様は「そうです。私はそのように言いました。その子供はカリフたちの父となるのです。彼らの間でセッファ、メフティ、預言者イーサーとともに礼拝を行う一人が出るのです」とおっしゃった。アッバース朝では多くのカリフが出ているが、彼ら全員がアブドゥッラー・ビン・アッバースの子孫である。

十、預言者様の叔父の息子である、アブドゥッラー・ビン・アッバースの額に神聖な手を置き「アッラーよ！　彼を宗教に造詣の深い学者にしてください。あなたの知識を持つようにさせてください。クルアーンの知識を彼に与えてください」と願った。アブドゥッラー・ビン・アッバースはその後、あらゆる知識、特にクルアーンの解釈やハディース、フィクフ（法学）の知識でその時代における第一人者とあった。教友たちの時代やその次の時代は、あらゆることを彼から学ぶことになったのである。そして「テルジュマン・ウル・クルアーン」「バフル・ウル・イリム」「レイス・ウル・ムフェッスィリーン」という尊称でも有名となった。イスラームの国々は彼の教えた人々で一杯になった。

十一、預言者様が手伝いの者であるエネス・ビン・マーリキーに対し「アッラーよ！　彼の資産や子孫を多くし、寿命を長く、罪をお赦しください」という願いをした。時が経つにつれて資産や財産が増えていった。彼が持っている木や果樹園は毎年実をたわわにつけた。大勢の子供も生まれ、百十歳まで生きた。人生が終わるにあたり「アッラーよ！　あなたの愛する方が私のために行った願いのうち、三つを受け入れ、それに私を恵んでいただきました。四つ目である罪が赦されることは一体どうなるでしょうか？」と言うと「四つ目も受け入れました。安心しなさい」という声が聞こえてきた。

十二、ヒジュラ十三年目の年、預言者様がカッタンの戦いの際、ある木のもとで寝ていると、ダースルという名のある異教徒の勇者が手に刀を持って近づいて来た。そして預言者様に「誰があなたを私から助けられるというのか」と言った。預言者様は「アッラーが助けます」と答えた。大天使ジブリールが人間の形となって現れ、その異教徒の胸を殴った。彼は倒れて刀を落とした。預言者様がその刀を手にして「誰があなたを私から助けられるというのですか？」とおっしゃった。その人は「私を助けるのにあなた以上に適切な方はいません」と懇願した。預言者様は彼を赦し、自由にさせた。その人は信仰に入り、大勢の人が信仰に導かれることになった。

十三、預言者様がある日、清めを行い、薄い革の靴下の一方を履いて、もう一方の靴下に手を伸ばしたとき、一羽の鳥がやって来て、その靴下をひったくって空中で振った。すると、中から一匹の蛇が落ちてきた。その後、鳥は靴下を地面に置いた。この日以降、靴を履くときにはまず揺すってから履くことがスンナとなったのである。

十四、エネス様はこのように語っている。「預言者様が神聖な顔を拭いた一枚のハンカチがありました。これで顔を拭き、汚れたときに火の上に置いておきました。すると、汚れは焼けましたが、ハンカチは焼けずにきれいになっていました」

十五、ウフドの戦いのとき、アブー・カターデの一方の目が飛び出て、頬の上に落ちた。預言者様のところへ連れてこられた。神聖な手で目を元のところに置き「アッラーよ！　彼の目を美しくしてください」と願った。すると、その目はもう一方の目よりも美しくなり、よく見えるようになった。後日、アブー・カターデの孫の一人が、カリフ・ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズのところに行った。あなたは誰かと尋ねられると、彼は二行連句を詠んで、預言者様が神聖な手で目を元に戻した人物の孫であると知らせた。カリフはこの二行連句を聞くと、より多くの歓待をし、褒美を取らせた。

十六、預言者様がある日、娘のファーティマ様の家に来て様子を尋ねた。ファーティマ様は「父よ！　子供たちも三日間飲食をしていません。空腹に耐えています。私については重要ではありませんが、ハサンとフサインのことが私を悲しませています」と返事をした。

これに対して預言者様は「ファーティマ、愛する娘よ！ あなたは三日間空腹です。私は四日間空腹です」とおっしゃった。しかし、神聖な孫である、ハサンとフサインが空腹であることに大変悲しんでいた。

アリー様が、神聖な子供たちに物を買ったり、彼らを満腹にさせたりするため働きに出かけていった。マディーナの郊外に行ったとき、ある井戸のところでラクダに水をやろうとしている一人の村人を見かけた。

その人のところに近いて「アラブの民よ！ 給金を渡して、ラクダに水をやる誰かを必要としていますか？」と尋ねた。村人は「はい。私もそういう人を探していました。よかったら来て、私のラクダに水をやってください。引き上げた桶ごとに三つのナツメヤシをあげましょう」と言った。

アリー様はこれを受け入れ、水の入った桶を引き上げ始めた。九回桶を引き上げたところ、桶の紐が突然もげてしまい、桶は井戸の中に落ちてしまった。これを見た村人は怒り、座っていたところから立ち上がってアリー様の顔を殴るという不幸なことを行った。

その後、八つの桶の代金として二十四個のナツメヤシを渡した。このことで大変悲しんだアリー様は、手を井戸に伸ばし、中にある桶を取って井戸の端に置いてそこを離れた。

これを見た村人はあまりに驚いて固まっていた。手があれほどに深い井戸の底にどうやって届くというのだろうか？ もしかすると、この人物は将来やって来ると知らされていた宗教に関係のある人だったのだろうか？ このように考え、驚いた村人は、彼が従う預言者様は真実の預言者であると信じよう、とつぶやいた。

そして、先ほどの向こう見ずな大きな罪を後悔した。「あのような人物に上げた手など切ってしまうべきだ。骨をへし折ってしまえ」と言って、一方の手で刀を取り、手首に当てた。思う通りに切り捨てた。

大変な痛みを感じたものの、心は安らいだ。切られた手をもう一方の手で持って、預言者モスクへとやって来た。教友たちに預言者様がどこにいるのか尋ねた。預言者様は娘のところへ行ったと知らされた。ファーティマ様の家を教えてもらい、そこに向かった。

そのとき、預言者様は孫のハサン様とフサイン様を神聖な膝に乗せて、先ほど受け取ったナツメヤシを食べさせていた。

これを見ると、村人は自分が行った過ちの大きさを考えて気が狂いそうになり、蛇口から水が流れるように目からは涙があふれていた。

この状態のままファーティマ様の家の前に来て、扉を叩いた。万物の王は太陽のように光を発しながら外に出てきた。村人は預言者様を見るやいなや「信じます。あなたはアッラーの預言者です。私は行ったことを後悔しています。私を赦してください、預言者様！」と言って懇願した。

愛すべき預言者様が「手をどうして切ったのですか？」と尋ねると「あなたを信じている、一人の神聖な方の顔を殴ったこの手を持っていることに恥じ入ったためです。命をあなたに捧げます、預言者様！」と答えた。同情の海である愛すべき預言者様は、村人が手にしていた取れていた手を持ち「ビスミッラーヒル・ラハマーニル・ラヒーム」と言いながら、血の流れていた手首に取り付けた。アッラーの許しのもと、預言者様の奇跡の一つとして元のように治った。アッラーはすべてのことに全能である。そして、すべてのことに力を持っているのである。

善い行いは右側から始めた
いつも清めを行っていた、その寛大さの源

身体を右にして横になっていた
すべての息で秘密を見ていた、その寛大さの源

目は寝ても心は起きてアッラーとともにあり
永遠にその美しさに感心していた、その寛大さの源

家族

神聖な妻たち

預言者様は妻のハディージャ様が亡くなった後、五十五歳のとき、アブー・バクル様の娘であるアーイシャ様と再婚をされた。アッラーの命により、結婚が行われた。そして、亡くなるまでの八年間、彼女と過ごすこととなった。

その他の結婚のすべては、宗教的、もしくは政治的理由、あるいは同情や恩恵を与えるという意味で行われていた。その相手全員が寡婦であり、多くは年を取っていた女性たちであった。例としては以下が挙げられる。マッカで異教徒たちがムスリムたちに対して拷問や圧迫を耐え難いほどに行っていたとき、教友たちの一部がエチオピアに移住することとなった。エチオピア王であるネジャーシはキリスト教徒だった。ムスリムたちにあらゆる質問をし、受けた返答に感心して信仰するようになり、当地のムスリムたちに非常によく接していた。しかし、信仰の薄いウバイドゥッラー・ビン・ジャフシは貧乏から逃れようと、キリスト教徒の修道士にだまされて宗教を替えていた。預言者様の叔母の息子である、この呪われた人物は、妻のウンム・ハビーバも宗教から出して金持ちになるよう、暴力を働いたり、扇動したりしていた。しかし、妻は貧乏や死を覚悟してでも預言者様の宗教から離れないと言ったため、離婚することとなった。彼女は貧困のため、もはや死ぬばかりとなっていた。しかし、しばらくすると彼自身が死んでしまった。ウンム・ハビーバはマッカのクライシュ族の当時の司令官であるアブー・スフヤーンの娘であった。預言者様はそのとき、クライシュ族の軍と大変厳しい戦いを続けており、アブー・スフヤーンはイスラームを滅ぼそうと最大限の努力をもって戦っていたところだった。

預言者様はウンム・ハビーバの宗教に対する力やその出来事を耳にした。ネジャーシに手紙を送り「あなたの地にいるウンム・ハビーバと結婚します。結婚式を行うので、彼女をここに送るように」と求めた。ネジャーシは既にム

スリムとなっていた。この手紙に大変敬意を示し、その場にいるムスリムたちを宮殿に招いて晩さん会を行った。ヒジュラ七年目の年に結婚が行われ、贈物や恵みが与えられた。このようにして、ウンム・ハビーバは信仰の褒賞として、そこで裕福になり豊かな生活を過ごすことになった。彼女のおかげで他のムスリムたちも生活が楽になった。さらに、天国では妻たちは夫たちのところにいるため、彼女は預言者様とともに天国における最も高いところにいるという吉報ももたらされた。このことは、現世すべての喜びや恵みがあったとしても、この吉報と比べたらほんの一部でしかないのである。また、この結婚は、将来アブー・スフヤーンがムスリムとなる名誉に与る要因の一つともなっている。預言者様の賢明さや洞察力、知恵、そして恵みや憐みがどれほど優れているのかを、この結婚は示している。

　二つ目の例としては以下が挙げられる。ウマル様の娘のハフサ様が寡婦となった。ヒジュラ三年目の年、ウマル様がアブー・バクル様やウスマーン様に「私の娘と結婚してくれませんか」と頼むと「考えましょう」と言うのだった。ある日、預言者様がその三人や他の人がいるところで「ウマルよ！　あなたが悲しんでいるように見えます。理由は何でしょうか？」と尋ねた。瓶の中にあるインクの色が容易に見えるように、預言者様には皆の考えが一目で分かっていたのだった。必要があれば質問をしていた。預言者様や他の人に真実を語ることは義務であることから、ウマル様は正直に「預言者様！　アブー・バクルとウスマーンに娘と結婚してもらえるよう提案しましたが、受け入れられませんでした」と返事をした。預言者様は、最も愛する三人の教友たちが悲しむのではなく、喜ばせるためすぐにこうおっしゃった。「ウマルよ！　娘をアブー・バクルやウスマーンより、もっと良い人にあげませんか？」ウマル様は驚いた。なぜなら、アブー・バクル様やウスマーン様よりも良い人はいないと知っていたからだった。しかし「はい、預言者様」と言った。すると預言者様は「ウマルよ！　娘を私にください」とおっしゃった。このようにして、ハフサ様はアブー・バクル様やウスマーン様、そしてすべての信者たちの母となり、彼らは彼女を手伝うこととなったのだった。そして、アブー・バクル様やウマル様、そしてウスマーン様は互いにより強い絆で結ばれ、一層親密になったのだった。

　三つ目の例は次のとおりである。ヒジュラ五年目、もしくは六年目の年、捕虜となったムスタリク族の何百人もの人々

の中に、ジュワイリーヤという名の、部族長のハーリスの娘がいた。預言者様が彼女を買って解放し、自分と結婚させることとすると、教友たち全員が「私たちは預言者様の家族の、つまり私たちの母の親戚を女奴隷や手伝い者として使うのは恥である」と考え、皆が奴隷を解放した。この結婚により、何百人もの奴隷が解放されることになったのだった。ジュワイリーヤ様はこのことを常に口にし誇りに思っていた。アーイシャ様は「ジュワイリーヤよりも、もっと恵まれた女性を見たことがありません」と語っている。

他の妻たち

　アーイシャ様…預言者様の二番目の妻である。アブー・バクル・スィッディークの娘で、大変賢く、頭が良く、学者であり、文学者であり、貞潔であり、敬虔であった。記憶力に優れていたため、教友たちは多くのことを彼女から学んでいた。クルアーンの章句でも称賛されている。イジュティハード（解釈行為）の面でアリー様と合わない部分があったため、後に起こる「ラクダの出来事」という事件では、アリー様と戦った教友たちの側につくこととなった。しかし、アリー様が殉教者となったときには、大変悲嘆に暮れた。フルフィー（宗教から離れた一団のこと）たちは彼女に対して中傷し、彼女はアリー様のことが好きではなかったと言っている。しかし「アリーを愛することは信仰の印である」という預言者様のハディースをアーイシャ様が伝えている。このように、彼のことを好み、他の人々も彼のことを愛するべきであるということを、まさに彼女が知らせているのである。ヒジュラの八年前に誕生し、ヒジュラ五七年のとき、六十五歳でマディーナにて亡くなられた。

　セブデ・ビンティ・ゼムア…預言者様の三番目の妻である。主人とともに信仰をするようになり、エチオピアへと移住した。マッカに戻ったときに、彼女の夫が亡くなった。そこで、預言者様は、アーイシャ様に次いでセブデと結婚した。セブデをマッカの家で、アーイシャ様をマディーナの家で住まわせた。大変に慈悲深い女性で、非常に貞淑

な女性であった。ウマル様がカリフの時代に亡くなった。

ザイナブ・ビンティ・フザイマ…よく礼拝を行い、よく施しを与えた人物である。預言者様との結婚前は、アブドゥッラー・ビン・ジャフシの妻であった。アブドゥッラーは預言者様の叔母であるウマイマの息子であったが、ウフドの戦いの際に殉教者となった。彼女は預言者様と結婚する名誉に与ったものの、その八ヶ月後に亡くなっている。

ウンム・サラマ…もとはヒンドという名前であった。夫のアブー・サラマとともに、エチオピアに初めて移住をした一団の一人である。アブー・サラマは、預言者様の叔母であるバッラの息子・ウバイドゥッラー・ビン・ジャフシの兄弟であり、ヒジュラ四年目のとき、ウフドの戦いで負った傷が原因でマディーナにて亡くなっていた。彼女の結婚の求めを、アブー・バクルとウマルが受け入れなかったため、預言者様と結婚するという名誉に与ることになった。ヒジュラ五九年目のとき、マディーナにて八十四歳で亡くなった。預言者様の妻のうち、最後に亡くなった人物である。

ザイナブ・ビンティ・ジャフシ…預言者様の叔母のウマイマの娘であり、アブドゥッラー・ビン・ジャフシの妹である。父の名はベッレであったが、信仰をしていなかったため、彼らはジャフシと呼ばれていた。ザイナブは最初に信仰した人々のうちの一人であった。預言者様は彼女をまず養子のザイド・ビン・ハーリサと結婚させた。ザイドはザイナブの権利や面倒を見ることについて合わず、ヒジュラ三年目の年に離婚することとなった。代わって預言者様が彼女と結婚することを考えた。ザイナブはこれを聞くと喜び、二度の礼拝を行って「アッラーよ！　あなたの預言者様が私を求めています。もし、彼の妻となる名誉に与ることになるのであれば、あなたが私を彼に与えてください」と願った。彼女の願いは受け入れられ『…それでザイドが、かの女に就いて必要なことを済ませ（離別し）たので、われはあなたをかの女と結婚させた。…』という『部族連合章（アル・アハザーブ）』の第三七節が啓示された。ザイナブの結婚をアッラーが結びつけたことから、さらに結婚式を行うことはしなかった。ザイナブ様はこのことを常に誇りに思い「他の女性たちは、それぞれの父が結婚させました。しかし私はアッラーが結婚させたのです」と言っていた。当時三十八歳だった。ヒジュラ二十年目の年、五十三歳のときに亡くなった。善や恵みが多く、施しを与えることを好んだ。手

仕事に大変熟練していた。作ったものや、もらったものを親戚や貧乏人に与えていた。あるとき、カリフ・ウマルが預言者様の妻たちに、それぞれ一万二千ディルハムを与えた。彼女はこれを受け取るとすぐに施しを行って分配した。預言者様が亡くなった後、妻たちの中で最初に亡くなったのは彼女であった。アーイシャ様は彼女のことをよく褒め、称賛していた。あるハディースによると、預言者様は「妻たちの中で私に最初に再会する者は、手にあるものをよく配る者です」と言って、彼女が最初に亡くなるであろうことを知らせていた。というのも、最も施しを行っていたのは彼女だったからである。（恥知らずのフランス人で、中傷を行う詩人であるヴォルテールは、預言者様がザイナブ様を妻として受け入れたことについて、史実や情報とは正反対のことを創作し、低俗に中傷する演劇にした。文学者や学者としてふさわしくない、この醜く不快な作品を発表したことで、彼は以前破門された最大級の敵である教皇の気に入られるところとなり、称賛する手紙を受け取ったりしていた。当時、ムスリムのカリフであったスルタン・アブドゥルハミド二世は、この戯曲が舞台で行われることが分かると、フランスとイギリスの政府に対して最後通告を送り、これをただちに防いで全人類を恥辱から救ったのである）

サフィーヤ様…ハイバルのユダヤ人の長である、フエイ・イブニ・アフターブの娘である。ハイバルでは、あるユダヤ人と婚約をしていたが、その後、裕福なケナーネ・ビン・ハーキキと結婚することになった。ヒジュラ七年目のときにハイバルが征服され、サフィーヤは捕虜となった。預言者様の取り分となったが、預言者様は彼女を解放し、彼女は信仰することとなった。そして、預言者様と結婚するという名誉に与った。ヒジュラ五十年目の年にマディーナにて亡くなった。

マイムーナ様…名前は以前バッラであったが、預言者様がマイムーナと変更した。ハイバルを征服した後、マッカにウムラをするために行くとき、マイムーナの前夫が亡くなった。その後、預言者様と結婚するという名誉に与った。ヒジュラ五十三年目のとき、マッカで病に倒れた。その際「私をマッカから出してください。なぜならば、預言者様が私についてマッカの外で亡くなると知らせていました」と言った。マッカから外に出ると、預言者様と結婚をした

場所で亡くなった。

マーリーヤ様…預言者様の女奴隷だったときに信仰に入り、預言者様と結婚する名誉に与った。マーリーヤはエジプトのアレクサンドリアの王であるムカウクスからの贈り物として贈られたため、家系や血筋、生年月日がはっきりとは知られていない。預言者様とマーリーヤ様の間にはイブラーヒームという名の息子が生まれた。マーリーヤ様は大変静かで穏やかな人物だった。ウマル様がカリフの時代、六三七年（ヒジュラ暦十六年）に亡くなった。マディーナにあるバーキ墓地に埋葬された。

レイハーネ様…預言者様の女奴隷だったときにムスリムとなった。マディーナにいるユダヤ人のクライザ族の一人であった。祖先はレイハーネ・ビンティ・シェムウン・イブニ・イェズィット、もしくはレイハーネ・ビンティ・ザイド・イブニ・アムル・イブニ・ハネフェ・ビン・シェムウン・ビン・イェズィットである。生年月日は分かっていない。預言者様が亡くなる前、六三一年、ヒジュラ十年目にマディーナで亡くなり、バーキ墓地に埋葬された。

預言者様はあるハディースによると、このようにおっしゃっている。「すべての妻たちとの結婚や、娘たちを結婚させることはすべて、ジブリールによってアッラーからもたらされた許しのもとで行ったものです」

預言者様が多く結婚したことの重要な一つの理由は、イスラームの宗教を知らせるためであった。ヒジャーブ（ベール）についてのクルアーンの節が啓示される前、つまり、女性たちの衣服に関する命令が下りる前、女性たちは預言者様のところに来て、知らないことを直接聞いて学んでいた。預言者様が誰かの家に行ったときには、女性たちも来て座って聞き、その利益を得ていた。しかし、ヒジャーブについてのクルアーンの節が啓示され、女性たちが他人の男性とともに座ったり話したりするのが禁じられると、預言者様は家族以外の女性たちとは同席しなくなった。女性たちが分からないことについては、神聖な妻であるアーイシャ様から聞いて学ぶよう命じた。質問に来る人の数はあまりにも多かったため、アーイシャ様が全員に返事を行う時間はとれなかった。この重要な役割の負担を減らすため、そしてアーイシャ様の背負った重荷を軽減するため、必要とされる人数と結婚をした。女性に関する何百もの知識について、預言者様は神聖な妻たちを介してムスリムの女性たちに教えたのであった。妻が一人きりであったとしたら、他の女性たちは皆彼女に質問することとなり、それは困難であるばかりでなく不可能なことであった。預言者様は、アッラーの宗教を知らせるため多くの結婚し、一方でその重責を負うことにもなっていたのである。

子供たち

預言者様には三人の男児、四人の女児の計七人の子供がいた。ファーティマ様以外は皆、預言者様が亡くなる前に亡くなっている。預言者様の家系は、ファーティマ様から続くこととなる。孫のフサイン様の家系の人々を「セイイド」、ハサン様の家系の人々を「シェリフ」という。セイイドたちとシェリフたちに対する敬意は、預言者様に行う敬意となる。彼らを愛することは、信仰したまま最後の息を引き取ることにつながる。

カースィム…預言者様の三人の息子のうちの長男である。そのため、預言者様は「アブー・カースィム」とも呼ばれた。預言者様が預言者となる前、マッカで生まれた。母はハディージャ様である。十七ヶ月のときに亡くなった。

ザイナブ…預言者様の四人の娘のうちの長女である。預言者様が三十歳のときに生まれた。彼女は、預言者様が預言者となる前に、母であるハディージャ様の妹の子供であるアブー・アス・ビン・レビーと結婚した。アブー・アスは当初信仰してはいなかった。バドルの戦いの際に捕虜となり、妻をマディーナに行かせる条件で解放された。自分の兄弟とともに妻をマディーナに送ったが、異教徒たちがザイナブを途中で帰した。預言者様はザイド・ビン・ハーリサをマッカに送り、夜中にザイナブをマディーナに逃がした。ヒジュラ八年目の年、三十一歳で亡くなった。彼女の息子のアリーはマッカ征服の際、預言者様のラクダの後ろに乗っていた。ザイナブ様の娘のウムマーメはアリー様と結婚している。

ルカイヤ…預言者様の次女である。預言者様が三十三歳のときに生まれた。大変美しかった。アブー・ラハブの息

子のウトゥバと婚約していたが『棕櫚章（アル・マサド）』が啓示されると、ウトゥバは結婚式の前に婚約を破棄した。このとき命令が下され、ウスマーン様と結婚することとなった。彼らは一緒に二度にわたってエチオピアに移住を行った。二十二歳のとき、バドルの戦いの前に病にかかり、ウスマーン様はバドルの戦いに参加せず、妻の看病を行うよう命じられた。バドルの勝利の吉報がマディーナにもたらされた日に、彼女は埋葬された。

ウンム・クルスーム…預言者様の三女である。アブー・ラハブの次男であるウテイベと婚約していたが『棕櫚章（アル・マサド）』が啓示されると、結婚式が行われる前に婚約が破棄された。さらに、彼は預言者様を悲しませる言葉を発した。預言者様はこれに対して「アッラーよ！ あなたの野獣のうちの一匹を彼につきまとわせてください」と願った。シャームに行く途中で、一匹のライオンが彼を引きちぎった。ルカイヤが亡くなった後に啓示が下り、ウンム・クルスームもウスマーン様と結婚をした。ヒジュラ九年目に亡くなった。その葬儀の礼拝は預言者様が自ら行い、埋葬する際には墓の脇に立ち、神聖な目からは涙を流していた。

ファーティマ…預言者様の四女であり、アリー様の妻であり、そしてウマル様の義理の母である。結婚したときは十五歳であった。結納金は四百ミスカルの銀であったことが『メワーヒビ・イ・レドゥンニエ』という本のセブクの戦いの部分で記されている。これは、五七・一四ミスカルの金に該当するものである。当時、アリー様は二十一歳で、預言者様の家族の一員であった。彼女の肌は白く、大変美しかった。ヒジュラの十三年前にマッカで生まれ、ヒジュラ十一年目、二十四歳のときに亡くなった。ハサン、フサイン、ムフスィンという名の三人の息子と、ウンム・クルスーム、ザイナブという名の二人の娘をもうけた。預言者様の子孫は、ファーティマ様から続くことになった。次女ザイナブはアブドゥッラー・ビン・ジャーヒル・タイヤールと結婚をし、アリー、そしてウンム・クルスームという名の子供が生まれた。彼らのことは「シェリフィ・ジャーフェリ」と呼ばれる。

アブドゥッラー…預言者様とハディージャトゥル・クブラーとの間に生まれた最後の子供である。預言者様が預言者となった後に生まれ、まだ乳児のときに亡くなった。タイイブ、そしてターヒルとも呼ばれた。アブドゥッラーが

亡くなると、アス・ビン・ワーイルが「ムハンマド（アライヒッサラーム）の子孫はこれで絶えた」と言った。これに対してアッラーは『潤沢章（アル・カウサル）』という章を啓示して、アスという異教者に返事を下したのである。

イブラーヒーム…預言者様の三男であり、すべての子供の末子である。ヘラクリウスが、エジプト知事であったムワッカスの贈物として送らせたマーリーヤの息子である。ヒジュラ八年目に誕生し、一歳半で亡くなった。病気の際には預言者様が彼を抱き、神聖な涙を流した。彼が亡くなる際には、日食が起こったという人々もいた。しかし、預言者様がこれを聞くと「月や太陽は、アッラーの存在や唯一性を知らせている二つの創造物であり、誰かが亡くなったことや生き続けることで日食が起こるわけではありません。それらを見たらアッラーを思い出しなさい」とおっしゃった。イブラーヒームが亡くなったとき、預言者様は「イブラーヒームよ！ あなたの死に大変悲しんでいます。目は泣き、心はつぶれています。しかし、アッラーを傷つけるような一言も言いません」とおっしゃった。

家族（アフル・アル・バイト）

預言者様のすべての家族のことを「アフル・アル・バイト」と呼ぶ。神聖な妻たちや娘のファーティマ様とアリー様、そして彼らの神聖な子供であるハサン様やフサイン様、さらに彼らの子孫全員、その他に、預言者様の正当な子孫としてつながるハーシム家も、預言者様の家族である。

アッラーは預言者様の家族について、クルアーンで『…アッラーはあなたがたから不浄を払い、あなたがたが清浄であることを望まれる。』（部族連合章（アル・アハザーブ）第三三節）と啓示している。

教友たちは預言者様に尋ねた。「預言者様！ あなたの家族とは誰のことを指しますか？」そのときアリー様がやって来た。預言者様は彼を自分の外套の中に入れた。順にファーティマ・トゥズ・ゼフラ様、ハサンとフサインもやって来た。一人ひとりを自分の周りに来させ「彼らは私の家族です」とおっしゃった。預言者様の家族は「アーリ・アバー」

そして「アーリ・ラスール」とも呼ばれている。

預言者様の家族を愛することは、信仰を持ったまま来世に行くことであり、最後の息を引き取る際、救いに導かれることとなるのである。預言者様の家族を愛することはすべての信者にとって義務である。あるハディースによれば、預言者様はこのようにおっしゃっている。「私の家族は預言者ヌーフの船のようである。彼らに従う者は救いが得られます。そしてそれを避ける者は破滅することとなるのです」

預言者様の家族には美徳や徳行が多くあり、それは数え切れないほどである。それらを語り、称賛するには人々の力が不足している。彼らの価値や偉大さは、ただクルアーンによって理解できるのである。

イマーム・シャーフィーは「預言者様の家族よ！　あなた方を愛することをアッラーがクルアーンで命じられています。礼拝のとき、あなた方のために祈念を行わない者の礼拝は受け入れられないのです。それはあなた方の価値やあなた方の高い地位を表しています。あなた方の名誉の偉大さに基づき、アッラーがクルアーンであなた方に挨拶を送っています」と言って、このことについて美しく言及したのだった。

また、エネス様はこのように語っている。「預言者様に『家族のうち、最も好きなのは誰ですか？』と誰かが尋ねました。預言者様は『ハサンとフサインです』とおっしゃいました」

アブー・フレイレ様はこのように語っている。「預言者様と一緒にいました。ハサンが来ました。すると預言者様は『アッラーよ！　彼を愛しています。あなたも彼を愛し、そして彼を愛する者をも愛してください』とおっしゃり、また別のときには『ハサンとフサインは地上における私の美しい香りです』ともおっしゃいました」

預言者様はまたこのようにもおっしゃっている。

「私の死後、あなた方に二つのものを残します。それらについていれば、道から外れることはありません。一つ目は二つ目より大きいものです。一つ目はアッラーの書であるクルアーンであり、これは天空から地上へと垂れ下がった丈夫な綱なのです。二つ目は私の家族です。この二つが互いに離れることはありません。この二つに従わない者は私

の道から離れます」

あるときハサン様とフサイン様が病気にかかった。預言者様はアリー様とファーティマ様に「このあなた方の一部のため、アッラーに何かを捧げなさい」とおっしゃった。そこで、アリー様とファーティマ様、そしてフッダという名の女奴隷は三日間の断食を行うと誓った。二人の子供は回復した。しかし、彼らの家に食べる物はなかった。そこで、アリー様があるユダヤ人から三サー（約三キロ百二十グラム分）の大麦を借りた。三人とも願掛けの断食を行っていた。借りてきた大麦の一部をファーティマ様が粉にして五個のパンを焼いた。彼らは全部で五人だった。断食が開ける時間がやって来た。ファーティマ様は、その五個のパンの一つをアリー様の前に、別の一つをハサン様の前に、さらに別の一つをフサイン様の前に、もう一つを女奴隷のフッダの前に、最後の一つを自分の前に置いた。ちょうど断食が開けるところだった。そのとき、ある貧乏人がやって来てこのように言った。「預言者様の家族よ！　私はムスリムの一人の貧乏人です。私に何か食べ物を恵んでください。アッラーがあなた方を天国の恵みや褒賞を与えられますように」彼らはパンをその人に施し、自分たちは水だけで断食を開けた。翌日、また断食を行った。手伝いのフッダが大麦の一部を粉にして五個のパンを作った。断食が開けるとき、パンを前にして食事をしようとすると、一人の孤児がやって来た。五人はパンを彼に渡してその孤児を喜ばせ、自分たちは水で断食を開けて、そのまま眠った。さらに翌日、再び断食を行った。残った大麦から五つのパンを作った。断食が開けようとしたときに、ある捕虜が来て「三日間も空腹です。私は縛られ、食事も与えられていませんでした。アッラーのため、私を憐れんでください」と言ってきた。五人はパンを彼に渡し、再び水で断食を解いた。これに対して、クルアーンの啓示で、アッラーがこのように伝えている。『かれら（善行者）は誓いを果し、災厄の広がる日を恐れている。またかれらは、かれを敬愛するために、貧者と孤児と捕虜に食物を与える。（そして言う。）「わたしたちは、アッラーの御喜びを願って、あなたがたを養い、あなたがたに報酬も感謝も求めません。』『…主はかれらに純良な飲物を飲ませられる。』（人間章（アル・インサーン）第七～九節および第二一節）

アブー・フレイレはこのように語っている。「預言者様はこのようにおっしゃいました。『あなた方の中で良い者とは、私の死後、私の家族に良いことを行う者たちです』」

アリー様はこのように述べている。「預言者様がこうおっしゃいました。『私の家族に良いことをする者には、審判の日、仲裁を行います。スィラートの橋から足を滑らせないで渡る者は、私の家族や教友たちを深く愛した者たちです』」

イマーム・ラッバーニーが伝えたあるハディースによれば、預言者様は「アリーを好きな者は必ずや私のことを好きなことになるのです。彼を敵とする者は必ずや私を敵とすることになります。彼を傷つける者は必ずや私を傷つけることとなります。私を傷つける者は必ずやアッラーを傷つけることとなるのです」とおっしゃっている。

また、預言者様はこのようにも知らせている。「アッラーが私に四人の人々のことを愛するよう命じられました。アッラー自身も彼らを好むと知らせています」「彼らとは誰のことですか？　名前を教えてください」と聞かれると「アリーはその一人です。アリーはその一人です。アリーはその一人です。アブー・ザール、ミクダード、そしてサルマーンです」

「私の家族のことで私を傷つける者には、大変厳しい罰があります」

あるハディースによれば、預言者様は「ファーティマは私の一部です。彼女を傷つける者は私を傷つけます」とおっしゃっている。

アブー・フレイレはこのように語っている。預言者様はアリー様に「ファーティマは私にとって、あなたよりも愛する者です。そして、あなたは私にとって、彼女よりも尊い者です」とおっしゃった。

また、預言者様はこのようにおっしゃっている。「あなた方にイスラームを携えてきたことに対して、私は何も欲することはありません。しかし、私に近い家族を愛して欲しいのです」

イスラーム学者は預言者様の家族を愛することは、信仰を持ったまま最後の息を引き取るための条件であるとしている。彼らは預言者様の分身なのである。預言者様の家族に敬意を示し、尊敬をすることはすべてのムスリムにとって義務である。

最も偉大なイスラーム学者の一人であるイマーム・ラッバーニーは、このように語っている。「父は有形無形の知識、つまり心の知識の面でも大変優れていました。いつも預言者様の家族を愛することを勧め、そのことを激励していました。この愛情は、人が信仰を持ったまま最後の息を引き取ることに、大変有用であると言っていました。父が亡くなるとき、すぐ隣にいました。最期のとき、意識が朦朧としてきた際、以前言われた忠告を思い起こさせ、その愛情がどのような影響を起こしたか尋ねました。彼はそのような状態にあっても『預言者様の家族への愛情の海で泳ぎます』と言いました。私はすぐに、アッラーに感謝や称賛を行いました。預言者様の家族への愛情は、共同体の宝なのです。来世で得るものはすべてこの宝にかかっているのです」

預言者様の家族は三つに大別できる。第一は家系上の親戚である。叔母たちなどがこれに該当する。第二は清い妻たちである。第三は妻たちの髪をとかし、食事を作り、部屋を片付け、洗濯を行い、家事をするため常に家にいた手伝いの女性たちである。それ以外の仕事をする人々、つまり、モスクでアザーンを詠んでいたビラールやサルマーン、スヘイブも預言者様の家で食べたり飲んだりしていた。

ファーティマ様とその子孫の子供たちは、終末の日に至るまで預言者様の家族である。彼らがたとえ反乱人であったとしても、愛する必要がある。彼らを愛することは心や身体、金品をもって手助けすることであり、彼らに対する尊敬や敬意は、信仰をもったまま息を引き取る一つの要素となる。（シリアのハマーという街で、預言者様の子孫を証明する裁判が行われたことがある。この神聖な家系から生まれた子供たちが、二人の証人の元、裁判官の前で登記をされた。しかし、この裁判は英国の盟友であるムスタファ・レシット・バシャによって無効となった）

預言者様の教友たち

預言者様の友人、女性や男性、子供や大人を問わず、あるムスリムが預言者様を短期間でも、一回だけでも見たことがあれば、もし目の見えない人であれば一度でも話しをしたら、且つこれらの人が信仰を持ったまま亡くなった場合、このような人々のことを教友、つまり『サーヒビ』もしくは『サハービ』と呼ぶ。それが複数の人々を指す場合は『アスハーブ』あるいは『サハーバ』または『サハビー』と呼ばれる。

預言者様のことを異教徒であるときに見て、預言者様の死後に信仰するようになった者や、ムスリムであったがその後イスラームから離れた者は、サハービつまり預言者様の教友とは言わないのである。ただし、教友となった後にイスラームから離れ、預言者様の死後、再び信仰するようになった者は教友とされる。預言者様はジン（幽精）に対しても預言者であるため、ジンの教友も存在する。

教友たちは、宗教に関する判断において最も信頼のおける根拠となっている。なぜなら、クルアーンを預言者様から直接学び、自分の後の世代に教え、そして説明をしているからである。預言者様が行ったことやおっしゃったことについての情報は、彼らが自ら見聞きして伝えたことに基づいている。

彼らが伝えた判断はハディースの元となっている。ただし、イスラーム学者たちの考えが完全に一致していたのは、教友たちの時代のみであった。また、宗教に関する言葉において、教友たち一人ひとりがムジュタヒド（解釈行為のできる学者）の学者となる。そしてこれは、後の時代のムジュタヒドよりも上位の立場となる。

イスラーム学者たちは、教友たちの地位を三つに分類している。

一、ムハージル…預言者様がマッカから離れる前、マッカからあるいは他の場所から、故郷や親戚と別れてマディーナにヒジュラをした者たちのことである。彼らは預言者様のところに、信仰をした後に来たり、やって来た後で信仰をしたりした。アムル・ビン・アス様はその一人である。

二、アンサール…マディーナもしくはその周辺地域に当時住んでいた、アウス族、ハズラジ族という二つのアラブの部族に属するムスリムたちのことをアンサールと呼ぶ。その理由は、預言者様やマッカから来た人々にあらゆる助力や献身を行うことを約束し、その約束を守ったからである。

三、その他の教友たち…マッカを支配する際、あるいは、マッカ支配後にマッカまたはその他の地域で信仰をするようになった教友たちのことである。彼らに対してムハージルやアンサールとは呼ばない。単に教友たちと呼ぶ。

教友たちの中で最も高い地位を持つのは、預言者様の後に続く四人のカリフである。それは順にアブー・バクル様、ウマル様、ウスマーン様、アリー様である。彼らに次いで高い地位を持つのは、アシャラ・イ・ムバッシャラ、つまり天国に行くと吉報をもたらされた十人のうち、前述の四人を除く六人である。（タルハ、ズバイル・ビン・アウワーム、アブドゥルラハマーン・ビン・アウフ、サアド・ビン・アブー・ワッカース、サイード・ビン・ザイド、アブー・ウバイダ・ビン・ジェッラーフ）そして、ハサン様とフサイン様である。

教友たちのうち最も高い地位を持つ者は、四人の偉大なカリフと、天国に行くと吉報をもたらされた人々であるが、次いで高い地位を持つのは、最初のムスリムとなった四十人の人々である。さらに、次いで高い地位を持つのは、バドルの戦いに参加した三百十三人の教友たちである。さらに次ぐ地位を持つのはウフドの戦いに参加した七百人の勇敢な人々である。さらに次ぐ地位を持つのはヒジュラ六年目のときに、木の下で預言者様と「死んでも引き返すことはない」と誓った千四百人の人々である。この誓いは「ビアート・ウ・ルドゥワン」と呼ばれている。

教友たちの数はマッカを征服したときに一万人、タブクの戦いのときに七万人、最後の別れの説法のときには九万人だったとされる。そして預言者様の逝去のときには地上に十二万四千人以上の教友たちがいた。なお、これに関しては別の説もある。

教友たちのうち最後に亡くなった一人は、アブドゥッラー・ビン・アブファーで、西暦七〇五年（ヒジュラ暦八六年）に、キュウフェで亡くなった。アブドゥッラー・ビン・イェスルは西暦七〇六年（ヒジュラ暦八八年）にシャームで、セヒール・

ビン・サアドは七〇九年（ヒジュラ暦九一年）に百歳のときにマディーナで、エネス・ビン・マーリキーは七一一年（ヒジュラ暦九三年）のときにバスラで亡くなった。アブトゥ・トゥフェイリ・アーミル・ビン・ワスィーレは七一八年（ヒジュラ暦一〇〇年）にマッカで亡くなった。

預言者様が亡くなった後、四人のカリフの時代となっても、教友たちはイスラームを広めるため、あるいはジハードを行うことについての約束を忠実に守っていた。全員が一致団結し、故国や家族と別れ、アラビア半島からあらゆるところへと出かけていった。旅立った者の大勢は、そこから戻ることなく亡くなるまでジハードを行い、イスラームを広めるために努めたのだった。こうして短期間で多くの国が征服されることとなった。征服されたところでは、イスラームが急速に広まっていった。

教友たちの全員が公正な人々であった。イスラームを伝えることで皆が一致していた。彼らがクルアーンを編纂し、預言者様のハディースを伝えてきたのである。

教友たちは、預言者たちや天使たちのうちで高い地位を持つ者に次いで、創造されたあらゆるものの中で高い地位を持っている。一人ひとりの名前は敬意や尊敬を持って口にされるべきである。

教友たちの一人ひとりが、この共同体の誰よりも高い地位を持っている。ムハンマド（アライヒッサラーム）が預言者であることを信じる者はすべて、つまりすべてのムスリムは、それがどのような人種であろうと国民であろうと、ムハンマド（アライヒッサラーム）の共同体、と呼ばれる。

教友たちの美徳や、その優越性について、クルアーンの章句では次のように伝えられている。『あなたがたは、人類に遣された最良の共同体である。あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、アッラーを信奉する。啓典の民も信仰するならば、かれらのためにどんなによかったか。だがかれらのある者は信仰するが、大部分の者はアッラーの掟に背くものたちである。』（イムラーン家章（アーリ・イムラーン）第一一〇節）

『（イスラームの）先達は、第一は（マッカからの）遷移者と、（遷移者を迎え助けたマディーナの）援助者と、善い行いをなし、かれらに従った者たちである。アッラーはかれらを愛でられ、かれらもまたかれに満悦する。かれは川が下を永遠に流れる楽園を、かれらのために備え、そこに永遠に住まわせられる。それは至上の幸福の成就である。』（悔悟章（アッ・タウバ）第一〇〇節）

『ムハンマドはアッラーの使徒である。かれと共にいる者は不信心の者に対しては強く、挫けず、お互いの間では優しく親切である。あなたは、かれらがルクウしてサジダして、アッラーからの恩恵と御満悦を求めるのを見よう。かれらの印は、額にあるサジダによる跡である。（ムーサーの）律法にも、かれらのような者の譬えがあり、（イーサーの）福音にも、かれらのような譬えがある。それは蒔いた種が芽をふき、丈夫な茎を伸ばして、種を蒔いた者を喜ばせるようなもの。それで不信者たちは、かれらに憤激することであろう。…』（勝利章（アル・ファトフ）第二九節）

ハディースによれば、教友たちについて預言者様はこのようにおっしゃっている。

「私の教友たちに対して罵る言葉を言ってはなりません。教友たちの後の世代の一人が山のように金の施しをしたとしても、教友たちが一すくいの大麦を施して得た善行の半分にも届かないのです。

教友たちは天空にある星のようなものです。そのうちの誰を追っていったとしても正しい道に入ります。

教友たちを敵とすることは控えるのです。アッラーのことを畏れなさい。彼らを愛する者は私を愛することになり、だからこそ彼らを愛するのです。彼らを敵とする者は、私を敵とすることになるのです。彼らを傷つける者は私を傷つけることとなり、私を傷つける者はもちろんアッラーを傷つけることになるのです。

共同体のうち最も善良な者は、私の時代にいた者たちです。彼らの後に最も善良な者はその後に続く世代です。さらにそれに次いで善良な者はその次の世代となります。私を見た者や、私を見た者を見たムスリムには、地獄の火が及びません」

このように、クルアーンの章句やハディースにて、教友たちの優越性や美徳が明らかにされているのである。

自分個人の言葉は言わず、啓示を話した
言葉は真珠のようでオマーンの海のようだった、その寛大さの源
身体は人々とともにあっても、心はアッラーとともにあり
常にその唯一性を見つけ出した、人々の間にあっても、その寛大さの源

預言者様の習慣やスンナ

神聖なひげや髪の毛

預言者様の神聖な髪の特徴について、エネス・ビン・マーリキーが質問を受けた。

— 預言者様の神聖な髪の毛はどのようなものでしたか?

エネス様はこのように返事をした。

— 二種類の間でした。つまり、縮れ毛でも直毛でもありませんでした。その二つの間でした。長さは、耳と肩の間でした。

イブニ・アッバース様は「預言者様は神聖な髪を額に垂らしていました。後には、神聖な髪の毛を分けるようになりました」と語っている。

学者たちはこのように述べている。「髪の毛を二つに分けるのは預言者様のスンナである。なぜならば、後から預言者様がそのようにしたからである。額に前髪を垂らすことも合法であり、二つに分けることも合法である。しかし、二つに分ける方がより良いものである」

アーイシャ様はこのように語っている。「預言者様はジュンメより短く、レフレよりも長い髪でした」

ジュンメとは、肩まで伸ばす髪型のことで、レフレとは耳たぶまで伸びた髪の毛のことである。つまり、アーイシャ様の伝えたところによると、預言者様の髪の長さは、神聖な耳より下まで長かったが、肩までは届かなかず、両者の間であったことが分かる。

カドゥ・イアーズ様はこのように述べている。「上で伝えられている話は次のように説明されています。預言者様の神聖な耳側にある髪の毛は耳たぶを超えるくらいの長さでした。後ろ髪は肩のあたりまで伸びていました。

一説では髪が耳まで伸びていたとされ、また一説では肩まで伸びていたと伝えられる理由は、あるときにはそうしていて、また別のときには、また別のようにしていたからです。これらの説のすべてが真実です。預言者様は神聖な髪をときどき肩まで伸ばしていました。そして、ときには切って、神聖な耳たぶまで、あるいはその中間までにしていました」

ウンム・ハーニはこのように語っている。「預言者様はあるとき、マッカで私たちのところにいらっしゃいました。そのとき、四つのガディレがありました」ガディレとは、髪の毛の房という意味である。つまり神聖な髪の毛を四つに分けて縛って垂らしていたと考えられる。

以上をまとめると、預言者様の髪やひげの毛は、縮れ毛でも直毛でもなく、生まれつきのウエーブがかかっていた。神聖な髪は長かった。前髪は垂らしていたが、後には分けるようになった。神聖な髪はときには伸ばし、ときには切って短くした。

男性が髪の毛を剃ったり、あるいは伸ばしたり、とかして二つに分けることはスンナである。状況や習慣、時代によって行動すべきであろう。しかし、髪をねじったり、編んだりすることは好ましくないこと（マクルーフ、忌避行為）である。預言者様の神聖なひげの特徴について、エネス様はこのように語っている。「預言者様の神聖なひげには、白髪が少ししかありませんでした。神聖な髪や神聖なひげにある、白髪の数は十七か十八本より多くはありませんでした」

アブー・バクル様がある日

―あなたの白髪が増えました、預言者様！と言った。

すると、預言者様は次のように答えた。

―私は『フード章』、『出来事章（アル・ワーキア）』、『送られるもの章（アル・ムルサラート）』、『消息章（アン・ナバア）』、そして『包み隠す章（アッ・タクウィール）』のことで髪の毛が白くなったのです。

「つまり、これらの章では天国や地獄の状態が多く述べられ、共同体のことがどうなるかと心配し、その心配から髪やひげが白くなったとおっしゃったのです」

アムル・ビン・シュワイブは「預言者様は神聖なひげを縦横に切っていました」と語っている。また、ティルミィーズィー様のあるハディースによると「預言者様が『口ひげを短くしない人は私たちの仲間ではありません』とおっしゃった」と伝えている。また別のハディースによれば、預言者様は「あごひげは多く、口ひげは短くしなさい」ともおっしゃっている。

イブニ・アブドゥルハキム様はこのように述べている。「口ひげを短くし、あごひげは切らないべきです。口ひげを短くするというのは、完全に剃るということを示しているわけではありません」

イマーム・ネベビー様は「口ひげを切るにあたっての適切な長さとは、唇の周りが見えるまで切ること、そして、根からは切らないことです」と語っている。

学者たちによれば、口ひげの上部を短くし、両脇を長く伸ばすことは好ましくないとされている。また、イブニ・ウマルはこのように語っている。

「預言者様に対して、ゾロアスター教の一団について話がされました。これに対して預言者様は『彼らは口ひげの両脇を伸ばし、あごひげを切っています。ですから、あなた方は彼らの逆をするのです』とおっしゃいました」

また、アブー・ウマーメによると「預言者様！啓典の民はあごひげを短くし、口ひげを伸ばしています」と言ったところ、預言者様は

―あなた方は口ひげを短くし、あごひげを伸ばしなさい。

とおっしゃった、とのことである。

学者たちが伝えるところによると、口ひげを眉毛程度に短くすることはスンナであるとされている。また、あごひげは、あごの部分から一握りつかむ程度に伸ばし、それ以上に長い部分を切ることはスンナであるともされている。

あごひげを一握り分よりも短くすることは、スンナからすると適合しない。スンナに従う意図をたてて、あごひげ

短くしていることはビドア（イスラームからの逸脱）となり、禁じられた行為となる。あごひげを伸ばすことは、預言者様の習慣であった。しかし、アッラーの命令に基づいている場合、また生活費のため、あるいは動乱が起こるのを防ぐため、ひげを完全に切ることは許されることであり、また必要なことでもある。これらのことは、スンナを断念するためではなく、理由があって行うことだからである。しかし、それがビドアであれば、理由とはならない。

預言者様の寝方

預言者様が敷布団で寝ようとするときには、右側を床にして寝て、右腕を身体の右側の下に置き、そして

「アッラーよ！　私自身をあなたに預けます。顔をあなたに向けました。私の仕事をあなたに委ねました。背をあなたにもたせました。私はあなたの罰を怖れ、あなたの慈悲を望みます。あなたの慈悲以外に避難するものはないのです。あなたの罰からは他に身を守るものはありません。

ただ、あなたの慈悲に逃れ、ただあなたの慈悲によってのみ救われます。私はあなたが下さった啓典と送られた預言者たちを信じます。

アッラーよ！　あなたの名前を唱えてから身体の横を床につけました。もし、私の魂をお取りになるのであれば、あなたの慈悲をお恵みください。もし、魂を自由にさせるのであれば、敬虔なしもべを守ったようにお守りください。

アッラーよ！　私はあなたの名に従って死に、あなたの名に従って甦ります。私たちを食べさせ、飲ませ、あらゆる必要なものを与え、私たちを保護し、身を寄せるアッラーに感謝します。必要を満たせず、保護する者のいない者が大勢います。アッラーよ！　しもべたちをあなたの前に集めた日、その日の罰から私をお守りください」という祈念をしていた。そして目を覚ましたときにも

「アッラーに感謝します。私たちを死んだ後、再び甦らせました。審判の日、還るところはアッラーのもとなのです」

とおっしゃっていた。

また、預言者様は床につくとき

「天と地の主よ！　すべてのものの主であり、種を割っては緑とさせ、旧約聖書や新約聖書、そしてクルアーンを下したアッラーよ！　私は、あらゆる悪事をはたらくものの悪から、あなたへと避難します。なぜなら、それらの前髪をつかむのはあなただからです。

アッラーよ！　あなたはアウワール（始原者／すべてに先行して存在する者）です。あなた以前は無なのでした。そしてあなたはアーヒル（最終者／永遠に終わりのない者）です。あなたの後は無となります。あなたはザーヒル（顕現者／その存在が明らかである者）です。あなた以外には何もありません」とも祈念していた。

預言者様は目を覚ましたとき「他に神はありません。ただあなたがいるばかりです。あなたを唱え、タンズィーフ（あらゆる欠点や不足、並ぶものがないと信じて述べること）を行います。アッラーよ！　私の罪を免じ、あなたの慈悲を求めます。

アッラーよ！　私の知識を増やしてください。私に正しい道を示した後、私の心を揺るがないようにしてください。あなたの偉大さから私に慈悲を与え、私に恩恵を与えてください。なぜなら、最も多く赦すのはあなただからです。最も多く赦すのはあなたです」と言って願うこともあった。

ベラー・ビン・アーズィブは次のように語っている。「万物の王が私にこのようにおっしゃいました。寝る場所に来たときには『礼拝を行うときのように清めを行い、その後、身体の右側を下にして寝るのです。そして『アッラーよ！　私自身をあなたに預けます。顔をあなたに向けました。背をあなたにもたせました。私はあなたの罰を畏れ、あなたの慈悲を望みます。あなたの慈悲以外に避難するものはないのです。あなたの罰からは他に身を守るものはありません。ただ、あなたの慈悲に逃れ、ただあなたの慈悲によってのみ救われます。私はあなたの下した啓典や送った預言者を信じます』と言いなさい。その夜に亡くなったとしたら、イスラームを信じたまま亡くなることになるのです。誰か

がこの言葉を言い、その夜に亡くなったとしたら、イスラームを信じたまま亡くなることになるのです』」

また、預言者様はこのようにおっしゃっている。「あなた方は誰であっても、夜に床から起き、その後もう一度戻って寝るときには、布団を三度はたきなさい。なぜなら、自分の後に何かが来て、その床に入っているか分からないからです。

床に横になるときには、身体を右にして寝なさい。身体の脇を床につけたとき『アッラーよ！　あなたを唱え、そしてタンズィーフを行います。

アッラーよ！　あなたの名前を唱え、私の脇を床につけました。あなたの名前を唱えて身体を起こします。もし、私の魂をお取りするのであれば、慈悲を恵み、罪を免じることに巡り合わせてください。もし、魂をお返しいただくのであれば、敬虔なしもべを守ったように守ってください』と言うのです。目が覚めたときには『アッラーに感謝します。私の身体を健康なものとさせ、私の魂を返し、アッラーを念唱する許しを与えました』と言うのです」

預言者様はうつ伏せになって寝ている人を見ると「ほら、これはアッラーが最も好まない寝方です」とおっしゃった。

シェリード・ビン・スウェイドが伝えるところによると、預言者様はうつ伏せになって寝ている人を見ると、彼を足の先で触り「これは偉大なるアッラーが最も好まない寝方です」とおっしゃった。

その寝ていた人はアスハーブ・スッファのアブドゥッラー・ビン・タフフェであり、このように語っている。

「私は朝方、モスクで腹や顔を下にして寝ていたとき、誰かが私に足で触りました。

―誰ですか？と聞かれました。

―私は、アブドゥッラー・ビン・タフフェです、と答えました。

見ると、何と万物の王でした。

―これは偉大なるアッラーが最も好まない寝方です、とおっしゃいました」

また、預言者様は清めを常に保っていた。

預言者様はトイレに行って出た後には、清めをすぐに行っていた。

預言者様の座り方

ハンザラ・ビン・フズィェムは「預言者様のもとへと行ったとき、預言者様があぐらをかいて座っていたのを見ました」と語っている。また、ジャービル・ビン・セムレは、預言者様が朝の礼拝を行ったとき、太陽が上がるまで、その場所であぐらをかいて座っていたということを伝えている。

預言者様は人々が集まっているとき、決して人々の方に向かって足を伸ばすことはしなかった。

シェリード・ビン・スウェイドはこのように語っている。「万物の王が私のところへ寄りました。私はこのとき、左手を後ろにし、手のひらの上に座っていました。万物の王は『あなたは罰を受けた人々が座るように座っているのですか？』とおっしゃいました」（罰を受けた人々というのはユダヤ人のことを指す）

カイレ・ビンティ・マハレメはこのように語っている。「預言者様がクルフサの形で座っていたのを見かけました。預言者様がこのようにしてくつろいで座っていたのを見たのでした」（クルフサとは、臀部を地面につけ、両膝を立てて腹につけ、両腕で足を抱えて組むような座り方のことである）

預言者様が食事をするときの座り方は、大変シンプルなものだった。また、人のいないところで食事をしたり、幕の後ろに立っていたり、自分の前にたくさんの料理を運ばせたりすることはなかった。

食事中、預言者様は地面に座り、食事は床に置いて食べていた。「私はしもべが座るように座り、しもべが食べるように食べます。私は単なる一人のしもべです。私のスンナから顔を背ける者は、私とともにはありません」とおっしゃっている。

預言者様があるとき、マッカの高台のある場所で背をもたせかけながら食事をしていると、大天使ジブリール様が

やって来た。そして「ムハンマド（アライヒッサラーム）よ。あなたは王のように食事をするのですか？」と言ったため、預言者様は床に座り直した。

また、預言者様のところにある日、ジブリール様とともにある天使がやって来た。その天使は以前には来たことがなかった。

その天使は預言者様に「アッラーがあなたに挨拶を送り、あなたを預言者であり王であるか、あるいは、預言者でありしもべであるか、どちらかを選ぶ自由を与えました。そのうちの一つを選んでください。『預言者であり王となるか、あるいは、預言者でありしもべとなるか、あなたが望む方になることができる』とおっしゃっているのです」と言った。

ジブリール様は謙遜を示してください、と合図を送り、預言者様は「預言者でありしもべとなりましょう」と返事をした。その後、預言者様は立ったまま、あるいはどこかに背をもたせかけながら食事をすることはなかった。

預言者様の食べ方、飲み方

アブー・ジュハイフェはこのように語っている。「万物の王は『私は何かによりかかったまま食事をすることはありません』とおっしゃいました」。よりかかるのには三つの形がある。第一は脇を何かにもたせかけること。第二はあぐらをかくこと。第三は一方の手を床につけたまま食べることである。この三つのよりかかる形は非難され、注意されることである。

預言者様は食事を三本の指で、つまり、右の人差し指とその両脇の二本の指を使って食べていた。

預言者様はこのようにおっしゃっている。

「食事の恵みとは、食事の前に清めを行い、食事の後にも清めを行って手を洗うことです。

手についた肉や脂の匂いのせいで、あるいは汚れを洗わずに寝てしまったせいで、誰かに何かが起きたときには、

それを自分以外の人のせいにしてはいけません」

預言者様はガッラという名のある器を持っていた。午前中、礼拝が終わった後、この器の中にセリド（ティリドとも呼び、細かく刻まれたパンと多めの肉で作った料理）を入れて持ってきて、中央に置いた。

ムスリムたちがティリドの器の前に集まったとき、預言者様が正座をして座っているのを見たベドウィン（砂漠の村人）が「これは一体何という座り方なのか？」と口に出した。

預言者様は「間違いなくアッラーは、私を恵みある一人のしもべとしました。無理をさせたり、頑固な者にはしませんでした。さあ、端から手をつけなさい。真ん中や上から食べることは避けるのです。

食事の豊かさは、真ん中と上にあります。あなた方の誰かが食事をするときには、皿の中央から食べないようにするのです。代わりに、端から食べなさい。なぜなら、食事の豊かさは中央にあるからです」とおっしゃった。

ウマル・ビン・アブー・サラマはこのように語っている。「私は万物の王の教育を受けた子供の一人でした。食事をするとき、私は食器の中を手でかき回しました。万物の王は私に『息子よ！ バスマラを唱えて右手で食べるのです。そして自分の目の前にあるところから食べなさい』とおっしゃいました」

その後、そのように食べることとなった。

また、預言者様は「あなた方の誰かのために手伝いが食事を作って持ってきたとき、その手伝いの人は食事の熱さや煙に我慢してきたことを考えるのです。ですから、その人も食事の席にあなた方と一緒に座らせ、食べさせるようにしなさい。もしその人が遠慮をして同席しなかったり、あるいは食事が少なかったりするのであれば、その人に料理から何口かを取り分けて与えなさい」とおっしゃった。

預言者様はどのような料理でも見下したり、悪口を言ったりはしなかった。

望めば料理を食べ、望まなければ置いたまま特に何も言わなかった。どのような恩恵であっても、気に入ったからといって褒めることも、気に入らなかったからと言って悪く言うこともなかった。

食事が持ってこられたとき、預言者様は「アッラーフンマ・バーリク・レナー・フィーマ・レザクテナ・ワキナー・アザーバンナル。ビスミッラー！」と唱えてから食事を始めていた。

アーイシャ様はこのように伝えている。「万物の王は『あなた方の誰かが食事をするとき『ビスミッラー！』と言って、偉大なアッラーの名前を唱えなさい。

食事をする前にこれを言うのを忘れたら『食事の前後のためにビスミッラー！』と言うのです』とおっしゃいました」

ウマイヤ・ビン・マフシは次のように伝えている。「ある人がバスマラを言わずに食べているところを、預言者様は座って眺めていました。

食事の終わり頃、最後のひと口が残り、そしてそれを口に持っていく途中で、その人が『食事の前後のためにビスミッラー！』と言いました。

預言者様は笑いました。そして『悪魔が彼とともに食べ続けいたのです。その人が偉大なアッラーの名前を言ったら、悪魔が胃に何も残さずに吐き出したのです』とおっしゃいました」

預言者様は小浄と大浄の清めを行うとき、靴を履くとき、髪をとかすときには、できるだけ右側から始めることを好んでいた。また、何かを受け取るときには右手でもらい、与えるときにも右手で与え、何かを始めるときにも右から始めていた。

「あなた方の誰かが靴を履くとき、服を着るときには、右から始めなさい。

靴を脱ぐときには左から脱ぐのです。

靴を履くときには右の足を先に、靴を脱ぐときには右の足を後にしなさい」と預言者様はおっしゃっている。

アブドゥッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている。「預言者様は『あなた方の誰かが食事をするとき、右手で食べるようにするのです。何かを飲むときも右手で飲みなさい。なぜなら、悪魔は左手で食べ、左手で飲むからです』

とおっしゃいました」

サラマ・ビン・エクワの父は次のように伝えている。「預言者様はエシジャー族のブスル・ビン・ライユーリルという名の人が左手で食事をしているのを見たとき『右手で食べなさい』とおっしゃいました。

その人は『そのための力がありません。右手では食べられないのです！』と言って嘘をつきました。

すると、預言者様は『力が抜けますように。右手で食べないのは、ただうぬぼれや虚栄心によるところなのです』とおっしゃいました。

その後、その人は二度と口まで手を上げることができなくなってしまいました」

預言者様は「アズィーズ（比類なき強力者）で、ジェリール（栄光者）であるアッラーは、食べられるものを食べ、飲めるものを飲み、これに対してアッラーに感謝をするしもべのことに必ずや満足するのです」とおっしゃっている。

アブー・サーイド・ウル・フドゥリはこのように語っている。「預言者様は食べたり飲んだりするとき、このように唱えていました。

『アルハムドゥ・リッラーヒッラズィー・アトゥアーマナ・ワ・セカナ・ワ・ジャアルナー・ムスリミーン（私たちに食べさせ、飲まさせ、そして私たちをムスリムの一員とさせたアッラーに感謝します）』」

アブー・ウマーメトゥルバヒリはこのように伝えている。「預言者様が食事を終わらせ、立ち上がるときには、このように唱えていました。

『アルハムドゥリッラーヒ・ケスィーラン・タイイバン・ムバーラカン・フィヒ・ガイレ・マクフィーイン・ワラー・ムワッダイン・ワラー・ムスターネン・アンフ・ラッバナー（感謝はただアッラーにのみあります。アッラーよ！　私たちはあなたに対して、たくさんの、そして、一点の曇りもない、豊かさと恵みに満ちた、拒絶も断念もされない、そして必要なところである感謝をアッラーに捧げるのです）』

『アルハムドゥ・リッラーヒッラズィー・ケファーナ・ワ・アルワーナ・ガイレ・マクフィーイン・ワラー・マクフー

リン（私たちに十分食べさせ、飲まさせ、私たちを拒絶せず、恩知らずの者にさせないアッラーに感謝を捧げます）』」
アブー・フレイレが伝えるところによると、預言者様は食事の後に手を洗っていた。
預言者様は現世のことを重視していなかった。
アブドゥッラー・ビン・マスードはこのように語っている。「万物の王は、草で編んだある敷物の上で寝ていて、その敷物の痕が脇についていました。
預言者様が起きると、そこをさすりました。
『両親をあなたに捧げます、預言者様！ 私たちに知らせてくださっていたら、あなたを守るために敷物の上に何かを敷いていたのですが』と言いました。
そして『あなたのために、柔らかな一つの床を作りましょう』と続けました。
万物の王は『この世のものは、私にとって必要ではないのです。私とこの世の関係は、木陰でしばらく休んだ後、そこを離れて道を歩み続ける騎兵のようなものなのです』とおっしゃいました」
アブー・ウマーメトゥルバヒリは次のように伝えている。「預言者様はこのようにおっしゃいました。『アズィーズ（比類なき強力者）で、ジェリール（栄光者）であるアッラーが、マッカの谷を金に変えるという提案を私になさいました。
『いいえ、アッラーよ！ 私は一日を満腹に、一日を空腹でありましょう。空腹のときは、あなたに嘆願し、あなたに念唱するでしょう。満腹の時はあなたに感謝し、賛美するでしょう』と答えました』」
アーイシャ様はこのように語っている。「預言者様がマディーナに来て、亡くなるまでの間、家族は三日間連続して小麦のパンでお腹を満たしたことはありませんでした。
預言者様やその家族は、ほとんどのとき大麦のパンやナツメヤシだけを食べており、それらの量も多くはありませんでした。
預言者様が亡くなる前には、家族の食事のためアブー・シャフマーという名前のユダヤ人に、一ウェスキあるいは

三十サーの大麦を借りる代わりに鎧を預けたことがありました」
また、アーイシャ様はこのようにも語っている。「ムハンマド（アライヒッサラーム）を真実の宗教や啓典とともに預言者として送ったアッラーに誓って言いますが、あるとき、預言者様は『偉大なるアッラーが預言者を送ったときから魂を取り上げるまで、私はふるいを見ることもないし、ふるいで作った小麦粉で出来たパンを食べることもありません』とおっしゃいました。すると『では、大麦をどのようにして食べているのですか？』と尋ねられたので『パンの上の粉をフッと吹きながら食べています』と答えました。
万物の王は亡くなるまで、自分も家族も二日間連続して大麦のパンで満腹になったことはありませんでした。
アッラーに誓って万物の王の家では、四十日間が経っても、灯りやかまどの火が何一つつくことはありませんでした。
何ヶ月が経っても、預言者様の家では一つの火がついたり、煙が立ち上ったりするのは見られませんでした。
二ヶ月が経っても、預言者様の家族のためにパンを作ったり、あるいは鍋で料理を作ったりすることもありませんでした。
私たちがエスウェデイン、つまりなつめやしと水でお腹を満たしていたとき、万物の王は亡くなりました。
預言者様が一日に二種類の料理を食べることはありませんでした。ナツメヤシを食べたら、パンを遠慮されていました。パンを食べたときにはナツメヤシを遠慮されました。私を泣かせるのはこのことです」
エネス・ビン・マーリキーは「預言者様がアッラーに再会するまで、ヒワーンの上で食事をしたり、混じりけのない小麦から出来たパンを食べたり、焼いてある子羊の料理を食べているのを見たことがありませんでした」と述べている。
（ヒワーンとは、食事をするときに料理を置いておく台や机のことである）
アブー・フレイレ様は預言者様が自分自身について「アッラーよ！ 私の家族、ムハンマド（アライヒッサラーム）の家族が亡くならない程度に食事をお与えください！ ムハンマド（アライヒッサラーム）の家族が亡くならない程度

に食事をお与えください！」と願っていたことを伝えている。

預言者様は、食べる物を食卓としての敷物（ソフラ）の上に置いて食べていた。ソフラとは元来、旅人のために作られた食料のことを指していたが、その食料は概ね丸い形の革に包まれて運ばれていたため、やがて食事の際に使う敷物のことをソフラと呼ぶようになった。

預言者様は、あれを作ってほしい、これを作ってほしいとはおっしゃらなかった。あるものを食べていた。アーイシャ様はこのように語っている。「預言者様が私のところに来て『食べる物は何かありますか?』と尋ねました。『いいえ、ありません』と答えると『それでしたら、私は断食をします』とおっしゃいました。

また別の日、万物の王が私たちのところへいらっしゃいました。『預言者様！私たちのところに贈物が届きました』と言うと、預言者様は『それは何でしょうか?』と尋ねました。『ハイスです』と答えました。すると『しかし、私は断食をして朝を迎えたのです』とおっしゃいました。（ハイスとは、ナツメヤシと油、牛乳でできた料理のこと）

預言者様はハルワとはちみつ、パン、ナツメヤシ、野菜の料理を好んでいました。また、預言者様にミルクが出されたとき『ミルクには二つの恵みがあります』とおっしゃいました」

アブドゥッラー・ビン・アッバースはこのように述べている。「私とハーリド・ビン・ワリード、そして万物の王が一緒に、叔母のマイムーナ・ビンティ・ハーリスの家に行きました。ウンム・フフェイドが万物の王にバターとミルクを贈りました。

叔母は『いただいたミルクからあなた方にお分けしましょうか?』と聞きました。万物の王は『いただきましょう！』と答えました。叔母は入れ物にミルクを入れて持ってきました。

万物の王はそれを取って飲みました。私は万物の王の右側にいて、ハーリド・ビン・ワリードが左側にいました。

預言者様はミルクの残りを私に渡し『あなたが飲みなさい。先にハーリドに飲ませてもよいです』とおっしゃいました。

『私はあなたの残りを飲むことに関しては、他の人を優先しません』と言いました。

これに対して預言者様は『アッラーが食事を与えた人は『アッラーフンマ・バーリク・ラナー・フィヒ・ワ・アトアムナ・ハイラン・ミンフ（アッラーよ、この食事により私たちに恵みを与えてください。そして私たちにより良いものを与えてください）』と言うのです。

アッラーがミルクを飲ませた人は『アッラーフンマ・バーリク・ラナー・フィヒ・ワ・ズィドゥナー・ミンフ（アッラーよ、このミルクで私たちに豊かさを与えてください。そして私たちへの恵みを増やしてください）』と言うのです。なぜなら、食事や飲み物としてミルクより他に代わるものはないからです』とおっしゃいました」

マディーナのムスリムたちは、ナツメヤシが初めて収穫されると、それを預言者様のところに持って来ることにしていた。そして預言者様がそれを手にして、豊かになるようにと唱えた後、子供たちのうちの最も幼い者を呼んで、その子供に与えるのだった。預言者様は「なつめやしのない家の人々は空腹なのです」とおっしゃっている。

エネス・ビン・マーリキーは「預言者様はかぼちゃの料理を好んでいました。かぼちゃが入っている料理が出てきたとき、かぼちゃを預言者様の前に取りやすいように寄せました。また、預言者様は羊の最もおいしいところは背中の肉であるともおっしゃいました」と伝えている。

ウンム・アイユーブは「預言者様はあなたの家で七ヶ月間滞在されました。万物の王の最も好んだ料理は何でしたか?」と質問を受けた。

ウンム・アイユーブは「預言者様が自分のために料理を指定することは見たことがありません。そして嫌いな料理があるのも見ませんでした。預言者様に肉と小麦粉を混ぜた料理を作ったとき、気に入ったように見受けられたので、五日間あるいは六日間、もしくは十日間に一度作るようにしました」と答えた。

アブー・ムーサル・アシュアリーは「万物の王が鶏肉を食べているのを見ました」と語っている。

預言者様は食事の残り物を食べることを好んでいて「誰かが食事を食べた後、その皿や器からきれいに食べたら、その料理はその人が赦されるようにと願うのです」とおっしゃっている。

預言者様は緑のナツメヤシとメロンを、そして緑のナツメヤシときゅうりを食べ合わせていた。「この熱さがこの冷たさを、そしてこの冷たさがこの熱さを和らげるのです」とおっしゃった。

また、預言者様がこのようにおっしゃっていたことが伝えられている。「アブー・ザールよ！ 肉料理を作るときには、近隣の人たちのことも考え、煮汁を多くしてそれを分けるようにするのです」

「近所の人々が空腹であるにもかかわらず、自分を満腹にさせる人は立派な信者ではありません」

「アッラーに礼拝を行いなさい。食事を与えなさい。互いに挨拶をし合いなさい。そうすれば天国に入れるのです」

「一人分の料理は二人に、三人分の料理は四人に足ります。四人分の料理は八人に足りるのです」

アスマー・ビンティ・アブー・バクルは「作った料理の沸騰や湯気が収まるまで、ふたをしたまま置いておくことを勧められました。万物の王が『こうすることは最も大きい恵みとなるのです』とおっしゃったのを聞きました」と伝えている。

預言者様はマッカ征服の際、叔父のアブー・ターリブの娘のウンム・ハーニ様の家に行った。彼女に「何か食べ物はありますか？」と尋ねた。ウンム・ハーニ様は「ありません。ただ、乾いたパン切れと酢があるばかりです。しかし、これらをあなたに出すのは恥ずかしいのです」と言った。

預言者様は「それらを持ってきてください。それを粉にして水の中に入れるのです。塩も持ってきてください」とおっしゃった。酢をその上につけ、食べた後、アッラーに感謝をした。

「ウンム・ハーニよ！ 酢は何と美しい食べ物でしょう。酢がある家は食事に困ることはないのです」とおっしゃった。

また、「最もおいしい飲み物は何ですか？」と聞かれたとき、預言者様は「甘くて冷たい水です」と答えている。

預言者様はビューユトゥッスクヤから持って来られていた甘い水を飲んでいた。ビューユトゥッスクヤからの水は、マディーナから二日間の距離のところにあるものだった。

預言者様はこのようにおっしゃっている。「あなた方は、何かを食べるときは右手で食べなさい。飲むときにも右手で飲みなさい。なぜならば悪魔は左手で食べたり、左手で飲んだりするからです」

また「あなた方の誰かが何かを飲むとき、入れ物の中に息を吹きかけないようにしなさい」ともおっしゃって、食べ物や飲み物に息を吹きかけることを禁じ、さらに金や銀の食器で食べたり飲んだりすることも明白に禁じられた。

預言者様が水を飲むときには、一杯のコップの水を二、三回に分けて飲んでいた。そして「これはより良く、より満足される飲み方なのです」とおっしゃった。

「あなた方の誰かが何かを飲むとき、一気には飲まないようにするのです」

「らくだのように一気には飲まないように。二、三回に分けて飲みなさい。そして飲むときには『ビスミッラー』と言い、口を入れ物から離したときには『アルハムドゥリッラー』と言いなさい」ともおっしゃっている。

ナウファル・ビン・ムアービエは「万物の王は、何かを飲むとき三回息をついで飲んでいました。飲む前にはアッラーの名前を唱えてバスマラを言い、最後には『アルハムドゥリッラー』と言って感謝をしていました」と語っている。

アーイシャ様はこのように伝えている。「預言者様は、朝方作っておいた水入れの革袋の中のジュースを夜飲んでいました。そして夕方に作ったジュースを朝に飲んでいました。

食事の前後には手を洗い、右手で食べたり飲んだりするのが預言者様の習慣でした。食事の前に手を洗うときには若い人を先に、食事の後ではまず年寄が手を洗っていました。

また、皿の端から、そして自分の目の前から食べることや、右ひざを立てて左足の上に座ることも預言者様のスンナでした。あまりにも熱いものは食べないようにし、また、臭わないようにもするべきです。預言者様は食事中にまったく話さないことは適切であるとはみなしませんでした。それは火を崇める人々の習慣で、楽しい話しをするべきなのです。塩で始まり、塩で終わらせることが預言者様のスンナであり、癒しでもありました。

飲食の仕方を学ぶことは、礼拝を学ぶことよりも先にあります。イスラームで、最初に起こるビドア（イスラームからの逸脱）の一つは、満腹になるまで食べることです。また、毎日肉を食べることは心を傷めます。天使たちもそ

れは好みません。一方、肉を少なく食べることは道徳を壊します。食事は敷物の上で食べ、その敷物は床に広げることが勧められています。敷物は革のものを使っていました。野菜類を食べることはよいことです。古くから、野菜のない食事は、頭を使わない年寄のようであると考えられてきたものです」

イマーム・ジャーフェリ・サードゥクは次のように伝えている。「資産や子孫をたくさん欲しがる者は、野菜の料理を多く食べるようにと言われています。まず食卓に座り、その後で、料理が持ってこられるようにします。預言者様は『私はしもべです。しもべらしく床に座って食べるのです』とおっしゃっていました。

空腹になるまで食べないようにして、あまりに多くは食べないべきです。満腹になる前に食事を終わらせ、驚くようなことのないときには笑わないべきです。預言者様は『良いことの初めは空腹です。悪いことの初めは満腹です』とおっしゃっています。食事の味は空腹の状態によっておいしくなるのです。満腹の状態では人を忘れがちにさせ、心を眠らせます。アルコールの飲み物は血に害を与えます。空腹は脳を清くし、心を磨きます。

罪深い人や悪い人たちと一緒に食べたり飲んだりはしないべきです。煮た料理は、ふたを閉めたまま、まずは冷ますようにします。預言者様は『右手で食べなさい。右手で飲みなさい』とおっしゃっていました。預言者様はパンを右手で取り、その後、スイカを左手で食べていました。パンは片手でちぎるのではなく、両手を使ってちぎります。

ひと口を小さくし、そしてよく噛むべきです。左右や空を見たりしないで、食べ物や前を見るようにします。口をあまり開けず、食事中に手を服や頭につけないようにするべきです。咳やくしゃみをするときには、頭を後ろに向ける必要があります。

招かれていない食卓にはつかず、食事中に他の人よりたくさん食べないことも大切です。満腹になったら、この食事が罪に使われないよう願い、最後の審判の日にこのことについて聞かれることを考えるようにします。礼拝を行うための力をつける意図を持って食事をするべきです。空腹のときはゆっくりと食べるようにします。まず、大人が食事を始めます。三回以上、食べてくださいと勧められるなど相手に気を遣わせないようにします。客人とともに食事をするときには、客人が満腹になるまでは自分の食事を終わらせないようにするべきです。

預言者様は少なく食べ、たくさん食べないようにすることについてよく語っていました。

『人の心は田畑の作物のようなものです。食事は雨のようなものです。余分な水は作物をだめにしてしまうように、多すぎる食事も心を殺してしまいます』『多く食べたり飲んだりする者をアッラーは好みません』とおっしゃっています。

預言者様は胃の三分の一を食事で、三分の一を飲み物にするよう勧めていました。残りの三分の一は空気、つまり空であるということになります。最も良いのは少なく食べ、少なく寝ることでです。多く食べることは病気の始まりであり、少なく食べることは治療の始まりでなのです。一人分の料理は二人に足ります。客人は、呼ばれた家の人から塩とパン以上を期待しないべきなのです。家人は客に食事を勧めたり、洗うための水を供したりすることが勧められています」

カリフのハールーン・アッラシードは、水差しで客の手に水を注いでいたという。また、客人に対しては、その人が好む食べ物を渡すべきである。清潔なところに落ちたものは取って渡しても構わない。しかし、汚れている場所であれば、猫や他の動物に与える。このような家では豊かさが増すこととなり、その豊かさは子孫まで伝わるのである。床に落ちた食べ物を拾わなかったら、悪魔が食べることになる。一方、皿に残った食べ物をきれいに食べることはスンナである。果物のシロップやヨーグルトのようなものの余りには水を入れ、振って飲むことは善とされる。皿やコップに残しておくのは良いことではない。預言者様は信者たちの余ったものを食べることを好まれていた。

食事の後に歯をミスワークとつまようじできれいにすることは、預言者様のスンナであり、清潔なことである。清潔は信仰を強める。食後には、家の主人に対して、豊かさや慈悲、免罪の祈念を行い、それから帰る許しを求めると同時に、相手を食事に誘うべきである。

食事中には恐ろしいことや醜い言葉を口にしない。死や病気の話もしないようにする。食卓に来た食事を見ないで、

ひと口も飲み込まないうちに、別の一口を手にはしない。食事中は、何かのため、たとえ礼拝であっても食べかけでは立ち上がらない。礼拝は先に行っておくようにする。

　もし準備された料理が冷めたり、悪くなったりすることがあるのであれば、それが適切である限り、礼拝を食後に行い、先に食事を取ることも可能である。食事が終わったら食卓から離れる。道端や立ちっぱなしで、あるいは歩きながら食べないようにする。

　口や手に肉や料理の匂いがついたままで寝ないべきである。子供たちの手は洗ってやる。満腹のままでは寝ない。食料は必要な量を買い、あまりに多く買いすぎない。それは浪費である。食べ物や飲み物の食器には、ふたがあった方がよい。川や貯水池では、かがんでそこから直接水を飲まない。水差しなどで汲んで飲む。また、コップの割れたところからは飲まない。

　夏は適温のものを飲むようにする。預言者様は涼やかなシャーベットを飲むことを好まれていた。ザムザムは立ったまま飲む。旅人については、あらゆる水を立ったまま飲むことができるとされている。空腹のときは水を飲まない。水は吸うようにゆっくりと飲む。

　預言者様は肉と小麦粉で作られた料理を好んでいた。この料理はヘリーセといい、ジブリールが預言者様に教えていた。ヘリーセは人に力をつける。すべての預言者たちは大麦のパンを食べていた。預言者様はかぼちゃのデザートやレンズ豆のスープ、狩ったものの肉、羊の前脚や胸、肩の肉を好まれていた。子山羊の肩肉も大変好まれていた。子山羊の肉は消化がよく、誰にとっても適切なものである。

　雄の動物の肉は雌よりも、赤身の肉は白身の肉（家禽）より消化が早い。消化の早さや味から、羊の肉、牛の乳が勧められる。狩った肉で最も良いのは鹿の肉である。ウサギの肉も許されている。鳥や鶏の肉も誰にとっても適ったものである。鳥類の肉の中で最も良いのは鶏の肉である。

　預言者様は酢について『なんと美しい食べ物であるか』とおっしゃっている。酢は最も役に立つ食べ物である。ナ

ツメヤシもまた食事となる。つまり、主食とともに食べられるものである。ブドウは食事であり、また果物でもある。ブドウを主食とともに食べることはスンナである。ナツメヤシだけを食べることもスンナである。

　干しブドウ、くるみ、アーモンドを食べることはスンナである。はちみつには治癒の力がある。七十人の預言者たちがはちみつについて恵みを願っている。預言者様はナツメヤシを大変好まれていた。なつめやしとともにメロンやスイカも食べていた。スイカは腎臓を清浄にし、頭痛を治す。寄生虫を出し、目にも良い。預言者様は涼やかなシャーベットを大変好まれていた。また、ピラフを食べるときには、預言者様に祝福を詠むべきである。

　預言者様はソラマメを皮ごと食べることを褒めていた。また、クロタネソウ〔香辛料の一種〕は薬のようなものであるともおっしゃっていた。クルミをチーズと一緒に食べることも治癒である。これらを単独で食べることは適切ではなく、何かと一緒に食べるべきである。ブドウの種も適切ではない。預言者様はブドウの房を左手に取り、右手で食べていた。カリン（まるめろ）は心の苦悩を和らげる。メロンやスイカ、ザクロの果汁の中には天国の水の一滴が隠されている。ザクロを単独で食べるときには、一滴でも無駄にしないべきである。ザクロは動悸に良く、胃に力を与える。実とともに搾ったものは、胆汁のために良く、また便秘にも良い。イチジクは気持ちを落ち着かせる。肩こりや消化器官の痛みを和らげる。

　緑のきゅうりを塩と一緒に食べること、クルミをナツメヤシとはちみつと一緒に食べることは預言者様のスンナである。預言者様はナスを褒めていて、オリーブオイルで作るようにということもおっしゃっている。また、スベリヒユも褒めている。セロリは忘れっぽくなることに対して良く、利尿作用がある。また、血や乳を作るもととなり、肝臓をきれいにする。アンティチョークは胆石をなくし、血をきれいにする。そして、血管の硬化を防ぎ、汗の臭いもなくす。

　別の国に行った者は、ますそこで、少しの生の玉ねぎを食べることは健康に良い。玉ねぎには殺菌作用がある。玉ねぎの後に、セロリを食べるとその臭いを消すことができる。ヘンルーダの草も臭いを消す。預言者様の最後の食事

の中には玉ねぎがあった。「玉ねぎとにんにくは煮たものを食べなさい」とおっしゃっていた。これらの臭いには天使たちが傷つく。大根は利尿によく、消化にも良い。

預言者様の家の内外での行動

フサイン様がこのように伝えている。「預言者様の家の中での仕事について父に聞きました。父はこのように語っていました。

『預言者様は家に入ってから、アッラーに礼拝するため、家族の仕事のため、自分自身の仕事のための三つに時間を分けていました。

自分自身のために取った時間は、さらに自分のことと人々のことの二つに分けていました。人々のための時間では、教友たちのうちの名士だけが入ることができました。彼らを通じて、人々に宗教のことを知らせ、人々に関することについてはすぐに教え、答えを引き延ばしたりはしませんでした。

預言者様は、共同体のために取っていた時間に、美徳や宗教についての優秀さの順で人々を招くことを習慣としていました。その人々のうちの何人かが、一つの問題、二つの問題、そして何人かはより多くの問題を相談していました。

預言者様は彼らの宗教に関する問題にかかわり、質問に対して必要な返事を行った後『これらの返事を、ここにいる者たちがここにいない者たちに知らせなさい。そして、私のところに来て打ち明けることができない問題を、あなたたちが私に知らせるのです。間違いなく、相談できない者の問題を代わりに伝えてくれたなら、その人の足を裁判の日、アッラーがスィラートの上でしっかりとさせるでしょう』とおっしゃいました。

預言者様の隣ではこれ以外のことが語られることはありませんでしたし、預言者様も他の人も、これ以外の話を受け入れることはありませんでした。

預言者様のもとに来る人は、何かを求めようとやって来て、これについての最善の知識を味わい、その仲介者として出ていったのです』」

フサイン様が父に、預言者様の外での行いについて聞くと、このように語った。

「万物の王は外では話しませんでした。ただ、話したときにはムスリムたちの役に立ち、彼らの互いの関係を温め、彼らの間の口論や冷たさをなくすために話していました。

あらゆる部族の中で高い地位にある人には、それに見合ったように接し、彼らには各部族の長として任務を与えました。人々に悪いことを避けるようにさせ、自らもそのようにしていました。誰に対しても、微笑みや美しい性格を隠すことはありませんでした。

教友の一人を見かけなければ捜し、人々の間で起きたことを聞いていました。良いことを褒めて勧め、悪いことは注意してやめさせました。預言者様の語るすべてのことは厳粛であり、言い争いはありませんでした。また、不注意へと落ちてしまう懸念について、ムスリムたちに忠告し続けていました。預言者様のすべての行動は安定したものでした。

預言者様は礼拝を行うにあたって、そのことを明確に理解していました。権利を超えることも、権利を行わないこともありませんでした。預言者様に近い者が、人々の間で最も善い人なのです。

預言者様からすると、教友たちの中で最も優れているのは、思慮深く多くの仲裁ができる人物であり、また、地位として最も高いのは、必要とされている人々を助けて善いことを行う人物でした。万物の王は、アッラーの名を口にしない限り、座ったり立ったりはしませんでした。

集まりのときには、自分専用の場所というものは決めず、また、そのようなことも禁じました。どこであっても座っている人々のところへ行ったときには上座には行かず末席に座り、ムスリムたちにもこのようにするよう命じていました。

預言者様は、一緒に座る人全員に対して、各自が預言者様の目では最も価値のある人と思わせるように接していました。預言者様は、自分と一緒に座る人や後から来た人が、各自の要望を言い終わったり、その人が帰ったりするまで我慢していました。

誰かが預言者様に求めや願いをすれば、それを拒むことはせずに対応していました。あるいは優しい言葉で諭していました。預言者様の美徳はすべての人々を抱くほどに広大なものでした。

彼らに同情をする一人の父親であったのです。公正という面では、預言者様の目ではすべての人が平等でした。預言者様がいらっしゃる集まりは、知識、謙虚、忍耐、そして安心の集まりでした。

その集まりでは大声が上がることもなければ、人を非難したり、過ちが人々の前にさらされたりすることはありませんでした。万物の王の集まりにいる人々は互いが平等であり、それに優劣があるとすれば、ただアッラーに対する畏れについてのみでした。全員が謙虚な人々でした。

教友たちは年長者に敬意を示し、年下の者には同情や慈悲を表し、何かを必要とする人々には必要とすることに応じようとしていました。哀れな者やよそから来た人々を守っていました。

預言者様はいつも笑みをたたえ、優しい性格の方でした。人をいたわり、赦すことが多く、固い心の持ち主ではありませんでした。

誰一人とも言い争いはしませんでした。決して怒鳴ったり、悪口を言ったりはしませんでした。誰のことも非難しませんでした。けちでもありませんでした。好まないことに対しては目をつぶりました。期待した人の気持ちを傷つけることもなければ、自分自身が好まないことを顔には出したりもしませんでした。

預言者様は三つのことを遠ざけました。

人々と言い争うこと。

多く喋ること。

無益で無駄なことを行うこと。

また、人々を三つのことでそのままにさせておきました。

誰一人にも面と向かって、あるいは後ろから非難しないこと。

誰一人に対しても、恥や過ちを探さないこと。

誰一人に対しても、善がなく、良くない言葉を言わないこと。

預言者様が話すとき、その場の人々は頭上に鳥が止まっているかのように、静かに動かずにいたものです。預言者様が話し終わった後、聞きたいことを言いました。預言者様の前で口論や言い争いは決してしませんでした。

預言者様の前である人が話をしているときには、その人が話し終わるまで他の人は静かにしていました。預言者様の前では、皆が平等だったのです。預言者様の集まりにいる人々が何かに笑ったら、預言者様も彼らとともに笑みをたたえ、彼らが何かに驚いたら預言者様も彼らと一緒に驚いていました。

預言者様のところに惨めな人や外からの人が来て、下品な言葉や傷つけるような言葉を発したとしても、教友たちが自分と同様に行動することを考え、預言者様は我慢して聞いていました。

『誰かが何かを必要とし、求めているのを聞いたら、それを手に入れるまでその人を手伝いなさい』とおっしゃっていました」

預言者様は現実を表していない褒め言葉は受け入れなかった。正義を損なわない限り、誰一人の言葉も止めなかった。正義を損なっていた場合には、その人の言葉を途中で切るか、その場から立ち去るようにしていた。万物の王の静かさは、四つのこと、ヒリム、ハゼル、タクティール、テフェッキュルという言葉でまとめられる。

タクティールとは、人々を平等に見て、平等に聞くことである。また、テフェッキュルとは、現世と来世について考えているのが現れていること。さらに、ヒリム〔容認の意〕と忍耐は預言者様に見られた特徴であった。現世の物事について、預言者様を怒らせることはなかったのである。

ハゼルに関しては、さらに四つの美徳に分けられる。
善いことは例となるように行った。
悪いことは人々が避けるように、自らも避けた。
共同体にとって良いように自分の意見を述べた。
共同体が現世と来世の幸せを得ることに労力を割いた。
万物の王が何かについて「いいえ」と言ったことはなかった。行いたいことが自分に求められれば「そうしましょう」と答えるが、行いたくないことが自分に求められると何も答えなかったため、人々は預言者様がそれを行いたくないということを理解していた。
預言者様はあらゆる人々の現世と来世のために立ち働いていた。ある戦いの際、異教徒が死ぬように願いを求められると「私は罵るため、人々が罰を受けるために送られたわけではありません。私は皆に善を行い、人々を幸せに導くために行かされたのです」とおっしゃっている。
『預言者章（アル・アンビヤーゥ）』の第一〇七節では『われは只万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである。』と啓示されている。したがって、あらゆる人がより良くなるよう努力していたのである。
ヒンド・ビン・アブー・ハーレは、預言者様の歩き方についてこのように語っている。
「万物の王は歩くとき、足を地面から力一杯上げても左右に身体は揺れませんでした。歩幅は広く、高いところから下るように前傾していました。優しさと偉大さがあり、落ち着いて楽に歩いていました。
また、見る方向へは、身体全体を向けて見ていました。周りを無意味に見回したりはしませんでした。地上を見ることの方が、天を見ることよりも多くありました。地上を見るときも、目先のこととして見ていました。
歩くときは、教友たちの後ろから歩いていました。
誰かと出会ったときには、先に自分から挨拶をしていました」

アブー・フレイレ様はこのように語っている。
「歩くことでは、預言者様よりも速く歩く人は見ませんでした。預言者様が歩くときには、地球がまるでその足下で縮んでいるようでした。
私たちは後ろから追いつこうと頑張りました。一方で万物の王は大変そうにはしていませんでした」
エネス・ビン・マーリキーが伝えるところによると、預言者様は誰かと会ったときにはムサーファハをし、その人が手を先に引かない限り、自分の手を引いたり、その人が顔を別の方に向けない限り、預言者様もその人から顔をそらさなかった。（ムサーファハとは、二人が会ったときに握手をし、互いの顔を見ることである）
エネス・ビン・マーリキー様はこのように語っている。「預言者様に『預言者様、私たちはお互いにお辞儀をし合いますか？』と尋ねました。『いいえ』と返事がありました。『では互いに抱き合うのでしょうか』と尋ねると『いいえ。しかしムサーファハをしなさい』とおっしゃいました」
ベラー・ビン・アーズィビも、預言者様が「二人のムスリムが出会って挨拶をしてムサーファハをしたら、彼らが別れる前に、彼らに免罪があります」とおっしゃっていたことを知らせている。
万物の王は常に考え事をしていた。話さないことの方が、話しているよりも多かった。預言者様は無駄には話をしなかった。話を始めるときも、終わらせるときもアッラーの名前を唱えていた。
話すときには短く意味の深い言葉をおっしゃっていた。預言者様の言葉はすべて真実であり、適切な話をしていた。預言者様が話しをするとき、その言葉は多くも少なくもなかった。誰一人として傷つけたり、見下したりはしなかった。最も少ない恩恵に対しても敬意を示し、その恩恵に対して悪く言うことはなかった。また、ある恩恵について気に入ったからといって褒めたり、気に入らなかったからといって悪口を言ったりはしなかった。預言者様はこの世のことでは、決して怒らなかった。しかし、正義が踏みにじられたときは、その正義が行われるまで怒りを収めなかった。自分個人に対することで怒ったり復讐したりすることも決してなかった。何かを示すときには、指だけではなく、すべての

手で示していた。驚いたときには、手の形を逆にして、つまり手のひらがそのとき上を向いているのであれば地面に向け、そのとき地面を向いていたら空の方に向けていた。話すときには手を交えて話し、右の手のひらを左手に重ねて話していた。怒ったとしても、それはすぐに収まり、怒ったことを相手には知らせなかった。

喜んでいたり、気楽なときには目を閉じていた。最も大きく笑ったときでも微笑みだった。微笑みを浮かべると、口の中にある歯が真珠のように見えていた。

アブー・サイード・フドゥリ様はこのように語っている。「預言者様は動物に草を与えたり、らくだをつないだり、家の掃除をしたり、羊の乳を絞ったり、靴の壊れたところを縫ったり、服の継ぎ当てをしたり、手伝いの者と一緒に食べたりしていました。手伝いの人が臼を挽くのに疲れると、その人を手伝ったりもしていました。市場では必要なものを買って袋の中に入れ、家に運んでいました。貧乏人や金持ち、子供や大人、誰でも出会えば先に挨拶をしていました。彼らとムサーファハを行うため、神聖な手を先に伸ばしていました。

奴隷や主人、黒人や白人、皆と平等に接していました。誰であっても呼ばれたところへ赴きました。前に出されたものの量が少なくとも、見下したりはしませんでした。良いことを行うことを好んでいました。皆と良好な関係を築いていました。笑顔で優しい言葉を使っていました。話すときには笑いませんでした。

いつも悲しげに見えていましたが、怒りっぽいわけではありませんでした。謙虚でありながら偉大さがあって、尊敬や畏れを感じたものでした。しかし荒っぽさはありませんでした。そして、上品でした。寛大でしたが、無駄遣いをしたり役に立たないところに使ったりはしませんでした。皆に憐みをかけていました。誰かに対して何かを期待することはありませんでした。幸せや安らぎを求める者は、預言者様のようになるべきなのです」

ムスリムは誰であれ、預言者様のこのような美徳を自分の規範とすべきである。アッラーの美徳を自分でも行うことは、すべてのムスリムにとって必要なことである。なぜならば、預言者様は「アッラーの美徳のとおりに行動しなさい」とおっしゃっているからである。

例えば、アッラーの特性の一つに「セッタール」がある。つまり、人の罪を隠すことである。ムスリムも宗教上の兄弟の恥や過ちを隠す必要がある。また、アッラーはしもべの罪を赦す。従って、ムスリムたちもお互いの過ちや罪を赦し合うべきである。アッラーはケリーム、そしてラヒームである。つまり、寛大な方であり慈悲深き方である。従って、ムスリムたちも寛大で同情心を持つ必要がある。他のすべての美徳についても同様である。

預言者様には多くの美徳があった。ムスリム一人ひとりがこれを学び、これに従って行動する必要がある。このようにすることで、現世と来世の災いや苦悩から解放され、預言者様の仲裁を得ることとなるのである。

預言者様の服装

預言者様は一着のフベレの服を持っていた。フベレとは木綿とリネンの糸で編んだ縞のイエメン製の布のことである。預言者様はこのフベレの服を好んで着ていた。

預言者様はそのほかに、オマーン製の二枚のイーザールを持っていた。イーザールとは、下半身全体を覆う腰布のことである。預言者様は、らくだの鞍のような縞模様のある、毛糸で編んだ下半身を覆う別の腰布も持っていた。これで外に出かけることもあった。

アブー・ブルデはこのように語っている。「アーイシャ様のもとを訪ねたとき、私たちにムレッベデという名の、編みのほつれた一着の服と、イエメンで作られた厚手のイーザールを出し『誓って預言者様の魂は、これらを着ているときに取り上げられたのです』と言いました」

預言者様は寒い冬の夜、固くも柔らかくもない編み方をした、羊毛の服を着て礼拝を行っていた。

男性の信者は腰に折ったイーザールを着る際、その長さはふくらはぎの半分程度、あるいはもう少し下まで伸ばすことができるが、かかとまでは伸ばさないということを、預言者様が知らせている。

また、偉そうに見せようと、着ているイーザールを地面に引きずっている男性は、最後の審判のとき偉大なるアッラーが同情の眼では見ないであろうとも知らせ、ジャービル・ビン・スレイムには「イーザールをふくらはぎの半分程度まで上げなさい。そうでなければ、かかとの上まで伸ばしなさい。地面につけることは避けるのです。なぜならこれは、うぬぼれの印だからです。アッラーはうぬぼれる者を好みません」とおっしゃっている。

このため、アブドゥッラー・ビン・ウマルは、イーザールをふくらはぎの中央程度までの長さにし、その上からシャツを、さらにその上にリダー〔ハッジの際などにしばしば見られるような、長い布を巻くようにして着る上着のこと〕を着ていた。

預言者様が訪問を受けて人々の前に出るときには、ハドゥラーミ・リダーを着ており、その長さは約二・七メートル、幅は約一・三メートル、価値は一ディナール、色は緑色であった。

預言者様のこのリダーは、カリフの時代には布の中に包まれ、カリフたちの手元に預けられたいた。カリフたちはラマダーンやイード・アル・アドハー（犠牲祭）のときにこれを着ることとなっていた。

預言者様はスハール産の二枚の服も持っていた。スハールとは、オマーンのある町の名前である。預言者様はスハール産のシャツも持っていた。スハールの町で作られたこのシャツのことはスハーリと呼ばれる。預言者様が最も好んだ服は、カーミス（シャツ）であった。カーミスは綿の糸だけで編まれた布でできたシャツのことである。預言者様のシャツの長さと腕丈の長さは、手首のところまでであった。エチオピアのネジャーシ王が預言者様に贈った贈物の中には、シャツも一枚あった。

預言者様は木綿の糸で編まれた布でできたシャツを持っていた。なお、イエメンのスフールという町で作られた、一枚の綿の布からできた服のことをスフーニエという。エチオピアのネジャーシ王が預言者様に贈った贈物の中には、一本のズボンも含まれていた。

預言者様は一枚の白い服を持っていた。預言者様は「服の中で白いものを着なさい。生きている者は白い服を着る

のです。亡くなった者も白布に包みなさい。なぜならば、それは服の中で最も善なるものだからです」とおっしゃっている。

預言者様が緑色の服を着ていたことも見られている。アブー・リミセは、預言者様が上下二枚に別れた緑色の服を着ていたのを見たと伝えている。

預言者様は赤色のフッレも着ていた。ベラー・ビン・アーズィトは「赤いフッレを着て、髪の毛を耳たぶまで伸ばしている人は多くいますが、預言者様より似合っている人を見たことがありませんでした」と語っている。預言者様は金曜日や祭りのときに着る赤色のマントを持っていた。預言者様は、他にイエメン製のマントも持っていた。また、戦いのときには、そで口が狭くなっているシャーム製のマントを着ていた。

預言者様は、イラン王が着ていたタイレサンの布から作られたマントを戦いのときや敵と会うときに着ていたこともある。これには、サテンで作った襟があり、マントの前後には切れ込みが入っていて、そで口の上には一周り分のサテンの折り返しがあった。

アーイシャ様が亡くなるまで彼女が保管していたこのマントは、その後、アスマー・ビンティ・アブー・バクルが譲り受けた。預言者様が着ていたこのマントの洗い水で病人が身体を洗ったところ、その病が治った。

ドゥーメトゥル・ジャンダルの統治者であったウカイディルは、兄弟のハサンが殺されると、遺品の布や糸から編んまれたサテンの布を使って、なつめやしの葉の形を金糸で刺しゅうしたマントを預言者様に贈った。

預言者様はこのマントを着てミンバルに上がって座り、話をしないままミンバルから下りてきた。ムスリムたちは手でそのマントに触ったり、見たりしてその美しさに感心した。

預言者様は「あなた方はこの美しさに驚くのですか？これがそれほどに気に入りましたか？」と聞いた。彼らは「私たちはこれほど美しい服は見たことがありません」と言った。

預言者様は「私の命を力ある手でお持ちのアッラーに誓って言いますが、サアド・ビン・ムアズの天国でのハンカチは、

今あなた方が見たものよりも、より美しくより良いものなのです」とおっしゃった。

預言者様は自分に贈られた、王が着るサテンのカフタン（中近東で見られる袖や丈の長い衣服）を着て礼拝を行った。しかし、礼拝から戻ると、それを嫌うかのようにすぐに脱いだ。

「これはムッタキー（アッラーを畏れ、禁じられたものを避ける人のこと）にはふさわしくありません」とおっしゃったのだった。そして、それをウマル様に贈った。彼は「預言者様よ！　これを着ることをやめるのを、なぜすぐにはしなかったのですか？」と尋ねた。

預言者様は「ジブリールがこれを着ることを私に禁じたからです」と答えた。ウマル様は立ち上がり「預言者様よ！あなたが着たくないものを私に下さるのですか？　これを私はどうしたらよいのでしょう？」と尋ねた。

預言者様は「私はそれをあなたに着るために贈ったのではありません。ただ、売るようにと贈ったのです」とおっしゃった。ウマル様はこのカフタンを二千ディルハムで売った。

ビザンチンの王が預言者様に、金の刺しゅうのある、サテンでできた一着の長袖の毛皮を贈った。預言者様がそれを着ると、人々は「預言者様よ！　これはあなたに天国から贈られたのですか？」と聞いた。預言者様は「これがそれほどに気に入りましたか？　私の命を力ある手でお持ちのアッラーに誓って言いますが、サアド・ビン・ムアズの天国でのハンカチのうちの一枚でさえ、これよりもっと良く、もっと美しいのです」とおっしゃった。

その後、その毛皮をジャーヒル・ビン・アブー・ターリブに渡した。ジャーヒル様がそれを着ると、預言者様は「私はこれをあなたに着るために贈ったわけではありません」とおっしゃった。ジャーヒル様は「これを着ずにどうしたらよいのでしょうか？」と尋ねると、預言者様は「（エチオピア王の）ネジャーシに贈りなさい」と答えた。

あるとき、預言者様に、スィエラという名の絹糸でできた布で作った、ところどころに黄色い縞模様のある、上下セットになっている服が贈られた。預言者様はこの服をアリー様に贈った。

アリー様がそれを着ていたのを見ると、預言者様の顔には怒った印が見られた。預言者様は「私はそれをあなた

に着るために贈ったのではありません。スカーフを作るため女性たちの間で切って使うように贈ったのです」とおっしゃった。

これに従って、アリー様はそれを切り、預言者様の家族の女性たちの間で分配して使った。

ハベシ（エチオピア）の王のネジャーシが預言者様に贈ったものの中には、一着のエジプト産の外套があった。

預言者様は羊毛の黒い服を着ていたこともあった。アーイシャ様は「預言者様のために黒い羊毛で一着の服が作られました。しかし、それを着ているときに汗をかくと、羊毛の臭いを感じました。すぐにそれを脱いで置きました。なぜならば、預言者様はただ美しい香りだけを好んでいたからでした」と語っている。

ウマル様がモスクの前の市場で売られていたスィエラ、イステブラクといった種類の絹のワンピースの服を見て、預言者様のところに持って来た。

「預言者様よ！　これを買っていただければ、金曜日や祭りの日、そして代表団があなたのもとを訪ねに来たとき、これを着ることができるでしょう」と言った。しかし、預言者様は「これはただ来世で分け前のない者だけが着る服です。これはただ来世で分け前のない人だけが着るのです」とおっしゃった。そして、預言者様は持っていた一枚のサテンのマントをウマル様に贈った。ウマル様はそれを持って預言者様のところに来た。「預言者様よ！　あなたが『これはただ来世で分け前のない人だけが着るのです』とおっしゃっていたのを聞きました。しかしその後で、それを私に贈りました」と言った。預言者様は「あなたがこれを売って、そこから得たお金で何か必要なことを行い、利用するようにと贈ったのです。着るために贈ったわけではありません」とおっしゃった。

預言者様は「名声や評価を得るために服を着る人は、それをやめるまでアッラーはその人から顔を背けます」、「最後の審判の日、その人には卑しむべき服を着させられます」

「名声や評価を得るために服を着る人は、最後の審判の日、アッラーはそれに似たものを着せます」、「その後、その

服を炎に包みます」とおっしゃっている。

イエメン製の縞模様の布のことをブルデといい、イフラームのように身体に巻いて着るものである。

また、毛織物の厚手のマントやカーディガンのこともブルデと呼ぶ。セヒール・ビン・サアドはこのように語っている。

「ある女性が、自分で作ったブルデを預言者様に持って来ました。

そして『預言者様よ！これを私が自ら作りました。あなたに着ていただくために持って来たのです』と言いました。

預言者様はそれを必要としていたため、受け取りました。

その後、このブルデを巻いて私たちのところにいらっしゃいました。その場にいたある人が、それを手で触り『預言者様よ！このブルデよりも美しいものはありません。これを私に着せてもらえませんか？』と言いました。預言者様は『はい』とおっしゃいました。

預言者様はここでの集まりに加わった後、家に戻りました。そして、ブルデをたたみ、その人のところに持っていかせました。この集まりにいた人々は『あなたは良いことをしませんでした。預言者様が着ていて、そして必要としていたものを求めたのですから。あなたもよく知っている通り、預言者様は決して求められたことを断ったり、放っておいたりはしないのです』と言って非難しました。すると、その人は『アッラーに誓って、私はこれを着るために求めたのではありません。しかし、死んだときの白布のためとして求めたのでした』と言いました。実際にそのブルデは、その人が亡くなったとき白布として使われました」

カアブ・ビン・ズヘイルに贈られたカーディガン

預言者様はタブクの戦いのとき、エイラー族に安全である旨の知らせを送り、その印として一着のカーディガンを贈った。

アブル・アッバース・アブドゥッラー・ビン・ムハンマドは、このカーディガンを三百ディナールで買い取った。その後、アッバース家はこのカーディガンを代々遺品として伝えていくことになる。

後にアッバース家のカリフたちが、祭りの際にはこのカーディガンを着て、預言者様の杖を手にして外に現れるようになり、これを見た人々の心は畏れを感じ、目がくらむようになるのだった。

また、アラブの詩人として有名だったカアブ・ビン・ズヘイルが、赦しを求め、ムスリムとなるために預言者様のところへ来たとき「間違いなく預言者様は正しい道を示す光である。悪をなくすためアッラーの鞘から抜かれた鋭い刀の一つである」といった二行連句のバーネト・スアードという詩を詠んだとき、預言者様は着ていたカーディガンを脱いで彼に着せたこともあった。

ムアーウィヤ様がカリフの時代、カアブ・ビン・ズヘイルに「預言者様のカーディガンを私に売ってほしい」と知らせを送り、一万ディルハムを贈った。

しかし、カアブ・ビン・ズヘイルは「預言者様のカーディガンを着るにあたっては、自分以外の人を選ぶことはありません」と言って、ムアーウィヤ様の願いを断った。

カアブ・ビン・ズヘイルが亡くなると、ムアーウィヤ様はそれをカアブの息子たちから二万ディルハムで買い取った。そして、預言者様がカアブ・ビン・ズヘイルに贈った、この神聖なカーディガンは、カリフからカリフへと渡っていく。

さらに、ウマイヤ朝が滅亡した後は、初めてアッバース家からのカリフとなったアブル・アッバース・サッファーフ・ビン・アブドゥラー・ビン・ムハンマドによって、三百ディナールで買い取られた。

その後も、このカーディガンは祭りのときカリフたちが着ることとなった。カリフのムクタディールが亡くなったときには、彼の血がカーディガンについて汚れた。また、アッバース朝がエジプトに遠征したときには、これも一緒に持っていった。オスマン帝国のセリム一世がカリフとなってエジプトを支配すると、エジプトにあった聖なる遺品とともに神聖なカーディガンもイスタンブールのトプカプ宮殿内の

「聖なる外套の間」に展示されており、この神聖なカーディガンは長さ一二五センチメートルで、袖口が広く、黒い羊毛の布で作られていることが分かる。

カーディガンの内側は粗く編んだアイボリー色の羊毛が張られている。前面の右側は〇・二三×〇・三〇センチメートルの大きさで欠けている部分がある。右腕の部分にも消失した箇所がある。カーディガンはところどころすり減っている。

このカーディガンは何重かの布で包まれ、〇・五七×〇・四五×〇・二一の大きさで上から開けられるようになった、ふた付きの金の引き出しの中に保管されている。また、神聖なカーディガンの大きさにあわせて、スルタンのムラト三世が作らせた金の保管箱もある。これは、芸術品としても優れたものであり、周りはエメラルドで装飾されている。

預言者様はサフランで色付けされたハミーサも持っていた。このハミーサは妻たちの家で滞在する際にかぶっていたものだった。ハミーサというのは、四辺があり、二つの側に四角い刺しゅうのある、目の粗い黒い厚手の毛織物である。預言者様は病気になる前、このハミーサの上で礼拝をしていた。

アーイシャ様は次のように伝えている。「預言者様がある日、ハミーサの上で礼拝を行っていたとき、目が刺しゅうにとまりました。礼拝が終わると『このハミーサをアブー・ジャヒムのところに持って行きなさい。なぜなら、これは先ほど礼拝のときに気になったからです。アディイ・ビン・カアブ家のアブー・ジャヒム・ビン・フゼイフェ・ビン・ガーニムが持っているエンビジャーニ（刺しゅうのない毛織物）を私のところに持って来てください』とおっしゃいました。アブー・ジャヒムが『預言者様よ！これを贈られましたか？』と尋ねると、預言者様は『礼拝中に眼がその刺しゅうに止まったからです』と答えました。このハミーサはアブー・ジャヒムが預言者様に贈ったものでした」

エンビジャーニという名の町で編まれ、刺しゅうのない羊毛の毛織物のことはエンビジャーニと呼ばれていた。また、預言者様にはハイバルの戦いでの戦利品として、一枚のハミーサも分配されていた。

預言者様は古くなりかけたこのハミーサの上で礼拝を行っていた。最後の病で苦悩していたときには、このハミー

サを顔にかけていた。ハミーサのせいで苦しくなると、それを取って顔を出されていた。

マディーナの土は湿気を帯びた土だったため、預言者様が亡くなったときには、このハミーサが下に敷かれた。

ハニー・ビン・ハビーブがダール族の一団として、ヒジュラ九年目にマディーナに来た際、預言者様に金の糸で刺しゅうをした一着の服を贈った。

預言者様はこの服を叔父のアッバース様に贈った。アッバース様が「これをどうしましょうか？」と尋ねると、預言者様は「金の刺しゅうを取り除き、あなたの妻の装飾品を買ったり生活費のために役立ててください。布地を売り、そのお金を使うのです」とおっしゃった。アッバース様はこの服をあるユダヤ人に八千ディルハムで売った。

エネス・ビン・マーリキーはこのように語っている。「王のズィエーゼンが、三十三頭の年老いた雌ラクダを渡して得た高価な長衣を預言者様に贈りました。預言者様はそれを受け取りました」

また、イスハク・ビン・アブドゥッラー・ビン・ハーリスは「預言者様は二十九頭ほどの若いラクダを渡して得た高価な長衣をズィエーゼンに贈りました」と語っている。

なお、フッレとは、イエメンのブルードという布から、あるいは他の布から作った、同じ種類の上下セットの服のことである。ただし、ワンピースになっているものに対してはフッレとは呼ばない。

王のネジャーシが贈った金の指輪

ハベシ（エチオピア）のアスハーメが預言者様に贈った贈物の中に、エチオピアの宝石をつけた一つの金の指輪があった。

預言者様はアブル・アスの娘の娘であるウマーメを呼び「娘よ、これをあなたがつけなさい」とおっしゃった。

男性には銀の指輪だけが許されており、金や鉄、黄色い真ちゅうで作られた指輪は禁じられているということが預

言者様によって知らされていた。預言者様も亡くなるまで、銀の指輪だけをつけていた。

　預言者様は指輪を右手につけていた。左手につけていたときもあった。従って、右手でも左手でも許されている。また、指輪は小指や薬指につけることができる。祭りの際に指輪をつけることは、誰にとってもムスタハッブ（推奨行為）とされる。しかし、恰好をつけるためであったり、見せびらかすために指輪をつけることは禁じられている。

　ある日、ヌーマン・ビン・ベシールが預言者様のところに行った。指には金の指輪をつけていた。預言者様は「天国に入る前に、なぜ天国での装飾品を使うのですか？」とおっしゃった。その後、鉄の指輪を使い始めた。預言者様がこれを見ると「なぜ地獄のものを持っているのですか？」とおっしゃった。これも外して銅の指輪をつけた。預言者様はこれを見ると「なぜあなたからは像の臭いがするのでしょうか？」とおっしゃった。

　アーミル・イブニ・シュワイブが伝えるところによると、預言者様は金や鉄の指輪をしている人には外させ、銀の指輪をしている人にはそれを許していた。

　預言者様はイラン王、ビザンチン王、そして、エチオピア王のネジャーシに手紙を書かせたときに

―預言者様！彼らはこの手紙を押印がない限り読みません、と言われた。

このため、預言者様は銀で出来た一つの指輪を持ってきて、その表面に三行で

「ムハンマド（アライヒッサラーム）・ウル・ラスールッラー」と書き刻んだ。

その印に刻まれた言葉は、下から上に順に

「ムハンマド（アライヒッサラーム）」が一行

「ラスール」が一行

「アッラー」が一行の計三行となっていた。

預言者様の銀の指輪にあった石は、エチオピアの宝石だった。

しかし、この銀の指輪の石の部分が銀であったという説もある。

　アムル・ビン・サイードが預言者様のもとへとやって来た。預言者様は彼の指にある指輪を見ると「その手にした指輪は何でしょうか？」と聞いた。アムル・ビン・サイードは「これは一つの玉です。私が作りました」と答えた。預言者様は「そこに刻んだものは何でしょうか？」と尋ねた。

　アムル・ビン・サイードは「ムハンマド（アライヒッサラーム）・ウル・ラスールッラー、と刻んであります」と答えた。預言者様は「それを見ましょう」とおっしゃった。指輪を手に取り、これを押印として使うこととし、他の人が指輪にムハンマド（アライヒッサラーム）・ウル・ラスールッラーと刻むことを禁じた。預言者様はこの指輪をつけたままで亡くなった。この指輪を左小指につけていたこともあったが、右の指につけていたときもあった。

　預言者様は指輪の石の表面を手の内側に向けていた。用を足すときには、指輪を指から外していた。

　預言者様が亡くなった後、印のあるこの指輪はアブー・バクル様、さらにウマル様、ウスマーン様がつけていた。

　しかし、ウスマーン様がカリフの時代のある日、エリスという井戸の口に腰かけていたとき、指輪を指から外して手で弄んでいたときに、井戸の中に落としてしまった。

　井戸の中にある水はすべて取り出され、三日間捜されたが、この神聖な指輪は見つからず、井戸の中でなくなってしまった。

　指輪の表面に文字を刻むことは、預言者様の後でも続くことになった。アブー・バクル様の指輪には『ニーメル・カディール・アッラー（アッラーの力はすべてに対して何と素晴らしく満ち足りていることか）』、ウマル様の指輪には『ケファー・ビル・マウティ・ワ・イザーン・ヤー・ウマル（ウマルよ、忠告には死で事足りる）』、ウスマーン様の指輪には『ラー・ナスビランナ（もちろん忍耐します）』、アリー様の指輪には『アル・ムルクリッラー（財産はすべてアッラーのもの）』、ハサン様の指輪には『アル・イッザトビッラー（偉大さはアッラーのみにある）』、ムアーウィヤ様の指輪には『ラッビル・フィルリー（アッラーよ、お赦しください）』、イブニ・アブー・レイラーの指輪には『アッドゥニヤー・ガールルーン（この世は偽りでありまやかしである）』、イマーム・アブー・ハニーフェの指輪には『ク

ル・イル・ハイル・ワ・イッラー・ファスクートゥ（善を言うか口を閉じるか）』、イマーム・アブー・ユースフの指輪には『マン・アミレ・ビ・レ・イヒ・ネディーメ（自らの考えで行動すれば後悔する）』、イマーム・ムハンマドの指輪には『マン・サバレ・ザフィレ（耐える者が勝つ）』、イマーム・シャーフィーの指輪には『アル・バラカトゥ・フィル・カナアー（豊かさとは満足の中にある）』と刻まれていた。
彼らは指輪を印として使っていた。

預言者様の寝床

預言者様が寝ていた寝床のシーツは革製だった。中にはナツメヤシの繊維が詰められていた。自分も妻もその上で寝ていた。預言者様が頭をつけていた枕のカバーも革製で、やはりその中にはナツメヤシの繊維が詰められていた。
アーイシャ様はこのように語っている。「私のところにアンサール族のある女性が来ました。預言者様の寝床を見ると、帰った後、中に羊毛の詰まった一つの敷布団を贈ってくれました。
預言者様がいらして『これは何でしょうか？』と尋ねたので『預言者様よ！アンサール族の誰某という女性が私のところに来ました。あなたの寝床を見ると、帰ってからこれをあなたに贈ってくれたのです』と答えました。預言者様は『これをすぐに返しなさい』とおっしゃいました。
しかし私は返しませんでした。それが私の部屋にあった方が良いと思ったのです。預言者様は先の言葉を三度繰り返し、最後に『アッラーに誓って、アーイシャよ。私が望んだら、アッラーが金や銀の山を私の隣で歩かせていたことでしょう』とおっしゃいました。預言者様の座布団も二枚の粗く編んだ布でできていました。
そこで、ある夜、預言者様がいらしたとき、この座布団を小さくたたみました。預言者様はその上に寝ました。すると『アーイシャよ！今晩の寝床はどうしていつもの通りではないのですか？』と尋ねました。『預言者様！それを

あなたのためにたたんで、厚みをつけたのです』と答えました。これに対して、預言者様は『これを元に戻しなさい』とおっしゃいました」
また、アーイシャ様はこのように語っている。「クライシュ族にとって、マッカにおいて木製の長いすの上で寝ること以上の愉しみはありませんでした。預言者様がマディーナにいらしてアブー・アイユーブの家に泊まったとき、彼に『アブー・アイユーブよ！あなたの長いすはありますか？』と尋ねました。アブー・アイユーブは『アッラーに誓ってありません』と答えました。
アンサールのサアド・ビン・ズラーラがこれを耳にすると、上には細いリネンの糸で編んだ敷物のついた、一つの木製の長いすを預言者様に贈りました。預言者様はご自身の家に引っ越すまでその上で寝ていました。そして亡くなるまでその上で寝ていました」
預言者様が亡くなったとき、身体を洗って白布に包んでから、この長いすに安置され、葬儀の礼拝もこの長いすに横たえられた状態で行われた。人々は遺体を運ぶために長いすを求め、その幸運に与ろうとしたのだった。アブー・バクル様やウマル様の遺体もこの長いすの上で運ばれた。
アーイシャ様はこのように語っている。「預言者様はある敷物を持っていました。夜はその上で礼拝を行い、昼はそれを広げ、その上に人々を座らせていました」

預言者様の杖

預言者様は金曜日のフトゥバ（説法）を行うときは杖あるいは矢に、戦いのときは矢に身体を預けていた。
預言者様は杖に身体を預けるのは、預言者の習慣であると語り、杖に身体を預けることを勧めていた。
ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンがカリフの時代、預言者様の杖はサアド・ウル・カラズのもとにあった。

ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンは、ヒジュラ五十年目の年、ハッジに行くことになった。その際、預言者モスクのミンバルを取り外し、シャームに持っていこうと考えていた。

また、サアド・ウル・カラズのところにあった杖を持ってくるようにも求めた。すると、ジャービル・ビン・アブドゥッラーとアブー・フレイレがやって来て「信者たちの長よ！ 預言者様のミンバルを置かれたところから取り外して持っていくことも、杖をシャームに持っていくことも正しい行いではありません」と言った。

これを受けて、ムアーウィヤはそれらを元のままにすることにして謝った。

預言者様はアブドゥッラー・ビン・ウネイスをモスクから家に連れて行き、彼に一本の杖を与えた。そして「この杖を自分の手元に置いておきなさい、アブドゥッラー・ビン・ウネイスよ！」とおっしゃった。

アブドゥッラー・ビン・ウネイスがその杖を持って人々の中に出ると「これは何の杖ですか？」と聞かれた。彼は「これは私に預言者様が与えたものです。そして手元に置いておくよう命じました」と答えた。

アブドゥッラー・ビン・ウネイスは「預言者様のところに行って、なぜこれをあなたに与えたのか聞いてください」と言われた。そこで、彼は預言者様のところに戻り「預言者様よ！この杖をどうして与えて下さったのでしょうか？」と尋ねた。

預言者様は「これは最後の審判の日に、私たちの間の一つの印となるのです。そのとき天国の人々の中で、杖に身体を預ける人は少ないのです。あなたは天国でこの杖に身体を預けなさい」とおっしゃった。

アブドゥッラー・ビン・ウネイスはその杖を刀とともに保管し、決して離すことはなかった。死が近づいたときには、杖を布で包み自分と一緒に埋葬するよう家族に遺言をした。その杖は身体と白布の間に置かれ、遺言のとおりにされたのだった。

預言者様は、一アルシュン（約六十八センチメートル）もしくはそれよりもう少し長い、一つのムフチェンを持っていた。

ムフチェンとは、曲がった取っ手のついた木の枝のことである。預言者様はハジャル・アル・アスワド（天国から降りた黒石）をそれで示し、遠くからなぞるようにしていた。

預言者様はラクダに乗っていたとき、これを前に掛けていた。また、預言者様はウルジュンと名付けた一本のムフサッラー（杖）も持っていた。預言者様がバーキ墓地に行く際には、これをついて身体を預け、また、座るときにもそれを手で弄んだりしていた。預言者様は手にこの杖を持ったままフトゥバを行ったこともあった。預言者様は山の木から作られたメムシュクと名付けた一本の刀型の杖も持っていた。

ウスマーン様が預言者様の刀を手にしたまま、ミンバルでフトゥバを読んでいたとき、ジャフジャフ・ビン・サーイド、もしくはジャフジャフ・ビン・カーイスという名の者が来て、ウスマーン様の手から刀を取り、膝につけてへし折った。人々はジャフジャフに向かって叫んだ。ウスマーン様はミンバルから下り、家へと戻った。

これに対して偉大なるアッラーは、ジャフジャフの手あるいは膝にかゆみの出る病気を与えた。ジャフジャフはウスマーン様が殉教者となってから一年もたたないうちに、かゆみの中で死んでいった。

預言者様が持っていた七つのもの

預言者様は出征の際、手元に櫛、鏡、ミスワーク、ローズオイル、アイライン、はさみを持ち、時間や場所を問わずに携帯していた。

アーイシャ様は「戦いのため、預言者様にローズオイルや櫛、鏡、二つのはさみ、アイラインの入れ物とミスワークの準備をしました」と語っている。

また、アーイシャ様は「時間や場所を問わず、預言者様は七つのもの…

一、ローズオイルの瓶、二、櫛、三、鏡、四、アイラインの入れ物、五、ミスワーク、六、二つのはさみ、七、髪を

分けるための櫛を置いていったことはありませんでした」と語っている。
預言者様は毎日、あごひげを二回とかしていた。
エネス・ビン・マーリキーは「預言者様は、しばしば髪の毛にローズオイルをつけ、水を使ってひげをとかしていました」と伝えている。

整理整頓の大切さ

預言者様は清潔さや整理整頓について、大変重視していた。「髪の毛がある者は、その手入れをよく行うように」とおっしゃっている。預言者様がモスクにいたとき、髪の毛やあごひげがぼさぼさな人が中にいた。預言者様は「この人の髪の毛を整えるローズオイルはありませんか？」と尋ねた後、彼に外に出て髪の毛やあごひげを直してくるように手で合図をした。その人が言われた通りにして戻って来ると、預言者様は「あなた方はこのように来た方がよいのでしょうか、それとも髪の毛やあごひげが悪魔のようにぼさぼさになった状態で来た方が良いのでしょうか？」とおっしゃった。
預言者様はあごひげの先と横を整えていた。金曜日に礼拝へ行く前には口ひげを短くし、爪の長くなった部分を切っていた。ムスリムたちには、口ひげを短くするよう命じていた。
預言者様は鏡を見るとアッラーに感謝し「アッラーよ！ 顔を美しく創造されたように、徳もまた美しいものとさせてください」と願っていた。
預言者様は毎晩寝る前に、目に三度アイラインをつけていた。アイラインを右目に三回、左目には二回ひいていた。「アイランをひきなさい。なぜなら、それは目を磨き、まつ毛を生やすからです」とおっしゃった。
イスラームにおける名士たちは、男性が治療を理由にアイラインをひくことは許されているが、見せるためにひくことは許容行為ではないと知らせている。この両者を混同しないようにするべきである。一方は、醜いところを直し、尊厳を与えるため、そして感謝を示すための行為であるが、他方は見せびらかしのためであり、感謝ではなくうぬぼれとなる。
預言者様はミスワークを使うことを重視し、ミスワークをいつも持ち歩いていた。預言者様は「エラクの木の枝で歯をきれいにしなさい」とおっしゃっている。これが口に良い香りをもたらすのである。そして「それは私や私の前の預言者たちのミスワークです」とおっしゃった。
預言者様は「もし共同体にとって無理であると思わなければ、礼拝のたびにミスワークをするよう、必ず命じていたことでしょう。
ミスワークで歯を清潔にしなさい。このことをあなた方に強く勧めます」
「ミスワークは口を清潔にし、アッラーの御満悦を得ることになります」ともおっしゃっている。
預言者様は家に入ったとき、最初にミスワークをしていた。
また、預言者様は手元にミスワークがない限り寝ることはなかった。起きたときも何よりも先に歯をミスワークで磨いていた。預言者様が夜、テヘジュートという礼拝を行うために起きるときにも、歯をミスワークできれいにしていた。
アーイシャ様は「預言者様は夜も昼も起きると、清めの前に必ずミスワークを使っていました」と語っている。

預言者様の刀

預言者様は九本の刀を持っていた。父から譲り受けたメースールという名の刀…この刀は預言者様がマディーナにヒジュラをするときに持っていたものである。

アブドゥという名の刀…この刀は預言者様にサアド・ビン・ウバイダが贈ったもので、預言者様がバドルの戦いに行くときにこれを持っていた。

ズルフィカル…クライシュ族の不信仰者であるムネッビヒ・ビン・ハッジャージュの、もしくはアス・ビン・ムネッビヒの刀であったが、バドルの戦いで戦利品として得たものである。刀の背が波打っていたため、ズルフィカルという名が付いていた。預言者様はズルフィカルをアリー様に贈った。柄の部分などは銀でできていた。

預言者様が亡くなった後、アッバース様はアブー・バクル様に、ズルフィカルをアリー様から受け取りたいと相談したとき、アブー・バクル様は

「私はこの刀をいつも彼とともに見ていました。彼からその刀を取り上げるのは好ましくありません」と答えた。そこでアッバース様は刀をアリー様の元にとどめておくことにした。

預言者様の槍には、カイヌカー族のユダヤ人から戦利品として得た三本のものがある。

そのうちの一つの名前はムスビー、別のものの名前がムスナーであった。預言者様はベイザーと名付けられた大きな一つの槍と、アネーゼという名の小型の槍も持っていた。

また、ナバアという名の槍は、もともとエチオピアのネジャーシ王がズバイル・ビン・アウワームに贈ったものだった。預言者様はハイバルの戦いから帰るとき、それをズバイル・ビン・アウワームから贈られた。

エチオピアのネジャーシ王アスハーメは、預言者様に三本の槍を贈った。預言者様はそのうちの一本を自分で使い、一本をアリー様に、もう一本をウマル様に贈った。

預言者様の槍はラマダーンと犠牲祭のときに、ビラール・ハベシが預言者様の前で礼拝を行うところまで運び、預言者様の前に立てていた。

預言者様が亡くなった後には、祭りのとき、ビラール・ハベシがその槍をアブー・バクル様の前で運び、礼拝を行うときにそれを立てていた。

アブー・バクル様の後、ウマル様、そしてその後のウスマーン様の時代になると、この任務をムアッズィン（礼拝の呼びかけを行う者）のサアド・ウル・カラズが、同じように行った。マディーナの知事の時代も、このように行われていた。

預言者様の矢と盾

預言者様は六つの弓矢を持っていた。その中のレブハー、ベイザー、サフラと名付けられた三つの弓矢は、カイヌカー族のユダヤ人たちから得た戦利品だった。サフラはネブという木から作られていた。ケトゥムという別の弓矢もネブの木から作られていたが、ウフドの戦いのときに折られて壊れたため、カターデ・ビン・ヌーマンが譲り受けた。そのほか、セデード、ゼブラと名付けられた弓矢もあった。

預言者様は三つの盾を持っていた。ゼルクという盾には当初雄羊の頭部が彫られていた。この盾は預言者様に贈られたものだった。しかし、預言者様はそこに絵が描かれていたため、気に入らなかった。しかし、翌朝になると、アッラーがその絵を盾から消していた。

預言者様のもとには七つの鎧があった。

ザート・ル・フドゥルという鎧は、サアド・ビン・ウバイダが預言者様にバドルの戦いに出るときに贈ったものだった。サアディヤとフィッダという二つの鎧は、預言者様がカイヌカー族のユダヤ人から得た戦利品の中にあったものだった。

預言者様はウフドの戦いのとき、フドゥルとフィッダを重ねて身につけていた。

預言者様の鎧の胸と背には、銀でできた二つの球状のものがついていた。また、サアディヤという名の鎧は、預言者ダーウードがジャールートと戦っていたときに着ていた由緒ある鎧だった。

預言者様が亡くなったとき、鎧の一つはザーファル族のアブッシャフムというユダヤ人に、家族の生活費のためとして、三十サーの大麦と引き換えに預けられていた。その鎧がザート・ル・フドゥルであった。
他の鎧はザート・ル・ウィシャ、ザート・ル・ハワーシ、ベトラ、フルニキという名であった。
預言者様はザート・ル・フドゥルとサアディヤをフネインの戦いのときにつけていた。
預言者様の兜の一つはムワッシャアという名で、これはカイヌカー族のユダヤ人たちからの戦利品だった。
ズッスブーもしくはズッススブ、あるいはメシュブーと呼ばれた兜は、預言者様がウフドの戦いのときにかぶっていたが、その際に割れてしまい、二つの輪が預言者様の頬にささってしまった。預言者様はマッカを征服する際にも兜をつけていた。

預言者様の旗と軍旗

預言者様の旗は黒で、軍旗は白だった。ムハンマド・ビン・カースィムが後に解放することになる奴隷のユヌス・ビン・ウバイドは「ムハンマド・ビン・カースィムが預言者様の旗について聞くため、私をベラー・ビン・アーズィムのところへ送りました。
ベラー・ビン・アーズィムは、旗が黒くて四角い、ネミーレ（白黒の線のある羊毛の布）から出来ていることを知らせました」と語っている。
この旗の上にはラクダの鞍の形がついており、アーイシャ様が羊毛で編んだ黒いもので、ウカブという名だった。
預言者様の旗はアリー様のところに置いてあった。預言者様はハイバルの戦いのとき「この旗をある人に渡します。その人はアッラーや預言者を愛する者です。アッラーと預言者もその人を愛します」と述べ、アリー様を呼んで、その旗を彼に渡している。

偉大なるアッラーは、ハイバルの征服をアリー様に恵み合わせた。預言者様の軍旗には「ラー・イラーハ・イッラッラー・ムハンマダン・ラスールッラー」と書かれていた。
預言者様はハッラルへの出征の際、サアド・ビン・アブー・ワッカースのため、一つの白い軍旗を結びつけてやった。アリー様をイエメンに送ったときには、矛の上にターバンを結びつけ「軍旗とはこういうものです」とおっしゃった。軍旗は、その軍の司令官のみが持ち運んでいた。
アブワーとウェッダンの戦いのときは預言者様の白い軍旗をハムザ様が、ブワッドの戦いのときにはサアド・ビン・アブー・ワッカースが、クルズ・ビン・ジャービル・ウル・フィフリを追いかけたときにはアリー様が、ズル・ウセイレの戦いのときはハムザ様が運んでいた。
預言者様がバドルの戦いに出るとき、白い軍旗をムスアブ・ビン・ウマイルに渡し、アリー様は預言者様の前で黒い旗（ウカーブ）を運んでいた。
預言者様の白い旗を、カイヌカー族との戦いのときはハムザ様が、カルカラトゥルクドゥル、ウフド、バドルルメブイドの戦いのときはアリー様が、塹壕の戦いのときにはザイド・ビン・ハーリサが運んでいた。
マッカを征服したときには、預言者様が白い軍旗を携えていた。
また、タブクへの出征の際には、最も大きい軍旗をアブー・バクル様に、最も大きい旗をズバイル・ビン・アウワームに渡して運ばせた。

預言者様の馬

預言者様は、マディーナでフェザーレ族のベドウィンの一人から、十ウキエの金で、砂漠の人々がダーリスと名付け、預言者様がセキビと名を変えることになる馬を買った。ウフドの戦いのときにはその馬に乗っていた。

セキビの唇には白い部分があった。脚の三本には斑があり、残りの一本にはなかった。セキビはよく走る馬だった。走るときは、水のように流れるのだった。また、ムルテジズと名付けた別の馬は、預言者様がムッレ族のあるベドウィンから買ったものだった。ムルテジズのいななきは美しく、調子よく、また、詩を詠むようだった。

リザズと名付けられた馬は、アレクサンドリアの王であるムカウクスが預言者様に贈ったものだった。リザズは大変脚が速かった。また、ザリブと名付けられた馬は、フェルウェ・ビン・ウマイル・ウル・ジュザーミが預言者様に贈ったものだった。ザリブは力強く、忍耐強い馬だった。

ラヒフもしくは、ルハイフという馬は、ラビーア・ビン・アブー・ベラーウル・ケルビが預言者様に贈ったものだった。ラヒフは尾が長く、地面までつくほどだった。また、ヤースブという馬は、預言者様の馬たちの中で、最も良い馬だった。ムラービヒという馬は、もともと競走用の馬で、ウベイド・ビン・ヤースィルがそれを預言者様にタブクで贈ったものだった。ムラービフは風のように走る馬だった。

ミルワフという馬はヒジュラ十年目の年、マディーナに来たレハー族の代理人たちが預言者様に贈ったものだった。預言者様は自分の前で誰かがミルワフに乗って歩くのを見ることを好んでいた。

ウェルドという馬はテミミ・ダーリが預言者様に贈ったものだった。ウェルドは栗毛だった。預言者様がそれをウマル様に贈った。ウマル様もウェルドに乗ってアッラーのために戦うことになった。預言者様は持っていた馬のうちの三頭を競争させたことがある。ザリブに乗っていた旗手はセフル・ビン・サアド、リザズの旗手がアブー・ウセイド・ウス・サーイディだった。リザズが最も速く走り、次いでザリブ、その後ろをセキビが走った。

預言者様はロバとラバも持っていた。アレクサンドリアの王のムカウクスが預言者様に灰色のラバ一頭と灰色のロバ一頭を贈った。ラバの名前がドゥルドゥルで、ロバの名前がヤーフール、もしくはウフェイルであった。イスラーム史上初めて見られた白いラバはドゥルドゥルであった。預言者様はハイバルの戦いのときはこの灰色のラバに、フネインの戦いのときはもう一頭に乗っていた。預言者様がラバをヘワージン族の只中へと走らせようとしたときには

アッバース様がラバのくつわを、アブー・スフヤーン・ビン・ハーリスがあぶみをつかみ、その速度を落として預言者様が敵の間に飛び込むのを止めさせようとした。ハイバルの戦いのとき、ヤーフールの上に鞍をつけ、頭にはナツメヤシの繊維でできた綱のくつわをつけ、預言者様がそれに乗っていたことが伝えられている。

ヤーフールは、預言者様の最後のハッジの帰途に死に、ドゥルドゥルは預言者様が亡くなった後、アリー様に残された。アリー様が殉教者となった後はハサン様が、さらにその後はフサイン様、そしてムハンマド・ビン・ハネフィエ様がそれに乗ることになった。ドゥルドゥルはムアーウィヤ様の時代まで生きていた。

預言者様のラクダ

クスワー…預言者様のジェドゥア、アドゥバという名前でも知られていたこのラクダは、ベニー・クシャイル・ビン・カアブ・ビン・ラビーア・ビン・アーミルの、もしくはフレイシュ・ビン・カアブたちの家畜であったものを、アブー・バクル様が四百ディルハムで買い、さらに同じ金額で預言者様に渡したものである。

アブー・バクル様がクスワーを預言者様に譲ったという説もある。

預言者様はマディーナへヒジュラを行う際にはクスワーに乗っていた。また、フダイビーヤのウムラのときも、その上に乗って出かけた。

預言者様は、クスワーに乗ってマッカを征服した。あるとき、預言者様がクスワーを競争させたところ、他のラクダは決してクスワーを抜くことができなかった。しかし、あるベドウィンが二歳のラクダを競争させ、クスワーを追い抜いたこともあったという。

預言者様は最後のハッジのとき、アラファトの説法をクスワーの上から行った。クスワーはアブー・バクルがカリフの時代、バーキ墓地で自由にされ、そこで余生を過ごした。

アブー・ジャフルの戦利品として得たラクダ…バドルの戦いのとき、アブー・ジャフルの有名なラクダを、司令官の権利として、預言者様が得ることとなった。フダイビーヤのウムラまでこのラクダに乗って戦った。

このラクダには、ウムラの際、犠牲となる印がつけられた。不信仰者たちは、百頭のラクダの代わりにそれを買い取ろうとした。

しかし、預言者様は「もし犠牲の印をつけていなかったら、あなた方の願いを聞いていたことでしょう」と答えた。

搾乳用のラクダたち…預言者様は、ズル・ジェディルやジェムマーという牧草地にハンナー、セムラー、ウレイス、サディエ、ベギュン、イェスィーレ、デッバと名付けた七頭の搾乳用のラクダを持っており、預言者様の家族はそれらから、毎晩持って来られた二つの水袋に入れたミルクを飲んでいた。

しかし、預言者様が亡くなった頃には、それらは一頭も残っていなかった。

預言者様の家

マディーナでモスクが作られたとき、預言者様のため、モスクの隣に日干しレンガで二つの部屋が作られ、その上部はナツメヤシの木と枝で覆われた。

アーイシャ様の部屋の扉はモスクに行く道に面していた。セブデ様のために作られた部屋の扉はモスクの三つ目の扉であるアル・イ・ウスマーンの扉に面していた。

預言者様は他にも妻たちを迎えると、後から部屋の数を増やすことにした。その部屋はアーイシャ様の部屋とキブラの間、つまり、モスクの東側に作られていた。部屋のいくつかは日干しレンガで、いくつかは石で出来ていた。

また、いくつかはナツメヤシの枝で骨組みを作り、その上から泥のしっくいで塗り固められ、さらにナツメヤシの枝で天井が作られていた。

ハサン・ビン・アブー・ハサンはこのように語っている。「私が大きくなった頃には、預言者様の家の天井に手が届きました。預言者様の部屋の敷物はヒバあるいはビャクシンの切り株の上に敷かれ、毛で編んだものでした」

イマーム・ブハーリーはこのように伝えている。「預言者様の部屋の扉にノックするものはなく、矢の先で叩いていました」

ムハンマド・ビン・ヒラールとアタ・ウル・ホラサーニーは預言者様の妻たちの部屋を見て、それらがナツメヤシの枝で作られていて、扉の代わりに黒い毛糸で出来た織物のカーテンがかかっていたと知らせている。

ダーウード・ビン・カイスが伝えるところでは、部屋の扉から扉までの幅は六、七ズィーラほどで、幅はおよそ十ズィーラだった。（一ズィーラは四十八センチメートル）

セブデ様は部屋をアーイシャ様に残した。サフィーヤ様の部屋も本人が亡くなるまでは住み続けるという条件で、後見人たちが百八十もしくは二百ディルハムで、ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンに売っている。

カリフ・アブドゥルマリクが預言者様の妻たちの部屋を買い取って、モスクに組み込むという知らせを出し、これがマディーナで読まれたときには、大勢の人々が涙を流した。マディーナの人々は預言者様が亡くなった日のように泣いていた。

サイード・ビン・ムセイエブも「アッラーに誓って、預言者様もそれらの部屋をそのまま残しておくことを心から願っていました。マディーナの住民で後年育つ者や外から来る人が、これらを見ることによって、預言者様が人生をどのようなもので満足していたのかが分かり、そして、人々が財産を持つことや、それを自慢することに競い合うようにはならなかったことでしょう」と言って、その悲しみについて語っている。

預言者様が寄付した財産

イスラーム史上初の寄付は、ウフドの戦いで殉教者となったユダヤ人の学者であり、裕福でもあったムハイルクが行ったもので、彼が預言者様に渡すように遺言をし、これを預言者様が受け取って、さらに寄付した次のものである。それは、

一、ミセブ、二、サフィエ、三、デラル、四、フュスナー、五、ブルカー、六、アワフ、七、メシュレベという名の七つの畑や菜園である。

預言者様がマディーナで行った寄付は、ほとんどがムハイルクの財産であった。イブニ・フメイドはこのように語っている。「カリフ・ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズがムハイルクの寄付したナツメヤシの畑からナツメヤシを持ってくるように求め、それが一枚の皿に持ってこられました。ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズは『アブー・バクル・ビン・ハズムが私にこのように書き記しているのです。『このナツメヤシは預言者様の時代からある木から採れたもので、預言者様もそこから食べていました』これを聞いて私は『信者たちの長よ！それを私たちの間で分け合ってください』と言いました。彼はそれを分配させました。私たち一人ひとりに九個ずつナツメヤシが配られました。

また、ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズは『私はマディーナの知事として、そのナツメヤシの畑に入り、その木から実を食べたときまで、それほどに美味しくて甘いものは見たことがありませんでした』とも言いました」

アムル・ビン・ムハージルはこのように語っている。「預言者様が持っていたものは、ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズのところにあった部屋で保管され、彼は毎日をそれらを見ていました。そして、クライシュ族の人々をこの部屋に連れて行って、それらを示し『ほら、アッラーがあなた方に名誉を授けた人物の遺品はこれらです』と言っていました」

その遺品とは、

一、ナツメヤシの葉で編まれた一つの長いす
二、外側が革で中にナツメヤシの繊維が詰まった一つの枕
三、大きめの一枚の皿
四、一つのコップ
五、一着の服
六、一つの臼
七、一つの矢入れ
八、一つのベルベッドの布団

この布団からは預言者様から出た汗が、ムスクよりも美しい芳香を放っていた。

ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズが病気になったときには、その水で身体を洗うと病が治った。ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズはマディーナの出身のタービウーン（教友の後継世代で、教友から預言者様の言行を間接的に聞いた人々）の学者であり、イマームであり、イスラーム法学者であり、ムジュタヒド（自分の解釈・判断によってイスラーム諸学の見解を示す資格を持つ学者）であり、そしてスンナを熟知していた人物であった。その母はウンム・アースィム・ビンティ・アースィム・ビン・ウマル・ビン・ハッターブであった。彼は正義と禁欲と敬虔さの面に秀でており、人々の規範となっていた。

また、イマーム・シャーフィーは正統カリフは五人であると述べており、それは、一、アブー・バクル、二、ウマル、三、ウスマーン、四、アリー、五、ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズであるとしている。。ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズは、公正の面ではウマル様に、禁欲や敬虔の面ではハサン・アル・バスリに、学識の面ではイマーム・ズフリに匹敵していたというほどだった。

ドゥアーや挨拶はあなたのために、そして教友たちのために
彼らを自分の親友とした、その寛大さの源
ハックよ、人々のことを忘れ、アッラーの愛する預言者から美徳を得るのです
アッラーから美徳を得た、その美徳の源

エルズルムル・イブラヒム・ハック

イスラームという宗教

イスラームとは、アッラーが大天使ジブリールと名付けた天使を通じ、愛すべき預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に送った、人々を現世と来世の平安と喜びに導く方法や規定のことである。あらゆる優れたものや役立つものはイスラームの中に含まれている。かつての宗教のあらゆる善もイスラームの中に含まれる。また、すべての幸福や成功はイスラームにある。そして、道を踏み外しておらず、正気な者であれば認めうる原理や論理から成り立っている。

完全に創造されたものは、イスラームを拒否したり憎んだりすることはない。イスラームには何一つ害はなく、逆にその外には何一つ益はない。イスラーム以外から一つでも益を考えようとすることは、蜃気楼から水を得ようとすることのようである。イスラームでは国を発展させ、人々を一層に向上させて幸運に導くよう命じており、また、アッラーの命令に敬意を示して創造物に同情することを求めている。

また、イスラームでは、農業や交易、技術開発に力を注ぐことを勧め、学問や理学、技術、工業を大切にしている。人々が互いに手助けをし、互いに奉仕し合うことを求めている。自分が保護する人々、つまり子供や家族、あるいは民族を守るにあたっての権利や方法を教え、生きている者だけでなく、既に亡くなった者、さらには後に来る者に対する権利と責任についても教えている。現世と来世の幸せについて、イスラームはその中に集約しているのである。

イスラームは人々の精神的、物質的な幸運を最善の方法で得るための原則を携え、人々の権利と義務を最大限に幅広く網羅している。つまり、イスラームという宗教では信仰や礼拝のみならず、結婚や人々の行動、刑罰などに関する原則も有しているのである。

信仰

　信仰とは、預言者様がアッラーの預言者であること、そして、預言者様がアッラーから選ばれ、預言を伝える預言者であることを認知してそれを信じ、宣言することである。そしてアッラーが預言者様を通じ、短く伝えたものは短いまま、長く伝えたものは長いまま、力の及ぶ限り広範囲に信じ、信仰告白の言葉を口でも表すことである。強い信仰というのは、例えば火があれば燃え、毒蛇に噛まれれば死ぬということを理解してそれらを避けるように、アッラーや、アッラーの特性が偉大なものであると心から完全に知り、アッラーのご満悦や美に向かって走るとともに、アッラーの懲罰や畏怖から身を避け、大理石の上に書かれた文字のように心に強く信仰を刻みつけるものである。

　必ず信じなければならないこととして、六つのことが挙げられている。第一は、アッラーの存在や、アッラーが真の神であること、アッラーがすべての存在を創造したことを信じることである。そして、現世や来世のすべてにおいて、物質や時間を超越し、模倣もなく、無から創造したのは唯一のアッラーであることを完全に認知することである。すべての存在を創造し、それらの主であり所有者であるのはアッラーなのである。そして、アッラーの上に主や所有者はないということを信じることも必要である。あらゆる優れたことや、あらゆる偉大さといった特性はアッラーのみに属するものである。アッラーには欠点や不足といった特性は何一つとしてない。アッラーは何事も望むとおりに行うことができる。その行為はアッラー自身や創造物にとって何らかの利益をもたらすために行っているわけではなく、見返りを求めて行っているのでもない。それとともに、すべての行為にはその理由があり、そこには有益、美徳、恵みというものが存在する。

　アッラーは、創造物に対して善や益を与えることや、一部に善、一部に罰を与えることが義務づけられているわけではない。例えば、反逆者や罪を犯した者全員を天国に入れたとしても、アッラーの偉大さや美徳には適うことであり、服従し礼拝を行っていた者すべてを地獄に落としたとしても、それがアッラーの正義に反することとはならない。しかし、アッラーはムスリムで礼拝を行った者を天国に入れ、彼らに永遠の恵みと善を与えるとともに、異教徒に対しては地獄で永遠の罰を与えることを望まれ、そのことを知らせているのである。アッラーは決して約束を取り消さない。すべての生き物が信仰して服従したとしても、アッラーにとっては何一つ益とはならない。また、全世界が異教徒となり狂暴で乱暴な反逆者となったとしても、アッラーに何一つ害を与えることはできないのである。また、多神崇拝や不信仰以外のあらゆる大罪を犯し、赦しを求めずに死んでいった者でも、もしアッラーが望むのであればその者は赦される。一方で、犯したものが小さな罪であっても、もしアッラーが望めばそれに対して罰が与えられることになる。しかし、異教徒や背信者として死んだ者は絶対に赦されることはなく、彼らには永遠の罰が与えられるということを知らせている。

　ムスリムとしてカアバに向かって礼拝をしていれば、預言者様のスンナの信念にそぐわず、そして赦しを求めずに死んだ者であったとしても、アッラーは地獄で罰を与えても、そこに永遠に残しておくことはない。

　アッラーは現世でも目で見ることが可能であるとされる。しかし、誰も見たことはない。だが来世では、最後の審判の日に皆が集まって来る広場で、異教徒や罪を犯した信者たちにとってはカフル（厳しさ）とジャラール（偉大さ）をもって見え、敬虔な信者たちにとってはルトゥフ（慈悲）とジャマール（美）をもって見えるのである。信者たちは天国でアッラーを美の特性とともに見る。天使たちや女性たちも同様に見る。しかし、異教徒たちがこれに恵まれることはない。ある信頼できる説によれば、ジン（幽精）もこのようなことには恵まれないという。

　アッラーは昼や夜、時間の経過というものを超越した存在である。従って、アッラーはあらゆる面で何の変化も起こり得ないため、以前はこうであった、あるいは将来はこうなるということは言うことができない。アッラーはどういったものにも含まれることはなく、どのようなものとも一体化しない。アッラーに対峙するもの、同一のもの、同類のもの、手伝う者、保護する者といった類のものは一切ない。アッラーには母や父、息子や娘、配偶者もない。アッラーは、常にすべてとともにあり、すべてを取り囲み、すべてに面している。アッラーはそれぞれの動脈よりも近い

存在なのである。しかし、ともにあり、周りを囲み、近くに存在しているということは、私たちが理解しているようなものとは異なっている。その近さというのは、学者という地位や、理学者の知能、あるいは聖者の予知や発見といったものでも、分かりようがないものである。その深い意味は人間の知性では理解することはできない。アッラーは、アッラー自身やその特性において唯一である。それらが変容したり変化したりすることはない。

アッラーの名前は永遠のものである。千一の名前があるということは有名であるが、つまりこれは、その千一の名前でもって人々に知らせているということなのである。ムハンマド（アライヒッサラーム）の宗教では、それらのうちの九十九個が知られている。これらのことを、アスマー・フスナー（アッラーの美称）という。

信仰の第二は、天使たちを信じることである。天使たちは物質から成る。優美であり、気体よりも優雅なものである。また、光に満ちている。生きており、高い知性がある。人間が持つ悪質さは天使たちにはない。あらゆる形に姿を変える。気体が液体や固体となって形が変化するように、天使たちもまた美しい形に変化できるのである。天使たちとは、偉大な人々の身体から離れた魂のことではない。キリスト教徒は天使たちをこのような魂であると誤解している。エネルギーや力のように、物質をともなわないものでもない。昔の哲学者たちの一部がこのように誤解をしていたことがあった。

天使（マラク）には、使者、伝達者、そして力という意味がある。その複数形がマラーイカである。天使たちはあらゆる生き物よりも先に創造されていた。従って、啓典を信じることよりも先に、天使たちを信じることが知らされているのである。同様に、啓典も預言者たちを信じることよりも先にある。クルアーンでは、信じるものの名前が順に書かれているのである。

天使たちに対する信仰は次のようになる必要がある。天使たちはアッラーのしもべであり、同類ではないのである。また、娘たちでもないが、異教徒たちや不信仰者たちは、そのように誤解している。アッラーはすべての天使たちに満足されている。天使たちはアッラーの命令に従い、罪を行うことも命令に背くこともない。男女もなく、結婚する

ことも、子をもうけることもない。天使たちは生きた存在である。アッラーが人間を創造することを伝えた際、天使たちは「地上で悪を行い、血を流す者を置かれるのですか？」と言っているが、このようなゼッレといわれる天使たちの質問に関しても、その純潔性や無垢であることが失われることはない。

最も数の多い創造物は天使であり、その数についてはアッラーのみが知るところである。天空では天使たちが礼拝を行っていないわずかの隙間すらない。天空のあらゆるところが立礼や跪拝を行う天使たちで満ちている。天空や地上、草や星、生物や物質、雨の滴、木の葉、あらゆる分子やあらゆる原子、あらゆる反応、すべての動き、あらゆる場所に天使たちの任務があり、あらゆるところでアッラーの命令を遂行している。アッラーと創造物の間での伝達手段となっている天使もあれば、他の天使たちの長となっている者もいる。また、人間の預言者たちに知らせをもたらす者もあれば、人間の心に善い考えを流し入れる者もいる。これは『イルハーム（霊感）』といわれているものである。いくつかの天使は人間やすべての創造物のことを知らない。アッラーの美しさの前で自失しているのである。それぞれに決められた場所があり、その場所から離れることはない。天国の天使は天国に入り、これらのうちの長の名がルドゥワーンである。また、地獄の天使たちのことをゼワーニといい、彼らは地獄で命じられた任務を行う。地獄の炎が彼らに害を与えることはない。海が魚に害を与えないようなものである。地獄のゼワーニたちの中では十九の長があり、さらにその中の長の名がマーリクである。

また、すべての人間が行ったあらゆる善と悪の行為を書くため、夜に二人、昼に二人の天使がおり、これらを総称してキラーメン・カーティビーンあるいは、ハファザ天使という。このような役目を持つものは、ハファザ天使たち以外にもあると伝えられている。各人の右側にいる天使は左側にいる天使よりも立場が上で、善についてを記している。左側の天使は悪について記している。

このほか、墓では異教徒たちや反逆したムスリムたちに罰を与える天使たちや、質問をする天使たちもいる。質問をする天使たちのことをムンカル、あるいはナキールという。信者に質問する天使にはムベッシルとベシールという

ものもいる。

天使たちの中でも地位の上下がある。最上位にある大天使としては四人がいる。その一人がジブリール様である。二人目はスールというラッパを吹くイスラーフィール様である。ラッパは二度吹かれ、一番目のときにはアッラー以外のすべての生き物が死に絶え、二度目のときにはすべてが甦る。三人目はミカーイル様である。価格の上下や、飢饉や豊作について、そして、あらゆる物質を動かすことがこの天使の任務である。四人目はイズラーイール様である。人間の魂を取るのがこの天使である。この四人の天使に次いで上位にある天使たちは、四つに分けられている。まず、ハメレイアルシュといわれる天使たちが四人いる。審判の日、その数は八人になる。また、アッラーの前にいる天使たちのことをムカッラビーンという。さらに、罰を与える天使たちの中の長はケルビアンといい、慈悲の天使のことをルハーニヤンという。これら全員が天使たちの中の長である。彼らは預言者たち以外のすべての人間よりも上位の立場にある。ムスリムの聖者たちは一般の天使たちより徳が高く、上位にあるが、一般のムスリムたちより、つまり、反抗したり罪を犯したりする者よりも、一般の天使たちの方が徳が高い。

信仰の第三は、アッラーが送った啓典を信じることである。アッラーがこれらの啓典を何人かの預言者には天使たちに詠ませることで、何人かの預言者には書字板に書いたものとして、何人かには天使を介さずに聞かせることで啓示した。この啓典すべてがアッラーの言葉である。永続的で無限であり、創造物ではないのである。啓典は天使や預言者たち自らの言葉でもない。アッラーが啓示したすべての啓典が真実であり、正しいものである。

しかし、クルアーンによって、すべての啓典は改訂され、それまでの判定は無効となった。クルアーンは最後の審判の日まで、その内容に決して間違いや忘却、増減が起こることはない。昔から将来まですべての学問がクルアーンの中に含まれている。従って、あらゆる書物よりも優れており、価値が高い。預言者様の最も大きな奇跡はクルアーンそのものである。すべての人間やジンたちが集まったとしても、クルアーンの最も短い節ほどの一つの言葉すら書くことはできないのである。

私たちに知らされている啓典の数は、一〇四である。その中で有名なものとして、十頁の啓示が預言者アーデムに、五十頁の啓示が預言者シートに、三十頁の啓示が預言者イドリースに、十頁の啓示が預言者イブラーヒームに下っている。さらに、旧約聖書は預言者ムーサーに、ザブールが預言者ダーウードに、新約聖書が預言者イーサーに、そしてクルアーンが預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に啓示された。

信仰の第四はアッラーの預言者を信じることである。預言者たちは人々をアッラーが好む道に導くため、正しい道を示すために送られた。創造の面で、そして、個性、学識、知性の面で、それぞれの時代にいた人々と比べて優れており、称賛すべき人々であった。決して悪い特性や好ましくない性格は持っていなかった。預言者たちには『イスメット』という特性がある。つまり、預言者であることが知らされる前も知らされた後も、大小の罪を一切犯していないのである。預言者であることが知らされた後、預言者であることが広がるまで、またはそれが人々の知るところとなるまで、目の不自由さ、耳の不自由さなど劣等感や欠陥や欠点はなかったのである。すべての預言者たちには以下の七つの特性があることを信じる必要がある。『エマーネット』信用、信頼。『スゥッドーク』正義、約束を守ること。『テブリー』宣教。『アダーレット』公正。『イスメット』大小を問わず罪を行わないこと。『フェターネット』優れた知性と理解力を持つこと。そして『エムン・ウル・アズ』預言者であることが解消されることはないということである。

新しい宗教をもたらした預言者のことを『ラスール』という。一方、新たな宗教をもたらすのではなく、人々を以前の宗教に宣教する預言者は『ナビー』という。命じられたものを宣教するということ、人々をアッラーの宗教に呼びかけるということでは、ラスールとナビーの間に区別や違いはない。預言者たちを信じることとは、預言者たちを区別せず、全員に対して忠実であり、全員が真実を述べていると信じることである。その中の一人でも信じないのであれば、他のすべての預言者たちのことも信じないこととなる。

預言者というのは、その人の働きや、空腹、苦難を経ることで、また、より多く礼拝を行うことによって手に入れ

るものではない。これは、ただアッラーの恵みとアッラーから選ばれることによってのみなるものである。アッラーは、人々の現世や来世での行動が、正しく、まっすぐで、有益なものとなり、そして害悪や罰から救われ、正しい道において安寧なものへと導かれるよう、預言者を通じて宗教を送ったのである。預言者たちには敵が大勢あったが、信じない者たちが侮辱したり悲しませたりするのに接しても、アッラーの命令を人々に知らせ伝えることについて、敵を怖れたり目を背けたりはしなかった。アッラーは預言者たちが誠実さを持ち、真実を語ることを示すため、預言者たちに奇跡を与えている。誰一人としてこの奇跡に反抗することはできなかった。預言者を認め、そして信じる人々のことを、その預言者の共同体という。最後の審判の日、共同体の中で罪が多くある者には仲裁が行われ、赦しを得て、その仲裁が認められることになる。共同体の中の学者や聖者たちも仲裁を行うため、アッラーの許しのもとで、彼らによる仲裁も認められることになる。預言者たちは、墓では私たちが理解できない生きている状態で生活を行っている。神聖な身体を土が腐らせることはしない。従って、あるハディースによると、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）は「預言者たちは墓の中で礼拝を行っています」とおっしゃっているのである。

　また、預言者たちは神聖な眼が寝ていたとしても、心が眠ることはない。預言者は自らの任務を遂行し、そして預言者としての優秀性を持っていることに関しては、すべての預言者たちが同等である。そして、前述の七つの特性は全員が持っているものである。預言者たちが預言者という役割を取り消されることはない。一方で、聖者は聖者であることから離れることはあり得る。預言者たちは人間である。ジンや天使、そして女性たちが、人々の預言者となることはないし、ジンや天使たちが預言者たちの地位まで上がることもない。預言者たちには名誉や優秀性が備わっている。しかし、例えば、共同体の数や任された国土の大きさ、学識や知識の深さ、また伝道が広まっていった範囲の大きさ、奇跡の多さや継続性、自らに対する恩恵の特殊性などに関して、最後の預言者であるムハンマド（アライヒッサラーム）はすべての預言者の中で最上位にある。預言者たちの中でも、特に不屈の意志をもった預言者たちは他の預言者たちよりも上位に位置し、また『ラスール』は『ナビー』より地位が上である。

　預言者たちの数は、明確には知られていない。十二万四千人よりも多いという説が有名である。その中の三十三人もしくは三十五人が『ラスール』であるといわれている。その中でも、六人がさらに上位の預言者であり、彼らのことを『ウルルアズム（不屈の使徒たち・大預言者）』と呼ばれる。不屈の使徒たちとは、アーデム、ヌーフ、イブラーヒーム、ムーサー、イーサー、そしてムハンマド・ムスタファ（アライヒッサラーム）である。

　イブラーヒーム様は『ハリール・アッラー（アッラーの友）』といわれる。なぜなら、心にはアッラーへの愛情以外に、他の創造物に対する愛着を持たなかったからである。預言者ムーサーは『カリーム・アッラー（アッラーと語る者）』といわれる。なぜなら、アッラーと話をしたためである。預言者イーサーは『ルーフ・アッラー（アッラーの魂）』『ケリーメトゥ・アッラー（アッラーの言葉）』といわれる。なぜなら、父がいなかったにもかかわらず、ただアッラーの『あれ』という言葉に従って、その母から生まれたからである。また、アッラーの英知なる言葉を説き、人々の耳に届かせたからである。

　創造物が創造される理由であり、人間の最上位で最大の名誉を持ち、最も価値のあるムハンマド（アライヒッサラーム）は『ハビーブ・アッラー』（アッラーの最愛の者）といわれる。預言者様がハビーブ・アッラーであることや、その偉大さや優秀性を示す印は数多くある。このため、ムハンマド（アライヒッサラーム）を「負けること」あるいは「敗北」といった言葉とともに述べることはない。最後の審判の日には誰よりも先に墓から甦り、その広場へと最初に入る。また、誰よりも先に天国に入る。その美しい徳を数え切ることはできず、語りつくすことも、人間の力では不足しているのである。

　終末の日、すべての預言者たちは預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）の旗のもとに集まり、その影に入る。アッラーはすべての預言者に、創造物の中から選んだ最愛の者であるムハンマド（アライヒッサラーム）が預言者になった時代にいるのであれば、彼を信じ、手伝うことを命じた。そして、すべての預言者たちも、それぞれの共同体にそのように頼み、命じていた。ムハンマド（アライヒッサラーム）は『ハテム・ウル・エムビヤー』である。つまり、その

後に預言者は現れないのである。

信仰すべき第五は、来世を信じることである。来世の始まりは人間が死んだ日以降のことである。そして、終末の日まで続くことになる。終末の日がいつ起きるのかは知らされていない。誰もその時期を知る由もない。しかし、預言者様はその時期の前兆をこのようにおっしゃっている。…マフディー〔訳注…終末の前にこの世に現れ、乱れたムスリム社会の秩序を正し、真のイスラーム共同体を築く救世主のこと〕が現れます。預言者イーサーが空からシャームに降りてきます。ダッジャール〔訳注…終末の前兆としてこの世に現われ、現世の人々に最後の誘惑をしかけて信仰を試すもの〕が現れます。ゴグ、マゴグという蛮族が地上に混乱をもたらします。太陽が西から昇ります。いくつかの大地震が起こります。宗教の知識が忘れられ、正しい道から外れることや、悪事が増えていきます。無宗教で不道徳、不名誉な人々が長となります。アッラーの命じたことを行えなくさせられます。禁じられたことがあらゆるところで行われます。イエメンでは炎が現れます。空や山々が粉々になります。太陽や月が暗くなります。海は互いに混ざり合い、熱で干上がっていきます。

罪を犯したムスリムたちのことを『ファースゥク』という。このような人や異教徒には墓の中で罰が待ち受けている。私たちは次のことを信じる必要がある。遺体は墓に入れられると、私たちが理解できないある形で甦り、そこで安寧に過ごすか、罰を受けることとなる。ムンカルとナキールという名の二人の天使が、私たちが知らない恐ろしい人間の形で墓へと来て質問をすることがハディースによって明らかにされている。墓で開かれることは、ある学者によればいくつかの信念についてのみであるというが、別の学者たちによれば、すべての信念について尋ねられるという。従って、子供たちには「あなたの神は誰ですか?」「あなたの宗教はどの宗教ですか?」「あなたは誰の共同体ですか?」「あなたの啓典は何ですか?」「あなたのキブラはどこですか?」「あなたの信念や行動はどの宗派に属するのですか?」といった質問に対する返事を教えておくべきである。預言者様のスンナに従わない者は、正しい返事を返すことができないということが『テズキレイクルトゥービ』にて書かれている。良い返事をする者の墓は広くなり、天国から一

つの窓が開かれる。朝晩天国で自分の居場所を見て、天使たちから良く接してもらい、また、吉報がもたらされるのである。良い返事を答えられない者は、鉄から出来た槌で叩かれる。そのときの叫び声は、人やジン以外のすべての創造物には聞こえている。墓はあまりにも狭くなり、骨が絡み合うほどに圧迫される。地獄から一つの穴が開き、朝に夜に、地獄での自分の場所を見ながら、墓の中で最後の審判の日まで厳しい罰を受けることとなる。

私たちは死後に甦ることを信じる必要がある。骨や肉は腐って土や気体となった後、再び集められて魂がその身体に戻り、全員が墓から起き上がる。この時を終末の日という。

すべての生き物は、最後の審判の日の場所で集まる。人間のすべての行いが書かれた帳簿が飛んで来て、主のもとへとやって来る。これらのことは、地上や天空、分子や星を創造した、永遠の力を持つアッラーが起こすのである。このようなことが起こるのを、アッラーの預言者様も知らせている。預言者様が語ったことは必ず真実である。当然、すべてが起こることなのである。

聖者や善人の帳簿は右側から、正しい道から外れた人や悪人である人の帳簿はその人の後ろや左側から渡される。善悪、大小、隠されたものも明らかなものもすべてが、その帳簿に書かれている。キラーメン・カーティビーン〔人間の両肩にいるその人の善悪を記録する二人の天使のこと〕が知らないことでさえ、身体のそれぞれの部分が知らせてアッラーの知るところとなり、あらゆることが質問され、審判されるのである。最後の審判の日にはアッラーが望むすべてのことが明らかにされる。そして、天使たちには「地上や天空で何をしていましたか?」と、また預言者たちには「アッラーの命令をしもべにどのようにして知らせたのですか?」と、そして人々には「預言者たちにどのようにして従い、あなた方に知らされた任務をどのようにして行ったのですか?互いの間の権利をどのようにして実行したのですか?」と尋ねる。最後の審判の日には、信仰を持ち、それに従った行動や美徳を備える者には褒賞と恩恵が与えられる。悪い性格や道に外れた行動をしていた者には、重い罰が与えられる。

アッラーの正義により、いくつかの小さな罪についても罰が与えられる。しかし、アッラーが望めば、信者たちの

大小すべての罪を寛大さと寛容により赦すのである。多神教や不信仰以外のすべての罪は、アッラーが望めば赦される一方、アッラーが望めば、たとえ小さな罪でも罰が与えられる。不信仰者や異教徒として死んだものは決して赦されないと知らされている。啓典を持っていてもいなくても、異教徒たち、つまりムハンマド（アライヒッサラーム）がすべての人間の預言者であることを信じない者、あるいは預言者様の知らせていた命令や禁じたものを、一つとして気に入らない者は、そのまま地獄に入れられ、永遠の罰が与えられることになるのである。

終末の日には、それまでの行為について量るため、私たちには理解できない秤が用意されている。地球や空全体がそのうちの一方の皿に収まるほどである。褒賞の側は明るく、空の右側にあって天国に面している。罪の側は空の左側で地獄の暗い側にある。地上での行為や話、考え、見たことが、その場で形になり、善い行いは明るく、悪い行いは黒く醜く見え、秤で量られることとなる。この秤は現世にあるものとは似ていない。重い側が上に上がり、軽い側が下に下がるといわれている。ある学者たちによれば、いろいろな秤があるとされている。また、スィラートという地獄をまたいで掛けられた橋がある。この橋はアッラーの命令により、地獄の上に作られたもので、全員がこの橋を渡るように命じられる。その日、すべての預言者たちが「アッラーよ！お救いください」と懇願する。天国に入る者は、その橋を容易に渡って天国へと向かう。その一部はまるで雷のように、その一部はまるで風のように、その一部は走っている馬のように渡っていく。スィラートの橋は髪の毛よりも細く、刀よりも鋭いものである。地上でイスラームに従うこととというのは、このようなことなのである。自身の欲望との戦いに耐える者は、容易にその橋を渡ることになる。従って、アッラーはイスラームの示す道のことを「スィラート・ムスタキム」と名付けた。この名前の由来は、イスラームの道にいることはスィラートの橋を渡るようなものである、ということを示していることから来ている。地獄に行く者はスィラートの橋から地獄に落ちることとなる。

また、カウサルという預言者様の池がある。その広さは一ヶ月かかる道の距離ほどである。ここの水はミルクより白く、香りはムスクよりも美しい。周りにはグラスが置かれ、その数は星よりも多い。これを一度でも飲む者は、地

獄にいても二度とのどが渇くことはない。

仲裁は真実である。懺悔することなく亡くなった信者たちの大小の罪が赦されるように、預言者たちや聖者たち、天使たち、そしてアッラーが許可を与えた人々が仲裁を行い、そしてそれが受け入れられる。

天国と地獄は今現在も存在する。天国は七段の空の上にある。地獄はすべてのものよりも下にある。八つの天国、七つの地獄がある。天国は地球や太陽、空よりも大きく、地獄は太陽よりも大きい。

信仰する必要のある第六は、天命やあらゆることがアッラーの意志によるものであるということを信じることである。人々に起こるあらゆることや、益や害、儲けや損など、すべてはアッラーの意志に基づくものである。アッラーがあるものの存在にもたらした物事をカダルという。そして、存在にもたらされた物事が起こることをカザーという。カザーとカダルという言葉は、相互に補完して使われることがある。

すべての動植物、非生物、固体、液体、気体、星、分子、原子、電子といったすべての創造物の動き、物理や化学反応、原子反応、エネルギー反応、生物の生理反応といったあらゆることについて、それが行われるか行われないか、しもべたちの善悪の行為、現世や来世での罰は、すべてが永遠にアッラーの意のままにある。これらのすべてをアッラーはご存知なのである。アッラーは、無限の間に起こることについて、その様相、特徴、行動、出来事などをすべて定めた通りに起こす。そして、人間の善悪すべての行い、ムスリムとなることや不信仰であること、望む望まないにかかわらずに行ったこともアッラーが定めていたことである。創造することができるのは、ただアッラーのみである。何かの原因に基づいて起きた出来事を創造したのはアッラーであり、あらゆることを何かの意図により創造しているのである。

例として、火は燃やすものであるが、燃やしたのはアッラーであるということについて考察する。火と燃焼との間は直接的な関係で結ばれてはいない。また、あるものに火がつかない限りそれを燃やすこともないし、火単体では、物体が燃える温度まで温める以外のことはできない。有機物の特長として存在する炭素が、水素や酸素と結合し、電

子反応を起こして燃えるのは、火そのものの行為ではないのである。真実が見えない者は、火が燃やしている、と思い込むことになる。しかし、焼けたり燃えたりする反応を行っているのは火そのものではないし、酸素でもなく、温度でもなく、電子反応でもない。燃やすことができるのはただアッラーのみである。燃焼という作用のためには、アッラーがこれらを、その原因となるように創造したのである。しかし、知識のない者は、火そのものが燃やしていると考える。小学生であれば「火が燃やす」という説明に満足せず「空気が燃やす」と言うであろう。そして中学生ともなればそれも否定し「空気中の酸素が燃やす」と言う。高校生になれば「燃焼のためには酸素のみではなく、電子的要素が加わることで燃える」と言う。さらに大学生ともなれば、これに加えてエネルギーについても考え合わせることになる。このように、知識が増えれば増えるほど真実に近づいていき、原因と考えられるものの背後にも、さらに数多くの原因があることが分かってくる。学問の面でも最も高い地位にあり、真実を完全に見ることのできた預言者たちや、その預言者たちの後を追い、学問の海からもたらされる滴へと到達するイスラーム学者たちは、燃やしたり、創造しているようなものも、無能で無力な単なる手段であって、それらも創造物であること、そして、真の創造にはアッラーが介在し、それに起因していることを知らせている。つまり、燃焼とはアッラーの業である。従って、火がなくとも燃やすことはできるが、通例として火で燃やすのである。アッラーが燃やさないと望めば、火の中でも燃えることはない。事実、預言者イブラーヒームのことを炎が燃やすことはなかった。アッラーが彼を愛していたため、その通例を変更したのである。

　アッラーが望めば、すべてのものを理由なしに創造することが可能であった。火なしに燃やしていただろうし、食べなくても満腹にさせていただろう。しかし、アッラーはしもべに恩恵を与え善を施すため、あらゆることを一つの原因のもとに導いたのである。決められた原因によって創造することを望まれ、アッラーが行っていることは、その原因の後ろに隠されたのである。アッラーの力もこのような原因の後ろに隠されている。アッラーが何かを創造するように求めた者は、その原因に近づき、それを手に入れることになる。ランプをつける者はマッチを使う。オリーブ

オイルを得ようとするものは、圧搾機を使う。頭が痛ければ痛み止めを使う。そして、天国に行って永遠の恩恵に導かれたいのであればイスラームに従うのである。自分に向けて発砲したり、毒を飲んだりする者は死ぬことになる。罪を犯す者や不信仰に堕ちた者は地獄に行く。人が何かの原因に近づいたら、その原因に起因することが発生するのである。ムスリムについての本を読む人はイスラームを学ぶことになる。そうすると、イスラームを好み、その人はムスリムとなる。無宗教の者とともに過ごす者や彼らの言葉を聴く者は、宗教について無知となる。無知の大多数は不信仰である。つまり、人は進みたい方向に向かう乗り物に乗れば、その方向へと進んでいくのである。

　アッラーが物事を原因なしに創造していたとしたら、人が人に頼ることはなかったであろう。皆がすべてをアッラーに頼み、他に頼もうとはしなかっただろう。もしそうであったなら、人々の間で上司や部下、労働者や芸術家、先生や学生、その他多くの関係はなくなり、現世と来世の規定は破壊されていたことだろう。美しいものや醜いもの、善や悪、反抗する者と従う者の区別もなくなっていたことだろう。

　イスラームは、ムスリムたちに対し、預言者様が信じたように、そして知らせたとおりに信仰することを求めている。預言者様は一つの信仰を知らせていた。教友たちは全員、預言者様が知らせたとおりに信じ、彼らの間でその信念が分裂することは決してなかった。預言者様が亡くなると、人々はイスラームを教友たちから聞いて、尋ねながら学んでいった。教友たち全員が同じ信仰を伝えていた。預言者様から彼らに伝えられたこの信仰のことは『アフリ・スンナ（預言者様のスンナに従う人々）の信仰』といわれる。教友たちは、この信仰には自分たちの考えや哲学的な言葉、欲望、政治的考えなどを決して混ぜ込むこともしなかった。

　教友たち全員が、完成された存在としてのアッラーについて、不足のないものとして非人格化して神聖視し、アッラーの知らせたことを躊躇することなく認めて信じ、また、意味が明らかにはなっていないクルアーンの節についても、曲解しようとしないで、宿した信仰を預言者様から聞いたとおりに守っていた。そして、イスラームの信仰の基礎について人々に聞いた者に対しては、純粋で澄みきった本来の形のままに知らせていたのだった。

教友たちは、預言者様から知らされ、伝えられていたことを、ありのまま何も加えることも引くこともなく、認めて信じていた。そのような道に入る人々のことは、アハリ・スンナ・アル・ジャマア（預言者様のスンナと正統な共同体を護持する一団）といわれ、一方で、この真実の正しいイスラームの道から離れた者のことは、ビドゥアトの一団（堕落した一団）という。

教友たち全員がムジュタヒド（訳注…自分自身の解釈、判断によってイスラーム諸学について見解を示す資格をもつ学者）であった。彼らは宗教の知識を預言者様から受けていた。また、預言者様を見たり、預言者様の話を聞いたりしたことで、精神面での高い成熟と優秀性に導かれていた。彼らは疑うことなく、それぞれがすべての行為をアッラーの満足を得るために行い、善なる態度や知識・学識面で、大学者や他の聖者でも持ち得ない地位にまで上がっていたのである。それぞれが正しい道の星であるということがハディースにて伝えられている。全員の信仰や信念は一致していた。また、クルアーンやハディースで述べられていないことについては、イジュティハード（訳注…イスラーム諸学において、学者が知識と思索を動員して特定の結論を得る解釈行為）を行った。それぞれの行為が学派となるのである。しかし、大勢のイジュティハードによって出された結論は互いに似たものとなるのだった。イジュティハードは集約された書物にはされなかったため、それぞれの学派は忘れ去られることとなった。したがって、現在、教友たちの特定の誰かに従うということは不可能となっている。

イスラームを教友たちから学んだその次の世代の『タービウーン』そしてさらに次の世代の『テベイ・タービウーン』も宗教学において高い地位にあり、彼らから、絶対的なムジュタヒドの地位にまで達したイマームたちが育つこととなった。彼らは、行為に関してそれぞれが学派を持つこととなった。それぞれのイジュティハードから作られた結論が学派となっていったのである。この学者たちの多くも書物には集約されなかったため、忘れられることとなった。しかし、四つの大イマームのイジュティハードがその学徒たちによって書物にまとめられて保護され、それらがムスリムたちの間に広まっていった。地上のすべてのムスリムたちに正しい道を示し、そしてイスラームが変容したり崩

壊したりすることから守ったのは、この四人のイマームたちである。その一人目は、イマーム・アーザーン・アブー・ハニーファ、二人目はイマーム・マーリキー・ビン・エネスである。三人目は、イマーム・ムハンマド・ビン・イドリス・シャーフィー、四人目はアハマド・ビン・ハンベルである。

預言者様のスンナの信念に従うこの四人のイマームのうち、イマーム・アーザーンの道のことをハナフィー派、イマーム・マーリキーの道のことをマーリキー派、イマーム・シャーフィーの道のことをシャーフィー派、イマーム・アハマド・ビン・ハンベルの道のことをハンバリー派という。現在、ムスリムはアッラーのご満悦にふさわしい礼拝や行為を行うことについて、この四つの学派のうちの一つに従うことで可能となるのである。

信仰行為

第一に挙げられるのは、条件や義務に適した形で毎日五回、決められた時間に礼拝を行うことである。礼拝は絶対的義務、義務およびスンナについて注意をし、心をアッラーに開いて、時間を過ぎないうちに行うべきである。クルアーンでは礼拝のことを『サラート』と伝えている。サラートとは、辞書によれば、人間が祈念を行うこと、天使たちが（人間の）赦しを求めること、アッラーが同情し、憐みをかけることとなっている。イスラームにおけるサラートは、イスラームの宗教書で書かれているような決まった動作を行い、決まった言葉を詠むことである。礼拝はタクビールで始まる。つまり、男性は手を耳の位置まで上げ、へその下へと下ろす際に「アッラーフ・アクバル」と言うこととともに始まるのである。最後には座って頭を左右の肩の方を向いて終わらせる。

第二は資産や財産のザカート（喜捨）を行うことである。ザカートの意味には、清浄、称賛、善や美となることというものもある。イスラームにおけるザカートの意味は、ニサーブといわれる、資産におけるザカートの対象となる最少限度額以上を持つ人が、クルアーンで特徴が知らされたムスリムたちに対し、恩着せがましくなく資産からの一部

を与えることである。ザカートが与えられるのは八つに大別された人々であり、ザカートの種類については四大学派によって四つが伝えられている。ザカートは、金と銀によるもの、交易物によるもの、一年の半分以上の期間牧草地で食べていた四つ足の家畜によるもの、土から育てられたあらゆる必要なものによるもので支払われる。この四番目のザカートをウシュルという。ウシュルは作物が収穫された時点で支払われる。その他のザカートについては、定められた最少限度額に達した分量を一年以上保有していた場合に支払うこととなる。

　第三はラマダーン月に毎日断食をすることである。断食をすることをサウムという。サウムは辞書によれば、ある物事を保護するという意味である。イスラームにおいては、条件を満たしている場合、ラマダーン月に毎日三つのことから自分を守るようにとされている。その三つのこととは、食べること、飲むこと、男女間の性的関係である。ラマダーン月は、空の新月を確認したところから始まる。暦に従って事前に計算することで始まるわけではない。

　第四は余裕のある人は人生のうちに一度ハッジ（巡礼）を行うことである。旅が安全で、体が健康であり、マッカに行って戻ってくる間、残していく家族を養える以上の資産的余裕が必要である。ハッジを行う者は、イフラーム（巡礼着）を着、カアバを周回してアラファトに行くことが義務づけられている。

　第五はアッラーの宗教を広めるために努力することである。つまり、ジハードを行うことも信仰行為である。

　これ以外に、規定としては以下のものもある。

　ムナーカハート…結婚、離婚、生活費などの面における規定。

　ムアーマラート…売買、賃貸、法人、利子、遺産などの面における規定。

　ウクーバトゥ…刑罰規定であり、五つに分けられる。復讐、窃盗、姦通、偽証、およびイスラームの宗教からの離脱、つまり棄教についての刑罰規定である。

美徳

　イスラームでは美徳を備えること、自身を悪癖や悪行から離して身を清くしておくこと、善い性格を持つこと、あらゆるところで貞淑さや恥を持つことを命じている。これらのことや、その生き方を教える学問のことをタサーブフという。

　体に関する知識は医学が教えるように、心や魂を悪から解放することについては、タサーブフ学が教えるところである。これが、心の病の印である悪行から離し、アッラーのご満悦を得るために、善いことや礼拝を行うように向かわせるのである。

　イスラームでは、学識、行為、イフラースを命じている。つまり、学問を学び、学んだことに適するように仕事や礼拝を行い、そしてこれらすべてをアッラーのご満悦を得るために行うことを命じているのである。人間が精神的に優れるようになることや、現世や来世の幸福に導かれるようになることについて、飛行機が飛ぶことと比較して例示する。信仰や信仰行為は飛行機の機体やエンジンのようなものである。そして、タサーブフの道で進むことは、そのエネルギー物質、つまりガソリンのようなものである。目的地に達するためには、まず飛行機を手に入れる必要がある。つまり、信仰や信仰行為を得る必要がある。そして、それを動かすためには力が、つまりタサーブフの道が必要となるのである。

　タサーブフには二つの目的がある。一つは信仰が心に満たされることである。これは、疑念による揺るぎを防ぐこととなる。知性のみに基づいて証拠や証明だけで固められた信仰というのは、前述したような確固としたものにはならない。アッラーはクルアーンの『雷電章（アッ・ラアド）』の第二八節にて『これらの信仰した者たちは、アッラーを唱念し、心の安らぎを得る。』と知らせている。念唱はあらゆる行為や行動で、アッラーのことを思い出すことであり、アッラーのご満悦に適ったことを行うという意味である。

タサーブフの第二の目的は、フィクフ（イスラーム法学）で知らされた信仰行為を喜びや安寧の気持ちをもって行い、自己から生ずる怠惰や苦悩を解決することである。信仰行為を安らかに喜んで行い、また、罪が含まれていることを憎み、そこから遠ざかることはただタサーブフを学び、この道を歩むことによってのみ可能となる。タサーブフを抱くことというのは、決して他人が知らないことを見たり、目には見えないような情報を得たり、光や魂、価値ある夢を見ることではないのである。タサーブフによって、手に入れたい術や知識を得るためには、まず信仰を正しく持ち、イスラームで命じられたことや禁じられたことを学び、それらに相応しいことや信仰行為を行う必要がある。この三つを行わない限り、心を清く保つことや、自己を清くすることを育むことは可能ではない。

預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に従うこと

預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に従うこととは、彼の歩んでいた道を歩いていくことである。彼の道とは、クルアーンが示した道である。この道のことを『ディーニ・イスラーム（イスラームという宗教）』という。預言者様に従うためには、まず信仰をし、イスラームについてよく学び、義務づけられたことを行い、禁じられたことを避け、スンナを行って、マクルーフ（忌避行為）を避ける必要がある。また、ムバーフ（許容行為）についても預言者様のように行うよう努力しなければならない。

信仰することや預言者様に従うことに始まることは、幸福の扉から中に入ることに他ならない。アッラーは地上すべての人間を幸せに導くため、預言者様を送った。そして『サバア章』の第二八節では『われは、全人類への吉報の伝達者または警告者として、あなたを遣わした。…』と啓示している。

例えば、預言者様に従う者が昼にしばらくの間寝ることは、夜を礼拝で過ごしつつも預言者様に従わない者と比べれば、何倍も価値がある。なぜなら「カイルーレ」を行うこと、つまり、昼の礼拝の前に短時間寝ることは預言者様が行っ

ていた習慣だったからである。また、例えば、預言者様の宗教が命じたとおり、祭礼の日に断食をせずに食べることは、宗教として義務づけられていない何年間分の断食よりも価値が高い。預言者様の宗教で命じられたことに従って貧者に与えられたザカートは、自らの意志で山のような金の施しを与えることよりも優れたものであり、徳の高い行いなのである。

ある朝、ウマル様が朝の礼拝を集団で行った。その後、人々を見て、ある人が見当たらないことを尋ねたところ、教友たちが「彼は、夜、朝方になるまで礼拝をしていました。もしかしたら、今寝てしまっているのかもしれません」と答えた。すると、ウマル様は「すべての夜を寝て過ごし、朝の礼拝を集団で行っていたら、もっと良かったことでしょう」と語っている。

イスラームに従わずに苦悩して努力する者は、たとえ自分自身を削り取っていったとしても、イスラームに適したことを行っているわけではないため、その価値はなく、下位の者となる。もし、このような行動に、金銭が絡んだとしたら、現世ではいくばくかの利益を手に入れることができるかもしれない。しかし、地上におけるすべてのことには価値や重要性はなく、その中のさらにいくばくかの利益に価値などはないのである。このことは例えば、肉体労働を行うことに似ている。彼らは他の人よりも働いて疲労しても、稼ぐ金額は、行った仕事に比べて他の人よりも少ない。一方で、イスラームに従う者は、宝飾品や価値の高いダイヤモンドを扱う宝石商のようなものである。彼らは仕事量が少なくとも、その利益は高い。このように、ときに一時間の働きでも、何千年間分の働きと同等のものを得ることがある。その理由はイスラームに適した行為は、アッラーが受け入れ、そして満足されるからである。つまり、アッラーがそれを気に入るということである。

アッラーは啓典の中の多くの箇所で、このことについて知らせている。例えば『イムラーン家章（アーリ・イムラーン）』の第三一節では『言ってやるがいい。「あなたがたがもしアッラーを敬愛するならば、わたしに従え。そうすればアッラーもあなたがたを愛でられ、あなたがたの罪を赦される。…」』と啓示されている。

また、預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に従うこととは、イスラームの原則を好んで、それを喜んで果たすこと、預言者様の命じたことやイスラームが大切にしている事柄、さらには学者や聖者を名士として尊敬すること、そして預言者様の宗教を広めるために努力することである。一方、イスラームに従わない者や、それを好まない者、そしてそれを気にしない者はぞんざいに扱われることになる。

イスラームに適しないことは、一つたりともアッラーのお気に召すことはない。気に入られないことに対して、善が与えられることはなく、むしろ罰が与えられる要因となる。

現世と来世で幸せに導かれるかどうかは、ただ地上や来世の王である預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に従うことのみにかかっている。そのためには、信仰をし、イスラームの原則を学び、それに相応しい行動を行う必要がある。

来世で地獄から救われるのは、ただ預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に従う者のみである。現世で行われたあらゆる善行や、すべての発見、すべての事柄や学問は、その人が預言者様の道にいるという条件であれば、来世で役に立つこととなる。そうでないのなら、アッラーの預言者様に従わない者の行った善は、単に現世だけのものとなり、来世では廃れたものとなるのである。つまり、善であると思われたものが、ただアッラーの罰に近づくことになってしまいかねない。預言者ムハンマド（アライヒッサラーム）に完全、完璧に従うためには、預言者様を完全、完璧に愛する必要がある。完全となった愛情の印は、預言者様の敵から遠ざかることである。預言者様を好まない者を好まないことである。愛情に偽善はなく、愛する人のためには気が狂うほどとなり、その命令から一瞬たりとも離れなくなる。反対する者とはともにいることができない。二つの反することが一つの心には同時に入らないからである。現世の恩恵は終わるものであり、目を眩ますものである。今日手にあるものが、明日には他人のものとなってしまう。しかし、来世で手に入れるものは永遠であり、そしてそれは現世にいるときのことによって得られるものである。もし短い人生を、現世と来世で最も価値ある人間であるムハンマド（アライヒッサラーム）に従って過ごすことができたなら、永遠の幸せや永遠の救いが期待できる。預言者様に従わない限り、すべては無である。預言者様に従わない限り、行わ

れたあらゆる善行は、この世だけのこととなり、来世では役に立たない。

預言者様に従うという意図で行われたことであれば、ほんの些細な行為であっても、すべての地上の恩恵や来世の幸福よりも何倍も優れたものとなり得る。人間の優れた特徴や名誉は、預言者様に従うことによって得られるのである。ムスリムたちが預言者様に従うにあたって、四つの学派の一つに属することは基本的条件である。預言者様を信じ、携えてきたものに同意し、預言者様を愛し従うこと、そして、預言者様の忠告を受け入れて、預言者様に敬意を示し、尊敬することは義務である。これについてはアッラーが

『…だからアッラーと御言葉を信奉する、文字を知らない使徒を信頼しかれに従え。…』（高壁章（アル・アアラーフ）第一五八節）

『誰でもアッラーとその使徒を信じないならば、われはそのような不信心の徒に対して燃えさかる火を準備した。』（勝利章（アル・ファトフ）第十三節）と啓示している。

預言者様はこのようにおっしゃっている。「アッラー以外に神がないことを信仰し、私や私が携えてきたものを信じるまで、人々（異教徒）と戦うことが私に命じられました。人々がこれらを信じることになったら、イスラームが定めたとおりの罰が与えられる場合を除き、その資産や命が私からは助かることとなります。そして、内に秘めた考えや、隠していたことについての審判はアッラーが執り行うことになるでしょう」

「誰かが私に従ったら、それはアッラーに従うことになります。誰かが私に抗ったら、アッラーに抗うこととなります。私の命令に従う者は私に従うこととなり、私の命令に抗う者は私に抗うこととなります」

「私に従う者や、私が携えてきたものに従う者の状態と、私に抗う者や私が携えてきたものに抗う者の状態は、そのような人の状態に似ています。（そのような人とは）ある家を造り、人々のために完全な晩餐会を開こうと、さまざまな料理を美しく作り、そして、人々を食事に招こうと誰かにその任務を与えているのです。その招待を受ける者は家に入り、作られた料理から好きなだけ食べることができます。しかし、招待に応じない者は家に入ることはないし、

作られた料理も食べることはできません。家とは〔預言者様の宣教に応じる敬虔な者たちのために創られた〕天国なのです。（アッラーやアッラーの恩恵で満たされた天国へと）招いているのはムハンマド（アライヒッサラーム）なのです。誰かがムハンマド（アライヒッサラーム）に抗うのであれば、アッラーに抗うこととなります。ムハンマド（アライヒッサラーム）は自分を認める信者と、自分に反対する異教徒たちを人々の間で分けるのです。

私のスンナや私の後の正統カリフたちのスンナにしがみついておきなさい。それを、力のある限り、厳格につかまえておくのです。クルアーンやスンナ、イジュマー・イ・ウンマ〔訳注…イスラーム学者による合意〕、キヤース・イ・フィクフ〔訳注…類推および類推による判断抽出〕にはない（後から作られた）ものを避けなさい。なぜなら（宗教に）後から入れ込まれたものは、ビドア（逸脱）であるからです。すべてのビドアは道を踏み外すことになります」

エネス・ビン・マーリキーは預言者様に従うことについて、預言者様が「誰かが私のスンナを再生したら（その行動を行ってそれを広めたら）私を再生させることとなります（私の名誉を上げ、私の命令を明らかにすることとなります）。私を再生させる者は、天国で私とともにあるのです」とおっしゃったと伝えている。

また、預言者様は、ビラール・ビン・ハーリスにこのようにおっしゃっている。「ある人がスンナティ・ハサネ（イスラームのスンナに従った上で、時代にあわせて発展させた善なる行為）を行ったら、そのための善と、それを後から行った者の善を得ることができます。ある人がイスラームに対するスンナティ・セイエ（イスラームが禁じたことを、時代にあわせて後から作ること）の道を開いたら、そのための罰やそれを後から行った者の罰が、その人に与えられることとなります」

ウマル・ビン・アブドゥルアズィーズ様はこのように語っている。

「預言者様は美しい道を開きました。預言者様の後にはカリフたちも道を開きました。預言者様のスンナやその後のカリフたちのスンナに基づいて行動することは、アッラーの啓典に適った行動となるのです。アッラーや預言者様に従うことは、アッラーの宗教を強めることになります。イスラームを壊したり、変化させたりする権利は誰にもありません。スンナに反対する人の言葉に基づいて行動することは、許されたことではないのです。

預言者様や教友たちのスンナに従う者は、正しい道に導かれます。彼らに助けを求めれば、助けを得ることとなります。誰かが名誉あるスンナに反対し、その行為を行わなかったら、ムスリムたちの歩んでいる道から外れることになるのです。アッラーはその人に悪い行動をさせ、地獄に堕とします。行き着く先として地獄は何と悪い場所でありましょう」

アフマド・ビン・ハンベル様はこのように語っている。

「ある日、私はある一団の中にいました。彼らは服を脱ぎ、水に入りました。私は『アッラーや来世を信じている者であれば、風呂に（陰部を隠さずに）入らないようにするのです』という預言者様のハディースに従って、脱ぎませんでした。すると、その日、夢の中である人が『アフマドよ！　あなたに吉報をもたらします。なぜなら、あなたが預言者様のスンナに従ったため、アッラーがあなたを赦しました。あなたをイマームとしました。人々はあなたに従うこととなるでしょう』と言いました。『あなたは誰ですか？』と尋ねると『ジブリールです』と返事がありました」

すべての行動に関して預言者様に従わなければ、その人は信者とはなれない。そして、預言者様を自分の命よりも大切に考えなければ、信仰が完全に出来ているとは言えない。預言者様はすべての人間やジンの預言者なのである。

あらゆる世紀において、生きているすべての民族が預言者様に従うことは義務である。すべての信者が預言者様の宗教に手助けをし、預言者様の美徳をもって自らも美徳を持ち、そして、預言者様の神聖な名前を一層多く念唱し、その名を唱えるたびに、聞くたびに、尊敬や愛情とともに挨拶をし、預言者様の神聖な姿を見ようと愛情を持ち、預言者様が携えてきたクルアーンやその宗教を愛し、尊敬を示さなければならない。

ヒリエ・イ・サアーデト（預言者様の神聖な容姿）

教友たちに忠告した後
世界の誇りはこう言った、私の後

私の神聖な美徳を誰かが見たら
その人は私の顔を見ることとなる

それを見たときに愛情が湧いたら
つまりその美しさに心打たれたら

私を見ることを求めたら
心が私の愛情で満ちたなら

彼に地獄は禁じられる
アッラーが天国をもたらす

またアッラーは復活の日彼を裸にはせず
そしてアッラーの慈悲も得る

こうおっしゃった、預言者様の美徳を
誰かの手が喜んで書いたなら

アッラーがその人を恐れから守る
地上が悲惨であっても

地上にあっては身体は病にならず
身体全体が痛みに悶えない

この人が罪を犯していても
身体は地獄から禁じられる

来世では罰から救われ
地上ではすべてが楽になる

アッラーがその人を甦らせる
地上で預言者様を見る人とともに

預言者様を説明するのは難しい
機会があればそれを始めよう

永遠の美を持つアッラーに身を寄せ
力は足りずとも説明をしよう

この言葉で共同体はすべて一致した
世界の誇りは赤くて白かった

神聖な顔は純なる白
そしてバラのようにほのかに赤く

顔の汗は真珠のようで
輝く鉱石のようにまたとなく美しかった

その喜びの源が汗をかくと
光の海が波打つようだった

目にはいつもアイラインを引き
その美しい目に心奪われた

目の白は真っ白く
それはアッラーがクルアーンで褒め称えた

黒い瞳は小さくはなく
遠くも近くも同じに見えた

広く美しく優しい目
御光を放つ神聖な顔

ムスタファ様の見る力
夜も昼のように見えていた

あるところを見ようとすれば
身体全体を向けていた

頭と身体を同じ方に向ける
この習慣を一生続けた

実体のあった預言者様
魂の実体と言ってもふさわしく

美しく、愛しかった預言者様
アッラーに大変愛された預言者様

マーリケ・アブー・ハーレはこう語る
眉は新月のようでその間は開いていた

二つの眉間はいつも
銀のように明るく見えた

神聖な顔はやや丸く
肌は光にあふれて輝いた

黒い眉は彼のミフラーブ
全世界のキブラだった

その中心は高く見え
横から見れば神聖な鼻

高く優美でとても美しい
それを見た人でも説明はできない

歯の間は詰まっておらず
真珠のように輝いていた

前歯が見えれば
その光が周りを照らす

現世と来世の王は笑みをたたえる
命あるものないものすべての預言者

前歯は美しく見えていた
霰のように優美な様子で

イブニ・アッバースはこう語る
アッラーの愛する者は笑うのを恥じた

彼の恥は宗教の証
一生声をたてて笑わなかった

上品で内気だった預言者様
凝視するのも恥じていた

顔は満月に似て
アッラーの鏡だった

いつも輝いていたその美しい顔
その光で見えないほどに

心奪われる美しい預言者様
十万の教友たちが愛した預言者様

一度夢で見た者は言う
世界にこれほどの喜びはないと

美しい頬だった
その肉は薄く

アッラーがそう創った
愛おしみ、顔を白く額は広く

首の光はいつも輝き
髪の間も輝いて

神聖な髭には
たった十七本の白髪

縮れ毛でもなければ長くもなく
すべての身体と同じく髪もちょうど良い

預言者様の喉は
とても白く輝いていた

教友たちの大勢が
腹と胸が同じ高さと言っていた

神聖な胸が開いていたら
豊富に放ったであろう知識の宝

愛の部屋に入れば
他に座るところはない

神聖な胸は広く
彼に秘密の知識が与えられた

白く御光に導く頭
それを見た者は満月の光だと思った

アッラーへの愛の熱情を持っていた
その美しい熱情を人々に植え付けた

老いも若きもそれを知った
世界の誇りの肩甲骨は真っ直ぐだった

背中の中央は盛り上がり
寛大であり幸運をもたらす

肌は銀色であるかのように明るく
預言者の印がやや大きく刻まれていた

背にあった預言者の印
それはやや右寄りにあった

それを説明する人は私たちに知らせる
神聖な印は大きなほくろのようだった

その色は黄色に近い黒であり
鳩の卵ほどの大きさだった

周りには装飾のようなものが刻まれ
その周りの毛はつながっていた

預言者様を語る者は
その骨が太いと言った

すべての骨は太く男らしかった
外面も内面も美しかった

神聖な身体の部位は一つずつ
適切に創造されて力を得た

彼のあらゆる部位はとても美しく
クルアーンの章句のようだった

その王のてのひらも
彼の足の裏も

広く清廉であった
上品で気品があって好ましかった

新鮮なバラのように
優美であって愛されていた

預言者様を見る者は均整が
とれていたと言う
あの奇跡を起こした神聖な手で

誰かに挨拶をするとき
預言者様はいつも笑みをたたえていた

一日、二日過ぎたとしても
さらに長く一ヶ月が過ぎたとしても

その美しい香りから明らかだった
預言者様と会ったことが

ダイヤモンドのような身体に毛はなく
どう褒め称えるのかその身体を

預言者様はアッラーを見るために
身体すべてが優美な目となっていた

上品な肌はすべての美徳を備えていた

アッラーはその知を彼の身体で示した

胸や腹に決して毛はなく
銀の板のようだった

胸の中央から下だけに
間違いなく一列の毛が並んでいた

神聖な身体でこの黒い線が
丸く輝く月の輪のように美しかった

このように一生保っていた
すべての部位が若いときのように

預言者様は年をとっても
身体はつぼみのように若かった

万物の王はそのほかにも
決して腹のたるみなど考えられず

痩せたり太ったりもしなかった
中肉でとても力があった

預言者様を知る人は
その筋肉や脂肪も語る
それらが多くも少なくもなかったと

アッラーがその身体を純に創った
その根幹は誠実だった

美しい肌は中庸で
身体のすべてが光に導く

預言者様の背も中庸で
あらゆるところが彼とともに秩序を持つ

預言者様の身体を見た者は
いつも預言者様を褒め称える

これほどバラのように美しい顔は
見たことはない
背丈、美徳、顔の美しさ

預言者様は中背だったが
背の高い人と一緒に歩けば

その人がいくら高くても
預言者様の方が高く見えた

預言者様は背の高い人より
手のひら分ほど高く見えた

預言者様はどこかに行くとき
速く歩いた

神聖な特徴を表せば
前に傾いていた

つまり坂を下りるように
いつも少し前傾していた

栄光と名誉を持つ預言者様
彼らは誇りに思っていた

アッラーがその人物に望んだら
すべての部位が素晴らしく創造される

誰かが道で歩いたときに
預言者様を突然に見たら

心は畏敬に震える
預言者様の偉大さのため

誰かが預言者様と話して
言葉が発せられると

預言者様がお許しなら
その言葉を伝えていた

アッラーが彼を創造した
美徳による美を似たもののない形で

預言者様よ、あなたを褒め称えるには
力が足りません

私たちはあなたのおかげで創造された

つまるところ、預言者様
あなたに私の命やすべてを捧げます

年表

571 年　ムハンマド（アライヒッサラーム）の誕生（ラビーウ・ル・アウワル月 12 日 ― 西暦 571 年 4 月 20 日）乳母のハリーマに預けられる

574 年　乳母のもとから、マッカにいる母アーミナ様のもとに戻る

575 年　母逝去
祖父のアブドゥルムッタリブのもとへ

577 年　祖父アブドゥルムッタリブ逝去。叔父のアブー・ターリブのもとへ

583 年　叔父アブー・ターリブとともにシリアへ旅し、ブスラにて修道士バヒラが、彼が最後の預言者であることに気付く

588 年　叔父ズバイルとともにイエメンへ旅する

595 年　ハディージャ様の交易キャラバンの責任者としてシャームへ旅する

596 年　ハディージャ様との結婚

606 年　カアバ修復の際、ハジャル・アル・アスワドを元の場所に置く

610 年　ヒラー山にて初めての啓示が下る

613 年　3 年間密かに宣教を行った後、サファーの丘に上がって公にイスラームの宣教を始める

615 年　ムスリムたちがエチオピアへヒジュラを行う

616 年　ハムザ様がムスリムとなる
ウマル様がムスリムとなる

619 年　ハディージャ様、アブー・ターリブ逝去

620 年　ミウラージュ（昇天）
第一のアカバの誓い

621 年　第二のアカバの誓い

622 年　マッカからマディーナへヒジュラを行う

623 年　バドルの戦いにて勝利
キブラをアクサー・モスクからカアバへ変更
モスク前に困窮者を保護する「スッファ」を設置
アーイシャ様との結婚

624 年　娘ルカイヤ様の逝去

ファーティマ様とアリー様の結婚

625 年　ウフドの戦い

ハムザ様の殉教

ハサン様の誕生（ラマダーン月）

フサイン様の誕生（シャアバーン月）

ウマル様の娘のハフサ様との結婚

627 年　塹壕の戦い

628 年　フダイビヤの講和条約

王や統治者に宣教の手紙を送る

ハイバルの征服

629 年　ムーテの戦いにて勝利

630 年　マッカ征服

娘ザイナブ様逝去

息子イブラーヒーム様誕生

息子イブラーヒーム様逝去

タブクの出征

最後の説法にて 10 万人の教友たちに説法を行う

バーキ墓地を訪ねる

6 月 8 日、火曜日、逝去

参考文献

『**Kûr' ân-ı Kerîm**（聖クルアーン）』（発行：日本ムスリム協会）

『**Tefsîr-i Mazharî**』Senâullah-ı Pânipütî

『**Tefsîr-i Kurtubî**』İmâm Kurtubî

『**Tefsîr-i Beydâvî**』Kâdî Beydâvî

『**Tefsir-i Kebîr**』Fahruddîn-i Râzî

『**Tefsîr-i Hâzin**』Hâzin-i Bağdadî

『**Rûhu'l-Beyân**』İsmail Hakı Bursevî

『**Sahîh-i Buhârî**』İmâm-ı Buhârî

『**Sahîh-i Müslim**』İmâm Müslim

『**Sünen Tirmizî**』İmâm-ı Tirmizî

『**Muvattâ**』İmâm Mâlik

『**Müsned**』İmâm Ahmed Bin Hanbel

『**El-Mu'cemu's-sağîr**』İmâm Taberânî

『**El-Musannef**』İmâm Abdürrezzâk

『**El-Musannef**』İmâm İbn-i Ebî Şeybe

『**Es-Sîretü'n-Nebeviyye**』İbn-i Hişâm

『**Sîretü'n-Nebî**』Ahmed bin Zeynî Dahlân

『**Es-Siyeru'l Kebîr**』İmâm Muhammed

『**Şerhu's-Siyeri'l Kebîr**』İmâm Serahsî

『**Şifâ-i Şerîf**』Kâdi İyâd

『**Şemâil-i şerîfe**』İmâm Tirmizî

『**Delâilü'n-Nübüvve**』Ebu Nuaym Isfahânî

『**Şevâhidü'n-Nübüvve**』Mevlânâ Abdurrahmân Câmî

『**Merâîcü'n-Nübüvve Tercümesi**（トルコ語訳書）』Altıparmak Muhammed Efendi

『**Kısas-ı Embiyâ**』Ahmed Cevdet Paşa

『**Mir' ât-ı Kâinât**』Nişancızâde Muhammed Efendi

『**Mevlîd-i Şerîf (Vesîletü'n-necât)**』Süleyman Çelebi

『**İsbâtü'n Nübüvve**』İmâm-ı Rabbânî

『**Mektûbat-ı İmâm-ı Rabbânî**』İmâm-ı Rabbânî

『**Mektûbât-ı Mâ'sûmiyye**』Muhammed Ma'sum Farukî

『**İ'tikâdnâme**』Mevlânâ Hâlid-i Bağdâdî

『**Câliyetü'l-ekdâr**』Mevlânâ Hâlid-i Bağdâdî

『**İhyâû ulûmi'd-dîn**』İmâm-ı Gazâlî

『**Kimyâ-i Seâdet**』İmâm-ı Gazâlî

『**Et-Tabakâtü'l-Kübrâ**』Abdulvehhâb-ı Şa'rânî

『**Târihu'l İslâm**』İmâm Zehebî